

豊 後 府 内 2

中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

2 0 0 5

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊 後 府 内 2

中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

2 0 0 5

大分県教育庁埋蔵文化財センター



第9・13・21次調査区全景



第9次調査区Ⅰ区全景



第9次調査区Ⅳ区全景



第13次調査区全景



第21次調査区全景



第9次Ⅳ区 SP55 出土トンボ玉



第13次 SK011 出土ヴェロニカモチーフのメダイ



メダイ様金属製品 (左: 第21次 SD087 出土 中・右: 第13次包含層出土)



第13次 SE377 出土クンディ

序 文

本書は大分県教育委員会が国道10号古国府拡張事業に伴い国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した中世大友城下町跡の発掘調査報告書です。遺跡の所在する大分市には中世、九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていました。近年の発掘調査により、この大友氏の守護所である大友氏館を中心に、万寿寺をはじめとした寺社や町屋のにぎわいにあふれた府内の町の様子が、次第に明らかになってきました。

本書に収録した第9・13・21次調査区は、戦国時代の府内の町の景観を描いたとされる「府内古図」で見れば、大友氏館の正面の街路に面した町屋群の場所にあたり、中世大友城下町跡のほぼ中央に位置します。

この調査区からは、掘立柱建物の柱穴をはじめ、ゴミ捨て穴と考えられる土坑、街路、鋤溝、堀、井戸など当時の町屋の景観をうかがい知ることができる遺構群や、韓半島から中国・東南アジアにかけて、広くアジア全域からもたらされた数多くの遺物が出土しています。また、豊後におけるキリスト教布教の歴史を考えるうえで重要な遺物として「メダイ」の出土は広く注目されることとなりました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、学術研究資料として広く御活用いただきましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、ここから感謝申し上げます。

平成17年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長 伊 藤 正 行

例 言

1. 本書は、大分市錦町・元町に所在する中世大友府内町跡第9・13・21次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道10号古国府拡幅事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 中世大友府内町跡第9次Ⅰ・Ⅳ区調査は平成12年5月から12月までと平成13年6月から10月にかけて実施し、村上久和・衛藤啓治・原田昭一・徳光篤史・山本哲也（大分県教育庁文化課）が担当した。また、中世大友府内町跡第13次調査は平成13年5月から平成14年3月にかけて実施し、栗田勝弘・松本康弘・山村芳貴（大分県教育庁文化課）が担当した。また、中世大友府内町跡第21次調査は平成14年5月から平成15年3月にかけて実施し、坂本嘉弘・後藤晃一・加藤美成子（大分県教育庁文化課）が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は埋蔵文化財サポートシステム・人間文化都市研究所・文化財リサーチ・国際航業の調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレスなど報告書作成に伴う諸作業については、調査員が担当したほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真などは、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位は、いずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で用いる遺構略号は、以下の通りである。
SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、SP：柱穴、
SA：欄列および欄列状遺構、ST：墓、SH：竪穴住居跡、SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
9. 本書で用いた出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の集付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No. 2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No. 2 1982年）
白磁 森田勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No. 2 1982年）
備前系陶器 桑岡実「中世備前焼壺（壺）の編年案」・「備前焼鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）
桑岡実「近世備前焼鉢の編年案」（『岡山城三之曲輪跡－衣町・丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会 2002年）
中国南部焼締陶器鉢 吉田寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No. 23 2003年）
京都系土師器 塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）
塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）
吉備系土師器 山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡3－第5次調査－（医学部および同付属病院管理棟新設予定地）』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年）
10. 本書の執筆は、第1・6章を坂本嘉弘、第2章を原田昭一、第3章を松本康弘、第4章を後藤晃一、第5章を元興寺文化財研究所が担当した。銭貨に関しては畔津宏幸の執筆による。
11. 本書の編集は、調査員で協議して行った。

目 次

第1章 はじめに（坂本嘉弘）	1
第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の体制	3
第2節 遺跡の立地と環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第3節 報告書作成にあたって	7
1. 府内古園と道路の名称	7
2. 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年	9
第2章 中世大友府内町跡第9次調査区（原田昭一）	13
第1節 調査の概要	13
第2節 遺構と遺物	13
1. I区	23
a. 溝	23
b. 土坑	24
c. 井戸	30
d. その他の遺構	36
e. ビット	38
f. 包含層	39
2. IV区	39
a. 溝	39
b. 土坑	47
c. 井戸	85
d. その他の遺構	87
e. ビット	89
f. 包含層	90
第3節 小結	99
第3章 中世大友府内町跡第13次調査区（松本康弘）	101
第1節 調査の概要	101
第2節 遺構と遺物	107
1. 溝	107
2. 土坑	115
3. 集石遺構・石列	177
4. 井戸・井戸状遺構	203

5. その他の遺構	222
6. 包含層	225
第3節 小結	230
第4章 中世大友府内町跡第21次調査区(後藤見一)	235
第1節 調査の概要	235
第2節 遺構と遺物	239
1. 溝	239
2. 土坑	246
3. 井	309
4. 掘立柱建物跡	330
5. ビット	332
6. 包含層	335
第3節 小結	336
第5章 自然科学的分析(元興寺文化財研究所)	339
大分市元町・錦町中世大友府内町跡出土の金属製品、ガラス玉の分析	339
第6章 総括	347
第1節 遺構について(坂本嘉弘)	347
第2節 メダイおよびメダイ様金属製品について(後藤見一)	348
遺物観察表	356
写真図版	396

図 版 目 次

第1章 はじめに

第1図 中世大友城下町跡と 一般国道10号古国府城幅事業	2	第2図 大分平野の地形と主要道路	4
第3図 中世大友城下町跡と 周辺の戦国時代遺跡	6	第4図 「府内古国」と街路名称の設定	7
第5図 中世大友城下町跡出土の 土師質土器編年図	10		

第2章 中世大友府内町跡第9次調査区の調査

第6図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図 (第1段階 14～16世紀前葉)	13	第7図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図 (第2段階 16世紀前葉)	14
第8図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図 (第3段階 16世紀中葉～後葉)	15	第9図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図 (第4段階 16世紀後葉～末)	16
第10図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図 (第5段階 近世)	17	第11図 第9次調査区トレンチ土層断面図	19・20
第12図 Ⅰ区SD01出土遺物実測図(1/3)	23	第13図 Ⅰ区SD01出土銭貨(1/1)	24

第14图	I 区 SK03出土文物实测图 (1/3)	24	第15图	I 区 SK04实测图 (1/30)	24
第16图	I 区 SK04出土文物实测图 (1/3)	24	第17图	I 区 SK05·06实测图 (1/30)	25
第18图	I 区 SK05出土文物实测图 (1/3)	25	第19图	I 区 SK06出土文物实测图 (1/3)	26
第20图	I 区 SK07实测图 (1/30)	26	第21图	I 区 SK07出土文物实测图 (1/3)	26
第22图	I 区 SK08实测图 (1/30)	27	第23图	I 区 SK08出土文物实测图 (1/3)	27
第24图	I 区 SK09实测图 (1/30)	28	第25图	I 区 SK09出土文物实测图 (1/3)	28
第26图	I 区 SK10实测图 (1/30)	29	第27图	I 区 SK10出土文物实测图 (1/3)	29
第28图	I 区 SK11实测图 (1/30)	29	第29图	I 区 SE12出土文物实测图① (1/3)	31
第30图	I 区 SE12出土文物实测图② (1/3)	32	第31图	I 区 SE12出土文物实测图③ (1/4)	33
第32图	I 区 SE12出土文物实测图④ (1/6)	33	第33图	I 区 SE12出土文物实测图⑤ (1/6)	34
第34图	I 区 SE12出土文物实测图⑥ (1/4)	34	第35图	I 区 SE12出土文物实测图⑦ (1/6)	35
第36图	I 区 SE12出土钱货 (1/1)	35	第37图	I 区 SE13出土文物实测图 (1/3)	35
第38图	I 区 SF14出土文物实测图 (1/3)	36	第39图	I 区 SX15出土文物实测图 (1/3)	36
第40图	I 区 SP16出土文物实测图 (1/3)	37	第41图	I 区 SP17出土文物实测图 (1/3)	37
第42图	I 区 SP18出土文物实测图 (1/3)	37	第43图	I 区 SP19出土文物实测图 (1/3)	37
第44图	I 区 SP20出土文物实测图 (1/3)	37	第45图	I 区包含村出土文物实测图 (1/3)	37
第46图	I 区包含村出土钱货 (1/1)	38	第47图	IV 区 SD01出土文物实测图① (1/3)	40
第48图	IV 区 SD01出土文物实测图② (1/3)	41	第49图	IV 区 SD01出土文物实测图③ (1/3)	42
第50图	IV 区 SD01出土文物实测图④ (1/3)	43	第51图	IV 区 SD01出土钱货 (1/1)	43
第52图	IV 区 SD02-2出土文物实测图 (1/3)	43	第53图	IV 区 SD03出土文物实测图① (1/3)	44
第54图	IV 区 SD03出土文物实测图② (1/4)	44	第55图	IV 区 SD04出土文物实测图 (1/3)	44
第56图	IV 区 SD05出土文物实测图 (1/3)	45	第57图	IV 区 SD06出土文物实测图 (1/3)	45
第58图	IV 区 SD07出土文物实测图 (1/3)	45	第59图	IV 区 SD08出土文物实测图 (1/3)	46
第60图	IV 区 SD11出土文物实测图 (1/3)	46	第61图	IV 区 SK12实测图 (1/30)	47
第62图	IV 区 SK12出土文物实测图 (1/3)	47	第63图	IV 区 SK13实测图 (1/30)	48
第64图	IV 区 SK13出土文物实测图 (1/3)	49	第65图	IV 区 SK14实测图 (1/30)	50
第66图	IV 区 SK14出土文物实测图 (1/3)	50	第67图	IV 区 SK15实测图 (1/30)	50
第68图	IV 区 SK15出土文物实测图 (1/3)	50	第69图	IV 区 SK16实测图 (1/30)	51
第70图	IV 区 SK16出土文物实测图 (1/3)	51	第71图	IV 区 SK17实测图 (1/30)	51
第72图	IV 区 SK17出土文物实测图① (1/3)	51	第73图	IV 区 SK17出土文物实测图② (1/4)	52
第74图	IV 区 SK18实测图 (1/30)	52	第75图	IV 区 SK18出土文物实测图 (1/4)	52
第76图	IV 区 SK19实测图 (1/30)	53	第77图	IV 区 SK19出土文物实测图① (1/3)	54
第78图	IV 区 SK19出土文物实测图② (1/4)	55	第79图	IV 区 SK20实测图 (1/30)	56
第80图	IV 区 SK20出土文物实测图 (1/3)	56	第81图	IV 区 SK21实测图 (1/30)	57
第82图	IV 区 SK21出土文物实测图 (1/3)	57	第83图	IV 区 SK22实测图 (1/30)	57
第84图	IV 区 SK22出土文物实测图 (1/3)	58	第85图	IV 区 SK22出土钱货 (1/1)	59
第86图	IV 区 SK23实测图 (1/30)	59	第87图	IV 区 SK24实测图 (1/30)	59
第88图	IV 区 SK24出土文物实测图① (1/3)	60	第89图	IV 区 SK24出土文物实测图② (1/4)	60
第90图	IV 区 SK25实测图 (1/30)	61	第91图	IV 区 SK25出土文物实测图 (1/3)	61
第92图	IV 区 SK26实测图 (1/30)	61	第93图	IV 区 SK26出土文物实测图① (1/3)	61
第94图	IV 区 SK26出土文物实测图② (1/3)	61	第95图	IV 区 SK27出土文物实测图① (1/3)	62
第96图	IV 区 SK27实测图 (1/30)	63-64	第97图	IV 区 SK27出土文物实测图② (1/3)	65

第98図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図③ (1/3)66	第99図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図④ (1/3)67
第100図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑤ (1/4)68	第101図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑤ (1/6)69
第102図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑦ (1/6)70	第103図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑧ (1/4)71
第104図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑨ (1/3)71	第105図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑩ (1/3)71
第106図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑪ (1/4)72	第107図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑫ (1/4)73
第108図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑬ (1/6)74	第109図	Ⅳ区 SK27出土遺物実測図⑭ (1/3)75
第110図	Ⅳ区 SK27出土銭貨 (1/1)75	第111図	Ⅳ区 SK28実測図 (1/30)75
第112図	Ⅳ区 SK28出土遺物実測図 (1/3)76	第113図	Ⅳ区 SK29実測図 (1/30)76
第114図	Ⅳ区 SK29出土遺物実測図① (1/3)77	第115図	Ⅳ区 SK29出土遺物実測図② (1/3)78
第116図	Ⅳ区 SK30実測図 (1/30)78	第117図	Ⅳ区 SK30出土遺物実測図 (1/3)79
第118図	Ⅳ区 SK31実測図 (1/30)79	第119図	Ⅳ区 SK31出土遺物実測図① (1/3)80
第120図	Ⅳ区 SK31出土遺物実測図② (1/4)81	第121図	Ⅳ区 SK32実測図 (1/30)82
第122図	Ⅳ区 SK32出土遺物実測図 (1/3)82	第123図	Ⅳ区 SK33実測図 (1/30)82
第124図	Ⅳ区 SK33出土遺物実測図 (1/3)82	第125図	Ⅳ区 SK34実測図 (1/30)82
第126図	Ⅳ区 SK35実測図 (1/30)83	第127図	Ⅳ区 SK35出土遺物実測図 (1/3)83
第128図	Ⅳ区 SK36実測図 (1/30)83	第129図	Ⅳ区 SK36出土遺物実測図 (1/3)83
第130図	Ⅳ区 SK37実測図 (1/30)84	第131図	Ⅳ区 SK37出土遺物実測図 (1/3)84
第132図	Ⅳ区 SK38実測図 (1/30)84	第133図	Ⅳ区 SK38出土遺物実測図 (1/3)84
第134図	Ⅳ区 SK39実測図 (1/30)84	第135図	Ⅳ区 SK39出土遺物実測図 (1/3)85
第136図	Ⅳ区 SK40実測図 (1/30)85	第137図	Ⅳ区 SK40出土遺物実測図 (1/3)85
第138図	Ⅳ区 SK41実測図 (1/30)85	第139図	Ⅳ区 SK42実測図 (1/30)86
第140図	Ⅳ区 SK42出土遺物実測図 (1/3)86	第141図	Ⅳ区 SK43出土遺物実測図 (1/3)86
第142図	Ⅳ区 SK44出土遺物実測図 (1/3)86	第143図	Ⅳ区 SE45出土遺物実測図 (1/3)87
第144図	Ⅳ区 SE46出土遺物実測図 (1/3)87	第145図	Ⅳ区 SE46出土ガラス玉 (1/1)87
第146図	Ⅳ区 SX48出土遺物実測図 (1/3)88	第147図	Ⅳ区 SX49出土遺物実測図 (1/3)89
第148図	Ⅳ区 SX50出土遺物実測図 (1/3)89	第149図	Ⅳ区 SX51出土遺物実測図 (1/3)90
第150図	Ⅳ区 SP52出土遺物実測図 (1/3)90	第151図	Ⅳ区 SP53出土遺物実測図 (1/3)90
第152図	Ⅳ区 SP54出土銭貨 (1/1)90	第153図	Ⅳ区 SP55出土遺物実測図 (1/1)90
第154図	Ⅳ区 SP56出土銭貨 (1/1)90	第155図	Ⅳ区 SP57出土遺物実測図 (1/3)91
第156図	Ⅳ区 SP58出土遺物実測図 (1/3)91	第157図	Ⅳ区 SP59出土遺物実測図 (1/3)91
第158図	Ⅳ区 SP60出土遺物実測図 (1/3)91	第159図	99層出土遺物実測図① (1/3)92
第160図	99層出土遺物実測図② (1/3)93	第161図	7層出土遺物実測図① (1/3)94
第162図	7層出土遺物実測図② (1/3)94	第163図	7層出土遺物実測図③ (1/3)95
第164図	7層出土遺物実測図④ (1/3)96	第165図	7層出土遺物実測図⑤ (1/3)96
第166図	7層出土遺物実測図⑥ (1/3)96	第167図	Ⅳ区出土遺物実測図① (1/3)97
第168図	Ⅳ区出土遺物実測図② (1/4)97	第169図	Ⅳ区出土銭貨 (1/1)98
第170図	「府内古図」(A類)における 調査地区の位置99			

第3章 中世大友府内町跡第13次調査区の調査

第171図	第13次調査区遺構配置図 (1/150) 105
第173図	SD013・SD096・SD097・SD098 実測図 (1/80 断面は1/30) 108

第172図	第13次調査区溝状遺構配置図 (1/250) 107
第174図	SD096出土遺物実測図 (1/3) 109

第175図	SD013出土遺物実測図 (1/3)	109
第177図	SD098 出土遺物実測図 (1/3)	111
第179図	SD539・SD540・SD584 実測図 (1/120・1/30)	113
第181図	SD584出土遺物実測図 (1/3)	114
第183図	第13次調査区土坑配置図 (1/250)	115
第185図	SK008出土遺物実測図 (1/3)	116
第187図	SK010出土遺物実測図 (1/3)	117
第189図	SK011実測図 (1/30)	119
第191図	SK011出土メダリ実測図 (1/1)	119
第193図	SK012出土遺物実測図 (1/3)	120
第195図	SK032 出土遺物実測図 (1/3)	121
第197図	SK044実測図 (1/30)	122
第199図	SK048実測図 (1/30)	122
第201図	SK074出土遺物実測図(1/1)	123
第203図	SK089実測図 (1/30)	124
第205図	SK110出土遺物実測図① (1/3)	126
第207図	SK110出土遺物実測図③ (1/3)	128
第209図	SK135実測図 (1/30)	130
第211図	SK137出土遺物実測図 (1/3)	130
第213図	SK145出土遺物実測図 (1/3)	131
第215図	SK169実測図 (1/30)	132
第217図	SK181実測図 (1/30)	133
第219図	SK200実測図 (1/30)	134
第221図	SK201出土遺物実測図 (1/3)	135
第223図	SK208・SK236・SK252 実測図 (1/30)	136
第225図	SK236出土遺物実測図 (1/3)	136
第227図	SK212実測図 (1/30)	137
第229図	SK235出土遺物実測図 (1/3)	138
第231図	SK237出土遺物実測図 (1/3)	139
第233図	SK238出土遺物実測図 (1/3)	140
第235図	SK239実測図 (1/30)	141
第237図	SK247実測図 (1/30)	143
第239図	SK248出土遺物実測図 (1/3)	143
第241図	SK250実測図 (1/30)	144
第243図	SK250・SK251出土遺物実測図 (1/6)	145
第245図	SK255実測図 (1/30)	146
第247図	SK279実測図 (1/30)	147
第249図	SK281実測図 (1/30)	147
第251図	SK282実測図 (1/30)	148

第176図	SD097 出土遺物実測図 (1/3)	110
第178図	SD542実測図 (1/80・1/15)	112
第180図	SD542出土遺物実測図 (1/3)	114
第182図	SD539実測図 (1/30)	114
第184図	SK008実測図 (1/30)	116
第186図	SK010・SK011・SK012・SK015 配置図および土層断面図 (1/80)	117
第188図	SK010実測図 (1/30)	118
第190図	SK011出土遺物実測図 (1/3)	119
第192図	SK012実測図 (1/30)	119
第194図	SK032実測図 (1/30)	121
第196図	SK044出土遺物実測図 (1/3)	122
第198図	SK048出土遺物実測図 (1/3)	122
第200図	SK074実測図 (1/30)	123
第202図	SK089出土遺物実測図 (1/3)	124
第204図	SK110実測図 (1/40)	125
第206図	SK110出土遺物実測図② (1/3)	127
第208図	SK110出土遺物実測図④ (1/3)	129
第210図	SK135出土遺物実測図 (1/3)	130
第212図	SK137実測図 (1/30)	131
第214図	SK145実測図 (1/30)	131
第216図	SK169出土遺物実測図 (1/3)	133
第218図	SK181出土遺物実測図 (1/3)	134
第220図	SK200出土遺物実測図 (1/3)	135
第222図	SK201実測図 (1/30)	135
第224図	SK208出土遺物実測図 (1/3)	136
第226図	SK252出土遺物実測図 (1/3)	137
第228図	SK212出土遺物実測図 (1/3)	137
第230図	SK235実測図 (1/30)	138
第232図	SK237実測図 (1/30)	140
第234図	SK238実測図 (1/30)	141
第236図	SK239出土遺物実測図 (1/3)	142
第238図	SK247出土遺物実測図 (1/3)	143
第240図	SK248実測図 (1/30)	144
第242図	SK251実測図 (1/30)	144
第244図	SK255出土遺物実測図 (1/3)	146
第246図	SK279出土遺物実測図 (1/3)	146
第248図	SK281出土遺物実測図 (1/3)	147
第250図	SK282出土遺物実測図 (1/3)	148
第252図	SK285実測図 (1/30)	148

第253图	SK285出土文物实测图 (1/3)	148	第254图	SK287出土文物实测图 (1/3)	149
第255图	SK287实测图 (1/30)	149	第256图	SK290实测图 (1/30)	149
第257图	SK290 出土文物实测图 (1/3)	149	第258图	SK295 出土文物实测图 (1/3)	150
第259图	SK295文物实测图 (1/15)	150	第260图	SK341 · SK361实测图 (1/30)	150
第261图	SK341 · SK361 出土文物实测图 (1/3)	151	第262图	SK343实测图 (1/30)	151
第263图	SK343 · SK345 出土文物实测图 (1/3)	152	第264图	SK345 · SK346出土文物实测图 (1/30) · 153	
第265图	SK354实测图 (1/30)	153	第266图	SK354出土文物实测图 (1/3)	153
第267图	SK355实测图 (1/30)	154	第268图	SK355出土文物实测图 (1/3)	154
第269图	SK356 · SK357实测图 (1/30)	155	第270图	SK356 · SK357出土文物实测图 (1/3) · 156	
第271图	SK359出土文物实测图 (1/3)	156	第272图	SK359实测图 (1/30)	157
第273图	SK360实测图 (1/30)	157	第274图	SK360出土文物实测图 (1/3)	158
第275图	SK367实测图 (1/30)	158	第276图	SK367出土文物实测图 (1/3)	159
第277图	SK368实测图 (1/30)	159	第278图	SK368出土文物实测图 (1/3)	160
第279图	SK371出土文物实测图① (1/3)	160	第280图	SK371出土文物实测图② (1/3)	161
第281图	SK371实测图 (1/30)	162	第282图	SK379出土文物实测图 (1/3)	162
第283图	SK379实测图 (1/30)	163	第284图	SK380实测图 (1/30)	164
第285图	SK380出土文物实测图 (1/3)	164	第286图	SK381实测图 (1/30)	164
第287图	SK381出土文物实测图 (1/3)	165	第288图	SK383实测图 (1/30)	165
第289图	SK383出土文物实测图 (1/3)	166	第290图	SK385实测图 (1/30)	166
第291图	SK385出土文物实测图 (1/3)	167	第292图	SK386实测图 (1/30)	167
第293图	SK386出土文物实测图 (1/3)	168	第294图	SK439实测图 (1/30)	169
第295图	SK439出土文物实测图① (1/3)	170	第296图	SK439出土文物实测图② (1/3)	171
第297图	SK439出土文物实测图③ (1/3)	172	第298图	SK439出土文物实测图④ (1/3)	173
第299图	SK457出土文物实测图 (1/3)	174	第300图	SK457实测图 (1/30)	174
第301图	SK465实测图 (1/30)	174	第302图	SK465出土文物实测图 (1/3)	174
第303图	SK484实测图 (1/30)	175	第304图	SK484出土文物实测图 (1/3)	175
第305图	SK545实测图 (1/30)	175	第306图	SK545出土文物实测图 (1/3)	175
第307图	SK580出土文物实测图 (1/3)	175	第308图	SK580实测图 (1/20)	175
第309图	SK583实测图 (1/30)	176	第310图	SK583出土文物实测图 (1/3)	176
第311图	SK702实测图 (1/30)	176	第312图	SK702出土文物实测图 (1/3)	176
第313图	第13次调查区集石 · 石碣造像配置图 (1/250)	177	第314图	SX124出土文物实测图 (1/3)	178
第315图	SX124 · SX126实测图 (1/40)	179	第316图	SX126出土文物实测图 (1/3)	180
第317图	SX284实测图 (1/30)	181	第318图	SX284出土文物实测图 (1/3)	182
第319图	SX458 · SX585实测图 (1/30)	183	第320图	SX458出土文物实测图 (1/3)	184
第321图	SX585出土文物实测图 (1/3)	184	第322图	SX551周边图 (1/150)	185
第323图	SX551实测图 (1/80)	186	第324图	SX551放大图① (1/45)	187
第325图	SX551放大图② (1/45)	187	第326图	SX551出土文物实测图① (1/3)	188
第327图	SX551出土文物实测图② (1/3)	189	第328图	SX551出土文物实测图③ (1/3)	190
第329图	SX551出土文物实测图④ (1/3)	191	第330图	SX551出土文物实测图⑤ (1/3)	192

第331図	SX705・SX706・SX707実測図 (1/160)	193
第333図	SX706出土遺物実測図① (1/3)	196
第335図	SX706出土遺物実測図③ (1/3)	198
第337図	SX706出土遺物実測図⑤ (1/3)	200
第339図	SX706出土遺物実測図⑦ (1/3)	202
第341図	SE253実測図 (1/30)	204
第343図	SE266実測図 (1/30)	206
第344図	SE266出土石材実測図 (1/50)	208
第345図	SE266出土遺物実測図② (1/3)	210
第349図	SE266出土遺物実測図④ (1/6)	212
第351図	SE266出土遺物実測図⑥ (1/3)	214
第353図	SE286実測図 (1/30)	216
第355図	SE377出土クンティ実測図 (1/2)	217
第357図	SE377出土遺物実測図 (1/3)	219
第359図	SE384出土遺物実測図 (1/3)	221
第361図	柱穴出土遺物実測図① (1/3)	223
第363図	SB388実測図 (1/40)	224
第365図	包含材出土遺物実測図① (1/3)	226
第367図	包含材出土遺物実測図③ (1/1)	228
第369図	第13・21次調査区遺構分布変遷図(1/300)・231	

第4章 中世大友府内町跡第21次調査区の調査

第370図	第21次調査区遺構分布図 (1/100)	233
第372図	SD087出土遺物実測図① (1/3)	240
第374図	SD087出土遺物実測図③ (1/3)	242
第376図	SD087出土遺物実測図⑤ (1/3)	244
第378図	SK011実測図 (1/30)	246
第380図	SK012実測図 (1/30)	247
第382図	SK013実測図 (1/30)	247
第384図	SK014実測図 (1/30)	249
第386図	SK015実測図 (1/30)	249
第388図	SK016実測図(1/40)・土層図 (1/30)	250
第390図	SK016出土遺物実測図② (1/3)	253
第392図	SK017出土遺物実測図 (1/3)	254
第394図	SK018・SK019・SK033土層図 (1/30)	255
第396図	SK019出土遺物実測図 (1/3)	256
第398図	SK029・SK030実測図 (1/30)	257
第400図	SK031実測図 (1/100)	258
第402図	SK031出土遺物実測図① (1/3)	259

第332図	SX705出土遺物実測図 (1/3)	195
第334図	SX706出土遺物実測図② (1/3)	197
第336図	SX706出土遺物実測図④ (1/3)	199
第338図	SX706出土遺物実測図⑥ (1/3)	201
第340図	第13次調査区井戸配置図 (1/250)	203
第342図	SE253出土遺物実測図 (1/3)	205
第344図	SE266井戸枠実測図 (1/20)	207
第346図	SE266出土遺物実測図① (1/3)	209
第348図	SE266出土遺物実測図③ (1/3)	211
第350図	SE266出土遺物実測図⑤ (1/3)	213
第352図	SE266出土遺物実測図⑦ (1/3)	215
第354図	SE286出土遺物実測図 (1/3)	217
第356図	SE377実測図 (1/30)	218
第358図	SE384実測図 (1/30)	220
第360図	第13次調査区柱穴配置図 (1/250)	222
第362図	柱穴出土遺物実測図② (1/3)	224
第364図	SB389実測図 (1/40)	224
第366図	包含材出土遺物実測図② (1/1)	227
第368図	第9・13・21次調査区の位置図(1/2000) ..	229
第371図	SD087実測図(1/100)・土層図(1/40)	238
第373図	SD087出土遺物実測図② (1/3)	241
第375図	SD087出土遺物実測図④ (1/3)	243
第377図	SD087出土遺物実測図⑥ (1/3)	245
第379図	SK011出土遺物実測図 (1/3)	246
第381図	SK012出土遺物実測図 (1/3)	247
第383図	SK013出土遺物実測図 (1/3)	248
第385図	SK014出土遺物実測図 (1/3)	249
第387図	SK015出土遺物実測図 (1/3)	249
第389図	SK016出土遺物実測図① (1/3)	252
第391図	SK017実測図 (1/30)	254
第393図	SK018・SK019・SK033実測図 (1/30)	255
第395図	SK018出土遺物実測図 (1/3)	256
第397図	SK033出土遺物実測図 (1/3)	256
第399図	SK029・SK030出土遺物実測図 (1/3) ...	257
第401図	SK031 主要遺物分布図 (1/100)	258
第403図	SK031出土遺物実測図② (1/3)	260

第404图	SK031出土文物实测图③ (1/1)	261	第405图	SK032实测图 (1/30)	263
第406图	SK032出土文物实测图 (1/3)	263	第407图	SK034实测图 (1/30)	263
第408图	SK034出土文物实测图 (1/3)	264	第409图	SK083实测图 (1/30)	264
第410图	SK083出土文物实测图 (1/3)	264	第411图	SK094-SK142实测图 (1/30)	265
第412图	SK094出土文物实测图 (1/3)	265	第413图	SK142出土文物实测图 (1/3)	265
第414图	SK098实测图 (1/40)	266	第415图	SK098出土文物实测图① (1/3)	269
第416图	SK098出土文物实测图② (1/3)	270	第417图	SK098出土文物实测图③ (1/3)	271
第418图	SK098出土文物实测图④ (1/3)	272	第419图	SK098出土文物实测图⑤ (1/3)	273
第420图	SK098出土文物实测图⑥ (1/3)	274	第421图	SK098出土文物实测图⑦ (1/3)	275
第422图	SK098出土文物实测图⑧ (1/3)	276	第423图	SK098出土文物实测图⑨ (1/3)	277
第424图	SK098出土文物实测图⑩ (1/3)	278	第425图	SK098出土文物实测图⑪ (1/3)	279
第426图	SK098出土文物实测图⑫ (1/3)	280	第427图	SK098出土文物实测图⑬ (1/3)	281
第428图	SK098出土文物实测图⑭ (1/3)	282	第429图	SK098出土文物实测图⑮ (1/3)	283
第430图	SK099实测图 (1/30)	284	第431图	SK099出土文物实测图 (1/3)	284
第432图	SK107-SK109实测图 (1/40)	285	第433图	SK107出土文物实测图① (1/3)	286
第434图	SK107出土文物实测图② (1/3)	287	第435图	SK109出土文物实测图 (1/3)	288
第436图	SK112实测图 (1/30)	289	第437图	SK112出土文物实测图 (1/3)	289
第438图	SK113实测图 (1/30)	290	第439图	SK113出土文物实测图 (1/3)	290
第440图	SK114实测图 (1/30)	291	第441图	SK114出土文物实测图 (1/3)	292
第442图	SK116实测图 (1/30)	292	第443图	SK116出土文物实测图 (1/3)	293
第444图	SK118实测图 (1/40)	294	第445图	SK118出土文物实测图① (1/3)	295
第446图	SK118出土文物实测图② (1/3)	296	第447图	SK119实测图 (1/30)	297
第448图	SK119出土文物实测图 (1/3)	297	第449图	SK120实测图 (1/30)	297
第450图	SK120出土文物实测图 (1/3)	298	第451图	SK121实测图 (1/30)	299
第452图	SK121出土文物实测图 (1/3)	299	第453图	SK136实测图 (1/30)	300
第454图	SK136出土文物实测图 (1/3)	300	第455图	SK155-SK158实测图 (1/30)	300
第456图	SK155出土文物实测图 (1/3)	301	第457图	SK157实测图 (1/30)	302
第458图	SK157出土文物实测图 (1/3)	302	第459图	SK161实测图 (1/30)	302
第460图	SK161出土文物实测图 (1/3)	303	第461图	SK165实测图 (1/30)	303
第462图	SK165出土文物实测图 (1/3)	303	第463图	SK166实测图 (1/30)	304
第464图	SK166出土文物实测图 (1/3)	304	第465图	SK167-SK168-SP169 实测图 (1/30)	305
第466图	SK167出土文物实测图 (1/3)	305	第467图	SK168出土文物实测图 (1/3)	306
第468图	SP169出土文物实测图 (1/3)	306	第469图	SK170实测图 (1/30)	306
第470图	SK170出土文物实测图① (1/3)	306	第471图	SK170出土文物实测图② (1/3)	307
第472图	SK175实测图 (1/30)	307	第473图	SK175出土文物实测图 (1/3)	307
第474图	SE084实测图 (1/40)	308	第475图	SE084土样断面图 (1/40)	308
第476图	SE084井筒实测图 (1/30)	309	第477图	SE084出土文物实测图① (1/3)	311
第478图	SE084出土文物实测图② (1/3)	312	第479图	SE084出土文物实测图③ (1/3)	313
第480图	SE100实测图 (1/40)	314	第481图	SE100土样断面图 (1/40)	314
第482图	SE100井户样实测图 (1/30)	315	第483图	SE100出土文物实测图① (1/3)	317
第484图	SE100出土文物实测图 (1/3) ②	318	第485图	SE100出土文物实测图③ (1/3) ③	319

第486図	SE100出土遺物実測図④ (1/3)	320	第487図	SE100出土遺物実測図⑤ (1/3)	321
第488図	SE108実測図 (1/40)	322	第489図	SE108土材断面図 (1/40)	322
第490図	SE108井筒実測図 (1/30)	323	第491図	参考資料	
				草ノ千軒町遺跡 SE4120	324
第492図	SE108堀土内出土遺物実測図 (1/3)	324	第493図	SE108井筒内出土遺物実測図 (1/3)	325
第494図	SE115・SE117実測図 (1/40)	326	第495図	SE115・SE117土材断面図 (1/40)	326
第496図	SE115井筒実測図 (1/30)	327	第497図	SE115・SE117出土遺物実測図 (1/3)	328
第498図	掘立柱建物・柱穴・ビット分布図 (1/150)	329	第499図	SB201実測図 (1/50)	330
第500図	SB201出土遺物実測図 (1/3)	330	第501図	SB202実測図 (1/50)	331
第502図	SB202出土遺物実測図 (1/3)	331	第503図	SB203実測図 (1/50)	331
第504図	SB204実測図 (1/50)	331	第505図	ビット出土遺物実測図① (1/3)	332
第506図	ビット出土遺物実測図② (1/3)	333	第507図	ビット出土遺物実測図③ (1/3)	334
第508図	包含層出土遺物実測図 (1/3)	335	第509図	時期ごとの遺構分布変遷図	337
第510図	第21次調査区・第13次調査区 出土遺物実測図 (1/1)	354	第511図	博多遺跡群出土ヴェロニカ メダイ鋳型 (1/3)	354

表 目 次

第2章 中世大友府内町跡第9次調査区の調査

第1表	第9次調査区Ⅰ区遺構一覧表	17
-----	---------------------	----

第3章 中世大友府内町跡第13次調査区の調査

第3表	第13次調査区遺構一覧表①	102
第5表	第13次調査区遺構一覧表③	104

第4章 中世大友府内町跡第21次調査区の調査

第6表	第21次調査区遺構一覧表①	236
-----	---------------------	-----

第2表	第9次調査区Ⅳ区遺構一覧表	18
-----	---------------------	----

第4表	第13次調査区遺構一覧表②	103
-----	---------------------	-----

第7表	第21次調査区遺構一覧表②	237
-----	---------------------	-----

遺物観察表目次

第2章 中世大友府内町跡第9次調査区の調査

遺物観察表1

第9次調査区Ⅰ区遺物観察表① (土器・陶磁器類)	356
-----------------------------------	-----

遺物観察表3

第9次調査区Ⅰ区遺物観察表 (金属・石製品)	
第9次調査区Ⅰ区遺物観察表 (瓦)	
第9次調査区Ⅰ区遺物観察表 (銭貨)	358

遺物観察表5

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表② (土器・陶磁器類)	360
-----------------------------------	-----

遺物観察表2

第9次調査区Ⅰ区遺物観察表② (土器・陶磁器類)	357
-----------------------------------	-----

遺物観察表4

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表① (土器・陶磁器類)	359
-----------------------------------	-----

遺物観察表6

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表③ (土器・陶磁器類)	361
-----------------------------------	-----

遺物観察表 7

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表④

(土器・陶磁器類) 362

遺物観察表 9

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑥

(土器・陶磁器類) 364

遺物観察表 11

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑧

(土器・陶磁器類) 366

遺物観察表 13

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表

(金属製品・石製品) 368

第3章 中世大友府内町跡第13次調査区の調査

遺物観察表 15

第13次調査区遺物観察表①

(土器・陶磁器類) 370

遺物観察表 17

第13次調査区遺物観察表③

(土器・陶磁器類) 372

遺物観察表 19

第13次調査区遺物観察表⑤

(土器・陶磁器類) 374

遺物観察表 21

第13次調査区遺物観察表⑦

(土器・陶磁器類) 376

遺物観察表 23

第13次調査区遺物観察表⑨

(土器・陶磁器類) 378

遺物観察表 25

第13次調査区遺物観察表(銭貨) 380

第4章 中世大友府内町跡第21次調査区の調査

遺物観察表 26

第21次調査区遺物観察表①

(土器・陶磁器類) 381

遺物観察表 28

第21次調査区遺物観察表③

(土器・陶磁器類) 383

遺物観察表 30

第21次調査区遺物観察表⑤

(土器・陶磁器類) 385

遺物観察表 8

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑤

(土器・陶磁器類) 363

遺物観察表 10

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑦

(土器・陶磁器類) 365

遺物観察表 12

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑨

(土器・陶磁器類) 367

遺物観察表 14

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表(瓦)

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表(銭貨) 369

遺物観察表 16

第13次調査区遺物観察表②

(土器・陶磁器類) 371

遺物観察表 18

第13次調査区遺物観察表④

(土器・陶磁器類) 373

遺物観察表 20

第13次調査区遺物観察表⑥

(土器・陶磁器類) 375

遺物観察表 22

第13次調査区遺物観察表⑧

(土器・陶磁器類) 377

遺物観察表 24

第13次調査区遺物観察表

(金属製品・土製品・石製品) 379

遺物観察表 27

第21次調査区遺物観察表②

(土器・陶磁器類) 382

遺物観察表 29

第21次調査区遺物観察表④

(土器・陶磁器類) 384

遺物観察表 31

第21次調査区遺物観察表⑥

(土器・陶磁器類) 386

遺物観察表32	
第21次調査区遺物観察表⑦	
(土器・陶磁器類)	387
遺物観察表34	
第21次調査区遺物観察表⑨	
(土器・陶磁器類)	389
遺物観察表36	
第21次調査区遺物観察表⑪	
(土器・陶磁器類)	391
遺物観察表38	
第21次調査区遺物観察表(銭貨)	393

遺物観察表33	
第21次調査区遺物観察表⑧	
(土器・陶磁器類)	388
遺物観察表35	
第21次調査区遺物観察表⑩	
(土器・陶磁器類)	390
遺物観察表37	
第21次調査区遺物観察表(金属製品・土製品・石製品)	
第21次調査区遺物観察表(瓦類)	392

写真図版目次

第2章 中世大友府内町跡第9次調査区の調査

写真図版1	I区全景(北から)、I区全景(北から) I区SD01・SK08・SE12、I区SD01 I区SK04、I区SK05 I区SK06、I区SK07	396
写真図版3	IV区SD01、IV区SD01 IV区SK12・13ほか、IV区SK13 IV区SK16、IV区SK17 IV区SK18、IV区SK19	398
写真図版5	IV区SK33、IV区SK34 IV区SK35、IV区SK36 IV区SK37、IV区SK38 IV区SK39、IV区SK41	400
写真図版7	I区SK05出土遺物 I区SK06出土遺物 I区SK07出土遺物 I区SK08出土遺物 I区SK09出土遺物 I区SE12出土遺物	402
写真図版9	I区包含層出土遺物 IV区SD01出土遺物	404
写真図版11	IV区SK13出土遺物 IV区SK14出土遺物 IV区SK15出土遺物 IV区SK16出土遺物 IV区SK17出土遺物	

写真図版2	I区SK08、I区SK09 I区SK10、I区SF14・SK11 I区AE12、I区SE13 IV区全景(北から)、IV区全景(北から) ..	397
写真図版4	IV区SK20、IV区SK22 IV区SK26、IV区SK27 IV区SK28、IV区SK29 IV区SK30、IV区SK31	399
写真図版6	IV区SK42、IV区SE45・46 IV区SF47 I区SD01出土遺物 I区SK03出土遺物 I区SK04出土遺物	401
写真図版8	I区SE12出土遺物 I区SE13出土遺物 I区SF14出土遺物 I区SP16出土遺物	403
写真図版10	IV区SD01出土遺物 IV区SD03出土遺物 IV区SK12出土遺物	405
写真図版12	IV区SK22出土遺物 IV区SK24出土遺物 IV区SK27出土遺物	407

	Ⅳ区 SK19出土遺物	
	Ⅳ区 SK20出土遺物	
	Ⅳ区 SK21出土遺物	406
写真図版13	Ⅳ区 SK27出土遺物	408
写真図版15	Ⅳ区 SK28出土遺物	
	Ⅳ区 SK29出土遺物	
	Ⅳ区 SK30出土遺物	
	Ⅳ区 SK31出土遺物	410
	Ⅳ区 SK27出土遺物	409
写真図版16	Ⅳ区 SK38出土遺物	
	Ⅳ区 SK39出土遺物	
	Ⅳ区 SK40出土遺物	
	Ⅳ区 SK42出土遺物	
	Ⅳ区 SK45出土遺物	
	Ⅳ区 SK46出土遺物	
	Ⅳ区 SK48出土遺物	
	Ⅳ区 SK49出土遺物	
	Ⅳ区 SK58出土遺物	
	Ⅳ区 SK59出土遺物	
	Ⅳ区99層出土遺物	411
写真図版17	Ⅳ区99層出土遺物	
	Ⅳ区7層出土遺物	
	Ⅳ区出土遺物	412

第3章 中世大友府内町跡13次調査区の調査

写真図版18	SK008	写真図版19	SK281・SK285
	SK011ヴェロニカメダイ出土状況		SK295・SK343
	SK110・SK145		SK381・SK439
	SK208・SK236・SK252		SK558・SK284
	SK248・SK249		414
	SK250・SK251		
写真図版20	SE226・SE226	写真図版21	SK126・SK284
	SE377・SE377クンディ出土状況		SX458・SX585・SX551
	SE286・SE286		SX551（東から）・SX707
	SE384・SE384		SX551・SX707
	415		416
写真図版22	SD013出土遺物・SD097出土遺物	写真図版23	SK169出土遺物・SK247出土遺物
	SD098出土遺物・SD542出土遺物		SK261出土遺物・SK343出土遺物
	SK012出土遺物・SK032出土遺物		SK367出土遺物・SK371出土遺物
	SK110出土遺物		SK380出土遺物・SK439出土遺物
	417		418
写真図版24	SK457出土遺物・SK465出土遺物	写真図版25	SX707出土遺物・SE266出土遺物
	SK580出土遺物・SK583出土遺物		420
	SX124出土遺物・SX458出土遺物		
	SX551出土遺物・SX706出土遺物		
	419		
写真図版26	SE266出土遺物・SE377出土遺物		
	柱穴群出土遺物		
	包含層出土遺物		
	421		

第4章 中世大友府内町跡第21次調査区の調査

写真図版27	SD087遺物出土状況（南から） SD087メダイ出土状況（南から） SD087遺物出土状況（東から） SD087遺物出土状況（北から） SK011遺物出土状況（東から） SK013遺物出土状況（東から） SK014遺物出土状況（東から） SK015遺物出土状況（南から） …… 422	写真図版28	SK016遺物出土状況（東から） SK016土層断面（南から） SK017遺物出土状況（東から） SK018・SK019遺物出土状況（西から） SK019・SK033完掘状況（東から） SK029・SK030遺物出土状況（東から） SK031遺物出土状況（西から） SK032遺物出土状況（北から） …… 423
写真図版29	SK034遺物出土状況（東から） SK083遺物出土状況 SK098遺物出土状況（第1段階） SK098遺物出土状況（第2段階-1） SK098遺物出土状況（第2段階-2） SK099遺物出土状況 SK107土師器出土状況 SK107土師器出土状況 …… 424	写真図版30	SK112遺物出土状況 SK113遺物出土状況 SK114遺物出土状況（西から） SK118遺物出土状況 SK120遺物出土状況 SK120遺物出土状況（白磁） SK121遺物出土状況 SK155土鈴出土状況 …… 425
写真図版31	SE084井筒掘跡 SE084井筒断面 SE100井戸枠・井筒検出状況 SE100井戸枠・井筒検出状況 SE100上層遺物出土状況 SE100完掘状況 SE108井筒断面 SE108井筒検出状況 …… 426	写真図版32	SE108井筒検出状況 SE108井筒検出状況 SE115井筒断面 SE115井筒検出状況 SB201（東から） SB202（東から） SB203（東から） SB204（東から） …… 427
写真図版33	SD087出土遺物 …… 428	写真図版34	SD087出土遺物 …… 429
写真図版35	SD087出土遺物・SK013出土遺物 SK016出土遺物 …… 430	写真図版36	SK018出土遺物 SK031出土遺物 …… 431
写真図版37	SK031出土遺物・SK034出土遺物 SK083出土遺物・SK098出土遺物 …… 432	写真図版38	SK098出土遺物 …… 433
写真図版39	SK098出土遺物 …… 434	写真図版40	SK098出土遺物・SK107出土遺物 SK109出土遺物・SD087出土遺物 …… 435
写真図版41	SK116出土遺物・SK118出土遺物 …… 436	写真図版42	SK118出土遺物・SK120出土遺物 SK155出土遺物・SK168出土遺物 SK170出土遺物・SK175出土遺物 …… 437
写真図版43	SE084出土遺物・SE100出土遺物 …… 438	写真図版44	SK108堀土内出土遺物 SK108井筒内出土遺物 SE115・SE117出土遺物 …… 439
写真図版45	SB201・202出土遺物 ビット出土遺物 …… 440	写真図版46	包含層出土遺物 …… 441

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1 調査に至る経過

別府湾沿岸は、古代から、瀬戸内海航路の九州の東側玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が目著しくなると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世域下町の外縁の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

しかし、昭和40年代以降の自動車交通量の増加に伴い、大分駅周辺の交通状況も変化を起し、周辺の鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年に「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の跨線橋である万寿橋を解消する必要が生じた。国土交通省ではこれに併せ、道路幅を拡幅し、顕徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道環境の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古国府拡幅事業」を計画した。

一方、大分川左岸沿いには、自らキリシタンとなり、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、道路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された「大分市史」の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された「大分市史・中巻」では新たに「府内古図」が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照合し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知道路となった。

「一般国道10号古国府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中枢部である大友館の東側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う、中世大友城下町跡の発掘調査を、平成12年5月から開始した。しかし、この遺跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。また、前年度から「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う調査も開始されており、同じ遺跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遺跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友氏館部分は「大友氏館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。

こうして、「一般国道10号古国府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡9次調査」が、開始された。そして、平成13年度から「府内町跡11次調査」・「府内町跡12次調査」・「府内町跡13次調査」・「府内町跡18次調査」が加わり、平成14年度には「府内町跡20次調査」・「府内町跡21次調査」・「府内町跡22次調査」を実施し、平成16年度現在もこの事業に伴う発掘調査を継続している。

本報告書は、このうちの、遺構の連続性を考慮し、調査がほぼ完了した御所小路町〜万寿寺跡間にあたる、「府内町跡9次調査」・「府内町跡13次調査」・「府内町跡21次調査」の報告書である。



第1図 中世大友城下町跡と一般国道10号古国府拡幅事業

3 調査の体制

「一般国道10号古国府拡幅事業」の発掘調査は平成11年8月から開始されたが、この事業区域の西側に隣接して「大友氏館跡」が想定されており、この遺跡に対して平成11年度から国指定史跡にするための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、土木事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとなり、平成12年度は、「大分駅付近連続立体交差事業」の一部として開催した。平成13年度以降は本格的に開始された、国土交通省の一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査の事業で開催し、指導を受けた。

本書に報告する平成12・13・14年度に発掘調査した府内町跡9・13・21次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授）
	後藤宗俊（別府大学文学部教授）
	小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
	坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）

平成12年度

文化課長	山本芳直
参事兼課長補佐	伊藤正行
参事兼課長補佐	清水宗昭
主幹兼埋蔵文化財第2係長	栗田勝弘
主 幹	村上久和
主 査	衛藤啓治
主 査	原田昭一（府内町跡9次調査担当 本書掲載）
嘱 託	徳光篤史

平成13年度

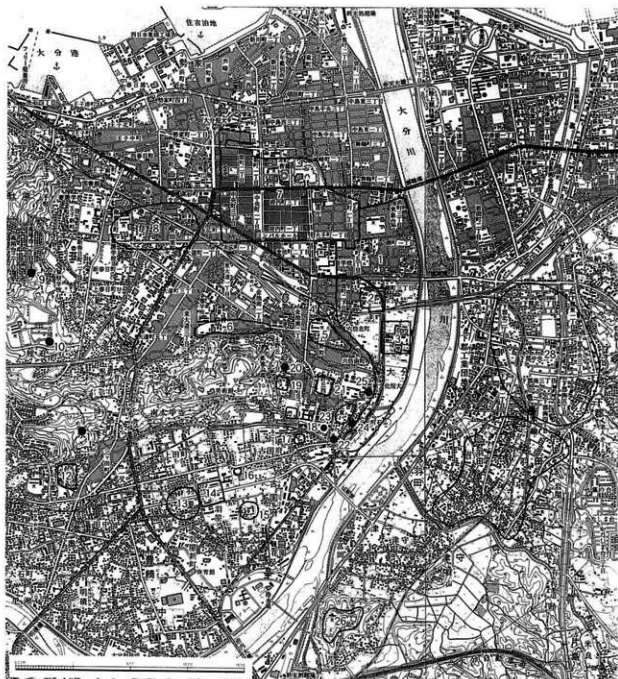
文化課長	工藤正徳
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
大型県事業担当主幹	栗田勝弘
主 査	山本恭弘（府内町跡11次調査担当）
主 査	原田昭一（府内町跡9次調査担当 本書掲載・18次調査担当）
主 査	松本康弘（府内町跡13次調査担当 本書掲載）
主 事	恒賀健太郎（府内町跡12次調査担当）
嘱 託	幡上敬一
嘱 託	橋丈太郎
嘱 託	山村芳貴
嘱 託	山本哲也

平成14年度

文化課長	岩尾康晴
参事兼課長補佐	麻生祐治
参事兼課長補佐	清水宗昭
大型県事業担当主幹	坂本嘉弘（府内町跡20次調査担当）

第1節 調査の経緯

副主幹	友岡信彦（府内町18次調査担当）
主査	山本恭弘（府内町跡20次B調査担当）
主査	植島隆二（府内町跡22次調査担当）
主査	後藤晃一（府内町跡20次C・府内町跡22次調査担当 本書掲載）
主任	恒賀健太郎（府内町跡20次A調査担当）



1. 中世大友城下町跡 2. 大友氏館跡 3. 万寿寺跡 4. 上野町・顯徳寺遺跡 5. 若宮八幡宮遺跡 6. 東大道遺跡
7. 府内城・城下町 8. 東田室遺跡 9. 亀甲山古墳 10. 古宮古墳 11. 千人塚古墳 12. 永興遺跡 13. 羽屋園遺跡
14. 金剛宝戒寺跡 15. 石名遺跡 16. 町口遺跡 17. 岩屋寺遺跡 18. 円寿寺 19. 金剛宝戒寺 20. 上野廃寺
21. 大友上原館跡 22. 岩屋寺石仏 23. 龍王畑遺跡 24. 元町石仏 25. 大巨塚古墳 26. 守岡遺跡
27. 羽田遺跡 28. 下郡遺跡群

第2図 大分平野の地形と主要遺跡

嘱託	加藤美成子
嘱託	阿比留史郎
嘱託	井上崇裕
嘱託	畔津宏幸

第2節 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、中世以降、今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山（628m）へと続く標高100mから80mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした、地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。「府内古園」に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、原地形が残されている部分からの観察から、低湿地の広がりが確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を走り、北の別府湾方向に伸び、「府内古園」に描かれる舟入に続いている。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀以降の遺構が検出される。おそらくこの間に自然堤防は形成されたものであろう。

2 歴史的環境

別府湾に近い大分川左岸地域化が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱（672年）で大海人皇子（天武天皇）側について活躍した大分君・分君恵尺（えさか）・稚臣（わかみ）の墓と想定されている。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「鮮」段階の遺構と想定されている。

その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された竜王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地塀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年（1053）、康平2年（1059）、承保4年（1077）に「勝津留島四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その

古宮古墳
壬申の乱
大分君
羽屋井戸遺跡
羽屋園遺跡

竜王畑遺跡
岩屋寺石仏
元町石仏

中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高（隆）国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留畠」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二万市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、「府内古園」に描かれた「府内」の起源的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年（1242）の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示す。

新御成敗状

しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留畠」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に下向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

石明遺跡

大友頼泰

万寿寺

14世紀代になると、徳治元年（1306）に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

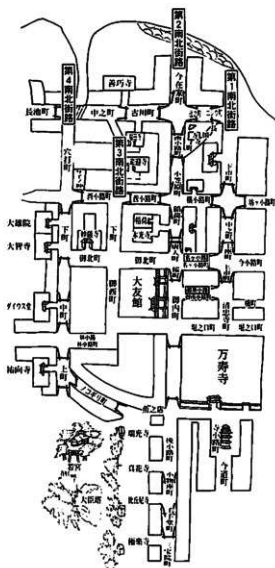


1. 中世大友城下町跡 2. 高峰城 3. 金谷泊城 4. 賀来氏館 5. 尼々城遺跡 6. 雄城城 7. 石明遺跡
8. 町田遺跡 9. 岩屋寺遺跡 10. 上原館跡 11. 東大道遺跡 12. 守岡城跡 13. 津守遺跡 14. 片島遺跡
15. 下郡遺跡 16. 千歳城跡 17. 猪野新土井遺跡 18. 猪野中原遺跡 19. 横尾遺跡 20. 沖ノ浜（推定）

第3図 中世大友城下町跡と周辺の戦国時代遺跡

第3節 報告書作成にあたって

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古図」と、現在の地図との整合性を求める作業が一部で行われた⁽¹⁾が、永く文献史学ではその信憑性が疑われてきた⁽²⁾。しかし、1970年代の中頃か



第4図 「府内古図」と街路名称の設定
(「府内古図」A類をトレース)

註 (1) 大分市史編纂審議会「大分市史」上巻 1956年
(2) 外山幹夫「人物叢書 大友宗麟」吉川弘文館 1975年

ら、他の文書からの検討がおこなわれ⁽³⁾、その信頼性が増してきた⁽⁴⁾。そして、大分市史が1980年代後半に編集されたおり、それまで知られていた「府内古園」の元園と思われる絵図が確認された。そこで、明治時代の地籍図との照合をはかり、現在もその地に存在する大智寺・稲荷などを基点とし、「府内古園」を大分川左岸の現在の地図に写す作業を行った。その結果、ほぼ正確にその位置を把握することが出来た。発掘調査は、この地図を頼りに町屋の名称や道路の位置等を推測しながら実施している。

しかし、現在3種類12枚が確認されている「府内古園」は、その研究⁽⁵⁾によると成立年代は、寛永13年（1636）を過ぎず、A類・B類・C類に分類され、その順で新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされた。報告書作成にあたり、こうした「府内古園」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じた。すなわち、「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」もB・C類にはあるが、A類には見られない。

さらに、府内の町中を走る幾筋もの街路の名称である。「府内古園」には4本の南北の街路と5本の東西の街路が描かれている。南北の街路についてはこれまで、大分川側から一之大路・二之大路・三之大路・四之大路⁽⁶⁾や、市町筋・大路筋・寺町筋⁽⁷⁾、南北路1・南北路2・南北路3・南北路4⁽⁸⁾などと仮称されてきた。本報告書では、全てが町を貫く大路ではないことや、文書との混乱などを考え、大分川側から機械的に第1南北街路・第2南北街路・第3南北街路・第4南北街路とした。街路としたのは、ルイス・フロイスの日本史の訳文⁽⁹⁾が「街路」とされており、都市内の道路の意味でこの名称を使用した。また東西の道路名については、御所小路町・名ヶ小路町があり、それぞれ、「御所小路」「名ヶ小路」とした。「御蔵場」については、将来検討することを含め、そのまま使用する。

-
- 註 (3) 渡辺澄夫「古代中世の大分」(『大分県地方史』第73号 大分県地方史研究会 1974年)
 (4) 橋本操六「旧府内城下図の信憑性」(『大分県地方史』第94号 大分県地方史研究会 1979年)
 (5) 木村幾多郎「府内古園の成立」(『大分市歴史資料館年報1992年度版』大分市歴史資料館 1993年)
 (6) 鹿毛敏夫「文献・絵図からみた大友館と府内の町・都市と国際性」(『南筑都市・豊後府内・都市と交易』中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001年)
 (7) 木村幾多郎「府内と府内古園」(『南筑都市・豊後府内・都市と交易』中世大友再発見フォーラム 大分市教育委員会・中世都市研究会 2001年)
 (8) 大分市教育委員会「大友府内 6 - 中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書 -」(2003年)
 (9) 松田毅一・川崎桃太「フロイス・日本史」(1977年～1980年)

2 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年

古文書によると、大分川の左岸地域は11世紀に「市河」として登場し、以後、「府中」「府内」と呼ばれながら、17世紀初頭に近世府内城下町に移転するまで、人々の活動が継続して存続する。

発掘調査を実施するにあたり、大分市教員委員会と大分県教員委員会の複数の職員が担当するため、お互い年代的な共通認識を持つ必要が生じた。そこで、継続的に存続したと考えられる中世大友城下町跡の出土遺物の大半を占める土師質土器の編年の確立を、この遺跡のみで目指すことにした。

臼杵石仏 豊後地域の11世紀から17世紀初頭の土師質土器の編年は、臼杵石仏群の調査や⁽¹⁾玖珠町伐株山城跡の報告書で試みられ⁽²⁾、上野淳也⁽³⁾と塩地潤一⁽⁴⁾は16世紀代の土師質土器の編年案を提示している。

八坂久保田遺跡 また、坪根伸也・塩地潤一は大分県内で蓄積した8世紀から16世紀までの発掘資料の編年を試みている。⁽⁵⁾さらに、最近では後藤一重が、別府湾を挟んで中世大友城下町跡の北側にある八坂久保田遺跡・

八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土師質土器を編年している。⁽⁶⁾

八坂中遺跡 以上のような研究成果を参考にまとめたのが第5図の編年表である。現時点で、遺構出土のままとりのある最古の資料は1～18の、府内町跡第35次調査S—017出土資料である。溝状遺構に廃棄された状態で出土したもので、土師質土器の皿1～6は、口径が8.3cm、器高1.3cm、底径6.5cmであるが、7・8は器高が11.9cmと高い。また、埴9・10は、口径が12.7cm、器高3.8cm、底径は6.6cmの底径が小さいタイプであるが、11～16は、口径が12.1cm、器高3.3cm、底径は8.6cmで、底径が大きい。11～16の底部から口縁部にかけての器壁の厚さはほぼ一定であるか、やや口縁部にかけて厚くなる。これらの遺物に、口径11.1cm、器高3.4cm、高台の底径4.4cmの17・18の吉備系土師器が伴う。この吉備系土師器は岡山県鹿田遺跡での研究によると⁽⁷⁾14世紀前半に位置づけられているが、この土師器の器形変化の特徴は、口径と底部高台の縮小化である。中世大友城下町跡で次に編年される府内町跡第30次調査S—115からさらに、新しい傾向の吉備系土師器が出土していることから、14世紀初頭に位置づける。

その、府内町跡第30次調査S—115は、小土坑に一括廃棄された土器群である。19～38は代表的な資料であるが、組成は口径が8.1cm、器高1.4cm、底径6.4cmの皿、口径12.3cm、器高4.0cm、底径は6.3cmの底径が小さいタイプ、口径12.6cm、器高3.2cm、底径は9.0cmの底径が大きいタイプがある。この底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、口縁部が肥厚する傾向が強い。この土器群には38の口径10.2cm、器高2.9cm、底径4.0cmの吉備系土師器が伴う。この土器は、17・18よりさらに口径が小さく、高台も断面三角形で矮小化している。こうしたことから、この時期を14世紀前半に位置付ける。

39～61の資料は府内町跡第30次調査S—109出土の資料である。この遺構は大型の土坑で、中位と間層を挟んで下位から一括廃棄された状態で土器が出土した。図示したのは中位出土の代表的な資料である。組成は皿が口径8.1cm、器高1.2cm、底径6.6cmの39～46のタイプが主体をしめ、口径が小さ

註 (1) 臼杵市教育委員会『臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』(1982年)

(2) 玖珠町教育委員会『伐株山城跡』(1984年)

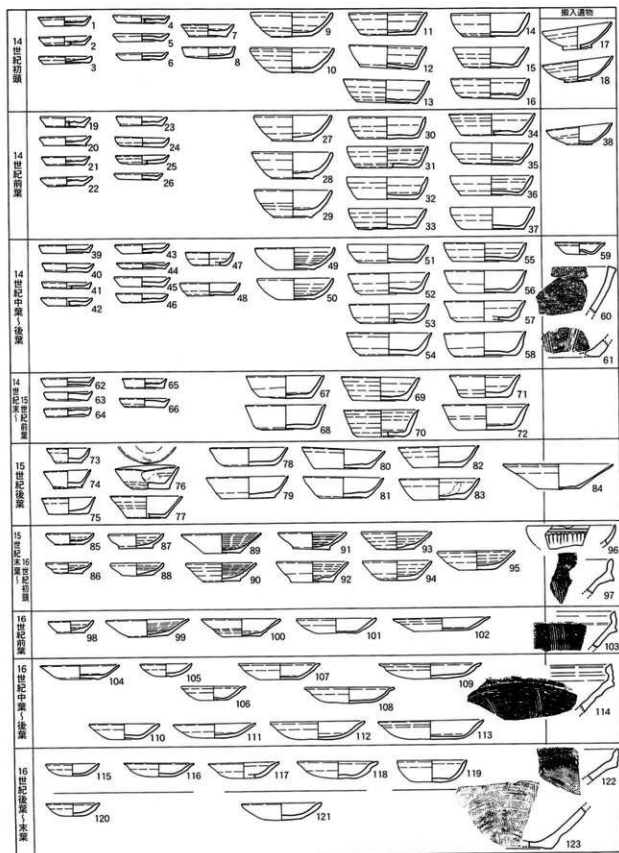
(3) 上野淳也『千人塚遺跡出土の土師質土器について』(『千人塚遺跡』緒方町教育委員会 1999年)

(4) 塩地潤一『九州出土の京都系土師器Ⅱ』『中近世土器の基礎研究 XⅣ』(日本中世土器研究会 1999年)

(5) 坪根伸也・塩地潤一『豊後国の土器編年』(『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2000年)

(6) 後藤一重『八坂久保田遺跡・八坂本庄遺跡・八坂中遺跡の出土土器について』(『八坂の遺跡Ⅲ』考察・付論篇 大分県文化財調査報告書第150輯 大分県教育委員会 2003年)

(7) 山本悦世『吉備南部地域における古代末～中世の土師器の展開』(『中近世土器の基礎研究 Ⅷ』日本中世土器研究会 1992年)



第5図 中世大友城下町跡出土の土師質土器編年図

く器高が高い47、口径が大きい48なども見られる。坏は、口径12.1cm、器高3.3cm、底径は5.6cmの底径が小さいタイプと口径12.6cm、器高3.3cm、底径は9.1cmの底径が大きいタイプがある。底径の小さいタイプは、やや小振りになり、内面に凹線状の整形痕が残る。また、底径が大きいタイプの底部から口縁部にかけての器壁は、底部に近い部分が肥厚し、口縁部にかけて外反し、口縁端部が尖る傾向が強い。この土器群には59の口径7.3cm、器高1.5cmの京都系土師器と60・61の備前焼揃鉢が伴う。

京都系土師器 京都系土師器は、小森俊寛・村上憲章による⁹⁾13世紀末から14世紀中頃に定型化し15世紀末まで見られる白色系薄手のヘソ皿である。また、備前焼揃鉢は、桑岡実の編年案¹⁰⁾では14世紀後半にあたる。これらの資料から、この土器群を14世紀後葉と考える。

62～72は府内町跡第20次A調査S—1505出土の資料である。出土量は多くないが、組成は皿が口径7.7cm、器高1.4cm、底径6.3cmで、底部が凹み。前時期と比較すると小振りになる。坏は、口径12.3cm、器高3.8cm、底径は7.9cmで、前時期より、器高が高く、底径が小さくなる。口縁部は回転を利用し引き出すように、器高を高くして外反させ、端部は尖る。時期を決定できる明確な資料はないが、前後の關係から14世紀末葉から15世紀前葉と考える。

73～84の資料は大友氏館跡1次調査S—008出土資料である。遺物は庭園遺構に切られる長方形状の土坑から廃棄された状態で出土している¹¹⁾。73～75の小型の坏の口径は6.9cm・7.5cm・8.6cm、器高は2.4cm～2.7cm、底径は4.0cm・4.7cm・6.3cmである。また、76・77の中型の坏は口径10.2cm・11.4cm、器高は3.3cm・3.5cm、底径は6.2cmである。そして、坏の口径は12.8cm、器高3.2cm、底径8.0cmが平均である。こうした在地土器は、前時期までの皿と坏の基本的な組成が見られず、小型・中型の坏が一定量みられ、法量分化の傾向が見られる。しかし、色調は橙褐色系・淡褐白色と前時期と同じである。こうした在地土器に、口径17.6cm、器高5.5cm、底径は6.6cmの84の色調が白色の薄手の坏が伴う。この土器は、周防の大内氏館跡の編年¹²⁾によると15世紀後葉に位置付けられている。しかし、中世大友城下町跡では、この後、在地土器の色調が赤褐色化し、それに薄手の白色系土器が伴う時期がある。このため、この時期を、15世紀後葉と考える。

85～97は府内町跡5次B調査区出土の資料である。85・87・91はS—245、86・93はS—134、90・94はS K—230、95・97はS K—234でいずれも土坑に廃棄された状態で出土した。また、88・89・92・96は大規模な区画溝であるS—251の下層からの出土である。図示した土器の口径は85・86が7.6cm・7.2cm、87・88が8.8cm・8.5cm、91・93・94が10.8cm、90が11.4cm、95が12.0cm、89が12.9cmで境界は不明であるが法量分化が明確である。こうした在地土器は、前時期84の薄手の白色系土器の影響を受けて成立したと考えられ、内面に回転を利用した強い螺旋状の指ナデや工具による螺旋状の沈線が見られる。色調も赤褐色で、73～83までの資料とは異なる。またこの土器は、より古式のものは、製作時の粘土塊からの切り離しの際の痕跡か、底部の外端が直立し、口縁端部にかけて内湾する。口唇部断面は「コ」の字状になる。内面の強い螺旋状のナデは内底部までおよび、えぐれている。これが新しくなるにつれ、底部からの立ち上がり94・95のように丸みを帯び、口縁部は外反し、口唇部断面は丸みを帯びる。また、内底部の中央は横ナデで平坦に仕上げている。これらの土器には、15世紀

註 9) 小森俊寛・村上憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」(『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年)

10) 桑岡 実「備前焼揃鉢の編年について」(『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会 2000年)

11) 高島 豊「X X II 大友館跡第1次調査」(『大分市埋蔵文化財年報 vol.10 1998年度』大分市教育委員会 1999年)

12) 古賀裕幸「大内氏館跡Ⅱ・大内氏関連町並遺跡Ⅰ」(『大内氏遺跡発掘調査報告書Ⅱ』山口市埋蔵文化財調査報告第35集 山口市教育委員会 1991年)

代の青磁⁹³や備前焼酎鉢が伴い、次の時期に京都系土師器が見られることから、15世紀末葉から16世紀初頭と考える。

98～103は府内町跡5次調査区出土である。98・99・102は5次A調査区のS D-7の上層で近接して出土した一括性の強い土器である。100・101は5次B調査のS-121、103はS-206出土の土器である。在地系土器は、99に見られるように、底部からの立ち上がり丸みを帯び、口縁部は明らかに外反し、口唇部断面は尖るように丸み帯びる。内面は螺旋状の工具による沈線文があり、内底部は平坦に仕上京都系土師器⁹⁴けている。この土器群には非ロクロ系土師器である101・102の京都系土師器が伴う。在地系土師器が赤色系であるのに対し、京都系土師器は白色系である。器形は、側面観が扁平な「逆台形」をし、口縁断面は紡錘形で端部は丸い。器壁は薄く、特に底部は薄い。この土器は、塩地幅年の1期にあたる⁹⁵と考える。この新しい土師器作りの影響か、京都系土師器の胎土でロクロ成形したものや、100のよう⁹⁶に外面下位に段が付くものが見られる。

「式三献」 京都系土師器の導入時期は、周防国大内氏との関連や、京都からの直接的な導入などが考えられているが、ここでは塩地幅年⁹⁷・小野貴史⁹⁸が論じた「式三献」に代表される室町幕府からの儀礼の導入時期である天文6年(1537)とし、16世紀前葉と考える。

104～114は府内町跡5次B調査区出土の資料である。104～109はS-105、それに切られたS-106から出土した110～113、114はS-222出土である。S-105からは多くの京都系土師器が出土しており、その口径は約8.2cm・10.5cm前後、12～13cm、14.3cm前後、16cmの5法量に明確に分かれる。口縁部は外面を強い指ナデで仕上げ、凹線状に窪むため、急に外反する形態になる。これらは塩地幅年の2期に相当する。この資料より新しい遺構から出土した110～113は若干大型化し、器高も高くなる。114は16世紀代の備前焼酎鉢である。この資料は、前後の関係から、16世紀中葉から後葉と考える。

115～123の資料の内、116・119は太友氏館跡1次調査の庭園の池Ⅲ期からの出土で、それ以外は府内町跡4次調査出土である。前時期に比べると、器壁が厚くなり、口径に比べ器高が高くなる。これらは塩地幅年の3期にあたる⁹⁹と考える。また、119のように輪形に近い形態の非ロクロ系土師器がみられる。その出現時期は、遡る可能性もあるが、この時期から明確に伴う。これらと一緒に出土する備前焼酎鉢は、斜め摺り目で16世紀後葉から末葉に幅年¹⁰⁰されている。また、府内町4次調査区は「府内古園」の上市町の一角にあたり、報告書¹⁰¹によると2枚の火災にかかわる層と処理土坑があり、ひとつは天正15年(1587)の島津氏侵攻、もうひとつを慶長元年(1596)の慶長大地震に起因すると考えている。こうしたことから、これらの時期を16世紀後葉から末葉と考える。

註 (13) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」(『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年)

(14) 塩地幅年「九州出土の京都系土師器Ⅱ」(『中近世土器の基礎研究 XⅣ』日本中世土器研究会 1999年)

(15) 小野貴史「太友氏における「式三献」について」(『大分・太友土器研究会論集』大分・太友土器研究会 2001年)

(16) 大分市教育委員会「太友府内 4-中世太友府内町跡第4次発掘調査報告書」(2002年)

第5図の遺物出土遺構(遺構名は旧遺構名を使用)

1～18(府内町跡35次S-017) 19～38(府内町跡30次S-115) 39～61(府内町跡30次S-106) 62～72(府内町跡20次A S-1505)
73～84(太友氏館跡1次S-008) 85～87・91(府内町跡5次B S-245) 88・93(府内町跡5次B S-134) 89・89・92(府内町跡5次B S-251)
90・94(府内町跡5次B S-230) 95・97(府内町跡5次B S-234) 98・99・102(府内町跡5次A S D上層) 100・101(府内町跡5次B S-121)
103(府内町跡5次B S-206) 104・114(府内町跡5次B S-222) 105～109(府内町跡5次B S-105) 110～113(府内町跡5次B S-106)
115・117・118(府内町跡4次S-160) 116・119(太友氏館1次池Ⅲ期) 120～123(府内町跡4次S-64)

第2章 中世大友府内町跡第9次調査区

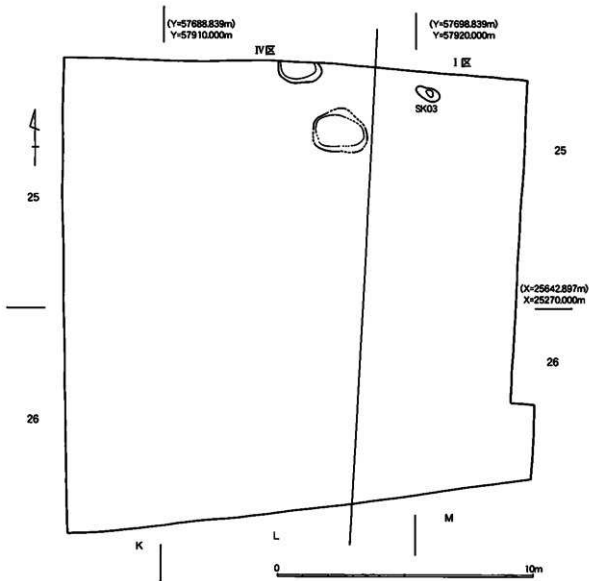
第1節 調査の概要

第9次調査区は大大分市錦町3丁目に所在するが、国道10号建設予定地と、JR日豊本線が交差する地点のJR日豊本線北側にあたる。調査区は大友氏館跡の東側に位置し、Ⅰ～Ⅳ区の4調査区に分けて発掘調査を実施した。今回の報告は第9次調査区の南東に位置するⅠ調査区の成果であるが、このⅠ・Ⅳ区とⅡ・Ⅲ区との間には「府内古園」にみられる「御所小路」を踏襲したと考えられる里道が存在しており、大友館跡中央付近で大友館の東に延びる「御所小路」に面する遺構群の実態が発掘調査によって明らかとなった。

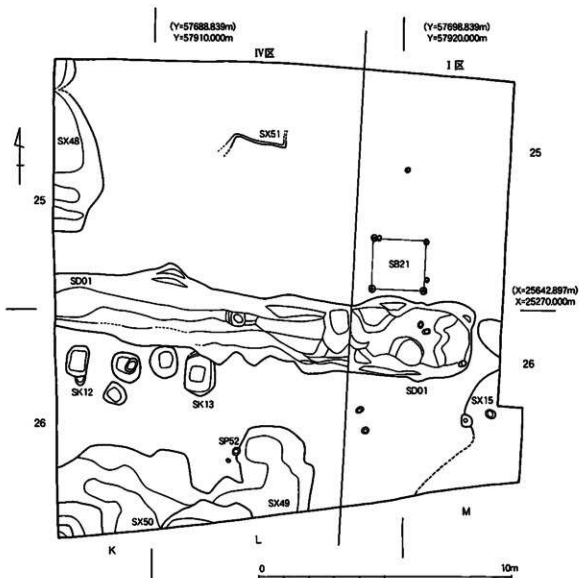
発掘調査は、Ⅰ区を平成12年5月から12月まで8ヶ月間、Ⅳ区を平成13年6月から10月まで5ヶ月間、実施した。

第2節 遺構と遺物

Ⅰ区の遺構群は16世紀前半から営まれはじめる。それ以前の遺構はきわめて貧弱でⅠ区SK03以外



第6図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図（第1段階 14～16世紀初頭）



第7図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図(第2段階 16世紀前葉)

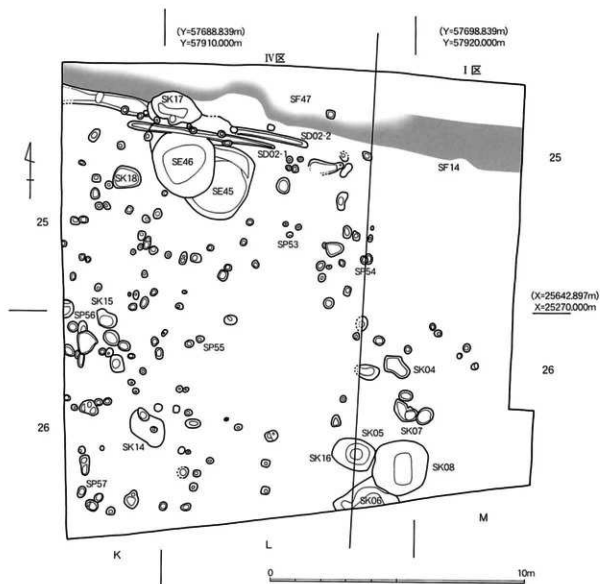
に数基の土坑が見られるのみである(第6図)。

16世紀前葉 16世紀前葉には、Ⅰ区SX15、Ⅳ区SX48・49・50などのような浅い不定型な地形の落ち込み以外には、東端が終息する大型の溝であるⅠ区SD01・Ⅳ区SD01が調査区中央を東西に走っていた。このほかには、Ⅰ区ではⅠ区SD01に南北に若干列のピットが、Ⅳ区ではⅣ区SD01に接して南側に隅丸方形の深い土坑が4基並んで検出されたのみで、遺構密度も低い(第7図)。

16世紀中葉～後葉 しかし、16世紀中葉～後葉に至ると急速に遺構が増え、道路遺構(Ⅰ区SF14・Ⅳ区SF47)、道路南側側溝(Ⅳ区SD02)及び井戸(Ⅳ区SE45・46)などの主要遺構のほか、数多くの土坑・ピットが確認できている(第8図)。

16世紀後葉～末 ひきつづき、16世紀後葉～末にも多くの遺構群が営まれている。道路遺構(Ⅰ区SF14・Ⅳ区SF47)、道路南側側溝(Ⅰ区SD02・Ⅳ区SD03)が営まれ続け、新たに井戸(Ⅰ区SE12・13)も掘削されており、特に、土坑・ピットの中には、Ⅰ区SK09・Ⅳ区SK27にみられるように炭・焼土を含む火災処理に伴う廃棄土坑が多く確認できたことは特徴的である。また、土坑には拳大～人頭大の川原石が多く廃棄されていることも、この時期の特徴であろう(第9図)。

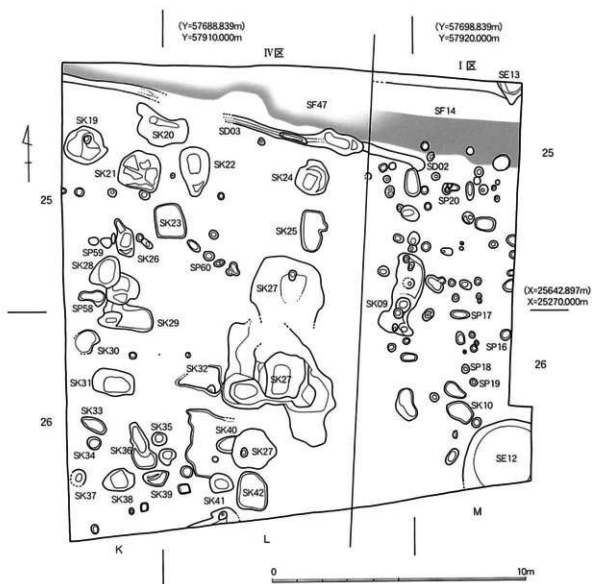
以後、遺構群は皆無に近く消滅し、近世には水田・畑地に伴うものと考えられる溝状遺構以外は風



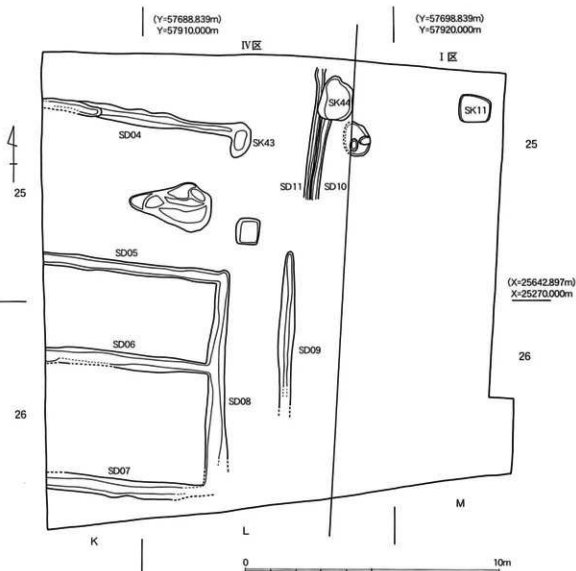
第8図 第9次調査区I・IV区遺構配置図(第3段階 16世紀中葉～後葉)

倒木痕や近年のものと考えられる土坑が見られるのみである(第10図)。

大友9次調査区周辺は、昭和30～40年代に宅地として盛土される以前は水田が広がり、地表下約40～50cmに水田耕作土・水田基盤層および近世の整地層がみられ、以下に中世の土層が確認できる。中世末の土層上には水田耕作土・床土が確認でき、大友府内町廃絶後、急速に水田化され、現代に到ったことがわかる。地山は大大川下流域に一般的に見られる堆積土であり、この下部、標高約2.5m以下には湧水層である砂層が広がる。当遺跡の井戸は、ほとんどがこの砂層まで掘り下げているのが確認できた(第11図)。



第9図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図(第4段階 16世紀後葉～末)



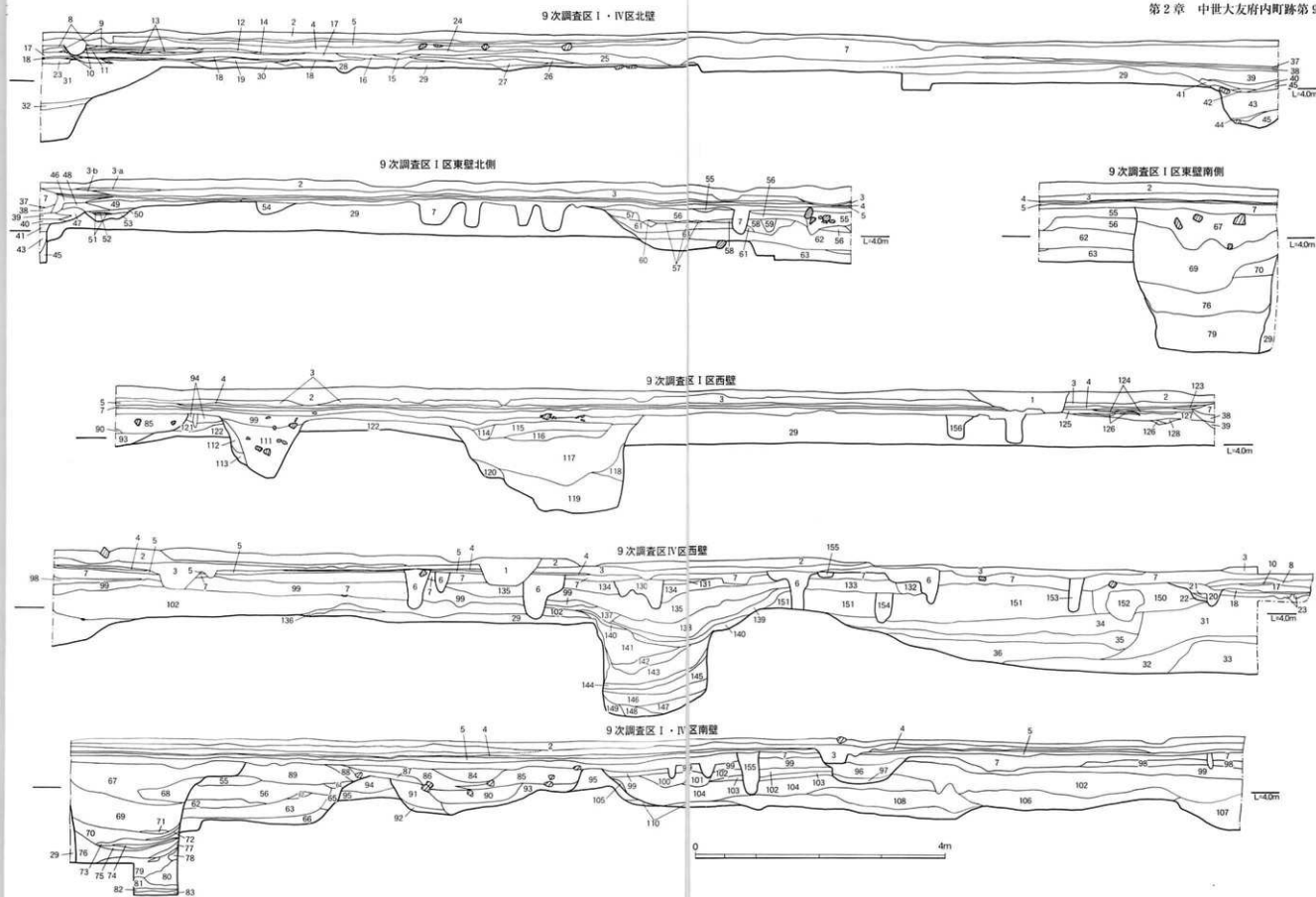
第10図 第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区遺構配置図（第5段階 近世）

第1表 第9次調査区Ⅰ区遺構一覧表

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD01	SD 1・SX 4	溝	L・M-25・26区	16世紀前半	Ⅳ区 SD01に続く。	23
SD02	未設定	土坑	L・M-25区	16世紀前半	Ⅳ区 SD03に続く。遺物は少量で細片。	23
SK03	SK12	土坑	M25区	14～16世紀初頭	遺物は少量で細片。	24
SK04	SK10	土坑	L26区	16世紀中葉～後葉		24
SK05	SK 3・SX 3	土坑	L26区	16世紀中葉～後葉	Ⅳ区 SK16に続く	25
SK06	SX 2	土坑	L26区	16世紀中葉～後葉		26
SK07	SK 6	土坑	L・M-26区	16世紀中葉～後葉		28
SK08	SK 7・SX 7	土坑	L・M-26区	16世紀中葉～後葉		29
SK09	SK 1	土坑	L・M-25・26区	16世紀後半～末		30
SK10	SK 2	土坑	M26区	16世紀後半～末		30
SK11	SK 8	土坑	M25区	近世		30
SE12	SX 1・SE 1	井戸	M26区	16世紀後半～末		30
SE13	SX 6	井戸	M25区	16世紀後半～末	Ⅱ区に続く井戸の掘方の一部。	36
SF14	未設定	道路	L・M-25区	16世紀後半～末		36
SX15	SK 5・SX 5	落ち込み	M26区	16世紀前半		38
SP16	SP 2	ビット	M26区	16世紀～末		38
SP17	SP 6	ビット	M26区	16世紀～末		39
SP18	SP 7	ビット	M26区	16世紀～末		39
SP19	SP10	ビット	M26区	16世紀～末		39
SP20	SP15	ビット	M25区	16世紀～末		39
SB21	未設定	掘立柱建物	L・M-25区	16世紀前半		38

第2表 第9次調査区Ⅳ区遺構一覧表

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD01	S048	溝	K・L-25・26区	16世紀前葉	I区 SD01に続く。	39
SD02-1	S075	溝	K・L-25区	16世紀中葉～後葉		44
SD02-2	S071	溝	K・L-25区	16世紀中葉～後葉	I区 SD02に続く。	44
SD03	S065	溝	L25区	16世紀後葉～末		44
SD04	S014	溝	K・L-25区	近世		44
SD05	S005	溝	K・L-25区	近世		45
SD06	S009	溝	K・L-26区	近世		46
SD07	S007	溝	K・L-26区	近世		46
SD08	S011	溝	L-25・26区	近世		47
SD09	S023	溝	L-25・26区	近世		47
SD10	S025	溝	L25区	近世		47
SD11	S026	溝	L25区	近世		47
SK12	S077	土坑	K26区	16世紀前葉	I区 SK05に続く。	48
SK13	S058	土坑	L26区	16世紀前葉		48
SK14	S053	土坑	K26区	16世紀中葉～後葉		48
SK15	S049	土坑	K26区	16世紀中葉～後葉		49
SK16	S047	土坑	L26区	16世紀中葉～後葉		50
SK17	S067	土坑	L25区	16世紀中葉～後葉		52
SK18	S070	土坑	K25区	16世紀中葉～後葉		53
SK19	S013	土坑	K25区	16世紀後葉～末		53
SK20	S035	土坑	K・L-25区	16世紀後葉～末		53
SK21	S012	土坑	K25区	16世紀後葉～末		55
SK22	S015	土坑	L25区	16世紀後葉～末		55
SK23	S064	土坑	L・K-25区	16世紀後葉～末		56
SK24	S044	土坑	L25区	16世紀後葉～末		56
SK25	S063	土坑	L25区	16世紀後葉～末		58
SK26	S008	土坑	K25区	16世紀後葉～末		59
SK27	S027	土坑	L-25・26区	16世紀後葉～末		59
SK28	S006	土坑	K25区	16世紀後葉～末		69
SK29	S030	土坑	K-25・26区	16世紀後葉～末		75
SK30	S028	土坑	K26区	16世紀後葉～末		77
SK31	S010	土坑	K26区	16世紀後葉～末		78
SK32	S055	土坑	L26区	16世紀後葉～末		80
SK33	S016	土坑	K26区	16世紀後葉～末		80
SK34	S017	土坑	K26区	16世紀後葉～末		80
SK35	S019	土坑	K26区	16世紀後葉～末		82
SK36	S018	土坑	K26区	16世紀後葉～末		82
SK37	S033	土坑	K26区	16世紀後葉～末		82
SK38	S001	土坑	K26区	16世紀後葉～末		82
SK39	S003	土坑	K26区	16世紀後葉～末		82
SK40	S041	土坑	L26区	16世紀後葉～末		83
SK41	S031	土坑	L26区	16世紀後葉～末		83
SK42	S002	土坑	L26区	16世紀後葉～末		83
SK43	S020	土坑	L25区	近世		84
SK44	S024	土坑	L25区	近世		84
SE45	S034-1	井戸	L25区	16世紀中葉～後葉		85
SE46	S034-2	井戸	L25区	16世紀中葉～後葉		85
SF47	S036	道路	K・L-25区	16世紀後葉～末		87
SX48	S072	落ち込み	K25区	16世紀前葉		88
SX.49	S046	落ち込み	L26区	16世紀前葉		88
SX50	S054	落ち込み	K・L-26区	16世紀前葉		88
SX51	S066	落ち込み	L25区	16世紀前葉		89
SP52	P 70	ビット	L26区	16世紀前葉		89
SP53	P 64	ビット	L25区	16世紀中葉～後葉		89
SP54	P 79	ビット	L25区	16世紀中葉～後葉		89
SP55	P 24	ビット	L26区	16世紀中葉～後葉		90
SP56	P 38	ビット	K26区	16世紀中葉～後葉		90
SP57	P 49	ビット	K26区	16世紀中葉～後葉		90
SP58	P 40	ビット	K25区	16世紀後葉～末		90
SP59	P 6	ビット	K25区	16世紀後葉～末		90
SP60	P 2	ビット	L25区	16世紀後葉～末		90



第11図 9次調査区トレンチ土層断面図

第9次調査区トレンチ土層断面観察表

1	掘出し	53	褐色砂。粒子が非常に細かい。
2	水田耕作土	54	褐色砂。粒子が非常に細かい。
3	水田耕作土下床土	55	褐色砂。礫を含む。
3-a	にぶい黄褐色土。酸化鉄が沈着している。	56	褐色砂質土。
3-b	にぶい黄褐色土。	57	淡褐色土。炭・焼土粒が含まれる。
4	酸化鉄沈着土	58	褐色砂質土。
5	マンガン沈着土	59	褐色砂質土。炭・焼土粒が含まれる。
6	黒褐色土。炭・焼土を多く含む	60	淡褐色土。
7	褐色土。	61	灰褐色砂質土。
8	灰褐色砂質土。(御所小路整地土)	62	褐色土。炭・焼土粒がわずかに含まれる。
9	にぶい黄褐色粘土。かなり硬く締まっている。(御所小路整地土)	63	にぶい黄褐色粘質土。
10	浅黄色砂(御所小路整地土)	64	灰褐色砂質土。炭粒を含む。
11	にぶい黄褐色粘土。かなり硬く締まっている。(御所小路整地土)	65	灰褐色土。
12	にぶい黄褐色砂粘質土。かなり硬く締まっている。(御所小路整地土)	66	にぶい黄褐色粘質土。
13	にぶい黄褐色粘土。かなり硬く締まっており、酸化鉄の沈着がみられる。(御所小路整地土)	67	褐色土。炭・礫を含む。7割に近似するが、やや明るい。
14	灰黄色粘土。かなり硬く締まっている。(御所小路整地土)	68	褐色土。
15	褐色砂質土。(御所小路整地土)	69	淡褐色土。炭を含む。
16	灰黄色砂質土。17割と近似するが、酸化鉄の沈着が認められ、わずかに赤味を帯びている。(御所小路整地土)	70	茶褐色土。炭・焼土がわずかに含まれる。灰褐色土粒が含まれる。
17	灰黄色砂質土。(御所小路整地土)	71	にぶい黄褐色土。
18	黄褐色粗砂(御所小路整地土)	72	にぶい黄褐色土。
19	黄褐色粘土。(御所小路整地土)	73	褐色土。
20	にぶい黄褐色砂質土。埋土の砂粒は粗い。(御所小路側溝)	74	にぶい黄褐色土。炭・焼土がわずかに含まれる。
21	にぶい黄褐色砂質土。(御所小路側溝)	75	褐色土。炭・焼土がわずかに含まれる。
22	灰白色砂質土。(御所小路側溝)	76	茶褐色土。炭がわずかに含まれる。灰褐色土のブロックが含まれる。
23	黄褐色粗砂	77	褐色砂粘質土。
24	黄褐色砂質土。	78	赤褐色土。
25	黄褐色粘土。	79	褐色土。炭・焼土がわずかに含まれる。
26	浅黄色砂	80	にぶい褐色粘質土褐色砂質土。
27	浅黄色砂。26割に地山ブロックが含まれる。	81	褐色砂質土。褐色粘土粒が混在する。
28	灰褐色砂質土。	82	褐色砂質土。
29	地山	83	にぶい褐色土。
30	黄褐色粘質土。小石を含み、硬い。	84	褐色土。にぶい黄褐色土の小さいブロックや炭・焼土をわずかに含む。
31	にぶい黄褐色土。	85	にぶい黄褐色粘質土。
32	褐色土。	86	にぶい黄褐色土。炭・焼土をわずかに含む。84割と近似する。
33	明黄褐色土。	87	褐色粘質土。炭・焼土をわずかに含む。85割と近似するが、やや暗い。
34	明褐色土。やや粘性を帯びる。	88	褐色土。
35	灰白色土。粘性を帯び、やわらかい。	89	褐色砂層
36	明褐色土。34割と近似するが、粗砂粒を含む。	90	褐色粘質土。炭・焼土をわずかに含む。85割と近似するが、やや暗い。
37	茶褐色土。炭・焼土粒が含まれる。酸化鉄の沈着が認められる。	91	にぶい黄褐色粘質土。
38	茶褐色土。炭・焼土粒が含まれる。マンガンの沈着が認められる。	92	にぶい黄褐色粘質土。91割と近似するが、やや暗い。
39	淡黄褐色土。マンガンの沈着が認められる。	93	にぶい黄褐色土。
40	淡黄褐色土。	94	淡灰褐色土。炭を含む。
41	褐色砂質土。	95	淡灰褐色土。炭を含む。94割より暗い。
42	淡黄褐色土。	96	黄灰色土。
43	褐色砂質土。炭・焼土粒が含まれる。少し硬い。	97	黄灰色土。炭・焼土を多く含む。
44	褐色粘質土。	98	褐色土。7割よりやや暗い。
45	褐色砂質土。一部に褐色粘質土を含む。。	99	灰褐色粘質土。炭・焼土を含む。7割に近似する。
46	褐色砂。	100	浅黄褐色土。
47	褐色土。炭・焼土粒が含まれる。	101	にぶい黄褐色土。
48	褐色砂。粒子が非常に細かい。礫を含む。	102	灰褐色土。
49	褐色砂。マンガンを含む。	103	灰白色砂質土。
50	淡黄褐色土。炭・焼土粒が含まれる。	104	褐色土。炭・土器を多く含む。
51	50割と52割が互層に混在。	105	褐色土。
52	褐色砂	106	浅黄褐色砂質土。
		107	にぶい褐色土。
		108	にぶい黄褐色砂質土。粗砂粒。土器を多く含む。

第2節 遺構と遺物

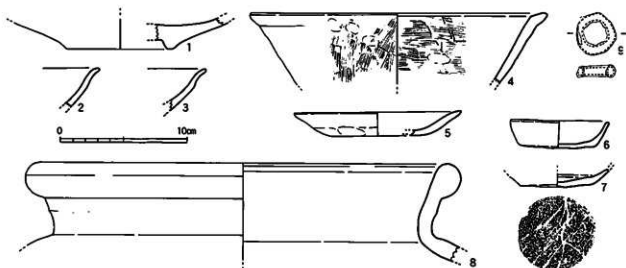
- 109 明褐色粘質土。マンガンを含む。炭を含む。
- 110 地山
- 111 暗灰褐色土（礫および炭・土器を多量に含む。）
- 112 灰褐色土（炭を多量に含む。）
- 113 淡灰褐色土（95層と同一層か？）
- 114 暗茶褐色土（礫および炭・焼土を含む。）
- 115 淡茶褐色土（礫および炭・焼土を含む。）
- 116 淡茶褐色土（115層よりも軟らかい。黄褐色の土粒・炭を含む。）
- 117 茶褐色土（礫および炭・焼土を含む。小さな土器片を含む。）
- 118 地山崩落土
- 119 茶褐色粘質土（礫および炭・焼土を含む。小さな土器片を含む。）
- 120 茶褐色粘質土
- 121 94層と122層の漸移層であるが、炭をきわめて多く含む。
- 122 褐色砂層
- 123 酸化鉄沈着土（砂質が強い。）
- 124 酸化鉄沈着土（砂質が強い。）
- 125 灰褐色砂質土（酸化鉄が沈着している。7層に相当する。）
- 126 マンガン沈着土
- 127 褐色粘質土
- 128 褐色砂
- 129 灰褐色粘質土
- 130 黒褐色土（炭・焼土を非常に多く含む。）
- 131 黒褐色土（130層と近似するが、炭・焼土が少ない。）
- 132 にぶい褐色土（133層と近似するが、灰色土ブロックが混入する。）
- 133 にぶい褐色土
- 134 にぶい黄褐色土（135層と近似するが、135層より炭・焼土を多く含む。）
- 135 にぶい黄褐色土（炭・焼土を含む。）
- 136 102層と29層の漸移層
- 137 にぶい黄褐色土（細かな土器粒・炭粒を含む。）
- 138 にぶい黄褐色土（細かな土器粒・炭粒を含む。）
- 139 にぶい黄色シルト（上下層の漸移層の様相をもつ。）
- 140 炭灰土（139層の土が部分的に混入する。）
- 141 灰黄褐色土（細かな土器粒・炭粒を含む。）
- 142 灰黄褐色砂質土（土器片・小石を多く含む。）
- 143 炭灰土（下層に比較すれば、炭の比率が高い。）
- 144 炭灰土（上層に比較すれば、炭の比率が高い。土器片を多く含む。）
- 145 炭灰土（144層とほとんど同じ。144層との境から土器片が大量に出土した。）
- 146 灰黄褐色粘土（土器粒をわずかに含む）
- 147 褐色粘土
- 148 褐灰色粘土（147層よりややシルト質。）
- 149 地山
- 150 にぶい橙褐色土
- 151 橙褐色土
- 152 にぶい橙褐色土（150層と同じであるが、灰色土ブロックが含まれる。）
- 153 橙褐色土（焼土粒を含む。）
- 154 褐色土
- 155 灰白色土
- 156 褐色土（7層に比較して、土質が均質である。）

1. I 区

a. 溝

SD01 (第7・11図)

調査区中央部より、やや北側である L・M-25・26区において東西方向に走る大型の溝である。当初、用途不明の大型土坑として把握していたが、IV調査区も延長して検出されたため、溝状遺構と認識し、SD01とした。本調査区では幅約3m、長さ4.9mで検出され、溝自体は東側で終息している。最深部の深さ約130cmを測る溝の断面形は南側溝立ち上がりは緩やかなU字形を呈するが、北側の溝立ち上



第12図 I区 SD01 出土遺物実測図 (1/3)

がりはほぼ直立している。埋土は大きく上下2層(第11図115~117層、第11図118~120層)に分けられ、上層(第11図115~117層)の褐色土中には遺物が含まれるものの、中層以下(第11図118~120層)の埋土中には遺物が少なく、赤褐色を呈し、回転系切りの土師質土器の微細な細片が含まれていたが、同化しうる大きさではなかった。最下層には褐色粘土が堆積しており、一時、滞水状態であったことが確認できた。出土遺物から、掘削から埋没ともさほどの時期差はなく、上下2層とも16世紀前葉におさまる。

SD01 出土遺物 (第12図・第13図)

第12図1・2は龍泉窯系青磁であり、3は白磁である。4は土師質土器の鍋あるいは鉢であり、内外面に指頭圧痕および刷毛目が顕著に残る。5は京都系土師器皿であり、埴地幅年1期末に帰属するものであろう。6・7は在地系土師質土器環であり、いずれも底部には回転系切りの後に板状圧痕が確認されている。6に関しては、口径7.8cmと、小振りである。8は備前系陶器甕であり、口縁を丸く仕上げている。9は環状鉄製品であるが、その用途は明らかでない。

第13図1は径2.6cmを測る完形の銅銭であるが、銭貨名・書体などは摩滅が著しく、明らかでない。

SD02 (第9図)

調査区北側の L・M-25区において検出された道路遺構の南側に東西に走る溝であり、IV区に検出

第13図 I区 SD01
出土銭貨 (1/1)

されたSD03につながる。本調査区では幅15～25cm、残存する深さ20～30cmで道路状遺構の南側に道路と並行して東西方向に走り、調査区中央で終息している。出土遺物は、極めて乏しく、図化しうる大きさではなかったが、Ⅳ区に検出されたSD03の埋没時期から16世紀後葉～末であることは明らかである。

b. 土坑

SK03 (第6図)

調査区中央北端のM25区に位置する道路遺構下に掘り込まれた長径1.0m、短径0.45m、深さ0.25mを測る長楕円形の土坑である。出土遺物は非常に少なく、細片のみであったため、時期比定が困難であったが、道路造営以前であることは明確であり、14世紀から16世紀初頭の広い時期幅で捉えておくべきであろう。

SK03出土遺物 (第14図)

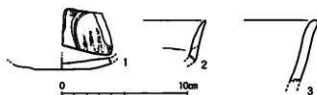
1は龍泉窯系青磁皿であり、内面に割花文がみられるため、13世紀代の所産であると捉えるべきであろう。2は在地系土師質土器坪であり、口縁端部に向けて鋭く外反する特徴をもち、14～15世紀に属するものであることがわかる。3は土師質土器鉢の細片である。

SK04 (第15図)

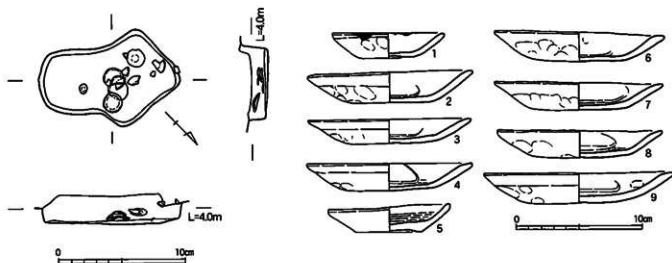
調査区中央より、やや南側のL26区に位置する。SD01最上層に掘り込まれた土坑であり、SD01埋没後に掘削されたものであることがわかる。長径1.1m、短径0.75m、深さ0.25mを測る不定形の土坑である。掘土は炭・焼土が混入する茶褐色土からなり、火災処理を目的として掘削された土坑と考えられる。出土遺物は定形を主体とした京都系土師器皿が多く、そのほとんどが伏せられた状態で出土している。

SK04出土遺物 (第16図)

1～9はいずれも京都系土師器皿である。その法量は3グループに分けられ、口径9cm前後のもの(1)、口径13cm前後のもの(2～4、6～8)、口径15cm前後のもの(9)に分けられる。いずれも

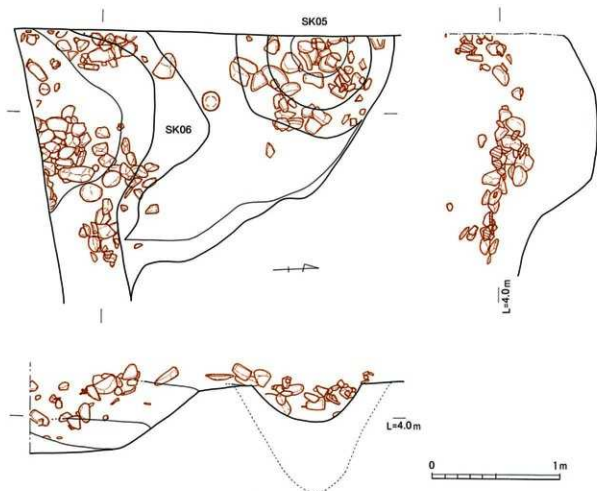


第14図 I区 SK03 出土遺物実測図 (1/3)



第15図 I区 SK04 実測図 (1/30)

第16図 I区 SK04 出土遺物実測図 (1/3)

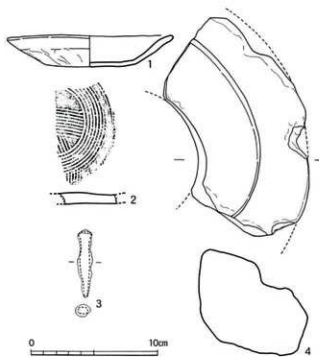


第17図 I区 SK05・06 実測図 (1/30)

その形態から埴地幅年1期末に属するものである。特に、最小である1の口縁には煤が付着し、灯明皿であることがわかる。5は在地系土師質土器皿であり、内面にロクロ目を顕著に残し、赤褐色を呈する。

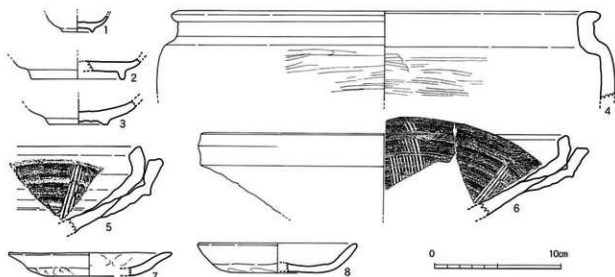
SK05 (第17図)

調査区南西端のL26区に位置し、第9次調査区IV区のSK16に延びる廃棄土坑である。径1.25m、深さ約0.85mを測る円形土坑である。断面観察から浅い落ち込みを切るSK06埋没後に掘削されたことがわかるが、炭・焼土を多量に含む埋土中には、土器類とともに拳大から人頭大の川原石が上層から下層まで出土しており、様相はSK06と類似しており、I・IV区に広がる一連の廃棄土坑のひとつであるこ



第18図 I区 SK05 出土遺物実測図 (1/3)

灯明皿



第19図 I区 SK06 出土遺物実測図 (1/3)

とがわかる。

SK05 出土遺物 (第18図)

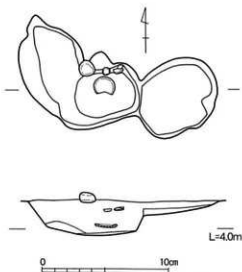
1は京都系土師器皿であり、その形態から塩地編年1期末に属するものである。2は瓦質土器描鉢の底部片である。3は鉄釘と考えられる。4は、凝灰岩の石製品である。宝塔塔身下の反花の蓮弁の退化した部材であると推測できるが、明らかでない。

SK06 (第17図)

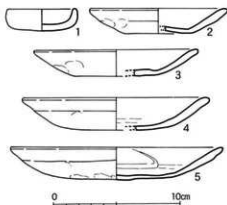
調査区西南端のL26区に位置し、Ⅳ区およびⅠ区の南に延びる不定形を呈する深さ約50cmの廃棄土坑である。SK05とともに浅い落ち込みを切っているが、これらの遺構群は同様な廃棄土坑の重なり合いであると考えられる。炭・焼土が若干混じる埋土中には、土器類とともに拳大から人頭大の川原石が上層から下層まで出土しており、Ⅳ区とともに多く見られる廃棄土坑と同じ様相を持ち、Ⅰ・Ⅳ区に広がる一連の廃棄土坑のひとつであることがわかる。

SK06 出土遺物 (第19図)

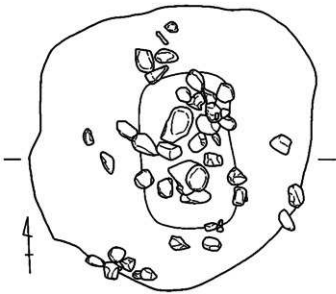
2は龍泉窯系青磁碗であり、3は陶器碗であるが、産地は明らかでない。4は瓦質土器の風炉であ



第20図 I区 SK07 実測図 (1/30)

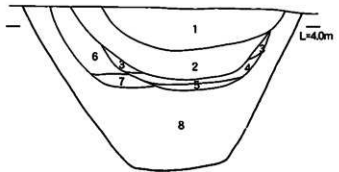
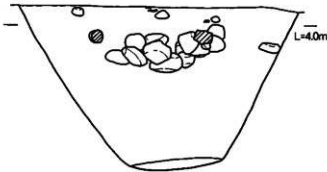


第21図 I区 SK07 出土遺物実測図 (1/3)

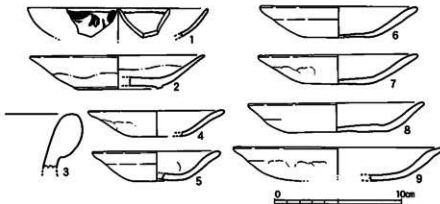


I 区SK08土層観察表

- 1 にぶい黄褐色粘質土
- 2 にぶい黄褐色粘質土 (1層と近似するが、酸化鉄を含むせいか、やや赤みを帯びる)
- 3 灰色粘質土 (灰・炭は比較的多く、薄い層で入る)
- 4 灰色粘質土 (灰・炭が非常に少ない均質な粘土、一時、潜水状態にあったものと考えられる)
- 5 炭灰層 (中に竹片もみられる)
- 6 にぶい黄褐色粘質土 (2層と近似する)
- 7 にぶい黄褐色粘質土 (部分的に砂を含む)
- 8 黄褐色粘質土

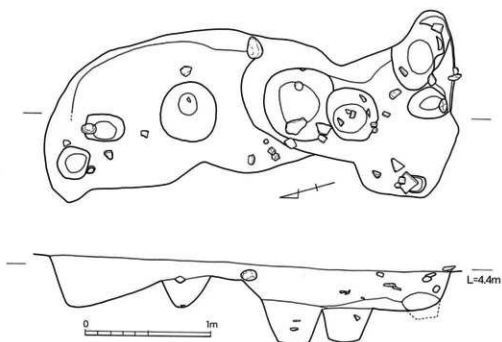


第22図 I 区 SK08 実測図 (1/30)

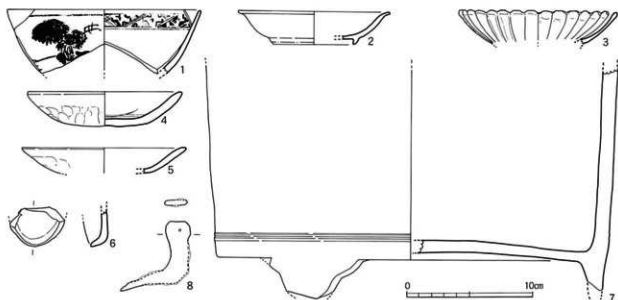


第23図 I 区 SK08 出土遺物実測図 (1/3)

る。5・6は備前系陶器掬鉢である。オロシ目は放射状に施されているのみであり、いずれも中世6期に属するものであろう。7・8は京都系土師器皿である。1は門縁下外面に強い横ナデを施し、ま



第24図 I区 SK09 実測図 (1/30)

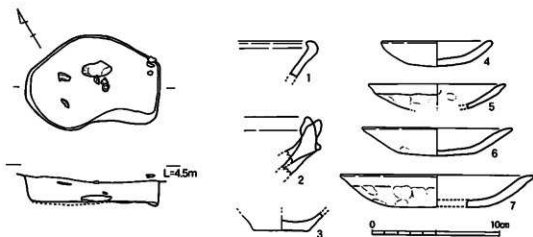


第25図 I区 SK09 出土遺物実測図 (1/3)

た、8は体部が深い形態をもつ。いずれもその形態から塩地編年2～3期に属するものである。

SK07 (第20図)

調査区中央南側のL・M-26区に位置する径50cm内外の小土坑が重なり合い、最深部が0.5mの不定形土坑状を呈する遺構である。それぞれの小土坑のプランは埋土がほとんど同じであり確認できなかった。礫の出土は見られないが、少量の土器が出土している。



第27図 I区 SK10 出土遺物実測図 (1/3)

第26図 I区 SK10 実測図 (1/30)

SK07 出土遺物 (第21図)

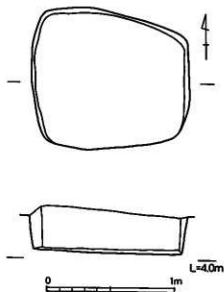
1～5はいずれも京都系土師器皿である。1は体部が立ち上がる径5.3cmの小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。2～5は口径10cm前後のものから口径16cm前後のものが存在し、その法量は多様である。いずれもその形態から埴地編年1期末に属するものである。

SK08 (第22図)

調査区西南端付近のL・M-26区に位置する径2.25m、深さ1.3mを測る円形土坑である。断面観察から2回の掘り直しが行われたことが観察されたが、遺構検出に際して、新旧の土坑プランは確認しえなかった。もっとも古い土坑埋土には、ほとんど遺物が見られず、また、人頭大より小さい川原石も出土していない。次に掘削された古い土坑埋土は最下層に部分的に砂を含むにぶい黄褐色粘質土が堆積し、その後一気に埋められている。最も新しい土坑は掘り直し後に一時、滞水状態があったものか、最下層に微細な骨片が混じる炭灰層が薄くみられる上に灰色粘土が堆積している。上層にはにぶい黄褐色粘質土が堆積するが、この中には拳大より大きく、人頭大より小さい川原石が混じり、土器等の遺物は少ない。なお、上下層において時期差が認められる遺物の出土状態は確認できなかった。

SK08 出土遺物 (第23図)

1は中国漳州窯系青花碗の口縁部片である。2は口縁部が真っ直ぐ外反して延びる中国産白磁皿である。釉薬は白濁し、内外面とも体部上半にのみ施釉されており、質は悪い。3は備前系陶器製の口縁部細片であり、14～15世紀に属するものであろう。4～9はいずれも京都系土師器皿である。口径10cm台のものから口径16cm台のものが存在し、その法量は多様である。いずれもその形態から埴地編年1期末に属するものである。



第28図 I区 SK11 実測図 (1/30)

焼塩壺

中国漳州窯系
青花碗

SK09 (第24図)

調査区中央付近やや西側の L・M25・26 区に位置する。長径3.25m、短径1.1m、最深50cmを測る不定形で、土坑床面にはビット状の窪みを多くもつ土坑である。埋土は茶褐色土に炭・焼土が混入するものや炭・灰層などからなり、火災後の処理を目的として掘削された土坑であることがわかる。不定形であるのは、掘削された土坑の単位が切り合いをもち、錯綜して存在するためと考えられるが、土坑の掘削はきわめて近接した時期に行われていると思われる。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。

SK09 出土遺物 (第25図)

白磁青皿

1は京東鎮窯系青花碗の口縁部片である。2・3はいずれも白磁である。2は端反りの皿であり、3は菊皿である。4・5・6はいずれも京都系土師器皿であり、6に関しては、焼塩釜の蓋を転用した小皿を両面をおさえ、耳皿としたものである。7は在地系の瓦質土器火鉢であり、底部付近に2条の細い突線を通らしている。8は扁平なL字形の鉄製品であり、片方の先端を尖らせており、他方には小さい穿孔が認められる。

SK10 (第26図)

調査区南側中央の M26 区に位置する長径1.05m、短径約0.7m、深さ約0.2mを測る不定形の土坑である。遺物は埋土中に破片で混入しており、廃棄物中に混じる性格のものであったことがわかる。

SK10 出土遺物 (第27図)

1は中国南部産と考えられる焼締陶器鉢の口縁部片である。2は備前系陶器鉢鉢の口縁部細片であり、中世5期に属するものであろう。3は在地系土師質土器皿であり、径4.6cmの底部片が残るのみである。4～7は京都系土師器皿であり、塩地編年1期末～2期の形態的特徴をもつ。

SK11 (第28図)

調査区北東隅付近の M25 区に位置する長辺1.25m、短辺0.8～1.05m、深さ37cmを測る隅丸方形の土坑である。埋土は比較的軟質な茶褐色土からなり、I区において同様の埋土はみられず、中世遺構埋没後に後世掘削された土坑であろう。しかし、明確な時期を確定できるだけの出土遺物は見られなかった。道路遺構上に確認できた唯一の大型遺構であるが、道路としての機能を失った時期以降に掘削されたものである。

c. 井戸

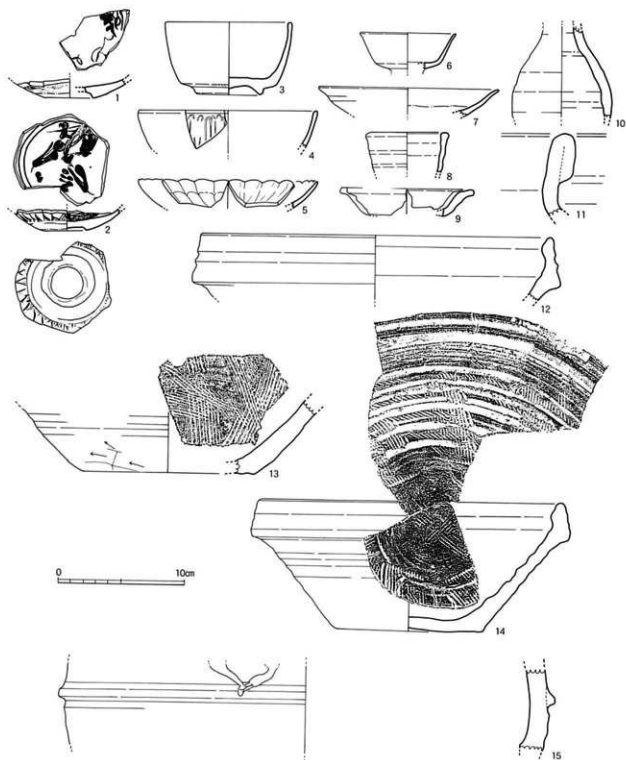
SE12 (第9図)

調査区東南コーナーの M26 区において検出された井戸跡である。径3m以上、検出面からの深さ2.1mを測り、円形土坑を呈する井戸掘方の掘削は砂層まで達している。井戸は井戸枠が抜き取られ、完全に破壊された状態で廃棄土坑として利用されている。特に、中層においては拳大から人頭大の大量の川原石が投げ込まれており、これらに混じり土器片が出土している。最下層において径50×40cm、深さ18cmの浅い円形土坑が砂層中に検出できたため、ここが井戸枠部にあたるものと考えられる。当該遺構は川原石廃棄後、人工的に埋められ整地されたものと考えられる。

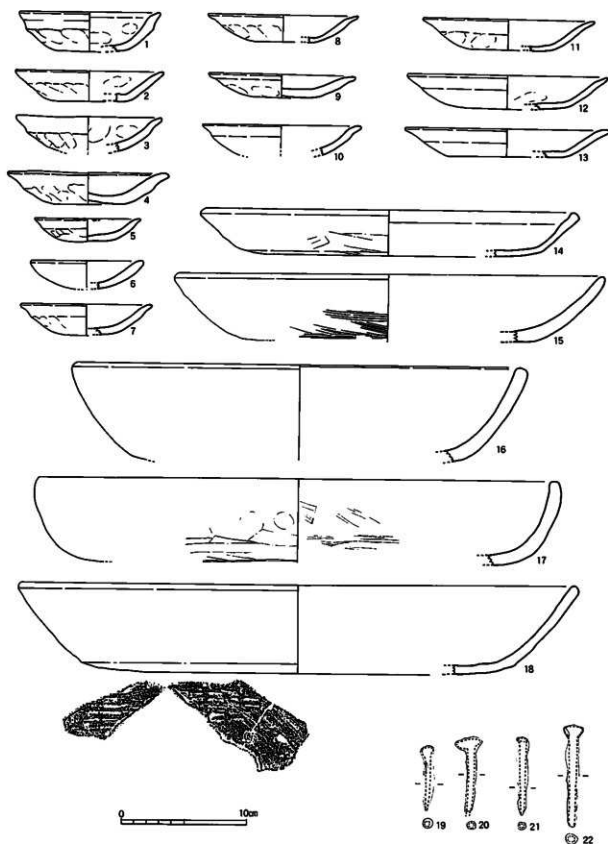
SE12 出土遺物 (第29～36図)

第29図 1・2は荳蔻底タイプの中国漳州窯系青花皿の破片である。3は中国龍泉窯系青磁香炉の破片であると考えられる。4は中国龍泉窯系青磁碗であり、外面には細線の蓮弁文が認められる。5は瀬戸産陶器香炉、6は中国龍泉窯系青磁青花皿、7は中国製白磁小杯、8は中国製白磁皿である。9は瀬戸産陶器香炉、10は備前系陶器瓶、11は備前系陶器大甕の口縁部片である。12・13・14は備前系陶器鉢鉢である。オロシ目は放射状に施されているのみであり、いずれも中世6期に属するものであろう。15は備前系陶器水屋甕の体部片である。外面に突帯がみられ、その上に粘土紐の輪を貼り付けている。

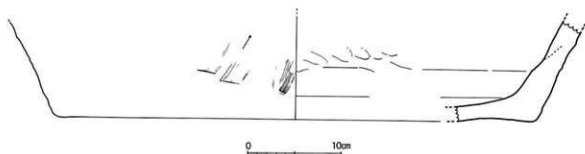
瀬戸産陶器香炉



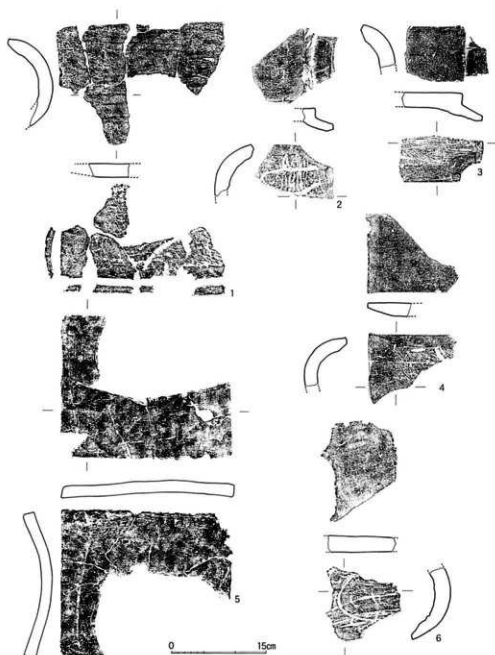
第29図 I区 SE12出土遺物実測図① (1/3)



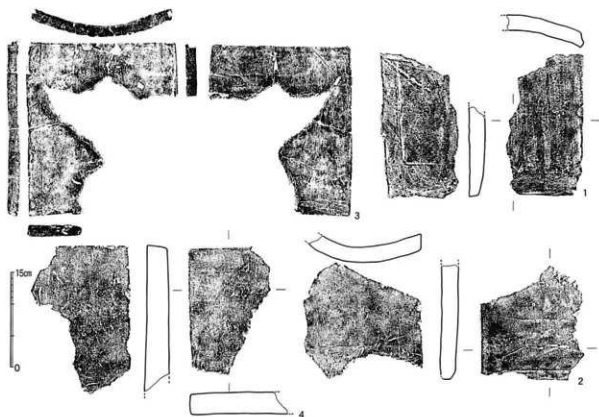
第30図 I区 SE12 出土遺物実測図② (1/3)



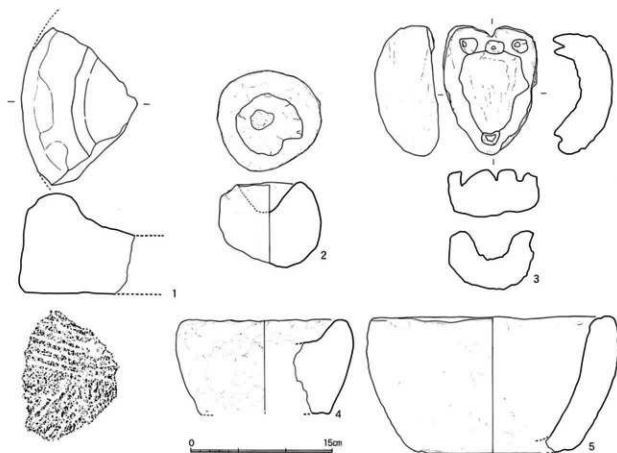
第31図 I区 SE12 出土遺物実測図③ (1/4)



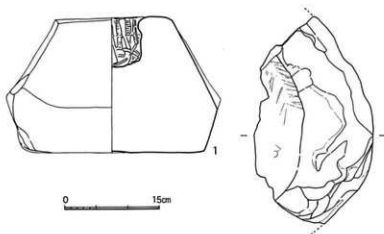
第32図 I区 SE12 出土遺物実測図④ (1/6)



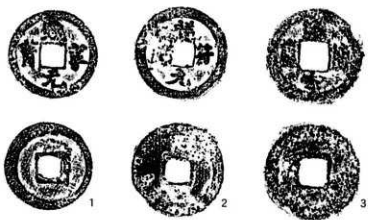
第33図 I区SE12出土遺物実測図⑤ (1/6)



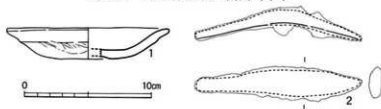
第34図 I区SE12出土遺物実測図⑥ (1/4)



第35図 I区 SE12 出土遺物実測図⑦ (1/6)



第36図 I区 SE12 出土銭貨 (1/1)



第37図 I区 SE13 出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

灯明皿

第30図1～13はいずれも京都系土師器である。1は坏であり、その他はいずれも皿である。坏の口縁下外面は強いナデが施されている。皿は口径8cm台のものから口径15cm台のものが存在し、その法量は多様であり、その形態から埴地編年1期～3期に属し、時期差が認められる。5の口縁端部には灯明皿として使われていたことが想定できる芯の煤が付着している。14・18は土師質土器鍋であり、口縁部内外面および内面に横ナデを施し、底部外面にヘラケズリを施している。また、外面には煤が付着している。15～17は瓦質鉢であるが、焼成が十分でないせいか、土師質を呈する。内外面にはミガキが認められる。19～22は鉄釘であり、断面方形を呈する。

第31図は備前系陶器大甕の底部片であり、復元直径50.0cmをはかる。

吊り紐痕

第32図1～4・6は丸瓦であり、2・3は玉縁部片である。1・3・4には凹面に斜め方向の縦弧線のコビキ痕が認められ、1・2・6には凹面にU字形の吊り紐痕が認められる。5は平瓦であり、凹凸面にナデが施されている。

第33図1～4は平瓦で、凹凸面はナデが施されている。

第34図1は安山岩製石臼の上臼の破片である。2は凝灰岩製の用途不明石製品である。拳大のほぼ球形の石の一面を深さ約3cmの円錐形にくぼませている。3は凝灰岩製の船形石製品で、用途不明である。中央に大きな彫り込みと、その両側に3ヶ所と1ヶ所、小さく浅い穴が認められる。4・5はいずれも安山岩製鉢状石製品である。4は上面をわずかにくぼませる程度であり、深さが2.5cmを測る。

五輪塔火輪

第35図1は凝灰岩製五輪塔火輪である。軒口は比較的まっすぐ横に延び軒端で急に上方にあがる。わずかに照り屋根状を呈する。空風輪の納を埋め込む納穴は円形だが、加工が粗い。2は安山岩製石製品であり、その形態から埴臼の可能性が高いと思われる。

復元外口径51.4cmを測り、外面の調整はきわめて粗い。

第36図1～3はいずれも銅銭である。1は「熙寧元寶」（初鑄1068年）であり、2は「祥符元寶」（初鑄1009年）、3は「紹定通寶（？）」（初鑄1228年）である。

SE13（第9図）

調査区東北隅のM25区に検出された径2m以上、深さ1mを測る円形土坑状遺構であるが、北側・東側を完掘できなかったため、その機能は明らかにしえない。しかし、Ⅱ区の東南端において井戸が検出されており、これに続くものと考えられる。土層観察から埋没後にSF14北側の側溝が掘削されていることがわかる。埋土は炭・焼土を含む砂質土からなり、遺物とともに拳大から人頭大の礫が含まれ、下層には滞水状態を思わせる粘質土が混入する砂質土層が見られた。

SE13出土遺物（第37図）

第37図1は京都系土師器皿であり、口縁下外面は強いヨコナデが施されている。その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。2は用途不明の鉄製品である。細長い舌状の形態をもち、舌状部先端は薄く仕上げられ、へ字状に軽く折り曲げられている。

d、その他の遺構

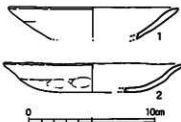
SF14（第8・9図）

道路遺構

調査区北端のL・M-25区において、帯状の硬化面が東西方向に幅1.2～1.8mの範囲で地山上に確認でき、道路遺構として認識した。この硬化面は、厚いマンガン屑の堆積と径1cm以下の小石粒がわずかに混入することにより硬化していることが確認できたが、この硬化面はⅣ区にも延びていた。この地山硬化面上には厚さ1～2cmの酸化鉄を含む薄い砂屑やマンガン屑が堆積し、別の硬化層が確



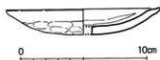
第38図 I区 SF14
出土遺物実測図(1/3)



第39図 I区 SX15 出土遺物
実測図 (1/3)



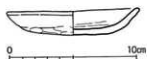
第40図 I区 SP16 出土
実測図 (1/3)



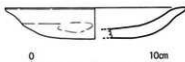
第41図 I区 SP17 出土遺物
実測図 (1/3)



第42図 I区 SP18 出土遺物実測図
(1/3)



第43図 I区 SP19 出土
遺物実測図 (1/3)



第44図 I区 SP20 出土遺物
実測図 (1/3)



第45図 I区包含層出土遺物実測図 (1/3)

認できるため、当時、道路の整地が繰り返され嵩上げされてきたことが土層断面から観察できる。この硬化面部分だけでなく、その両側部分にもビットをはじめとして遺構が希薄な範囲が確認でき、この範囲も併せて道路範囲と捉えられ、硬化部分はそのうちの頻繁に歩行が行われた範囲であると考えられよう。この地山直上硬化面より約1m隔てた北側に道路遺構と並行して溝状遺構の南側肩部が検出できたが、調査区北側には現在、水道管が走り、この部分の発掘調査は不可能であり、この溝状遺構の北側肩部は確認できなかった。

SF14 出土遺物 (第38図)

第38図は京都系土師器皿であり、口縁端部に近いほど薄く仕上げられている。その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。

SX15 (第7図)

SX15はSD01が終息する箇所東側に見られる深さ約30cmの土坑状の浅い落ち込みである。この遺構のプランは東側部分が調査区外にあるため、土坑とすべきか、溝状に延びるかは明らかでないが、明確な遺構と捉えるよりも整地の単位として浅い落ち込み状を呈していたものの可能性が高い。また、これにはSE12北側に広がる浅い土坑状の遺構も含まれるが、SE12に切られている。これについても明確な遺構と捉えるよりも整地の単位として自然地形の凹凸による浅い落ち込み状を呈していたものと捉えるべきであろう。長径1.1m、短径0.75m、深さ0.25mを測る不定形の土坑である。

SX15 出土遺物 (第39図)

第39図はいずれも京都系土師器皿であり、両者とも薄く仕上げられている。その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。

e. ビット

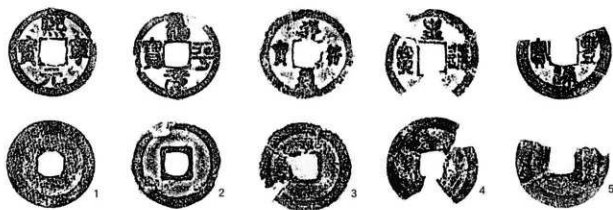
I区全域から80基前後のビットが検出されている。ビットからの出土遺物は乏しく、遺物から時期の判別は困難であるが、各ビットの同一検出面から発見された遺構の帰属時期からビットの時期を想定した。ビットは16世紀中葉～末に集中して営まれたことがわかる。これらのビットのうち、明確に掘立柱建物跡として並びが確認できるものはほとんどみられず、唯一、I区SD01北側において、各ビット中心の間隔が2.0mを測る1間四方の建物跡が確認されている。(SB21)。この1間四方の建物跡各ビットは径20～30cm、深さ8～28cmを測る。

SP16 出土遺物 (第40図)

第40図は中国景德镇窯系青花皿の破片であり、底径6.2cmを測る。

SP17 出土遺物 (第41図)

第41図は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。



第46図 I区包含層出土銭貨 (1/1)

SP18 出土遺物 (第42図)

第42図は中国製白磁皿の破片であり、口径15.1cmを測る。

SP19 出土遺物 (第43図)

第43図は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。

SP20 出土遺物 (第44図)

第44図は京都系土師器皿であり、器厚が厚く、その特徴から埴地編年3期に属するものと考えられる。

f. 包舎層

調査区周辺は、かつて水田地帯が広がっていたが、昭和30～40年代に約40～50cm盛土し、宅地として利用されていた。そのため、盛土下には水田耕作土・水田床土・酸化鉄沈着層・マンガン沈着層などの旧水田に伴う土層がみられた。旧水田に伴う土層下はほぼ全面に広がる7層は5～20cmの厚さで堆積しており、中世の遺構群はこの層を取り除き、はじめて確認できた。(第11図)

包舎層出土遺物 (第45・46図)

第45図1・2はいずれも中国漳州窯系青花皿であり、1は荳蔻底タイプのものであり、外面に芭蕉文がみられる。3は内面青花・外面青磁の碗である。4は復元口径20.8cmを測り、比較的大振りの中国漳州窯系青花鉢である。口縁部を「く」の字状に外反させ、口縁外面に菊花状の調整を施し、体部には縦方向の筋状凹線を彫り込んでいる。5・6・7は中国産白磁皿である。5は器壁が厚く、口縁を端反りし、端部を丸く仕上っている。見込部の軸は蛇の目状に丸く剥ぎ取られている。6・7は体部から口縁に向けて直線的に立ち上げ、口唇部を細く仕上っている。軸は体部上半のみで底部および見込部にまで達していない。8は華南三彩陶器であるが、器種不明である。9は瀬戸美濃系陶器腰折皿であり、緑色の釉を掛け、口縁部内面に磨き波状文を施す。10・11は体部が立ち上がる径5cm内外の土師質土器小皿であり焼塩塗の蓋を転用したものである。12は京都系土師器杯である。13～17はいずれも京都系土師器皿であり、その形態から埴地編年1期末～2期に属するものである。18・19は耳皿であり、18は京都系土師器小皿を利用したもの、19は在地系土師器小皿を利用したものである。20・21も京都系土師器皿であるが、やや大振りで20が口径17.2cm、21が口径20.6cmをそれぞれ測る。22は土製の甑であり、陸部の破片のみ残るが、成形は椎掘である。23は瓦質磁鉢であり、口縁部を「く」の字形に内反させている。オロシ目は5本1単位であり、使用により内面の摩滅が著しい。24は煙管の吸口であり、25はし字状鉄製品で鍔を想定すべきであろうか。

第46図1～5はいずれも銅銭である。1は「熙寧元寶」(初鑄1068年)であり、2は「治平元寶」(初鑄1064年)、3は「祥符通寶」(初鑄1009年)、4は「皇宋通寶」(初鑄1038年)、5は「元豊通寶」(初鑄1078年)である。

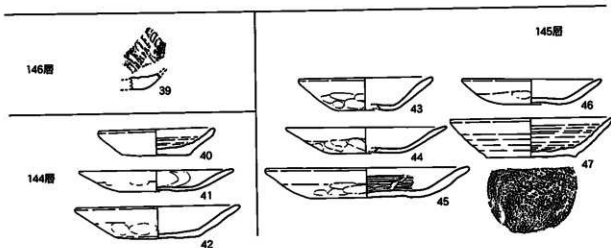
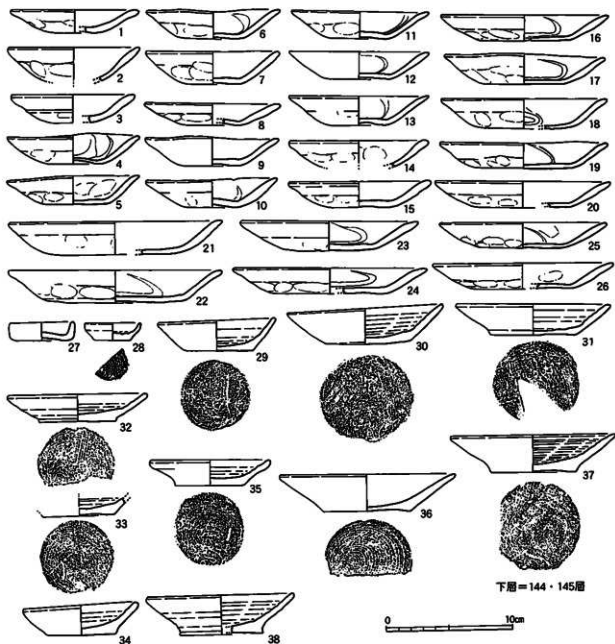
2. IV区

a. 溝

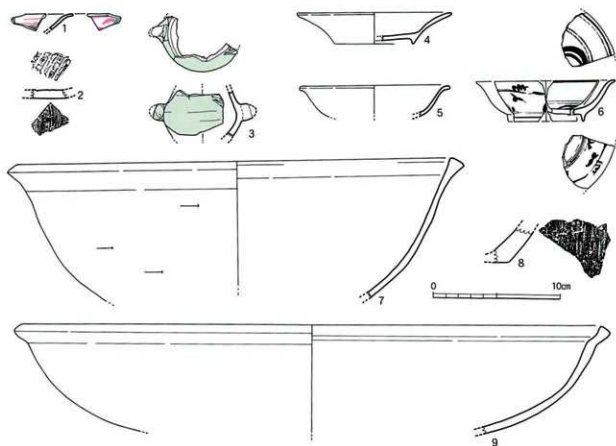
SD01 (第7・11図)

大型の溝

調査区中央部より、やや南側のK・L-25区において東西方向に走る大型の溝であり、I区に検出されたSD01につながる遺構である。この溝は調査区の西側にも延びることが確認できるうえ、本調査区では12mの長さで検出され、I調査区において5mの長さが続き、溝自体は東側で終息しているため、17m以上の長さを有することになる。上幅2.1～3.2m、最深部の深さ約196cmを測る溝の断面形はU字形を呈するが、I調査区とは異なり、両側とも溝立ち上がりはほぼ直立している。埋土は大きく上下2層に分けられ、上層・下層とも埋土中には遺物が少なく、赤褐色を呈し、回転系切りの土師質土器杯の微細な細片が含まれていたが、同化しうる大きさではなかった。この上層・下層の間に、調査区西端において炭灰を主体とし、土器を非常に多く含む層(143～145層)が、西および北か



第47図 IV区 SD01 出土遺物実測図① (1/3)



第48図 N区 SD01 出土遺物実測図② (1/3)

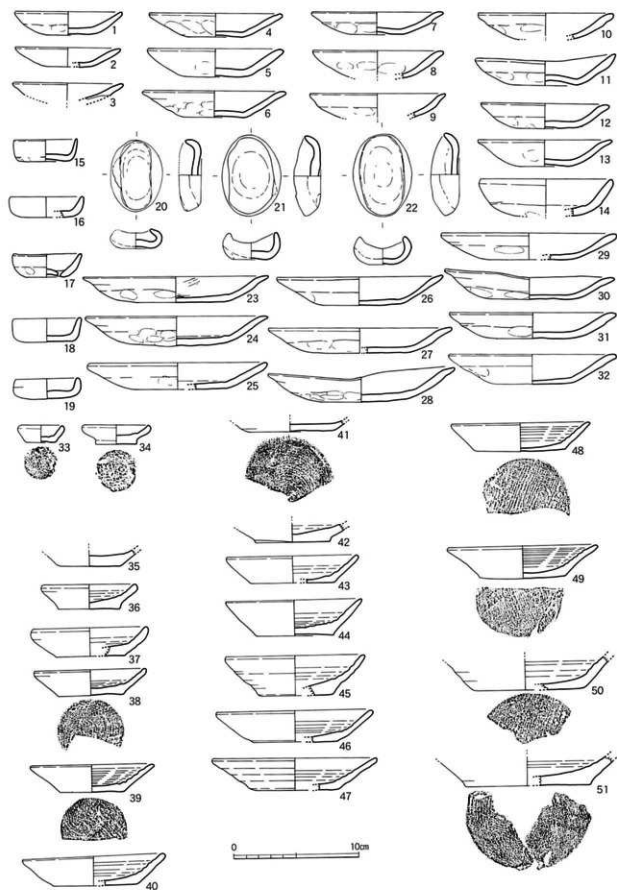
ら流れて埋もれていった状態の土層が確認できた。また、最下層（147・148層）には褐灰色粘土が堆積しており、一時、停滞状態であったことが確認できた。

SD01 出土遺物（第47～51図）

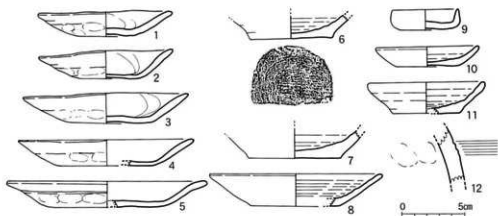
第47図は遺物が層位ごとに確認できたものである。1～38が144・145層、39が146層、40～42が144層、43～47が145層からそれぞれ出土している。1～26はいずれも京都系土師器皿であり、その形態から埴地編年1期に属するものである。27は体部が立ち上がる径4.8cmの京都系土師器小皿であり焼塩壺の蓋を転用したものである。28～38は在地系土師質土器皿であり、36以外には内面に強いロクロ痕を残している。29・30・32の底部には回転糸切り後に板状圧痕が認められ、34・35・37・38の底部には回転糸切り後にナデが施されている。28に関しては、口径4.2cmと、小振りであり、小皿に分類できよう。39は瀬戸産陶器卸皿の破片である。40は在地系土師質土器皿であり、内面に強いロクロ痕を残している。41・42はいずれも京都系土師器皿であり、その形態から埴地編年1期に属するものである。43～46はいずれも京都系土師器皿であり、その形態から埴地編年1期に属するものである。47は在地系土師質土器皿であり、内面に強いロクロ痕を残している。また、底部には回転糸切り後に板状圧痕が認められる。

五彩皿 第48図はSD01出土一括資料である。1は中国産五彩皿の破片である。2は瀬戸産陶器卸皿の底部華南三彩陶器片であり、内面にオロシ目、外面に回転糸切痕が確認できる。3は中国華南三彩陶器水注片である。

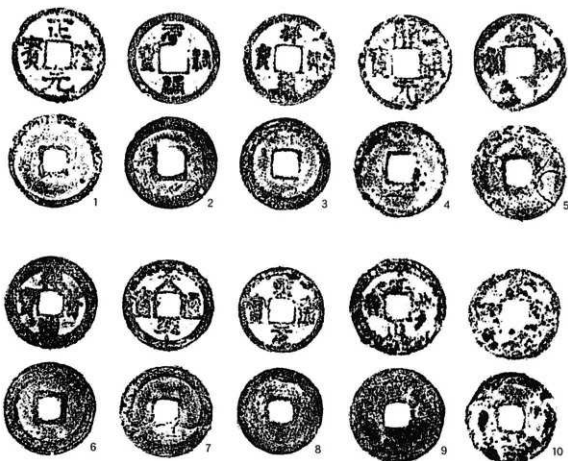
4・5はいずれも中国産白磁皿であるが、4は蓼笏底タイプであり、5は端反り皿である。6は中国産青花皿であり、端反り皿の内外面に青花がみられる。7・9は土師質土器鍋であり、7は外面に横



第49図 IV区 SD01 出土遺物実測図③ (1/3)



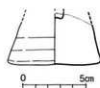
第50図 IV区 SD01 出土遺物実測図④ (1/3)



第51図 IV区 SD01 出土銭貨 (1/1)

方向のヘラケズリが施されている。9は内面にナデ、外面にタタキの後、ヘラケズリが施されている。8は滑石製石鍋の破片である。

第49図はほとんど中・上層から出土したものである。1～32は京都系土師器皿である。15～19は体部が立ち上がる径5 cm内外の京都系土師器小皿であり焼塩壺の蓋を転用したものである。17には底部に小さな穿孔がみられる。20～22は径5 cm内外の土師質土器小皿の体部両側を内に押し込んで成形した耳皿である。33～51は在地系土師質土器皿であり、33・34のような口径3～



第52図 IV区 SD02-2 出土遺物実測図 (1/3)

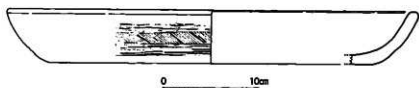
第2節 遺構と遺物

5cmの小皿もみられる。そのほとんどすべての内面に強いロクロ痕を残している。また、39・48～51の底部には回転糸切り後に板状圧痕が認められる。

第50図はSD01出土一括資料である。1～5は京都系土師器皿であり、いずれもその形態から埴地埴年1期に属するものである。9は体部が立ち上がる径5cmの京都系土師器小皿であり埴地埴年の蓋を転用したものである。6～8・10・11は在地系土師質土器皿であり、すべての内面に強いロクロ痕を



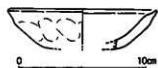
第53図 IV区 SD03 出土遺物実測図① (1/3)



第54図 IV区 SD03 出土遺物実測図② (1/4)

残している。12は焼締陶器製の厨部の破片である。

第51図はいずれも銅銭である。1は「正隆元寶」(1157年初鋳)、2は「元祐通寶」(1086年初鋳)、3・6は「祥符通寶」(1009年初鋳)、4は「開元通寶」(621年初鋳)、7は「太平通寶」(976年初鋳)、8は「熙寧元寶」(1068年初鋳)、9は「元豐通寶」(1078年初鋳)、5・10は銭種不明である。



第55図 IV区 SD04 出土遺物実測図 (1/3)

SD02-1・02-2・03 (第8・9図)

道路遺構(SF47)南側側溝は、数段階の側溝が確認できている。いずれも同じW-10°-Nの方向に走る。最も古いものとして、まず、SD02-1が先行し、幅約56cm、最深36cmを測り、長さ約5.8m確認できている。これに続き、SD02-2が先行し、幅約60～80cm、最深52cmを測り、長さ約3m確認できている。次いで、SD02の側溝を切り、新しい側溝としてSD03が営まれる。SD03はIV調査区を横切り、一部、SD02としてI調査区まで延びる。SD03は幅20～70cm、最深約30cmを測るが、西壁断面からSD03が道路遺構(SF47)に伴う時期とSD03が埋没し、南側側溝を伴わない道路整地の段階が存在することが確認できた。出土遺物に関しては、SD02-1から少量の破片が出土しているのみで、図化しえなかった。

SD02-2 出土遺物 (第52図)

土製燗台 第52図は底径7.2cmを測る土製燗台である。上部が欠損しているが、中央に円形の穿孔がみえる。

SD03 出土遺物 (第53・54図)

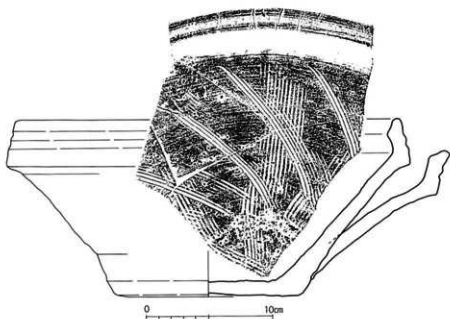
第53図は径10cmを測る京都系土師器杯である。器壁が厚く、埴地埴年3期に属するものである。第54図は土師質土器鉢である。内面はナデが施され、外面にはタテ方向の後、横方向のハケがみられる。口径84.8cmを測り大振りだが、器高11cmと、非常に浅い。

SD04 (第10図)

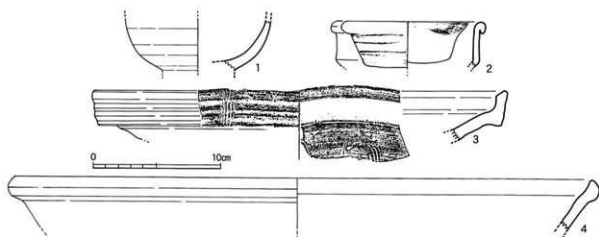
調査区北側においてW-8°～9°-Nの方向に走る溝である。幅40～70cm、深さ10～29cmを測り、西端は消滅し、東端は主軸140cm、横幅80cm、深さ35cmを測る楕円形土坑であるSK43と接するが、これとの切り合い関係は確認できず、同時併存の可能性が高い。埋土は現在の水田に伴う床土(にぶい黄褐色土)と同じであり、近世以降、水田耕作に伴う溝であると考えられ、同じ埋土を持つSD05・SD06・SD07・SD08と関連を持つ遺構である。

SD04 出土遺物 (第55図)

第55図は径11.6cmを測る京都系土師器杯である。器壁が厚く、深い形態をもち埴地埴年3期に属



第56図 IV区 SD05 出土遺物実測図 (1/3)

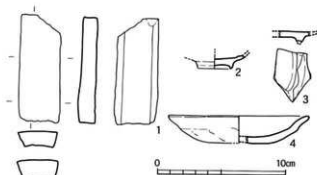


第57図 IV区 SD06 出土遺物実測図 (1/3)

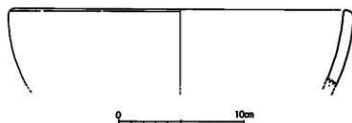
するものである。このほかにも遺物は出土しているが、図化しうる大きさではなかった。

SD05 (第10図)

調査区中央西側に検出されているW-6°~7°-Nの方向に走る溝である。幅36~52cm、深さ15~18cmを測り、埋土は中世の遺構面を覆う包含層である4層(褐色土)と同じであり、細かい焼土粒をわずかに含んでいる。西端は調査区外に延び、東端はSD08に切られているが、SD05がこの位置で終息するのと、SD08もこの位置で終息するため、両者は相互に関連する可能性が高いものと思



第58図 IV区 SD07 出土遺物実測図 (1/3)



第59図 N区 SD06 出土遺物実測図 (1/3)

える。

SD05 出土遺物 (第56図)

第56図は備前系陶器播鉢である。放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、また、見込みにもスリメを入れている。乗岡幅年近世1期b期に帰属するものと考えられる。

SD06 (第10図)

調査区中央西側に検出されているW-5~6°-Nの方向に走る溝である。幅40~64cm、深さ12~21cmを測り、埋土は現在の水田に伴う床土(にぶい黄橙色土)と同じである。西端は調査区外に延び、東端は明確な遺構プランが確認できないが、SD08と接する可能性が高いものと思える。出土遺物は16世紀に属するものもみられるが、近世陶磁器も出土しており、近世の所産であることがわかる。

SD06 出土遺物 (第57図)

第57図1は京焼風陶器碗であり、産地は不明である。2は陶器片であり、器種産地とも不明である。3は備前系陶器播鉢である。口縁帯外面に縦方向のスリメが1単位みられる。口縁帯の特徴から乗岡幅年中世6期に帰属するものと考えられる。4は瓦質土器鍋であり、外面にケズリがみられる。

SD07 (第9図)

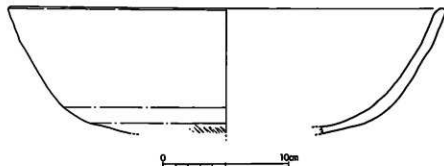
調査区南端西側に検出されているW-3~4°-Nの方向に走る溝である。幅60~80cm、深さ7~19cmを測り、埋土は現在の水田に伴う床土(にぶい黄橙色土)と同じである。西端は調査区外に延び、東端はSD08と接して終息しているため、この両者は同時併存であるものと考えられる。

SD07 出土遺物 (第58図)

1は結晶片岩製の砥石であり、表面および両側面に研磨痕が確認できる。2は白磁小杯であり、見込み部の軸を蛇の目状に斜め取っている。3は黄軸磁器片であり、産地は不明である。4は京都系土師器皿であり、その特徴から塩田幅年2期に属するものである。

SD08 (第10図)

調査区中央南側に検出されているN-3~4°-Eの方向に走る溝である。幅46~90cm、深さ5~11cmを測り、埋土は現在の水田に伴う床土(にぶい黄橙色土)と同じであり、SD06・07と同時併存で



第60図 N区 SD11 出土遺物実測図 (1/3)

あるものと考えられる。南端は調査区外に延び、北端はSD05と接する位置で終息する。

SD08 出土遺物 (第59図)

第59図は復元口径26cmを測る瓦質土器鉢であり、内外面にナデが施されている。

SD09 (第10図)

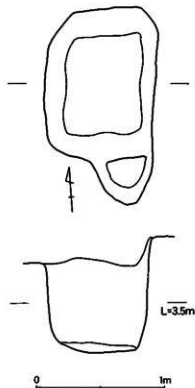
調査区中央南側に検出されているN-4°-Eの方向に走る溝である。幅46~60cm、最大深10cmを測り、埋土は現在の水田に伴う床土（にぶい黄褐色土）と同じである。SD04~08と同時併存であるものと考えられる。南端は調査区外に延び、北端はSD08に近い位置で終息する。出土遺物は細かく、同化しうる大きさのものはみられなかった。

SD10 (第10図)

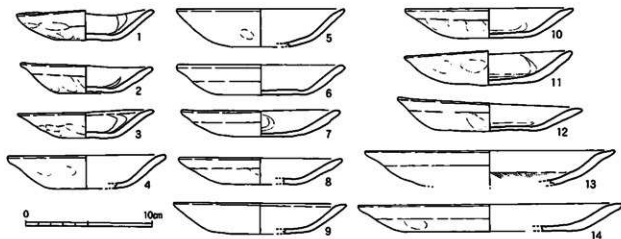
調査区中央北側に両者接して検出されているN-9°-Eの方向に走る溝であり、SD11と隣接して走る。幅20~40cm、最大深5cmを測り、埋土は現在の水田に伴う床土（にぶい黄褐色土）と同じである。SD04~09と同時併存であるものと考えられる。両端は浅くなり消えており、SK44により切られている。出土遺物は少なく、同化しうるものはなかった。

SD11 (第10図)

調査区中央北側に両者接して検出されているN-7°-Eの



第61図 IV区 SK12 実測図 (1/30)



第62図 IV区 SK12 出土遺物実測図 (1/3)

方向に走る溝であり、SD10と隣接して走る。幅20~40cm、最大深5cmを測り、埋土は現在の水田に伴う床土（にぶい黄褐色土）と同じである。SD04~09と同時併存であるものと考えられる。両端は浅くなり消えており、SK44により切られている。出土遺物は少なく、同化しうる大きさのものは1点確認できたのみである。

SD11 出土遺物 (第60図)

第60図は土師質土器鍋である。内面にはナデが施され、外面の調整は粗く、ケズリや底部には粗い

ハケ状の痕跡がみえる。

b. 土坑

SK12 (第61図)

最下面において確認された遺構であり、調査区中央においてSD01の南側に同時期の遺構と考えられるSK13をはじめとした4基の土坑と並んでSD01に接し位置する。長さ135cm、幅85cm、深さ90cmを測る長方形土坑である。

SK12 出土遺物 (第62図)

第62図1～14はいずれも京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年1期に属するものである。その口径も10.6～20.2cmと様々であるが、12～13cm程度のものが最も多い。

SK13 (第63図)

最下面において確認された遺構であり、調査区中央においてSD01の南側に同時期の遺構と考えられるSK12をはじめとした4基の土坑と並んでSD01に接し位置する。長さ180cm、幅145cm、深さ160cmを測る隅丸長方形土坑である。中層の埴土は黄橙色砂質土のであり、一気に埋め戻した様相を持つ。下層には厚さ10～20cmの炭灰層が堆積しており、この炭灰層中から骨片が確認できたが、腐化及び採り上げに堪えられない大きさではなかった。

SK13 出土遺物 (第64図)

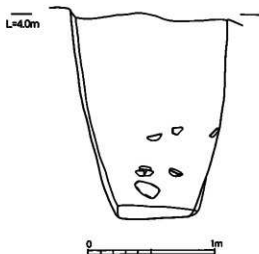
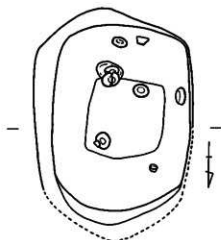
第64図1～4は体部が立ち上がる径5cm内外の京都系土師器小皿であり焼塩釜の蓋を転用したものである。5～23はいずれも京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年1期に属するものである。その口径も8.7～20.6cmと様々であるが、12～13cm程度のものが最も多い。中でも10・11・23は京都系土師器と在地系土師器の折衷形ともいえるものであり、底部に回転糸切り痕がみられ、平坦に仕上げられている。25は高台をもつ土師器鉢であり、口縁部を肥厚させている。また、調整は内外面丁寧なナデが施され、一部、指頭圧痕もみられる。26は鉄釘片であり、断面方形を呈する。27は両端が折損して用途が明らかでない鉄製品である。

SK14 (第65図)

調査区西南部のK26区に検出されている。検出面では不定形を呈していたが、遺構面を下げるに従い、長さ140cm、幅75cm、深さ30cmを測る明確な長方形プランの土坑が検出された。

SK14 出土遺物 (第66図)

第66図1は先端が折れ曲がった鉄製鎌であり、柄部には木質が付着している。2・3はいずれも所地が不明の瓦質土器皿であり、2は口径10cm、3は口径11cmをそれぞれ測る。両者とも高台をもち、口縁端をわずかに外反させ、2には内面にミガキが施されている。4は径7.5cmの京都系土師器皿であるが、取版として再利用されている。5・6・8は土師器土器皿であり、7は土師器土器杯である。6・8には回転糸切り後に板状圧痕があり、また、内面に強いロクロ痕を残す。



第63図 N区SK13実測図(1/30)

SK15 (第67図)

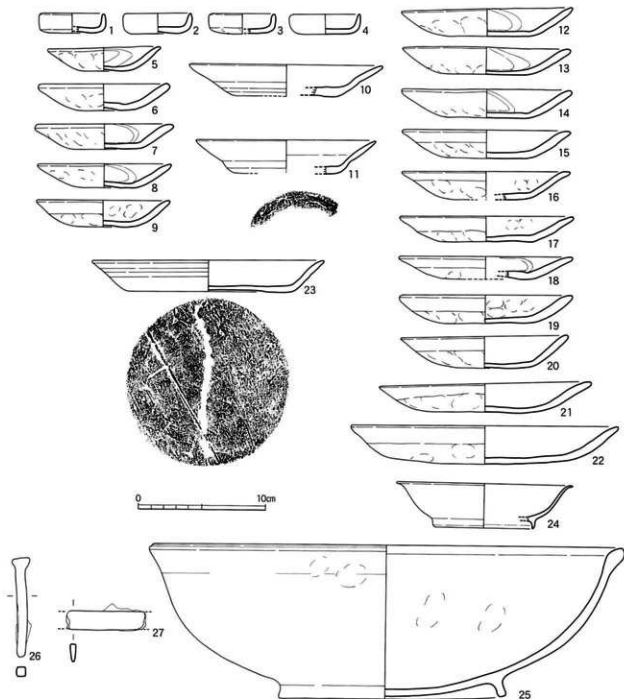
調査区中央西側の K26 区に位置し、長さ70cm、幅50cm、深さ35cmを測る長方形土坑である。土坑の北側隅上部において遺物が検出されている。

SK15 出土遺物 (第68図)

第68図 1～3 はいずれも京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年 1 期に属するものである。

SK16 (第69図)

調査区南東端の L26 区に位置し、I 区の SK05 に延びる廃棄土坑である。径1.65m、深さ約0.85mを測る円形土坑である。断面観察から I 区 SK06 埋没後に掘削されたことがわかるが、炭・焼土を多



第64図 IV区 SK13 出土遺物実測図 (1/3)

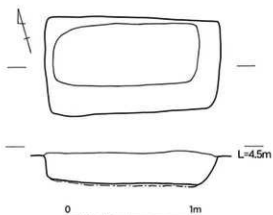
量に含む埋土中には、土器類とともに拳大から人頭大の川原石が上層から下層まで出土しており、様相はⅠ区 SK06 と類似しており、Ⅰ・Ⅳ区に広がる一連の廃棄土坑のひとつであることがわかる。

SK16 出土遺物 (第70図)

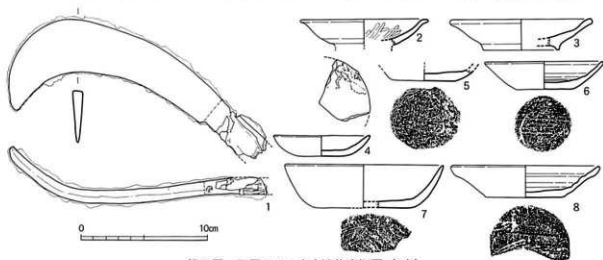
第70図1は中国景德鎮窯系青花碗であり、外面口縁部下の界線下に花紋を毛彫している。また内面には口縁部付近と底部付近にそれぞれ1条の界線がみられる。2は中国産青花碗である。外面底部付近に1条の界線、内面底部付近に2条の界線がそれぞれみられ、見込み部に蛇の目状軸刺ぎがみられる。

SK17 (第71図)

調査区中央北部の L25 区に位置し、長さ200cm、幅110cm、深さ75cmを測る不定型な長楕円形土坑

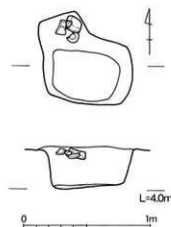


第65図 Ⅳ区 SK14 実測図 (1/30)

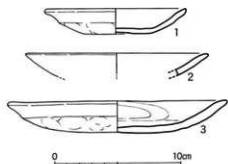


第66図 Ⅳ区 SK14 出土遺物実測図 (1/3)

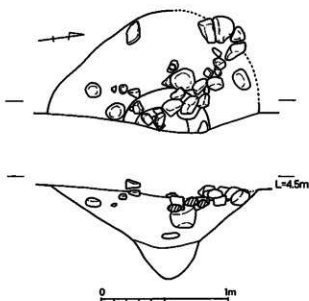
である。SD02-2を切り、SF47の道路硬化面に接しており、SE45・46と同時に存在と考えられるため、道路脇の井戸に付帯する施設の遺構であると考えられる。埋土中には拳大前後の礫が多く含まれてい



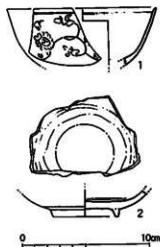
第67図 Ⅳ区 SK15 実測図 (1/30)



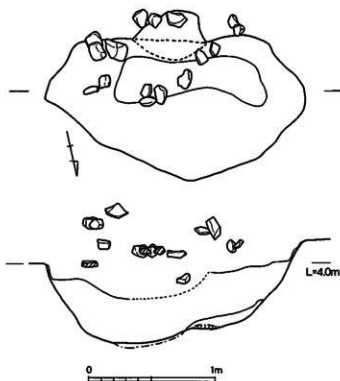
第68図 Ⅳ区 SK15 出土遺物実測図 (1/30)



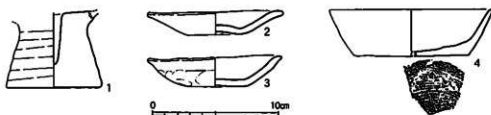
第69図 IV区 SK16 実測図 (1/30)



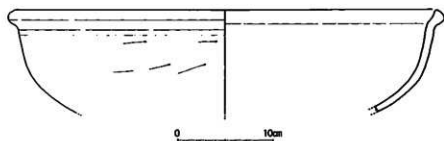
第70図 IV区 SK16 出土
遺物実測図 (1/3)



第71図 IV区 SK17 実測図 (1/30)



第72図 IV区 SK17 出土遺物実測図① (1/3)



第73図 IV区 SK17 出土遺物実測図② (1/4)

る。

SK17 出土遺物 (第72・73図)

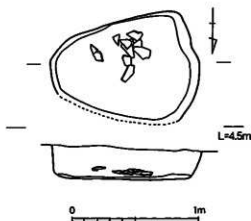
土製燗台

第72図1は底径7.4cmを測る土製燗台であり、上面中央を穿孔している。2・3は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地権年1～2期に属するものである。4は土師質土器坏であり、底部に回転糸切り痕がみられる。

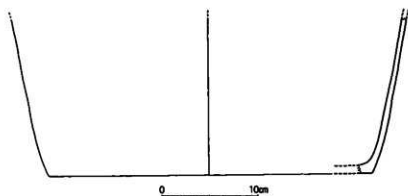
第73図は口径37.8cmを測る土師質土器鍋である。口縁を短く外反させ、外面にケズリを施している。

SK18 (第74図)

調査区中央付近のK25区において検出された長さ110cm、幅86cm、深さ22cmを測る楕円形を呈する土坑である。埋土中から瓦質土器火鉢の破片のみが出土している。



第74図 IV区 SK18 実測図 (1/30)



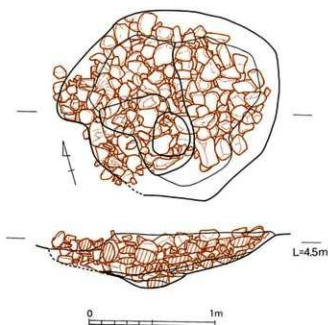
第75図 IV区 SK18 出土遺物実測図 (1/4)

SK18 出土遺物 (第75図)

第75図が底径33.4cmを測る瓦質土器火鉢であり、内外面にミガキが施されている。

SK19 (第76図)

調査区北側西端のK25区に検出されている。長さ173cm、幅150cm、深さ43cmを測る略円形の平面



第76図 IV区 SK19 実測図 (1/30)

形態をもつ。土坑内は土器類とともに拳大～人頭大の礫がみられるが、拳大～人頭大の礫によりほぼ火災処理土坑埋め尽くされている状態であった。被熱した礫も多く確認でき、火災処理土坑であったことがわかる。

SK19 出土遺物 (第77・78図)

第77図1・2は京都系土師器皿である。1は器壁がやや厚い特徴をもち、その特徴から埴地編年3期に属するものである。3は土錘である。4は中国漳州窯系青花皿であり、外面口縁部下および底部付近にそれぞれ界線が、また、内面に花紋がみられる。5・6は備前系陶器播鉢である。放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期b期に帰属するものと考えられる。7は瓦質土器火鉢の3足部の破片である。8は土師質土器鍋の口縁部片であり、外面にケズリがみられる。

第78図は安山岩製石臼の上臼であり、径31cmを測る。

SK20 (第79図)

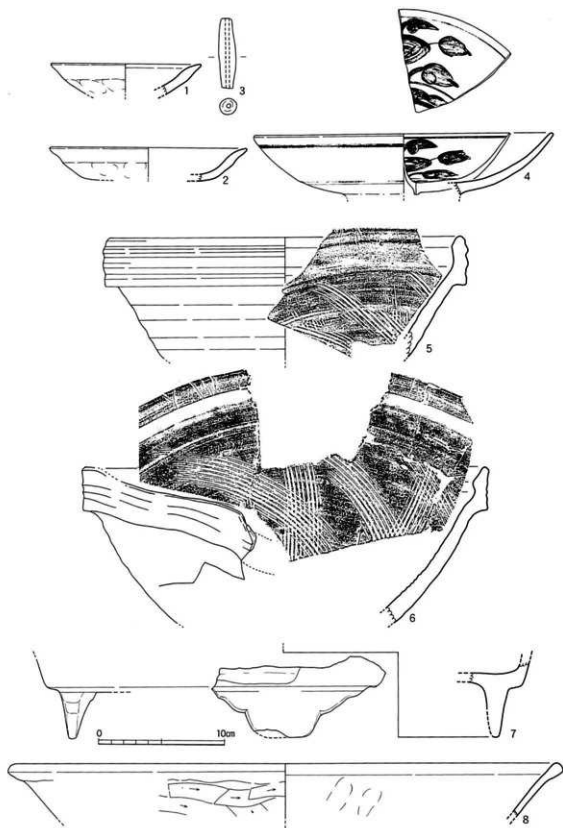
調査区中央北のK・L-25区間に位置し、SD04に切られている。長さ2m以上、幅1.2m、深さ30cmを測る不整形を呈する。埋土は炭・焼土が含まれており、土器類及び拳大～人頭大の礫が含まれる廃棄土坑であり、なかには被熱した礫も確認できる。土坑内はほぼ礫で埋め尽くされており、礫廃棄土坑の様相を呈する。

SK20 出土遺物 (第80図)

第80図1～9はいずれも京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年1～3期に属するものが混在している。特に、6～8は口縁下面に強いヨコナデを施している特徴をもつ。10は土師質土器皿の底部で回転糸切りにより、切り離されていることがわかる。11は直径6.5cm、厚さ1.5～2.5cmの軽石製円盤状石製品であり、中央が穿孔されているが、用途は明らかでない。

SK21 (第81図)

調査区北西側のK25区に検出されている。長さ164cm、幅154cm、深さ34cmを測る隅丸方形に近い形態をもつ。埋土は焼土が大量に含まれており、土器類及び礫も確認できるが、他の廃棄土坑と異な



第77図 IV区 SK19 出土遺物実測図① (1/3)

り、跡が少ない。

SK21 出土遺物 (第82図)

第82図1は京都系土師器皿であり、器壁が厚い特徴をもつ。2・4は朝鮮王朝産陶器碗であり、両者とも竹節高台をもつ。3は焼締陶器小壺であり、高台はヘラにより蛇の目状に削り出されている。

SK22 (第83図)

調査区北西側のL25区に検出されている。SE46 埋没後にSK22が廃棄土坑として営まれている。長さ197cm、幅120cm、深さ73cmを測る長楕円形の平面形態をもつ。土坑内は土器類とともに竈火～人頭大の跡が多くみられるが、被熱した跡も確認でき、火災処理土坑であったことがわかる。

SK22 出土遺物 (第84・85図)

第84図1は陶器碗と考えられるが、産地等は明らかでない。2は朝鮮王朝産陶器碗であり、見込みに砂目痕が残る。4・5・6はいずれも京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年2～3期に属するものである。7は褐釉陶器瓶の破片である。中国産か。8は瓦

を研磨し、円盤状に成形した土製品であるが、その用途は不明である。9・11は瓦質土器鉢である。9の内面は刷毛目のあとにナデ、外面は刷毛目のあとにナデがそれぞれ施されている。11には内外面ともミガキがみられる。10は土師質土器鍋であり、内面は横方向の刷毛目、外面底部は格子目タタキがみられる。なお、外面にはスガが付着している。内面は刷毛目。外面底部は格子目タタキ。12は鉄製刀子片であり、13・14はいずれも鉄製品であるが、その用途は明らかでない。15は鉄棒に笠状の部材が付くが、その用途は明らかでない。16は鉄釘、17は鉄製火箸である。

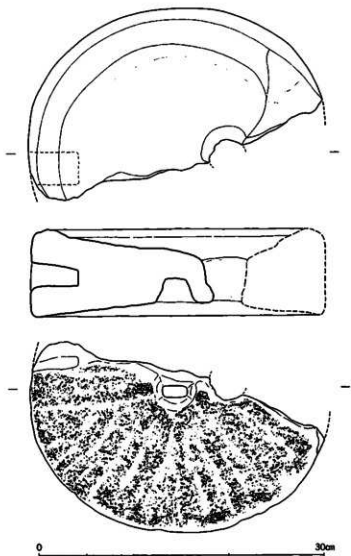
第85図は「景德元寶」(1004年初鋳)である。

SK23 (第86図)

調査区中央付近K・L-25区において検出された長さ136cm、幅116cm、深さ58cmを測る隅丸方形を呈する土坑である。埋土中に竈火の跡が含まれるほか、土器の細片がわずかに出土し、出土遺物から16世紀後葉に属することが考えられるが、円化しうる火ききの遺物は出土していない。

SK24 (第87図)

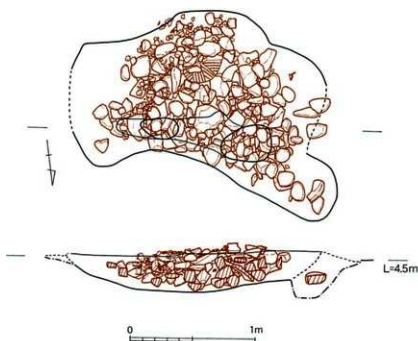
調査区北東側のL25区に検出されている。長さ143cm、幅130cm、深さ68cmを測る略円形の平面形態をもつ。土坑内は土器類とともに竈火の跡がみられる。



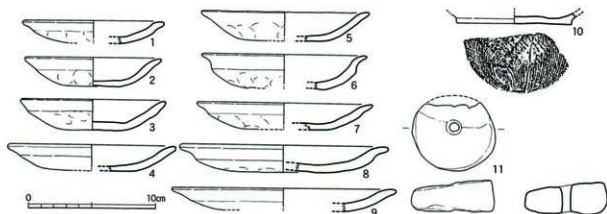
第78図 IV区 SK19 出土遺物実測図② (1/4)

朝鮮王朝産
陶器碗

朝鮮王朝産
陶器碗



第79図 IV区 SK20 実測図 (1/30)

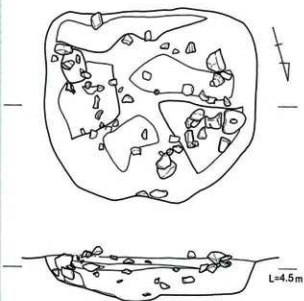


第80図 IV区 SK20 出土遺物実測図 (1/3)

SK24 出土遺物 (第88・89図)

第88図1は高台をもつ瓦器碗である。3は備前系陶器鉢である。2は土師質の土製品であり、器種・用途は不明である。調整はナデであり、内外の器面に黄褐～赤褐色の付着物が確認できる。4は土師質の土製品であり、その用途は明らかでない。器壁は1.6cmと厚く、成形・調整とも雑である。見込み部にあたる箇所を使用痕と考えられる線彫り状の引っ掻き痕が確認できる。5は備前系陶器鉢である。放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に属するものと考えられる。6は瓦質土器火鉢の底部片であり、1条の突帯を巡らす。

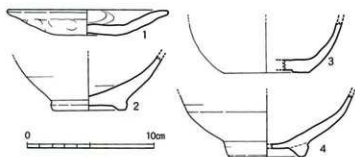
第89図1・2・3とも備前系陶器碗であり、1・2の口縁形態からみれば乗岡編年近世1期に位置付けられるものであろう。



第81図 IV区 SK21 実測図 (1/30)

SK25 出土遺物 (第91図)

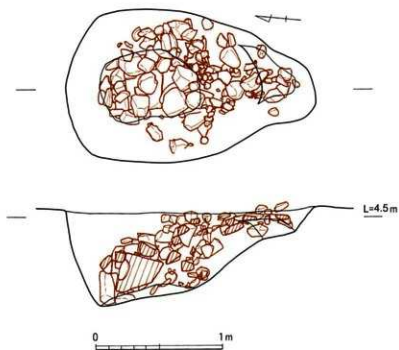
京都系土師器皿であり、口縁下につよいヨコナデがみられる特徴から塩地幅年2期に属することがわかる。



第82図 IV区 SK21 出土遺物実測図 (1/3)

SK25 (第90図)

調査区北東側のL25区に検出されている。長さ165cm、幅90cm、深さ20cmを測る不整形な隅丸方形の平面形態をもつ。土坑内は人頭大よりやや小さい礫がみられ、土器類は少なく、図化しうるものは1点であった。



第83図 IV区 SK22 実測図 (1/30)

SK26 (第92図)

調査区中央西側の K25 区に検出されている。長さ161cm、幅75cm、深さ26cmを測る不整長円形土坑である。埋土は炭・焼土が大量に含まれており、中央部のみさらに深く掘られており、ここには拳大～人頭大の礫がきわめて大量に廃棄されている。

SK26 出土遺物 (第93・94図)

第93図1～4はいずれも京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年1～2期に属するものが混在している。5はロクロ系の土師質土器皿であり、内面に強いロクロ痕を残す。6は径2.8cmの土製品である。ナデによる焼締陶器徳利調整されており、その用途は明らかでない。7は焼締陶器徳利首の破片である。

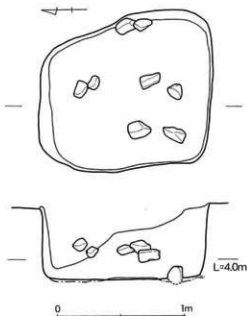
第93図は厚さ3.6cmを測る導であり、表面にナデ、裏面に刷毛目が施されている。

SK27 (第96図)

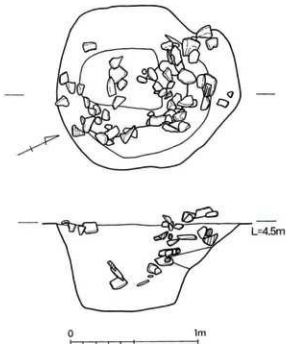
調査区中央西側の L-25・26 区に検出されている。不整形の大型土坑が重なり合いながら営まれて



第85図 IV区 SK22 出土
錢貨 (1/1)



第86図 IV区 SK23 実測図



第87図 IV区 SK24 実測図 (1/30)

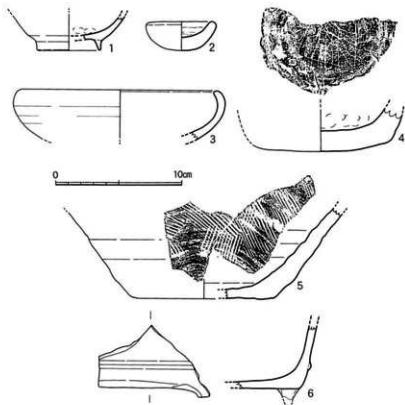
いる。一時に営まれていたものか、時期を違い掘り直され続けたものかは、明らかでないが、時期を違い掘り直され続けたものにしても、きわめて近接した時期に営まれたものであろうし、廃棄土坑としての性格もそれぞれが異なるものではないと考えられる。

埋土は炭・焼土が含まれており、拳大～人頭大の礫がきわめて大量に廃棄されている。中央部は下部に位置する SD01 の埋土と近似していたため、明確な床面は把握しきれなかった。

SK27 出土遺物 (第95・97～110図)

第95図1・2・4は中国産青花皿であり、1は端反り碗であり、外面に唐草紋、見込みに花紋を描いている。2は内外面に界線のみもつ。3は中国産五彩皿である。端反り碗の表裏面に赤・緑色の絵を描いている。5は中国産青花皿であり、萼筋底になるタイプであろうか。外面口縁部に二条の界線

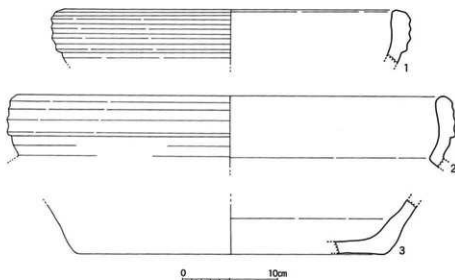
五彩皿



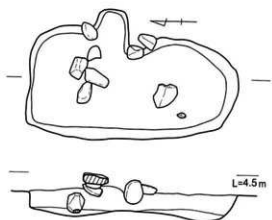
第88図 IV区 SK24 出土遺物実測図① (1/3)

に挟み、波濤紋が退化したと考えられる点列を描く。6は中国産青花碗であり、外面に界線がみえる。

7・8は中国産青花で小野分類E群碗である。9・11・12は中国龍泉窯系青磁碗であり、9は外面に細線を縦方向に描き、上端を剣頭形にまとめ蓮弁を意識している。12は底部片を円盤状にはつり、再利用している。10は中国龍泉窯系青磁瓶の口縁部である。13は中国産翡翠軸菊小皿である。14は中華南三彩水注。15～19は中国産白磁碗である。20は中国産白磁であり、菊花状の単位をもつ。21は中国産褐釉瓶であり、底部高台下に重ね焼き痕がみられる。



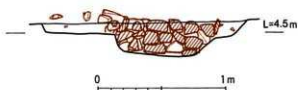
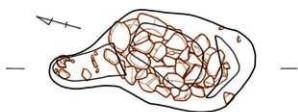
第89図 IV区 SK24 出土遺物実測図② (1/4)



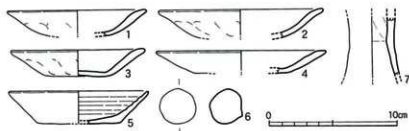
第90図 IV区 SK25 実測図 (1/30)



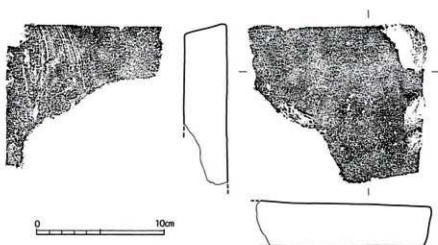
第91図 IV区 SK25 出土遺物
実測図 (1/3)



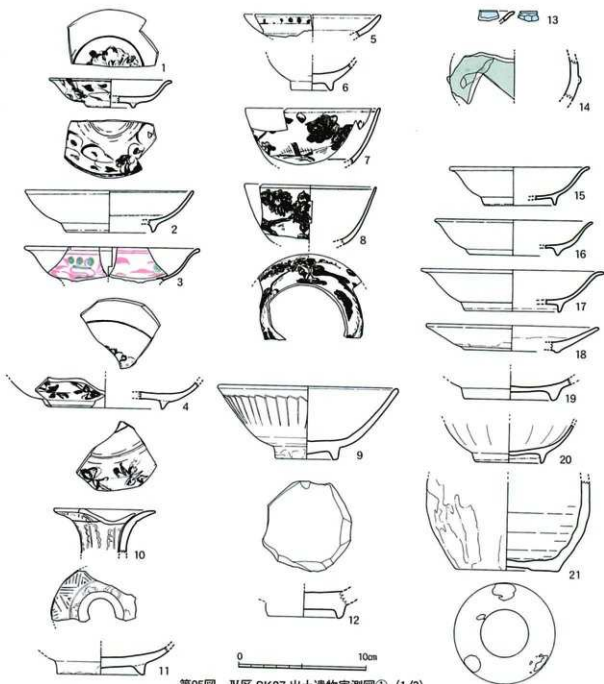
第92図 IV区 SK26 実測図 (1/30)



第93図 IV区 SK26 出土遺物実測図① (1/3)



第94図 IV区 SK26 出土遺物実測図② (1/3)



第95図 IV区 SK27 出土遺物実測図① (1/3)

耳皿

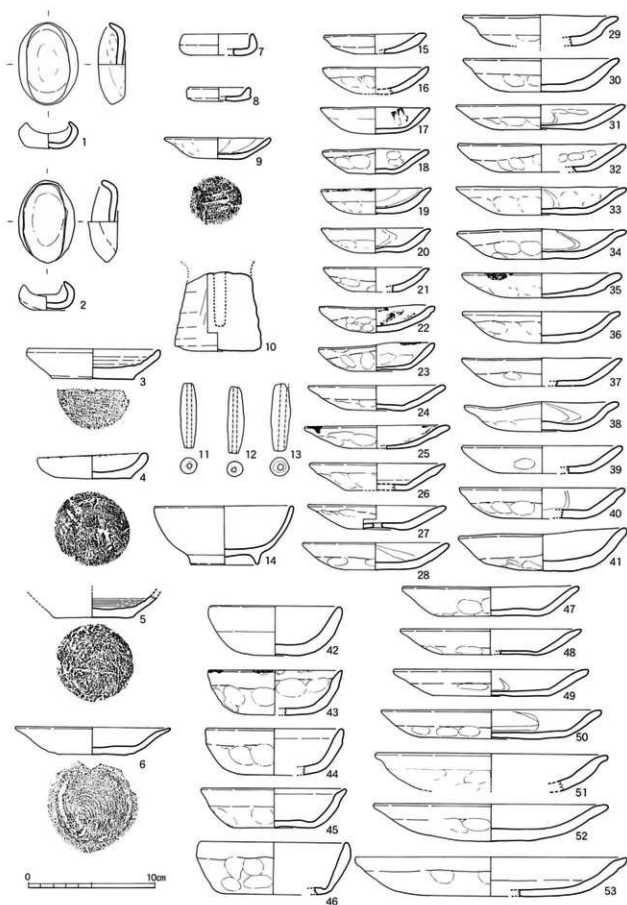
第97図1・2は径5 cm内外の京都系土師器小皿の体部両側を内に押し込んで成形した耳皿である。

7・8は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。3・4・5は在地系土師質土器皿であり、3・5の内面には強い口クロ痕を残している。6も在地系土師質土器皿であるが、体部から口縁部にかけての成形は京都系土師器皿を模倣しており、折衷形といえるものである。15~41、47~53は京都系土師器皿あり、その特徴から塩地編年1~3期のものが混在することがわかる。17・19・22・23・25・35のように煤が確認でき、灯明皿として使用されていたものもみられる。27には底部中央に穿孔がみられる。9も京都系土師器皿の範疇におさめてよいであろうが、底部に板状圧痕が確認できる。10は土製燭台であり、上部が欠損しているが、中央部に穿孔がみられる。11~13は土鍾である。14は高台をもつ土師質土器碗である。42~46は京都系土師器坏である。43は灯明皿として使用されていたものか、口縁部に煤が付着する。

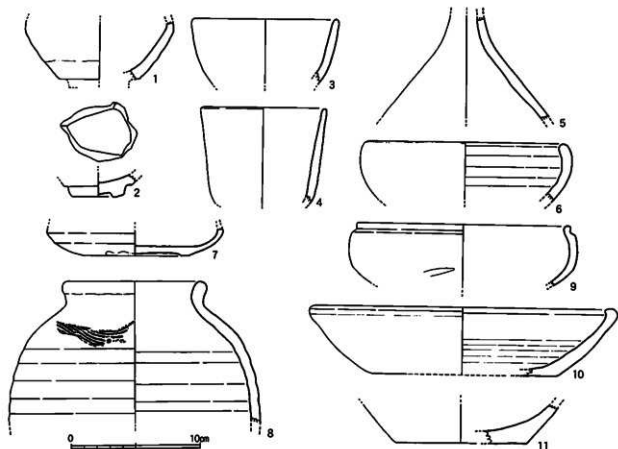
灯明皿



第96図 IV区 SK27 実測図 (1/30)



第97図 IV区 SK27 出土遺物実測図② (1/3)



第98図 IV区 SK27 出土遺物実測図③ (1/3)

天目碗 第98図1・2・3は瀬戸美濃産陶器天目碗である。2は底部片を円盤状にはつり、再利用している。
朝鮮半島産焼 4は須恵器碗であり、古代のものであろう。5は朝鮮半島産焼陶器徳利である。6は備前系統焼陶
器小鉢である。7は瀬戸美濃系陶器皿である。8は備前系統焼陶器壺であり、肩部に櫛指波状紋がみえる。9は焼陶器鉢である。10は備前系統焼陶器平鉢である。11は備前系統焼陶器鉢の底部片である。

第99図1・2・3は備前系統焼陶器壺である。1には肩部に櫛指波状紋がみえる。4は焼陶器小壺である。5は焼陶器の注口部である。6は朝鮮半島産焼陶器徳利である。7は備前系統焼陶器徳利形甕である。8・9・10・11は焼陶器鉢であり、中国南部地域産である可能性が高い。9・11は断面楕円形や長方形の縁帯口縁をもつ。

第100図はいずれも備前系統焼陶器楕鉢である。3・12のみが放射状スリメのみであるが、その他は放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗間編年近世1期に帰属するものと考えられる。

備前系統焼陶 第101図はいずれも備前系統焼陶器甕である。3は胴部に1条の突帯と輪状の耳がみられ、水屋甕
器水屋甕 と考えられる。2には底部に格子状の刷毛目がみられる。

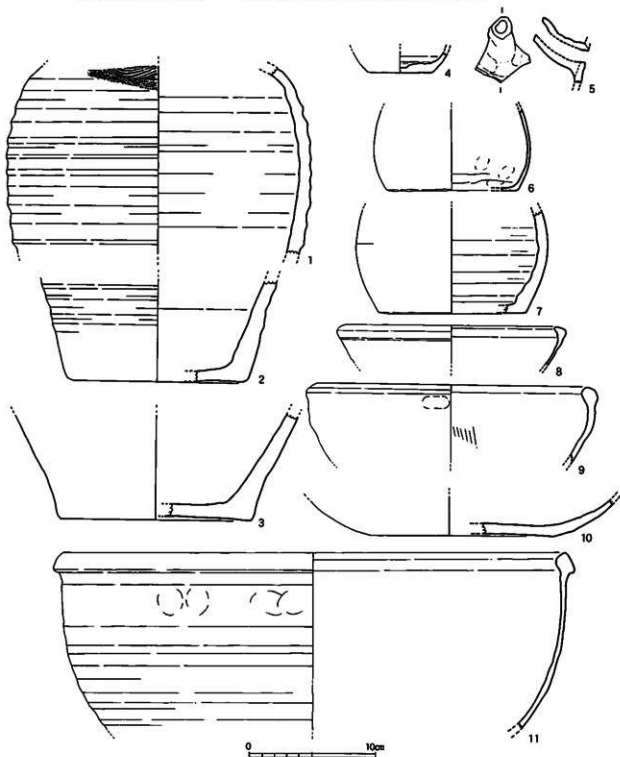
第102図1・2・3は瓦質火鉢であり、いずれも口縁をL字状に外方に突出させている。外面には菊花文や竹筵文のスタンプがみられる。4～9は瓦質火鉢であり、口縁をL字状に外方に突出させているもの(5)と、口縁付近に2条の小さい突帯を巡らし、その突帯間に巴文・雷文のスタンプがみられるもの(4, 7～9)に分けられる。10は瓦質風炉である。11～16は瓦質および土師質の鉢である。17～20は瓦質火鉢の底部である。

第103図1は瓦質土器皿で脚をもつ。内面口縁下に雷文帯とその内側に3点1単位の梅花文のスタンプがみられる。2は土師質土器鍋であり、外面には横方向にヘラケズリがみえる。3・4は瓦質土器釜である。5は瓦質土器香炉であり、外面に凹線が連続する。6・7・8が瓦質土器鉢である。

土製鋳型

第104図は土製鋳型であり、上下部が欠損している。長方形の製品の鋳型であるが、その製品が何であるかは明らかでない。中央に穿孔がみられる。

第105図は取瓶であり、1・2は京都系土師器皿を再利用したものである。



第99図 IV区 SK27 出土遺物実測図④ (1/3)

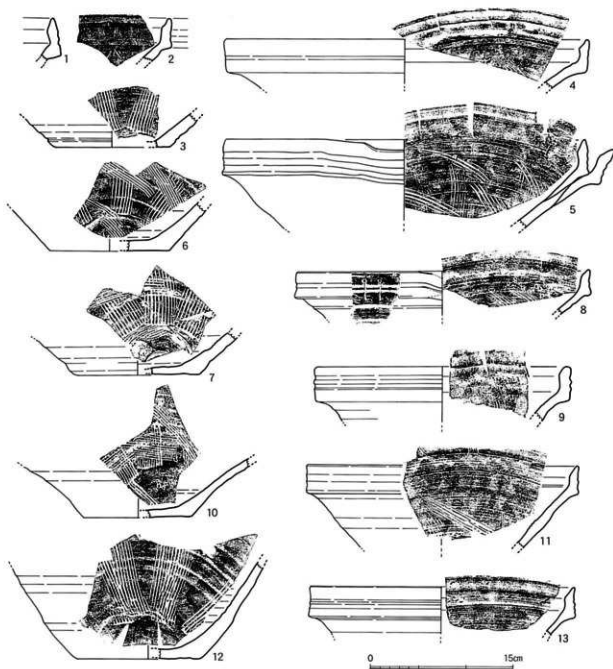
第2節 遺構と遺物

均等唐草文 第106図は平瓦である。4は中心飾りに花文がみられ、両側に均等唐草文を配する軒平瓦である。側縁は幅が広い。

第107図1・3は磚である。1の裏面にはナナメ方向の刷毛目がみえる。2・4・5・6はいずれも丸瓦の玉縁部であり、内面に布目痕がみえる。4・5には目釘穴がみえる。

第108図3は頁岩製の砥石である。1は茶白の下白の皿部片であり、8は茶白の下白で、4は上白であり、両者とも安山岩製で心棒孔がみられるが、4には引手孔が残る。5・6・7は石白の上白片である。6が凝灰岩である以外は、いずれも安山岩製である。

第109図1は環状鉄製品であり、断面円形である。2は鋸状の鉄製品である。3・4は鉄釘であろ



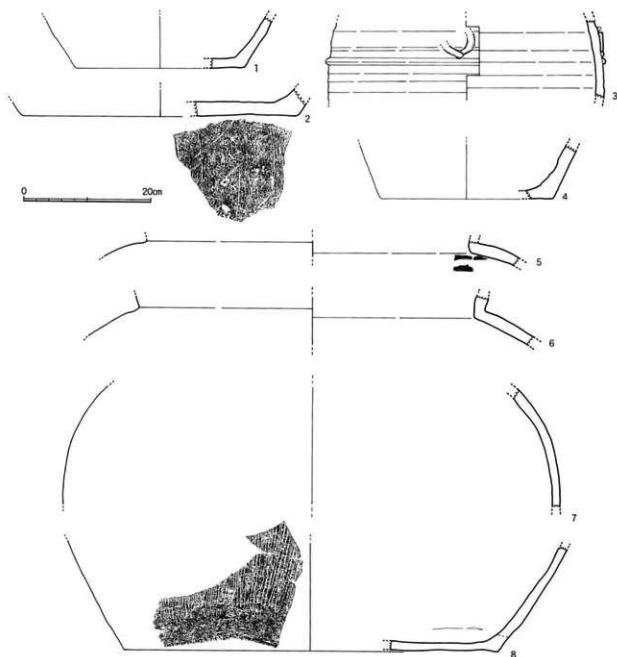
第100図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑤ (1/4)

うか。5は棒状の鉄製品の頭を扁平な円形に加工し、中央を穿孔しているが、その用途は明らかでない。6は断面U字形の青銅製品であり、用途は明らかでないが、U字形の内側に木版を差し込み使用したものか。7は薄い青銅版の先端を細くしながら曲げているものだが、その用途は明らかでない。

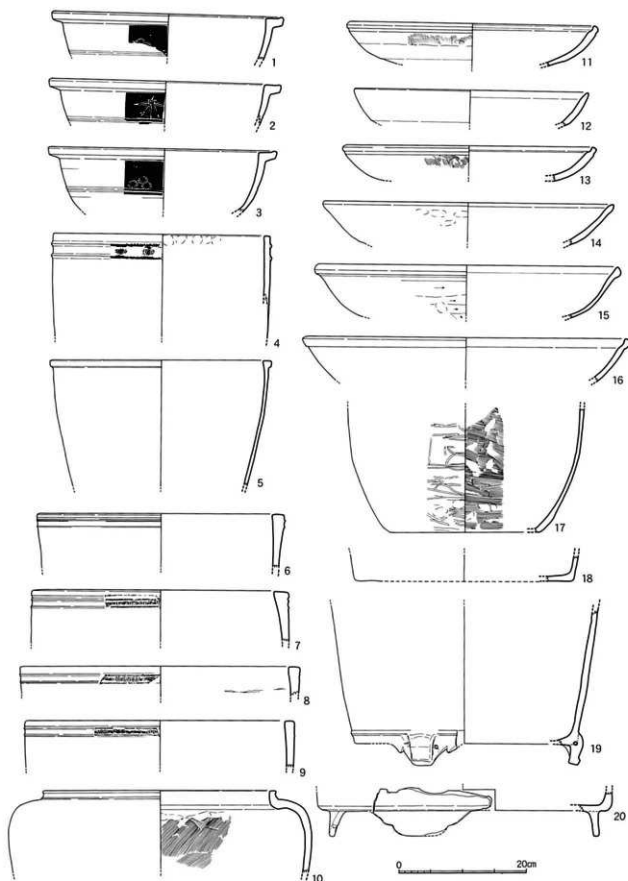
第110図は銅銭である。1は「正隆元寶」(1157年初鑄)、2は「治平元寶」(1064年初鑄)、3は「皇宋通寶」(1038年初鑄)、4・5は銭種不明である。

SK28 (第111図)

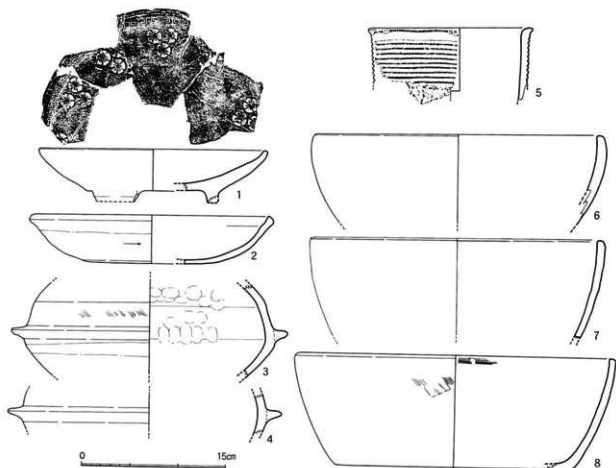
調査区中央西側のK25区に検出されており、SD05に切られている。長さ130cm、幅120cm、深さ45cmを測る不整形円形土坑である。埋土は炭・焼土がきわめて大量に含まれており、土器類及び拳大～人頭大の礫が含まれる廃棄土坑である。



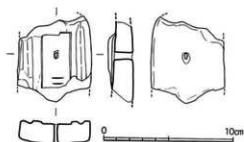
第101図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑥ (1/6)



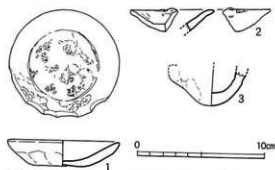
第102図 N区 SK27 出土遺物実測図⑦ (1/6)



第103図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑧ (1/4)



第104図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑨ (1/3)

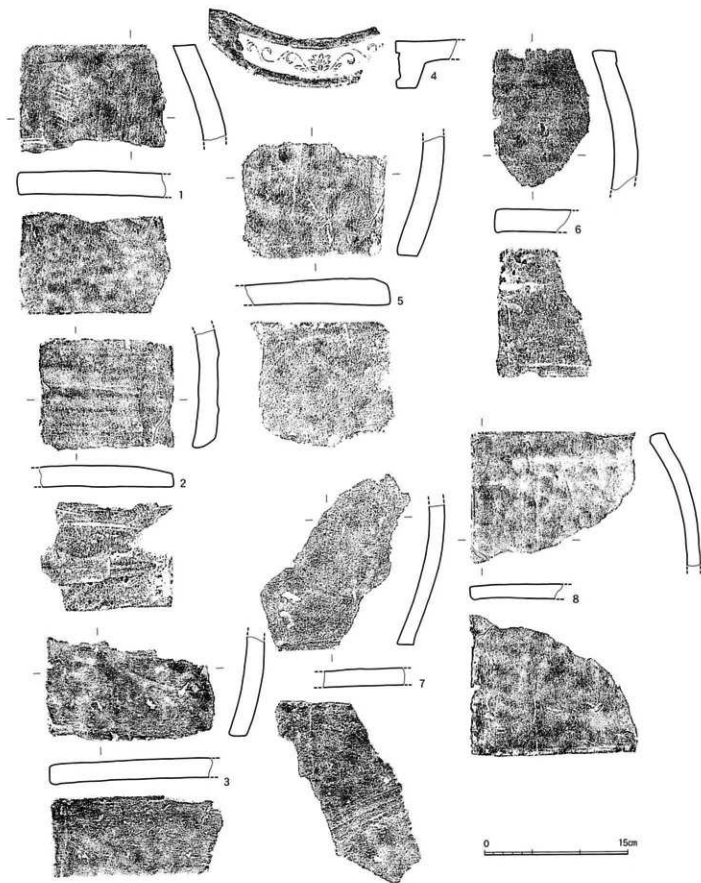


第105図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑩ (1/3)

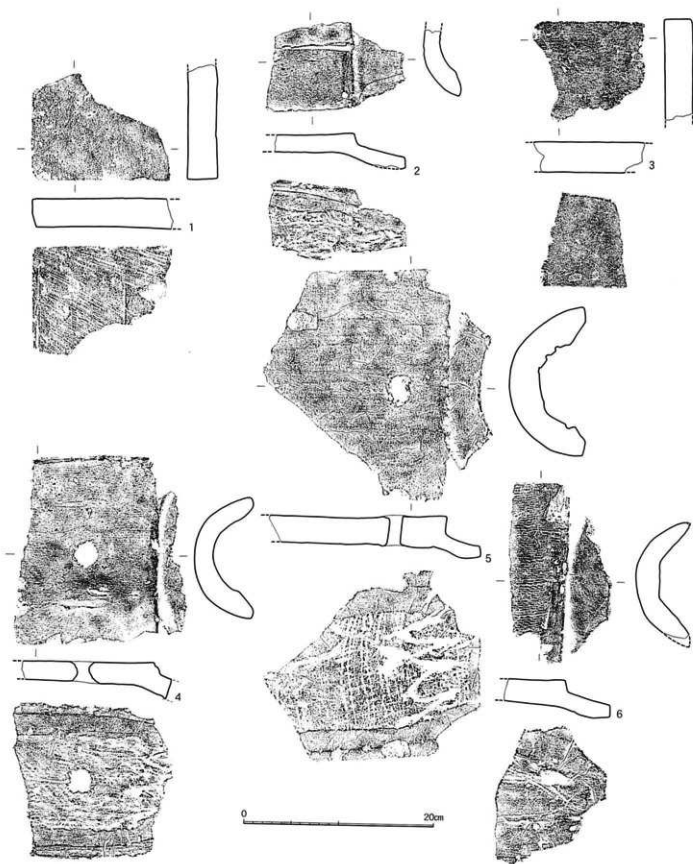
SK28 出土遺物 (第112図)

土製燭台

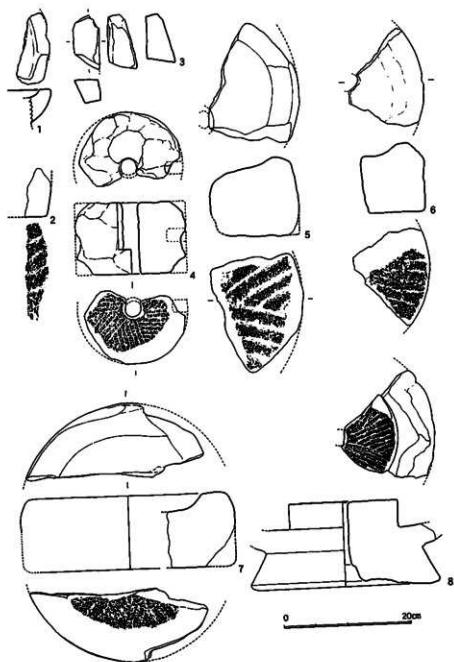
第112図1・2は土製燭台の破片であろう。円柱形の土柱の上下を皿状に成形したものであり、上面中央に穿孔がみられる。同一個体であるかは明らかでないが、両者の間には円柱形の土柱部が存在していたと考えられる。3は土師質土器小皿であり、4は京都系土師器皿である。5は瓦質揃鉢である。6は須恵器甕である。古代のものであろう。7は備前系陶器揃鉢である。放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年近世1期に帰属するものと考えられる。8は中実の円柱形土製品であり、上下が欠損している。土製鍋の脚であろう。9は瓦質土器火鉢であり、外面口縁付近に3条の小さい突線がみえる。



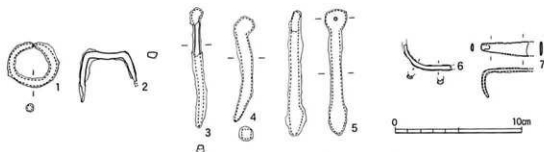
第106図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑪ (1/4)



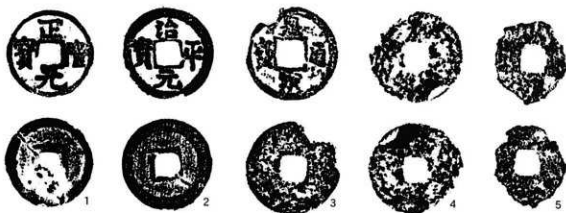
第107図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑫ (1/4)



第108図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑬ (1/6)



第109図 IV区 SK27 出土遺物実測図⑭ (1/3)



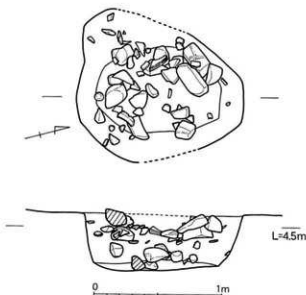
第110図 IV区 SK27 出土銭貨 (1/1)

SK29 (第113図)

調査区中央南側の K-25・26 区に検出されている。数基の土坑が重なり合っているようにも見えるが、ここでは不整形土坑としておく。埋土は炭・焼土が含まれており、土器類及び拳大～人頭大の礫が含まれる廃棄土坑であり、なかには被熱した礫も確認できる。土坑内はほぼ礫で埋め尽くされており、礫廃棄土坑の様相を呈する。

SK29 出土遺物 (第114・115図)

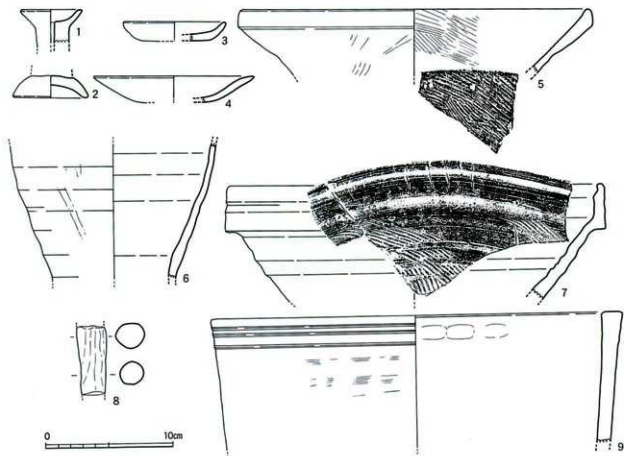
第114図 1～11は京都系土師器皿あり、その特徴から埴地編年 1～2 期のものが混在することがわかる。12は径 5 cm 内外の京都系土師器小皿の体部両側を内に押し込



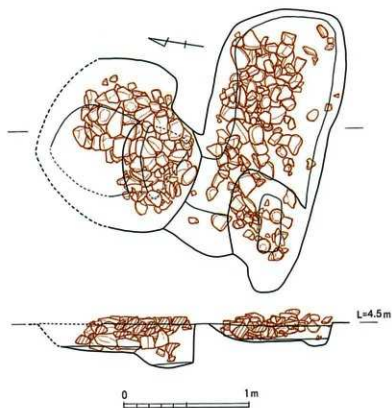
第111図 IV区 SK28 実測図 (1/30)

んで成形した耳皿である。13は瓦器碗であり、断面三角形の高台が付く。14は焼締陶器長胴壺であり、外面に強い口ロ口痕を残す。15は備前系焼締陶器插鉢であり、放射状スリメのみ確認できる。16は瓦質土器茶釜である。17は中央を円形に大きく穿孔した凝灰岩質安山岩製の環状石製品であるが、用途は明らかでない。

第115図 1は瓦質土器浅鉢、2・3は瓦質土器火鉢である。2は外面口縁下に2本の小さい突帯間に雷文のスタンプがみられる。



第112図 IV区 SK28 出土遺物実測図 (1/3)



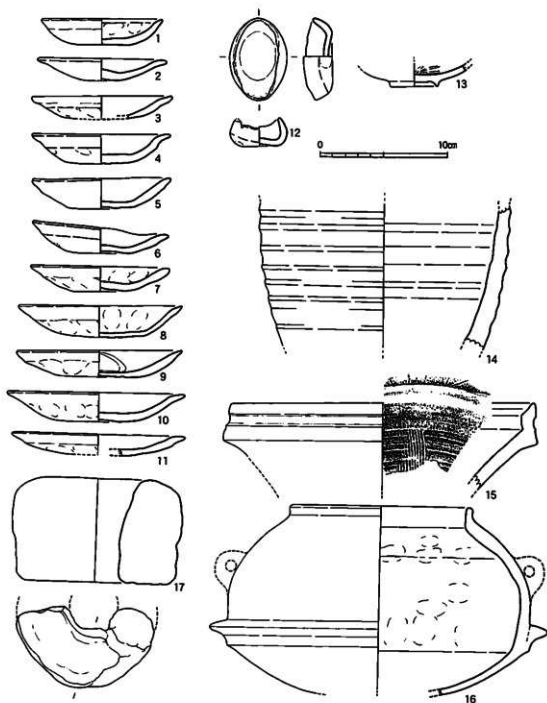
第113図 IV区 SK29 実測図 (1/30)

SK30 (第116図)

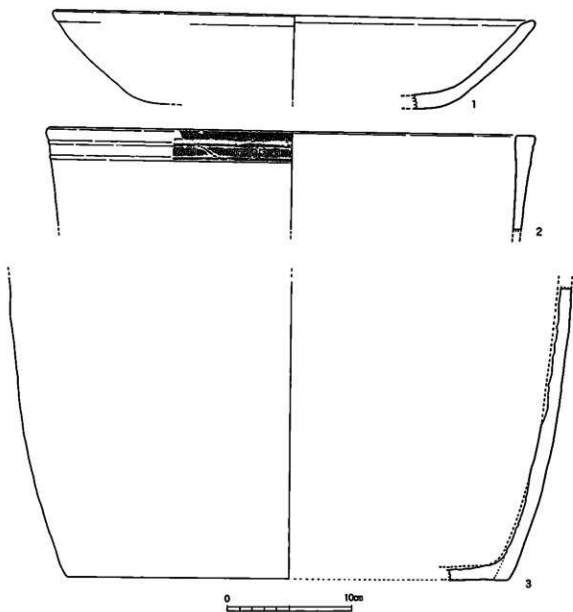
調査区中央西端のK26区に検出されている。西側プランは明確でないが、長さ100cm以上、幅90cm、深さ40cmを測る楕円形の平面形をもつ。廃棄土坑として営まれており、土坑内には西南側を中心に、土器類とともに竈火～人頭火の跡が多くみられる。

SK30 出土遺物 (第117図)

第117図1・2は瓦質土器鉢であり、2の底部は回転糸切り後に刷毛目が施されている。3は京都系土師器皿であり、灯明皿として使用されたためか、口縁内外に煤が付着する。



第114 IV区 SK29 出土遺物実測図① (1/3)



第115図 IV区 SK29 出土遺物実測図② (1/3)

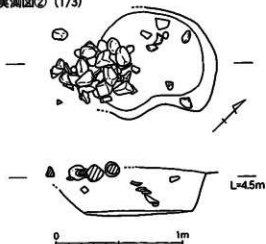
SK31 (第118図)

調査区中央西側の K26 区に検出されており、北側を SD06 に切られている。長さ165cm、幅110cm、深さ43cmを測る隅丸長方形を呈する土坑である。埋土は炭・焼土塊がきわめて大量に含まれており、土器類及び拳火〜人頭火の礫も含まれているが、これらも被熱している。

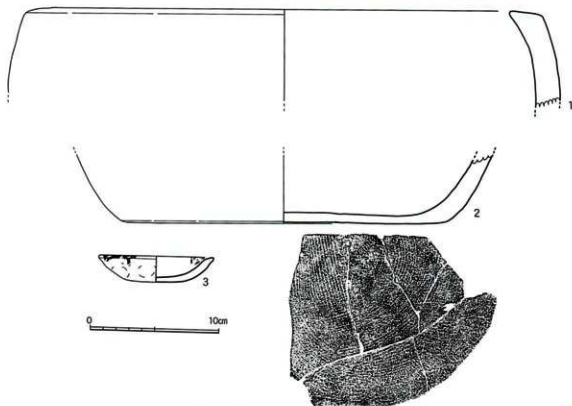
SK31 出土遺物 (第119・120図)

中国涼州窯系 青花小杯

第118図1は京都系土師器皿である。2は中國涼州窯系青花小杯である。3は焼締陶器小皿である。4は瀬戸美濃系陶器天目碗である。5

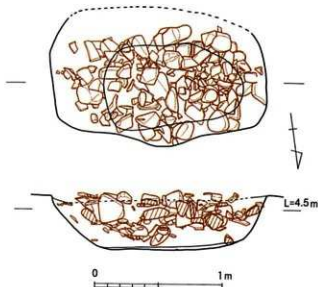


第116図 IV区 SK30 実測図 (1/30)



第117図 IV区 SK30 出土遺物実測図 (1/3)

は中国景德鎮窯系青花碗であり、内外面に染付がみえる。6は中国産白磁皿であるが、外底に染付がみえる。7は中国産白磁皿であるが、取瓶として再利用されており、内面に付着物がみられる。8は瓦質土器蓋であり、復元径15cmを測る。折損部に並行して2箇所、補修孔がみられ、折損後に継いでいたことがうかがえる。器面はナデにより調整されているが、表裏面に煤が付着する。9は軸部の上下を欠損した笠形鉄製品であり、軸部に木質痕が残るが、その用途は明らかでない。10は砂岩製砥石である。



第118図 IV区 SK31 実測図 (1/30)

第120図 1・5・6は備前系統縮陶器插鉢であり、5は放射状スリメのみであるが、1・6は放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡編年中世6期から近世1期に帰属するものが混在することがわかる。2は瓦質土器鉢であり、3・4は瓦質土器火鉢である。3には脚が

付く。4には口縁下に2本の細い突帯に挟まれ、双頭燕手流雲文のスタンプがみえる。7・8は土師質土器鍋である。

SK32 (第121図)

調査区中央のL26区に検出されており、SD06に切られている。長さ120cm、幅55cm、深さ20cmを測る隅丸長方形の土坑の南端を深さ55cmの深さで掘り下げたものである。出土遺物が乏しいが、16世紀後葉のものであることがわかる。

SK32 出土遺物 (第122図)

第122図は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年2期のものであることがわかる。

SK33 (第123図)

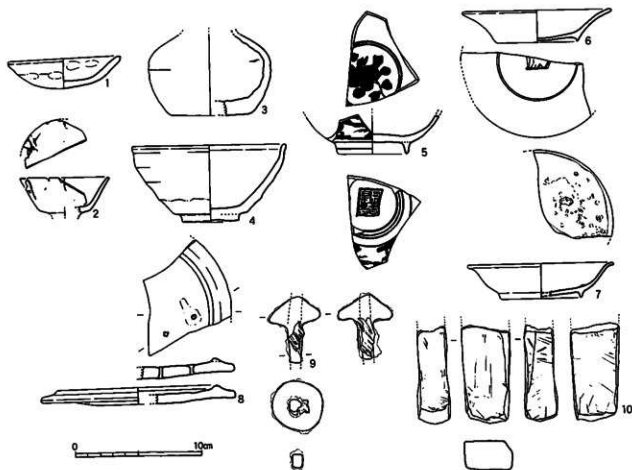
調査区南側西端のK26区に検出されている。長さ107cm、幅51cm、深さ13cmを測る長楕円形の平面形態をもつ。土坑内には土器類とともに準大よりやや大きい礫が確認できた。

SK33 出土遺物 (第124図)

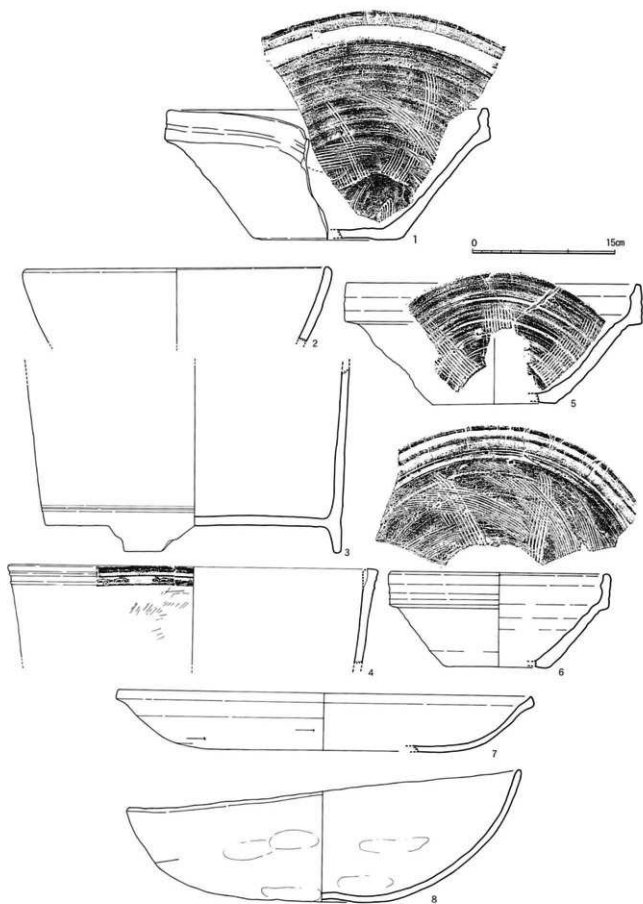
第124図は口径6.8cmを測る土師質土器皿である。

SK34 (第125図)

調査区南側西端のK26区に検出されている。径57cm、深さ11cmを測る円形の平面形態をもつ。土坑内には土器類とともに準大の礫が確認でき、埋土中には炭・焼土が若干含まれていた。遺物は同化できるものはなかったが、16世紀後葉の遺物がみられた。



第119図 IV区 SK31 出土遺物実測図① (1/3)



第120図 IV区 SK31 出土遺物実測図② (1/4)

SK35 (第126図)

調査区中央南側の K26 区に検出されている。径53～57cm、深さ25cmを測る円形の平面形態をもつ。土坑内には土器類とともに竈大～人頭大の礫が確認できた。

SK35 出土遺物 (第127図)

取版

第127図は京都系土師器皿の破片であるが、取版として再利用されたものである。

SK36 (第128図)

調査区南西側の K26 区に検出されている。長さ200cm、幅93cm、深さ29cmを測る不整形の平面形態をもつ。土坑内には土器類とともに竈大よりやや小さい礫が確認できた。埋土中には炭・焼土が若干含まれていた。

SK36 出土遺物 (第129図)

輪切1

第129図1は輪羽口片である。2は放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されており、乗岡稲年近世1期に帰属するものと考えられる。

SK37 (第130図)

調査区南側西端の K26 区に検出されている。上場のプランの一部が確認できていないが、径60cmを超え、深さ40cmを測る円形の平面形態をもつ。土坑内には竈大～人頭大の礫が埋め尽くされていた。

SK37 出土遺物 (第131図)

第131図は口径9.4cmを測る京都系土師器皿である。

SK38 (第132図)

調査区南西端の K26 区に検出されており、SD07に切られている。長さ126cm、幅90cm、深さ39cmを測る楕円形土坑である。埋土は炭・焼土が大量に含まれており、土器類及び竈大～人頭大の礫が含まれる廃棄土坑である。

SK38 出土遺物 (第134図)

第134図1・2は京都系土師器環である。3は中国産翡翠輪産青磁青皿である。4は中国産翡翠輪産青花小皿である。

5は瓦質土器鉢である。

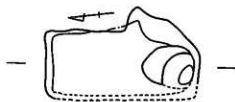
SK39 (第133図)

調査区南西端の K26 区に検出されている。長さ103cm、幅63cm、深さ38cmを測る不整形な楕円形土坑である。埋土には焼土が大量に含まれており、土器類及び竈大よりやや大きい礫が多く含まれている。

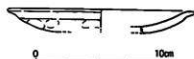
SK39 出土遺物 (第135図)

中国産漳州窯系青花蓋

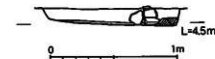
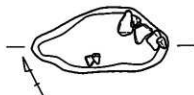
第135図1は中国漳州窯系青花蓋である。2は丸瓦である。巴文の周囲に珠文帯がみられ、外縁幅は比較



第121図 IV区 SK32 実測図 (1/30)



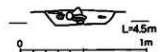
第122図 IV区 SK32 出土遺物
実測図 (1/3)



第123図 IV区 SK33 実測図 (1/30)



第124図 IV区 SK33
出土遺物実測図 (1/3)



第125図 IV区 SK34 実測図
(1/30)

的広い。3は瓦質土器風炉である。内面には横方向の刷毛目が顕著に施され、外面頸部には縦方向の凹線がみられる。

SK40 (第137図)

調査区中央南側のL26区に検出されている。SK27と切り合うので全長は明らかでないが、幅63cm、深さ13cmを測る楕円形土坑である。

SK40 出土遺物 (第137図)

第137図1・2は京都系土師器皿である。2は特徴的であり、口縁下を強くヨコナデし、大きく外反させている。3は用途は明らかでないが、環状鉄製品であり、断面は方形を呈する。

SK41 (第138図)

調査区中央南端のL26区に検出されている。長さ97cm、幅80cm、深さ26cmを測る楕円形土坑である。埋土は拳大の礫により埋め尽くされる様相を呈する。岡化しうる大きさの遺物は出土しなかった。

SK42 (第139図)

調査区中央南端のL26区に検出されている。長さ150cm、幅120cm、深さ21cmを測る不整形な楕円形土坑である。埋土は炭・焼土が大量に含まれており、土器類及び拳大〜人頭大の礫が含まれる廃棄土坑である。

SK42 出土遺物 (第140図)

第140図1は瓦質土器火鉢である。

中国産焼締陶器風炉 2は中国産焼締陶器風炉であり、肩部から上位の内外面に黒釉がみられる。また肩部に2個1単位の耳が付く。3は頁岩製砥石である。

SK43 (第140図)

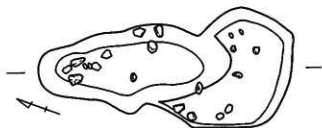
調査区中央北端のL25区に検出されている。長さ146cm、幅80cm、深さ35cmを測る楕円形土坑である。SD04と接



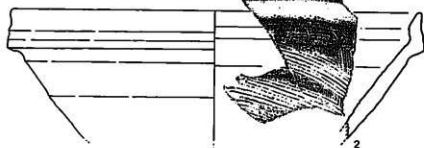
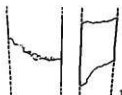
第126図 IV区 SK35 実測図 (1/30)



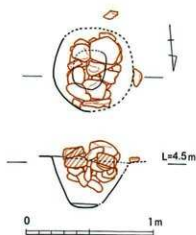
第127図 IV区 SK35 出土遺物実測図 (1/3)



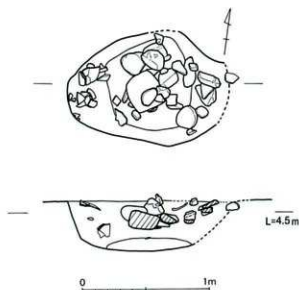
第128図 IV区 SK36 実測図 (1/30)



第129図 IV区 SK36 出土遺物実測図 (1/3)



第130図 IV区 SK37 実測図(1/30)



第132図 IV区 SK38 実測図 (1/30)

しているが、同時存在の可能性が高い。出土遺物はきわめて少ないため、遺構の時期を決める指標になりえない。

SK43 出土遺物 (第141図)

第141図は備前系統締締陶器壺の口縁である。

SK44 (第10図)

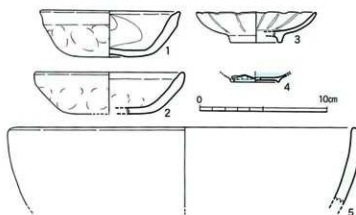
調査区北東端のL25区に検出されている。長さ160cm、幅120cm、深さ27cmを測る楕円形土坑である。SD10・11を切っており、SD10・11が近世の溝であるため、近世以降のものであることがわかる。出土遺物はきわめて少ないため、遺構の時期を決める指標になりえない。

SK44 出土遺物 (第142図)

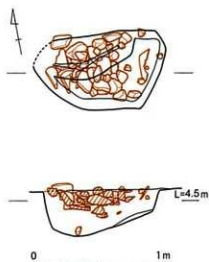
第142図は磁器皿である。



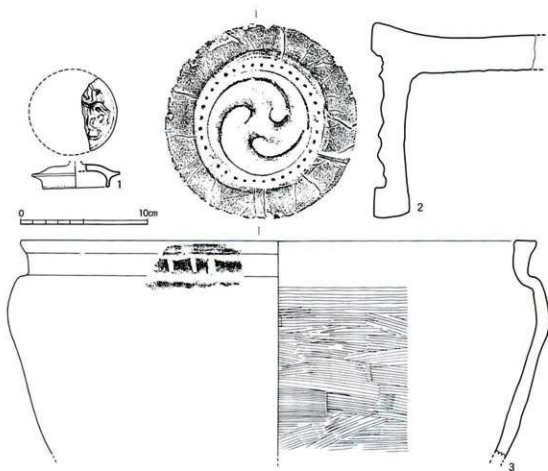
第131図 IV区 SK37 出土遺物実測図 (1/3)



第133図 IV区 SK38 出土遺物実測図 (1/3)



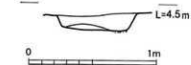
第134図 IV区 SK39 実測図 (1/30)



第135図 IV区 SK39 出土遺物実測図 (1/3)



第137図 IV区 SK40 出土遺物実測図 (1/3)

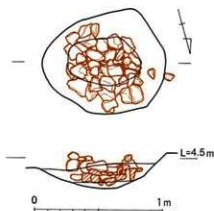


第136図 IV区 SK40 実測図 (1/30)

c. 井戸

SE45・46 (第8図)

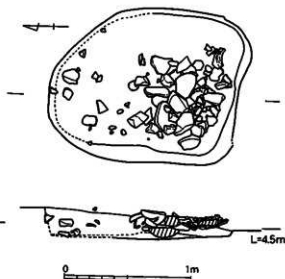
調査区中央北側のL25区において検出された2基の井戸である。SE45がSE46に切られており、両者には先後関係が存在する。SE46は検出面径約2.4m、底径1.4~1.7m、深さ約2.55mを測る円形掘方を持つ。堀方埋



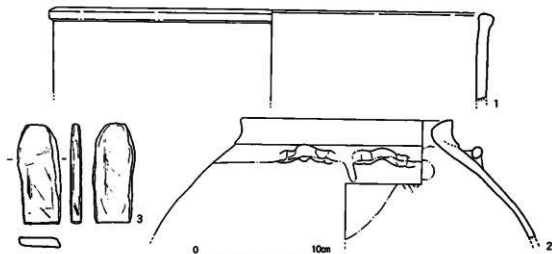
第138図 IV区 SK41 実測図 (1/30)

土は黄褐～灰褐色粘質土からなり、最上層のみ砂礫を多く含んでいる。掘方中央よりやや西側に径70cm内外の木製井筒の痕跡が確認できた。井筒の木質は腐食しており、確認できなかったが、最下部においては桶の痕跡と思われる縦方向の木目板が確認できた。井筒内埋土中には、土器類の遺物が確認できた。

SE45は検出面径約2.4m、底径2.0～2.3m、深さ約2.2mを測る円形掘方を持つ。掘方は黄褐～灰褐色土をはじめとした埋土からなる。掘方中央に径70cm内外の木製井筒の痕跡が確認できた。井筒の木質は腐食しており、確認できなかった。井筒内埋土中には、土器類の遺物が確認できた。



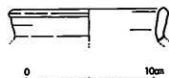
第139図 IV区 SK42 実測図 (1/30)



第140図 IV区 SK42 出土遺物実測図 (1/3)

SE45 出土遺物(第143図)

中国産焼締陶器鉢 第143図1は中国産焼締陶器鉢であり、口縁端部を内側に張りだし、丸く肥厚させている。2は備前系陶器撞鉢である。放射状スリメのみがみられ、衆岡縄年中世6期に帰属するものと考えられる。3は口径36.5cmを測る瓦質土器火鉢であり、外面口縁下に2本の細い突線がみられ、その突線間に横広の雷文帯のスタンプが連続してみられる。4は備前系焼締陶器甕である。



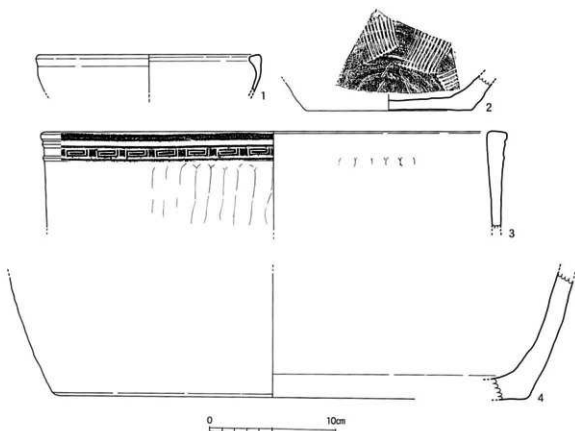
第141図 IV区 SK43 出土遺物実測図 (1/3)

SE46 出土遺物 (第144・145図)

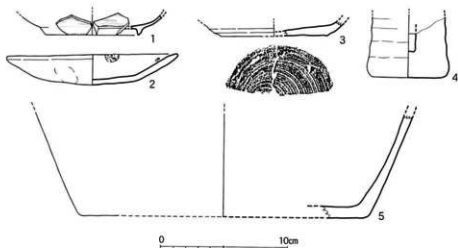
五彩皿 第144図1は中国産五彩皿である。2は京都系土師器皿であり、取瓶として再利用されたものである。3は土師質土器皿であり、底部付近に強いロクロ痕を残す。4は土製燭台であり、上部が欠損しているが、中央部に穿孔がみられる。5は瓦質土器火鉢の底部片である。



第142図 IV区 SK44 出土遺物実測図 (1/3)



第143図 IV区 SE45 出土遺物実測図 (1/3)



第144図 IV区 SE46 出土遺物実測図 (1/3)

第145図は径0.35cm、高さ0.2cmの緑色のガラス小玉である。

d. その他の遺構

SF47 (第8・9図)

調査区北端において確認された道路遺構である。帯状の硬化面が東西方向に南北幅1.6m以下の範囲で地山上に確認でき、その北境は北側調査区外に延びることが確認できた。この硬化面は、薄い砂



第145図 IV区 SE46 出土
ガラス玉 (1/1)

材と粘土材が0.5～10cmの厚さでそれぞれ硬化し幾重に重なりの状態であることが確認できたが、この硬化面はⅠ区にも延びていた。なお、この硬化面の南側には溜滞と考えられる数段階の溝が確認されている。出土遺物はほとんどみられず、遺物により時期を決めることは困難であるが、上下層の帰属時期から16世紀後葉～末に営まれていたものと考えられる。

SX48 (第7図)

調査区北西端のK25区に位置し、調査区外に延びる幅6.72mの不整形な落ち込み遺構である。SF47の道路遺構やその側溝であるSD03の下層から検出され、この落ち込み遺構が埋め戻されて以降に、道路が営まれたことがわかる。埋土は均質な土が大きな単位で見られ、細かく埋め戻されたものではなく、また、廃棄土坑の様相もたない。

SX48 出土遺物 (第146図)

第146図1・2・3は土師質土器環である。4は土製竈であり、古代のものであると考えられる。

SX49 (第7図)

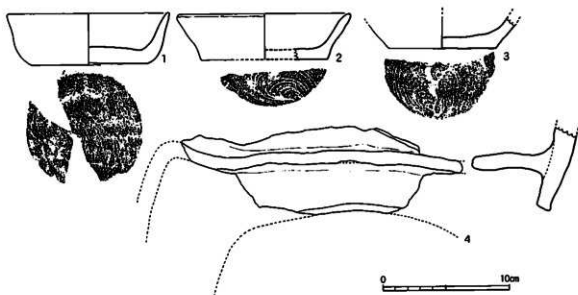
調査区南端のL26区に位置し、調査区南側に延びる幅5mを超えるの不整形な落ち込み遺構である。中世遺構の最下層から検出され、この落ち込み遺構が埋め戻されて以降に、土坑・ピットなどの遺構群が営まれたことがわかる。埋土は均質な単位で見られ、細かく埋め戻されたものではなく、また、廃棄土坑の様相もたない。最下層にマンガ・炭を含む明褐色粘質土が堆積し、その上層に炭・土器を多く含む黄褐色砂質土～褐色土がみられる。

SX49 出土遺物 (第147図)

第147図1・2・3・5は土師質土器皿である。いずれも内面につよいロクロ痕を残す。3には底部に板状圧痕が残る。4は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼壇壺の蓋を転用したものである。

SX50 (第7図)

調査区南西端のK・L25区に位置し、調査区南側に延びる幅5mを超えるの不整形な落ち込み遺構である。土層観察からSX49を切ることが確認できたが、出土遺物からわずかな時期差がみられるのみであり、類似遺構であると考えられる。SX49と同様に、中世遺構の最下層から検出され、この落ち込み遺構が埋め戻されて以降に、土坑・ピットなどの遺構群が営まれたことがわかる。埋土は均質



第146図 Ⅳ区 SX48 出土遺物実測図 (1/3)

な単位で見られ、細かく埋め戻されたものではなく、また、廃棄土坑の様相もまたない。

SX50 出土遺物 (第148図)

瀬戸産陶器鉢皿

第148図1は瀬戸産陶器鉢皿である。2は口径4.6cmの土師質土器小皿であり、底部付近内面につよいロクロ痕を残す。3・4・5・6は土師質土器皿であり、3の内面にはつよいロクロ痕を残す。7は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地編年1期に属することがわかる。

SX51 (第7図)

調査区中央北側のL25区に位置する。SE45やSD02-1・2をはじめとした後世の遺構に切られているため、その全体像は明らかではないが、残存長2m以上、深さ10cm程度の不整形な土坑である。出土遺物は乏しく細片であったため、明確な時期を明らかにできないが、切り合い関係から16世紀前葉前後に位置付けられるものと思われる。

SX51 出土遺物 (第149図)

第149図は断面方形の鉄釘である。

e. ビット (第7・8・9図)

Ⅳ区全域から250基前後のビットが検出されている。ビットからの出土遺物は乏しく、遺物から時期の判別は困難であるが、各ビットの同一検出面から発見された遺構の帰属時期からビットの時期を想定した。

ビットは16世紀後葉～末に集中して営まれたことがわかる。

ビットの多くは、建物跡や欄列跡であると考えられるが、その性格を明らかにすることは今後の課題としたい。

SP52 出土遺物 (第150図)

第150図は土師質土器皿であり、内面につよいロクロ痕を残す。

SP53 出土遺物 (第151図)

第151図1は土師質土器皿であり、内面につよいロクロ痕を残す。2は断面方形の鉄釘と考えられるが、上下端が欠損している。

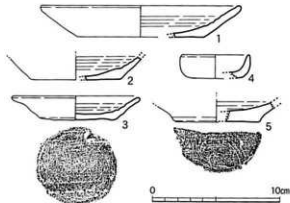
SP54 出土遺物 (第152図)

第152図1は「開元通寶」(621年初鑄)であり、2は銭種不明である。

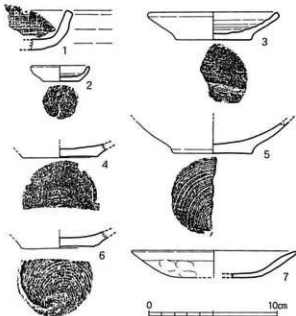
SP55 出土遺物 (第153図)

第153図は高さ0.8cm、径0.65cmの縦長のガラス製小玉であり、淡青色をベースに、濃青色の波状文様をあしらったトンボ玉である。

SP56 出土遺物 (第154図)



第147図 Ⅳ区 SX49 出土遺物実測図 (1/3)



第148図 Ⅳ区 SX50 出土遺物実測図 (1/3)

トンボ玉

第154図は銅銭であるが、いずれも銭種不明である。

SP57 出土遺物 (第155図)

第155図は口縁部が厚くなりながら直立する瓦質土器火鉢である。口縁外面に2本の細かい突線がみられ、その間に雷文のスタンプを連続させる。

SP58 出土遺物 (第156図)

第156図1は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地晩年1期に属中国産華南三彩であるが、器種は明らかでない。彩

外面および内面の口縁付近のみ緑釉がみられる。3は口縁部が厚くなりながら直立する瓦質土器火鉢である。口縁外面に2本の細かい突線がみられ、その間に双頭鳳手流雲文のスタンプを連続させる。

SP59 出土遺物 (第157図)

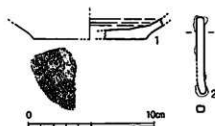
第157図は中国産青花瓶であり、頸部外面に芭蕉葉文がみえる。

SP60 出土遺物 (第158図)

第158図は京都系土師器皿であり、その特徴から埴地晩年2～3期に属することがわかる。

1. 包含層 (第11図)

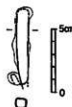
調査区一帯は昭和30～40年代まで、水田が広がっていたと伝えられていた。発掘調査した結果、標高5.5～6.0mの高さに水田耕作土が、また、水田耕作土上に瓦礫が含まれる粗い土砂の盛土が確認できた。水田耕作土下にはマンガン・酸化鉄の沈着が確認でき、以下に床土がみられる。この床土の層は7層として把握し、また、遺物包含層でもあった。7層中には近世の遺物も含まれるため、近世以降に水田化したことがわかる。



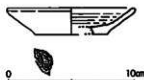
第151図 IV区 SP53 出土遺物実測図 (1/3)



第153図 IV区 SP55 出土遺物実測図 (1/1)



第149図 IV区 SX51 出土遺物実測図 (1/3)



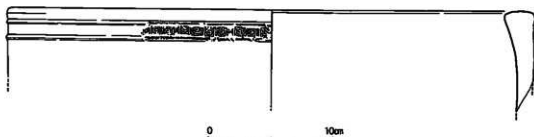
第150図 IV区 SP52 出土遺物実測図 (1/3)



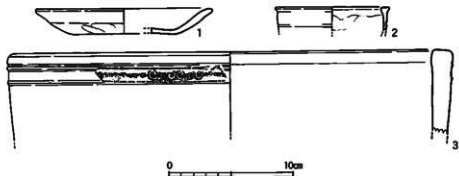
第152図 IV区 SP54 出土銭貨 (1/1)



第154図 IV区 SP56 出土銭貨 (1/1)



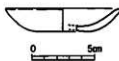
第155図 IV区 SP57 出土遺物実測図 (1/3)



第156図 IV区 SP58 出土遺物実測図 (1/3)



第157図 IV区 SP59 出土遺物実測図 (1/3)



第158図 IV区 SP60 出土遺物実測図 (1/3)

基本層序として、7層下に99層の遺物包含層が広がるが、この99層下に中世の遺構群および整地層が展開する。

99層出土遺物 (第159・160図)

第159図1・2は中国産青花皿である。3は土師質土器皿であり、取瓶として再利用されている。4は瀬戸産陶器鉢である。5は土鉢である。6は中国龍泉窯系青磁碗である。7は瓦質土器火鉢であり、内面中央にスタンプが確認できる。8は瓦質土器火鉢である。外面頸部に横に連続するやや小さい菊文のスタンプがみられ、胴部に大きな菊文のスタンプがみられる。9は中国産焼締陶器鉢である。器壁は薄く、口縁部は台形状の縁帯がみられる。

第160図1・2・3は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩釜の蓋を転用したものである。4～25、29～31は京都系土師器皿あり、その特徴から塩釜編年1～3期のものが混在することがわかる。5・24には口縁部に煤が確認でき、灯明皿として使用されていたものとかがえられる。26・27・28は京都系土師器環であり、いずれも器壁が厚い。32～41は土師質土器皿であり、32・33・36・39・40には内面に強いロク口痕を残す。33には口縁部に煤が確認でき、灯明皿として使用されていたものとかがえられる。42～45は土師質土器環である。

7層出土遺物 (第161～166図)

第161図1は唐津産陶器香炉であり、近世のものである。2は磁器碗であり、近世のものであろう。3は唐津産陶器皿であり、17世紀初頭～前半のものである。4は中国産五彩皿の破片である。5は中

中国産焼締陶器鉢

第2節 遺構と遺物

中国産龍泉窯軸
菊花小皿

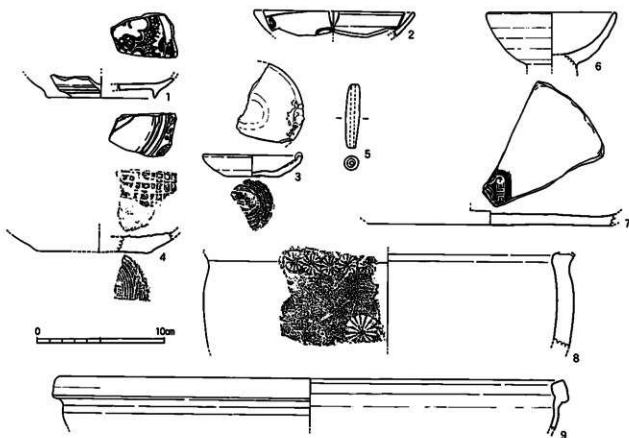
6は中国産華南三彩陶器であるが、器種は不明である。7は中国産青花皿である。8は韓半島産陶器碗である。9は緑釉がかかる陶器香炉の脚か。10・11は中国産褐釉陶器壺蓋類の胴部片である。12は中国産褐釉陶器蓋である。13は中国産褐釉陶器壺蓋類の肩部にみられる耳の破片であろう。14は中国龍泉窯系青磁盤である。15は中国龍泉窯系青磁菊花皿である。16は中国龍泉窯系青磁碗である。外面に縦方向の細線が確認できるが、細線蓮華文を意識したものと考えられる。17は中国龍泉窯系青磁碗である。18は瀬戸美濃系陶器天目碗であり、高台部の破片を円盤状に加工している。19は中国産褐釉陶器蓋である。20～24は白磁皿である。20・21はやや内湾しながら口縁に至り、22～24は端反りして口縁に至る。

第162図1・2は体部が立ち上がる京都系土師器小皿であり、焼塩壺の蓋を転用したものである。3～18、25は京都系土師器皿あり、その特徴から埴地紀年1～3期のものが混在することがわかる。19は土師質土器碗である。断面三角形の高い高台が付き、内面に一部布目の圧痕が残る。20～23は土師質土器皿であり、24は土師質土器杯である。26・27は土師である。28～30は土師質および瓦質の土器片を円盤状に加工したものであるが、その用途は明らかでない。31は土師質の焼塩壺である。

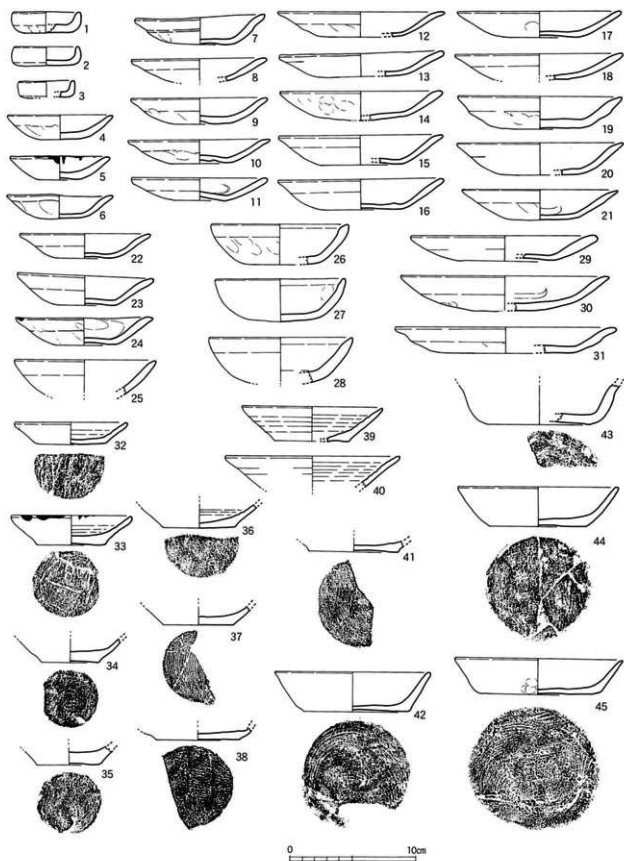
第163図1は中国産焼締陶器鉢であり、口縁端部を肥厚して内湾させている。2は焼締陶器瓶である。タイ・ノイ川
3はタイ・ノイ川産焼締陶器四耳壺の耳である。4はタイ産焼締陶器壺である。5はタイ産ハンネ
ラ壺であり、外面にタタキが顕著に確認できる。7はタイ産焼締陶器壺である。8・10・12は備前系
焼締陶器插鉢であり、放射状スリメに加えて、ナメ方向のスリメが付加されており、乗岡紀年近世
1期に帰属するものと考えられる。9は備前系焼締陶器鉢である。13は備前系焼締陶器であり、掛花
入か。外面に「T」字状のヘラ記号がみえる。14は備前系焼締陶器壺である。

タイ・ノイ川
産焼締陶器
四耳壺

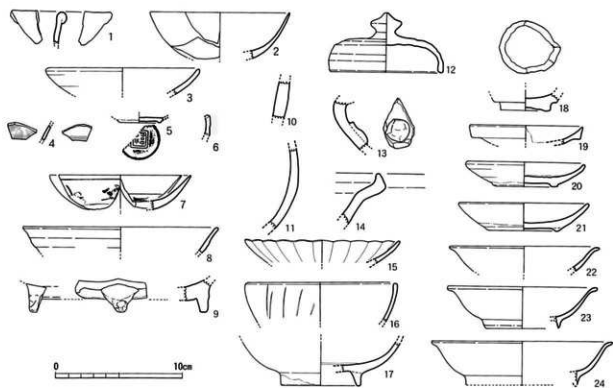
掛花入



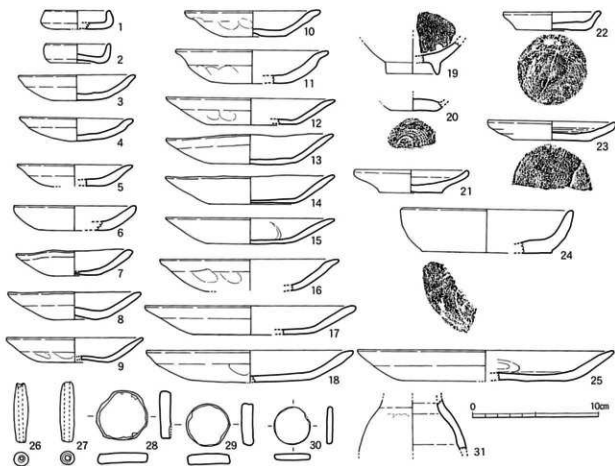
第159図 99出土遺物実測図① (1/3)



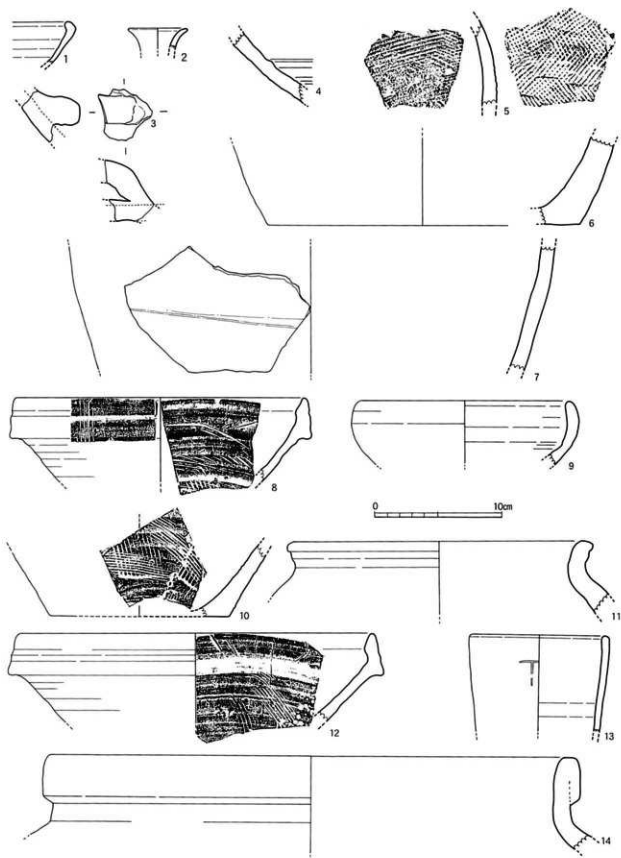
第160図 99層出土遺物実測図② (1/3)



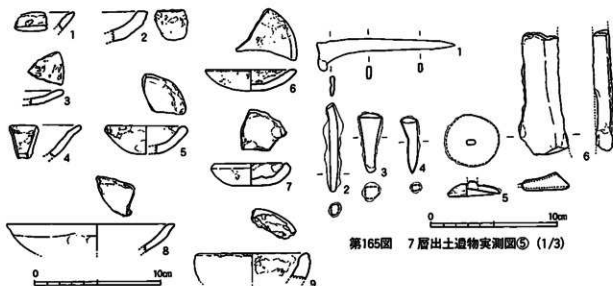
第161図 7層出土遺物実測図① (1/3)



第162図 7層出土遺物実測図② (1/3)

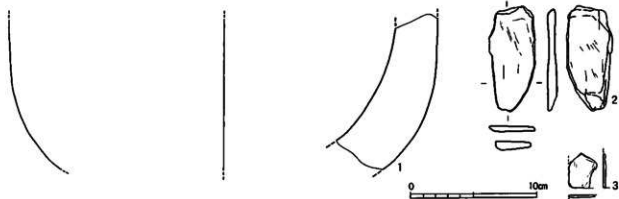


第163図 7層出土遺物実測図③ (1/3)



第164図 7層出土遺物実測図④ (1/3)

第165図 7層出土遺物実測図⑤ (1/3)



第166図 7層出土遺物実測図⑥ (1/3)

取版

第164図は取版である。8のように京都系土師器皿を再利用したものもみられる。

第165図1は鉄製小刀柄である。2・3・4は鉄釘である。5は笠状鉄製品であり、中心に鉄心棒が通されていたものと思われるが、折損している。用途は明らかでない。6は銅製品であるが、用途は明らかでない。

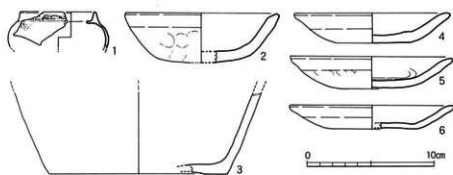
第166図1は凝灰岩製石製品であるが、用途は明らかでない。直径40cm以上の球形石の内部を割り抜いた製品である。2は結晶片岩、3は砂岩の砥石である。

IV区出土遺物 (第167～169図)

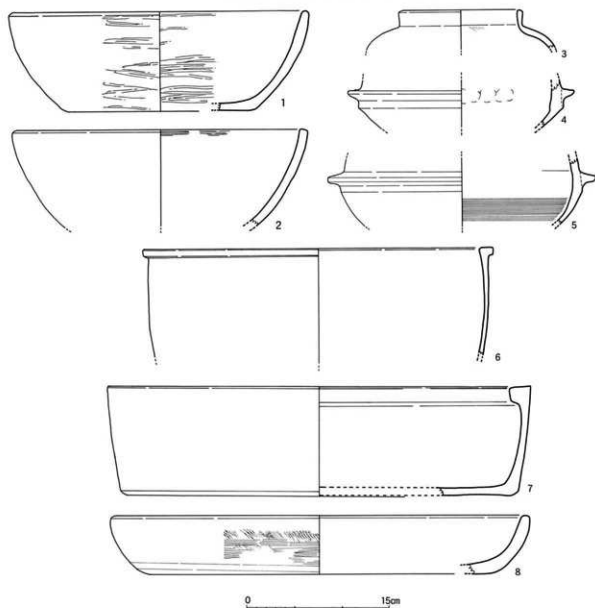
第167図1は青花急須であろうが、産地は明らかでない。2は京都系土師器環であり、塩土編年4期に属するものか。3は土師質土器壺の底部である。4・5・6は京都系土師器皿である。

第168図1は瓦質土器鉢、2は土師質土器鉢である。3・4・5は土師質土器釜である。6・7・8は瓦質土器火鉢である。

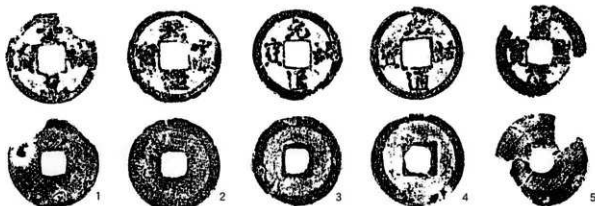
第169図は銅銭である。1は「景祐元寶」(1034年初鑄)、2は「元盛通寶」(1078年初鑄)、3・4は「元祐通寶」(1086年初鑄)、5は「紹聖元寶」(1094年初鑄)である。



第167図 IV区出土遺物実測図① (1/3)



第168図 IV区出土遺物実測図② (1/4)



第169図 IV区出土銭貨 (1/1)

第3節 小結

第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区における遺構・遺物について報告してきたが、ここで当調査区の性格についてまとめた。

「府内古園」 戦国時代における府内の町の景観をあらわしたとされる「府内古園」が、現在、13点残されており、戦国時代の府内の町を復元する場合、この「府内古園」が重要な参考資料とされている。これらの「府内古園」にみられる景観を、地積図と現地形とに照らし合わせて、それぞれの位置関係を検討した成果が『大分市史』に掲載されているが¹⁾、その復元案によれば、第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区は「大友館」

「御所小路」 東側を走る第2南北街路から、大友館中心部あたりで東に延びる「御所小路」および、その南側に位置することがわかる。現在、第2南北街路に想定される位置には市道が、「御所小路」に想定される位置には、幅1m程度の里道がそれぞれ走り、戦国時代以降、現在に至るまで、それぞれの道

「御内町」 路は踏襲されていることになる。また、第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区には「御内町」と「御所小路町」
「御所小路町」の2つの町が存在することがわかり、地籍図が戦国期の町屋構造を踏襲している可能性を考えた場合、府内の町屋構造として主要道である、南北街路に間口をもつ町屋を形成し、それぞれの街路を結ぶ小路にはその空閑地を利用する形で町屋を形成していたことが推測できる。つまり、街路と小路とのコーナーは、間口を街路側にもつことが地籍図から想定できる。そこで、第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区は間口を第2南北街路にもつ区画にあたるため「御内町」に該当し、「御所小路町」は当該調査区に含まれないことが推測できる。

それでは、調査区周辺の環境をみてみよう。木村幾多郎氏の「府内古園」の分類と研究によれば、「府内古園」A類が最も古式に位置付けられるとされ、B・C類は模写の過程で後世の考証が加筆されているとしている²⁾。「府内古園」A類には言うまでもなく当該調査区の西側に第2南北街路をはさみ、「大友館」が描かれている。「府内古園」にみられる「大友館」には、正面と考えられる東側の第2南北街路に面し、大小2箇所の門が見られ、このうち「御内町」に面する位置には、より大きな門が描かれている³⁾。「洛中洛外図」にみえる公方邸や細川管領邸には脇門とともに札門が描かれており、

註 (1) 大分市史編纂委員会「地籍図に残る戦国時代の府内・戦国時代の府内復元想定図」(『大分市史』中巻1987年)

(2) 木村幾多郎「府内と府内古園」(『南筑都市・豊後府内』大分市教育委員会 2001年)
木村幾多郎「府内古園の成立」(『大分市歴史資料館年報』大分市歴史資料館 1993年)

(3) 大分市歴史資料館所蔵「府内古園」B-1類には、「御内町」の町名がみられず、「御内町」に相当する位置には「御門ノ前」と記載されている。「府内古園」が描き写されていく過程で「門」の草書体が、「内」に誤写されたとも考えられ、その場合、「府内古園」A・B類にみられるように、大友館東側には礼文・脇門が存在し、「御内町」は礼文に因んだ町名であることになる。礼文・脇門の存在も含めて、今後、検証されていく課題であろう。

当調査区は礼門前の非常に重要な空間にあたる事がわかる。

遺構群の変遷に関しては1～5期に分けられる。1期は16世紀初頭以前、2期は16世紀前葉、3期は16世紀中葉～後葉、4期は16世紀後葉～末、5期は近世である。

- 1期 1期(16世紀初頭以前)には、性格のつかめない3基の土坑が確認できたのみで、しかも併存の確証は得られず、ほとんど遺構が存在しない時期であったと言ってよい。
- 2期 2期(16世紀前葉)には、断面U字形の大形溝がW-6°-Nに近い方向で東西に走り調査区東端で終わっている。このほかに土採りによると考えられる大型の不定形土坑がみられ、このことからこの両者が併存していたかどうかは明らかでないが、建物跡、井戸跡、廃棄土坑跡などの生活空間を物語る遺構群は確認できない。当該期は大友義統治世の段階に該当する。
- 3期 3期(16世紀中葉～後葉)に至ると、遺構群が爆発的に営まれる。明確に掘立柱建物跡が復元できないが、数多くのピット群、井戸、土坑が確認でき、確実に町屋の景観を形成しはじめた時期であることがわかる。特に、御溝とともに道路硬化面がW-9°-Nの方向で東西に走ることが確認でき、この時期に「御所小路」が敷設されたことが確認できる。道路硬化面の幅は2m以下であるが、第9次調査区Ⅰ・Ⅳ区北側に位置するⅡ・Ⅲ区南端に確認できた溝を御溝と捉えた場合、南北の御溝間は4～5mの幅で捉えられる。当該期は大友義統から大友義統治世の初期の段階に該当する。
- 4期 4期(16世紀後葉～末)には前代に引き続き、遺構群の密度は高い。この時期を特徴づけるものは、3期とは異なる様相をもつ土坑群が盛行することである。これらの土坑群には炭や焼土が多く含まれ、川原石も大量に見られる。中には火災にあったためか、赤変した川原石や火を受けた土器類も見られる。同時期の同様な土坑群が、本調査区に北側である「桜町」部分や南側の「御内町」・「帯」で確認できており、この周辺一帯が火災により罹災したあと、その処理として穴を掘り埋めたことが考えられる。当時、フロイスの『日本史』には府内において火災記事はたびたび見られるが、特に天正14年(1586)の島津氏の府内侵攻は町中を焼き尽くすものであったようであり、これらの火災処理土坑がこの時のものである可能性を考えるべきかもしれない。今後、調査が進むことにより、より詳細な実像がつかめてくるものと思える。当該期は大友義統治世の段階に該当する。
- 鹿毛敏夫は「府内館」の東築地前に位置する「御内町」と「御所小路町」は近世城下に継承されておらず、「府内館」の役所や「御蔵場」に詰める武士衆の居住区であった可能性を指摘している⁽⁴⁾。また、木村幾多郎は移転住民のいない旧町の地割区画が、ほとんど移転した市町筋と比較して大きい傾向があり、家臣団の集住の事実を疑いながらも、その居住区の可能性を指摘している⁽²⁾。
- また、天正3～6年(1575～1578)に比定される大友義統の書状に以下の記載がみえ、発掘成果を理解するうえで、参考となる文献資料となる。

府内屋敷 祇園御神領之儀、其方可有格護候、然者東之築地至外
通者、町人召移、以屋敷料、右社頭上立等有馳走之由、尤肝要
候、仍諸点役之儀、令免許候趣、且細門上申候、恐々謹言

(大友)

六月十二日

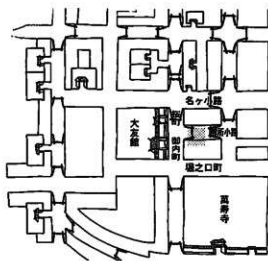
義統(花押)

税所越中守殿⁽⁵⁾

祇園社の神領町屋敷をさす「府内屋敷 祇園御神領之儀」の差配権を税所越中守に保証する内容であるが、「府内屋敷」と考えられる「大友館」の「東之築地至外通」の範囲に町人を移住させたこと

(4) 鹿毛敏夫「戦国大名館の建設と都市—大友氏と豊後府内—」(『日本歴史』第666号 2003年)

(5) 「日野文書」—(九大分県史料刊行会「大分県史料」 1956年)



第170図 「府内古園」(A類)における調査地区の位置
(トーンの部分)

住居部分の実態が明らかになり、より「御内町」の実態が明らかになって来るであろう。

が読み取れる。鹿毛敏夫は「外通」を第1南北街路に想定し、大友館と第1南北街路に挟まれた範囲に町人を移住させたとしている。

(4)「御内町」に限定できないまでも、この範囲の遺構群と文献史料の記載とに齟齬が生じるものか、今後、発掘調査成果に照らし合わせて検証していく必要があろう。

上記の遺構群の変遷過程から、16世紀後葉の大友義統治世にはいり、ピット・土坑・井戸・溝等が整備されはじめ、この時期に町並み整備がはじまるという、大友府内町において大きな画期が存在することがわかる。上記の文献史料は当該地区を理解するうえで示唆的であるが、今回の調査対象地は、第2南北街路に面した間口部分の調査ではなく、9次調査区の西側箇所の調査を行うことにより、

第3章 中世大友府内町跡第13次調査区

第1節 調査の概要

本調査区は大分市元町の国道10号線とJR日豊線が交差する地点の南東側にあり、標高約5mの沖積地上に立地する。大分市史編纂委員会が作成した「戦国時代の府内復元想定図」によれば、当調査区は大友氏館跡の東南にある「御内町」に相当する。

調査区周辺は、水田として利用されており、水田耕作土・水田床土・酸化鉄沈着層・マンガン層などの水田に伴う層が2面展開していた(第249図)。これら水田層までの土は重機で除去し、それより下位は発掘作業員の手で掘り下げていった。その結果、14世紀代と16世紀後半を中心とした遺構群を検出した。調査期間は2001年6月から2002年5月までの約1年間で、その調査面積は約800㎡である。

14世紀代の主な遺構としては、調査区中央部東側で検出した土坑(SK439)がある。土坑SK439は深さ約20cmほどの浅い掘り込みに、びっしりと土師質土器が廃棄されており、良好な一括資料になりうるものである。

16世紀代の遺構としては土坑、井戸、石積遺構、柱穴群、溝状遺構等を検出した。本調査区の西には「大友館」前を通る第2南北街路の存在が想定されており、その街路に面した「御内町」の町屋の裏手の様子が、これら16世紀の遺構群で確認されたと考える。

まず、土坑については100基以上を確認した。その大半が遺物以外に炭や焼土および礫が混じっており、廃棄土坑としての機能をもつものである。その他、火災処理土坑(SK032等)、内部に石列がある土坑(SK008等)が認められた。また、土坑から出土した遺物の中では、SK011(16世紀後半～末葉)から出土したヴェロニカモチーフのメダイが特筆であろう。大きさは直径2cm、厚さ2mmで、その材質は銅と錫の合金である。一方にはキリストの顔を、他方には聖母子像を描いている。

次に井戸については、5基確認した。その形態は、上面の井桁付近まで桶が積み上げられるもの(SE253・SE286・SE377)と底面は桶積みでそれより上が石組のもの(SE266・SE384)の二者が存在する。後者のうちSE384は凝灰岩を6角に組合せて積み上げたもので、残存状態が良好であった。形態は違えども、廃絶時期はいずれも16世紀後半から末である。遺物としてはSE377の下層土内から、タイ産の練り上げ手クンディ形水注が出土している。

調査区北東隅で、屋敷地の区画と思われる石積遺構(SX551)を検出した。10cm～30cm大の石を約45°の角度で2段～7段組み上げて築いており、石積みを囲む溝に直交するように橋状に石を積み上げた箇所も確認された。SX551の内部には、武家の儀式に係わりの深い京都系土師器を多量に含んだ整地層SX705～707があり、SX551はこの整地層の土留めの役割を果たすとともに、整地層上に存在したと推定される屋敷地の区画の役割を果たしたものと推測される。

また、溝状遺構は8条検出された。そのうち、溝SD542は、2002年度に調査された万寿寺の北限と解される堀と並行して東西に走っていること(第369図)から、万寿寺を意識した町屋、あるいは屋敷地の区画溝の可能性もある。また、16世紀後半以降に構築されたと考えるSD098は調査区の東端を南北(N-4°-E)に走り、そのまま南側に隣接する第21次調査区に続いている(SD087)。その位置から考えて、町屋の裏(東側)を囲む溝になりうるものである。

さらに300を超える柱穴を確認したが、確実に掘立柱建物になるものは1棟もない。しかし柱穴列は確認しており(第369図)、磁北から約4°東に振る柱穴列とそれに直交する柱穴列で構成されるものと約9°東に振る柱穴列とそれに直交する柱穴列で構成されるものの二者に大別できる。前者は溝SD098と並行し、後者は石積み遺構(SX551)及び溝(SD429)と並行する柱穴群であり、SX551及びSD429がSD098に切られていることから、後者は本調査区の16世紀代の遺構としては古い存在であると考えられる。

第1節 調査の概要

最後に、本報告書で使用する遺構番号は発掘調査時の遺構名称と異なるため、以下の遺構一覧表を作成した。

第3表 第13次調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	掲載頁
SD013	S013	溝	M30区・N30区	17世紀～18世紀	肥前系陶器
SD096	S096	溝	M30区・M31区・ N30区	18世紀前半以降	肥前系陶器
SD097	S097	溝	M30区・M31区・ M32区・M33区・ M34区	16世紀末葉～17世紀初頭	肥前系陶器
SD098	S098	溝	M30区・M31区・ M32区・M33区・ M34区	16世紀後葉	景德鎮窯系青花皿 京都系土師器 3期
SD542	S542	溝	K32区・L32区・ M32区	16世紀前葉～中葉	在地系土師質土器
SD539	S539	溝	M30区・N30区		
SD540	S540	溝	M30区・N30区		
SD584	S584	溝	M30区・M31区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期
SK008	S008	土坑	L31区・L32区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK010	S010	土坑	M31区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期末 中国南部産黒釉陶器蓋
SK011	S011	土坑	L31区・M31区	16世紀後葉～末葉	ウツロニカメダイ
SK012	S012	土坑	L31区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期
SK032	S032	土坑	L30区・L31区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK044	S044	土坑	L31区・L32区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期末
SK048	S048	土坑	K31区・L31区		鍵？
SK074	S074	土坑	L31区	16世紀後葉～末葉	翡翠釉 京都系土師器 3期 大型鉢
SK089	S089	土坑	L31区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期末
SK110	S110	土坑	L31区・M31区	16世紀後葉～末葉	中国景德鎮窯系青花 中国漳州窯系青花 京都系土師器 3期
SK135	S135	土坑	K32区・L32区		瓦質土器鉢
SK137	S137	土坑	L32区		瀬戸美濃系陶器天目碗
SK145	S145	土坑	L33区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK169	S169	土坑	L32区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK181	S181	土坑	M32区・M33区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK200	S200	土坑	L32区・M32区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK201	S201	土坑	M34区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK208	S208	土坑	L33区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期
SK236	S236	土坑	L33区		翡翠釉
SK252	S252	土坑	L33区		瓦質土器火鉢
SK212	S212	土坑	L32区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期
SK235	S235	土坑	L33区・M33区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期
SK237	S237	土坑	M33区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期 中国景德鎮窯系青花 鉢
SK238	S238	土坑	L33区・M33区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期 鍵？
SK239	S239	土坑	M33区	16世紀前葉～中葉	中国南部産陶器瓶
SK247	S247	土坑	L32区	16世紀中葉～後葉	中国産褐釉陶器蓋 京都系土師器 2期
SK248	S248	土坑	L32区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期末
SK250	S250	土坑	L33区	16世紀後葉～末葉	肥前系陶器大甕
SK251	S251	土坑	L33区	16世紀後葉～末葉	肥前系陶器大甕

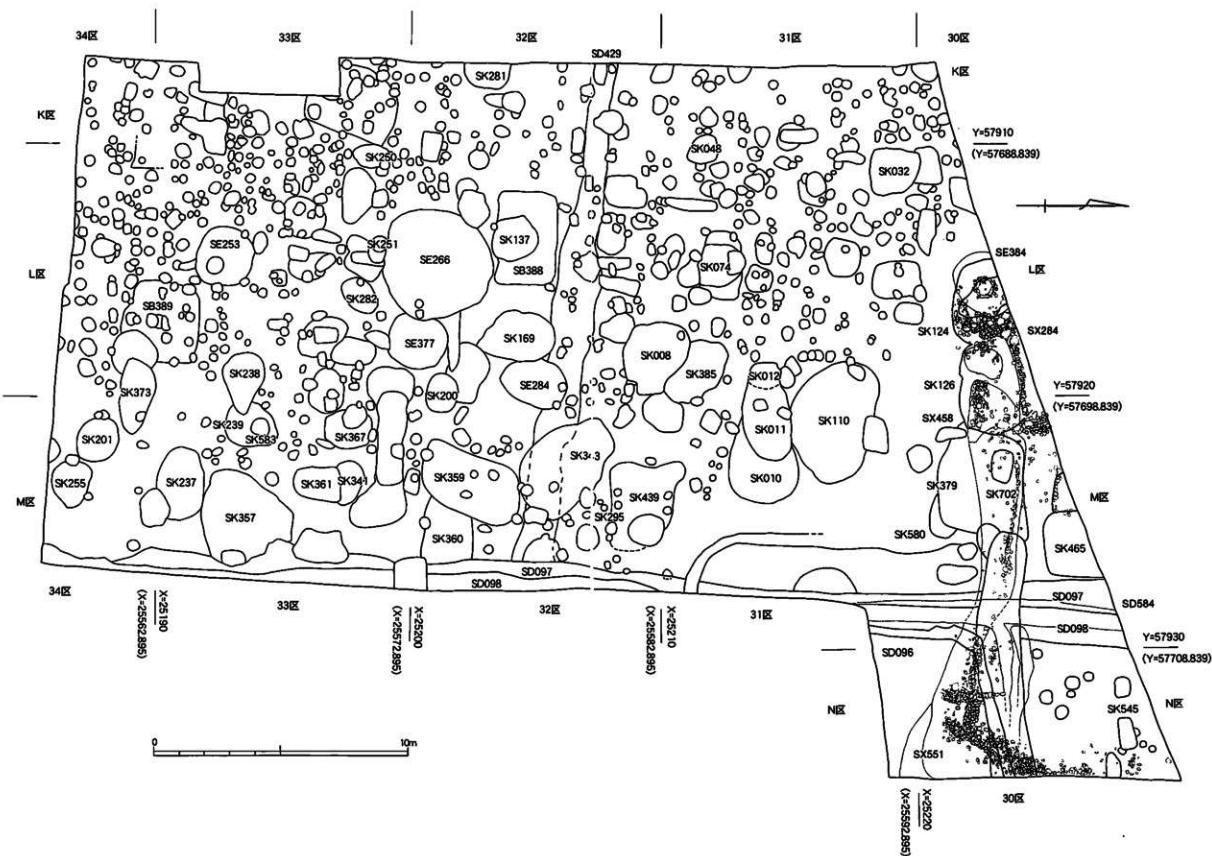
第4表 第13次調査区遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期		掲載頁
SK255	S255	土坑	M34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期	144
SK279	S279	土坑	M32区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期	146
SK281	S281	土坑	K32区		土鐘	146
SK282	S282	土坑	L33区		中国景德鎮窯系青花	147
SK285	S285	土坑	L33区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期末	148
SK287	S287	土坑	L33区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期	149
SK290	S290	土坑	L33区	16世紀中葉	備前系陶器(放射状スリメ) 京都系土師器 2期	149
SK295	S295	土坑	L31区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期末	150
SK341	S341	土坑	M33区	16世紀後葉	中国景德鎮窯系青花	150
SK361	S361	土坑	M33区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期	150
SK343	S343	土坑	M32区	16世紀中葉～後葉	中国漳州窯系青花 京都系土師器 2期	151
SK345	S345	土坑	L30区・L31区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期	152
SK354	S354	土坑	K33区	16世紀中葉～後葉	備前系焼締陶器鉢 京都系土師器 2期	153
SK355	S355	土坑	M33区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期 瓦質土器(ナメスリメ)	153
SK356	S356	土坑	M33区	16世紀中頃～末葉	中国産白磁皿 中国龍泉窯系青磁皿	153
SK357	S357	土坑	M33区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期 在地系土師質土器皿	153
SK359	S359	土坑	M32区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3期 瓦質土器	155
SK360	S360	土坑	M32区	16世紀末葉	京都系土師器 3期 瓦質土器火鉢	158
SK367	S367	土坑	M33区		中国龍泉窯系青磁皿 猿型土製品	158
SK368	S368	土坑	L33区	16世紀前葉～中葉	京都系土師器 1期	159
SK371	S371	土坑	L33区・M33区	16世紀後葉～末葉	中国景德鎮窯系青花皿 翡翠輪 京都系土師器 3期 備前系陶器(放射状スリメ)	159
SK379	S379	土坑	M30区		備前系陶器(放射状スリメ)	163
SK380	S380	土坑	M30区	16世紀後葉～末葉	中国景德鎮窯系青花碗 京都系土師器 3期	164
SK381	S381	土坑	L33区	16世紀中葉～後葉	中国産白磁皿 京都系土師器 2期	165
SK383	S383	土坑	L34区・M34区		瓦質土器鉢	166
SK385	S385	土坑	L31区・M31区	16世紀中葉～後葉	中国龍泉窯系青磁碗 京都系土師器 2期 備前系陶器(放射状スリメ)	166
SK386	S386	土坑	M32区	14世紀前半	在地系土師質土器杯	167
SK439	S439	土坑	M31区・M32区	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器小皿・皿・杯	168
SK457	S457	土坑	K33区		華南三彩	170
SK465	S465	土坑	M30区	16世紀末葉	肥前系陶器皿 京都系土師器 3期	174
SK484	S484	土坑	M32区		瓦質土器鍋	174
SK545	S545	土坑	N30区		瀬戸美濃系陶器天目碗 銭貨	174
SK580	S580	土坑	K33区		朝鮮産陶器碗(形三島)	175
SK583	S583	土坑	M33区	14世紀前半	在地系土師質土器杯	175
SK702	S702	土坑	M30区	16世紀後半	中国南部産黒釉陶器蓋 中国漳州窯系磁器皿 京都系土師器 2期	176
SX124	S124	集石遺構	L30区	16世紀後葉	中国龍泉窯系青磁香炉 瀬戸美濃系天目碗	178
SX126	S126	集石遺構	L30区・M30区	16世紀後葉	瓦質土器火鉢	178
SX284	S284	集石遺構	L30区・M30区	16世紀後葉	京都系土師器 2・3期 ガラス小玉	180
SX458	S458	集石遺構	M30区	16世紀後葉	京都系土師器 2・3期	180
SX585	S585	土坑	M30区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2期	180

第1節 調査の概要

第5表 第13次調査区遺構一覧表③

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期		掲載頁
SX551	S551	石積遺構	M30区・N30区	16世紀中葉～末葉	中国産白磁皿 中国産青磁皿 京都系土師器2・3期	185
SX705	S705	埴地層	M30区	16世紀中葉～後葉	中国景德鎮窯系青花皿 京都系土師器2期	193
SX706	S706	埴地層	M30区・N30区	16世紀中葉～後葉	中国産白磁皿 中国産青磁皿 京都系土師器2期	193
SX707	S707	埴地層	M30区・N30区	16世紀中葉～後葉	中国景德鎮窯系青花皿 京都系土師器2期	193
SE253	S253	井戸	L33区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器3期	205
SE266	S266	井戸	L32区・L33区	16世紀後葉～末葉	中国景德鎮窯系青花皿 翡翠釉 京都系土師器3期	205
SE286	S286	井戸	L32区・M32区	16世紀後葉～末葉	大観通寶	210
SE377	S377	井戸	L32区・L33区	16世紀後葉	タイ産練り上げ手クンディ形水注 中国産褐釉陶器壺 京都系土師器3期	216
SE384	S384	井戸	L30区	16世紀後葉～末葉		217
SB388	S388	不明	L32区			223
SB389	S389	不明	L33区・L34区			223



第171図 第13次調査区遺構配置図 (1/150)

第2節 遺構と遺物

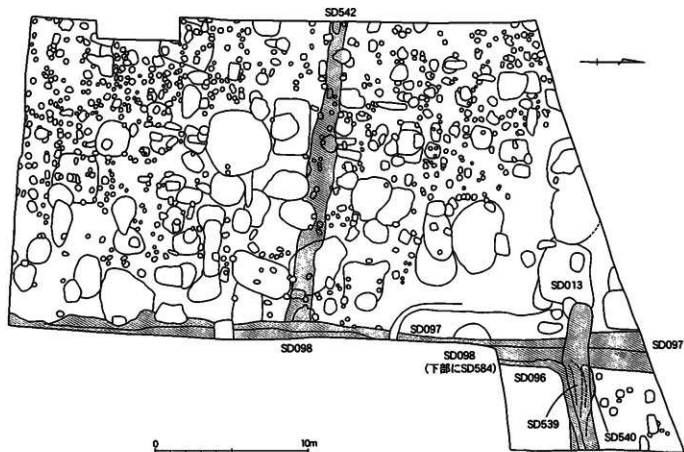
1. 溝

概要 (第172図)

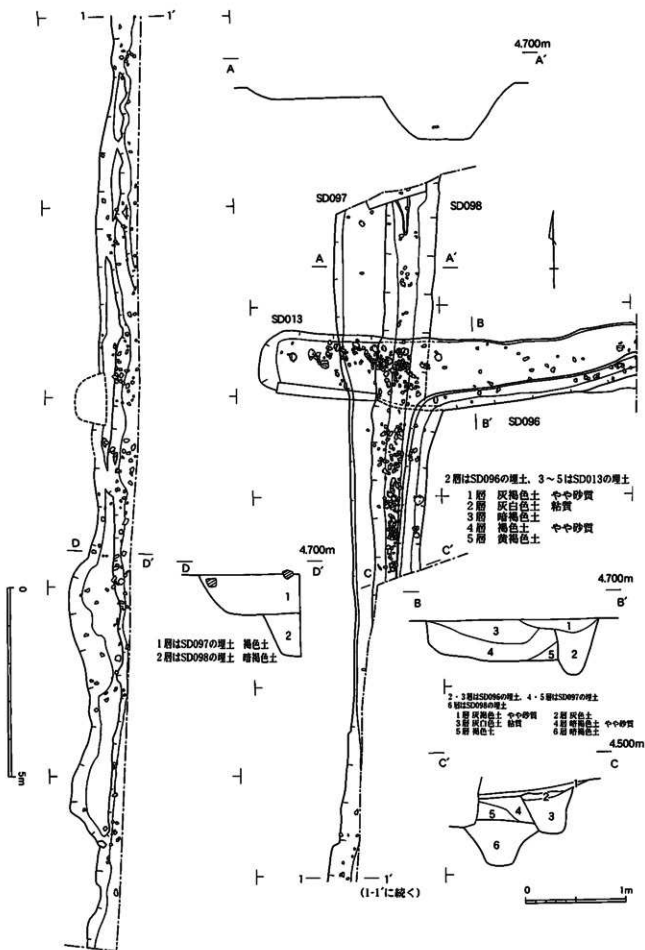
本調査区では9条の溝が検出され、そのうち7条は調査区東側に集中していた。調査区の北側から掘り進んだため、まずSD013とSD097を検出した。さらにSD097に沿うように走り、途中で東に直角に折れるSD096を検出した。これらはいずれも埋土上層で肥前系陶器が認められたことから構築及び廃絶時期は17～18世紀であると考ええる。SD097は当初、SD013と同様に幅2～3mの浅い溝状遺構との認識で掘り進めていたが、その下位で近世遺物を含まないさらに深い溝(SD098)が検出された。SD098は出土遺物から16世紀後半以降に構築されたと考ええる。この溝は調査区東端を南北に貫き、南側に隣接する第21次調査区に続いており(SD087)、その位置から町屋の裏(東側)を画する溝と考える。

SD098の北側下位では、16世紀中葉に構築された溝SD584がほぼ同じ位置で検出された。それを切って、SD096同様、東に折れる溝SD539からは肥前系陶器が出土している。SD539の北側に沿って走るSD540からは京都系土師質土器の小破片が出土した。

この他、東西に走る溝を2条確認にした。1つはSD542で、もう1つはSX551である。SX551はM30区、N30区で検出された石列・石積遺構に伴う溝ということで、「4. 集石遺構」で触れることにする。SD542は重複関係にある遺構からすべて切られていることから、本調査区の16世紀代の遺構としては最も古い段階の遺構と考える。溝の軸はW-9°-Nである。



第172図 第13次調査区溝状遺構配置図 (1/250)



第173図 SD013・SD096・SD097・SD098 実測図 (1/80・断面は1/30)

SD013 (第173図)

調査区北東部M30区・N30区で検出した深さ0.5mの浅い溝である。調査区内では幅約1.5m、長さは約10m確認されたが、さらに東へ伸び、第7次調査区へと続いている。SD096・SD097・SD098と前後関係をもち、遺構の構築順序はSD098→SD097→SD013→SD096となる。出土遺物等から、この溝の構築年代は17世紀前半、廃絶時期は18世紀と考える。

SD013出土遺物 (第175図)

1は伊万里の染付碗。底径は4.8cm。2は肥前の青磁碗、17世紀中葉の所産である。3は肥前系陶器の片で、17世紀末から18世紀前半のものである。4は瓦質土器をメンコに転用したものである。5は土鏝である。

SD096 (第173図)

肥前系磁器

SD097・SD098と併行して南北に5mほど走った後、東に折れて、第7次調査区へと続いていく溝である。幅約0.8m、深さ約0.6mを測る。埋土中からは、礫や京都系土師器の細片に混じって、肥前系磁器碗が出土している。SD013との前後関係及び出土遺物から、本遺構の構築年代は18世紀前半以降と考える。

SD096出土遺物 (第174図)

1は18世紀前半の肥前系磁器碗の底部である。

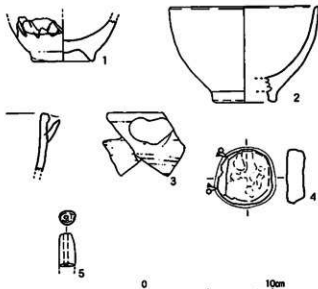
SD097 (第173図)

調査区東隅で検出された南北に縦断する溝である。このSD097はさらに南へ伸びて、第21次調査区のSD087に続いている。当初、SD013と同様に幅2m程度の浅い溝状遺構との認識で掘り進めていたが、その下位で近世遺物を含まない、さらに深い溝が検出されたためSD098として区別した。SD097は溝の東半分が調査区外に及ぶため、正確に把握できていないが、幅1.5m～2m、深さ30cmの規模をもつと考えられる。この溝はSD098以外に、SK279・SK355・SK357・SK360等と切りあい関係にあり、すべてを切っている。なかでもSK357から16世紀後半～末葉に比定される京都系土師質土器片が出土していることから、SD097は早くとも16世紀後半～末葉段階以降に掘られたことになる。また、SD013との前後関係から17世紀の早い段階には廃絶されていたと考えられる。

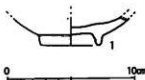
SD097出土遺物

(第176図)

1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類E群に比定される資料である。胴部外面下位に毛彫りが施されている。2は朝鮮系(?)白磁の皿で、見込みに蛇の目軸はぎと砂目積みが認められる。3は唐津系陶器皿で16世紀末から17世紀初頭に



第175図 SD013 出土遺物実測図 (1/3)

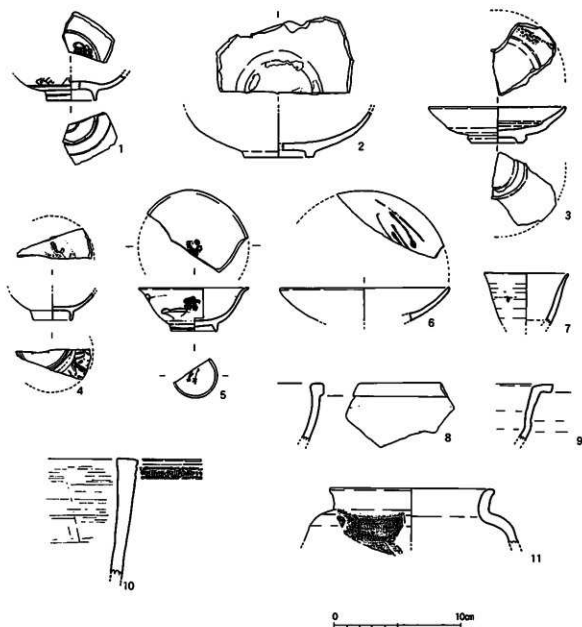


第174図 SD096 出土遺物実測図 (1/3)

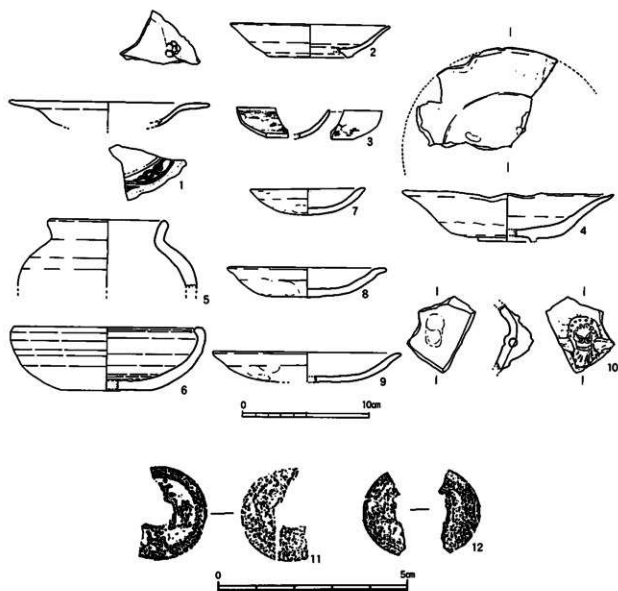
比定される。4・5は肥前系磁器碗で、4は17世紀後半の製品であり、5は内外面にコンニャク印判の五弁花文をもつ18世紀の所産。6は18世紀初頭の肥前系磁器皿、7は肥前系磁器の小鉢。8・9は17世紀後半から18世紀前半の肥前系陶器鉢。10は瓦質の火鉢。口縁部外面にある2条の突帯の間に雷文の刻印がみられる。11は備前系陶器の小壺である。4～9の遺物については、SD013・SD096付近で検出されたもので、そちらからの混入品の可能性が高い。

SD098 (第173図)

SD097の下位で確認した溝。SD097同様、調査区東側を南北に縦断し、第21次調査区へと続く。幅約1.1m、深さ約0.5mの規模をもつ。出土遺物と切り合い関係から16世紀後葉に構築された溝である。



第176図 SD097 出土遺物実測図 (1/3)



第177図 SD098 出土遺物実測図 (1/3 ※錢貨は1/1)

SD098出土遺物 (第177図)

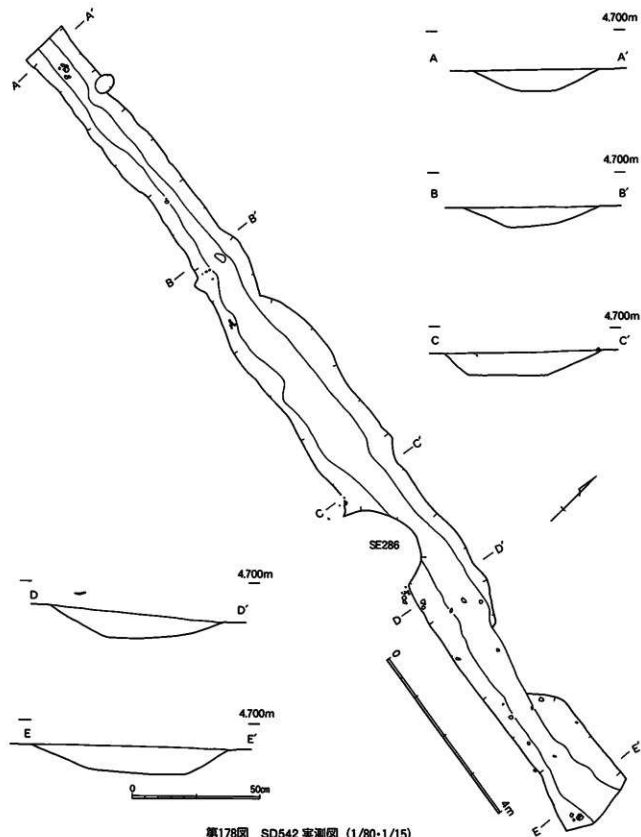
景徳鎮窯系
青花皿

1は中国景德鎮窯系青花皿で小野分類のF群と思われる。二次的に熱を受けている。2は中国産白磁皿、3は内面黒塗りの肥前系の皿で、1690年～1740年代の製品である。これはSD097のものか。4は肥前系陶器皿で、鉄絵が施されており、見込みには胎土目がみられる。1590年～1600年代の所産。5は肥前系陶器の小壺。6は肥前系陶器の碗。7～9は京都系土師器皿で、7は口唇部に内外面ともスガが付着しており、灯明皿として使用されたもの。8は器壁が厚く、口縁部のナデが明瞭であることから、塩地編年の3期に比定される。10は瓦質の茶釜の把手部分。11は「元豊通寶」(初鋳1078年)で、12は判読不明である。

SD542 (第178図)

調査区中央部を東西に走る溝がSD542である。この溝は、調査の最終段階において確認したもので、重なる他のすべての遺構から切られている。また、出土遺物については、14世紀中葉～後葉の在地系土師質土器の小皿と坏が主にSK439に近いM32で出土している。その他、京都系土師器1期末及び2期の細片が数点出土しており、他遺構との切り合い関係からも、16世紀代では最も古い段階の遺構と考える。規模は幅1.5m、深さ約0.4mの浅い断面逆台形の溝である。軸はW-9°-Nである。

第2節 遺構と遺物



第178図 SD542 実測図 (1/80・1/15)

SD542出土遺物 (第180図)

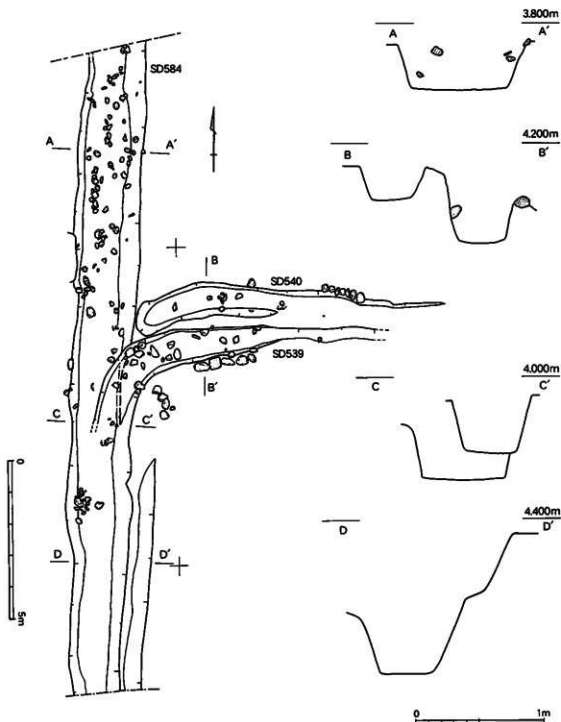
在地系土師質土器皿 1は在地系土師質土器小皿で口縁部が短く立ち上がる。底部には回転糸切りの後、板状圧痕が認められる。2～4は在地系土師質土器環で、底部から口縁部にかけて直向気味に立ち上がる。5は瓦質の土鍋である。

SD584 (第179図)

調査区北東部のM30区・M31区で、SD098の下位で確認された。残存長は約15m、幅約1m、深さ約60cmを測る。埋土中からは礫に混じって、若干の遺物が出た。出土遺物より構築年代は16世紀中葉～後葉と考えられる。

SD584出土遺物 (第181図)

1は京都系土師器皿で、塩地幅年の2期にあたる。2の銭貨は「大観通寶」(北宋・1107年初鑄)



第179図 SD539・SD540・SD584 実測図 (1/120・1/30)

SD539 (第179図)

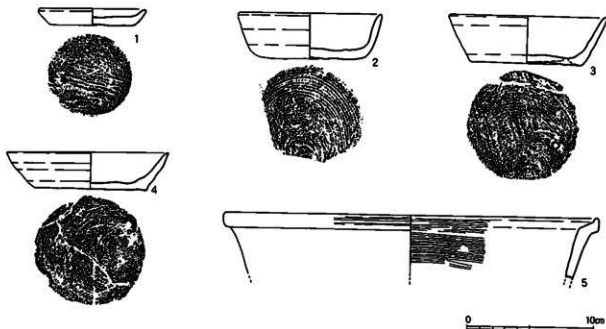
本溝はSD584を切って掘られており、SD096同様、東に直角に屈折する。幅約60cm、深さ約50cmの規模を持ち、断面逆台形を呈している。

SD539出土遺物 (第182図)

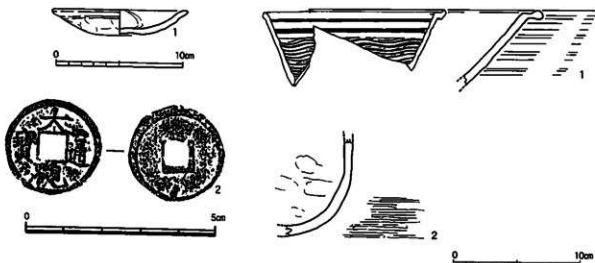
1は肥前系陶器の鉢。2は瓦質の鍋で、外面にススが付着している。

SD540 (第179図)

本遺構はSD539と併行して、その北を東西に走っている。残存長は約8m、幅約50cm、深さ約30cmの小型の溝である。出土遺物が京都系土師質土器の小破片であること、位置がSX551内であることから、SX707等と同様に、単なる整地層の可能性も否定できない。



第180図 SD542 出土遺物実測図 (1/3)



第181図 SD584 出土遺物実測図 (1/3) 鉢は1/1)

第182図 SD539 出土遺物実測図 (1/3)

2. 土坑

概要 (第183図)

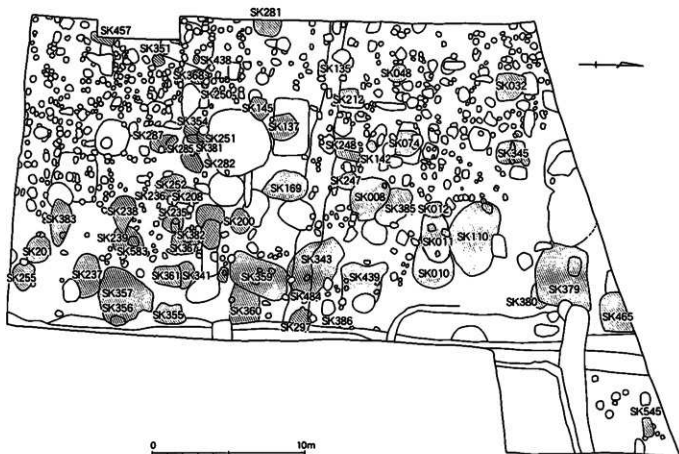
本調査区では、100を超える土坑が検出されている。その時期は14世紀代と16世紀代に大別されるが、14世紀代の土坑は数基しかなく、その大半は16世紀代のものである。

14世紀代の土坑としては調査区中央部東側で確認されたSK439がある。東西約4.2m、南北約4.0m、深さ20cmほどの浅い掘り込み、土師質土器が一括廃棄された状態で検出された。他時期の混入もなく、小皿、小形の杯、杯の良好なセットが出土している。

16世紀代の土坑の大半が遺物以外に炭や焼土および糠が混じった廃棄土坑としての機能をもつものである。その他、SK032に代表される火災処理土坑、SK008に代表されるように内部で石列が確認された土坑、SK250のように備前系火甕を据えるための土坑、さらにSK248のような土坑墓の可能性のある土坑等がある。これらの土坑の規模については、町屋の建物に近い西側は小さく、建物から離れる東側は大きくなる傾向がある。

土坑から出土した遺物の中では、SK011から出土したヴェロニカモチーフのメダイが特筆であろう。メダイは直径約2.0cmの円形をしており、その厚さは2mm、重さは2gを測る。その材質は鉛と錫の合金である。その一方には背景にヴェールのようなものが表現されたキリストの顔を、他方には聖母子像を浮き彫りで描いている。

以下それぞれの遺構の詳細について報告する。



第183図 第13次調査区土坑配置図 (1/250)

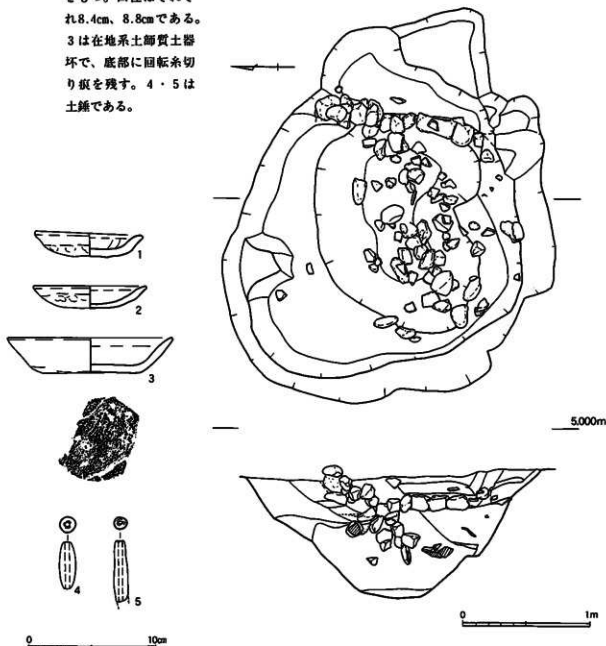
第2節 遺構と遺物

SK008 (第185図)

調査区中央部の L31区・L32区に跨って検出された土坑である。SK247 (16世紀中葉～後葉) 及び SK385 (16世紀中頃～後葉) を切っている。形態は長さ3.0m、幅2.5m、深さ1.0mの不定円形プラン頭大の石列ンをしている。この土坑の東側上面付近でN-10°-Eに並んだ人頭大の石列を1.3mほど確認した。当初、倉庫・トイレ等として機能していた可能性がある。土層観察から、その後一気に、石とともに埋没し、その上層は不定形の浅い廃棄土坑となったことが伺える。出土している京都系土師器の時期から、当初の構築年代は16世紀後葉～末葉に比定できる。

SK008出土遺物 (第184図)

1～3の土師質土器はいずれも下層から出土している。1・2は京都系土師器皿で、器壁の厚い1は埴地編年3期の特徴をもつ。口径はそれぞれ8.4cm、8.8cmである。3は在地系土師質土器で、底部に回転糸切り痕を残す。4・5は土埴である。



第184図 SK008 出土遺物実測図 (1/3)

第185図 SK008 実測図 (1/30)

SK010 (第186図)

調査区中央やや北寄りのM31区で、SK010・SK011・SK012・SK015の4基の土坑を重なり合った状態で検出した。表面及び土層観察(第186図)の結果、構築年代はSK010→SK011、SK015→SK012→SK011である。

SK010は径3.5m、深さ0.9mの円形土坑である。断面観察から掘り直しが確認されたが、遺物検出時に、新旧土坑のプランは検出できなかった。上層の埋土中からは準大から人頭大の川原石に混じって、土器等の遺物が見られた。しかし、下層埋土中にはほとんど遺物が見られなかったため、上下層における時期差は確認できなかった。この土坑の時期については、出土した京都系土師器の特徴から16世紀前半～中葉と考える。

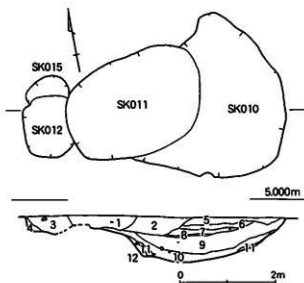
SK010出土遺物(第187図)

中国南部系黒
軸陶器壺蓋

図化した遺物はすべて、上層の川原石に混じって出土したものである。1は蓋で、口縁外面と内面
に黒軸が施され胴部外面以下は露胎となっている。中国南部系の黒軸陶器四耳壺とセットとなる蓋か。
2、3は京都系土師器皿で、塩地編年1期末の特徴をもつ。4は土師質土器坏で、底部に回転糸切り
痕を残す。

SK011 (第189図)

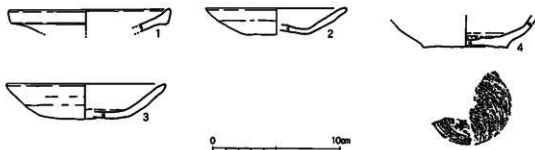
この土坑は、SK010及びSK012が埋没した後に掘られたもので、長さ約3.0m、幅約2.0m、深
16世紀後半～約0.4mの規模をもつ長円形プランである。出土遺物は少なく、土師質土器も細片のみで、時期否
本葉



1・2層はSK011の埋土、3、4層はSK012の埋土、5
～12層はSK010の埋土

- 1 褐色土 (Hue7.5YR4/3) 炭・焼土を若干含む
- 2 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) 炭・焼土を含む
- 3 褐色土 (Hue7.5YR4/6) 炭・焼土を含む
- 4 明褐色砂質土 (Hue7.5YR5/8)
- 5 明褐色土 (Hue7.5YR6/8)
- 6 にぶい褐色土 (Hue7.5YR5/4)
- 7 褐色土 (Hue7.5YR4/3) 炭を含む
- 8 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) 炭を多く含む
- 9 褐色土 (Hue7.5YR4/4) 土器・炭を含む
- 10 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) 炭・焼土を含む
- 11 褐色砂質土 (Hue7.5YR6/4)
- 12 明褐色砂質土 (Hue7.5YR5/8) 地山の崩壊土

第186図 SK010・SK011・SK012・SK015 配置図及び土層断面図 (1/80)

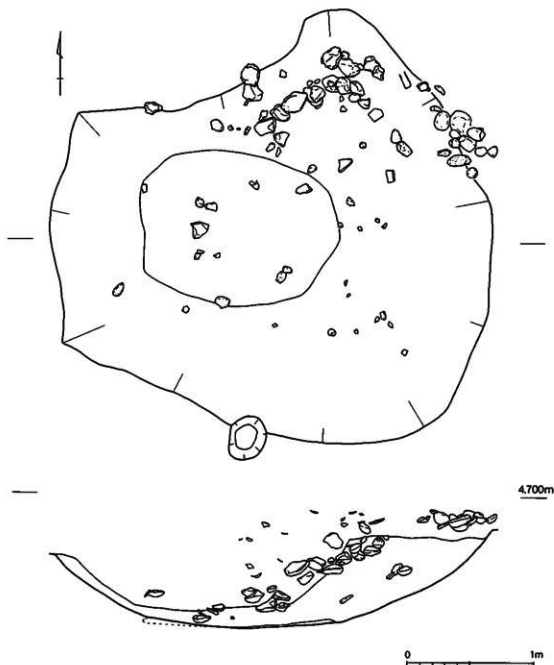


第187図 SK010 出土遺物実測図 (1/3)

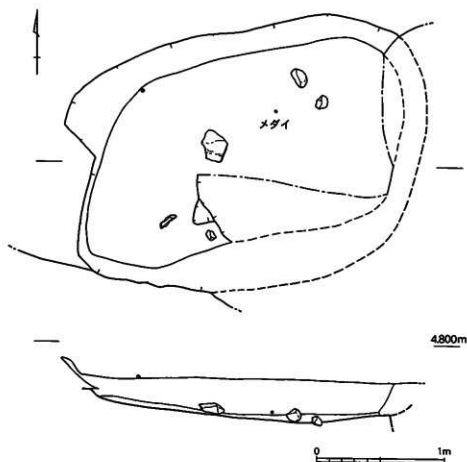
定は困難であるが、SK010及びSK012との前後関係より、16世紀後葉から末で捉えられよう。

SK011出土遺物 (第190・191図)

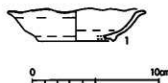
ヴェロニカメダイ 第191図3はヴェロニカモチーフのメダイである。メダイは直径約2cmのほぼ円形で、厚さ約2mm、重さ2.0gで、材質はピューター（鉛と錫の合金）である。上部に一部欠損がみられるが、ここには元々鉛と錫の合金紐を通すための紐があったと思われる。表裏両面に図が描かれており、一方の面にはキリストの顔が、他方には聖母子像（キリストを抱くマリア）が浮き彫りで描かれている。キリストの描写の背景にはヴェールのようなものが表現されていることから、「ヴェロニカの御影」を描いたものとする。聖母子像の方には、マリアの下方にマントが描かれ、マリアの背面に光背がはっきりと描かれている。



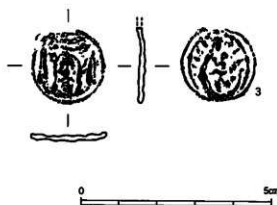
第188図 SK010 実測図 (1/30)



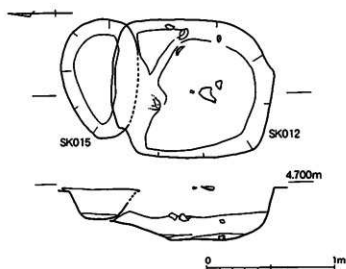
第189図 SK011 実測図 (1/30)



第190図 SK011 出土遺物実測図 (1/3※銭貨は1/1)



第191図 SK011 出土メダイ実測図 (1/1)



第192図 SK012 実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物

第190図 1は中国産白磁稜花皿。2は宋銭の「元豊通寶」(1078年初鑄)である。

SK012 (第192図)

SK011に先立って掘られた土坑である。長辺1.3m、短辺1.1m、深さ0.45mの楕円形プランである。

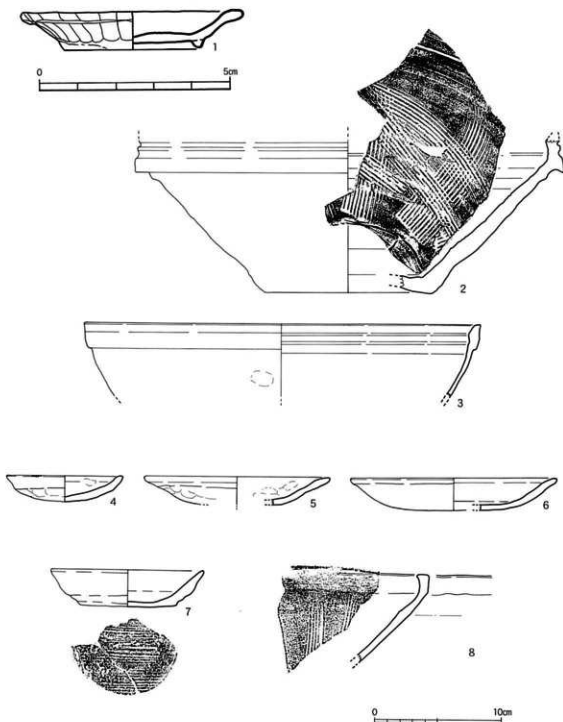
この土坑の構築時期は、出土した京都系土師器が塩地編年の2期の特徴をもつこと、さらにSK011

16世紀中葉～との前後関係を考慮して、16世紀中葉～後葉と考える。

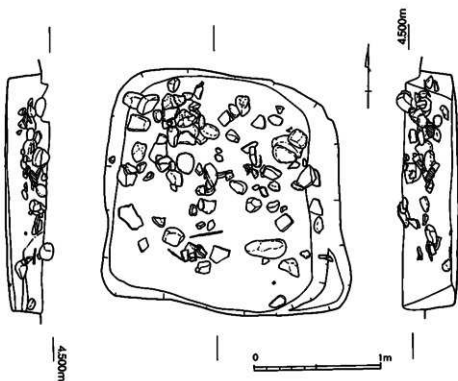
後葉

SK012出土遺物 (第193図)

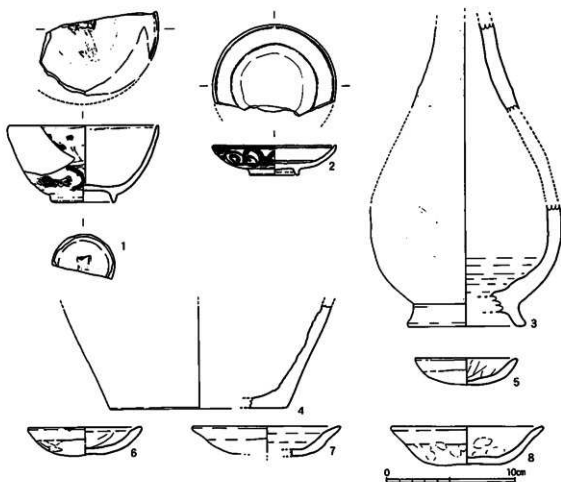
中国産翡翠釉 1は中国産翡翠釉の皿である。口径6.0cm、器高1.0cmを測る。2は備前系陶器の播鉢。ナナメ摺目



第193図 SK012 出土遺物実測図 (1/3※翡翠釉は1/1)



第194図 SK032 実測図 (1/30)



第195図 SK032 出土遺物実測図 (1/3)

をもち、乗岡幅年に示す近世I期段階のものである。これは埋土の最上面で出土したもので、SK011の混入品と思われる。3は中国南部産と思われる焼締陶器鉢である。4～6は京都系土師器の皿で、それぞれ口径9.0cm、14.6cm、16.1cmを測る。7は在地系土師質土器坏で、底部に回転糸切り後に付いた板状圧痕が確認できる。8は瓦質土器の摺鉢である。

SK032 (第195図)

調査区北寄りのL30区・L31区に跨って確認された土坑である。一辺1.9mの正方形をした土坑で、深さ0.6mを測る。土坑軸は真北から若干東に振っている。埋土には多量の焼土が含まれていたこと火災処理土坑から、火災処理土坑と考える。その焼土に混じって、拳大から人頭大の礫、さらには輸入陶磁器、土師器などが出土した。それらの遺物から、この土坑が掘られた時期は16世紀後葉～末葉に比定できる。

SK032出土遺物 (第195図)

1は中国景德鎮窯系青花碗で小野正敏分類のE群にあたり、16世紀後半の所産である。2は中国漳州窯系の青花皿で高台付近と内底部が露胎となる。3は中国龍泉窯系青磁瓶。4は備前系陶器甕の底部。5～8は京都系土師器皿で埴地幅年の3期に分類される。それぞれの口径は8.0cm、8.9cm、11.4cm、11.9cmである。

SK044 (第197図)

調査区北寄りのL31区、SK008の西で確認された土坑である。長辺1.3m、短辺1.1m、深さ0.6mの円形プランである。土坑内からの土器や礫の出土は少ないが、京都系土師器の形態から16世紀前葉～中葉に位置づけられる。

SK044出土遺物 (第196図)

1～3はいずれも京都系土師器皿である。口径は12.9cm、14.7cm、16.1cmで、その形態から埴地幅年のI期末に属するものである。

SK048 (第199図)

SK048はK31区とL31区に跨って検出された土坑である。



第196図 SK044 出土遺物実測図 (1/3)



第198図 SK048 出土遺物実測図 (1/3)



第197図 SK044 実測図 (1/30)



第199図 SK048 実測図 (1/30)

長辺1.0m、短辺0.9m、深さ0.3mの円形プランである。土坑底の西寄りで径25cm、深さ10cmほどの掘り込みが確認されことから、建物の柱穴の可能性が高い。土坑内からの出土遺物が少なく土、時期を確定するには至らなかった。

SK048出土遺物 (第198図)

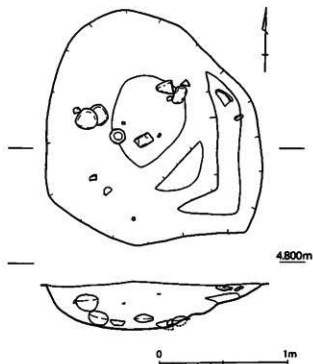
1は銅製品。全長10.8cm、幅・厚さは0.5~1.0cm。全面に金箔をはる。先端がL字状を呈し、表裏に各々2箇所の凸部を持つ。形鑑から鍵として機能していたものか。

SK074 (第200図)

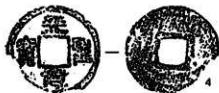
SK074はL31区で検出された土坑で、数基の土坑やピットと切り合い関係を持つ。長辺1.9m、短辺1.7m、深さ0.4mの楕円形プランである。床面直上から出土した京都系土師質土器の器形から本土坑の廃絶時期は16世紀後葉~末葉に位置づけられる。

SK074出土遺物 (第201図)

1は京都系土師器の皿で、器壁が厚く、高い器高をもつ形鑑は埴地編年の3期に属する。2・3は中国産翡翠輪の小皿。4・5は銭貨。4は北宋の「天聖元寶」(初鑄1023年)である。5は推定直径36mmと大型の銭貨である。錆が付着して銘は確認できなかった。



第200図 SK074 実測図 (1/30)

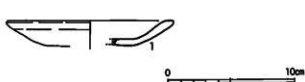


第201図 SK074 出土遺物実測図 (1/1, 1は1/3)

鍵?

16世紀後葉~
末葉

大型の銭貨



第202図 SK089 出土遺物実測図 (1/3)

SK089 (第203図)

調査区北寄りL31区で検出された浅い土坑である。平面楕円形プランで、規模は長軸0.6m、短軸0.4m、深さ15cmの小土坑である。

床面から浮いた状態で、京都系土師器片が数個確認できた。その姿形から、本土坑は16世紀前半～中葉に位置づけられる。

SK089出土遺物 (第202図)

京都系土師器 1 期末 1 は京都系土師器皿で、塩地編年の1期末に属する。推定口径は13.1cmである。

SK110 (第204図)

調査区北寄りL31区・M31区で検出された土坑である。南接するSK010を切って構築されている。平面楕円形プランで、規模は長軸4.9m、短軸3.5m、深さ1.5mの大型土坑である。若干の焼土と炭を含んだ埋土中から、10cm～40cm大の隙が底までびっしりと土坑を埋めた状態がみられた。この隙の間から陶磁器類や土師器等の遺物が出土している。それらの中には被熱したものも確認された。土層観察から土坑内で焼かれたものとは考え難く、外部で被熱したものを廃棄したものと考えられる。

また、土坑の西側では上面で石列が2m確認された。本調査区ではSK008、SK169等で同様の構造を確認しているが、その機能については不明である。

隙の廃棄状況や埋土の状況、遺構の平面プラン、さらには床面の状況から、本家東西の2基の土坑井戸の可能性であったとも考えられる。特に隙の出土の少ない東半分の掘削は砂層まで達しており、湧水が認められた。床面から1.5m×1.0m×深さ0.4mの隅丸方形プランの掘方検出されており、井戸であった可能性も否定できない。

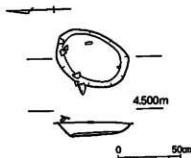
出土遺物の年代観から、本遺構は16世紀後半～末葉に構築されたと考える。

SK110出土遺物 (第205～208図)

京都鎮窯系青花碗 1・2は中国景德鎮窯系青花碗である。1は連子碗と通称されるC群青花碗で、胴部外面に芭蕉葉文を描く。見込みの文様は欠損のため不明である。16世紀前半の所産。3は韓国 洲窯系青花碗。4～6は中国景德鎮窯系青花碗である。4は萼筒底を呈するC群青花碗、5はE群青花碗で、外面(内底部)には銘款の一部が認められるが、その詳細は読み取れない。6はF群青花碗で、内底部には二重圓線内に「永保長春」銘が認められる。口径は20.0cmである。7は中国龍泉窯系青磁碗の底部で、15世紀～16世紀の所産。

ナメスリメ 8は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。9、10は備前系陶器の摺鉢で、ナメスリメをもつ。そのうち10は見込みにもスリメをもつ。この形態は桑園編年の近世I期の段階にあたる。11は備前系陶器の鉢。口径は26.0cmを測る。

12～18は京都系土師器である。12～17は器高の低い皿で、18は器高の高い杯である。皿に関しては器壁が厚く、口縁部下のナデもしっかりしたものが見受けられることから、京都系土師器3期の段階と考えられる。口径は8～9cmのものと12cm前後のもの2法量である。13、14の皿は口唇部にススが付着しており、灯明皿として使用されたものである。



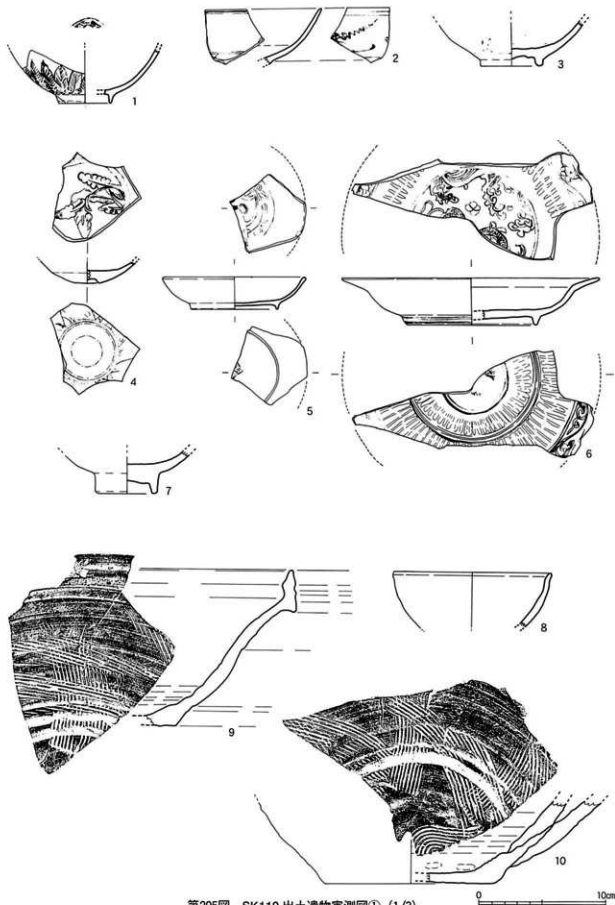
第203図 SK089 実測図 (1/30)

19～32は瓦質土器である。20は胴部に把手をもつ茶釜である。胴部の突帯がはずれている。胴部径は24cm。20は羽釜で、外面突帯下にススが付着している。21は風炉で口縁外面に刺突がみられる。22は鉢鉢で、ナナメ方向のスリメをもつ。23～28は火鉢で、口径は32～42cm。25は口縁部下に2条の突帯を有し、その間に巴文をスタンプしている。26と27は同一個体と思われる火鉢で、底部には板状の脚をもつ。29～31は鉢。32は焙烙の把手部分。33は瓦質の碗。断面が三角形の高台を有す。

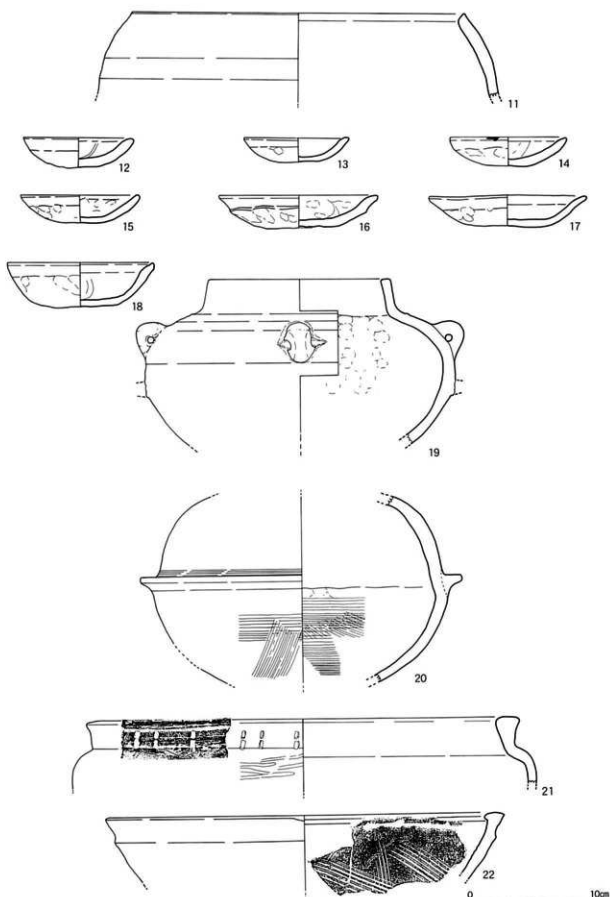
34の茶臼は砂岩製。35は頁岩製の硯。36、37の土鍋は、中世のものと考えられる。38は北宋の「皇榮通寶」で1038年初鑄。



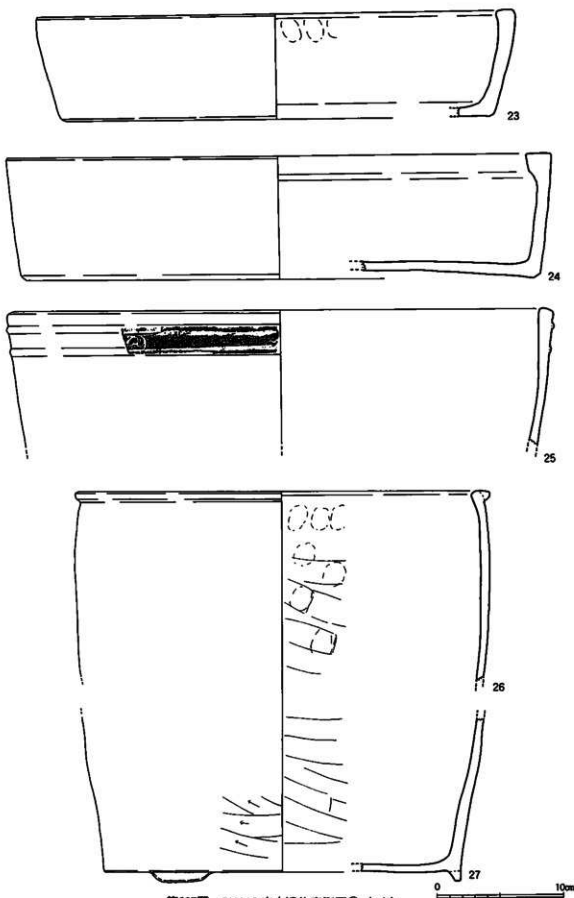
第204図 SK110 発掘図 (1/40)



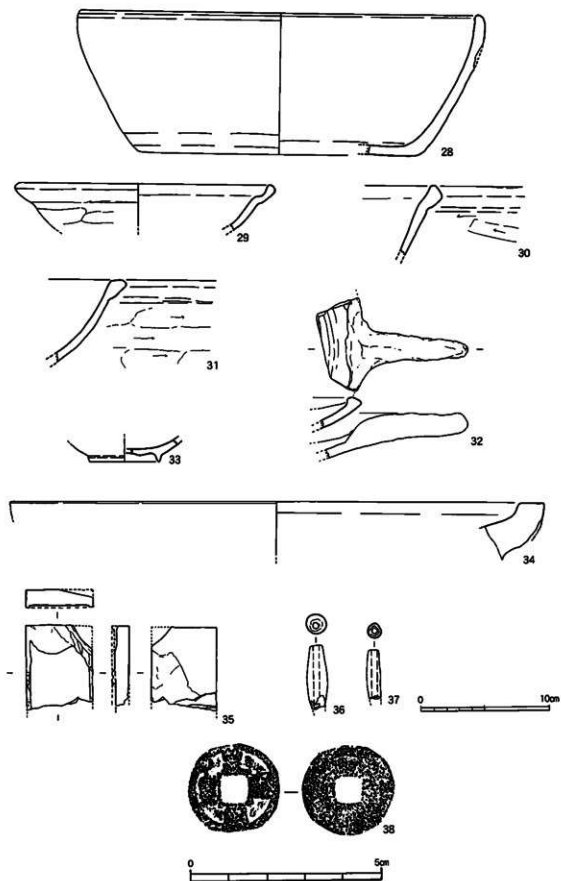
第205図 SK110 出土遺物実測図① (1/3)



第206図 SK110 出土遺物実測図② (1/3)



第207図 SK110 出土遺物実測図③ (1/3)



第208図 SK110 出土遺物実測図④ (1/3 ※銭貨は1/1)

SK135 (第209図)

調査区L32区で検出された小形の土坑である。溝SD429を切って掘られている。平面隅丸方形プランで、規模は長軸0.7m、短軸0.4m、深さ20cmの土坑である。遺物や礫は床面から浮いた状態で出土している。その中に時期を認定できるものが希少であるため、本土坑の時期については言及しがたいが、層位的にみて16世紀代であるといえる。

SK135出土遺物 (第210図)

1は瓦質の鉢で、底部に回転糸切り痕が認められる。

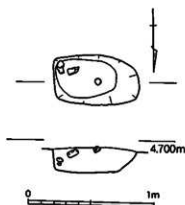
SK137 (第212図)

L32区で検出された土坑で、SB388を切って構築している。土坑の形態は径2～2.3mの楕円形を呈しており、その深さは45cmほどである。埋土の中間層に5cmの厚さで炭化物の層が確認された。これはこの土坑内で焼却行為がなされたことを示している。炭化物層及びその上面から礫に混じって陶器や土師質土器等の遺物が出土している。その中には、漆器碗も確認されたが、状態が悪く取り上げることができなかった。

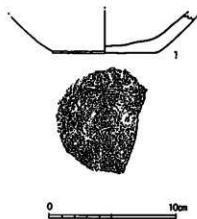
本土坑の時期については、出土した土師質土器小皿は古い様相を呈しているが、層位的にみて16世紀代であるといえる。

SK137出土遺物 (第211図)

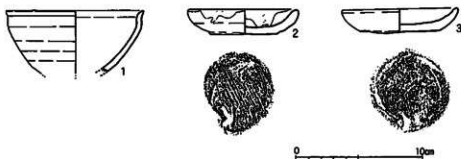
1は瀬戸美濃産の天目碗で底部が欠損している。2・3は在地系土師質土器小皿で、口径は9cm程度。2は底部には回転糸切り後に板状圧痕、口唇部には内外面ともススの付着が認められる。灯明皿として使用されたもの。



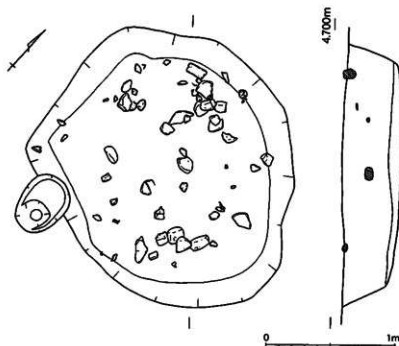
第209図 SK135 実測図 (1/30)



第210図 SK135 出土遺物実測図 (1/3)



第211図 SK137 出土遺物実測図 (1/3)



第212図 SK137 実測図 (1/30)

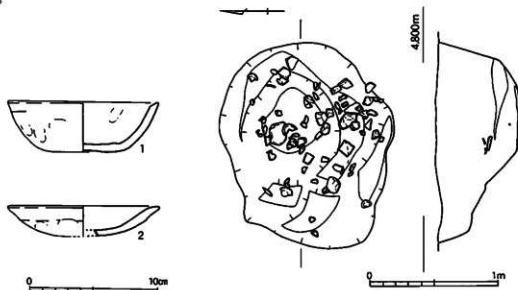
SK145 (第214図)

L32区で検出された土坑で、井戸SE266を切って掘られている。土坑の形態は平面楕円形をしており、長軸1.7m、短軸1.3mを測る。その深さは65cmほどである。暗茶褐色の埋土中から10~20cm大の礫に混じって、土師質土器等の遺物が出土した。

16世紀末葉 本土坑の時期については、出土した京都系土師器の年代観からみて、16世紀末葉に位置づけられる。

SK145出土遺物 (第213図)

京都系土師器 3期 1・2は京都系土師器である。1は器高の高い坏で、口径11.6cm、器高4.0cm。2は京都系土師器皿で、器壁が厚く、口縁部のナデがしっかりしている。いずれの京都系土師器も塩地轆年の3期に属する。



第213図 SK145 出土遺物実測図 (1/3)

第214図 SK145 実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物

井戸SE384に
切られた土坑

SK169 (第215図)

調査区中央部L32区で検出された土坑で、井戸SE384と切り合い関係をもつ。構築順序はSK169→SE384である。土坑の形態は平面楕円形をしており、長軸2.6m、短軸2.0mを測る。その深さは65cmほどである。暗茶褐色の埴土中から10～20cm大の礫に混じって、陶磁器類や土師質土器等の遺物が出土した。土坑の北側の上面から、同レベルで東西に並ぶ20cm大の石列を1mほど確認した。

本土坑の時期については、出土した京都系土師器の年代観からみて、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。

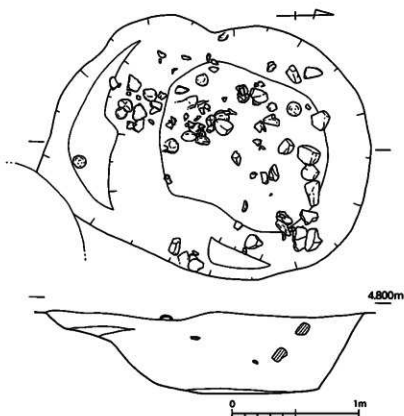
SK169出土遺物 (第216図)

中国産白磁皿 1は中国産の白磁皿で、菊花状の単位をもつ。16世紀の所産。2～8は京都系土師器である。口径が9cm前後の皿(2,3,4)は器壁が厚い。口径11cm～13cmのもの(5,6,7)は6のように器壁の若干薄いものはあれども、概ね厚く、口縁下外面に強いヨコナデが施されている。8は京都系土師器坏で、これらの土師器は埴地編年の3期の特徴を有している。

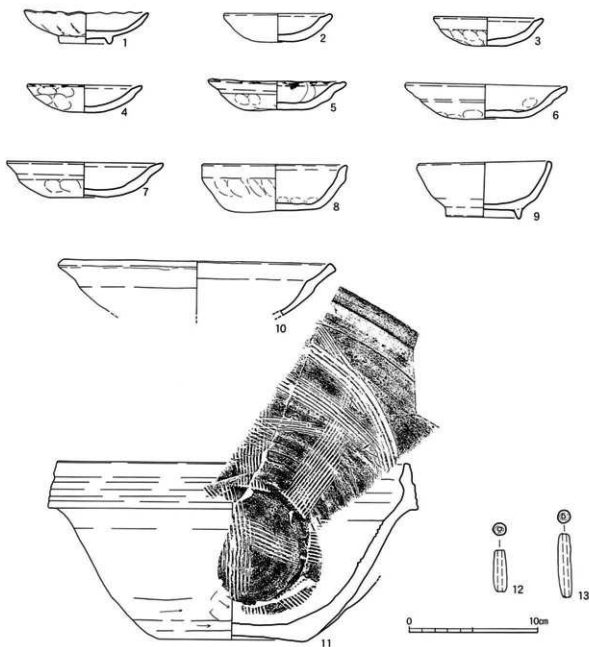
9は瓦質土器碗で底部に断面三角形の高台を付す。10は瓦質鉢。11は備前系陶器の摺鉢で、放射状ナメスリメスリメに加えて、ナメメ方向のスリメが付加されており、また、見込みにもスリメを入れている。乗岡編年近世1期に帰属するものと考えられる。12・13は土罐である。

SK181 (第217図)

M32区・M33区に跨って検出された浅い土坑である。形態は平面隅丸方形プランをしており、長軸1.1m、短軸0.7mを測る。その深さは15cmほどである。20cm大の礫に混じって、土師質土器等の遺物が出土した。



第215図 SK169 実測図 (1/30)

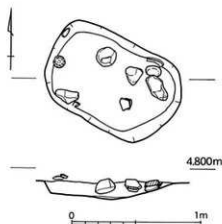


第216図 SK169 出土遺物実測図 (1/3)

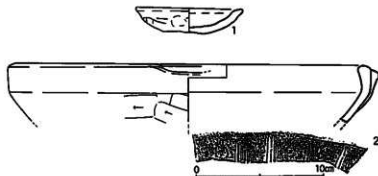
16世紀後葉～末葉 SK181の構築時期については、出土した京都系土師器の年代観からみて、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。

SK181出土遺物 (第218図)

1は京都系土師器皿。口径8.4cm。器壁が厚く、口縁部下外面のヨコナデもしっかり施されている。塩地福年
京都系土師器の3期に属する製品である。2は瓦質土器の播鉢。口径28. cmを測る。放射状スリメは確認できるが、胴下部欠損のためナナメ方向のスリメの付加については不明である。



第217図 SK181 実測図 (1/30)



第218図 SK181 出土遺物実測図 (1/3)

SK200 (第219図)

L32区・M32区に跨って検出された円形土坑である。規模は直径約1.6m、深さ0.9mを測る。暗茶褐色の埋土の中心付近で10~20cm大の少量の礫に混じって、土師質土器等の遺物が出土した。

16世紀後葉~末葉

出土遺物から、この土坑の時期は、16世紀後葉~末葉に比定される。

SK200出土遺物 (第220図)

1~4は京都系土師器皿で、口径はそれぞれ8.8cm、12.3cm、13.0cm、12.6cmである。いずれもが口縁下外面に強いヨコナデを施している特徴をもち、埴地幅年3期に属するものである。

5は京都系土師器と在地系土師質土器の折衷形ともいえるものである。底部から口縁部にかけて開き気味に立ち上がり、胴部中位で肥厚し、端部は先細る。底部には回転糸切り痕が認められ、平坦に仕上げている。6は瓦質土器の丸鉢である。

SK201 (第222図)

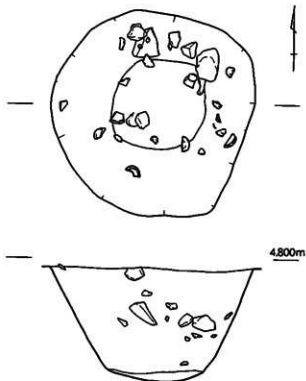
調査区南端のM34区で検出された土坑である。平面プランは径1.5m~1.8mの楕円形を呈しており、その深さは60cmを測る。他の廃棄土坑と比べて、礫の出土は少量であるが、それらはすべて焼土を多量に含んだ厚さ30cmの層から出土している。このことから、この土坑は、火災によって生じた廃棄物を処理したものと考えられる。

16世紀後葉~末葉

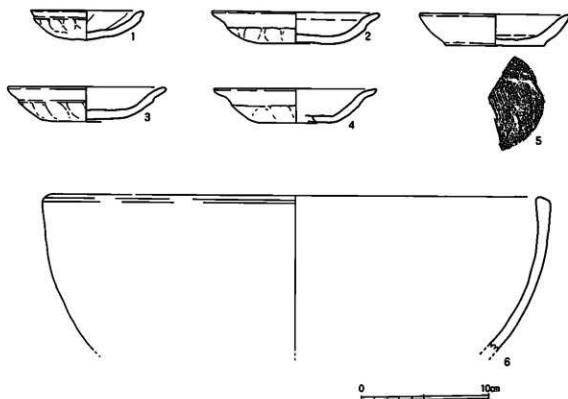
出土した京都系土師器の形態から、この土坑の構築時期は16世紀後葉~末葉と考えられる。

SK201出土遺物 (第221図)

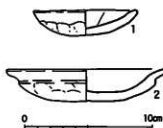
1・2は京都系土師器皿である。1の口径は8.1cm、2は12.5cmである。器壁は厚く、口縁下外面に強いヨコナデが施されていることから、京都系土師器の3期に属するものである。



第219図 SK200 実測図 (1/30)



第220図 SK200 出土遺物実測図 (1/3)



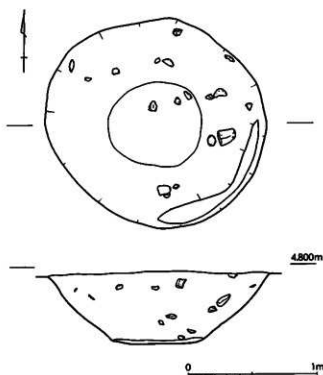
第221図 SK201 出土遺物実測図 (1/3)

SK208 (第223図)

重なり合う
土坑

調査区中央部の南寄りのM33区で
検出された土坑である。SK236、
SK252と切り合い関係をもつ。土層
観察の結果、SK208→SK236、
SK252→SK236とSK236が他よりも
新しい。

SK208の平面プランは隅丸方形で、
その規模は長辺1.5m、短辺1.0m、
深さ0.2mである。出土した京都系
土師器から16世紀中頃から中葉～後



第222図 SK201 実測図 (1/30)

業に比定できる。

SK208出土遺物（第224図）

1は京都系土師器皿である。口唇部の内外面ともにススが付着しており、灯明皿として使用されたもので、口径は8.5cmである。埴地編年の2期にあたる。2は在地系土師質土器の小皿で、口径は8.0cmを測る。

SK236（第223図）

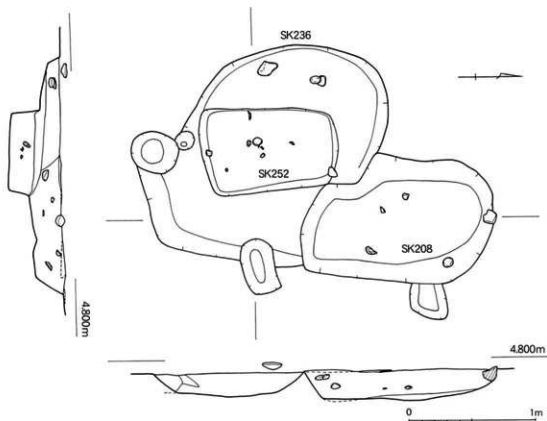
SK236は長軸1.7m、短軸1.3mの楕円形を呈し、深さ15cmの浅い土坑である。床面でSK252を検出した。出土遺物に乏しく、時期を特定できないが、SK208との切り合い関係から16世紀後葉以降と考える。

SK236出土遺物（第225図）

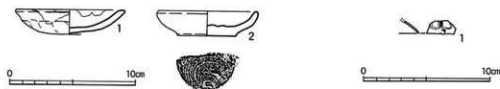
1は中国産の翡翠軸合子の蓋である。

SK252（第223図）

本土坑はSK236の床面を精査していた際に、検出したものである。平面プランは長辺1.1m、短辺



第223図 SK208・SK236・SK252 実測図 (1/30)



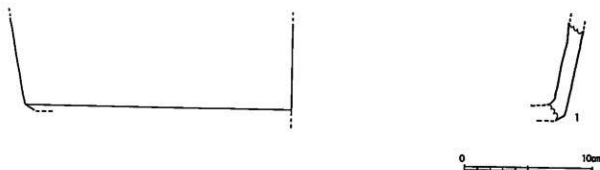
第224図 SK208 出土遺物実測図 (1/3)

第225図 SK236 出土遺物実測図 (1/3)

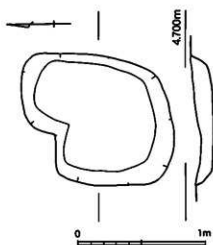
0.7mの方形で、その深さは約20cmである。形態から土坑墓の可能性も考えられるが、壘土から釘は見つかっていない。出土遺物がきわめて少ないため、遺構の時期を決める指標になりえない。ただSK236に先行して掘られた土坑であることに間違いはない。

SK252出土遺物 (第226図)

1は瓦質土器の火鉢の底部で、底部径は42.5cmである。



第226図 SK252 出土遺物実測図 (1/3)

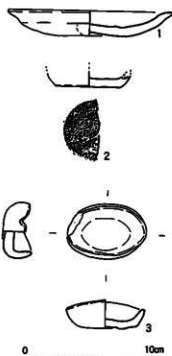


第227図 SK212 実測図 (1/30)

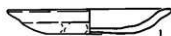
SK212 (第227図)

SK212はL32区で検出された浅い土坑である。南は16世紀後葉～SD542と接している。その形態から2基の土坑からできている可能性があるが、平面では確認できなかった。規模は1.1m×1.0m、深さ15cmである。この土坑の構築時期は、京都系土師器の3期の皿が出土していることから、16世紀後葉～末葉である。

16世紀後葉～末葉



第228図 SK212 出土遺物実測図 (1/3)



第229図 SK235 出土遺物実測図 (1/3)

SK212出土遺物

(第228図)

1の京都系土師器は器壁が厚く、口縁下部のナデもしっかりしているといった特徴から3期のⅢに属する。2は在地系土師質土器の小皿で、底部に回転糸切り痕が認められる。3は径5cmほどの土師質土器小皿の底部両側を内に押し込んで成形した耳皿である。

SK235 (第229図)

調査区南寄りのL33区・M33区で検出された深さ20cmほどの浅い土坑である。平面形は不定円形で、その規模は2.0m×1.5mである。竈大の礫に混じって数点の土器片が出土した。それらの遺物から、遺構の年代は16世紀中葉から後葉と考える。

16世紀中葉～
後葉

SK235出土遺物 (第229図)

1は京都系土師器皿であり、薄く仕上げられている。その特徴から埴地編年2期に属するものと考えられる。口径は12.7cm。

SK237 (第232図)

M33区の南側に位置する土坑である。炭・焼土を含む埋土中には、土器類とともに竈大から人頭火の川原石が上層から下層まで出土しており、廃棄土坑のひとつであることがわかる。長軸3.0m、短軸2.2mの楕円形を呈し、深さ約1mの土坑である。

廃棄土坑

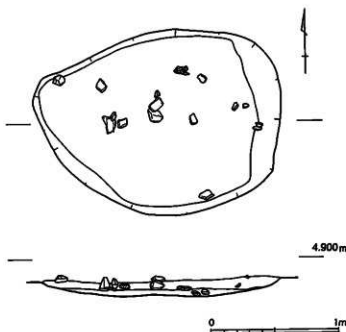
16世紀中葉～
後葉

SK237の構築時期については、出土した京都系土師器の年代観からみて、16世紀中葉から後葉に位置づけられる。

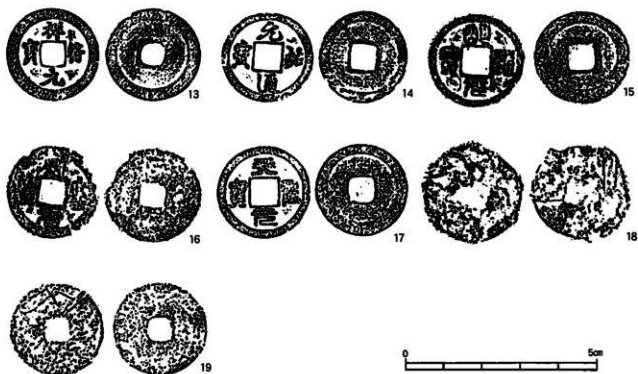
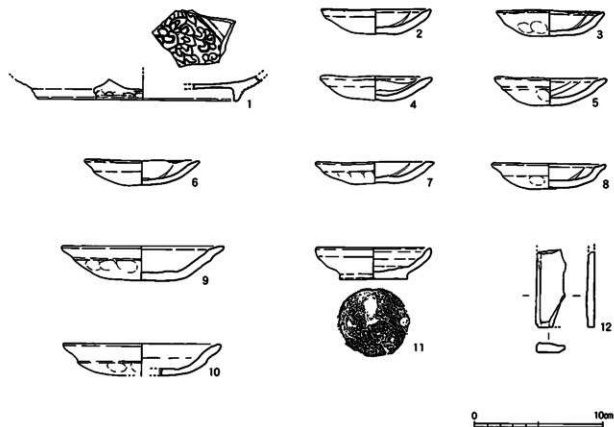
SK237出土遺物 (第231図)

京都鎮室青
花皿

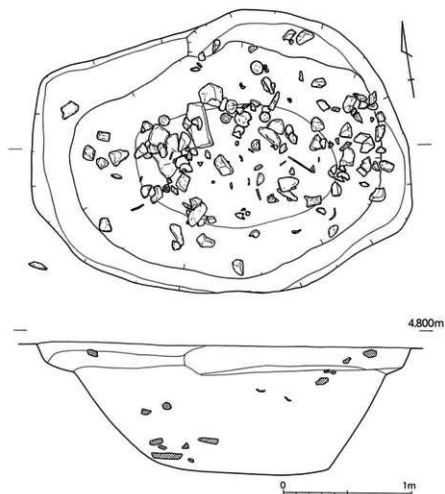
1は中国景德鎮窯系青花の皿である。小野分類のE群Ⅲと思われる。2～10は京都系土師器皿である。その法量は9cm前後のもの(2～8)と12cm大のもの(9、10)と2グループ認められる。9cm前後のものは灯明皿として使用されたと考えられるススの付着がみられる。11は在地系土師質土器小皿で内面にロクロ目を有する。このタイプは京都系土師器に先行して出現するものとして位置づけられているが、6のように器壁の厚い土師器が存在することから、混入品というより残存形態と考えたい。12は底石、13～19は銭貨である。13は北宋の「祥符元寶」(1009年初鑄)。14は「元祐通寶」(1086年初鑄)。文字は行書体で書かれている。15は「明道元寶」(1032年初鑄)。文字は篆書で書かれている。16は「聖宋元寶」(1101年)。篆書体。17は北宋の「天聖元寶」で1023年初鑄。文字は行書体。18・19は判読不明である。



第230図 SK235 実測図 (1/30)



第231図 SK237 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨は1/1)



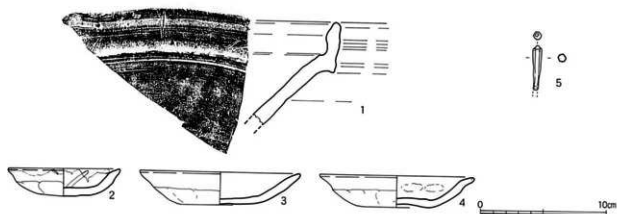
第232図 SK237 実測図 (1/30)

SK238 (第234図)

調査区南寄りのL33区とM33区に跨って位置する土坑である。後述のSK239を切って構築されている。土坑の規模は長軸2.3m、短軸1.6mの不定円形を呈し、その深さは60cmである。その大きさに比べて、遺物や礫の数が少なく、廃棄に用いられたとは考えづらい。

16世紀中葉～
後葉

SK238の構築時期については、出土した京都系土師器の年代観からみて、16世紀中葉から後葉に位置づけられる。



第233図 SK238 出土遺物実測図 (1/3)

SK238出土遺物 (第233図)

1は備前系陶器の播鉢。口縁部の形態から乗岡堀年の中世6期に属する。2～4は京都系土師器皿で、塩地堀年の2期に比定できる。2は灯明皿で、口径は8.7cm。3の口径は12.6cm、4は12.0cm。5は銅製の棒で断面六角形を喪す。鍵の柄か。

SK239 (第235図)

調査区南寄りのM33区に位置し、切り合い関係から前述のSK238に先行して掘られた土坑である。その大きさはSK238とほぼ同規模で、長軸2.4m、短軸1.8mの不定円形を呈し、その深さは60cmである。粗土は炭・焼土が混入する茶褐色土からなり、土器類とともに礫大から人頭大の川原石が上層から中層まで出土しており、廃棄土坑として機能したことがわかる。

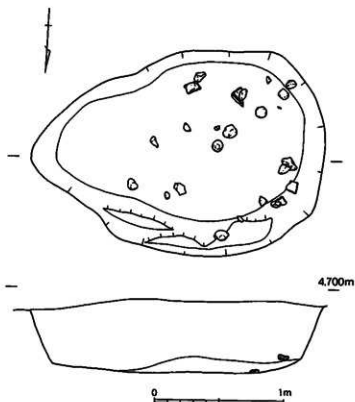
積極的に年代を特定できる遺物は出土していないが、この下位から14世紀中葉から後葉に位置付けられる土師質土器の出土したSK583が検出されていること、さらにSK238との前後関係から、本土坑の構築年代は16世紀前葉から中葉と考えられる。

SK239出土遺物 (第236図)

1は中国南部産陶器の甗で、鉄絵が施されている。2・3は備前系焼締陶器で、2は壺、3は鉢である。4は瓦質の火鉢。底径は23.4cmを測る。5は瓦質の焙烙、6・7は瓦質の鉢である。

SK247 (第237図)

L32区に位置し、北側をSK008に切られる。遺構の平面

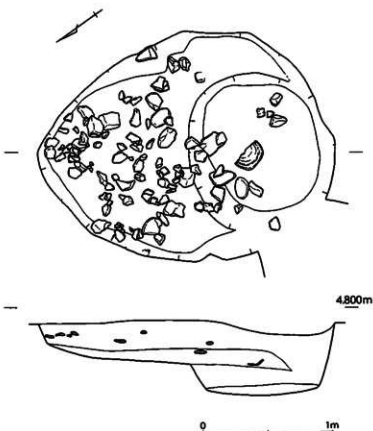


第234図 SK238 実測図 (1/30)

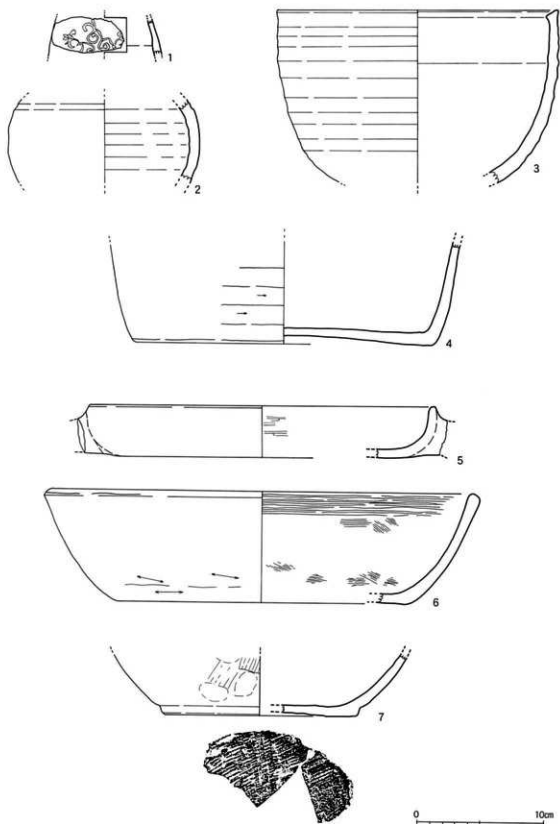
廃棄土坑

16世紀前葉～中葉

中国南部産陶器甗



第235図 SK239 実測図 (1/30)



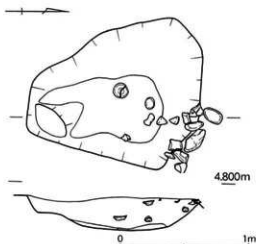
第236図 SK239 出土遺物実測図 (1/3)

プランは不定方形で、その規模は長辺1.2m、短辺1.2mを測る。深さは25cmほどであった。炭が多く混じった茶褐色の埋土中から礫や土器類が出土した。

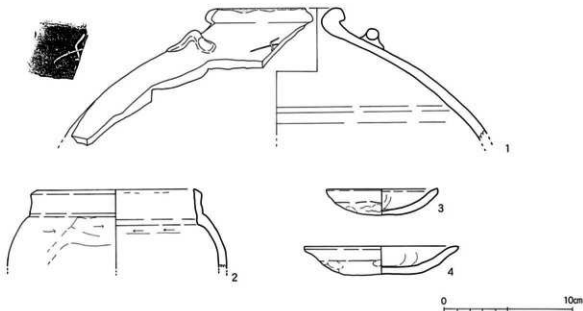
16世紀中葉～後葉 出土した京都系土師器の形態から、この土坑の構築時期は16世紀中葉から後葉と考えられる。

SK247出土遺物 (第238図)

1は中国産の褐釉陶器壺で内外面に褐釉を施し、胎土は灰褐色で陶器質を呈す。肩部に把手と「ヘラ記号」をもつ。口縁上面には重ね焼き痕がみられる。口径は11.0cm。2は瓦質土器の羽釜。3・4は京都系土師器皿で、塩地幅年の2期の特徴を有す。



第237図 SK247 実測図 (1/30)



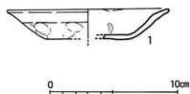
第238図 SK247 出土遺物実測図 (1/3)

SK248 (第240図)

調査区中央部のL32区で検出した長方形プランの二段掘り土坑である。規模は長辺1.7m、短辺0.7m、深さ40cmであり、床面は長さ1.2m、幅0.4mを測る。

本土坑と並んで検出したSK249の規模は若干小さい(底面の長さ1.07m、幅0.4m)ものの、埋土状況などは同様であった。そのSK249から釘が4本出土しており、SK249からは釘が出ていないが、土坑墓の可能性も考えられる。遺物の出土量が少なく時期比定は難かしいが、

16世紀前半代 出土した京都系土師器からみて、廃絶時期は16世紀前半代であると考えられる。



第239図 SK248 出土遺物実測図 (1/3)

SK248出土遺物 (第239図)

1は京都系土師器皿で、床面からは浮いた状態で出土した。器壁が薄く、埴地晩年の1期末に属する。復元口径は12.4cmである。

SK250 (第241図)

本土坑はL33区に位置し、埴地晩年の1期末にあたる京都系土師器が出土したSK368を切って構築されている。平面プランは円形で、その直径は約60cmである。土坑の深さは約15cmしか残っていないが、それを埋め尽くすように折り重なって備前系陶器の大甕が出土した。第243図に示したように、甕の備前系陶器大甕 上半分と底部付近のみで胴部は欠損していた。

遺構の残存状態が良くなく断定はできないが、あたかもこの大甕を据えるために掘られた土坑のようである。

SK250出土遺物 (第243図)

1・2は備前系陶器の大甕。1の口径は57cm、2の底径は41.6cm。口縁外面に数条の凹線を施すもので、近世1期に比定され、1570年代以降の所産とされるものである。

SK251 (第242図)

L33区、前述のSK250の東3.5mに位置し、2期に比定される京都系土師器が出土したSK381の上位で確認された土坑である。

形態は長辺0.7m、短辺0.6mの隅丸方形を呈し、その深さは25cm程度残存していた。20cm大の甕とともに備前系陶器の大甕の胴部から底部にかけてが折り重なって出土した。

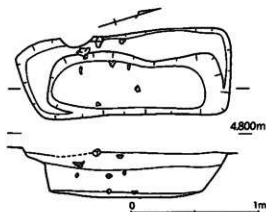
SK251出土遺物 (第243図)

3の備前系陶器大甕の底径は39cmであり、北に接する井戸SE266出土品と接合関係があった。

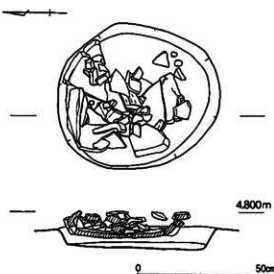
SK255 (第245図)

調査区南端のM34区に位置する土坑である。直径約1.7mの不定円形をしており、南は調査区外へと続いている。その深さは約1mである。埋土からは10~20cm大の甕に混じって、土師器等の生活遺物が出土した。

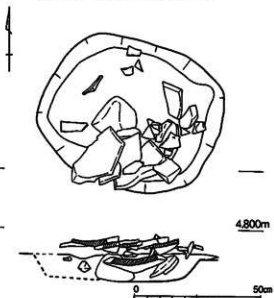
2期に比定される京都系土師器が出土しており、構築年代は16世紀中葉から後葉と考えられる。



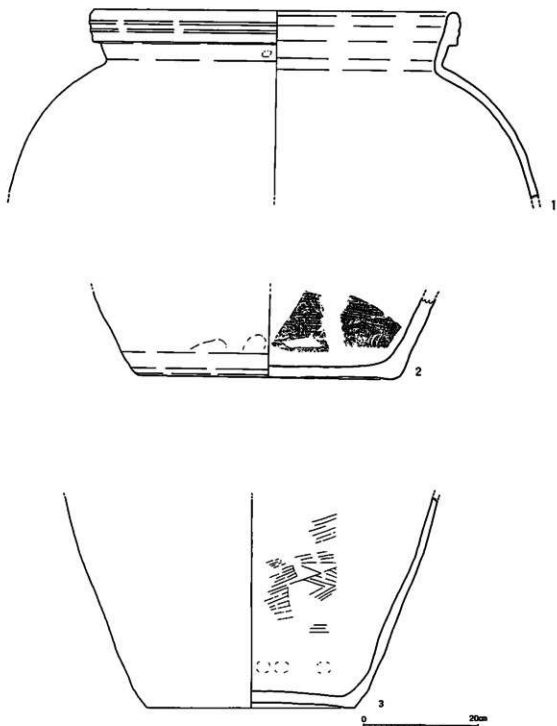
第240図 SK248 実測図 (1/30)



第241図 SK250 実測図 (1/30)



第242図 SK251 実測図 (1/30)



第243図 SK250・251 出土遺物実測図 (1/6)

SK255出土遺物 (第244図)

1・2は京都系土師器皿である。1は口唇内外にススが付着していることから灯明皿として使われたものである。その口径は9.0cmである。2は口縁部下にヨコナデがみられるが、器壁が薄いことから、塩地編年2期の範疇の皿と解釈できる。口径は12.3cmを測る。3・4は在地系土師器小皿で、その器形から15世紀代のものとみられ、混入品と考える。底部回転糸切り痕がみられる。

第2節 遺構と遺物

SK279 (第247図)

近世溝SD097
に切られる土
坑

16世紀後半～
末葉

SK279は調査区中央部東端に位置し、近世段階の溝SD097に東側を切られている。その規模は長辺1.4m、短辺1.3m、深さ35cmの楕円形をした土坑である。出土遺物からみて、遺構の構築は16世紀後半から末葉と考える。

SK279出土遺物 (第246図)

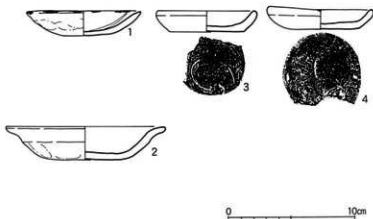
1・2は京都系土師器皿で、1の口径は8.8cm、2は12.2cmである。その器形から1は3期、2は2期に属すると考える。3は須恵質土器の甕である。

SK281 (第249図)

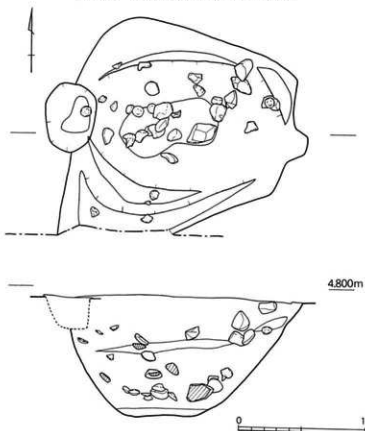
SK281は調査区中央部K32区の西端に位置する土坑である。直径約2mの半円形プランを確認したが、残り半分は調査区外である。その深さは約50cm。

廃棄土坑

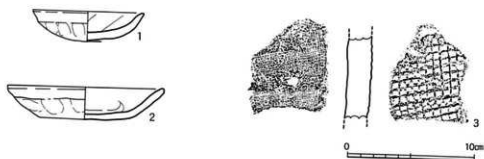
土坑内には10～30cm大の礫がびっしり詰まっており、廃棄に用いられた土坑と考える。それに混じって土師器の細片も出土しているが、構築時期を比定することはできなかった。



第244図 SK255 出土遺物実測図 (1/3)



第245図 SK255 実測図 (1/30)



第246図 SK279 出土遺物実測図 (1/3)

SK281出土遺物 (第248図)

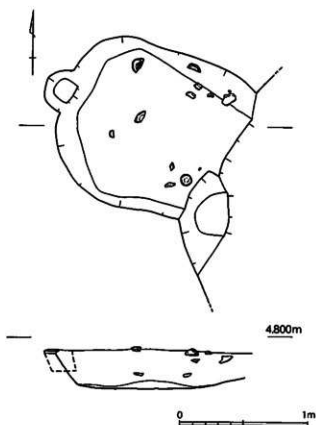
1・2は土鏝で、中世のものである。

SK282 (第251図)

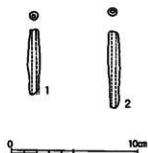
調査区中央部にある井戸 SE266の南に位置する浅い土坑である。その形態は楕円形をしており、規模は長軸2.0m、短軸1.3m、深さ20cmである。

埋土中から小礫とともに土器片が出土したが、ほとんどが細片であったため、時期を明確にすることができなかった。本土坑は2次被熱を受けた土器片が出土していることから、廃棄土坑として用いられたものと考ええる。

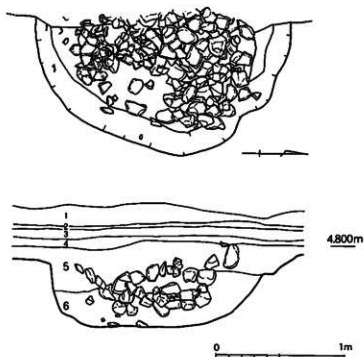
廃棄土坑



第247図 SK279 実測図 (1/30)

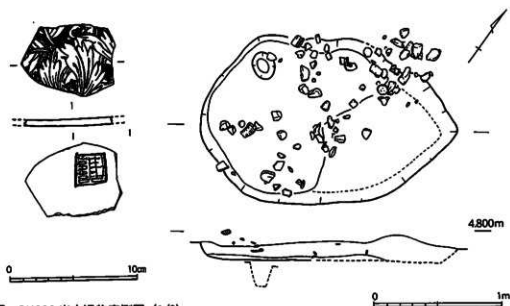


第248図 SK281 出土遺物実測図 (1/3)



第249図 SK281 実測図 (1/30)

- 1 現耕作土
- 2 鉄分を含んだ水田基盤層
- 3 旧耕作土
- 4 旧耕作土の鉄分を含んだ基盤層
- 5 暗茶褐色土 焼土・炭を多く含む
- 6 黒褐色土 焼土・炭を若干含む



第250図 SK282 出土遺物実測図 (1/3)

第251図 SK282 実測図 (1/30)

景徳鎮密系青
花皿

SK282出土遺物 (第250図)

1は中国景徳鎮密系青花皿。小野庵年のE群か。見込みには牡丹文、内底部には銘款が認められるが、その詳細は読み取れない。表面は2次被熱を受けて、ざらついている。

SK285 (第251図)

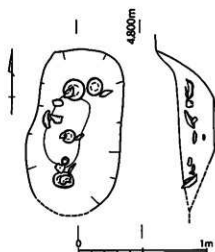
L33区に位置し、SK287に切られている。

その埋土の中位で京都系土師器が一括廃棄された状態で見つかった。長径1.3m、短径0.7m、深さ0.3mを測る長楕円形の土坑である。

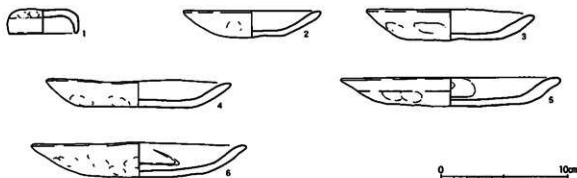
この土坑の構築年代は、出土した京都系土師器からみて、16世紀前葉～中葉に比定できる。

SK285出土遺物 (第253図)

1は焼塩釜の蓋か小皿として使用された土師器である。2～6は京都系土師器皿で、その口径は11.1cm、13.2cm、14.8cm、17.4cm、17.3cmと4法量が認められる。ただよく灯明皿に用い



第252図 SK285 実測図 (1/30)



第253図 SK285 出土遺物実測図 (1/3)



第254図 SK287 出土遺物実測図 (1/3)

られる9cm前後のものが示されていないが、土師器の細片が他にもあるので、これに当てはまるものがあることは想定できる。これらの土師器はその器形から塩地幅年の1期末に属する。

SK287 (第255図)

L33区に位置し、前述のSK285の上位で確認された土坑である。埋土中には燐や土師片が散在しているが、埋土上層から出土した京都系土師器が3期の様相を呈していたことは、SK285との前後関係に合致しており、16世紀後葉～末葉に位置付けられる。土坑は長軸1.7m、短軸1.3m、深さ60cmの楕円形を呈している。

16世紀後葉～
末葉

SK287出土遺物 (第254図)

1は京都系土師器の塩地幅年3期の皿である。その口径は8.7cmである。

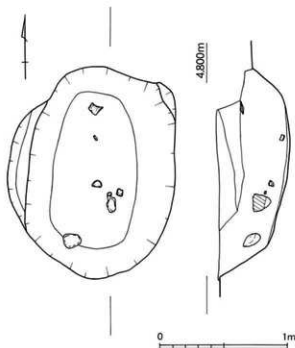
SK290 (第256図)

調査区中央部南寄りのL33区にあり、井戸SE377に切られた土坑である。プランは南北に長い方形で、その規模は1.5m×1.1mで、深さ20cmほどである。遺構の構築時期は16世紀中頃と思われる。

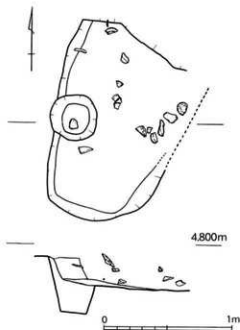
16世紀中頃

SK290出土遺物 (第257図)

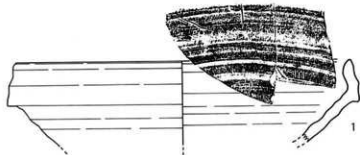
1は備前系陶器の播鉢で、口縁形態より中世6期に比定できる。また、2・3は塩地幅年の1期末から2期に属する京都系土師器皿である。その口径は11.1cm、14.2cmを測る。



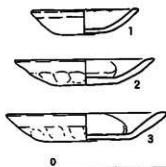
第255図 SK287 実測図 (1/30)



第256図 SK290 実測図 (1/30)



第257図 SK290 出土遺物実測図 (1/3)



第258図 SK295 出土遺物実測図 (1/3)

SK295 (第259図)

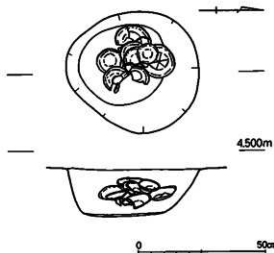
L31区に位置する円形土坑である。京都系土師器が一括廃棄された状態で検出された。口径9cm前後が1点、11cm前後が5点、13cm前後が2点確認された。それらから本土坑は16世紀前半代に掘られたものとする。

SK295出土遺物 (第258図)

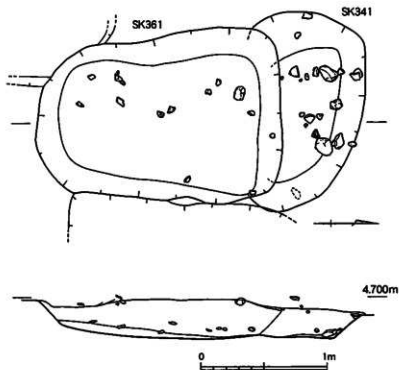
1～3は京都系土師器の産地福年1期末の皿である。その口径はそれぞれ8.5cm、11.1cm、12.5cmである。

SK341とSK361 (第260図)

M33区において検出された土坑で、SK361と切り合い関係をもち、その順序はSK341→SK361である。SK341は楕円形プランで、大きさは1.5m×1.0mであり、SK361は隅丸長方形プランで、大きさは2.0m×1.4mである。深さはともに35cmほどである。出土遺物よりSK361は16世紀後葉～末葉に比定できる。また、SK341も中国景徳鎮窯系青花ⅡF群が出土していることから、16世紀後葉



第259図 SK295 実測図 (1/15)



第260図 SK341・SK361 実測図 (1/30)

を考えられ、両者にはさほどの時期差はない。

SK341とSK361出土遺物 (第261図)

景徳鎮窯系青
花皿

1はSK341出土の中国景徳鎮窯系青花皿で、小野正敏編年のF群に属する。外面に唐草文、内面には花が描かれている。SK361出土の京都系土師器杯で、その口径は11.8cmである。

SK343 (第262図)

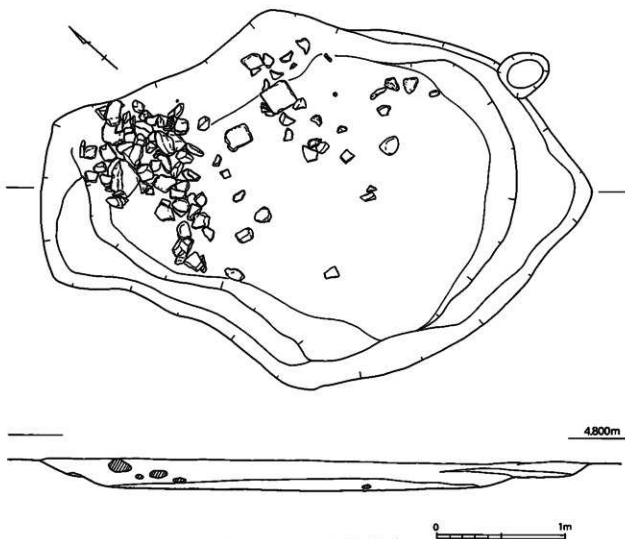
廃棄土坑

M32区で溝SD542を切って構築された浅くて広い土坑である。その規模は長軸4.4m、短軸2.9mを測り、深さは20cm程度であった。土坑の北側で拳大から人頭大の礫の集中個所が確認された。埋土中に炭が入っており、廃棄に用いられた土坑と考える。

出土遺物より、その構築年代は16世紀中葉～後葉に位置付けられる。



第261図 SK341・SK361 出土遺物実測図 (1/3)



第262図 SK343 実測図 (1/30)

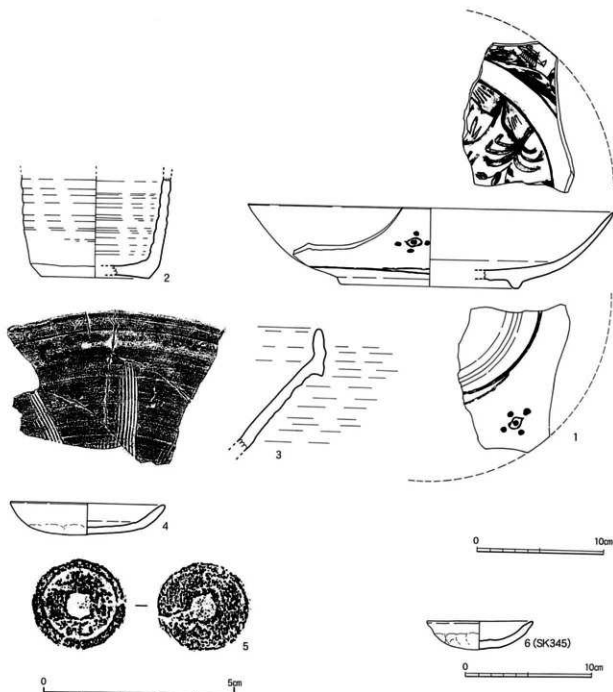
第2節 遺構と遺物

SK343出土遺物 (第263図)

漳州窯系青花 1は中国漳州窯系青花皿。山水が描かれている。2・3は備前系陶器である。2は焼締陶器壺の底部、3は乗岡編年の中世6期にあたる描鉢である。4は2期の京都系土師器皿、口径は11.9cm。5は北宋朝の「聖栄元寶」(1101年初鑄)である。

SK345 (第264図)

L30区とL31区に跨って検出された土坑である。第262図の直径60cmの円形のピットがSK346であり、2.0m×1.6mの方形土坑がSK345である。各々遺構が浅く、その分遺物の出土量も乏しい。図示できる土器は第263図6の京都系土師器しかなく、その年代観よりSK345は16世紀後葉～末葉に掘られたことがわかる。



第263図 SK343・SK345 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨は1/1)

SK345出土遺物 (第263図)

6は京都系土師器皿。器壁が厚く、器高も高めであることから埴地編年の京都系3期に属するものである。口径は8.5cmを測る。

SK354 (第265図)

調査区西側のK33区で検出した土坑である。長軸1.2m、短軸1.0mの不定方形を呈している。その深さは約30cmである。小礫や土器が数点、床面から浮いた状態で確認されている。それらから土坑の構築年代は16世紀後半と思われる。

SK354出土遺物 (第266図)

1は京都系土師器皿で2期に比定できる。口径は8.7cm。2は備前系統締結陶器の鉢で、推定口径は22cmほどである。

SK355 (第267図)

調査区東側のM33区に位置し、その形

溝SD097に切られる土坑は長さ2.0m、幅1.3m以上、深さ0.2mの方形プランをしている。東半分は溝SD097似切られている。

その埋土中より小礫や土器が数点出土した。出土遺物からみて、本土坑は16世紀末葉に掘られたものである。

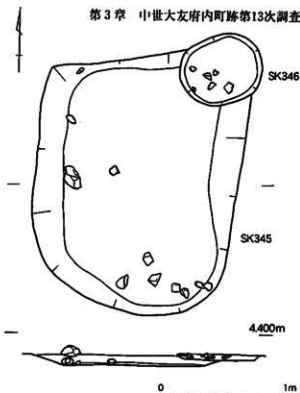
SK355出土遺物 (第268図)

1は京都系土師器皿で口縁にスガが付着した灯明皿である。口縁下部のヨコナデが明瞭であることから3期に比定できる。口径は8.6cm。2は瓦質土器の搔鉢。ナナメ方向のスリメが認められる。

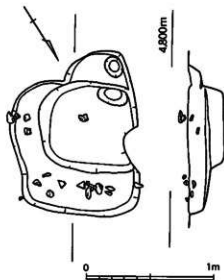
SK356とSK357 (第269図)

SK356は、調査区南東部のM33区で検出した土坑で、前述のSK355と同様に溝SD097(近世)に切られていた。その形は直径約3.8mの不定円形をしていた。

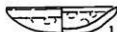
SK357→SK356 この土坑を50cmほど掘り下げた時、小円形土坑SK357



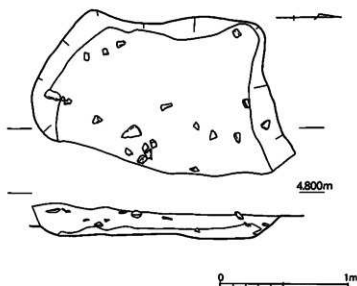
第264図 SK345・SK346 実測図 (1/30)



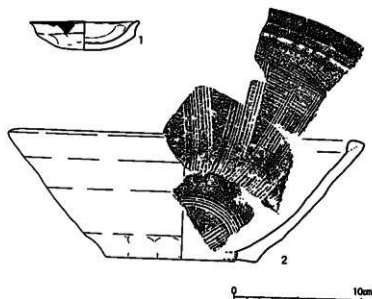
第265図 SK354 実測図 (1/30)



第266図 SK354 出土遺物実測図 (1/3)



第267図 SK355 実測図 (1/30)

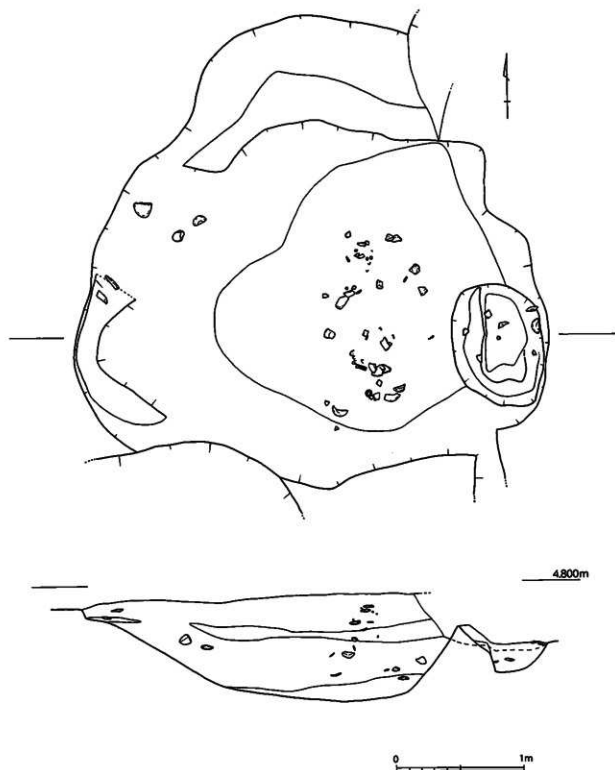


第268図 SK355 出土遺物実測図 (1/3)

を確認した。SK357の時期は出土遺物より16世紀前葉～中葉に位置付けられ、SK356はSK357及び溝SD097との切り合い関係から、16世紀中頃～末葉と考えるのが妥当であろう。

SK356とSK357出土遺物 (第269図)

中国産白磁皿 1・2はSK356出土、3～8はSK357出土遺物である。1は中国産白磁皿で、体部から口縁に向けて直線的に立ち上げ、口唇部を細く仕上げている。軸は体部上半のみで底部および見込部にまで達していない。2は中国龍泉窯系の青磁饅頭花皿で15世紀の所産。3は中国産白磁皿。見込みと高台付近が露胎となるタイプのもの。4～6は京都系土師器皿で塩地欄干の1期にあたる。6には穿孔が認められた。口径は各々10.8cm、11.0cm、14.8cmである。7は京都系土師器の坏で溝SD097からの流れ込みか。8は在地系土師器皿で、内面にロクロ目を残す。底部は糸切り後、板状圧痕が認められた。



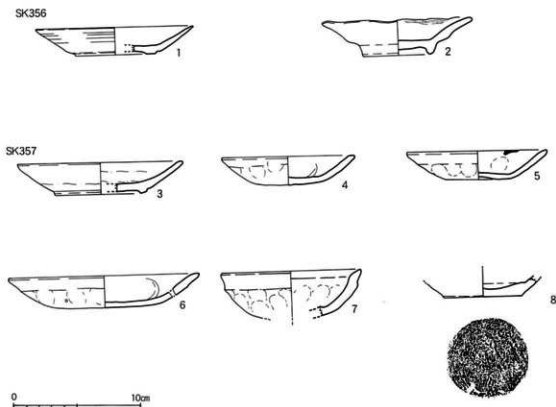
第269図 SK356・SK357 実測図 (1/30)

SK359 (第272図)

本土坑はM32区に位置し、東に接するSK360埋没後に掘削されたことがわかった。土坑西半分の北壁で10cm～20cm大の石が1.2mほど並んでいた。そこから10cm掘り下げると備前系陶器大甕の下半部が散らばって出土した。その下から径1.2m、深さ20cmの円形落ち込みが検出された。SK359の埋土は概ね茶褐色層であるが、この落ち込みは黒色土が埋まっていた。出土した京都系土師器の年代観

16世紀後半～
本築

第2節 遺構と遺物



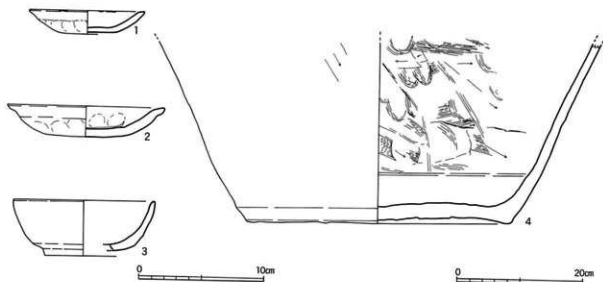
第270図 SK356・SK357 出土遺物実測図 (1/3)

より、16世紀後葉～末葉に位置付けられる土坑である。

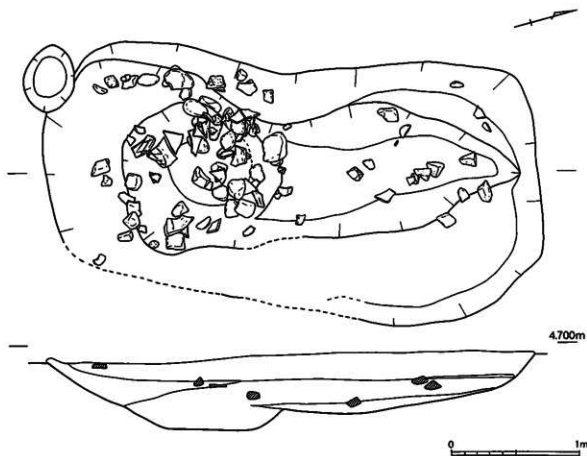
SK359出土遺物 (第266図)

備前系陶器大 1・2は京都系土師器皿で器壁が厚いタイプで3期に属する。1の口径は8.9cm、2は12.2cmである。

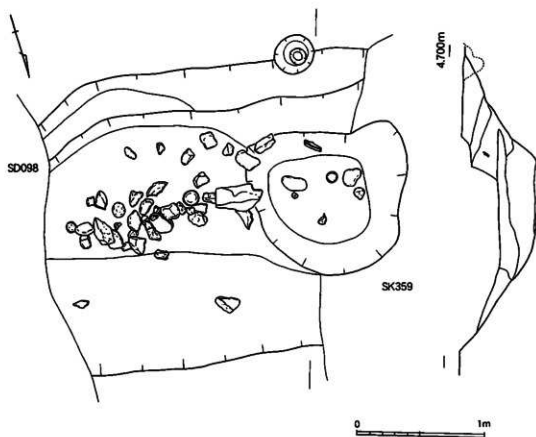
3は瓦質土器の高台付き碗。4は備前系陶器の大甕である。



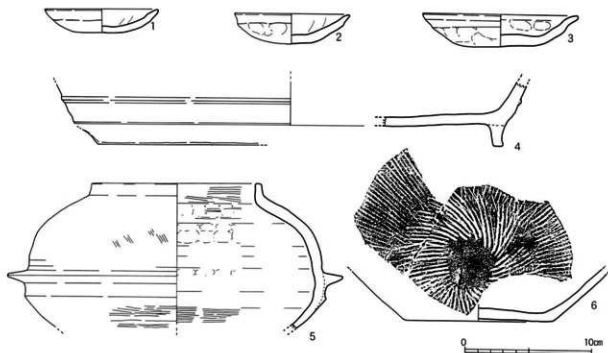
第271図 SK359 出土遺物実測図 (1/3 ※ 4は1/6)



第272図 SK359 実測図 (1/30)



第273図 SK360 実測図 (1/30)



第274図 SK360 出土遺物実測図 (1/3)

SK360 (第273図)

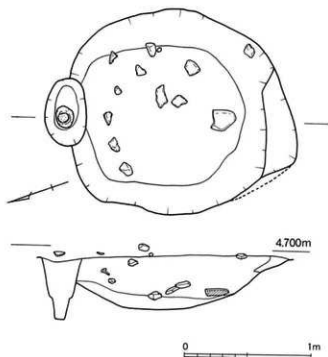
M32区に位置する本土坑は西を前述のSK359(16世紀後葉～末葉)に、また東を溝SD097(近世)に切られている。土坑中央部の中下層から拳大～人頭大の礫に混じって土師質土器等が出土した。遺物より、構築年代は16世紀末葉と考えられ、SK360埋没後すぐにSK359が掘られたことになる。また、西側にある円形落ち込みは、SK359のものと同規模である。

SK360出土遺物 (第274図)

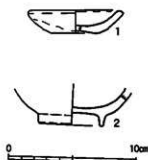
1～3は京都系土師器皿で、3は器壁が厚く、口縁下外面は強いヨコナデが施されている。その特徴から塩地編年3期に属するものと考えられる。4は瓦質土器火鉢で底部に板状の脚部を有す。5は土師質の羽釜。6は瓦質土器播鉢で放射状のスリメを施す。

SK367 (第275図)

M33区にある円形土坑である。その規模は1.7m×1.8m、深さ40cmを測る。茶褐色の埋土中からは少量の16世紀末以前遺物しか出ておらず、遺構の時期を決める指標になりえなかった。ただ、京都系土師器の3期に比定される皿が出土したビットに切られており、16世紀末以前であることは確かである。



第275図 SK367 実測図 (1/30)

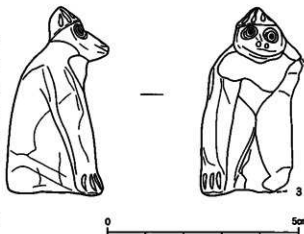


第276図 SK367 出土遺物実測図 (1/3)

SK367出土遺物 (第276図)

1は中国産唐系青磁小皿で、その口径は7.2cmである。2は瓦質土器の高台付き碗。3は猿型土製品で、その大きさは、高さ4.9cm、幅2.6cm以上、厚さ2.5cmである。手づくね製品で、目が二段に掘られていたり、鼻、手の爪まで上手に表現されている。

猿型土製品



SK368 (第277図)

L33区にある浅い楕円形の土坑で、その北東部はピットやSK250に切られている。炭・焼土を含む埋土中には、土器

廃棄土坑

16世紀前半～
中葉

類とともに10cm～20cmの川原石が上層から下層まで出土しており、廃棄土坑のひとつであることがわかる。長径1.7m、短径1.2m、深さ0.25mを測る。出土した京都系土師器の年代観から16世紀前半から中葉に位置付けることができる。

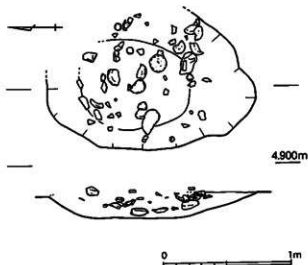
SK368出土遺物 (第278図)

1～7は京都系土師器皿で、いずれもその形態から埴地幅年の1期末に属する。その口径から、11cm前後のもの、13cm前後のもの、17cm前後のものの3グループに分けられる。8～10は焼塩釜の蓋または小皿である。口径は5cm前後。11は土鉢で、中世のもの。

SK371 (第281図)

本土坑はL33区及びM33区に跨っており、その西側には井戸SE377がある。規模は長辺3.5m、短辺1.9mで、その深さは西側が40cm、東側が60cmである。こ

火災処理土坑の土坑の中から上層にかけて、炭・焼土を多量に含んだ厚さ15cmほどの層を確認しており、火災処理土坑であったことがわかった。出土遺物の中に、京都系土師器3期の皿や近世1期の備前系陶器の描鉢があることから、16世紀後半～末葉に

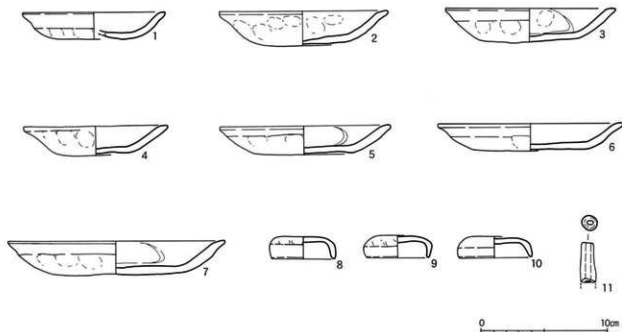


第277図 SK368 実測図 (1/30)

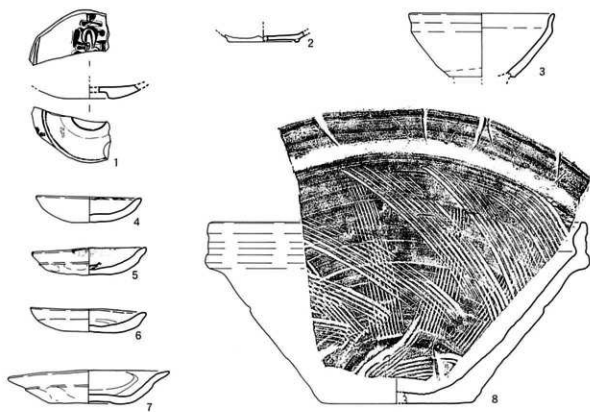
16世紀後半～
末葉

第2節 遺構と遺物

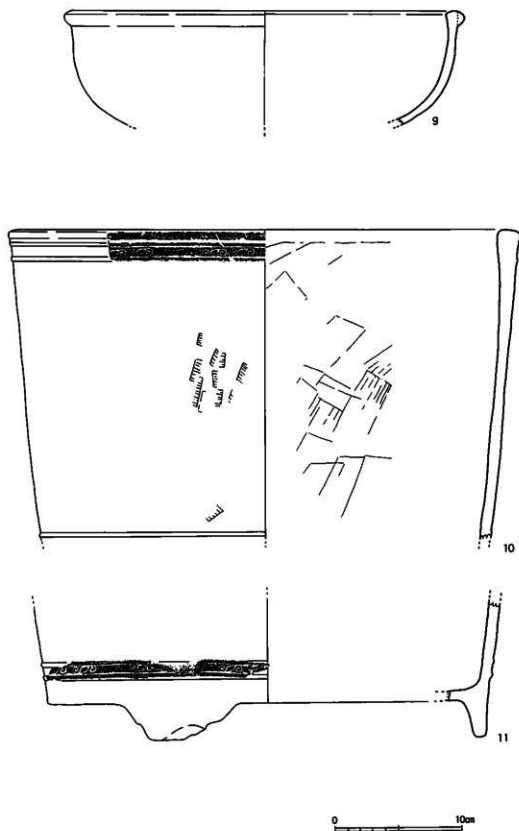
位置付けられる。



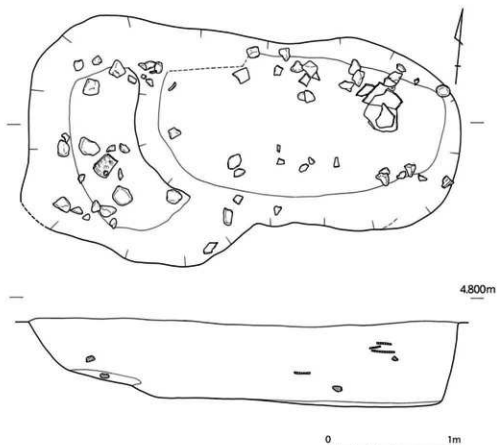
第278図 SK368 出土遺物実測図 (1/3)



第279図 SK371 出土遺物実測図① (1/3)



第280図 SK371 出土遺物実測図② (1/3)

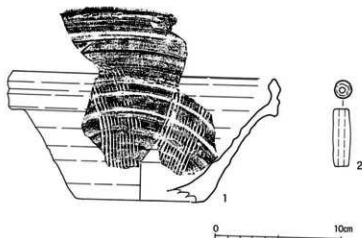


第281図 SK371 実測図 (1/30)

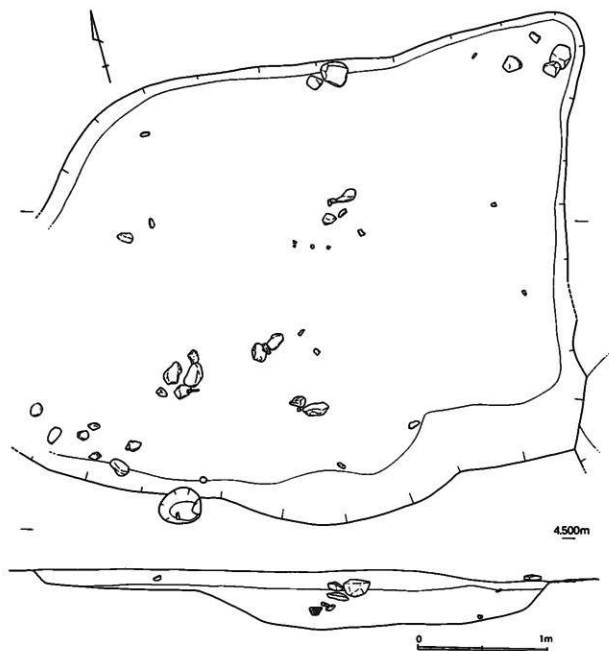
SK371出土遺物 (第279・280図)

景德鎮系青花
皿

1は中国景德鎮系青花で小野編年のC群皿に属する。器底で、その内底部に赤漆を塗っている。見込み中央には「壽」のくずし字が描かれている。16世紀前半の所産。2は中国産翡翠釉の小皿。3は瀬戸美濃系天目碗。4～7は京都系土師器皿で、9cm前後と11cm前後の2法量認められる。4・5は灯明皿として使用されている。8は備前系陶器の掻鉢。放射状スリメに加えて、ナナメ方向のスリメが付加されている。また、見込みにもスリメを入れており、乗岡編年近世1期b期に属するものと



第282図 SK379 出土遺物実測図 (1/3)

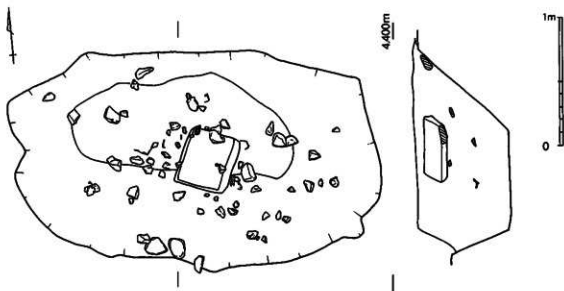


第283図 SK379 実測図 (1/30)

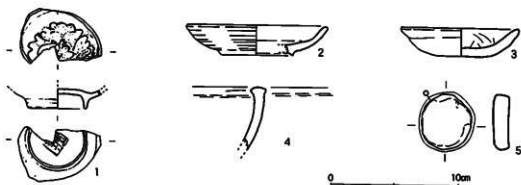
在地系火鉢 考えられる。9～11は瓦質土器。そのうち9は丸鉢、10、11は火鉢である。火鉢は2条の突帯の間に双頭麻手文が施文され、在地系の一群として位置付けられる。

SK379 (第283図)

調査区北側のM30区に位置する浅い土坑で、接連のSK380を切って掘られている。土坑の規模はSX551上にあ東西4.5m、南北3.6mと広く、深さは15cmほどである。この土坑はSX551の上にあったため、東半分は掘り過ぎて、床面を飛ばしてしまうというミスをしている。第282図1の備前系陶器播鉢はそこから出土しており、この土坑の時期を決める遺物とは成り得ない。



第284図 SK380 実測図 (1/30)



第285図 SK380 出土遺物実測図 (1/3)

SK379出土遺物 (第282図)

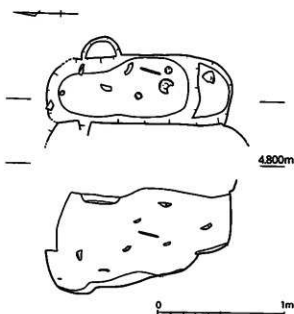
1の備前系陶器の掻鉢は、放射状のスリメをもつ中世6期に属する。2は土師。

SK380 (第284図)

M30区で確認された長辺2.9m、短辺1.6mの隅丸方形プランの土坑で、その深さは75cmである。炭・焼土を含む埋土中には、土器類とともに10cm大の川原石が満遍なく出土しており、廃棄土坑であることが窺える。

出土した京都形土師器の年代観から16世紀後葉～末葉に掘られたものと思われる。

また、土坑中央部の上層から凝灰岩の板石が出土している。これは井戸



第286図 SK381 実測図 (1/30)

SE384から抜SE384の井筒に組まれた石と材質、大きさを同じくするものであり、井戸枠から抜き取られたものである可能性は高い。このことからSE384の廃絶時期は16世紀末葉と考えられる。

SK380出土遺物 (第282図)

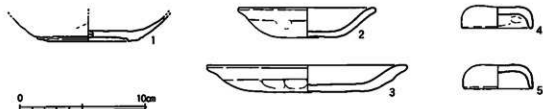
1は中国景德鎮窯系青花碗で、小野分類のE群にあたる。2は瀬戸美濃産陶器の皿。3は京都系土師器皿で、灰い器壁から3期にあたる。口径は9.1cmで、口唇部にススが付着している。4は瓦質土器の鉢、5は土師質土器の細片を再加工したものである。

SK381 (第286図)

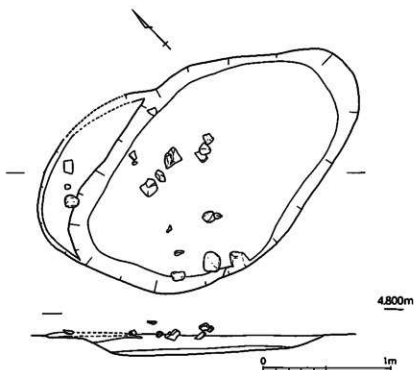
L33区にある大型井戸SE266の南で検出された土坑であり、その前後関係はSK381→SE266である。井戸SE266に長辺1.5m、短辺0.55mの長方形を呈し、その深さは最大約1mである。平面プランのため、当初は土坑墓と考え、掘り進めていた。しかし、床面が一定でないこと、釘が検出されなかったことから、そう判断することは難しいと思われる。土坑の構築年代は、出土土器からみて16世紀中頃と考える。

SK381出土遺物 (第287図)

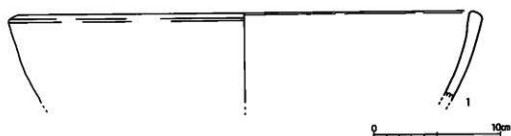
中国産白磁皿 1は中国産白磁皿で、体部から口縁に向けて内碗気味に立ち上がり、口唇部を細く仕上げている。



第287図 SK381 出土遺物実測図 (1/3)



第288図 SK383 実測図 (1/30)



第289図 SK383 出土遺物実測図 (1/3)

軸は体部上半のみで底部および見込部にまで達していない。2～5は京都系土師器で埴地編年の2期にあたる。皿2は口径10.6cm、3は15.6cm。4、5は焼塩釜の蓋または小皿である。口径は5.5cm程度である。

SK383 (第288図)

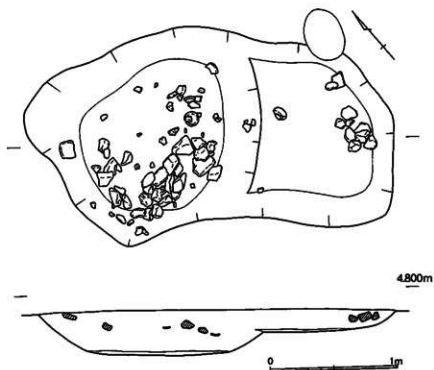
SK383は調査区南側L34区及びM34区に跨って位置する不定円形プランの浅い土坑である。そのため出土遺物も限られており、土坑の構築時期を特定するには至らなかった。しかし、層位的にみて16世紀より古くはならないと考える。土坑の規模は長軸2.6m、短軸1.7m、深さ20cmである

SK383出土遺物 (第289図)

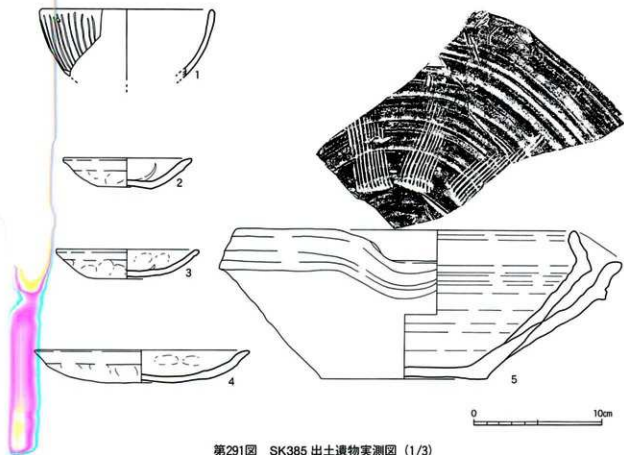
1は在地産の瓦質土器の鉢であり、推定口径は37.1cmである。

SK385 (第290図)

調査区中央やや北寄りのL31区及びM31区に跨って掘られた土坑であり、南に接するSK008 (16世紀末葉)に切られた状態で検出した。その形態は長軸3.0m、短軸1.7mの楕円形を呈しており、床



第290図 SK385 実測図 (1/30)



第291図 SK385 出土遺物実測図 (1/3)

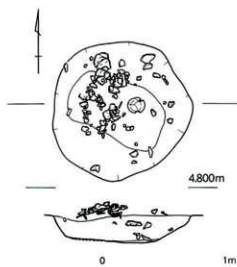
は深さ20cmと40cmの二段掘りになっていた。しかし、出土遺物が上層に偏っていたことから、最初に約2.0m×1.7m、深さ40cmの円形土坑が掘られ、それが埋没した後、深さ20cmの浅い土坑が掘られたと考えられる。出土遺物より、後者の浅い土坑は16世紀中葉頃から後葉に構築されたことがわかるが、前者の深い土坑は遺物が希少なため、それ以前とするに留めたい。

SK385出土遺物 (第291図)

1は中国龍泉窯系青磁碗。16世紀前半の所産。2～4は京都系土師器皿で、器壁は薄い。口縁部下のヨコナデがみられ、塩地幅年の2期にあたる。それぞれの口径は、2が10.0cm、3が11.1cm、4が16.8cmである。5は備前系陶器の播鉢で、放射状スリメが施されており、乗岡幅年の中世6期に相当する。

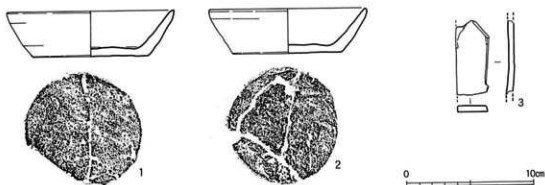
SK386 (第292図)

SK386はM32区に位置する。土坑の平面形は直径1.2mほどの円形を呈している。その深さは30cmである。埋土中から、在地系土師質土器が一括廃棄された状態で検出された。その多くが細片で、円化するに至らず、復元できた2点のみを第293図に載せている。それらから土坑の構築年代を考えると、14世紀前半代に比定できる。



第292図 SK386 実測図 (1/30)

14世紀前半代



第293図 SK386 出土遺物実測図 (1/3)

SK386出土遺物 (第293図)

在地系土師質土器杯 1・2は在地系土師質土器杯で、その器形は底部から口縁部に向けて直向気味に立ち上がる。口径と底部径の比率は1.45で、直立気味の印象をもつ。3は砥石で、硯から転用したものか。

SK439 (第294図)

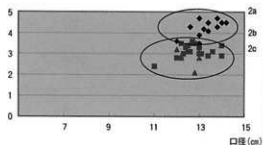
調査区中央やや東寄りで確認された浅い土坑で、その規模は東西約4.2m、南北約4.0mである。黄褐色の地山を20cmほど掘り窪めた土坑から、多数の在地系土師質土器が出土した。土坑の床面は焼けていないため、焼成坑ではなく、廃棄土坑と考える。また、土器の集中する箇所がいくつかみられたが、数基の土坑が切り合っていることは平面プランでは確認できていない。さらに土器自体に混入といったものもないことから14世紀中葉に一括廃棄されたものとする。そのため小皿・小形の杯、杯がまとまって出土しており、この時期の土師質土器のセットを考える上で良好な資料となろう。

SK439出土遺物 (第295～298図)

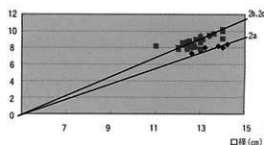
1～59は在地系土師器で、1～8は小皿、9～59は杯である。小皿は底部から口縁部を短くつまみ出すので、その口径は7.1cm～9.3cm、器高は1.3cm～2.1cm、底径は5.6cm～7.4cmの範囲に収まる。

杯は法量により大きく2グループに分けられる。1群(9～15)は法量が7.5cm～8.8cmの小さな一群で、口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。器高は1.6cm～2.4cm、底径は5.4cm～6.4cmに収まる。2群(16～59)はさらに3グループに細分され、2a群(16～26)は比較的器高のあるタイプで、口縁部は底部から内湾気味に立ち上がる。2b群(27～46)は胴部から口縁部にかけての形態は2a群と同様であるが、器高が低いタイプ。2c群(47～59)は底部から胴部にかけての形態は変わらない。

グラフA 土師質土器の口径と器高



グラフB 土師質土器の口径と底径



いが、口縁端部が外に開くタイプで、器高も低い。

出土した在地系土師質土器皿の法量については、前頁のグラフ1に口径と器高の相関関係を、グラフ2に口径と底径の関係を示している。

グラフ1の器高と底径の関係からみた特徴は次の2点が上げられる。①2a群の器高はすべて3.5cm以上である。②2b群と2c群は器高において差はないが、口径においては2b群が12.0cm～14.0cmであるのに対して、2c群は小型化し、12.0cm～13.0cmに収まる。



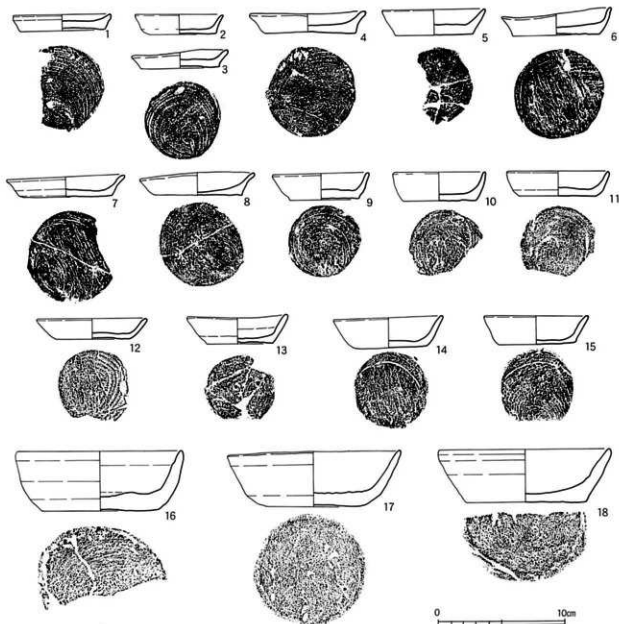
第294図 SK439 実測図 (1/30)

グラフ2の器高と底径の相関関係から言えることは、2a群は器高が高い分、口径と底径の比率が約1.8と他のb群(1.4)、c群(1.4)に比べて大きいということである。

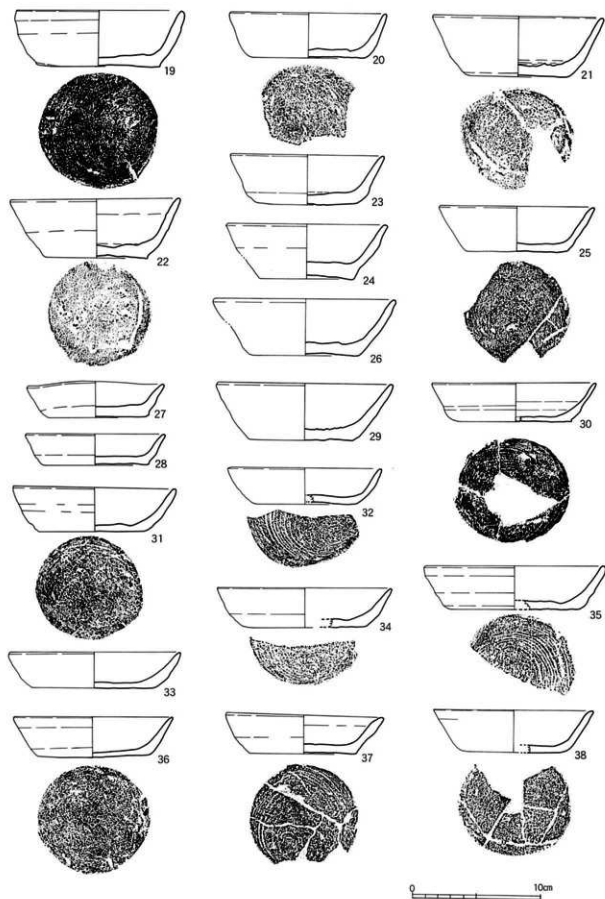
60・61は土師質土器の描鉢で、放射状のスリメを施す。62・63は石製品で、そのうち62は滑石製の石鍋、63は砥石である。64は中世の土鍾。65は北宋の「元祐通寶」(1086年初鑄)、文字は行書体である。

SK457 (第300図)

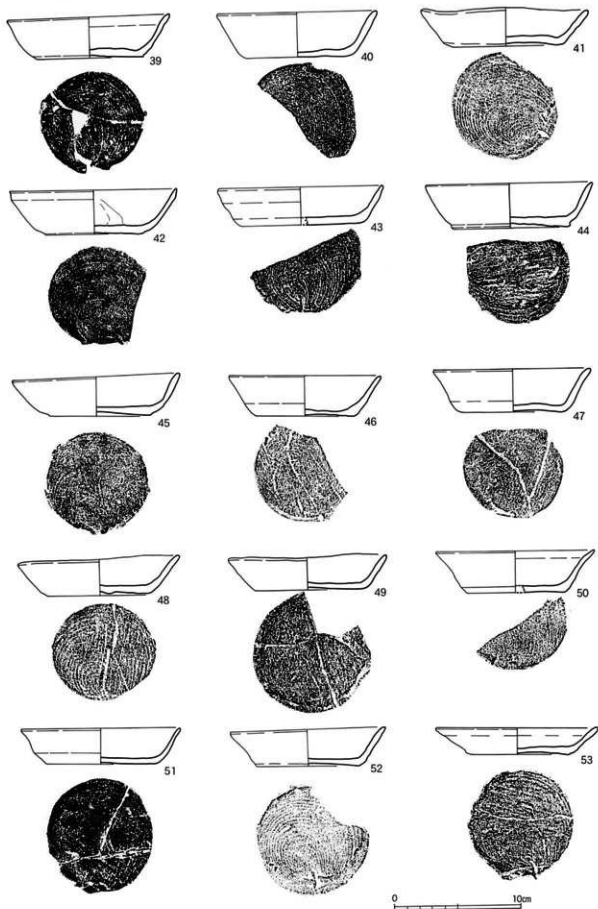
土坑墓の可能性のある土坑 調査区南寄りの西端のK33区に位置する。道路のコンクリ基礎部分により1/3を壊されていた。土坑は軸をほぼ北にとる長方形プランで、長さ1.2m、幅0.4m、深さ15cmである。プランから土坑墓の可能性も考慮しながら掘り進めたが、埋土中から釘は検出されなかった。遺物も少なく、その用途、構築時期については不明である。



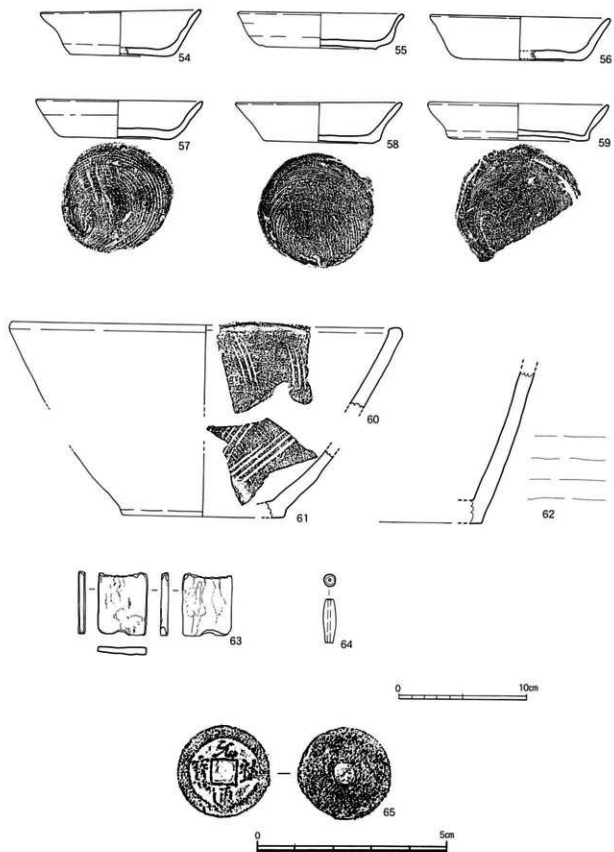
第295図 SK439 出土遺物実測図① (1/3)



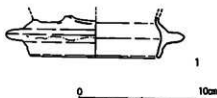
第296図 SK439 出土遺物実測図② (1/3)



第297図 SK439 出土遺物実測図③ (1/3)



第298図 SK439 出土遺物実測図④ (1/3 ※銭貨のみ1/1)



第299図 SK457 出土遺物実測図 (1/3)

SK457出土遺物 (第299図)

1 は華南三彩の底部。内面及び突帯下部は露胎である。

SK465 (第301図)

調査区北端のM30区に位置する。軸をほぼ北

にとり、東西2.2m、南北1.5m以上の規模をもつ方形土坑である。その深さは25cmで、床面から約60cm角の浅い掘り込みが検出された。他に柱穴等は確認できていない。出土遺物から、その構築年代は16世紀末葉に比定できる。

SK465出土遺物

(第302図)

1 は京都系土師器皿、器壁が厚く、埴地福年の3期に属する。2 は肥前系陶器の高台付皿で、内底部にも灰釉（深緑色）を施す。1590年～1600年の唐人古場窯の製品か。

SK484 (第303図)

調査区中央部東側のM32区に位置する。60cm四方の小形土坑である。東西に流れる溝SD542を切

って掘られている。その深さは15cmほどで、床面で浅い柱穴を確認した。土坑の南寄りで瓦質土器の鍋が出土しただけで、時期を明確にする遺物はでない。

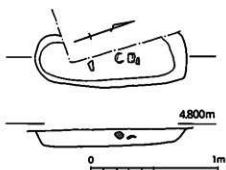
SK484出土遺物 (第304図)

1 は瓦質土器の鍋で、その復元口径は28.5cmである。

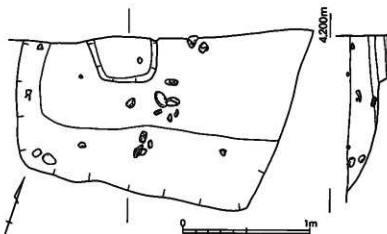
SK545 (第305図)

調査区北の掘出し部N30区に位置する方形プランの土坑である。その大きさは縦0.9m、横0.6m、深さ20cmである。埋土中からの遺物の出土量が乏しく、時期を決定するに至らなかった。

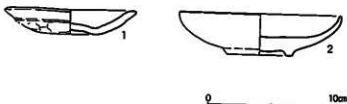
SK545出土遺物 (第306図)



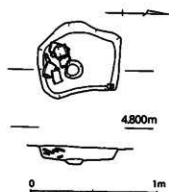
第300図 SK457 実測図 (1/30)



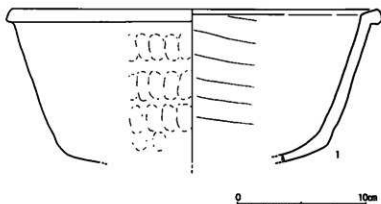
第301図 SK465 実測図 (1/30)



第302図 SK465 出土遺物実測図 (1/3)



第303図 SK484 実測図 (1/30)

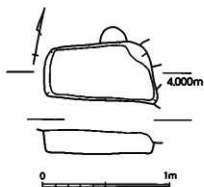


第304図 SK484 出土遺物実測図 (1/3)

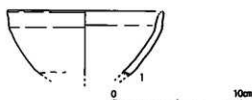
1は瀬戸美濃系陶器の天目碗。2は1038年初鑄の「皇栄通寶」、文字は篆書体である。3は1078年初鑄の「元豊通寶」、文字は行書体である。

SK580 (第308図)

調査区西側K33区に位置する小形円形プランの土坑である。その直径は50cmほどである。埋土中か



第305図 SK545 実測図 (1/30)



第306図 SK545 出土遺物実測図 (1/3 ※錢貨は1/1)

らの遺物の出土量が乏しく、時期を決定するには至らなかった。

SK580出土遺物 (第307図)

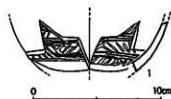
朝鮮産陶器域 1は朝鮮産陶器域の影三島である。

SK583 (第309図)

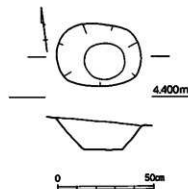
SK583は、調査区南寄りM33区に位置し、SK239 (16世紀前半から中頃)の床面で確認された土坑である。そのプランは直径約70cmの円形を呈し、その深さは30cmである。

埋土上面から

在地土師質土器が合せ蓋の状態で出土した。この土師器の年代観から、構築時

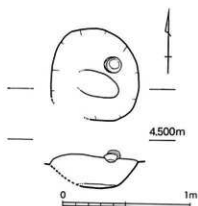


第307図 SK580 出土遺物実測図 (1/3)

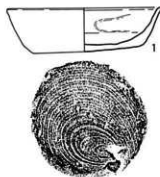


第308図 SK580 実測図 (1/20)

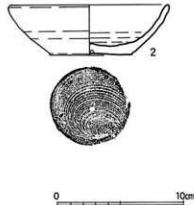
第2節 遺構と遺物



第309図 SK583 実測図 (1/30)



第310図 SK583 出土遺物実測図 (1/3)



第311図 SK702 実測図 (1/30)

期は14世紀前葉に比定できる。

SK583出土遺物 (第310図)

1 は在地系土師質土器坏で、口径は12.5cm、器高3.6cm。2 は在地系土師質土器皿で、内面下部にロクロ目を残す。その口径は12.6cm、器高4.0cm。いずれも底部に回転糸切り痕を残す。

SK702 (第311図)

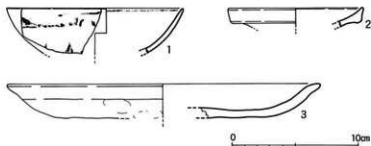
調査区北側M30区に位置し、SX551 (溝部分)の底で確認した隅丸方形プランの土坑である。

16世紀後半 長辺1.5m、短辺1.2m、深さ50cmを測る。本土坑内からは少量の土器や礫が出土したに留まった。出土した京都系土師器や磁器より、16世紀後半に比定する。

SK702出土遺物 (第312図)

漳州窯系皿 1 は中国漳州窯系の皿。16世紀後半の所産。

2 は口縁外面と内面に黒釉が施され頸部外面以下は露胎となっている。中国南部産の黒釉陶器四耳壺とセットとなる蓋か。3 は京都系土師器皿で、復元口径は26.6cmと大型である。



第312図 SK702 出土遺物実測図 (1/3)

3. 集石遺構・石列

概要 (第313図)

中世大友府内町13次調査区では、L30区・M30区・N30区といった北側地区で、集石遺構・石列が確認されている。

集石遺構 集石遺構については、10cm～40cm大の礫を多量に集めているものが多い。それらの石の中には被熱したものもある。集石された石の用途としては家の屋根を押さえるための重しであったり、溝や井戸等深い遺構を埋める際に、地固めとして用いられたり様々であろう。

石列 また、石列については、最も注目されるのがSX551である。中間をSD584に切られているが、その西側では、20cm～30cm大の石列が5mにわたって検出され、東側では10cm～30cm大の石を約45°の

角度で2段～7段組み上げた石積みを検出した。石積みの中程には、石積みを囲む溝に直交するよう

石積み に橋状に石を積み上げた箇所が1ヶ所確認された。その内部には、整地層SX705～707があり、SX551はこの整地層の土留めの役割を果たすとともに整地層上に存在したと推定される建物に伴う区画の役割を果たしたものと推測される。整地層上では、西の石列の北側で、1.5mほどの間隔をもって並行に走る石列を検出しており、SX551内の区画に係わる遺構と思われる。

橋状石積み SX551を構成する整地層SX705～SX707からは、他の遺構とは異なる土器組成をもった京都系土師器が出土しており、この石積みに囲まれた区画の意味を論じる上で、非常に興味深いものがある。

以下、それぞれの遺構の詳細を報告する。



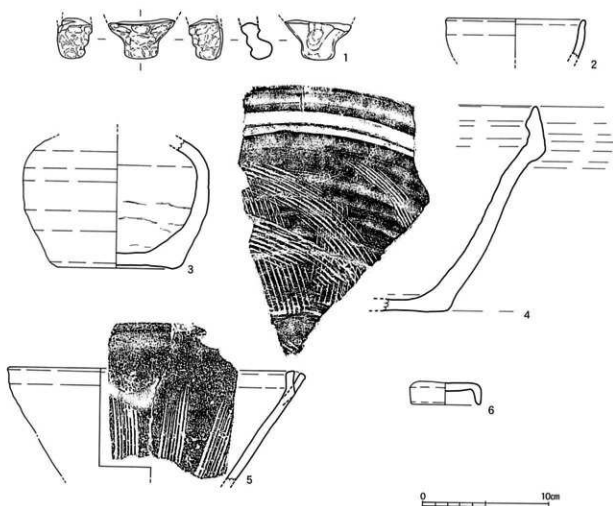
第313図 第13次調査区集石・石積遺構配置図 (1/250)

SX124・SX126 (第315図)

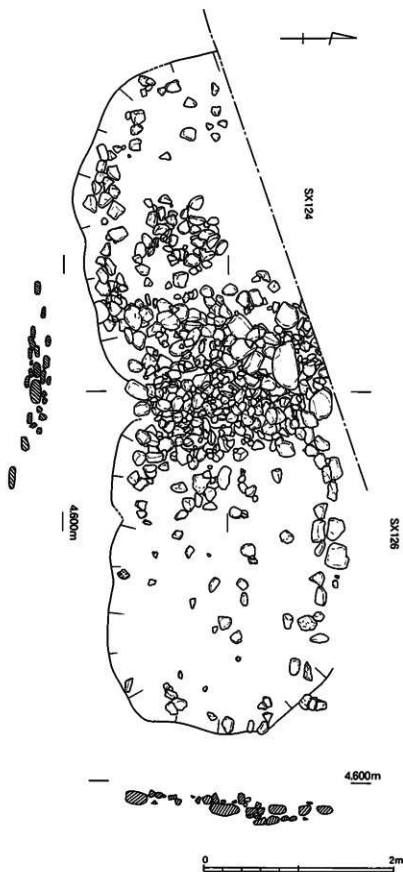
調査区北端部L30区・M30区に跨って検出した集石遺構である。東西7m、南北2.5mに及ぶ範囲で10cm大から50cm大の石を配置していた。礫の厚みは40cmに及ぶ。当初1つの遺構と考えて掘り進めたが、その周囲で深さ15cmの浅い掘り方が東西に分かれて確認されたため、西側をSX126東側をSX124した。しかし、両者の前後関係が確認できなかったため、ここでは同一遺構として報告する。

SX126東西約4m、南北2.5mの隅丸方形プランの浅い土坑の周囲に沿って、礫が検出された。中央部に礫がないのは、そこに井戸SE384が掘られたためである。さらにその真中で礫の集中が見られた箇所は、SE384の井筒の上部にあたり、井戸側に積まれた円礫あるいは井戸封じに伴う円礫と思われる。しかし、調査のこの段階で中央部に井戸が存在するということを把握しきれていなかったため、土層によるSX124と井戸SE384の前後関係の検証はできていない。ただ、同レベルで井戸に関する遺構が確認されたということは、同時に存在したか、あるいは後に井戸が掘られたと考えるのが自然であろう。この集石内から出土した遺物が少なく、時期決定は困難であるが、SE384が16世紀後葉から末に造られたものであることから、遅くとも16世紀後葉以前には存在したといえる。また、同規模の掘り方をもつSX124らは、礫に混じってナメスリメを施す備前系陶器掻鉢が出土したことから、この集石遺構群は16世紀後葉に構築されたと考える。その性格については、次のSX284で述べる。

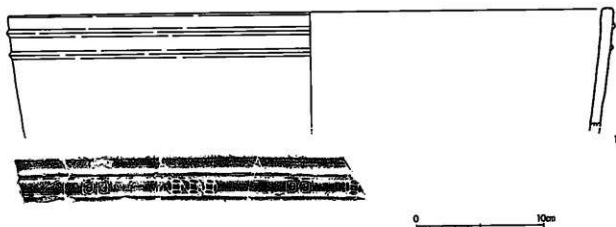
井戸SE384と
の前後関係



第314図 SX124 出土遺物実測図 (1/3)



第315図 SX124・SX126 実測図 (1/40)



第316図 SX126 出土遺物実測図 (1/3)

SX124・SX126出土遺物 (第314・316図)

中国龍泉窯系青磁香炉脚部 SX124の1は中国龍泉窯系青磁の香炉の脚部である。2は瀬戸美濃系陶器の天目碗。3・4は備前系陶器である。3は壺、4はナナメスリメを施す摺鉢。近世1期。5は在地の土師質土器の摺鉢で、放射状のスリメをもつ。6は土師質の焼塩壺または小皿である。

SX126は遺物の出土量が乏しく、図化できたのは1の瓦質土器の火鉢だけである。口縁付近に2条の小さい突帯を巡らし、その突帯間に七宝文と変形雷文のスタンプが交互にみられる。

SX284 (第317図)

SX124とSX126の下位で、井戸SE384と並んで検出した集石遺構である。SE384の東で確認した東西約1m、南北約2.5mの集石部とその北で東西に伸びる約3.5mの石列及びそれに付随する掘り方をSX284とした。西にある集石部は、SX124とSX126の間にあった集石の下位にあたり、北に伸びる石列はSX126の北側部分の下位にあたる。さらに、出土した京都系土師器が埴地幅年の2期及び3期であることから、構築時期についてもズレは生じていないことから、元々、SX284はSX124・SX126と同一の遺構であったと考えられる。

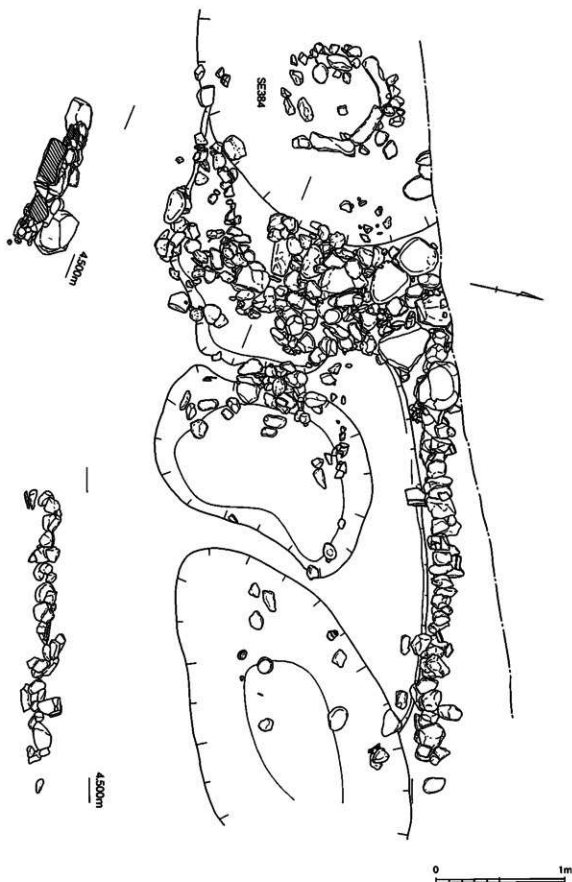
町屋へ区画に 関わる石列 これらの集石遺構は第315・317図に断面をみても解るように、石の上面のレベルを合わせるように築かれている。ことから単にさらに下位にあるSX551の溝による地盤沈下を防ぐ目的で敷かれたというよりも、井戸SE384を含めて調査区外に展開する町屋の区画に係わるものと理解したい。

SX284出土遺物 (第318図)

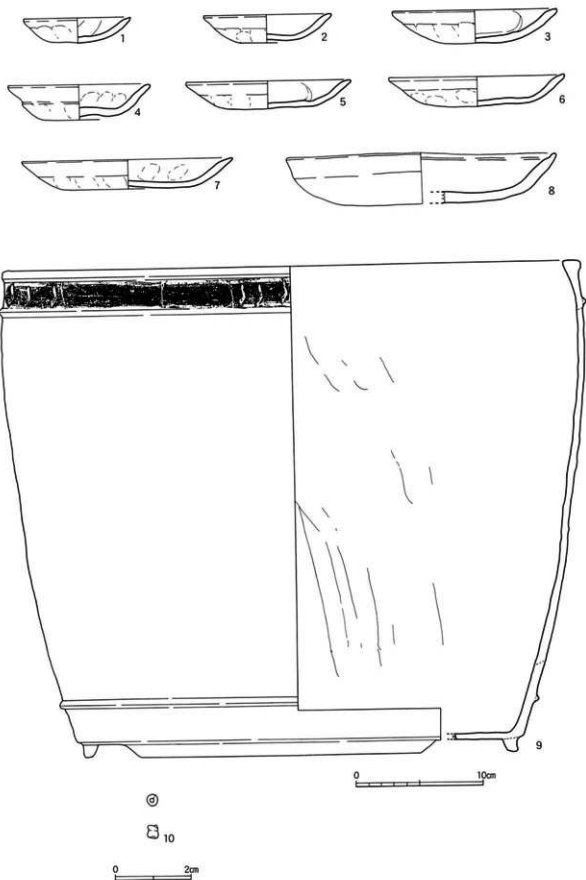
1～8は京都系土師器皿である、埴地幅年の2期及び3期に属するものである。その法量は約9cm大、11cm大、13cm大、15cm大、17cm大、21cm大である。9は在地の瓦質土器火鉢で口径45cm、高さ38cmほどで、口縁付近に2条の突帯間には縦に刻みをいれ、底部付近にも突帯を1条巡らし、底部は板状の脚部を有す。10はガラス小玉。

SX458・SX585 (第319図)

M30区でSX284とSX551の間に位置する集石遺構である。西側の集石部をSX458、東側の落ち込みをSX585とした。集石部SX458は標高4.1mで確認されており、西にあるSX284とさほど高低差はない。しかし、SX585はそれらと同じ標高をもつSK379の下位で検出したものであり、SX458とSX585は時期差があると考えられる。平面プランでもSX585の掘り方の上でSX458の石が確認されている。実際出土した京都系土師器を比べてみると、SX458は3期に属するものが混じっていることから、16世紀後葉から末葉に比定できる。それに対して、SX585は2期に収まっており、16世紀中葉から後



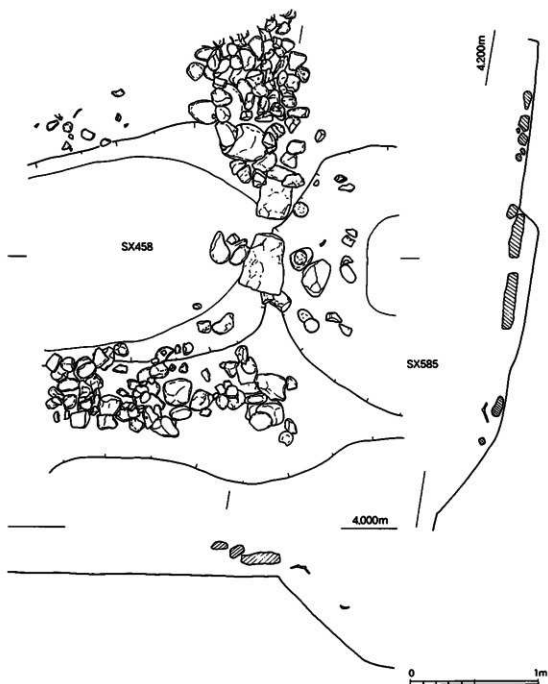
第317図 SX284 実測図 (1/30)



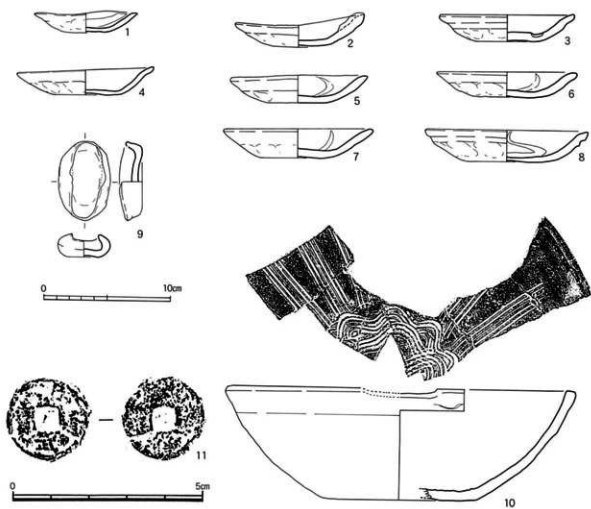
第318図 SX284 出土遺物実測図 (1/3 ※10は1/1)

業に掘られたことになる。つまり、SX458は西にあるSX284の延長上の遺構であり、SX585は東に2枚の凝灰岩 伸びる SX551の溝の端にあたると解釈できる。

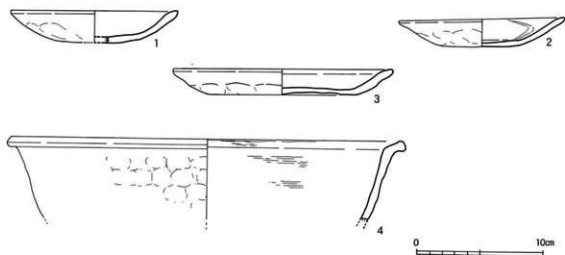
SX458の集石は幅約1mを測り、北側調査区外から南に伸びてきて、まずSX284の北側の石列と接する。さらに2枚の凝灰岩の平石を過ぎたところで、西に折れ、再びSX284へと接する。(第322図)



第319図 SX458・SX585 実測図 (1/30)



第320図 SX458 出土遺物実測図 (1/3 ※錢貨は1/1)



第321図 SX585 出土遺物実測図 (1/3)

SX458出土遺物 (第320図)

1～8は京都系土師器皿である。1・2は埴地編年2期、3～8は3期に属するものである。その法量は8cm、10.2cm～11.8cm、12.8cmの3法量確認された。9は小皿の両側をおさえ、耳皿としたものである。10は在地の瓦質土器の摺鉢で、放射状のスリメをもつ。11は明代に鑄造された「洪武通寶」である。

SX585出土遺物 (第321図)

1～8は京都系土師器皿である。その形態から埴地編年2期に属する。その口径は13cmほどと17cmほどである。4は瓦質土器の鉢である。

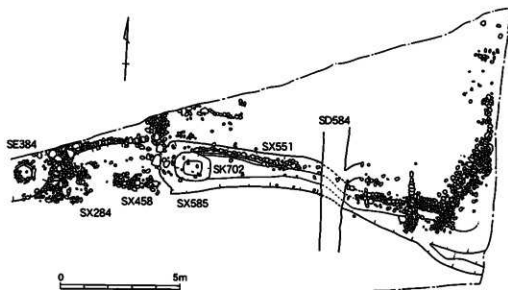
SX551 (第323図)

SX551は調査区北端のM30区及び東張出し部のN30・N31区で検出された遺構である。それは石積みと石列SX585から東へ伸びる溝状遺構とその内側にある石積み及び石列とに分かれる。

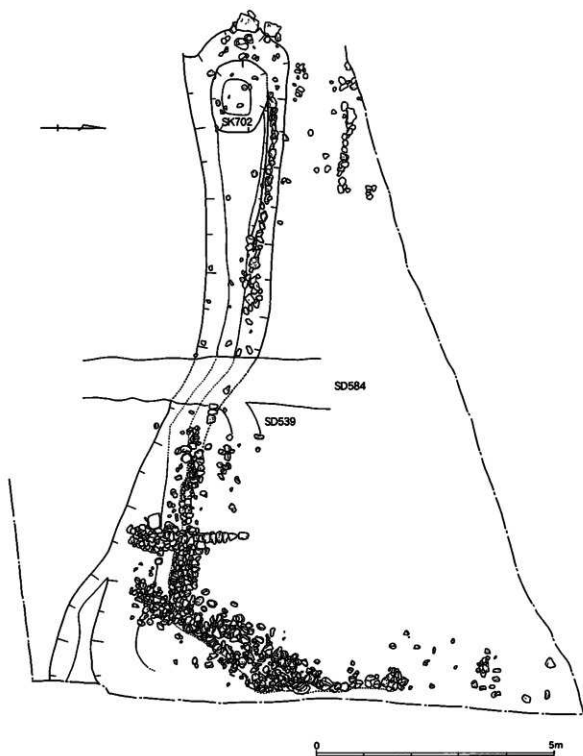
溝状遺構は東西に約15m走った後、第7次調査区との境界付近で北に直角に曲がる。その規模は、幅1～2m、深さ1mほどである。

石積みおよび石列は溝の北側法面で確認されたものである。まず20cm～30cm大の石列が、溝の西から5mにわたって検出された。中間はSD584に切られており石列は途切れるが、それを過ぎた箇所では石列が再び始まる。さらにその東側では10cm～30cm大の石を約45°の角度で2段～7段組み上げた橋状の石積み石積みを溝の内側で検出した。石積みの中程では、溝に直交するように橋状に石を積み上げた箇所が1ヶ所確認された。さらに石積みは調査区東端で溝に沿って北に屈曲し、隣接する調査区へと続く。

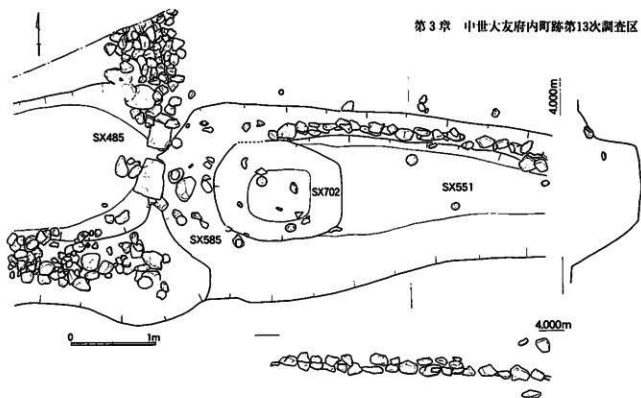
SX551に囲まれた内部には、整地層 SX705～707があり、SX551はこの整地層の土留めの役割を果たすとともに整地層上に存在したと推定される建物に伴う区画の役割を果たしたものと推測される。その整地層の厚さが西より東の方が厚いため、西側の石列は1段である(第324図)のに対し、東側の石積みは約50cmの高さまで積まれている(第325図)。



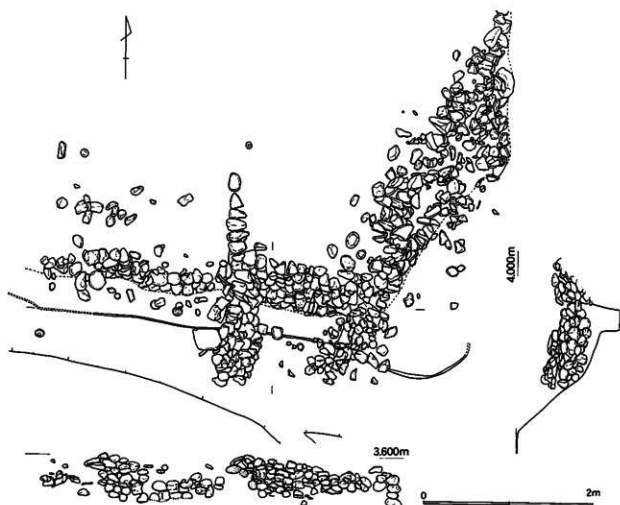
第322図 SX551 周辺図 (1/150)



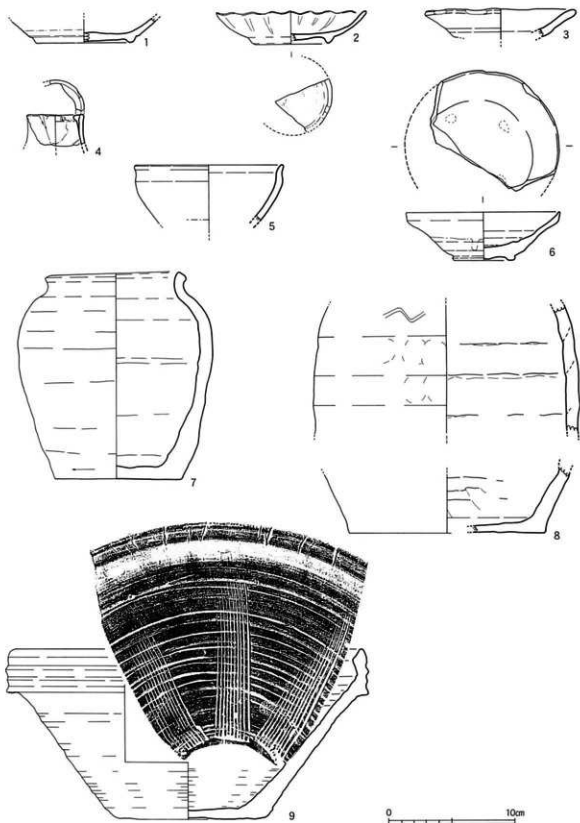
第323図 SX551 実測図 (1/80)



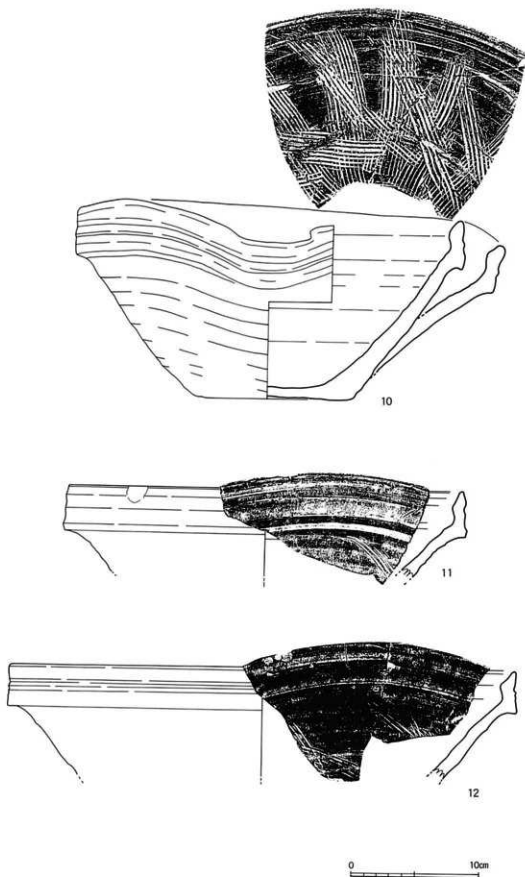
第324図 SX551 拡大図① (1/45)



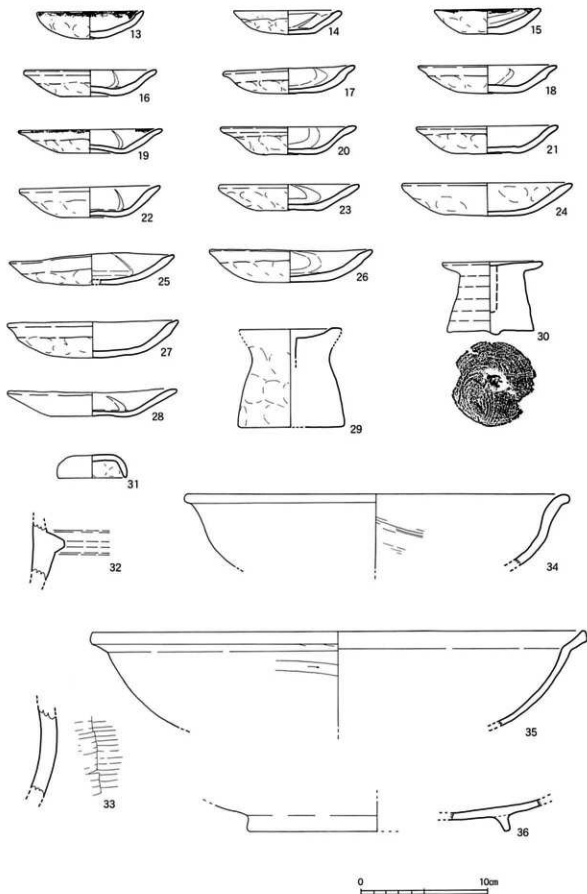
第325図 SX551 拡大図② (1/45)



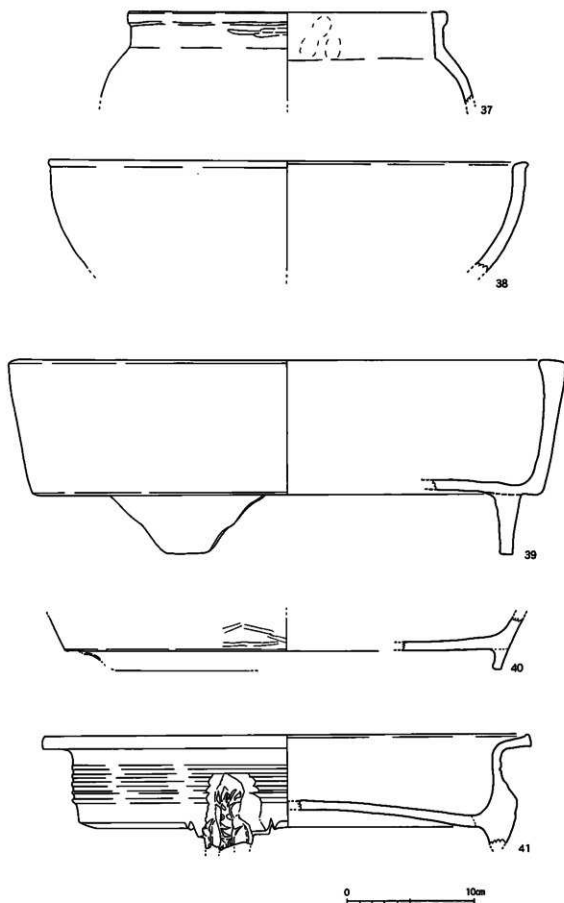
第326図 SX551 出土遺物実測図① (1/3)



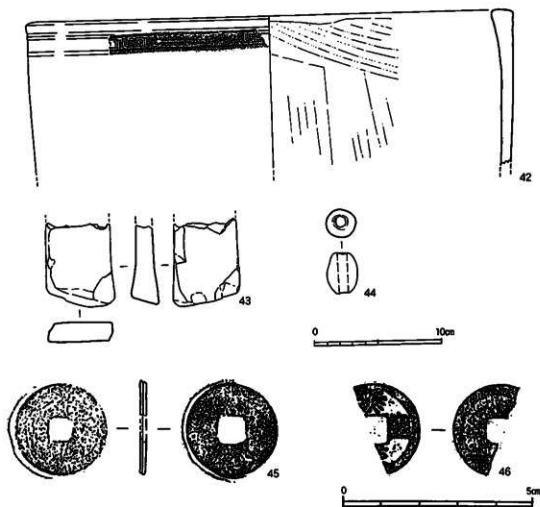
第327図 SX551 出土遺物実測図② (1/3)



第328図 SX551 出土遺物実測図③ (1/3)



第329図 SX551 出土遺物実測図④ (1/3)



第330図 SX551 出土遺物実測図⑤ (1/3 ※錢貨は1/1)

整地層上で、建物の礎石あるいは柱穴は確認できなかったが、西の石列の北側で、1.5mほどの間隔をもって並行に走る石列を検出している。その長さは約2.5m。SX551内の区画に係わる遺構であろう。

出土遺物より、SX551は16世紀中頃～後葉に構築され、16世紀末に廃絶されたと考える。

SX551出土遺物（第326～330図）

1・2は中国産白磁皿で、2は菊花状の単位をもつ。3は中国産青磁後花皿。4は華南三彩陶器であるが用途は不明である。5は瀬戸美濃系陶器の天目碗。6は肥前系陶器皿で、見込みに目跡をもつ。1590年～1600年の所産。7～12は備前系陶器である。7・8は壺で8の肩部には櫛描波状文が見られる。9～12は摺鉢で、放射状スリメとナナメスリメが混在している。13～28京都系土師器皿で、その形態から塩田編年2期と3期がみられる。その口径は約9cm前後、11cm前後、13cm前後の3法量認められ、9cm及び11cmの中には灯明皿として使われたものがある。29・30は燭台で、29は底径8.4cmで上部が欠損している。30は底径6.8cm。31は京都系土師器の小皿あるいは焼塩壺蓋である。32・33は滑石製の石鍋。34～36は瓦質土器の鍋及び鉢である。37～42も瓦質土器で、37・38は鉢形土器、39～42は火鉢である。39・40の底部は板状の脚部を有す。41は口縁部はくの字状に曲がって外に広がり、胴部には多条の沈線が走る。脚部には型押しされた龍がかたどられている。42は口縁付近に2条の小さい突帯を巡らし、その突帯間に雷文のスタンプを施す。43は砥石、44は土鍾である。45・46は銭貨で、そのうち45は北宋の「熙寧元寶」で、文字は篆書体。

SX705・706・707

(第331図)

整地層 SX705・706・707はSX551の内部の整地層で、SX706は層位的にSX707の上位にくるが、出土遺物を見る限り、時期差は見受けられない。つまり、この整地作業がほぼ同時に進行し、一気に石を積み上げて、区画を築いたと考えられる。その時期は出土遺物から16世紀中頃～16世紀中頃～後葉に比定できる。

SX705・706・707

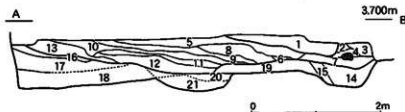
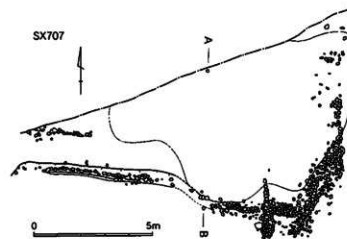
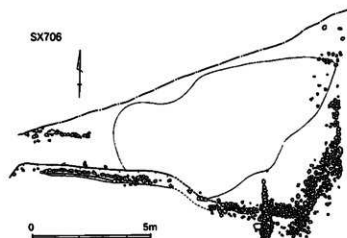
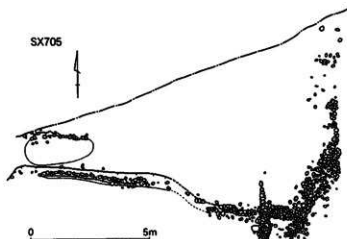
出土遺物 (第332～339図)

まずSX705の出土景徳鎮窯系青花瓦を見てみる。1は花皿

中国景徳鎮窯系青花瓦で、小野分類のF群にあたる。復元口径は18.7cm。2は在地の瓦質の鉢で、復元口径は41.2cm。3～6は京都

2～13層はSX706の埋土、14～19層はSX707の埋土。

- 1 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3)
- 2 にぶい黄褐色土 (Hue10YR5/4)
- 3 灰黄褐色土 (Hue10YR5/2)
- 4 灰黄褐色土 (Hue10YR5/2)
- 5 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
- 6 褐色砂質土 (Hue10YR4/4)
- 7 褐灰色粘質土 (Hue7.5YR4/1)
- 8 黒褐色土 (Hue10UR2/3)
- 9 黄褐色土 (Hue10YR5/6)
- 10 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
- 11 褐色土 (Hue10YR4/6)
- 12 褐色土 (Hue7.5YR2/1)
- 13 褐色土 (Hue7.5YR1.7/1)
- 14 褐灰色粘質土 (Hue7.5YR5/1)
- 15 褐灰色粘質土 (Hue7.5YR4/1)
- 16 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2)
- 17 にぶい黄褐色粘質土 (Hue10YR4/3)
- 18 褐灰色土 (Hue10YR4/1)
- 19 黒褐色土 (Hue5YR2/1)
- 20 灰黄褐色砂質土 (Hue10YR5/2)
- 21 黒褐色土 (Hue10YR3/1)



第331図 SX705・SX706・SX707 実測図 (1/160ただし断面図は1/60)

第2節 遺構と遺物

京都系土師器 系土師器皿で、塩地幅年2期の範疇で捉えられよう。その口径は約11cm、13cm、17cmの3法量である。

7は在地系土師質土器で、底部に糸切り痕を残す。8は1111年初鑄の「政和通寶」で、文字は真書体。

次に、SX706の出土遺物を見てみる。1は中国産の白磁皿で、口縁部が端反っており、16世紀代の所産。2は中国産の青磁皿で、見込みに軸割りが認められる。3は陶器の蓋か。4・5は備前系陶

器拵鉢で、いずれも放射状スリメをもつ。乗間幅年の中世6期のもの。6~24は京都系土師器皿で、概ね2期の範疇に入るものである。その口径は約9cm、11cm、13cm、15cm、17cmの5グループに分類できる。数量的には約13cm大のものが多く、灯明皿として使用されている皿も13cm大である。25~28は在地系土師質土器小皿で、ロクロを引きながら円盤の中央を押し込んだだけの簡素な造りの小皿である。色調は29・30の皿と同様である。その29・30は内外面にロクロ目を残す在地系の皿である。25~28の口径が9cm前後であるのに対し、29・30は約13cmと若干大きく、31は在地瓦質土器の鍋、32は瓦質土器の火鉢。33は瓦質土器の外面に花文のスタンプを施す。34は1068年初鑄の「熙寧元寶」で、文字は真書体。35は「祥符元寶」で1009年初鑄のもの。

最後に、SX707の出土遺物を見てみる。1・2は中国景徳鎮系青花碗であり、そのうち1は口縁部が外反しており、小野分類のB1群と考えられる。2はC群に当たり、16世紀前葉の所産。3は備前系陶器拵鉢で、中世6期に分類される、放射状スリメをもつ。4~74は京都系土師器皿で、こちらもSX706同様、概ね2期の範疇に入る。その口径も約9cm、11cm、13cm、15cm、17cmの5グループに分類できる。数量的には約11cmと13cm大のものが多く、74は京都系土師器の内面に花文をスタンプした皿である。75~77は京都系土師器の小皿あるいは焼壺蓋である。78・79は径5cm程度の小皿の両側をおさえ、耳皿としたものである。80は底径6.9cmを測る土製燗台であり、上面中央を穿孔している。

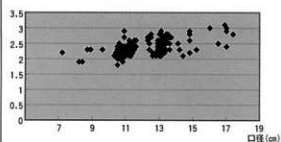
81~97は在地系土師質土器小皿で、SX706出土の小皿同様、簡素な造りの小皿である。口径は5.8cm~10.4cmである。色調は赤褐色。98~104は内外面にロクロ目を残す在地系の皿で

ある。その口径は8.1cm~12.6cmを測る。105・106は広い底部から短く立ち上がるタイプの皿

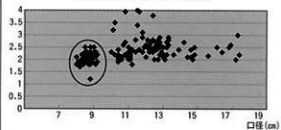
ではある。107は放射状スリメを施した土師質土器の拵鉢で、見込みにスリメをもつ。108は瓦質土器鉢で、109は瓦質土器の香炉である。110はフイゴの羽口で、下半分が強く被熱している。111は砥石、112は土鍾である。113は「皇榮通寶」(1068年初鑄)で、文字は真書体。35は明の「洪武通寶」(1009年初鑄)である。

ここで、SX705・706・707から出土した土師器の法量について見てみよう。京都系土師器は、報告書に掲載したもの以外にも完形品および半完形品は数多くあり、それらを含めた169個体について、口径と器高の相関関係を下のグラフCに示した。これによると大きく5つの集中分布域があることが判る。特に11cmサイズ、13cmサイズが多くみられ、その反面、灯明皿と

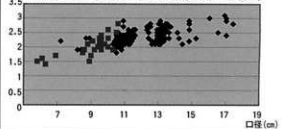
グラフC 整地層出土京都系土師器の口径と器高



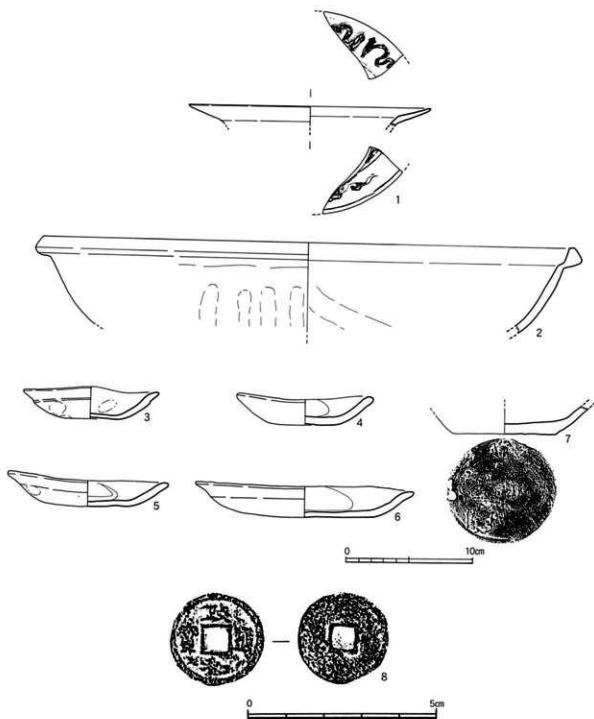
グラフD それ以外の遺構出土
京都系土師器の口径と器高



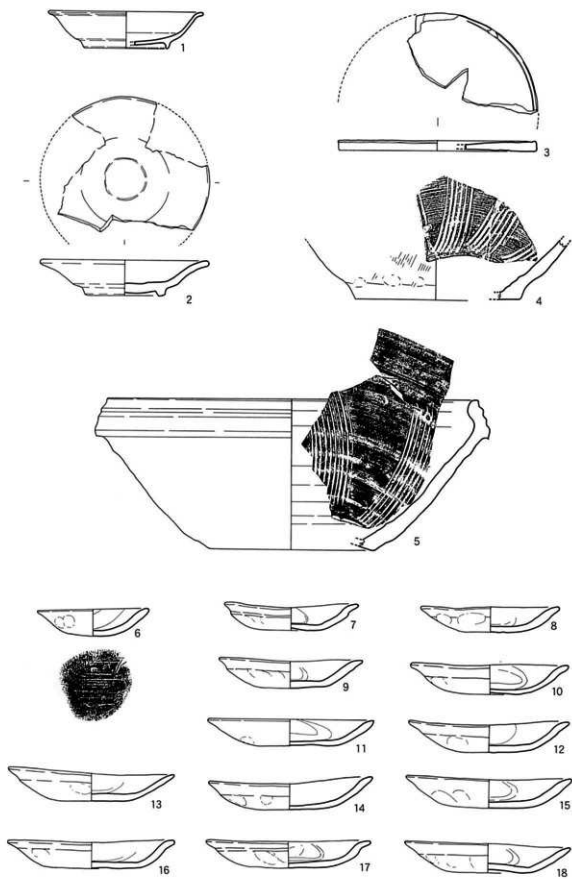
グラフE それ以外の遺構出土
整地層京都系土師器の口径と器高(在地小皿を含む)



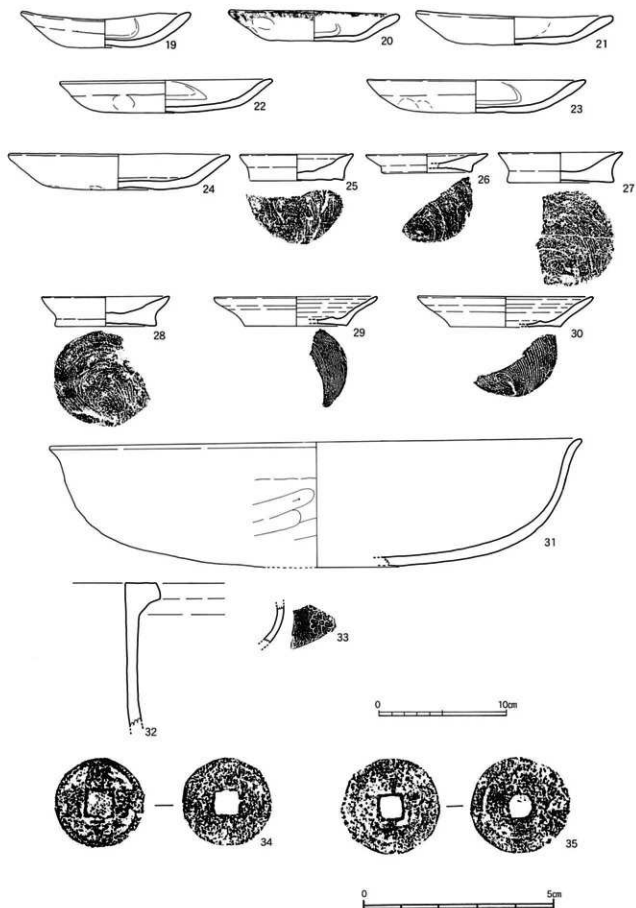
して多用される9cmサイズの土師器が極端に少ない。このことは他の遺構の分布図(グラフD)と比べると、一目瞭然である。次に、グラフCに整地層SX705・706・707でしか出土していない在地系土師質土器の小皿を加えてみると、グラフEようになる。すると京都系土師器のみでは少なかった9cmサイズの部分が充実してきたのが判る。つまり、13次調査区において、この整地層のあるSX551内だけが、異なる土器組成をもっていることが判った。この整地層の周囲だけに石積みや石列があること、さらに京都系土師器が「式三献」の儀式にまつわる土師器と考えられることを勘案すると、町屋とは性格を異にする区画が存在していたと言える。



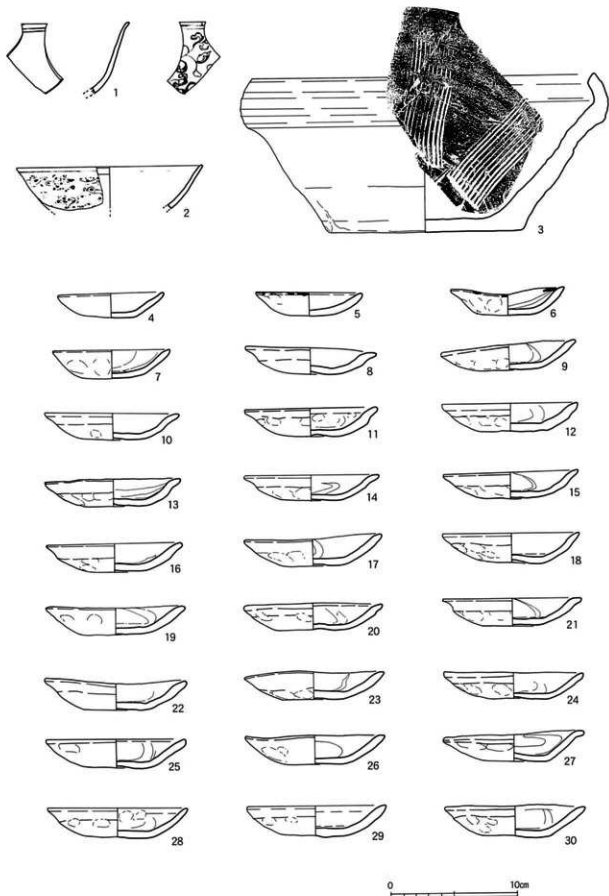
第332図 SX705 出土遺物実測図 (1/3 ※ 銭貨は1/1)



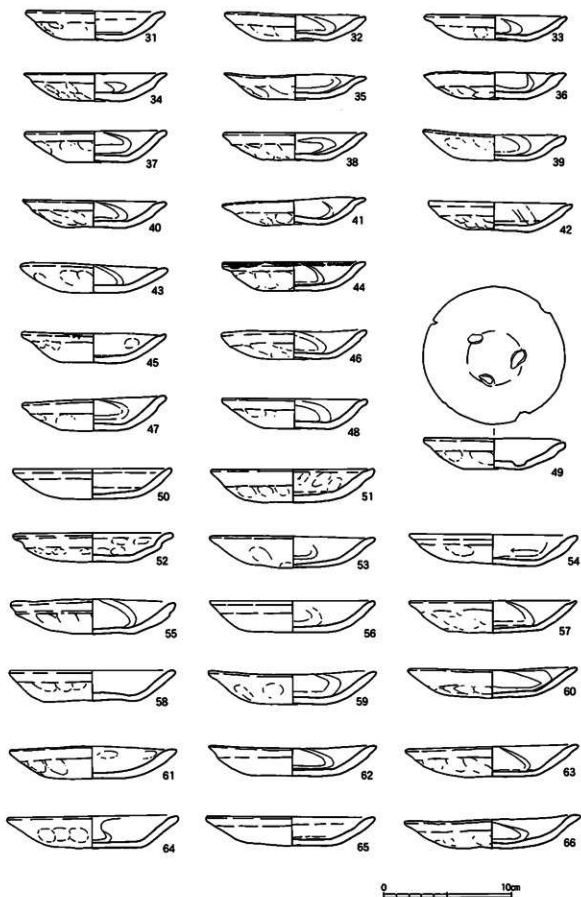
第333図 SX706 出土遺物実測図① (1/3)



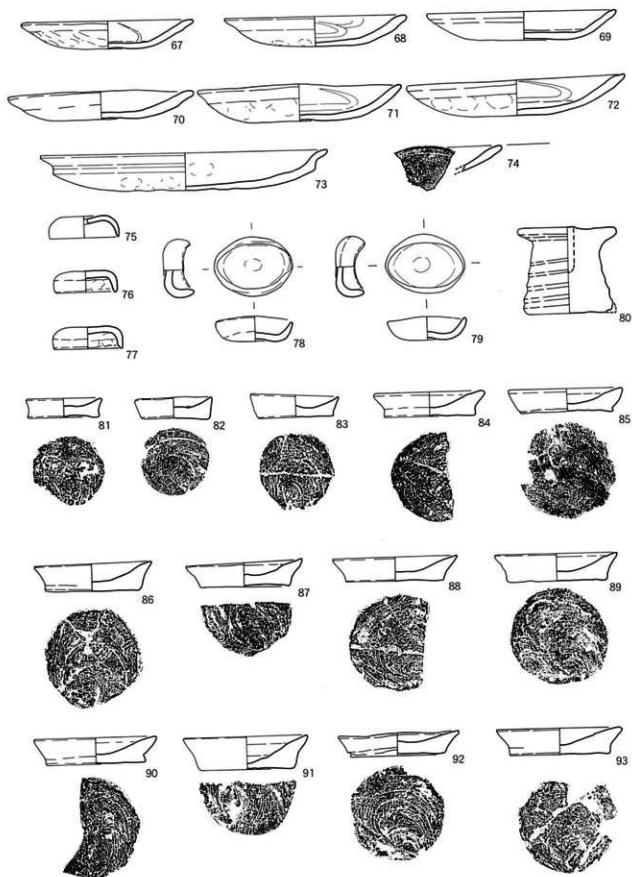
第334図 SX706 出土遺物実測図② (1/3 ※銭貨は1/1)



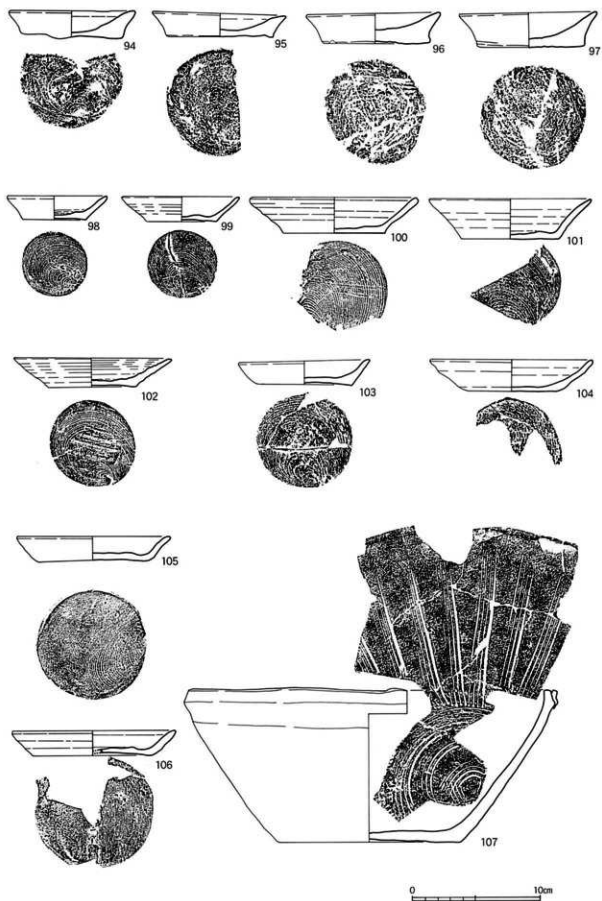
第335図 SX707 出土遺物実測図③ (1/3)



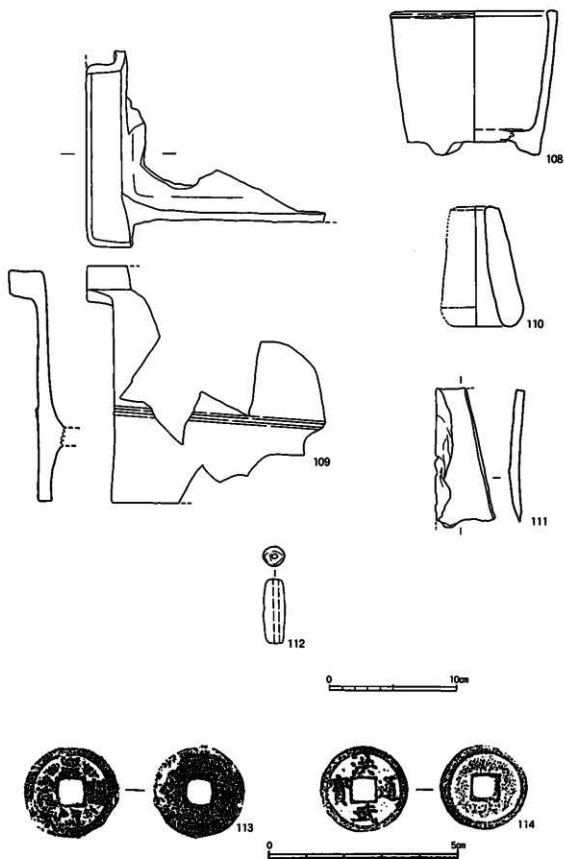
第336図 SX707 出土遺物実測図④ (1/3)



第337図 SX707 出土遺物実測図⑤ (1/3)



第338図 SX707 出土遺物実測図⑥ (1/3)



第339図 SX707 出土遺物実測図⑦ (1/3 ※錢貨は1/1)

4. 井戸・井戸状遺構

概要 (第340図)

中世大友府内町跡第13次調査区では5基の井戸と1基の井戸状遺構を検出している。井戸の調査にあたっては、調査時の危険を回避するため、調査時間を十分取っての記録作成及び掘り下げを行っていったる井戸がないことを、まず記しておく。

そこで本調査区における井戸の配置をみると、北からSE384、3 m空いてSK110 (井戸状遺構)、そこから9 m空いてSE286、1 m空いてSE266及びSE377、5 m空いてSE253という具合に、井戸

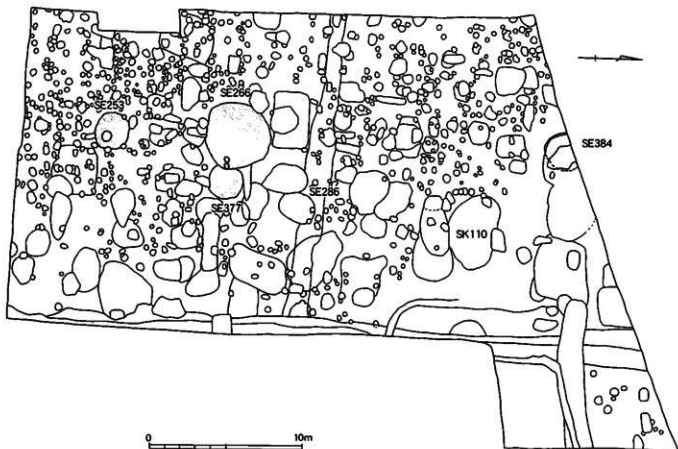
16世紀後葉～が南北に並んで散在していることが判る。

末葉

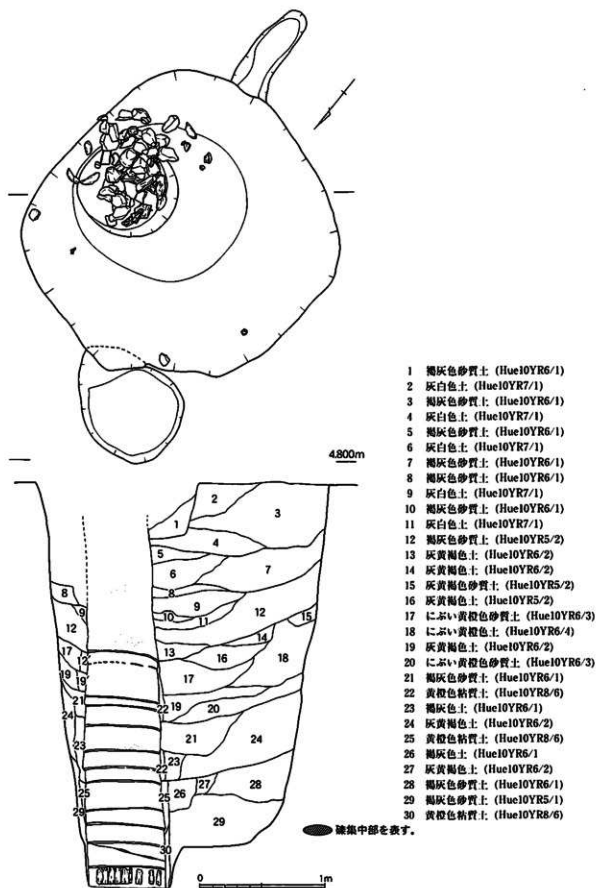
次に井戸の廃絶時期については、すべて16世紀後葉～末葉のものであり、それ以前のは、調査区内では1基も確認できていない。また、井戸からの遺物の出土量が少なく、その構築時期を確定することが困難で、1基の井戸の存続期間を掴むことはできなかった。

また、井戸の形態については様々で、(1) SE253・SE286・SE377のように水溜め部に結桶を使用しただけの素掘りのもの。(2) SE266のように水溜め部の結桶の上に瓦で井筒をつくるもの。(3) SE384のように結桶の上に凝灰岩を六角形に組み合わせて井筒をつくるものが確認された。

以下、それぞれの遺構の詳細を報告する。



第340図 第13次調査区井戸配置図 (1/250)



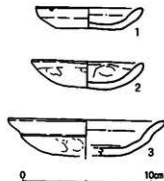
第341図 SE253 実測図 (1/30)

SE253 (第341図)

調査区南側のL33区において検出された井戸跡である。径約2.5m、検出面からの深さ2.9mを測り、円形土坑を呈する井戸。掘方の掘削は砂層にまで達している。最下部に置かれた結桶の基底部の標高は1.7mであり、当時の湧水点の標高も同程度であったと考える。

検出された結桶は1つのみであったが、土層断面で確認されたスタンプから、上にさらに3段積まれていたことが判った。上面では深さ60cmの桶抜き取り痕と思われる掘方が確認された。

廃棄された際そこには灰褐色粘質土が詰まっており、その下の井筒内からは廃棄された礫がまぎれ込んで確認されている。



第342図 SE253 出土遺物実測図 (1/3)

16世紀後半～
末葉

遺物は井筒内から礫に混じって出土したものが多数を占め、掘方埋土中からはほとんど出土していない。井筒内から出土した京都系土師器の形態から、この井戸の廃絶時期は16世紀後半から末葉に比定される。

SE253出土遺物 (第342図)

1～3は井筒内から出土した京都系土師器皿で、器壁が厚く、口縁下部のヨコナデが明瞭であることから、塩田庵年3期に属するものとする。1の口径は8.2cm、2は8.6cm、3は12.1cmを測る。

SE266 (第343・344図)

調査区中央部のL32区において検出した井戸跡である。検出した平面プランは東西4.1m、南北4.3mの円形を呈していた。この土坑を掘り下げていくと、20cm大～40cm大の多量の礫・瓦・陶器・土師質土器が多量に検出されたため、当初、廃棄土坑として掘り下げを行った。

廃棄土坑

1.5mほど掘り下げて(土層1・2)、床面が確認でなかった時点で始めて、井筒が抜き取られ、完全に破壊された状態で上部を廃棄土坑として利用している可能性があることに気づき、それからは井筒の確認に努めながら掘り下げていった。検出面から2.4m下に達したとき、花卉状に開く7枚の板石を確認した。これが最上位にある井戸に関する構造物であり、これから上は全て、その後の廃棄に係る土坑の埋土である。

花卉状に開く
7枚の板石

平瓦を組み合
わせた井筒

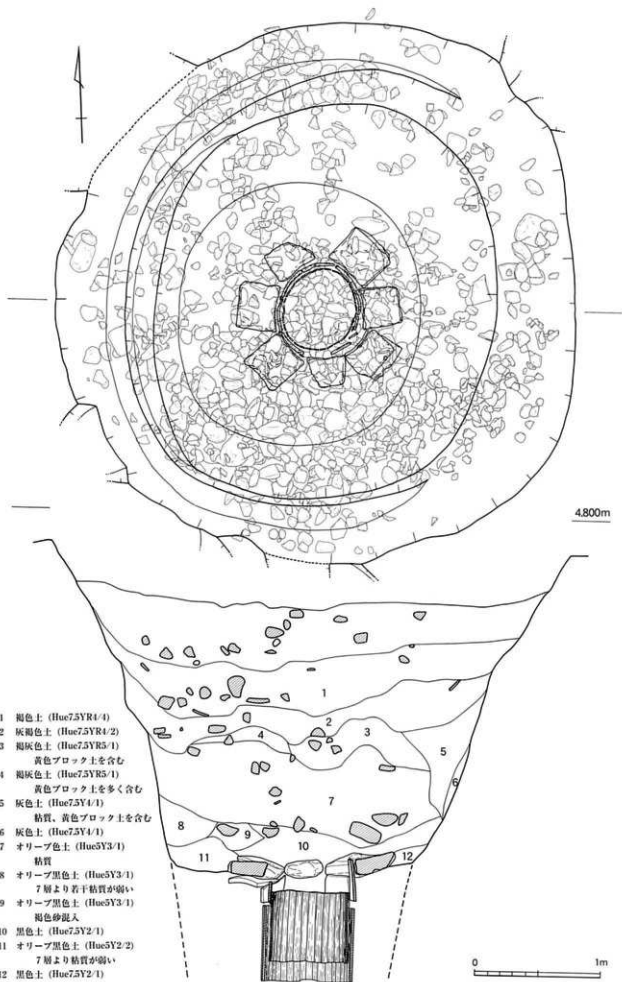
板石の直下に平瓦を8枚組み合わせて造った、直径約70cm、高さ25cmの井筒を検出した。さらにその下部に同じく直径約70cmの結桶を置き、その内に直径約60cmの桶を重ねていた。結桶の基底部の標高は1.2mである。結桶の内部には10cm～30cm大の礫が入っていたが、同化でき得る遺物は確認されなかった。そのため、井戸の構築時期を確定する遺物は存在しない。ただし、廃棄土坑の埋土中から京都系土師器3期の土器が出土していることから、この井戸の廃絶時期は、16世紀後半～末葉と考えられる。

ではこの井戸の花卉状に開いた板石の上の破壊された構造はどうだったのだろうか。埋土中に凝灰岩片や多量の礫があること、また同様の板石が確認されているSK384の例からみても、石を組み上げて井筒を築いていた可能性が高い。花卉状の板石は、上部の石の重みを直接桶に伝えないための、緩衝材の役割を果たしていたのだろう。

SE266出土遺物 (第345～352図)

1は井戸枠に使われた平瓦である。そのため、鉄分や錆が硬くこびり付いている。さらに凸面は井戸からの板石の外周にあたり灰褐色粘質土と常に接していたため、青く変色している。高さ24cm、幅27.5cm。井戸枠はこれを8枚組み合わせていた。2～4は花卉状に配置された石材で、いずれも凝灰岩を素材とする火輪である。転用にあたって再加工が行われ、突起の部分を削ろうとした意図が認められる。

6～57は井戸を破壊した後の埋土から検出されたもので、6の茶臼は下臼、7は上臼。8は石臼の



第343図 SE266 実測図 (1/30)

上臼で、引手孔が残る。

景徳鎮窯系青
花

9・10は中国景徳鎮窯系青花皿で、口縁部が反る。小野編年のB1群にあたる11は中国景徳鎮窯系青花皿E群である。口縁部内外面に界線、見込み部には菊が描かれている。12、13は中国産翡翠釉の小皿である。

14は瀬戸美濃系陶器の天目碗である。15～20は備前系陶器である。そのうち、15は小壺で、16は焼締陶器の小鉢である。その口径は14.1cmを測る。17は注口部、18は徳利の首部である。19の播鉢は桑園

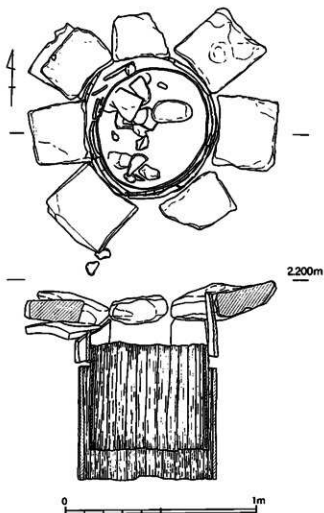
半島産陶器 編年の中世4期にあたり、15世紀前半のもの。20は徳利形瓶である。21・22は韓半島産陶器の徳利である。23・24は中国産の褐釉陶器壺で内外面に褐釉を施し、胎土は灰褐色で陶器質を呈す。肩部に把手と「へう記号」をもつ。口縁上面には重ね焼き痕がみられる。25は備前系陶器壺で、口縁部に蓋受けを設けており、水屋壺である可能性を考えたい。26～28は備前系焼締陶器壺。そのうち26は肩部に櫛描波状文が2条みられる。その口径は13.0cm。

中国産褐釉陶
器壺

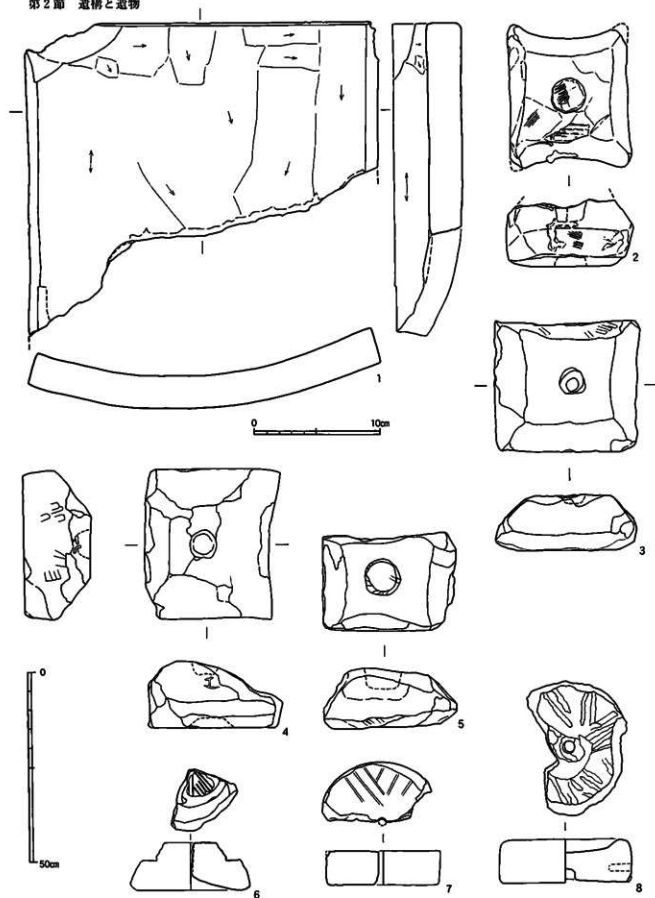
29～37は備前系陶器の壺である。29は口径26.3cmで、隣接するSK145と接合関係をもつ。30は口径27.5cmで、肩部に「式石」と刻まれている。SK354と接合関係にある。31は口径38.3cmを測る。32は30同様、「式」の文字がある。その他「×」の窯印をもつ。SK281と接合関係をもつ。33は口径31.7cmを測る。34は口径60.5cmで、隣接する井戸SE377と接合関係をもつ。35は口径56.9cmで、隣接するSK381と接合関係をもつ。36は口径 cmで37は口径39.5cm、胴部最大径は61.7cm。器高は67.6cmを測る。SK145、SK212、SK359と接合関係をもつ。38～40は備前系陶器播鉢でナナメスリメをもつ。桑園編年近世1期のもの。

41～46は京都系土師器皿で、図示したのは口径は約9cm大と13cm大の2種類。口径9cmの土師器は口唇部にスガが付着している。47・48は京都系土師器杯あり、これらは坂地編年3期に比定できる。

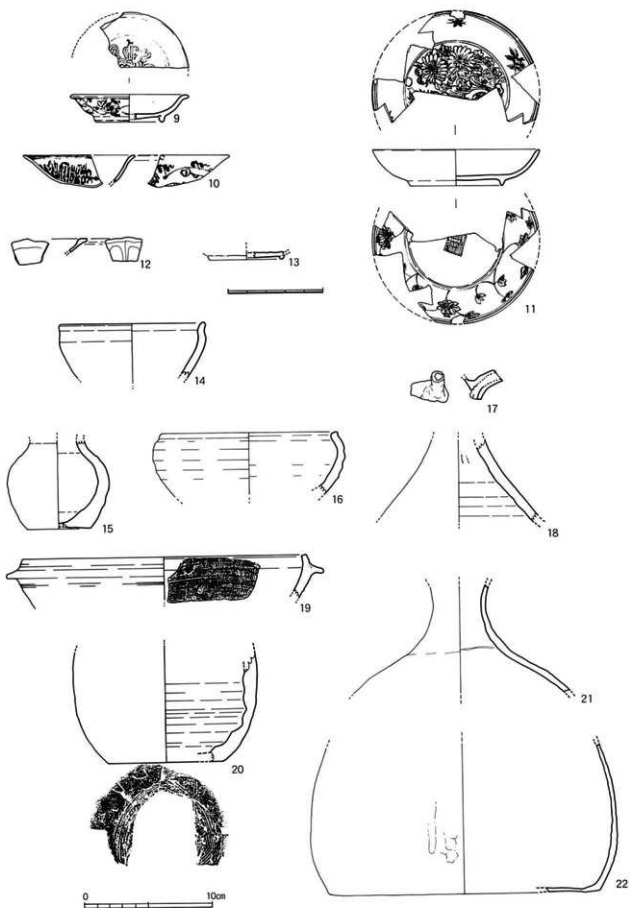
49～57は瓦質土器で、49は鉢、50は羽釜で、胴部径は約28cmを測る。51は播鉢で放射状スリメを有す。51～57は瓦質土器である。52～54は火鉢で、特に54は11線下部に2条の突帯をもち、この間には雷文がスタンプされている。



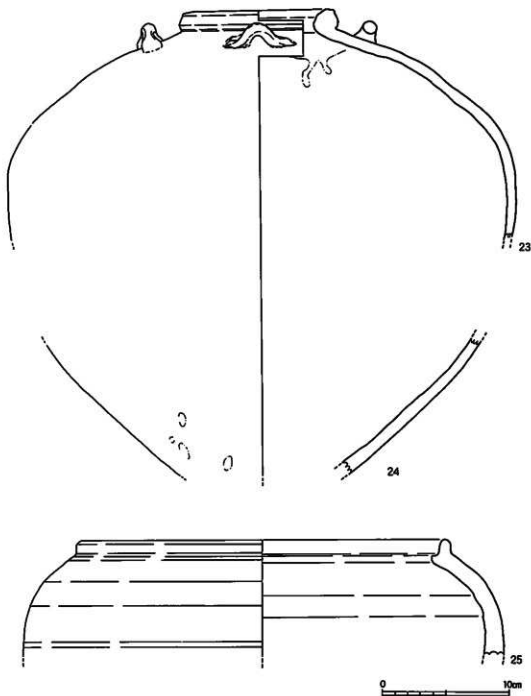
第344図 SE266 井戸枠実測図 (1/20)



第345図 SE266 出土石材実測図 (1/50, 1は1/3)



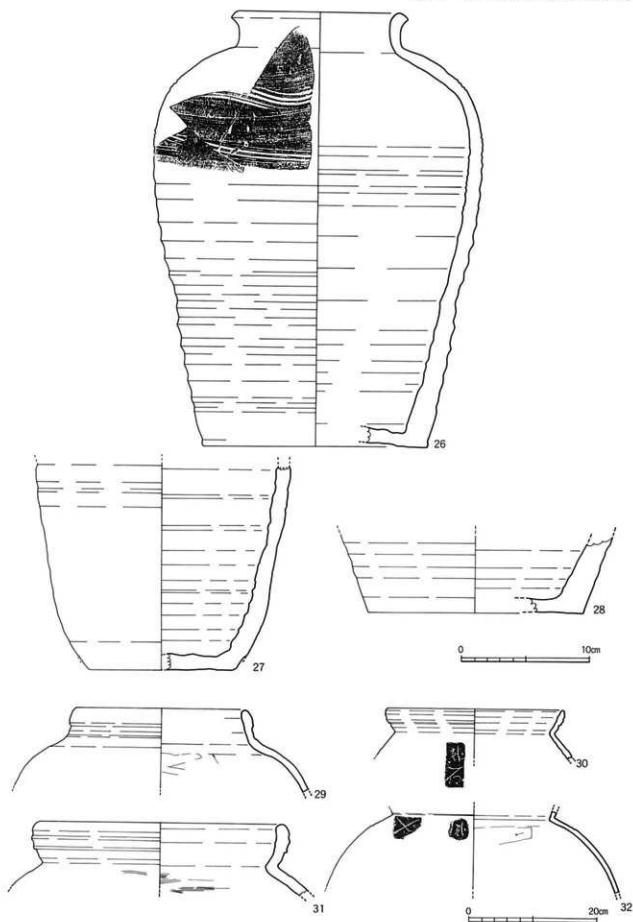
第346図 SE266 出土遺物実測図① (1/3)



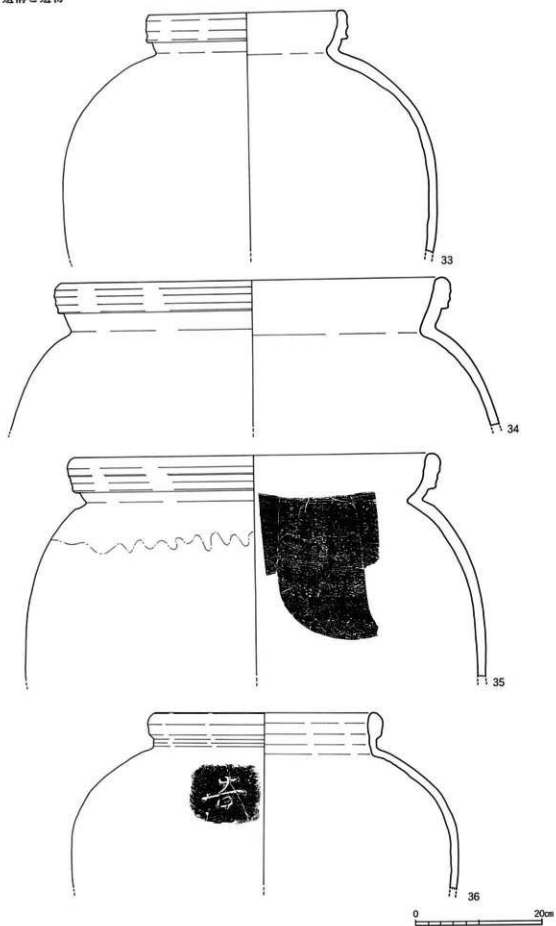
第347図 SE266 出土遺物実測図② (1/3)

SE286 (第353図)

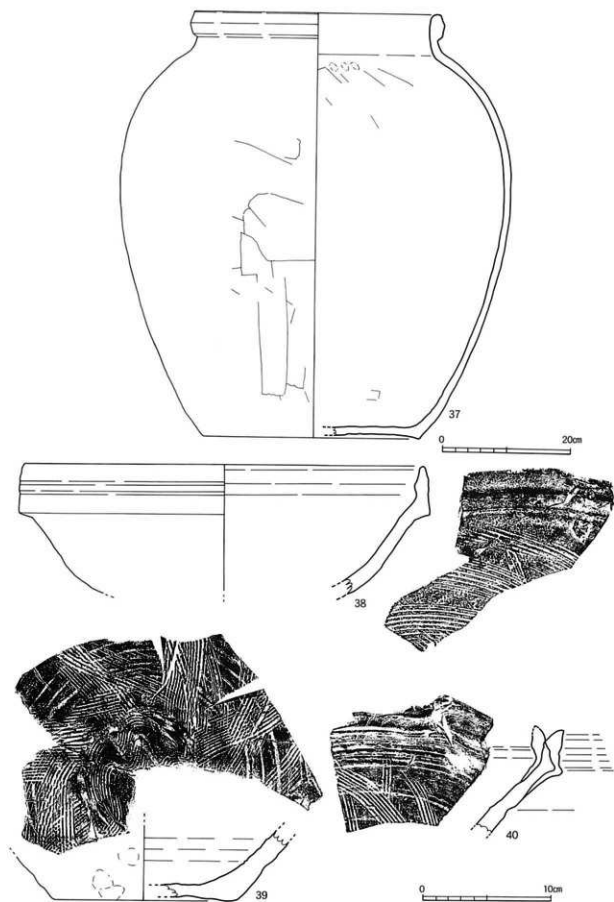
調査区中央部のM32区において検出された井戸跡であり、井戸 SE266の北西に位置する。検出面においては、長径2.2m、短径1.8mの楕円形堀方を呈する。深くなるにつれ、堀方は狭小となり、検出面より2.5m下の底面付近では直径1.2mほどとなる。井戸の底部（標高1.3m）では水が湧き出しており、当時の湧水点の標高もさほど変わらないものだったと思われる。



第348図 SE266 出土遺物実測図③ (1/3, 29~32は1/6)

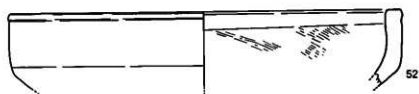
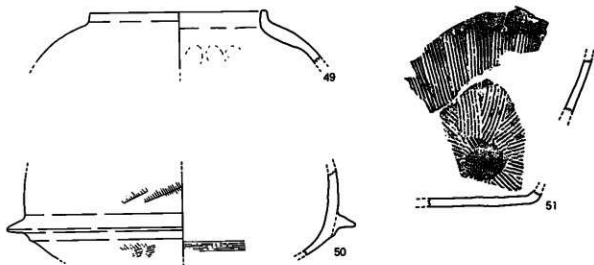
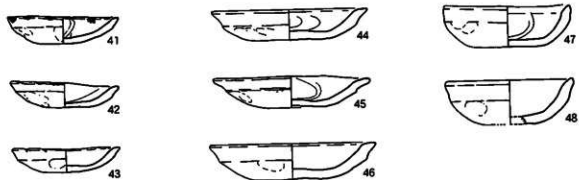


第349図 SE266 出土遺物実測図④ (1/6)



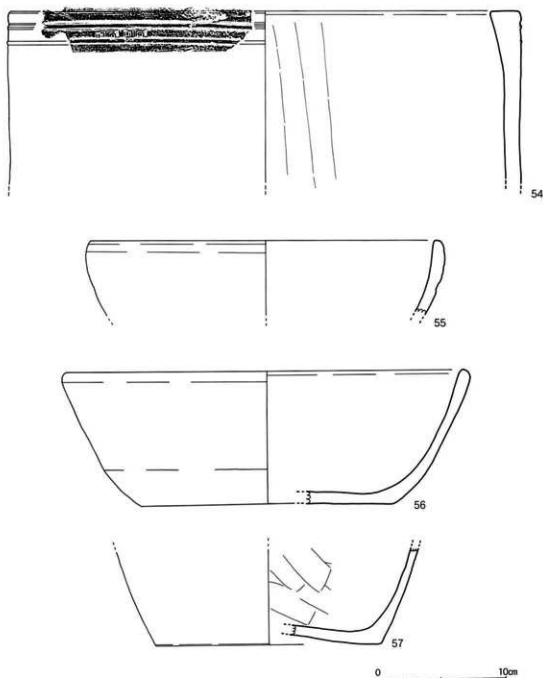
第350図 SE266 出土遺物実測図⑤ (1/3, 37は1/6)

第2節 遺構と遺物



0 10cm

第351図 SE266 出土遺物実測図⑥ (1/3)



第352図 SE266 出土遺物実測図⑦ (1/3)

連綿と積み上げられた桶

検出された結桶は1つのみであったが、土層断面で確認されたスタンプから、桶は下から上に連綿と積み上げられていたことが判る。また、検出面において、堀方の周囲に隙を並べており、井側に使用された結桶のラインがはっきりと確認されており、まだ廃絶されていない状態であったか、それとも井戸廃絶期に井戸枠の抜き取りが行われなかったものと考ええる。

西に接するSK169との切り合い関係はSK169→SE286であり、そのSK169から3期に属する京都系土師器が出土していることから、SE286の構築時期は16世紀末葉といえる。

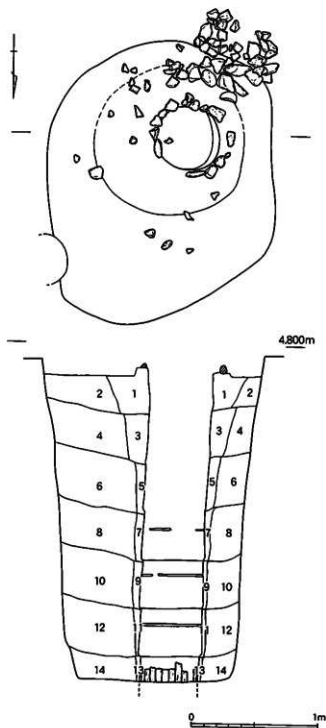
16世紀末葉

SE286出土遺物 (第354図)

埋土中及び井筒のどちらからも出土遺物は非常に少なく、細片のみであった。そのため、図化に耐える中世土器は出土していない。1は古代の土師器の甕である。2は1107年初鑄の「大観通寶」である。

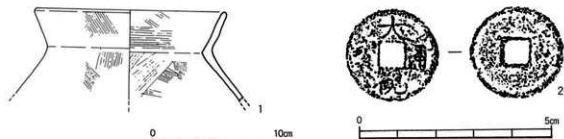
SE377 (第356図)

調査区中央部のM33区において検出された井戸跡であり、井戸 SE266 の上位にある廃棄土坑に切られている。



- 1 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 2 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)
- 3 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 4 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)
- 5 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 6 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)
- 7 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 8 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)
- 9 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 10 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)
- 11 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 12 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)
- 13 黄褐色粘質土 (Hue10YR8/6)
- 14 褐灰色砂質土 (Hue10YR6/1)

第353図 SE286 実測図 (1/30)



第354図 SE286 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨は1/1)

検出面においては、直径2.6mの円形堀方を呈する。深くなるにつれ、堀方は狭小となり、3.4m下の底面付近では直径1.5mほどとなる。

検出面から0.5m～1.0m下の井筒想定箇所、礫が集中して確認された。これは井側に落とされた石であり、井戸を廃絶する際、井戸を封じる目的で、そのような行為を行ったものと思われる。

さらに掘り下げたところで、雨によって井筒部分の石が崩落したため、それ以降詳細な土層記録調査を行っていない。遺構実測図中に、最下位で確認された結桶とその上に残されていたスタンプしか載せていないのはそのためである。

井戸封じ

16世紀後葉

本井戸の時期を考えると、3期に属する京都系土師器が上層から出土した、また SE266 に切られていることから、16世紀後葉に廃絶したと考えられる。

SE377出土遺物 (第355・357図)

1のタイ産の練り上げ手土器クンディ形水注は井戸構築時の埋土中から出土した。褐色と黄土色の色調の異なる粘土を練り混ぜた皮膜を器表面に貼り付けている。外面は光沢が生じるほど丁寧に磨き上げられている。出土品は口縁部から頸部にかけての破片で、乳房状の注口部は残っていない。口縁部の形態は罌状をしている。頸部径は3.2cmである。

2は最下位の結桶中から出土した銅製の柄杓。口径4.8cm、底径0.3cm、高さ2.0cm、厚み1mm。3は中国産褐釉陶器の底部で、内面に「福」の字が描かれる。4は韓半島産焼締陶器の徳利の頸部。

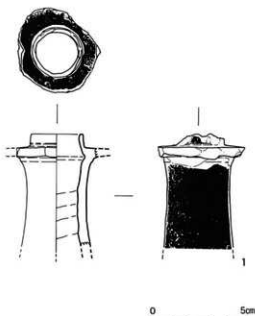
中国産褐釉陶器

5は備前系統焼締陶器の平鉢。6は上層から出土した京都系土師器皿で、その口径は12.1cm、高さ3.8cm。7・8は瓦師質土器の鉢で、8の復元口径は42.4cmである。

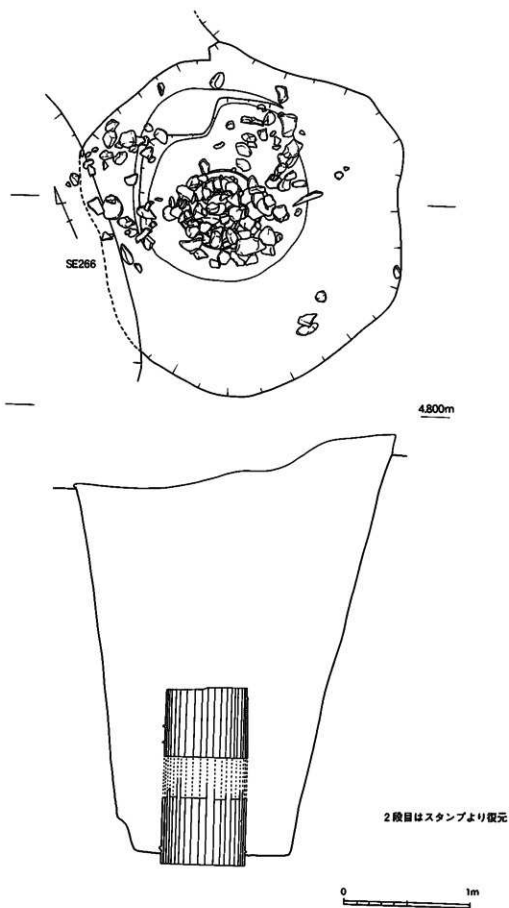
SE384 (第358図)

調査区北端のL30区に位置する井戸跡である。集石の下位から、集石 SX284と並んで検出した。長軸2.8m、短軸1.8mの規模が確認されている。しかし、井戸の北側3分の1は、図のように調査区外に及んでおり、実際は直径2.8mの規模を有する円形状の平面プランをもつと考えられる。

調査は、まず集石 SX126を若干掘り下げた時点で、井筒の上方にあたる箇所に礫が集中していたことが確認されていた（しかし調査者はそれに気付かず、SX126内の礫として処理している。）。その後の掘り



第355図 SE377 出土クンディ実測図 (1/2)



第356図 SE377 実測図 (1/30)

石組
六角井戸

下げで、集石 SX284と並んで井戸の円形堀方を検出した。堀方の掘削は砂層まで達しており、最下部に置かれた結桶の基底部の標高は約1.0mである。調査中にも水が湧き出しており、当時の湧水点の標高もさほど変わらないものと思える。検出された結桶は1つのみであったが、その上位には石組の井筒が確認された。まず、板石を花卉状に6枚置き、その上に平面形が六角形になるように板石を組み上げていく。その段数は、残存しているもので5段を数える。1枚の板石の大きさは縦40cm、横40cm、厚さ10cm程度である。

井戸封じ

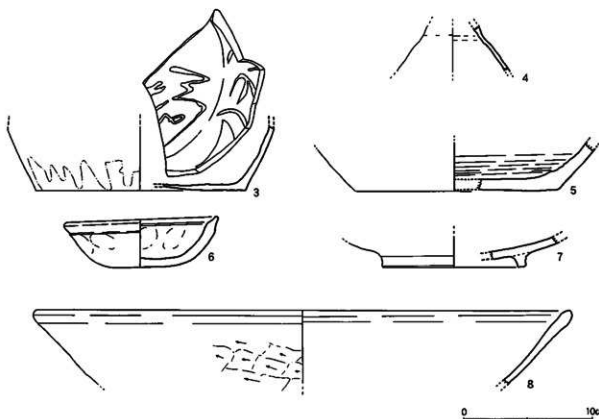
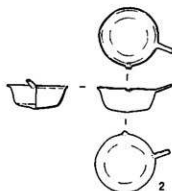
この石組は検出面まで続いておらず、井戸の廃絶時に抜き取られた可能性が高い。また、井筒内の中段において礫の密集した状態が確認されたこと、さらに前述の通り、井筒の上方にあたる箇所に礫が集中していたこと等から、井戸を廃絶する際に井戸を封じる目的で石が廃棄されたと考えられる。

16世紀後葉～
末葉

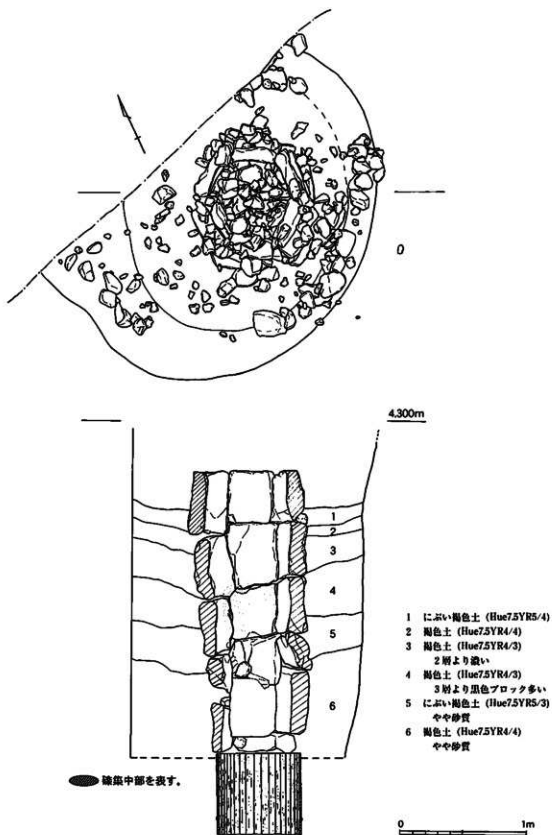
以上より、SE384の廃絶時期は、SX126及びSX284の構築時期よりも新しいと考えられ、16世紀後葉～末葉に比定できる。

SE384出土遺物 (第359図)

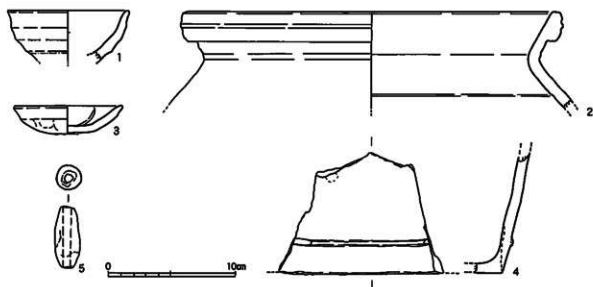
1は瀬戸美濃系天目碗で、その復元口径は9.6cmである。2は備前系陶器の甕で、その復元口径は30cmである。3は京都系土師器皿で、口径8.5cm。埴地編年3期に属す。4は土鉢、中世のもの。5は瓦質土器の火鉢で、底部付近に1条の突帯を巡らす。



第357図 SE377 出土遺物実測図 (1/3)



第358図 SE384 実測図 (1/30)



第359図 SE384 出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

5. その他の遺構

柱 穴 (第360図)

中世大友府内町跡13次調査区の西側には南北に走る大路の存在が想定されており、その大路に面した町屋の建物跡が西側に多数検出された柱穴群にあたり、東側で検出した土坑群はその裏手に掘られた井戸や廃棄土坑であると考えられる。

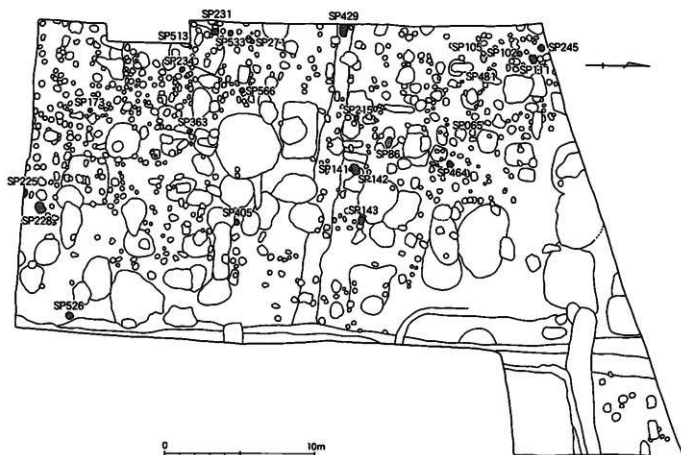
2 時期の軸をもった柱穴群 柱穴は第369図 (第3節) に示しているように、約N-9°-Eと約N-4°-Eの2種類の軸に添って並んでいることが確認された。しかし、柱穴からの遺物の出土量が少なく、また細片であったため、柱穴1基ごとの時期の確定が困難であり、両者における時期差まで特定するに至っていない。

以下、柱穴群から出土した主な遺物を紹介する。

柱穴出土遺物 (第361・362図)

1は中国景徳鎮窯系青花碗で、小野分類C群に比定される資料である。2は中国景徳鎮窯系青花皿、B1群。3も中国景徳鎮窯系青花皿で、E群に属するものか。4は中国景徳鎮窯系白磁皿で見込みに毛彫りが施される。5は中国産白磁皿。6は備前系統締結陶器壺で肩部に髹漆波状文をもつ。7～20は京都系土師器皿である。7～11は口径約9cm、12・13は口径約11cmで、この法量のものか灯明皿として使用されている。13は口径縁部に内から穿孔しようとした痕が認められる。16は内面にへら記号をもつ。

17は北宋時代の1038年初鋳の「皇宋通寶」で、文字は真書。18は破片で判読困難ではあるが、「符」の文字が確認できた。



第360図 第13次調査区柱穴配置図 (1/250)

竪穴状遺構

SB388とSB389の2基の竪穴状遺構を確認した。床面から柱穴が検出されたことから、建物施設であることは間違いないが、その機能については不明である。

SB388 (第363図)

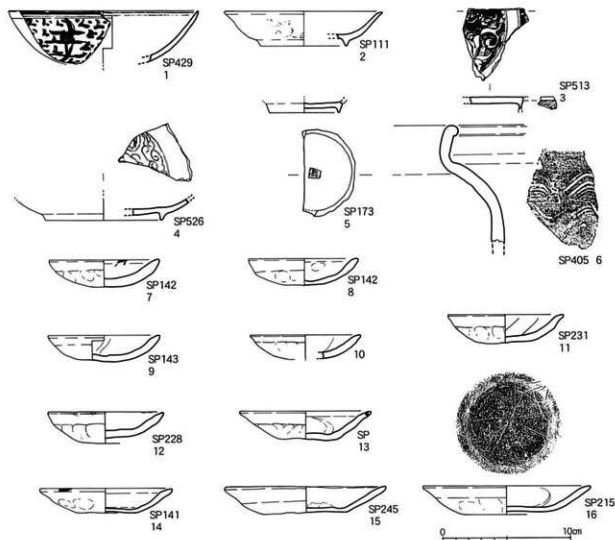
L32区で検出した竪穴状遺構で、平面プランは隅丸方形を呈し、中央南部をSK137に切られる。規模は東西3.8m、南北2.5mを測り、その深さは40cmである。床面から浅い柱穴と凝灰岩製の板石が検出された。本遺構の中心軸はN-9°-Eであり、町屋の柱穴列と揃っている。

本遺構から若干の遺物が出土しているが、細片であり図化できなかった。そのため、構築時期についても不明である。

SB389 (第364図)

L33区とL34区に跨って位置する竪穴状遺構で、平面プランは方形を呈す。規模は東西3.8m、南北2.5mを測り、その深さは40cmである。床面から柱穴が検出された。本遺構の中心軸はほぼ真北を向く。

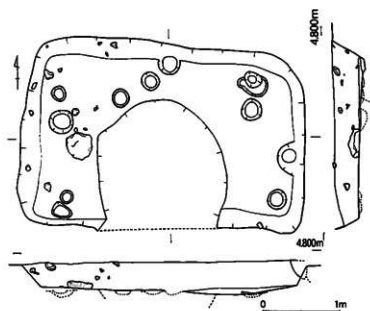
SB388同様、遺物に乏しく、時期比定には至らなかった。



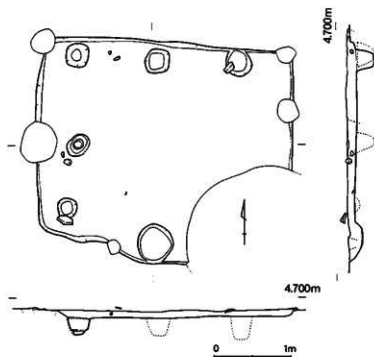
第361図 柱穴出土遺物実測図① (1/3)



第362図 柱穴出土遺物実測図② (1/1)



第363図 SB388 実測図 (1/50)



第364図 SB389 実測図 (1/50)

6. 包含層

本項目では遺構以外の包含層から出土した遺物を選別して報告する。

五彩
埋藏軸
黄軸
紫系磁
ベトナム産長
脚磁
1は中国漳州窯系磁器の蓋である。その口径は10.2cmを測る。M30区から出土している。2は中国産五彩碗、同じく3は中国産五彩皿の口縁部である。4は中国産青銅軸合子で、L30区から出土。5は中国産琉璃軸の碗。6は中国産黄軸の皿で復元口径は15.4cm。M30区から出土している。7は中国龍泉窯系青磁碗で、外面に縦方向に細線がみられるが、細線蓮華文を意欲したものか。また、見込みに「好」字が確認できる。L31区出土品。8は中国産陶器の葉茶壺。底径は2.2cm。同じくL31区から出土している。9・10・12・13は瀬戸・美濃系天目碗で、9（L32区）の口径は9.9cm、12（M30区）の口径は11.4cm、13の口径は12.0cmを測る。11は中国南部産の天目碗で、口径は11.4cmである。N30区から出土している。14・15は備前系統締締陶器で、14は壺で、15は瓶である。16はベトナム産の長脚壺の口縁部である。

17は碗で、頁岩製。M32区から出土している。

18～25は金属製品。18は銅製品で表面に金箔を貼っている。N31区出土。19は扁平な青銅製品。20は断面U字形の銅製品で、M30区出土。21は扁平な青銅製品で、一端を折り曲げる。穿孔もみられる。M33区で出土した。22は扁平な青銅製品に2ヶ所穿孔を施し、紐状の青銅金具を通す。N30区出土。23は円形の青銅製品で、中央部に穿孔がみられる。24は環状鉄製品で、断面は方形を呈する。用途は不明である。N30区出土。25は盤状の鉄製品で、L30区で出土したものである。

大形土製品
26・27は土製品。26は犬形土製品。安産を祈ったものか。M30区出土品。27は型に填めて作った布袋土製品、近世所産。M33区から出土。

豊後府内型メ
ダイ
28・29はいわゆる豊後府内型メダイで、どちらもK30区出土。28は長軸1.9cm、短軸1.3cm、厚さ0.3cmで、紐を通したと思われる紐が正面方向から穿たれている。その方法は両面穿孔である。一方の面に十字のような線刻がみられる。金属の成分は鉛を主体とし若干銅が混じる。29は長軸1.8cm、短軸1.7cm、厚さ0.3cmで、紐を通したと思われる紐が横方向から穿たれている。表裏とも同像は描かれていない。その成分は28と同様である。

蘭形分銅
30は「五采」（5匁）を測るための蘭形分銅である。

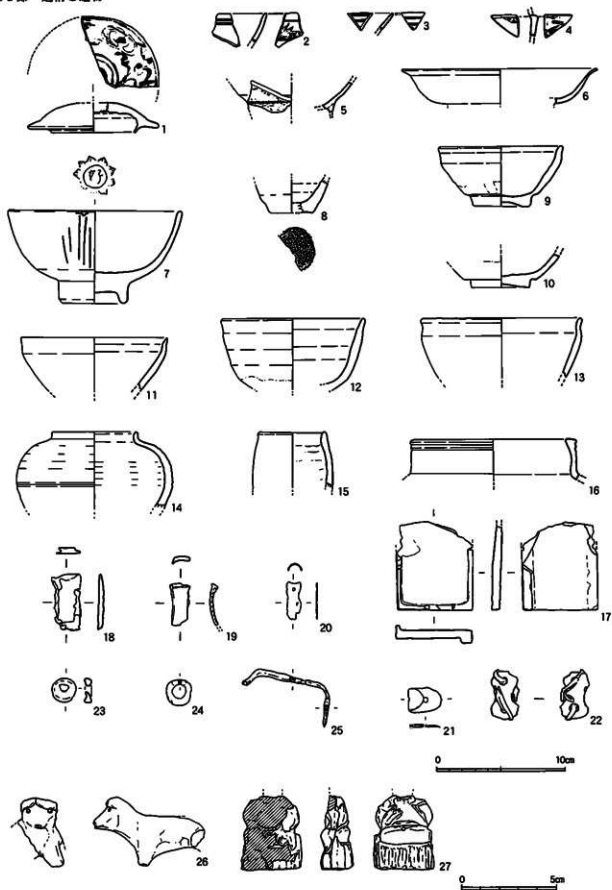
31・32はアルカリガラス製の小玉。31は直径0.8cm、高さ0.4cm。青色。32は直径0.5cm、高さ0.3cm。

アルカリガラス
製小玉
緑がかった青色をしている。N30区出土品。

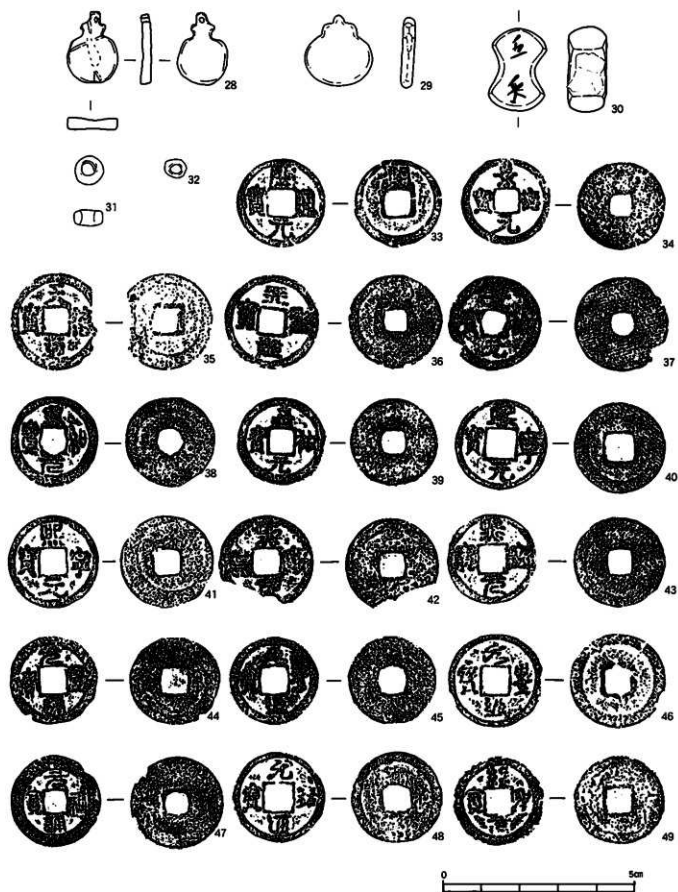
33～53は銭貨で、主にM30区、M32区から出土している。33は唐の「開元通寶」（845年初鑄）。裏に「調」字あり。M30区から出土している。34は北宋の「景德元寶」（1004年初鑄）で、M30区出土。

銭貨
35は「天禧通寶」（1017年初鑄）で、同じくM30区から出土している。36は「天聖元寶」（1023年初鑄）で、N30区出土品。37は「景祐元寶」（1034年初鑄）で、M32区から出土。38は「至和元寶」（1054年初鑄）で、M30区から出土した。39は「嘉祐元寶」（1056年初鑄）で、M32区出土品。40～43は「熙寧元寶」（1068年初鑄）である。そのうち、40はMN30区から出土し、その文字は真書体である。41の文字は真書体。42はL33区出土で、文字は篆書体。また43の文字は篆書体である。44～46は「元豊通寶」で、44の文字は篆書体。45はM30区出土品で、文字は行書体。46はM32区出土品で、文字は行書体。47・48は「元祐通寶」（1086年初鑄）である。そのうち47はM32区出土で、文字は篆書体。48の文字は行書体である。49は「紹聖元寶」（1094年初鑄）。M30区から出土しており、文字は篆書体である。50・51は「聖宗元寶」（1101年初鑄）で、そのうち50はN31区出土品で、文字は篆書体。51の文字は篆書体である。52は明代の「永樂通寶」（1408年初鑄）である。53は「元祐通寶」（1086年初鑄）の10枚重ね。M32区から出土している。

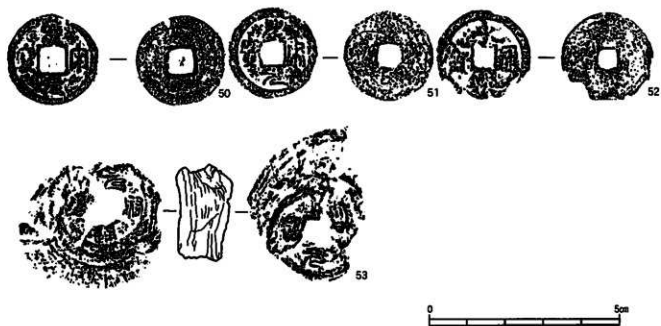
第2節 遺構と遺物



第365図 包含層出土遺物実測図① (1/3 26-27は1/2)



第366図 包含層出土遺物実測図② (1/1)



第367図 包含層出土遺物実測図③ (1/1)

第3節 小 結

字下井東

第13次調査区は、明治21年前後に調製された「旧字図」では、大字大分字下井東の南西隅に当たる。

「旧字図」に残るSD098とSX551
 下図(第368図)は本報告書に掲載された3調査区(9次I区・13次・21次)を「旧字図」に貼り込んだものである。原図のゆがみから実際の位置と完全に一致しているとは言えないが、東の背割り溝(SD087=21次調査区、SD098=13次調査区)と石積遺構SX551は「旧字図」に反映されていることがわかる。

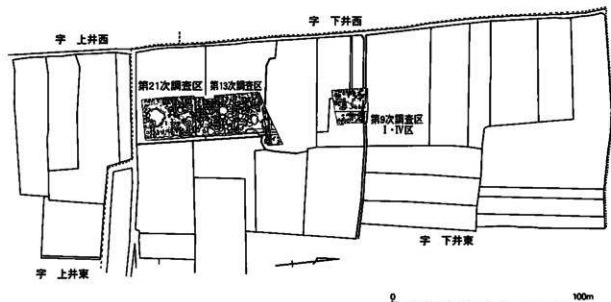
戦国時代における大友氏の城下町をあらわしたとされる「府内古図」にみられる景観をこれらの地籍図に当てはめて、さらに現地形を考慮して、各町屋の位置関係を復元した成果が「大分市史」に載っている。その復元に基けば、第13次調査区は第2南北街路(「大友館」正門に面した南北街路)の東側で、「大友館」と万寿寺に挟まれた「御内町」に位置することがわかる。今回の調査では、調査区西側に多数の柱穴群が展開し、中央部には井戸が、さらに東側には廃棄土坑が広がっていることが確認できた。つまりそれは「御内町」の町屋の建物及びその裏手の状況を示しているといえよう。

建物及びその裏手
 第2節で述べたように、今回の調査で確認された遺構は、柱穴群・土坑・井戸・溝状遺構・集石遺構等であるが、それらは大きく14世紀代の遺構群と16世紀代の遺構群に分けられる。各時期の遺構の分布状況を参考に、本調査区の性格をまとめていきたい。

14世紀代
 まず、14世紀代の状況をみると、2基の小形土坑と1基の大型廃棄土坑が検出されただけで、面的な広がりをもつものではない。

16世紀前葉
 次に、大友義隆治世段階の16世紀前葉についてみてみる。この時期の遺構は、SK010以外は小土坑あるいは土坑墓の様相をもつもので、その数も少ない。

16世紀中葉～後葉
 16世紀中葉から後葉、つまり大友宗麟治世から大友義統治世の段階になると、前段階と比べて遺構数が格段に増加する。明確な掘立柱建物は確認できないが、多数の柱穴群、土坑が検出できた。第9次調査区の所見で、「この時期にW-9°-Nの方向性をもつ「御所小路」が敷設された」ことが確認さ



第368図 第9・13・21次調査区の位置図(1/2000)

註 (1) 大分市史編纂委員会「地籍図に残る戦国時代の府内・戦国時代の府内復元想定図」(「大分市史」中巻) 1987年

第3節 小 結

N-9°-Eのれている。さらに南にある万寿寺の北限の堀（第20次調査区）も同様の方向性をもつことが2003年度調査で確認されている。それらに挟まれた本調査区では、「御所小路」から約50m南の位置にある屋敷地を区画する石積遺構 SX551が、さらに万寿寺北限の堀から約50m北の位置にあり調査区を東西に貫く SD542が軸を同じくして築かれている。このことから、「御所小路」と万寿寺の間に位置する本調査区に、同軸の掘立柱建物が存在していたことは想像に難くない。そこで、これらと同様の方向性をもった柱穴列をこの時期の土坑と共に第369上図に示した。この柱穴列は単にN-9°-Eとそれに直交する位置にある柱穴を意味するもので、すべてから当該時期の遺物が認められたものではないことをまず断っておく。また柱間についても正確に寸法を測って書き出してもいない。それによると、

大区画

柱穴群は西から中央付近まで広がり、その東側に土坑が位置している状況が見て取れる。また、柱穴集中箇所は、屋敷から万寿寺間の約75mに3箇所程度しかなく、広い区画を有していたことも指摘することができる。

16世紀後半～
末期

最後に16世紀後半から末葉段階、主に大友義統治世にあたる時期の遺構について見ていく。前段階と比べてさらに遺構数が増加する。同様に明確な掘立柱建物は復元できないが、多数の柱穴群、井戸、規模の拡大した廃棄土坑、溝等が確認できた。この段階までには調査区の西側に第2南北街路が敷設されており、それと並行して調査区東端を南北に貫く溝 SD098はN-4°-Eの方向性を持っている。

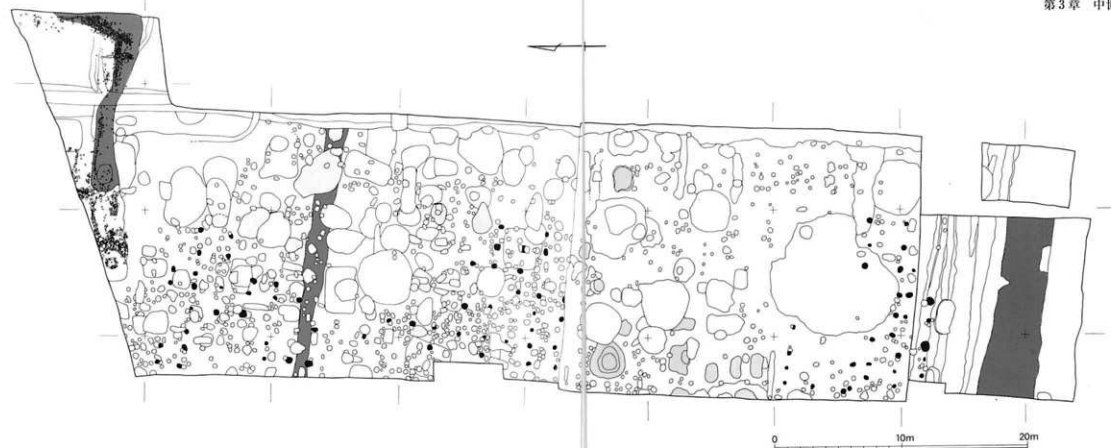
N-4°-Eの
方向性をもつ
柱穴群

この時期の「御内町」は第2南北街路に向かって形成された可能性が高く。本調査区に、同軸の掘立柱建物が存在していたと考えられることから、前段と同様に、N-4°-Eの方向性をもった柱穴列をこの時期の土坑と共に第369下図に示した。それによると、柱穴群は西側に偏り、中央付近には井戸が、さらにその東側に規模が拡大した廃棄土坑が位置しているといった状況である。柱穴群が西に移動したのは、東を画する溝 SD098により東への広がりを制限されたためと考えられる。

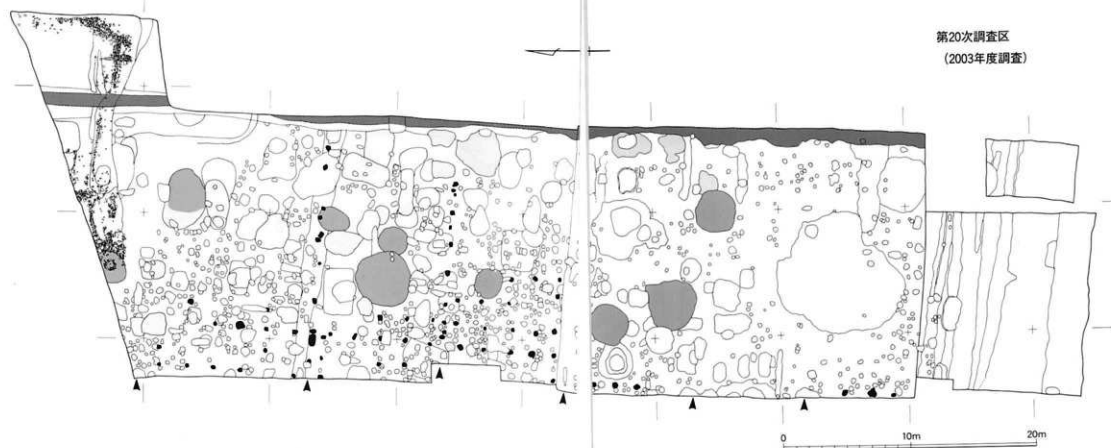
小区画

間口について考えてみる。▲の位置に隣地との境界があったと仮定すると、それぞれの区画に井戸が1基以上あることになる。例えば、SE266のある区画について見てみると、ここにはSE266以外にSE284、SE377と合計3基の井戸がある。しかし、それらは同時に機能していたのではない。切り合い関係からSE377→SE266であり、またSE266とSE377の井戸は廃絶していたが、SE284は井戸封じが行われていないことからSE377→SE266→SE284という変遷が追える。これと同様のことは、第21次調査区の北の区画にある井戸SE115とSE117にも言える。さらにSE266から出土した備前系陶器大甕の接合関係をみてみると、区画内にある土坑とのみ接合している。つまり、井戸の位置や東に伸びる掘立柱の位置を考慮すれば、間口は4間～5間程度となり、前段階に比べて、小区画化していると言えないか。

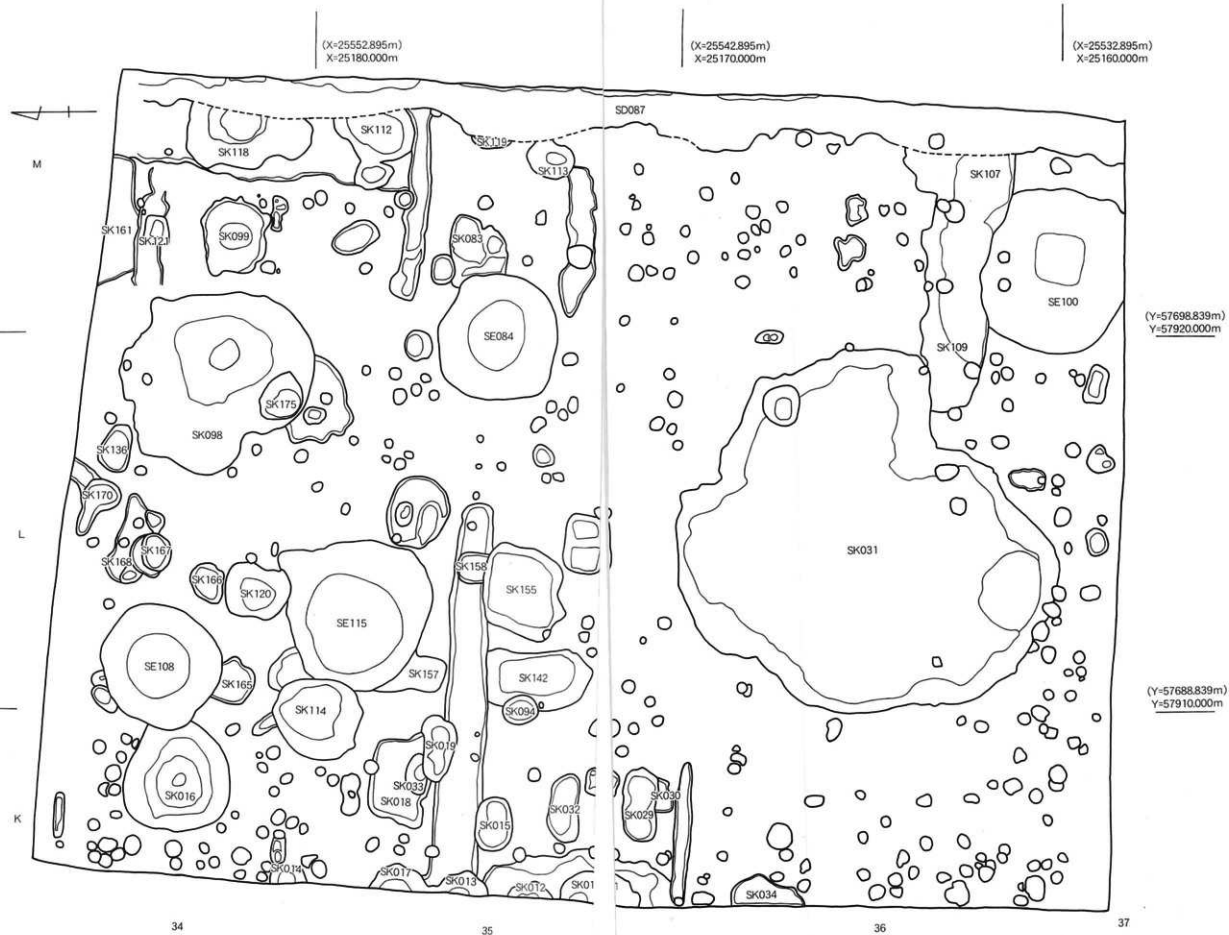
以上をまとめると、本調査区においては、14世紀代～16世紀前半代は遺構密度は低く面的な広がりをもたない。16世紀中葉～後葉頃になって「御所小路」と万寿寺に規定されたN-9°-Eの方向性をもつ比較的大きい区画が存在する。さらに第2南北街路が整備された後にN-4°-Eの方向性をもつ間口の狭い町屋が形成されるという変遷過程を想定することができる。ただし、これは可能性がある程度の指摘であって、今後本調査区の西側箇所の第2南北街路に面した間口部分の調査を行うことにより、実態がより明らかになっていくであろう。



第20次調査区
(2003年度調査)



第369図 第13・21次調査区遺構分布寛通図 (1/300)



第370図 第21次調査区遺構分布図 (1/100)

第4章 中世大友府内町跡第21次調査区

第1節 調査の概要

本調査区は大分市元町に所在し、第13次調査区の南側隣接地にあたる。標高は検出面において約4.7m、東側には大分川が流れ、同河川左岸域の自然堤防上に位置する。調査面積は約700㎡で、2002年5月13日～2002年12月20日の期間において本調査を実施した結果、14世紀代と16世紀代の遺構が中心に検出された。

方形井戸 14世紀代の遺構としては、井戸及び土坑が確認されている。その内井戸(SE100)は、井戸枠が方形縦板組のもので、横棧をわたり隅柱を据えるものである。そして井筒には曲物を使用しており、後述するように本調査区内で検出される他の井戸枠の大半が桶枠である点を考えると、性格をかなり異にするものである。

掘立柱建物 16世紀代の遺構としては掘立柱建物、土坑、井戸、溝等が検出された。まず、掘立柱建物の柱穴については、西側隅に約1m80cm(6尺相当)の柱間のもの(SB204)、約1m90cm(6尺3寸相当)の柱間のもの(SB201)、約1m96cm(6尺5寸相当)の柱間のもの(SB202・SB203)が認められた。いずれも調査区内では1列しか検出されていないために建物と断定するのは躊躇されるが、西側調査区外には南北に走る街路(第2南北街路)が通っており、またこの柱穴群の東側に廃棄土坑や井戸等が集中する町屋の裏側の空間が広がること等を考慮すると、この柱穴群は西側に展開して建物を構成する可能性は十分あり得ると考える。各建物の方向については、2棟がほぼ同軸上にのり、1棟が大きく異なる。方位を大きく逾える1棟については、柱間も6尺と異なっており、時期が異なるのかもしれない。

廃棄土坑 次に土坑については40基以上が確認されており、中には炭が多量に堆積しているものも認められることから大半が廃棄に用いられたものであろう。特に廃棄土坑の中には遺物と共に炭がぎっしりとして入っているものが見られ、前述の建物等の屋根に使用されていた炭が廃棄されている可能性がある。

結桶積井戸 井戸は3基(SE084・SE108・SE115)が認められているが、そのうち1基(SE115)は、最下部で二つの井筒が検出された。後世の井戸に掘り返されてしまい、最下部の井筒に使用された結桶しか残らなかったのか、あるいは井戸掘形が一つしか見つからないことから、もともと二つ掘えようとしていたのかは不明である。井筒の構成については、上面の井桁付近まで桶が積み上げられる形態と、底面から中位までは桶積みでそれより上が石組になりそうな形態の二者が存在する。いずれも廃絶時期は16世紀後葉～末葉である。また、井筒内及び井筒部分にはいずれも炭が大量に放り込まれており、井戸を意図的に封じようとしたものと考えられる。

東を両す溝 最後に東側を両すように溝が南北方向に確認されている。溝内からは16世紀後葉の遺物が中心となって出土するが、溝の埋土上層からは17世紀代の遺物も出土している。また、この溝は第13次調査区でもその延長部が検出されており、同様の遺物出土状況を示している。ただ、第13次調査区では17世紀初頭の肥前系陶器を出土する土坑にこの溝が切られていることから、17世紀初頭のごく早い段階に埋没したものと考えられる。また、この溝に接していくつかの土坑が切り合っているが、いずれの土坑もこの溝に切られている。土坑の時期の最も新しいものは16世紀後葉～末葉に比定され、したがって掘られた時期はその16世紀後葉～末葉以降ということになる。メダイ様金属製品はこの溝内から出土した。

御内町 この調査区の西側には近接して南北に走る大路の存在が想定されており、そうした位置関係から推察すると、その大路に面した町屋の裏手の状況が確認されたと考えられる。「府内吉岡」によれば本調査区は「堀之門町」あるいは「御内町」の一画に該当する可能性の高い場所に位置しているが、町屋の方向性からみて「御内町」に比定されるものと考えられる。

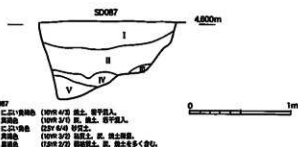
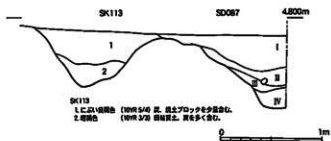
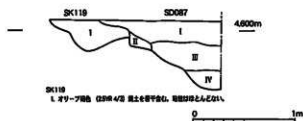
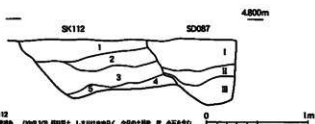
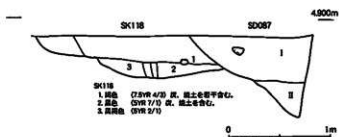
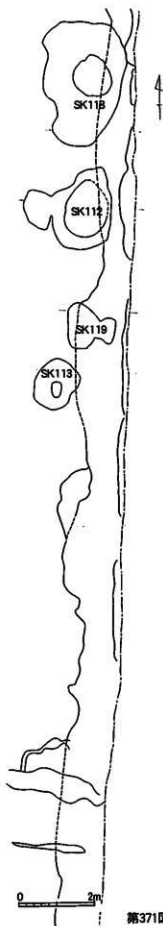
第1節 調査の概要

第6表 第21次調査区遺構一覧表①

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SK011	S011	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	246
SK012	S012	土坑	K35区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	247
SK013	S013	土坑	K35区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	247
SK014	S014	土坑	K34区	16世紀		249
SK015	S015	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	249
SK016	S016	土坑	K34区	16世紀中葉～後葉	五彩・龍泉窯系青磁模花皿・京都系土師器 2 期	251
SK017	S017	土坑	K35区	16世紀中葉～末葉	京都系土師器 2 ～ 3 期	254
SK018	S018	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	255
SK019	S019	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	255
SK029	S029	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	257
SK030	S030	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉		257
SK031	S031	土坑	K36区	14世紀前半 15世紀末葉～16世紀前半	鍋蓋弁文青磁碗・口禿白磁・在地系土師質土器	261
SK032	S032	土坑	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	263
SK033	S033	土坑	K35区	15世紀前半	在地系土師質土器	255
SK034	S034	土坑	K36区	14世紀前半	鍋蓋弁文青磁碗	263
SK083	S083	土坑	M35区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	264
SK094	S094	土坑	L35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	265
SK098	S098	土坑	L34区・M34区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期・備前擂鉢(ナナメスリメ)・メナムノイ座四耳壺・漳州窯系青花	266
SK099	S099	土坑	M34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	284
SK107	S107	土坑	M36区	15世紀前半	在地系土師質土器	284
SK109	S109	土坑	M36区	15世紀前半	在地系土師質土器	284
SK112	S112	土坑	M35区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	290
SK113	S113	土坑	M35区	14世紀前半	在地系土師質土器	290
SK114	S114	土坑	K35区・L35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	291
SK116	S116	土坑	L35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期・景徳鎮窯系青花(饅頭心)	292
SK118	S118	土坑	M34区	16世紀末葉	京都系土師器 3 期・翡翠釉皿・掛花入	294
SK119	S119	土坑	M35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	297
SK120	S120	土坑	L34区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期・朝鮮王朝産陶器碗・白磁皿・漳州窯系青花瓶	298
SK121	S121	土坑	M34区	15世紀?		299
SK136	S136	土坑	L34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	300
SK142	S142	土坑	L35区	16世紀前半	京都系土師器 1 期	265
SK155	S155	土坑	L35区	16世紀前半	京都系土師器 1 期・土鈴	301
SK157	S157	土坑	M34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	302
SK158	S158	土坑	L35区	?	瓦質土器鉢	301
SK161	S161	土坑	M34区	?		303
SK165	S165	土坑	L34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	303
SK166	S166	土坑	L34区	15世紀末葉～16世紀前半	在地系土師質土器	304
SK167	S167	土坑	L34区	16世紀中葉	京都系土師器 2 期の古い段階	304
SK168	S168	土坑	L34区	14世紀～15世紀?		304
SK170	S170	土坑	L34区	14世紀～15世紀?	瓦質土器鍋	306
SK175	S175	土坑	L34区	14世紀	磁器碗	307
SE084	S084	井戸	L35区・M35区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期・備前擂鉢(ナナメスリメ)・掛花入	309
SE100	S100	井戸	M36区・M37区	14世紀前半	鍋蓋弁文青磁碗・口禿白磁・常滑系陶器・褐釉陶器・在地系土師質土器	315
SE108	S108	井戸	L34区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期・瀬戸美濃系陶器折縁皿(大窯4)	323
SE115	S115	井戸	L35区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	327
SD087	S087	溝	M34-35-36・37区	16世紀末葉～17世紀初頭	京都系土師器 3 期・瀬戸美濃系陶器折縁皿(大窯4)・肥前系陶器・メダイ様金属製品	239

第7表 第21次調査区遺構一覧表②

本報告での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
SP001	S001	ビット	L36区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	332
SP004	S004	ビット	L36区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	332
SP006	S006	ビット	M36区	15世紀?		332
SP008	S008	ビット	M36区	16世紀後葉～末葉	京都系土師器 3 期	332
SP010	S010	ビット	M36区	?		332
SP020	S020	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	332
SP021	S021	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	332
SP038	S038	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	景徳鎮窯系青花皿	332
SP045	S045	ビット	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	332
SP046	S046	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	332
SP048	S048	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	333
SP052	S052	ビット	K35区	?		333
SP054	S054	ビット	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	333
SP060	S060	ビット	K36区	?		333
SP069	S069	ビット	K36区	16世紀前葉	京都系土師器 1 期	333
SP074	S074	ビット	K36区	14世紀?		333
SP076	S076	ビット	K35区	14世紀	在地系土師質土器	333
SP077	S077	ビット	K36区	?		333
SP078	S078	ビット	K36区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	333
SP080	S080	ビット	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	333
SP103	S103	ビット	L35区	16世紀	五彩合子	333
SP104	S104	ビット	L35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	333
SP133	S133	ビット	L35区	?		334
SP134	S134	ビット	M35区	16世紀		334
SP135	S135	ビット	M34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	334
SP137	S137	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期・焼塩壺 の蓋	334
SP139	S139	ビット	K34区	16世紀前葉	京都系土師器 1 期	334
SP150	S150	ビット	M35区	15世紀末葉～16世 紀前葉	在地系土師質土器	334
SP154	S154	ビット	M36区	15世紀	在地系土師質土器	334
SP156	S156	ビット	K34区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	334
SP159	S159	ビット	K35区	16世紀中葉～後葉	京都系土師器 2 期	334
SP160	S160	ビット	L35区	14世紀	在地系土師質土器	334
SB201		掘立柱建物	K34区	16世紀		330
SB202		掘立柱建物	K36区	16世紀		331
SB203		掘立柱建物	K36区	?		331
SB204		掘立柱建物	K36区	?		331



第371図 SD087 実測図 (1/100)・土層図 (1/40)

第2節 遺構と遺物

1. 溝

SD087 (第371図)

町屋東側を
隔する溝

調査区東側を南北に延びる溝である。溝はさらに北に延び、第13次調査区で検出されている溝(SD098)に接続する。溝の東半分以上は調査区外に及ぶため、溝の下端が確認できている箇所はほんの一部である。確認されている範囲での深さは、最も深いところで0.8m、浅いところで0.7mであるが、溝の底部分にまで到達していない可能性が高く実際はもっと深いものと考えられる。

肥前系陶器

第21次調査区は、各遺構の所見より「御内町」の町屋の裏手部分にあたると考えられ、SD087はその位置関係から町屋の東側を隔する溝である可能性が高い。

溝の構築時期については、出土している遺物が16世紀後葉を主体とし、一部肥前系陶器が混入している点などを加味して、16世紀後葉に掘られ、17世紀初頭に埋められたものと考えられる。ただし、第13次調査区の所見によれば、本溝の北側で肥前系陶器を出土する土坑に切られている。また第387図に、SD087と重なる土坑との切り合い関係を示す土層図を載せたが、それによるとSD087は接する土坑すべてを切っていることが分かる。因みに土坑の項でも触れるが、それぞれの土坑の時期については、まずSK112は16世紀後葉の遺物が中心となって出土しており、該期の遺構と考えられる。次にSK113は出土遺物の時期から14世紀前葉に位置づけられる。そしてSK118で出土する遺物は、16世紀後葉～末葉のものが主体で、SK119は、16世紀後葉の遺物が主体となる。

五彩

ウサギの足

以上より、SD087の掘削時期は、16世紀の後半でも末葉段階以降であり、一方埋め時期は17世紀初頭でも極めて早い段階であると考えられる。

SD087出土遺物 (第372～377図)

1～3は中国製の五彩である。4は景德鎮窯系青花の破片であるが、模様はウサギの足が描かれる特殊な形である。5は景德鎮窯系青花皿で、いわゆる替荷底を呈しC群にあたる。6は景德鎮窯系青花碗でいわゆる進子碗でC群にあたる。7・8は景德鎮窯系青花碗で、いわゆる假頭心を呈しE群にあたる。8の高台内の文字は「大明年造」であろう。9も景德鎮窯系青花碗である。10は漳州窯系青花の碗である。口縁部内外面に界線を巡らし、胴部文様は不明である。11～17は龍泉窯系青花で、11は鉢、12～17は碗である。特に12は進子の形が大きくずれ、ヘラ先による細線の線描進子文が描かれており、15世紀後半以降の特徴をよく示している。また、15は見込みに印花文を施す。18～21は中国製の白磁で18・19は皿、20は碗である。また、21の小杯は中国福建省産のものと考えられる。22は中国製黒釉陶器の底部で、外面黒釉、内面透明釉がかけられる。23は華南三彩の盤である。

黒釉陶器

瀬戸・美濃系
陶器折縁皿

胎上目肥前

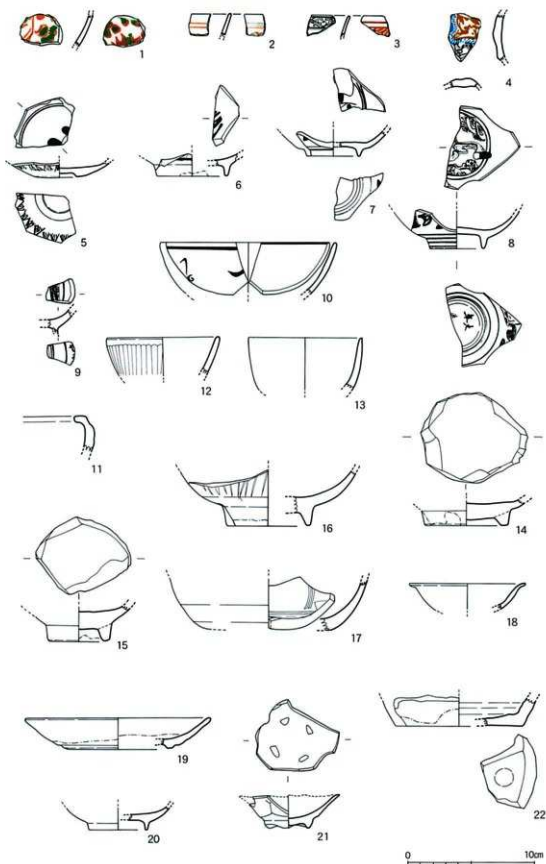
系陶器

24・25は瀬戸・美濃系陶器で、24は天目、25は折縁皿で、特に折縁皿の形態より大室の第4段階に比定される。26・27は肥前系陶器の皿と碗で、26は見込みに胎土目がみられる。28～37は備前系陶器で28は徳利、29は壺、30～36は鉢鉢である。34・35で斜め描目が確認され、16世紀末葉の時期比定が可能である。30については、描目が確認されていないが、口縁端部がナデによって先細りしており、同形態であろう。37は、壺の口縁部である。38は常滑系陶器の壺の口縁部で、口縁部下が若干延びるが、頸部には接していないことより、14世紀代の位置づけが可能である。

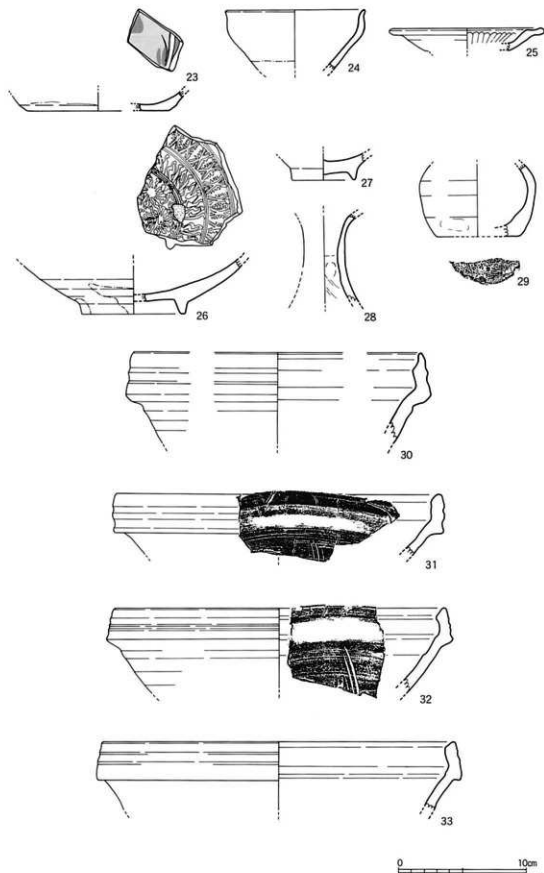
陶胎集合

39～71は京都系土師器で、39～64が皿、65～68が杯である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデも明瞭で、3期に比定される。69・70は京都系土師器の小皿であるが、71にその小皿の径とほぼ同じ径を有す同材質の壺が見られることから、その壺の蓋としての位置づけが考えられる。したがって焼塩壺の蓋と身である可能性がある。なお39・47・56・60は灯明皿である。72・73は在地系土師質土器の杯である。74～79は瓦質土器で75・78は火鉢、77・79は鉢、76は壺と考えられる。

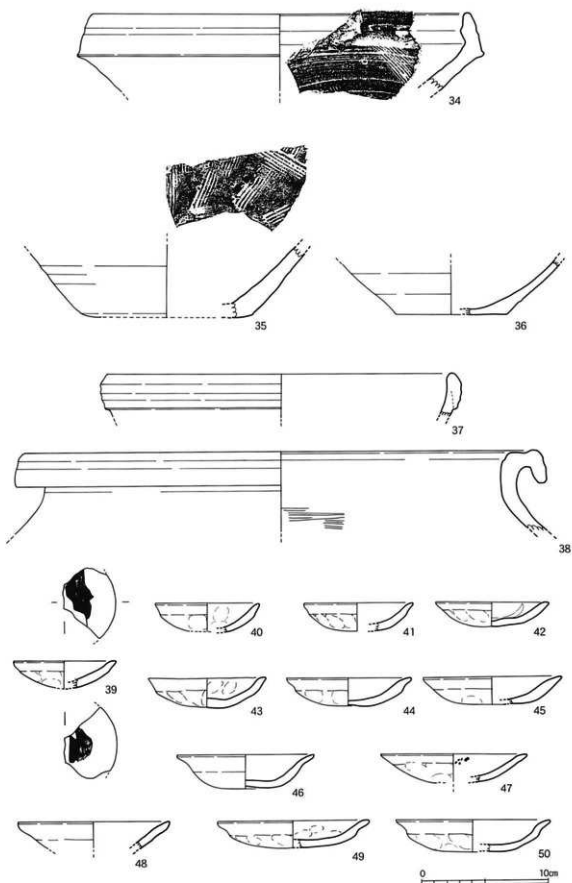
80・81は磁器碗と皿で、81は見込みに蛇の目輪刺ぎが認められる。82・83は肥前系陶器の陶胎集合で緑灰色を呈する。



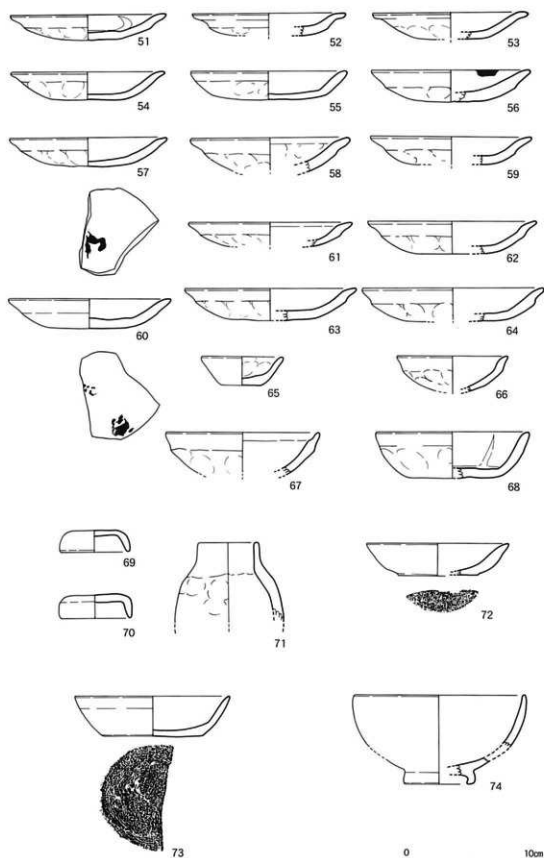
第372図 SD087 出土遺物実測図① (1/3)



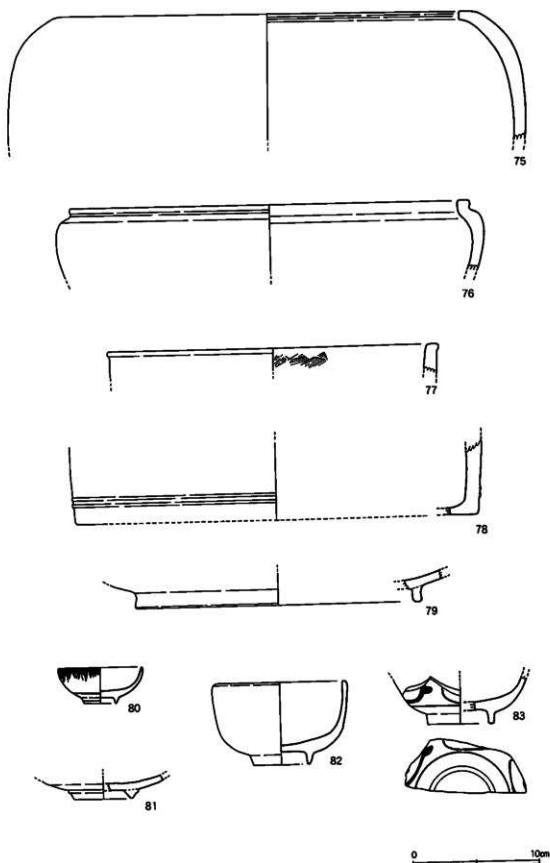
第373図 SD087 出土遺物実測図② (1/3)



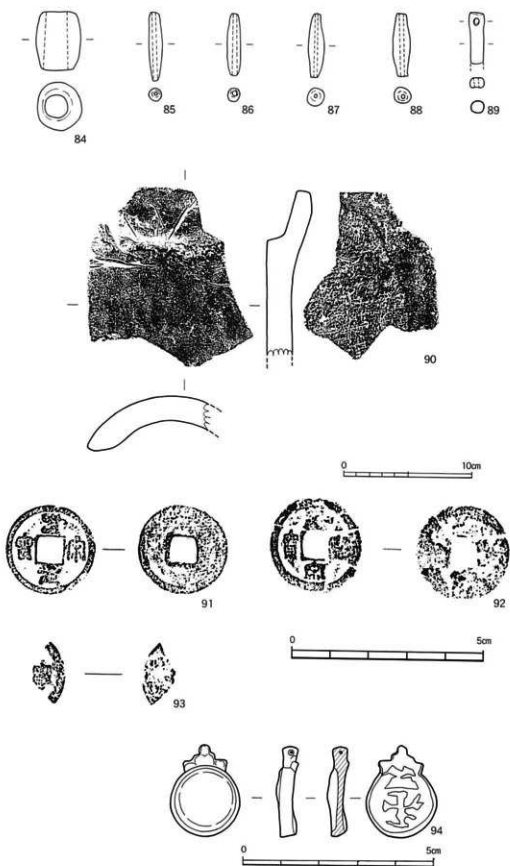
第374図 SD087 出土遺物実測図③ (1/3)



第375図 SD087 出土遺物実測図④ (1/3)



第376図 SD087 出土遺物実測図⑤ (1/3)



第377図 SD087 出土遺物実測図⑥ (1/3 ※メダイ様金属製品・銭貨のみ1/1)

84～89は土鐘で、84～88は中世、89は古代以前に遡る可能性がある。90は丸瓦である。

91～93は銅銭で、91は「聖宋元寶」で北宋時代1101年の初鑄造、字体は篆書である。92は「皇宋通寶」で北宋時代1038年の初鑄造である。94はメダイ様金銀製品で、詳細は総括を参照されたい。

2. 土坑

SK011 (第378図)

K35区に位置する土坑である。長辺1.6m、短辺0.6m、深さ0.42mの半円形のプランが確認できているが、半分以上は調査区外に及んでいるものと思われ、楕円形状の平面プランを有する土坑と考えられる。埋土間

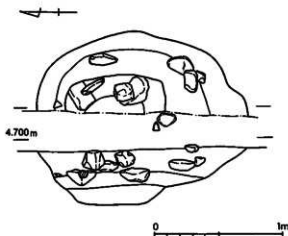
の土層部分ではかなりの炭が確認されていることから、廃棄に用いられた土坑と考えられる。

埋土内からは京都系土師器、銅銭等が出土し、さらにそれらに混じって、20cm大の石が数個出土した。京都系土師器は皿が中心となって出土し、焼塩壺の蓋に使用された可能性のある小皿も1点出土している。京都系土師器皿の時期より、16世紀中葉～後葉段階に埋まったものと考えられる。

SK011出土遺物 (第379図)

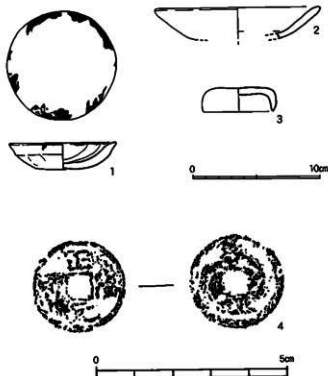
1～3はいずれも京都系土師器である。1は、口径8.4cm、器高2.1cmの皿で、口径部にススの付着が認められることから、灯明皿として使用されたものと考えられる。形態的には、2期の型式段階に比定できる。2も皿で、型式的には1と同時期に比定できる。3は、小皿であるが、後に詳しく触れるが、SD087で焼塩壺と考えられる土師器が出土しており、同溝からはさらに、口径をほぼ同じくする土師器の小皿が見つかった。両者は胎土や調整がほぼ同様のもので、さらに口径がほぼ同じ点を考えると、小皿は焼塩壺の蓋として使用された可能性がある。この3の資料は、SD087出土の小皿が口径5.4cm、器高1.8cmに対して、口径が5.4cm、器高が1.9cm

とほぼ同法量で同形態を呈している。したがって、この3の資料も焼塩壺の蓋の可能性を考えておく必要があるため、図では口縁部を下にして提示した。4は銅銭で、1157年の金時代に鑄造され「正隆元寶」である。表面には若干の錆の付着が確認される。



第378図 SK011 実測図 (1/30)

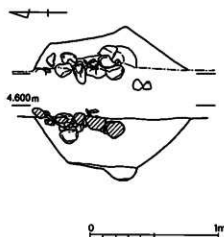
灯明皿



第379図 SK011 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨のみ1/1)

SK012 (第380図)

K35区に位置する土坑で、長辺1.2m、短辺0.3m、深さ0.48mの半円形のプランである。SK011同様半分以上は調査区外に及んでいるものと思われる、楕円形状の平面プランを有する土坑と考えられる。埋土内には、10~20cm大の多量の石が土器片とともに入っており、さらに土層の観察から、炭や焼土がかなり含まれていることが判明している。したがって、この土坑も廃棄に用いられたものである可能性が高い。また、石についてはSK011も同様であろうが、その大ききから見て、屋根に葺かれていたものであることが想定される。



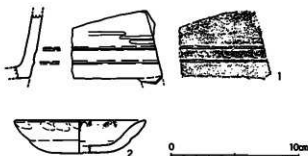
第380図 SK012 実測図 (1/30)

出土遺物の中に積極的に時期を比定できる資料は少ないが、出土している京都系土師器の時期から16世紀末葉段階に埋まったものと考えられる。

SK012出土遺物 (第381図)

1は、瓦質土器で火鉢の底部、脚部である。突帯間に双頭庵手流雲文が施され、在地煎の火鉢である。

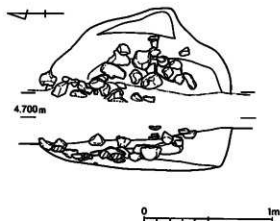
2は、京都系土師器の皿である。器壁がやや厚く、口唇部下のナデも顕著で、3期の段階に比定できる。



第381図 SK012 出土遺物実測図 (1/3)

SK013 (第382図)

K35区に位置する土坑で、長辺1.2m、短辺0.3m、深さ0.28mの半円形のプランである。約半分が調査区外に及んでいるものと思われる、楕円形状の平面プランを有する土坑と考えられる。埋土内には、10~20cm大の多量の石が入っており、さらにそれらに混じって遺物もかなり含まれている。土層の観察から、やはり炭がかなり含まれていることが判明しており、この土坑も廃棄に用いられたものである可能性が高い。また、石についてはSK011・SK012同様屋根に葺かれていたものであろう。出土遺物の中に瓦も含まれているが、その絶対数は少なく、この「御内町」界隈の民家に用いられたというよりは、むしろ南



第382図 SK013 実測図 (1/30)

側に近接していた万寿寺に関連する遺物の混入ととらえるべきであろう。

この土坑の時期については、京徳鎮窯の青花をはじめとする磁器や陶器が出土しており、さらには京都系土師器の坏や皿が出土していることから、16世紀代の所産であることは間違いない。中でも器高の高い京都系土師器の坏が出土していることから、16世紀後葉~末葉の位置づけが可能である。

廃棄土坑

16世紀末葉

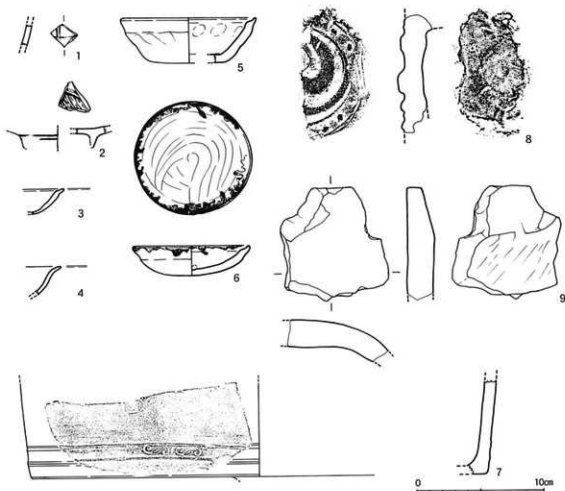
廃棄土坑

万寿寺関連遺物

SK013出土遺物（第383図）

1は、中国景德鎮窯の碗か皿の胴部で、一部文様が見られるが詳細は分からない。2も同じく景德鎮窯産の碗の底部である。外面の腰部と高台部直上に2条の界線が認められ、見込みにも文様が施される。部分的残存のため、文様の詳細はつかめない。また見込み部分に盛り上がりは見られず、C群のいわゆる蓮子碗と考えられる。3は青磁の碗の口縁部、4は白磁の皿の口縁部である。5・6はいずれも京都系土師器で、5は坏、6は皿である。5は器高が高く、口唇部に顕著なナデを施すことによってその端部がつまみ上げられたような形態をなす点が特徴的である。こうした形態の坏は中世大友府内町跡においては16世紀後葉～末葉によくみられる形態である。6は、口唇部にススの付着が認められ灯明皿として使用されたことが分かる。特にそのススの付着は口唇部全面に及んでおり、かなりの頻度で使用されたことが伺われる。形態的には、器壁が厚く、口唇部下にナデも顕著に認められることから、5の坏とはほぼ同段階の所産と考えられる。型的には5、6とも塩地氏のいう3期の段階に位置づけられよう。7は瓦質土器の火鉢の底部で、下部に巡る突帯間に双頭竜手流雲文が施され、在地産型の火鉢と考えられる。その文様構成や形態とから見ても、前述のSK012出土の火鉢と同一個体である可能性が高い。SK012とSK013は隣接していることもあり、両者の土坑はほとんど時間差なく掘られていたことが想定される。

8と9は、丸瓦である。8は瓦頭で中央部に巴紋、その周囲の圏線内には珠文が配される。本調査区では瓦を使用した施設の存在は考えにくく、南接する万寿寺に関係する遺物と考えられる。



第383図 SK013 出土遺物実測図 (1/3)

SK014 (第384図)

K34区に位置する土坑である。長辺0.9m、短辺0.5m、深さ0.28mの半円形のプランが確認できているが、半分程は調査区外に及んでいるものと思われる。埋土内からはかなりの炭の堆積が確認されており、廃棄に用いられた土坑と考えられる。

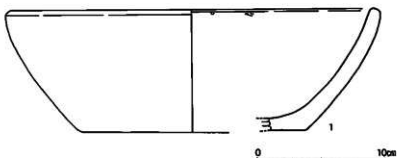
廃棄土坑

出土遺物の中に時期を認定できるものが希少であるため、土坑の時期については言及しがたいが、層位的に見て16世紀以前に遡らないものと考えられ、先に触れた隣接する土坑(SK011～SK013)とさほど時間的に差がないものと考えられる。

SK014出土遺物

(第385図)

図示できるものは右図の1点のみで、瓦質土器の鉢である。復元径で口径29.0cm、底径17.3cm、器高9.7cmを計り、在地系のものと考えられる。



第385図 SK014 出土遺物実測図 (1/3)

SK015 (第386図)

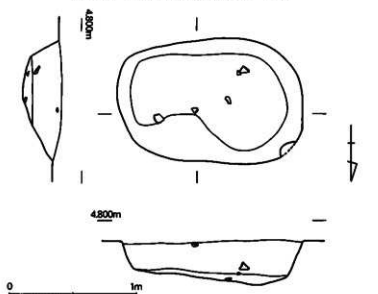
K35区に位置する土坑である。平面プランは、長径1.44m、短径1mの楕円形を呈し、深さは約0.3mである。土坑内からは京都系土師器と在地系土師質土器の破片が出土しているが、京都系土師器の形態からこの土坑は、16世紀中葉～後葉に位置づけられる。

16世紀中葉～後葉

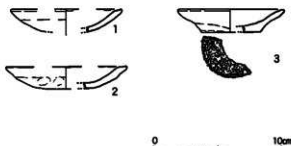
SK015出土遺物(第387図)

1、2はいずれも京都系土師器である。いずれも器壁がやや厚く、口縁部下のナデも顕著であるため、2期の段階に比定できる。3は在地系土師質土器で、赤褐色を呈し、ロクロ成形による痕跡が内外面に認められる。口縁部が外に開く形態で、16世紀段階の特徴を示しており、時間的にも1、2の京都系土師器と伴している可能性が高いといえる。

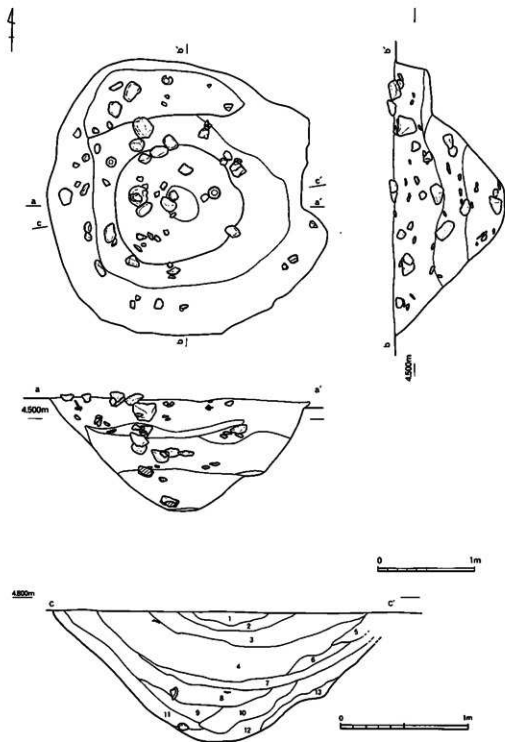
赤褐色の在地系土師質土器



第386図 SK015 実測図 (1/30)



第387図 SK015 出土遺物実測図 (1/3)



- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. 褐灰色 (7.5YR 4/1) | 8. 灰色 (10Y 4/1) 多量の炭、焼土を含む。 |
| 2. 灰褐色 (7.5YR 4/2) | 9. 黒色 (7.5Y 2/1) 炭を多く含む。 |
| 3. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 弱粘質土。 | 10. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 弱粘質土。 |
| 4. 黄褐色 (2.5Y) 弱粘質土。大量の炭層。 | 11. 灰色 (7.5Y 4/1) 炭、焼土を含む。 |
| 5. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 炭。 | 12. 灰色 (5Y 4/1) 弱粘質土。 |
| 6. 黄灰色 (2.5Y 4/1) | 13. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 砂質土。 |
| 7. 黒色 (5Y 2/1) 炭層。 | |

第388図 SK016 実測図(1/40)・土層図(1/30)

SK016 (第388図)

K34区に位置する。長径3m、短径2.8mのほぼ円形に近い平面プランを有し、深さは1.1mと深い。隣接する他の土坑と比較すると、その規模がかなり大きいことが分かる。ほぼ完全に残っているが、一部東側の部分が井戸(SE108)によって切られている。黒土の堆積状況を見ると(第404図参照)、4層から11層にかけて炭が大量に含まれていることが分かる。そして炭の層が複数にわたって堆積していることから、この土坑内で複数回焼却行為がなされたことを示している。土坑は土層観察より掘り返された形跡は認められず、したがって同一土坑が比較的長期間にわたって使用されたものと考えられる。

土坑内からは、五彩をはじめとする京徳鎮窯系の碗、龍泉窯系青磁、白磁、京都系土師器、在地系土師質土器等が出土しており、16世紀段階の位置づけが可能である。中でも京都系土師器は、器壁もさほど厚くなく、埴地編年の2期に比定されると考えられ、16世紀中葉～後葉に比定できる。ただし、口径の大きい器種については器壁がかなり薄く、ナデも顕著に施されない特徴を有しており、古い様相を呈している。更に内外面にクロロ目を有する赤褐色の在地系土師質土器が共存していることから、2期でも古い段階、もしくは1期の新段階までさかのぼり得るのかもしれない。京都系土師器だけにおいてみれば、更に型式的に後出しそうなものも何点かみられるが、さほど大きな時期差を生じるものではないと考えられ、共存する輸入陶磁器も大きく時期を異にするものではない。以上より、本土坑は16世紀中葉段階に掘られ、末葉段階に入る前には埋められたものと考えられる。

SK016出土遺物 (第389・390図)

1は五彩の碗で、口縁部内外面に界線、胴部外面に山水人物画、内面に花模様が描かれる。2は、京徳鎮窯系青花の碗で、口縁部内面には界線、外面胴部には花模様が描かれる。口縁部付近の破片のため底部の形態が不明であるが、他に共存している京都系土師器や在地系土師質土器との位置づけから見て、蓮子碗であろうと考えられる。3も京徳鎮窯系青花の碗か皿の一部である。

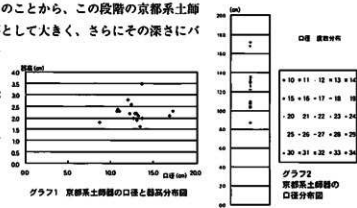
4、5は龍泉窯系の青磁である。4は、稜花盤で、5は皿である。いずれも15世紀頃の所産と考えられ、本土坑の時期とは若干異なるので、混入したものか伝世されたものかのいずれかであろう。

6～9は、中国産の白磁である。6は小坏、7から9は皿である。7、8は口縁部が外反し、9は胴部下半で屈曲する。いずれも16世紀段階のものと考えられる。

10～34は、京都系土師器の皿である。グラフ2の口径のみの度数分布を見る限り8～10cm内、10～12cm内、12～14cm内、16～18cm内にそれぞれ集中分布する傾向が看取できる。そこで口径だけでみれば4法量が認められる。ちょうど14～16cm内の法量のみがないが、これは口径復元の不可能な京都系土師器も他に多数あるため、ここに入りうる器種があることは十分想定しておかなければならない。

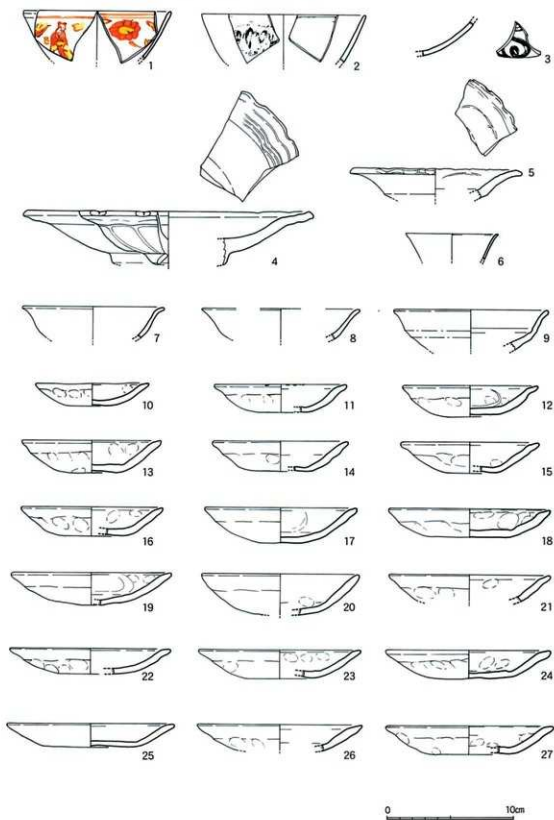
したがって、本土坑の資料のみで、京都系土師器の法量の詳細について言及することは避けるが、この段階の京都系土師器が明確に法量分化している現象を提示しておきたい。また、グラフ1の器高と口径の度数分布を見てみると、12～14cm内の口径のものが最も多く、さらに器高もその高さに大きなバラツキがあることが分かる。このことから、この段階の京都系土師器は12～14cmのものが非常に需要として大きく、さらにその深さにバラエティーがあることからこのサイズの京都系土師器は、機能的にもその用途が豊富であったことが想定される。

35～45は、在地系土師質土器である。35と44は小皿、他は皿である。特に皿は内外面にクロロ目を顕著に残し、赤褐色を呈するもの

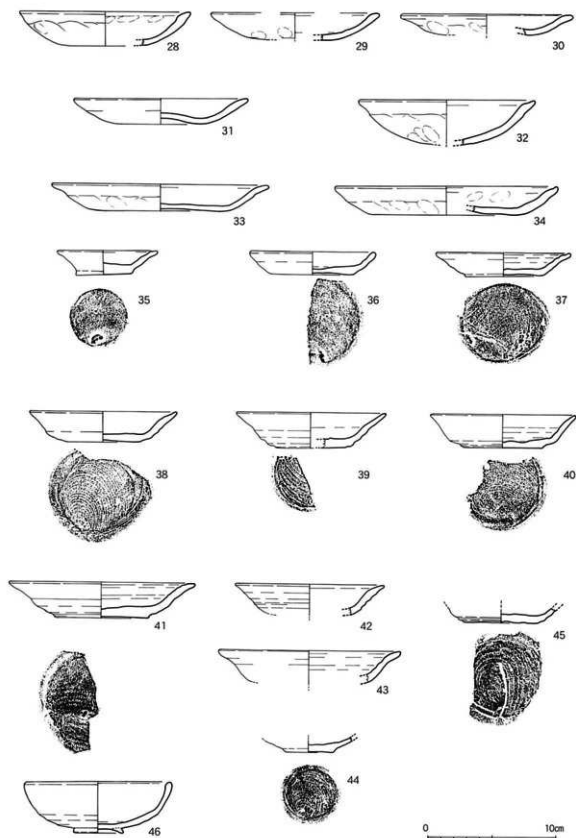


で、中世大友府内町跡では16世紀段階まで残るタイプの一つである。したがって前述の京都系土師器や輸入陶磁器と共存している可能性が高い。

46は瓦質土器の碗で16世紀代の所産と考えられる。



第389図 SK016 出土遺物実測図① (1/3)



第390図 SK016 出土遺物実測図② (1/3)

SK017 (第391図)

K35区に位置する土坑で、長径1.6m、短径0.9m、深さ0.51mの規模が確認されている。しかし、土坑の西側部分は図のように調査区外に及んでおり、実際は倍の規模を有する楕円形状の土坑と考えられる。

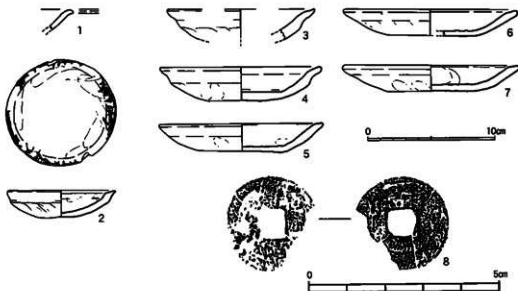
土層の観察より、土坑の床面から20cmほど、かなりの量の炭が堆積しているのが確認された。周囲に廃棄土坑が密集して確認されていることを考えると、この土坑も廃棄及び焼却に使用されたものと考えられる。土坑内からは多量の石に混ざって、土器等の生活遺物も確認されている。生活遺物としては輸入陶磁器や京都系土師器などが確認されているが、この内京都系土師

器は形態的に、塩地幅年の2期～3期に位置づけられると考えられ、本土坑は16世紀中葉から末葉の所産と考えられる。

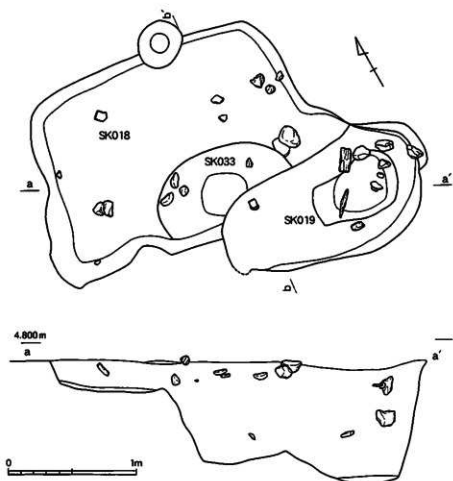
SK017出土遺物 (第392図)

1は、中国製門磁の皿の口縁部で、16世紀代のものと考えられる。2～7は、京都系土師器の皿で、特に2は口唇部全面にススの付着が見られ、かなりの頻度で使用されたと思われる灯明皿である。京都系土師器の形態は、器壁の厚さ及びナデの痕跡等から塩地幅年の2期のものが主体となっている。しかし、3の資料のようにやや後出的な要素を持ったものも認められ、16世紀中葉から末葉にかけての時期幅を考慮しておいた方がよいと思われる。

8は、宋銭で「嘉祐通寶」である。1056年北宋の代の初鋳造で、一部欠損しているが、文字はすべて判読できる。字体は篆書で書かれている。



第392図 SK017 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨のみ1/1)

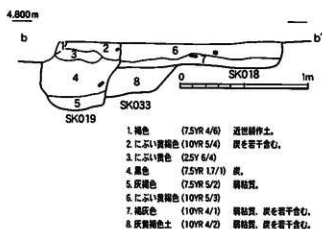


第393図 SK018・SK019・SK033 実測図 (1/30)

SK018・SK019・SK033 (第393図)

3基の土坑が切り合っている。いずれもK35区に位置する。SK018は長辺2.3m、短辺1.6mの隅丸の方形を呈し、深さ0.24mである。SK019は長径1.64m、短径0.85mの長楕円形を呈し、深さは0.96mである。SK033は、長径1.1m、短径0.56mのやはり楕円形を呈し、深さは0.8mである。

この3基の土坑の新旧関係については、第394図に示している層位関係より古い順にSK033→SK018→SK019となっているのが確認できる。後述するが、各土坑から出土する遺物の時期には、かなりのバラツキが認められ、3基の土坑の構築時期には、ある程度の時期幅が認められる。具体的な時期については、各土坑



第394図 SK018・SK019・SK033 土層図 (1/30)

とも遺物の出土量が希少なために言及しがたいが、まず、SK018、SK019については、輸入陶磁器（京徳鎮窯系青花）や京都系土師器の形態から、16世紀中葉から後葉段階に位置づけることが可能であろう。次に、SK033については、時期の認定のできる資料（14世紀後葉段階と考えられる坏）が1点のみしか見られないことから、そのみで土坑の時期を決定するのは困難である。しかし、SK018に15世紀前葉段階の坏が混入している点等を勘案すると、SK033が15世紀前葉まで通る可能性はあり得る。

16世紀中葉
～後葉

SK018出土遺物（第395図）

1は、京徳鎮窯系青花皿の口縁部で、口唇部内面に界線、さらに口縁下屈曲部内面にも同じく界線が通る。2は京都系土師器の皿で、口縁部下のナデが明瞭で、京都系土師器2期でも新しい段階に相当すると考えられる。3は、在地系土師質土器の坏で、口縁部が外反気味に立ち上がる。15世紀前葉段階に位置づけられる。4は、土師質土器の蓋である。時期は古代のもので、混入であろう。5は、土師質土器の鉢の底部である。

SK019出土遺物

（第396図）

16世紀中葉
～後葉

1・2共に、京都系土師器の皿である。口縁部下のナデが明瞭で、京都系土師器2期の中でも新しい部類に属すると考えられ、SK018の京都系土師器とほぼ同時期のものであろう。

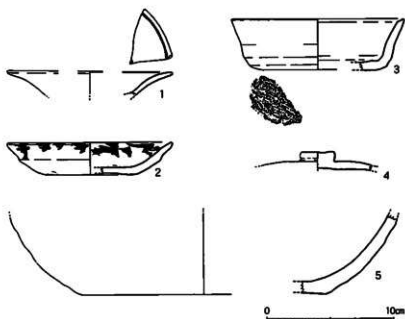
前述のように、SK018とSK019は明確に切り合い関係が認められ、新旧が確認されているが、出土遺物からみる限りさほど時期差をもたないものであるといえる。

SK033出土遺物

（第397図）

1は、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。口縁部がやや外反気味に立ち上がる。法量的にはひとまわり小さいが、形態的にはSK018出土の土師質土器皿に近いと考えられる。したがって、15世紀前葉段階まで通り得る資料といえる。

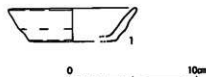
15世紀前葉



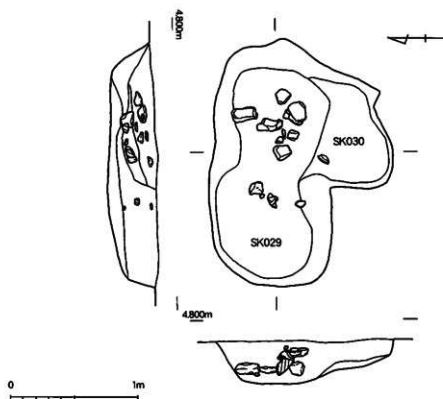
第395図 SK018 出土遺物実測図 (1/3)



第396図 SK019 出土遺物実測図 (1/3)



第397図 SK033 出土遺物実測図 (1/3)



第398図 SK029・SK030 実測図 (1/30)

SK029・SK030 (第398図)

SK029、SK030ともに K35区に位置し、両者は切り合っている。土層観察の結果、SK029がSK030を切っているのが認められた。遺構の規模は、SK029が長径1.96m、短径0.96mの長楕円形プランを呈し、深さは0.34mである。SK030は、SK029に切られているために全容は不明だが、残存長で長径0.86m、短径0.5m、深さ0.2mである。SK029では底面付近で炭や焼土が確認されていることから、廃棄に使用された土坑であると考えられる。出土遺物から見る限り、両者は切り合っているものの、さほど時期差はないものと考えられ、16世紀中葉～後葉に比定される。

廃棄土坑

SK029出土遺物 (第399図)

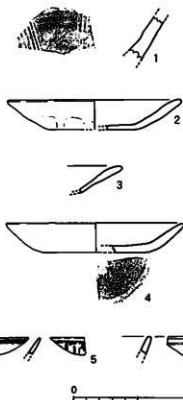
備前系陶器

1は、備前系陶器掬鉢の胴部である。2、3は京都系土師器皿で2期のものと思われる。4は、在地系土師質土器の皿である。

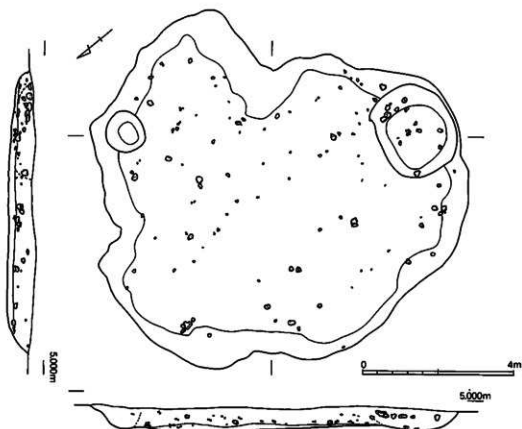
SK030出土遺物 (第399図)

京徳鎮窯系

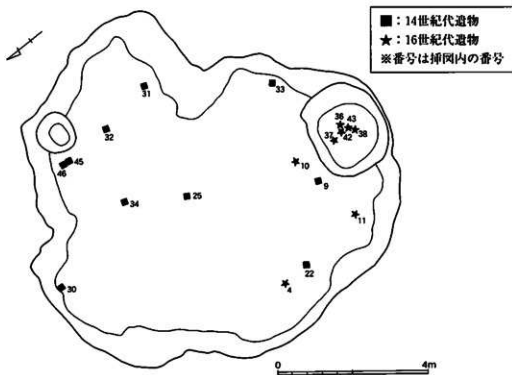
5は、京徳鎮窯系青花碗の口縁部である。細片のために、文様の詳細は不明であるが、16世紀代のものであろう。6は、中国製の青磁の口縁部である。やはり細片のために、器形等の詳細は不明である。



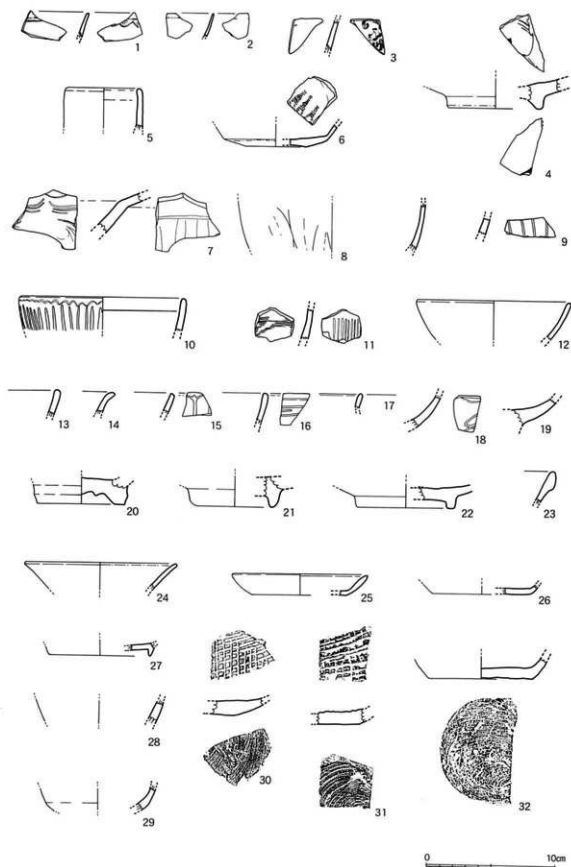
第399図 SK029・030 出土遺物実測図 (1/3)



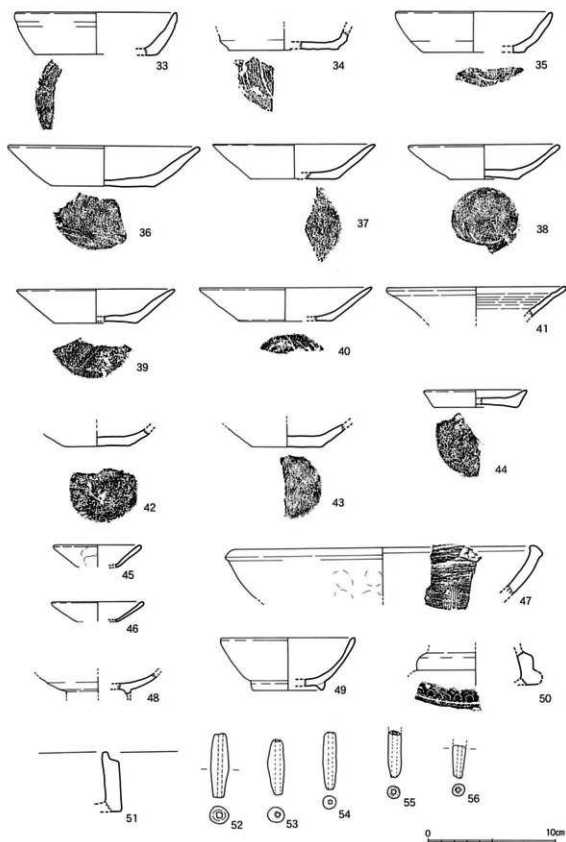
第400図 SK031 実測図 (1/100)



第401図 SK031 主要遺物分布図 (1/100)



第402図 SK031 出土遺物実測図① (1/3)



第403図 SK031 出土遺物実測図② (1/3)



第404図 SK031 出土遺物実測図③ (1/1)

SK031 (第400図・第401図)

巨大土坑

SK031はK36区に位置する土坑で、長径9.7m、短径7m、深さ0.7mの規模を有する非常に大きな土坑である。その規模や遺物の出土状況等は、本調査区で検出されている他の土坑と比較しても、かなり特異である。平面プランの検出時においても、土坑の切り合いラインは確認できず、さほど時期差の無い中で、複数の土坑が重なって形成されている可能性が高い。そうした中で、この土坑の性格を確定するためには、土坑の切り合い関係はもちろんであるが、出土遺物の時期認定とその分布状況等から総合的に検証していく必要がある。

したがって、まず出土遺物について見ていき、それらの時期や分布状況等を分析した結果をふまえ、この土坑の性格付けを試みたいと思う。

SK031出土遺物 (第402～404図)

龍泉窯系青磁香炉

1～4は景德鎮龍泉系青花の碗である。5は龍泉窯系青磁の口縁部で、香炉と思われる。6は、同安窯系青磁の皿の底部である。7～22はいずれも龍泉窯系青磁で、7は盤の口縁部付近の破片、8～22は、一部細片で器種の判別が困難なものもあるが、いずれも碗であると考えられる。これらの内、表面に施される蓮弁文が判別できるものを見てみると、まず8、9は蓮弁中に鋸を有するいわゆる鋸蓮弁文であり、14世紀の古い段階に位置づけられる。15は丸彫によって蓮弁文が描かれ、蓮弁の先がシャープさを失っていることより、15世紀段階のものと考えられる。10、11はヘラ先による細線の線描蓮弁文をもつものであるが、10は細線と剣頭が蓮弁としての単位を意識して施されているのに対して、11は剣頭が省略されており、後出的要素を有している。15世紀末～16世紀にかけての位置づけがなされようが、11に関しては16世紀の所産であろう。青磁については他の資料が、細片のために、時期の認定が困難であるが、蓮弁の形態から見る限り、少なくとも3時期のものが混在していると考えられる。

鋸蓮弁文

細線蓮弁文

白磁1号

23～27は、中国製の白磁である。23は口縁部が玉縁状を呈し、11～12世紀代のものであると思われるが、この土坑内の出土資料にこの時期のものは他に見られないため、混入品であると考えられる。24は坏、25・26は皿であるが、いずれも口壳のタイプで13世紀後半から14世紀前半に位置づけられる。26については、底部の破片で口壳かどうかの断定はできないが、底部の形態より同類のものと見なしてさしつかえなかろう。27は皿の底部であるが、高台の形態より16世紀段階の所産と考えられる。したがって、白磁だけにおいて見てみると、大きく13世紀後半～14世紀前半と16世紀段階の2時期が存在することが判る。

瀬戸美濃系陶器鉢皿

28・29は、中国製の天目茶碗で、30・31は瀬戸美濃系陶器の鉢皿である。底部のみの出土で時期の認定は困難であるが、14世紀代の所産と思われる。

32～43は在地系土師質土器の坏であるが、形態的に大きく2つのタイプに分かれる。一つは、32～35の土器が該当するが、口縁部に向けて若干内湾気味に立ち上がり、口径と底部の径の割合が、底部1に対して、口径が1.3～1.5ぐらいで大きくは開かない器形である。それに対して、36～43は口縁に

向けて底部から直線的に広がるようにのびるのが特徴で、口径が底部の径の約2倍を有している。時期については、前者が14世紀前葉段階、後者が15世紀末葉から16世紀前葉段階に比定されよう。

44の在土系土師質土器の小皿については、15世紀末から16世紀前葉段階における共伴例は見られないことから、前述の14世紀代の32～35の土器と共伴している可能性が高い。

45・46は吉備系土師器で、両者とも底部を欠損しているために高台の有無は確認できないが、口径を見てみると、45が7.2cm、46が6.8cmと小振りで、法量縮小の傾向を示しているものと考えられる。したがって高台もかなり退化あるいは消失している形態のものと考えられ、14世紀代に位置づけられよう。

47～51は瓦質土器で、47は鉢鉢、48・49は埴である。50は火鉢の底部、51も火鉢の一部と考えられる。

52～56は土鍾である。いずれも中世のものと考えられる。

57・58は銅銭である。57は「開元通寶」で621年、唐時代の初鑄造である。58は、鋳の付着が激しく、文字の判読ができない。

以上、出土遺物の組成を見てみると、大きく2つの時期に遺物が集中していることが分かる。一つは14世紀代（前葉が中心）、もう一つは16世紀代（15世紀末葉から16世紀前葉が中心）である。出土遺物の中で時期が分かる資料を中心に、その出土位置を示したのが第401図である。図中に示した番号は第402図から第404図の遺物番号を示し、■は14世紀代、★は16世紀代の遺物である。出土遺物の分布状況を見ると、南端の一面に16世紀代の遺物が集中し、14世紀代の遺物が北側を中心にほぼ全体的に分布している状況が看取できる。特に16世紀代の遺物が集中する部分は、図からも分かるように新たな楕円形状の掘り込みが床面付近で確認されている。さらに土層観察によって、この楕円形状の掘り込み部分はこのSK031が埋まったあとに、掘り返されていることが判明した。したがって、この16世紀代の遺物集中区域には、別の土坑が存在したのと考えられる。ただ、SK031の埋土とこの掘り返し部分の土は非常に近似しており、土層の精査によって、かろうじて掘り返しのラインが確認できたのが現実である。したがって平面ではプランを確認できなかっただけで、現実には図に示される楕円形ラインよりひとまわり大きなプランが存在していたものと思われる。

次に、14世紀代の土坑のプランについて触れてみたい。14世紀代の遺物は前述の通り、SK031のほぼ全体に分布している。仮に16世紀代の土坑が南端一面を占めていたとしても、その分布域は長径8m、短径約7m内と非常に広い。本調査区で検出されている他の土坑と比較しても、その規模は極端に大きく、さらに遺物の出土状況等もみても、通常の廃棄等に使用された土坑とは考えにくい。出土する遺物が14世紀代、特にその前葉段階のものが多く目に注目すると、この土坑のすぐ南端10mほどの所に万寿寺が存在したという事実を看過できない。さらに14世紀代でも前葉ということになると、万寿寺の創建が徳治元年（1306年）であることから、万寿寺創建時の関連遺構であることが想定される。

では、この土坑が具体的に万寿寺に関連してどのような機能を有していたかという点であるが、この巨大なプランと廃棄行為の希薄さから、万寿寺創建に際しての整地等に使用された土取の跡である可能性を指摘しておきたい。ただ、それを立証しうる具体的材料は現在のところ見あたらない。

なお、SK031のプランをよく見ると、北側部分では東と西に張り出すようにプランが広がっていることが分かる。したがって、最低3基の土坑が重なり合っている可能性が指摘できる。ただ、土層を観察する限りこれらの3基の土坑の重なり合いを示す層位は確認できず、さらに出土している遺物にも大きな時期差を示す資料は見あたらないことから、これらの3基の土坑は埋没する前にさほど時間差を置かず次々と掘られた可能性がある。先に述べたようにSK031が土取の遺構である前提に立てば、こうした所見は首肯できるものである。

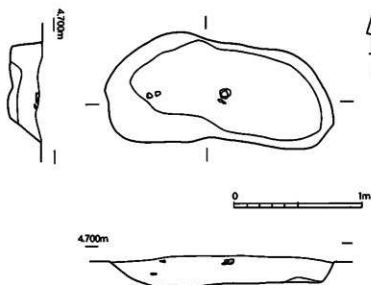
SK032 (第405図)

K35区に位置する土坑で長径1.8m、短径0.86mの長楕円形の平面プランを有し、深さ0.25mである。遺物の出土は希少であるが、口縁が聞き気味に立ち上がる在地系土師質土器皿と京都系土師器皿の形態より、16世紀中葉以降の所産であると考えられる。

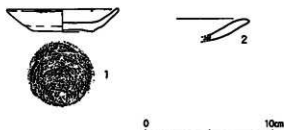
SK032出土遺物 (第406図)

1は、ロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、口縁部が底部から聞き気味に立ち上がる形態である。こうした形態の土師器は、中世大友府内町跡では内外面にロクロ目を顕著に残すものが多く、16世紀前葉から中葉にかけて見られる。この1の資料はそれらと同類の系譜上にものであると考えられる。また、この土師器皿の口唇部にはススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと考えられる。中世大友府内町跡では灯明皿の使用は京都系土師器が圧倒的に多いが、在地系土師質土器も同様の役目を果たした資料として注目される。

2は、京都系土師器皿で、口唇部下のナデの顕著さから16世紀中葉以降の所産と考えられる。



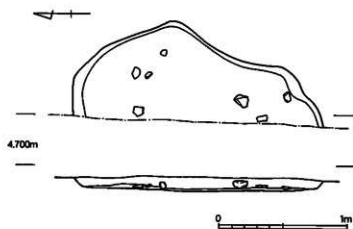
第405図 SK032 実測図 (1/30)



第406図 SK032 出土遺物実測図 (1/3)

SK034 (第407図)

K36区に位置する土坑で、確認されている規模で、長径2m、短径0.8m、深さ0.12mを有すが、西側部分は調査区外に及んでおり、実際はもう少し大きくなるものと考えられる。遺物の出土量は希少であるが、礫等と共に出土しており、他の廃棄土坑と同様の傾向を示している。時期を認定できる遺物の出土は少ないが、銅鍔弁を有する青磁碗や、須恵質土器の出土等から見て、14世紀代の所産である可能性がある。



第407図 SK034 実測図 (1/30)

灯明皿

廃棄土坑

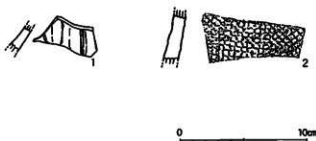
SK034出土遺物 (第408図)

竊意弁

1は、中国龍泉窯系青磁碗の破片で、胴部に竊意弁文が確認できるため、14世紀代のものと考えられる。

須恵質土器

2は、須恵質土器の破片で、器形等は不明であるが、搬入品である可能性も考えておく必要がある。

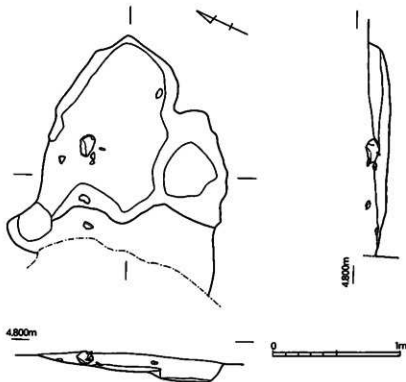


第408図 SK034 出土遺物実測図 (1/3)

SK083 (第409図)

M35区に位置する土坑で長径1.6m、短径1.2m、深さ約0.18mの不定形土坑である。深さ0.18mと浅いが、上部が削平されている可能性もあり、本調査区で検出される他の土坑と同様に、廃棄に使用されたものと思われる。土坑内からは礫に混じって、景徳鎮窯系青花の碗や、京都系土師器3期の皿等が出土しており、16世紀末葉に埋められたものと考えられる。

京都系土師器3期



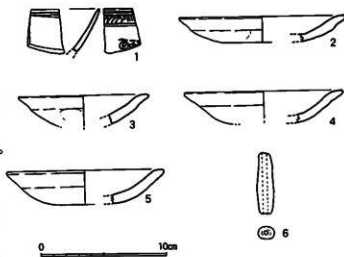
第409図 SK083 実測図 (1/30)

SK083出土遺物 (第410図)

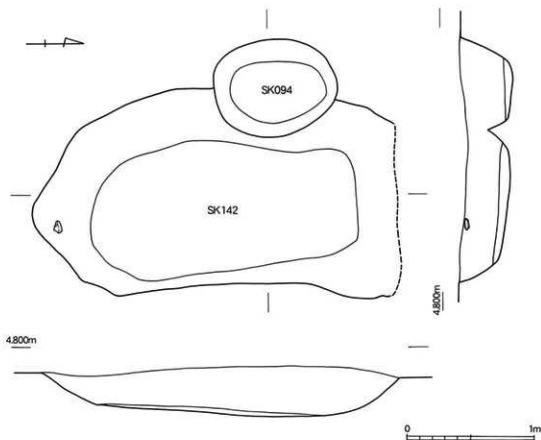
1は、景徳鎮窯系青花碗の口縁部である。

2～5は京都系土師器の皿である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデも明瞭に施されていることから、3期に該当するものと考えられ、16世紀後葉～末葉段階のものである。

6は土鏝で、中世の所産と考えられる。



第410図 SK083 出土遺物実測図 (1/3)



第411図 SK094・SK142 実測図 (1/30)

SK094・SK142 (第411図)

L35区に位置する土坑で、2基の土坑が切り合っている。SK094は長径0.96m、短径0.75mで、ほぼ円形に近いプランを有す。深さは約0.42mである。SK142は長径2.85m、短径1.5mの長楕円形の平面プランを有し、深さは約0.4mである。両者の前後関係については、SK094内から2期と考えられる京都系土師器皿が中心となって出土し、SK142からはやや古い形態を持つ京都系土師器、さらには在地系土師質土器等が中心となって出土していることなどから、SK094の方が新しいものと考えられる。

SK094出土遺物 (第412図)

1, 2共に京都系土師器皿で、2期と考えられる。

第412図 SK094 出土遺物実測図 (1/3)

SK142出土遺物

(第413図)

1は、龍泉窯系青磁碗、
2は中国製白磁の小坏、
3, 4は在地系土師質土器で内外面にロクロ目を顕著に残す。5は、京都系土師器皿、6は、瓦器碗の底部である。



第413図 SK142 出土遺物実測図 (1/3)

白磁小坏

瓦器碗



第414図 SK098 案測図 (1/40)

SK098 (第414図)

L34区・M34区にまたがって位置する土坑で長径4.9m、短径4.8m、深さ1mの規模を有す。図に示すように大量の生活遺物と礫が埋められており、廃棄土坑と考えられる。大量に混入している礫は、その大きさから屋根に使用されたものか、あるいはすぐ近くに井戸が点在していることから、その井筒部分に使用されていたものであろう。

出土する遺物は、多量の京都系土師器、備前系陶器の播鉢・甕、瓦質土器の羽釜や鍋などの国産の生活品が主体をなすが、そのほかに京徳鎮密系の青花やメナムノイ産の四耳甕等の輸入陶磁器も見られる。京都系土師器は器壁が厚く、ナデもしっかりとなされる3期の特徴をそなえ、坏が器種組成として加わり、備前系陶器の播鉢は斜め播目が中心となる。しかし肥前系陶器や大塚4期以降の瀬戸美濃系陶器などは含まれておらず、この土坑は16世紀末葉でもごく早い段階に廃棄されたものと考えられる。

16世紀末葉
の古い段階

SK098出土遺物 (第415~429図)

五彩
段頭心
1は、景德鎮窯系の五彩の皿、2~6は景德鎮窯系青花である。2は碗の底部で、段頭心を呈することから小野瀬年のE群にあたる。見込み部分には牡丹、高台内には文字が書かれる。3は皿で、口縁部内外面に界線、見込み部分には獅子が描かれる。また高台内部には2と同様に文字が書かれる。4も皿で、口縁部外面に界線、見込み部分も界線が描かれる。5は、碗の底部付近の破片で、高台外面には界線が2本通る。6は皿の底部で見込み部分に雲文のようなものが描かれる。小野瀬年のB群と思われる。7は漳州窯系青花皿の底部である。青花については、すべて16世紀代の所産と考えられるが、小野瀬年のE群の碗が含まれ、さらには漳州窯系青花皿も含まれることから、16世紀でも後葉段階に位置づけられる。

白磁菊皿
8、9は龍泉窯系青磁である。8は碗で見込み部分に印花文が施される。9は、菊皿である。10~14は、中国産の白磁である。10は萐莆底を呈する坏、11は同じく萐莆底を呈する皿である。12は菊皿、13、14は直立気味の高台を有する皿の破片である。10~14の白磁は、いずれも森田勉氏の瀬年のE群に属し、16世紀代のものと考えられる。

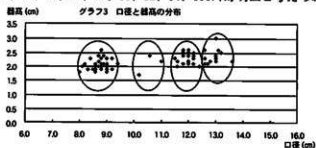
メナムノイ窯系四耳壺
15は、中国産の梅輪陶器で四耳もしくは五耳がつく有耳の壺である。16、17はメナムノイ窯系四耳壺で、16は耳の部分の破片、17は肩部の破片である。

備前系陶器
以下18以降はすべて国産品である。18は備前系陶器の鉢で口縁部下に重ね焼きの痕跡が認められる。19は備前系陶器の壺で、肩部には波状文が施文される。20は備前系陶器の小壺である。21、22は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。

備前系陶器
23~27は備前系陶器の甕、もしくは大甕、28~46は備前系陶器の播鉢である。大半が斜め方向の播目を持ち(28~30、32、33、35、37~41)、見込みに播目を入れるもの(28、35)も認められる。この斜め播目を有する播鉢の口縁部形態については、いずれも口縁端部のナデが強く先細りとなり、口縁端部からやや下がった口縁部内には稜もしくは段を持つ。また口縁部外面文様帯には凹線が数条通る。播目が確認できない34、42~45も口縁部形態が近似しており、斜め方向の播目を有するものと思われる。以上のような口縁部形態と斜め播目、さらには見込み部分に播目を有するといった要素は、瀬年間に示す近世1期の段階にあたり、本土坑の時期の播鉢は16世紀後葉以降のものが主体であるといえる。なお、上記の口縁部形態と若干異なって、特に口縁端部の先細りがさほど強くない31、46については播目が斜め播目ではなく(31)、1段階古いものと考えられる。また口縁部のない資料36についても斜め播目ではなく、見込み部分に播目も確認されないことから、同様の段階の位置づけが可能である。

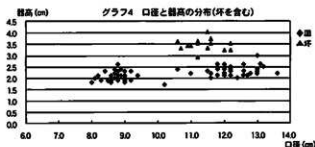
京都系土師器の法量
47~147は京都系土師器である。器種的には器高の低い皿(47~131)、深さの深い坏(132~147)の2種類に分けられる。また坏に関しては、胴部からの口縁部に向けて内湾気味に立ち上がるもの(132~143)と、外反気味に立ち上がるもの(144~147)の2形態に分かれる。

また皿については、器壁が厚く、口縁部下のナデもしっかりとしており、京都系土師器3期の段階と考えられ、16世紀後葉~末葉に位置づけられる。また口徑部にスガが付着しているものもかなり認められ(47、48、50~56、61、64、66、67、69、76、77、79、81、82、84、131)、灯明皿と考えられる。また、底部に格子状の圧痕(69、107、122)が認められるものもあり、成形中に付着したものであろう。出土した皿の法量については、グラフ3に口徑と器高の相関関係を示したが、大きく4つの集中分布域があることが判る。これをもって直ちに法量分化の数を認



定するわけにはいかないが、少なくとも4法量以上が存在したことは想定され、さらに法量の分化は口径の大小によって規定されるものであって、器高にはさほど差異を生じていないことが確認できる。

次に、先ほどの皿の口径と器高分布に坏を加えてみると、グラフ4のようになる。坏が加わったために器高の高いものが増えてきているのは当然だが、口径10cm～11cm前後と口径12cm前後のところに集中していることが判る。特に注目すべき点は、皿のみの分布の際に口径10cm～11cm前後のサイズが非常



に少なかったところである。それが坏の分布を加えると、口径10cm～11cm前後サイズの部分の数が充実してきているのが判る。

以上から、口径8～9cm前後のサイズについては皿としての需要が非常に大きく、口径10cm～12cm前後のサイズは、皿や坏などバリエーションに富んだ需要があったことが判る。特に口径10cm～11cm前後のサイズについては、皿よりもむしろ坏の方が用途として比重が大きかったと考えられる。そして口径13cm以上になるとまた、皿としての需要が大きかったことが想定される。またこれらの中で明らかに灯明皿と思われる資料については、1点を除いてすべて口径8～9cm前後のサイズに入っており、このサイズが灯明皿として好んで使用されたことが判る。このように本土坑出土の京都系土師器の傾向から見る限り、法量によって明確にその用途を使い分けていたことが判る。ただあくまでこのデータは一土坑の出土遺物の傾向であって、これがこの時期の蓋然性をもつかどうかはさらに多くのデータ数をもってでないと言及できないことはいうまでもない。

なお、京都系土師器で極めて法量の小さい148の小皿があるが、これについては焼塩壺の蓋として使用されている可能性があり、図ではその用途に主眼をおいて示した。ただ仮に焼塩壺の蓋として使用されていたとしても、蓋をとってそれを皿に転化して使用したことも十分に想像に難くない。

149は土師質土器の燗台である。中央部に穿孔が施され芯を挿入していたものと考えられる。器高も比較的高いところから16世紀代の所産と考えられる。

150～152は在地系土師質土器の小皿、153～158は在地系土師質土器の皿である。この内注目すべき要素として、皿の形態があげられる。この土坑で出土する京都系土師器3期の一段階前、つまり京都系土師器2期の時期に共伴する、内外面にクロク目を顕著に残し口径が底径の約2倍になる形態の在地系土師質土器はこの土坑では共伴しない。それに代わってこの段階で顕著に見られるのは、京都系土師器の胎土を持ちクロク成形をなす、いわゆる京都系土師器・在地系土師質土器の折衷した形態である。底部から口縁部に向けて聞き気味に立ち上がる点は前段階の在地系土師質土器の形態を踏襲しているが、胴部中位で肥厚し口縁端部が先細りする形態が特徴であり、この段階で一つの面図を持つて出現する。

159～198は瓦質土器である。159～162は羽釜であり、159～161はいずれも26cm～29cmの胴部径をもち外面突帯下にスガが付着している。162は羽釜の突帯部分の破片と思われる。

163・164は摺鉢、165～179は火鉢である。この内172～177、179は胎土が赤く、焼成の不具合によるものと考えられる。また、火鉢の外面には文様が施されるものがみられるが、172～174は雷文、171、177～179は双頭龍手文が施文される。

180は焙烙、181、182は土鍋、183～192及び194は鉢である。この内183は底部に砂が付着しており、189は表面に鉄分の付着が認められる。また、188は全体的に赤褐色を呈しており、前述の火鉢同様に焼成時の不具合によるものと思われる。

伏間瓦 193は壺、195～197は埴である。埴はいずれも高台を有し、断面が三角形状を呈す。198は特異な形態をなし、器種は不明である。

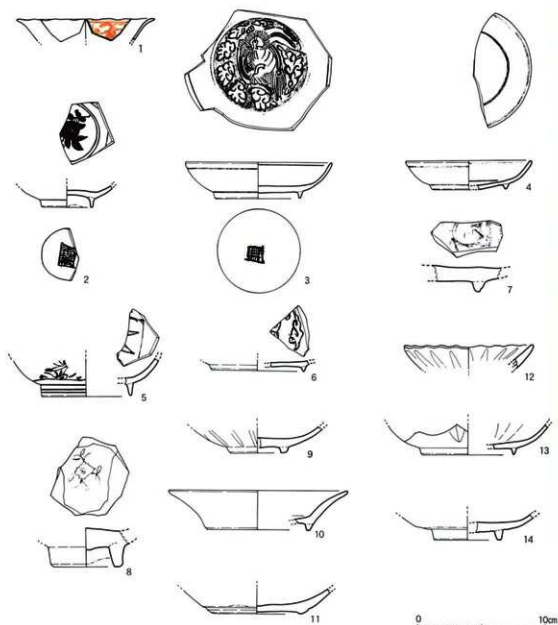
199は埴、200は伏間瓦である。200の伏間瓦の内面には布目痕が残る。本土坑は町屋の裏手に位置し、それに伴う廃棄土坑と考えられるため、瓦の出土は不自然である。この土坑より南数十m先に万寿寺が存在していることもあり、その関連の遺物と考えられる。

茶臼 201、202は茶臼で前者は安山岩製、後者は凝灰岩製である。

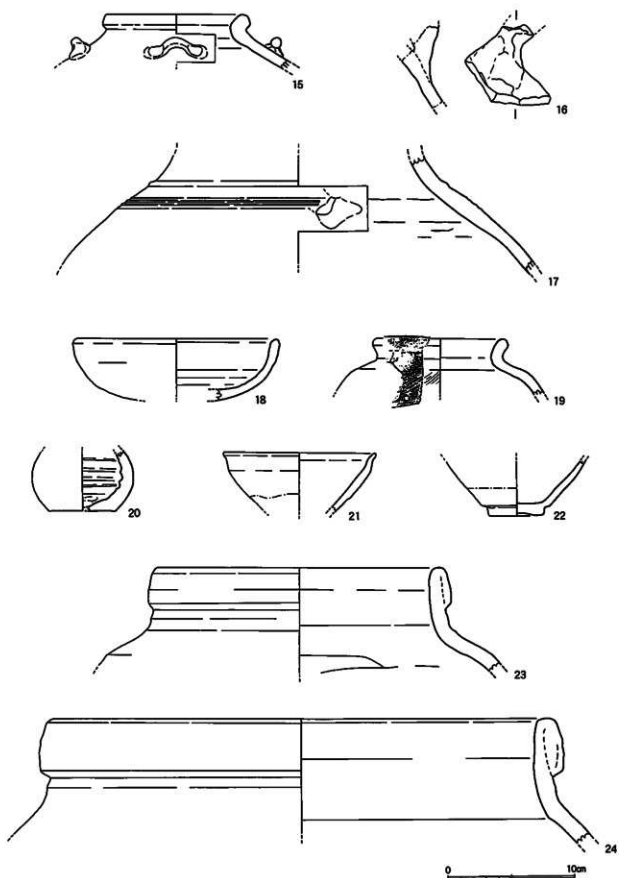
203～205は土鍬で、中世のものと考えられる。

206は、扁平な棒状の銅製品である。一方の端部には穿孔が施される。鍵等の機能も想定されるが、詳細は不明である。

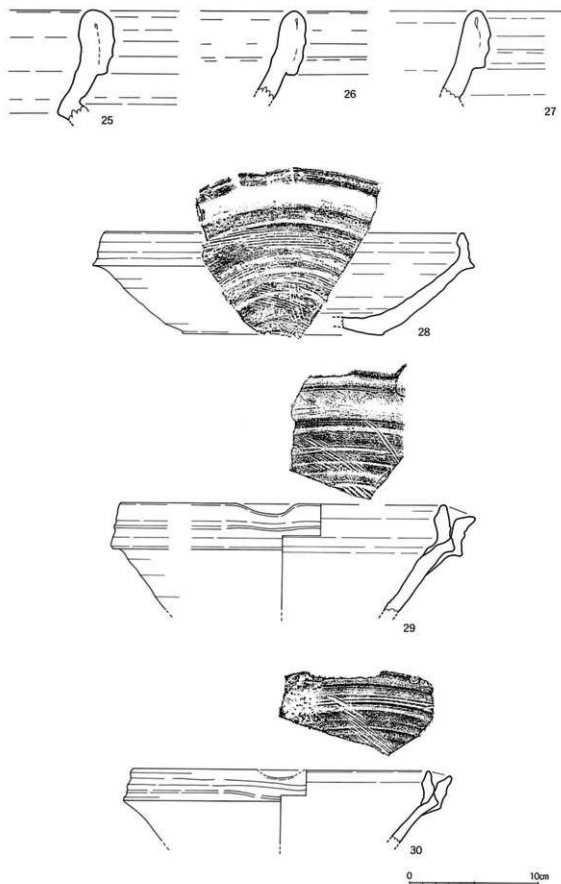
照寧元寶 207は銅銭で、「照寧元寶」である。北宋の時代で初鑄造年は1068年である。銅銭に書かれる文字の字体は真書である。



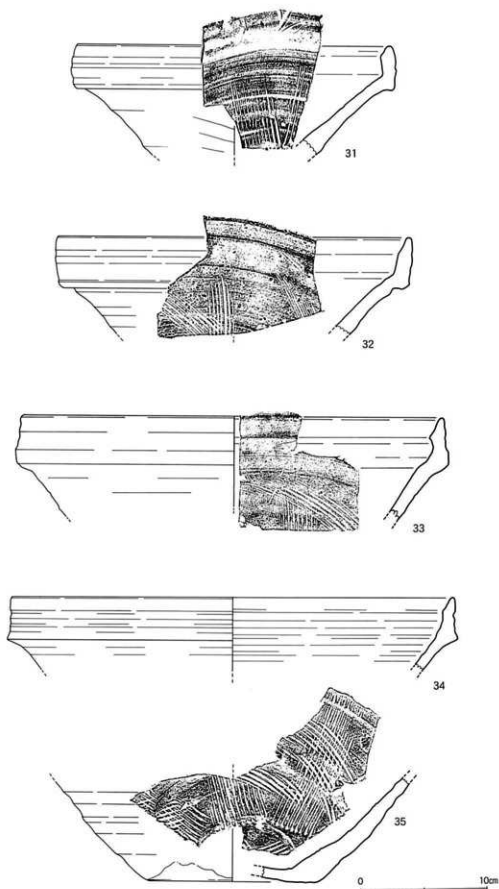
第415図 SK098 出土遺物実測図① (1/3)



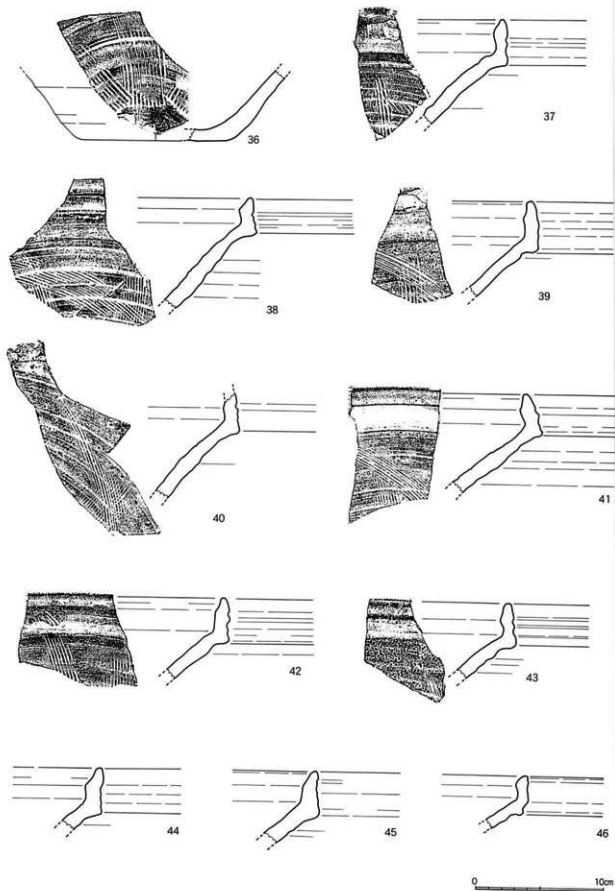
第416図 SK098 出土遺物実測図② (1/3)



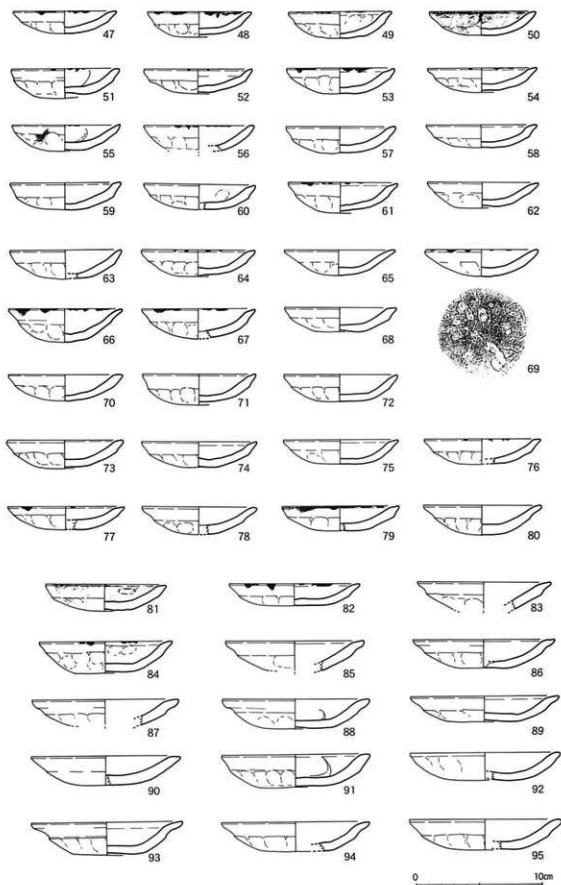
第417図 SK098 出土遺物実測図③ (1/3)



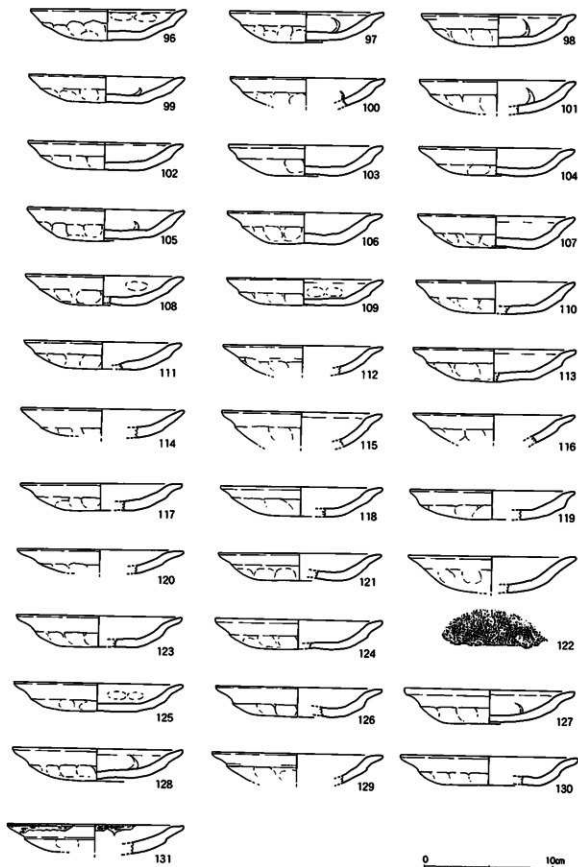
第418図 SK098 出土遺物実測図④ (1/3)



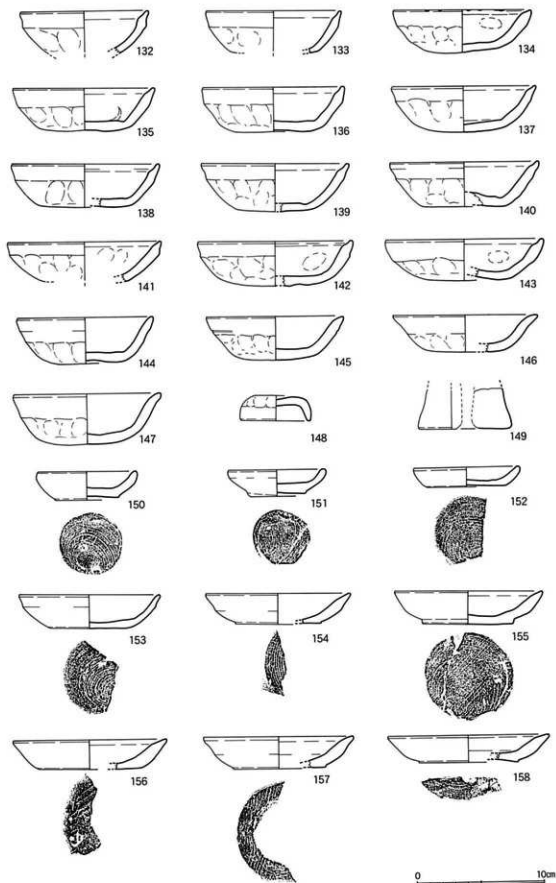
第419図 SK098 出土遺物実測図⑤ (1/3)



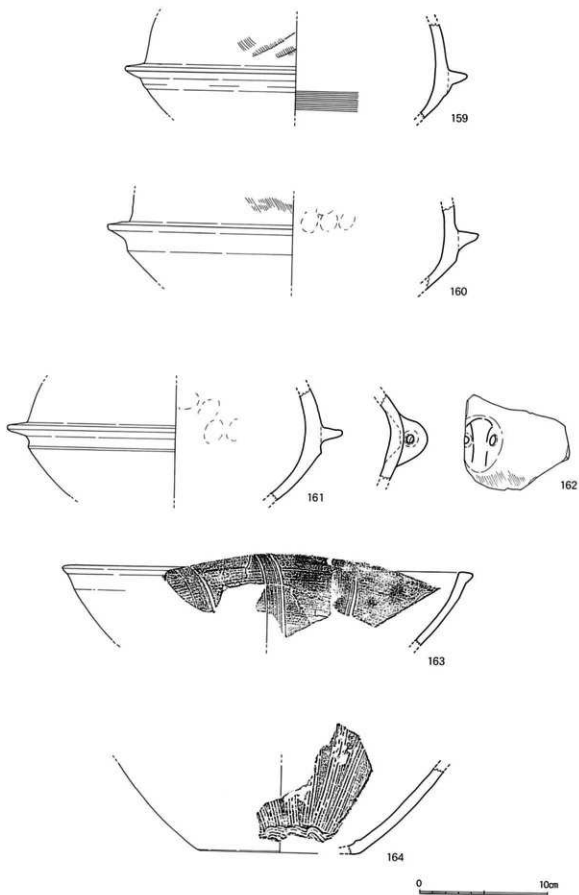
第420図 SK098 出土遺物実測図⑥ (1/3)



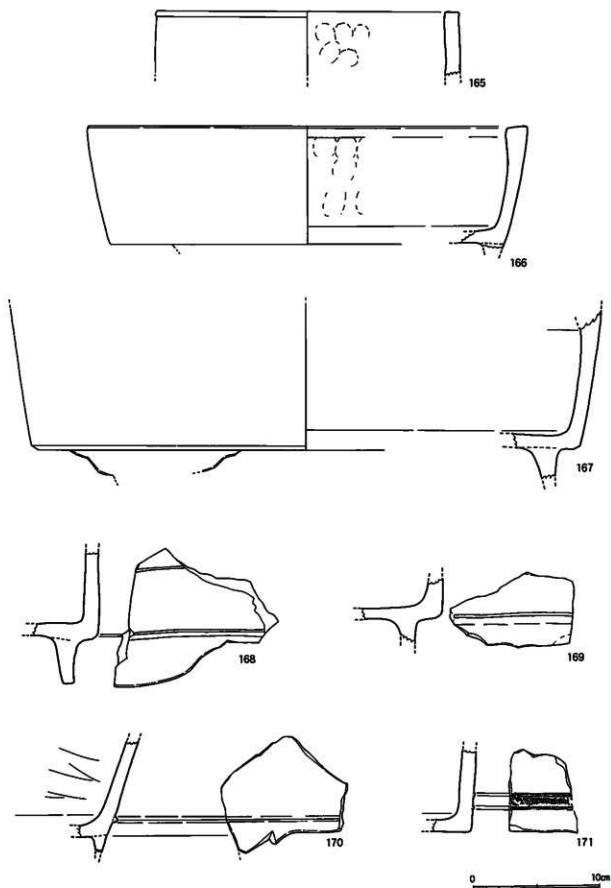
第421図 SK098 出土遺物実測図⑦ (1/3)



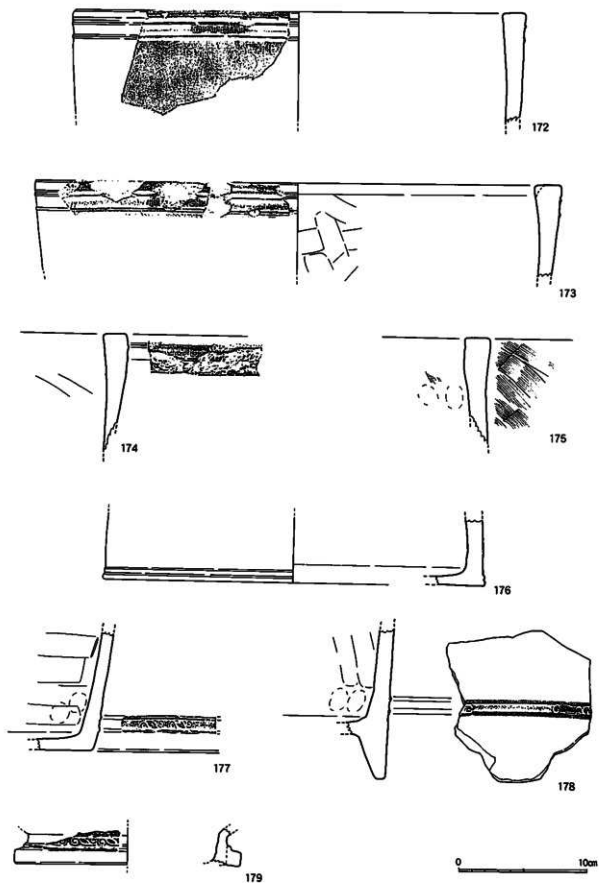
第422図 SK098 出土遺物実測図⑧ (1/3)



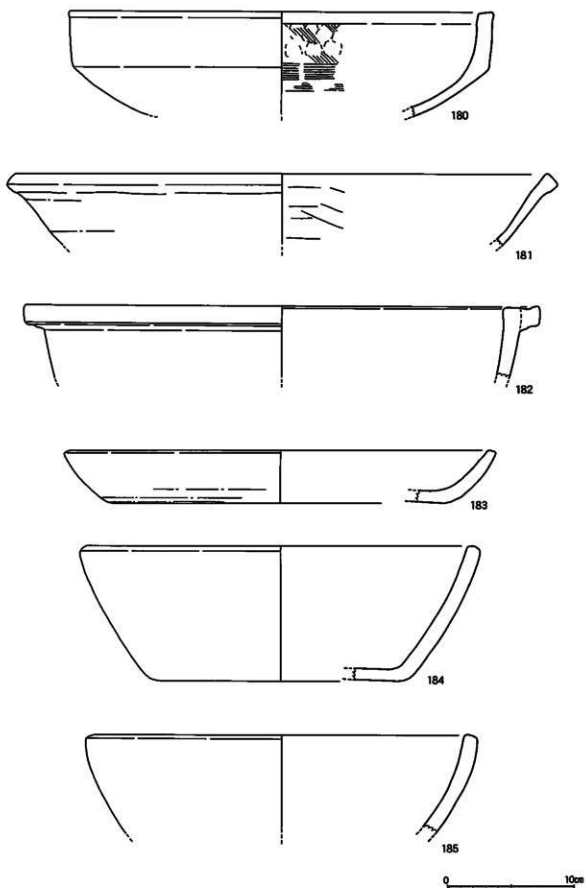
第423図 SK098 出土遺物実測図⑨ (1/3)



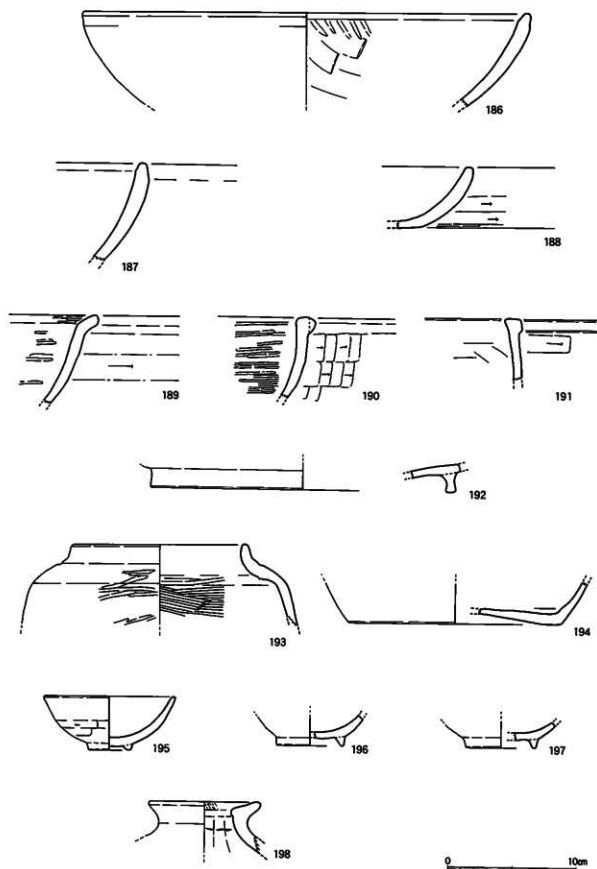
第424図 SK098 出土遺物実測図⑩ (1/3)



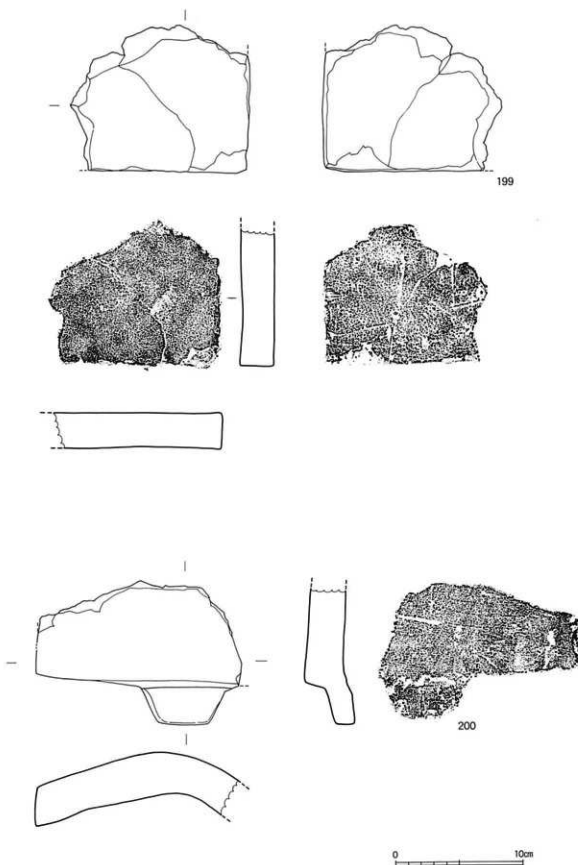
第425図 SK098 出土遺物実測図① (1/3)



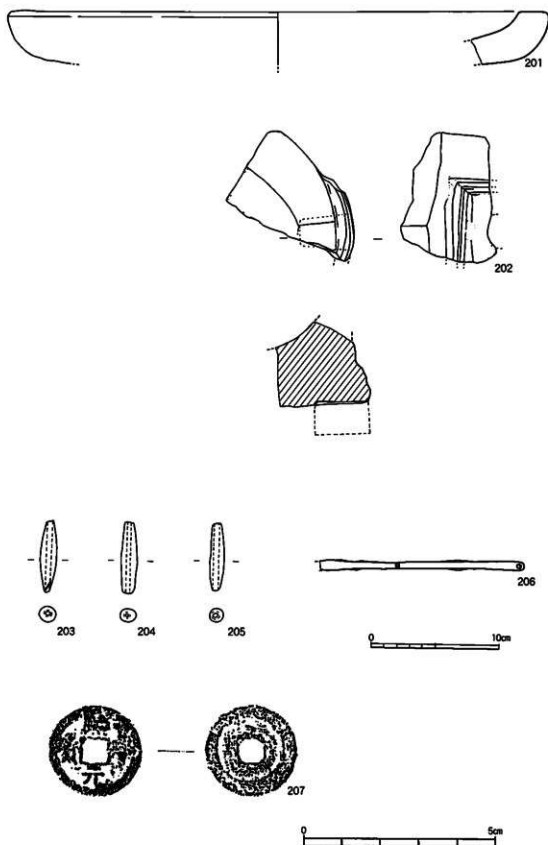
第426図 SK098 出土遺物実測図① (1/3)



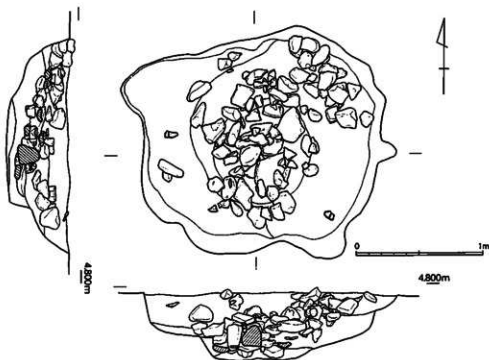
第427図 SK098 出土遺物実測図① (1/3)



第428図 SK098 出土遺物実測図① (1/3)



第429図 SK098 出土遺物実測図⑮ (1/3 ※銭貨のみ1/1)



第430図 SK099 実測図 (1/30)

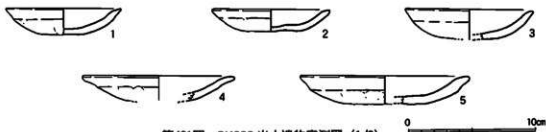
SK099 (第430図)

M34区に位置する土坑で長径2m、短径1.8mの楕円形プランを呈し、深さは0.54mである。多量の礫と混ざって、京都系土師器皿等の遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。出土する京都系土師器皿の型式より、16世紀中葉～後葉に造られ、埋没したものと考えられる。

SK099出土遺物 (第431図)

京都系土師器2期

図示した資料はすべて、京都系土師器皿である。いずれも口縁部下のナデがしっかりといて、2期以降の要素をもっている。5については、器壁が1～4に比べやや厚く後出的要素をもっており、3期に属するかもしれない。



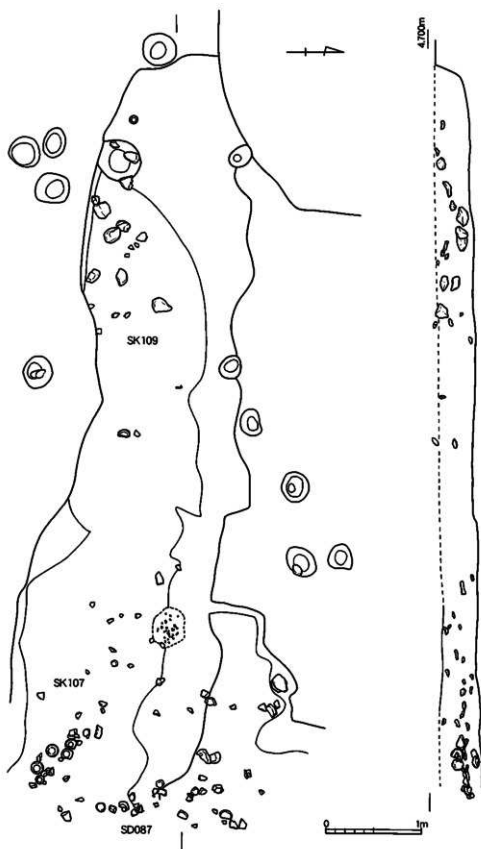
第431図 SK099 出土遺物実測図 (1/3)

SK107・SK109 (第432図)

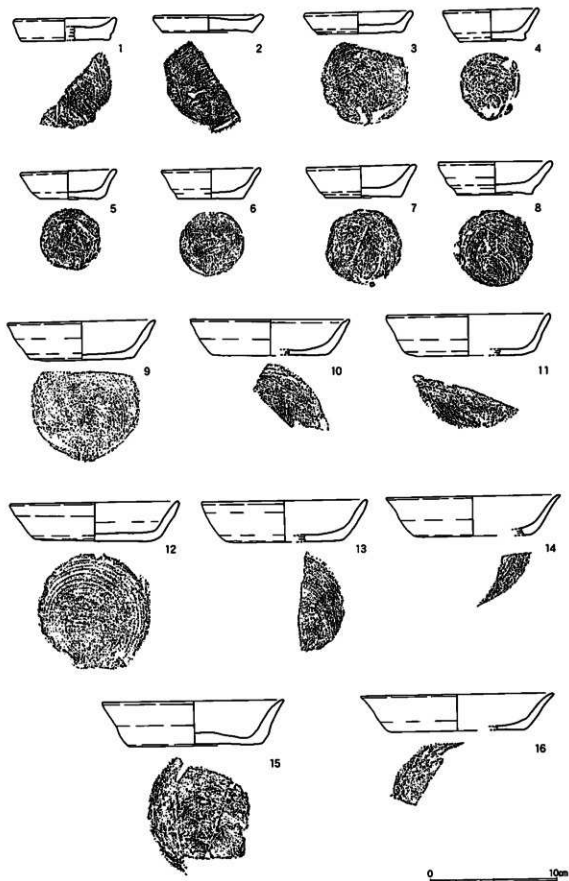
15世紀前半

M36区に位置する土坑で、二つの土坑が切り合っている。両者の切り合い関係については平面プランではほとんど確認できず、さほど時期差をもたずに埋没、掘り返しがなされたものと考えられる。土坑内から出土する遺物については、SK107が15世紀前半を主体とする。SK109からはSK107とは別形製の在地系土師質土器皿が出土するが、14世紀前半と考えられる遺物も出土しており、別項で詳述するが、南側に隣接する井戸SE100の遺物の混入と考えられる。

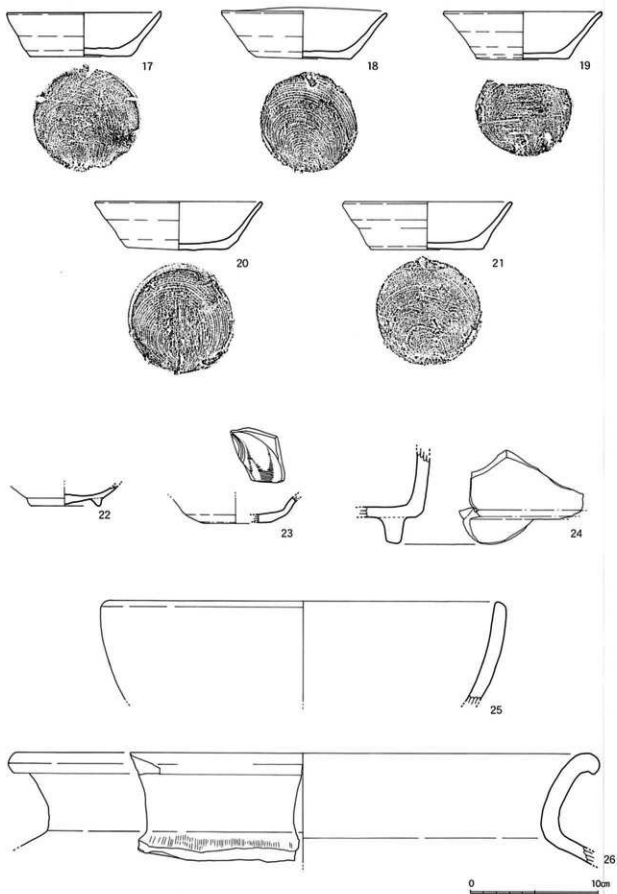
井戸 SE100からの混入



第432図 SK107・SK109 実測図 (1/40)



第433図 SK107 出土遺物実測図① (1/3)



第434図 SK107 出土遺物実測図② (1/3)

SK107出土遺物 (第433・434図)

在地系土師
質土器

1～21は在地系土師質土器で1～3は小皿、4～21は坏である。この内、坏については、法量及び形態によって大きく3つのグループに分けることができる。1群(4～8)は法量が口径7.4cm～8.9cmの比較的小さい一群で、口縁部は底部から外傾して直線的に立ち上がる。2群(9～16)は、底部からやはり外傾して口縁部に向かうが、口縁部が外反して広がる形態である。口径は11.5cm～15cmと比較的バリエーションに富む。3群(17～21)は、形態的には口縁部は底部から外傾して直線的に立ち上がる一群で、口径は12cm～13cmのものが主体となる。なお形態的にみると法量の小さい1群と、3群は、口縁部の立ち上がり方等において同じ系譜とみなすことができる。

同安室系青
磁皿

22は中国産白磁の底部、23は同安室系青磁の皿である。24・25は瓦質土器で、24は火鉢の脚部、25は鉢である。両者ともに焼成があまく、赤褐色を呈している。26は、須恵質土器の甕で搬入品と考えられる。

以上SK107から出土する遺物は、在地系土師質土器皿の形態より、15世紀前葉が主体をなす(第1章第3節幅年表参照)。出土遺物の中には23の同安室系青磁皿等も見られるが、SK107の南西側には14世紀前葉に比定される井戸(SE100)が隣接しており、その遺物が混入したものと考えられる。

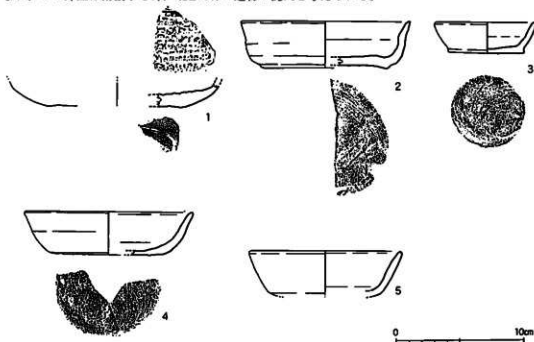
SK109出土遺物 (第435図)

御皿

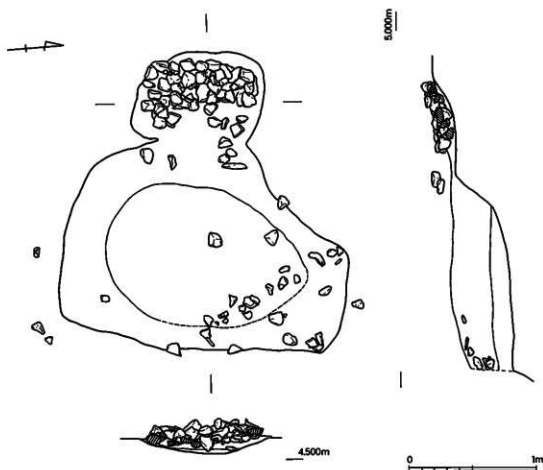
1は、瀬戸美濃系陶器の御皿で古瀬戸段階のものである。2～5は在地系土師質土器皿である。形態からみると大きく2つのグループがあることが分かる。1つは、3のように口径が7.8cmと小さい一群で、底部から口縁部に向けて直線的に延びる形態である。もう一つの群は2、4、5で、若干器形と法量にバリエーションがあるものの、基本的には底部から口縁部に向けて外傾して延び、口縁部付近が若干外反する形態である。この2つの群は、小さい一群が前述のSK107で1群としたものに属し、もう一つの群は前述のSK107で2群としたものに属す。したがって、SK109で出土する遺物は、SK107とはほぼ同時期で15世紀前葉を主体としていることが分かる。先に述べたが、両土坑は切り合い関係が検出時に不明で、掘りあがった際のプランにより2つの土坑の存在が認められたということもあり、両者には大きな時間差は無いと考えられる。

15世紀前葉

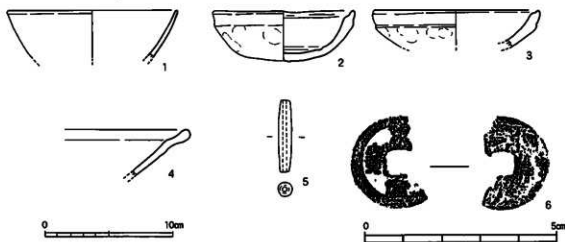
なお、1の御皿は南接する井戸(SE100)の遺物の混入と考えられる。



第435図 SK109 出土遺物実測図 (1/3)



第436図 SK112 実測図 (1/30)



第437図 SK112 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨のみ1/1)

SK112 (第436図)

M35区に位置する土坑で、掘り下げる過程で2つの土坑が存在することが判明した。西側の1基は長径0.96m、短径0.66mの楕円形プランを呈す。深さは0.27mと浅く、底面まで礫がぎっしりと詰まっている。もう1基は長径2.25m、短径1.65m、深さ0.45mの規模を有すが、東側はSD087によって切られているため、実際はもう少し大きかったものと思われる。中から礫に混じって16世紀後葉～末葉の遺物が中心となって出土しており、該期の遺構と考えられる。

SK112出土遺物 (第437図)

1は中国産の白磁の碗で、16世紀の所産と考えられる。2・3は京都系土師器の坏で、形態から3期ものと考えられる。4は瓦質土器の鍋、5は土鉢である。

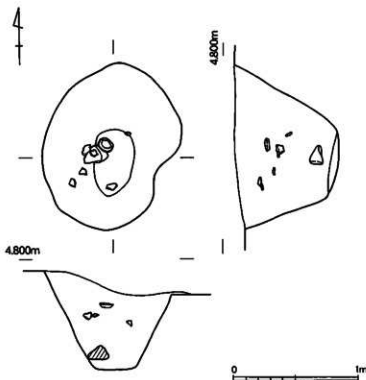
6の銅銭は、半分を欠損しているが3つの字が判読でき、「皇宋通寶」であることが確認できる。北宋の時代で初鋳造年は1038年である。字体は篆書である。

SK113 (第438図)

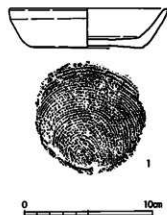
M35区に位置する土坑で長径1.32m、短径1.1mの楕円形プランを呈す。深さは約0.84mと平面規模の割に比較的深い。土坑内からはほぼ完形に近い在地系土師質土器と若干の土器片、礫が出土した。遺構の形態、長軸が真北を指す点、完形の土師器皿の出土等の状況から土坑墓の可能性も考えられるが、若干規模が小さく、人骨や銅銭なども検出されていないので確定はできない。

SK113出土遺物 (第439図)

在地系土師質土器の坏である。底部から門縁部に向けて若干内湾気味に立ち上がる形態から、14世紀前葉に位置づけられる。時期の認定できる遺物はこれのみであるが、ほぼ完形品ということもあり、土坑自体の時期も同様の位置づけが可能であろう。



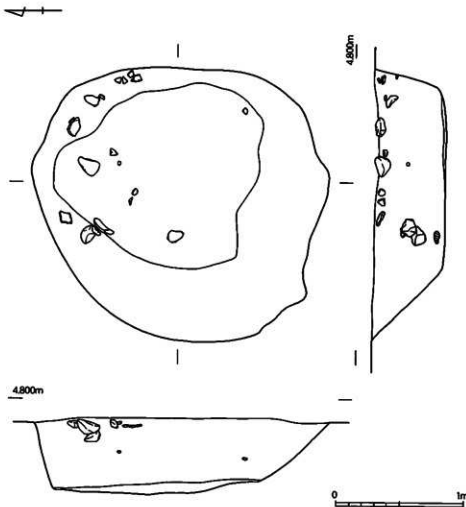
第438図 SK113 実測図 (1/30)



第439図 SK113出土遺物実測図 (1/3)

SK114 (第440図)

K35区・L35区の境界付近に位置する土坑である。長径2.35m、短径2.1mの円形に近い平面プランを持つ。深さは深いところで約0.6mである。土坑内からは若干の礫に混ざって土器片が出土している。すぐ西側に井戸SE115が存在するが、両者はほぼ接するように切り合っているため、平面的あるいは局所的に新旧の判断をするのが困難である。しかし出土する遺物から見る限り土坑SK114は16世紀中葉～後葉が主体、SE115は16世紀後葉～末葉が(井戸SE115の項参照)主体であり、SE115の方が若干新しいと思われる。

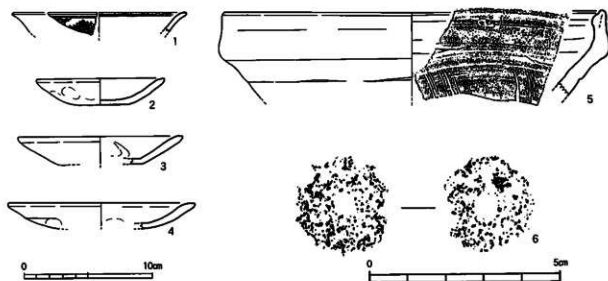
16世紀中葉
～後葉

第440図 SK114 実測図 (1/30)

SK114出土遺物 (第441図)

1 は京徳鎮窯系青花皿である。口縁部は端反り、内外面に界線が巡る。胴部には花の模様が描かれる。形態的に小野瀬年のB群に属するものと考えられる。2～4 は京都系土師器皿である。器壁の厚さはさほど厚くなく、2期に属するものと考えられる。5 は、備前系陶器の播鉢で、口縁部端部のナデは行われるがさほど顕著ではなく、播鉢も斜め方向ではないものと考えられる。乗岡編年の中世6期の段階に比定できる。以上いずれの資料も16世紀中葉～後葉に位置づけることが可能である。

斜め堀II



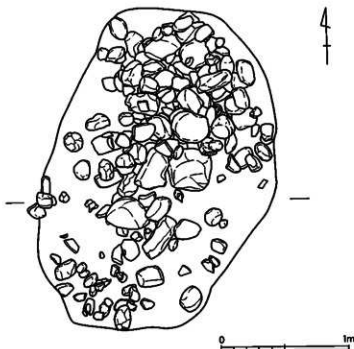
第441図 SK114 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨のみ1/1)

SK116 (第442図)

長径2.6m、短径1.8m、
深さ0.8mで、楕円形プラン
を呈す。土坑内には底面
までぎっしりと礫が詰まり、
遺物もかなり包含されている。
遺物や石の埋没状況を見
ると、北側に集中し、南
側にいくにつれ希薄になっ
ていくことが分かり、北側
から廃棄行為を行ったこと
が分かる。遺物は様々な時
期の物が混在しているが、
景徳鎮窯系青花に饅頭心が
含まれるなど、16世紀後葉
が主体になるものと考えら
れる。

大量の礫

饅頭心



第442図 SK116 実測図 (1/30)

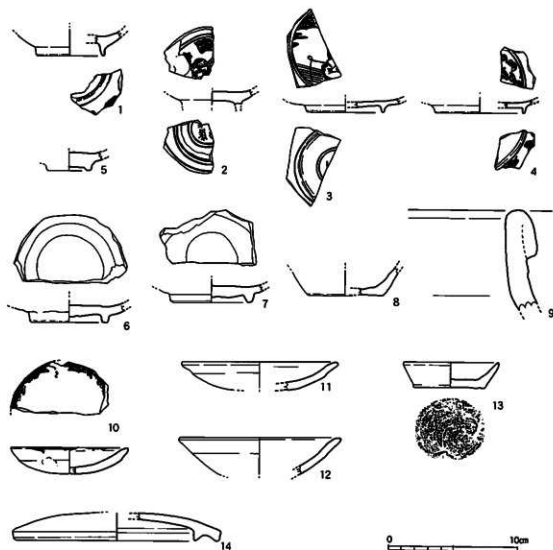
またこの土坑は、井戸
(SE115) を切って掘られ
ており、SE115が16世紀
末葉に埋没している(別項
SE115参照)ことを勘案す
ると、さほど時期差無く掘
られたものと想定される。

SK116出土遺物 (第443図)

青花碗E群 1～4は景徳鎮窯系青花で、1・2が碗、3・4は皿である。1・2共に見込み部分が盛り上がるいわゆる假頭心を呈しており、小野編年のE群にあたる。3は口縁部分が欠損して不明だが、高台の形態より小野編年のB群と考えられ、さらに見込み部分に山水人物、高台内に文字が書かれるところから、小野編年のB₂群にあたるものと考えられる。

蛇の目軸刺ぎ 5は、龍泉窯系青磁の碗の底部である。6は、中国産の白磁で見込み部分に蛇の目軸刺ぎが認められ16世紀後半のものと考えられる。7は、漳州窯系青花の可能性があり、残存部に興須の文様が無いので断定できない。8・9は備前系陶器で8は壺の底部、9は甕の口縁部である。

10～12は京都系土師器皿で、器壁の厚さから2期のものと考えられ、16世紀中葉に位置づけられる。また、10は口唇部にススが附着していることから灯明皿である。13は、在地系土師質土器の小皿で16世紀前半か。14は瓦質土器の蓋である。



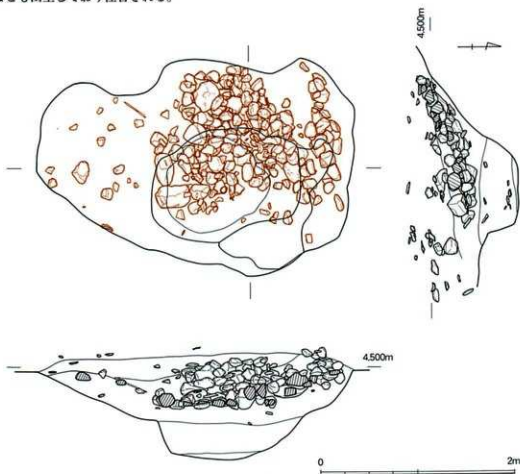
第443図 SK116 出土遺物実測図 (1/3)

SK118 (第444図)

16世紀後葉
～末葉

M34区に位置する土坑で長径3.3m、短径2.3mで、深さは、最も深いところで約0.7mの規模を有す。すぐ東側にSD087が通っており、両者の切り合い関係は土層観察よりSD087がSK118を切っていることが確認された。ただこの土坑SK118で出土する遺物は、16世紀後葉～末葉のものが主体を占めており、別項でも詳しく触れるが、SD087は16世紀後葉～末葉に掘られ、17世紀初頭に埋められた可能性が高く、したがって両者の構築時期はさほど時期差をもたないものと考えられる。

土坑内からは多量の礫に混じって、京都系土師器、備前系陶器の鉢鉢、瓦質土器等の生活遺物が出土しており、廃棄土坑と考えられる。また、出土する遺物の中には、備前系陶器の掛花入や翡翠軸の皿なども出土しており注目される。



第444図 SK118 実測図 (1/40)

SK118出土遺物 (第445・446図)

漳州窯系青
花皿

斜め掘り目

1は漳州窯系青花の皿で、内面に界線が2条巡る。2は中国産翡翠軸の皿である。3・4は中国産の白磁で、3は見込みに蛇の目軸刺しが認められ16世紀後葉の特徴を示している。5は陶器の碗であるが、見込みと高台端部に目跡が無く、外底部、高台内にも灰オリブ色の施軸をすることから、唐津の可能性は低い。6～8は備前系陶器であるが、6は掛花入の底部付近の破片である。7・8は鉢鉢で8は特に斜め掘り目が確認され、乗岡編年の近世1期に該当する。7については掘り部分の残存状況が良くなく詳細は不明であるが、口縁部端部が強くナデられて先細りをしており、口縁部文様帯の凹線も多条化している。こうした形態は8と共通しており、7についても近世1期の位置づけが可能であると考える。

9～29は京都系土師器である。この内9～28は皿、29は坏である。皿については、形態的に底部か

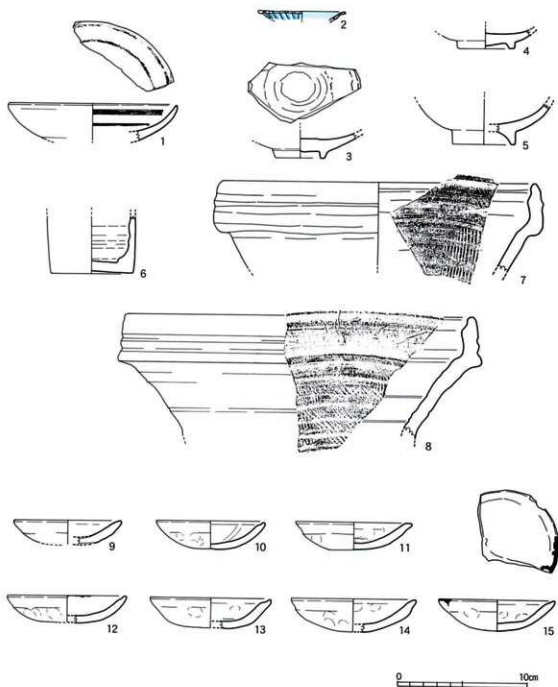
ら口縁部に向かって内湾気味に立ち上がるもの（9～17, 21）、口縁部下のナデが強く底部から外反気味に立ち上がっていくもの（18～20, 22～28）の2種が確認できる。図は法量の小さい順に示しているが、それから見限り内湾気味に立ち上がるものは法量の小さいものに多いことが判る。また、12、15については口唇部にススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと考えられる。

30は在地系土師質土器の皿で、底部から口縁にむけて外傾して立ち上がる形態のもので、中世大友府内町跡では16世紀代に顕著に見られる。

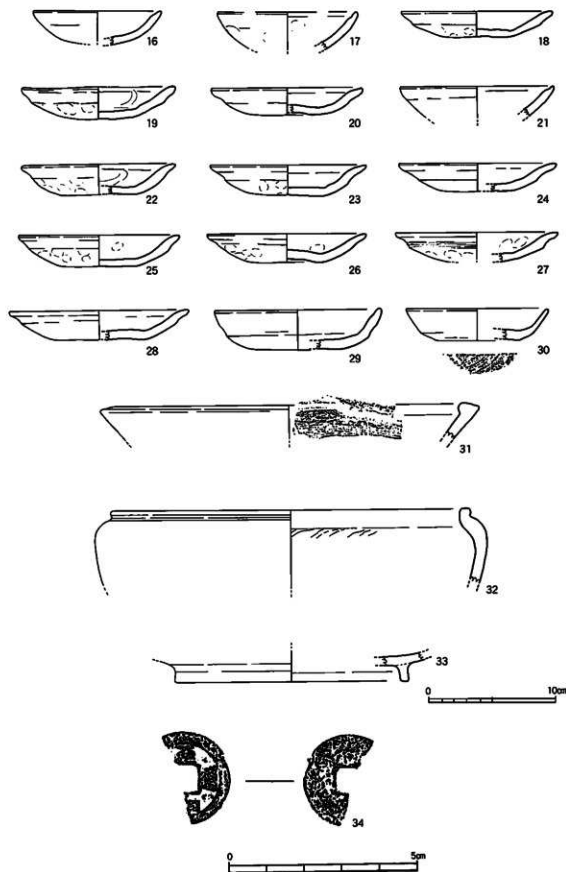
31～33は瓦質土器で、31は搦鉢、32は壺、33は鉢の底部である。

至和通寶

34は銅銭で、「至和通寶」である。初鑄造年は1054年である。



第445図 SK118 出土遺物実測図① (1/3)



第446図 SK118 出土遺物実測図② (1/3 ※錢貨のみ1/1)

SK119 (第447図)

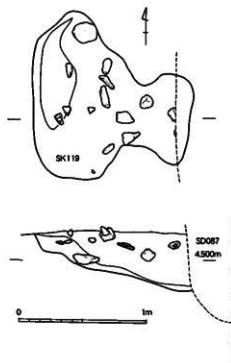
M35区に位置する土坑で、東側を溝 SD087
によって切られている。若干の礫と遺物が出
土している。出土遺物より、16世紀中葉～後
葉に位置づけられる。

SK119出土遺物 (第448図)

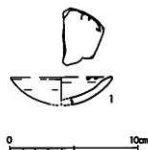
時期の判別できる遺物は、図示した1点の
みで、京都系土師器皿である。口唇部にスス
が付着しており、灯明皿である。

16世紀中葉
～後葉

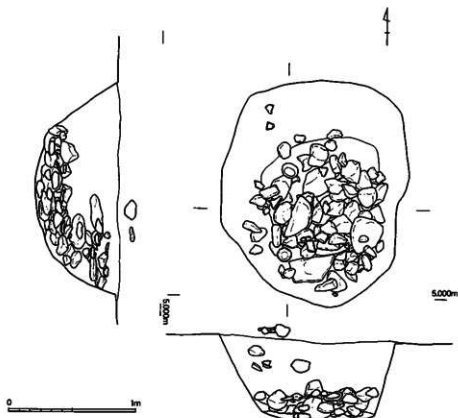
灯明皿



第447図 SK119 実測図 (1/30)



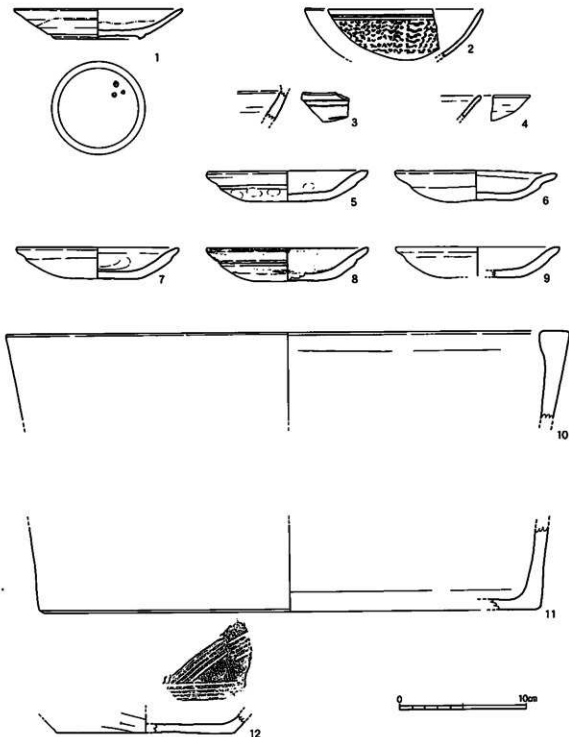
第448図 SK119 出土遺物実測図 (1/3)



第449図 SK120 実測図 (1/30)

SK120 (第449図)

L34区に位置する土坑で、長径1.8m、短径1.45mの楕円形プランを呈す。深さは0.7mで底面付近に礫が大量に廃棄されている。土坑内から出土する遺物は、京都系土師器皿や瓦質土器をはじめとする国産土器に加えて、中国産や朝鮮王朝産等の輸入陶磁器も見られる。出土する遺物の時期は、京都系土師器皿が3期のものが主体となっており、16世紀後葉～末葉に比定でき、共伴する輸入陶磁器も時期を大きく隔たるものではない。また、本土坑の南側には井戸 SE115や土坑 SK116等が隣接するが、両遺構とも16世紀末葉に比定されており、それらと大きく時間差をおかず廃棄をされたものと考えられる。



第450図 SK120 出土遺物実測図 (1/3)

SK120出土遺物 (第450図)

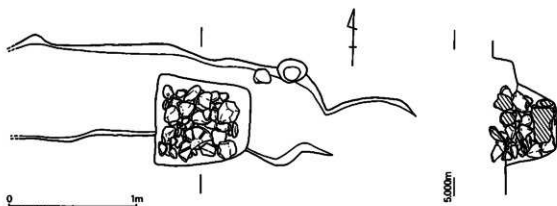
涼州窯系青
花飯

1は中国産の白磁皿で、底部裏に赤色の塗布が3点見られる。2は景德鎮窯系青花碗で、底部付近は欠損しているが、進子碗と思われる。3は涼州窯系青花で甗の一部と考えられる。4は朝鮮王朝産陶器碗の口縁部の破片である。

朝鮮王朝産
陶器

5～9は京師系土師器皿である。口径は12.4cm～12.8cmの間で、ほぼ同法量である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデもしっかりとしており、3期に位置づけられる。なお、8については、口縁部及び内面にススがかかり付着しており、灯明皿である。

10～12は、瓦質土器で10・11は火鉢、12は捕鉢である。



第451図 SK121 実測図 (1/30)

SK121 (第451図)

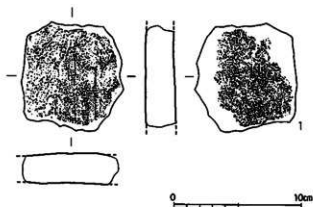
五輪塔の
部を据える

M34区に位置する土坑で、長辺0.74m、短辺0.66mの方形プランを呈し、深さは0.5mである。土坑内にはぎっしりと礫が埋められており、底面には五輪塔の一部と思われる凝灰岩が据えられている。礫と混ざって出土する遺物の中には瓦等も含まれており、方形のプランを持つ点、凝灰岩を底に敷く点等は、周囲に見られる土坑とは様相を異にしており、町屋に伴う他の遺構とは別の性格、あるいは時期を想定しておく必要がある。

SK121出土遺物 (第452図)

平瓦

平瓦の破片である。この瓦のみをもって、時期の認定をおこなうのは不可能であるが、16世紀代の周囲の土坑等から出土する遺物に瓦はほとんど含まれておらず、本調査区が町屋の裏手にあたる可能性が高いことを考えると、瓦の出土は不自然である。したがって、时期的には、16世紀以前を想定しておくのが無難であろう。



第452図 SK121 出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

SK136 (第453図)

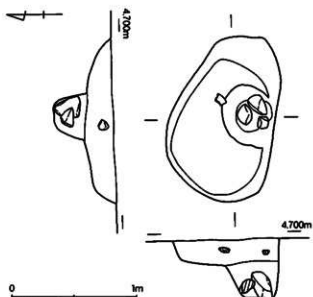
L34区に位置し、長径1.3m、短径0.84m、深さ0.5mの規模を持つ。最も深い部分に障が埋まっている。

SK136出土遺物 (第454図)

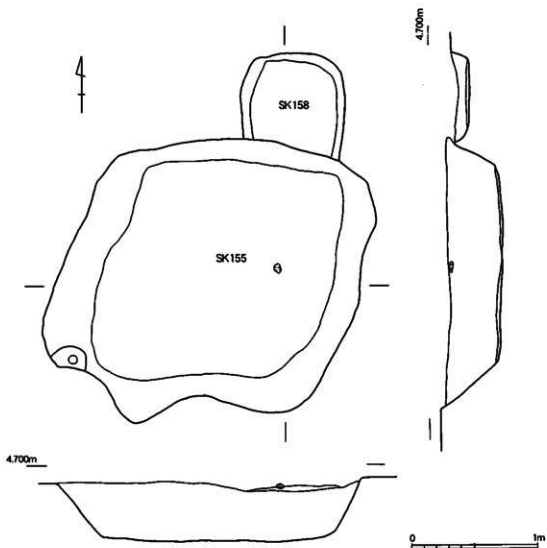
時期の認定ができる資料は、1の京都系土師器皿のみで、16世紀中葉～後葉に比定される。土坑の時期も該期のものと考えられる。



第454図 SK136 出土遺物実測図 (1/3)



第453図 SK136 実測図 (1/30)



第455図 SK155・SK158 実測図 (1/30)

SK155・SK158 (第455図)

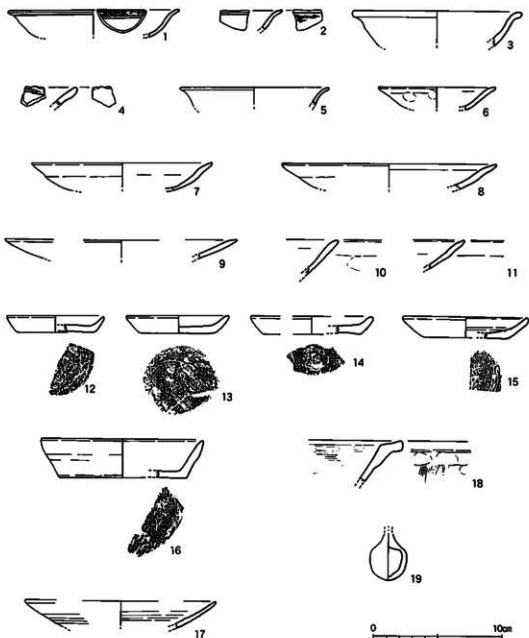
16世紀前半

2つの土坑が切り合っている。両者ともL35区に位置し、SK155は長辺2.4m、短辺1.8mの隅丸方形状を呈し、深さは0.45mである。SK158は長径0.8m、短径0.75m、深さ0.15mの規模を有す。両者はほぼ接するように位置しており、切り合い関係の詳細は不明である。またSK158から時期を確定できる資料も希薄で、両者の新旧関係までは言及できない。SK155については、京都系土師器皿が1期に比定され、在地系土師質土器がかなり共存することなどから16世紀前半に位置づけられる。

SK155 出土遺物 (第456図)

稜花皿

1・2は景徳鎮窯系青花皿で、両者とも口縁部が外反しており、小野編年のB群と考えられる。3は龍泉窯系青磁の碗、4は龍泉窯系青磁の稜花皿の口縁部である。5は中国産の白磁の口縁部で口縁部が端反っており、16世紀代の所産と考えられる。6～11は京都系土師器皿である。器壁がかなり薄く口縁部下のナデもさほど強く施されないなど、古い様相を呈しており1期に比定される。



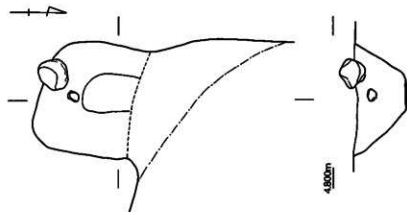
第456図 SK155 出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

12～16は在地系土師質土器で12～15が小皿、16は坏である。17は白の色調を呈する薄手の土師質土器である。

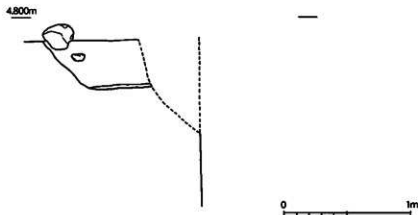
18は瓦質土器の鉢、19は土鈴である。

土鈴



SK157(第457図)
M34区に位置する土坑で、北側部分を井戸 SE115 に切られている。残存長径0.9m、短径0.75m、深さ0.4mの規模を有す。出土遺物から、16世紀中葉～後葉に位置づけられる。

16世紀中葉～後葉

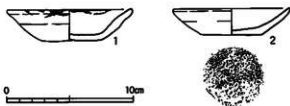


第457図 SK157 実測図 (1/30)

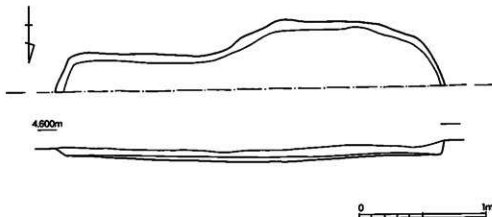
SK157出土遺物
(第458図)

1は、京都系土師器皿で口唇部にススが付着しており、灯明皿として使用されている。2は、在地系土師質土器の皿である。

灯明皿



第458図 SK157 出土遺物実測図 (1/3)



第459図 SK161 実測図 (1/30)

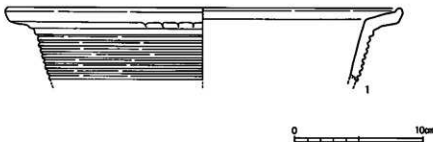
SK161 (第459図)

M34区に位置し、深さが0.12mと浅く広がる土坑である。土坑の北側部分は調査区外に及ぶものと考えられ、検出されている長径は3m、短径が0.5mである。遺物の出土も希薄で、時期の認定が困難である。

SK161 出土遺物

(第460図)

図示した土器は瓦質土器の鉢である。口縁部はくの字状に曲がって外に広がり口縁部下から胴部にかけて、沈線が多条走る。



第460図 SK161 出土遺物実測図 (1/3)

SK165 (第461図)

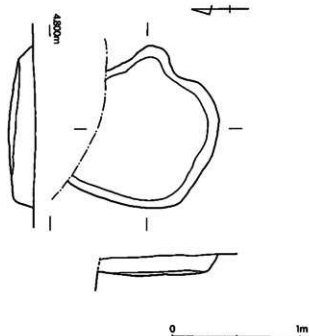
L34区に位置する土坑で、北側部分を井戸 SE108 に切られている。確認できる長径は1.2m、短径は0.9mで、深さは0.15mと浅い。

この土坑を切っている井戸 SE108 が16世紀末葉に位置づけられ、またこの土坑から出土する京都系土師器が1期～2期のものが中心となることから、本土坑の時期は16世紀中葉～後葉に比定される。

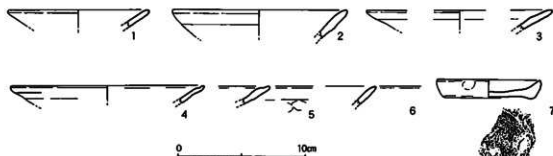
SK165出土遺物 (第462図)

1～6は京都系土師器皿で、器壁が薄く、ナデも強くないものが主体となっていることから1～2期に比定される。

7は在地系土師質土器の小皿である。



第461図 SK165 実測図 (1/30)



第462図 SK165 出土遺物実測図 (1/3)

京都系土師器
1～2期

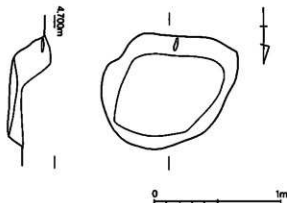
第2節 遺構と遺物

SK166 (第463図)

L34区に位置し、長径1.05m、短径0.9mの楕円形プランを呈する。深さは最も深い部分で0.33mあるが、北側半分は上部が削平されており、浅くなっている。

15世紀末～
16世紀前葉

出土する遺物の形態より、15世紀末葉～16世紀前葉の位置づけが可能である。



第463図 SK166 実測図 (1/30)

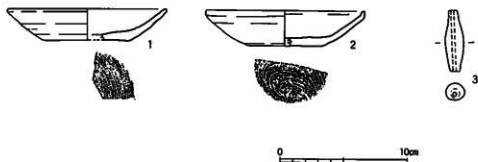
SK166出土遺物 (第464図)

在地系土師
質土器皿

1・2はロクロ目を顕著に残し、

赤褐色を呈する在地系土師質土器皿である。底部から口縁部に向けて、外に開くように立ち上がる。この形態の在地系土師質土器皿は、15世紀末葉から16世紀前葉に顕著に見られる。16世紀前葉においては、京都系土師器皿1期の形態のものと共存するが、本土坑からは京都系土師器の出土は見られないことから、16世紀前葉より若干古い可能性が考えられる。

3は、土師で中世の所産である。



第464図 SK166 出土遺物実測図 (1/3)

SK167・SK168・SP169 (第465図)

L34区に位置し、2つの土坑とピットが重なっている。SK167は長径1.14m、短径1.05mで円形に近い平面プランを有す。深さは0.57mである。SK168は長径2.3m、短径0.9mの長楕円形を呈し、深さは0.15mと浅い。SP169は直径0.18m、深さ0.34mである。3つの遺構の時期については、切り合い関係及び層位関係から見て、SK168が最も古いことが判る。SK167とSP169については切り合い関係は不明であるが、出土する遺物にさほど時期差は認められない。具体的な時期については、出土する遺物から判断する限り、SK167が16世紀中葉に、SK168は時期を確定しうる資料が少ないが、14世紀～15世紀代に、そしてSP169は、遺物の出土量が極めて希薄で確定的なことは言えないが、京都系土師器皿が出土している点から、16世紀中葉に位置づけることが可能である。

SK167出土遺物 (第466図)

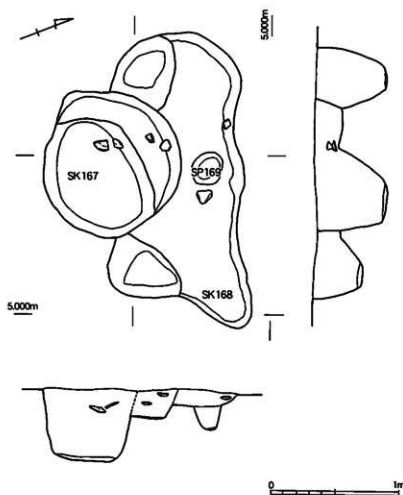
16世紀中葉

1は、中国製の白磁の口縁部である。2～4は京都系土師器皿である。器壁はさほど厚くないが口縁部下のナデは比較的しっかりしてきており、2期の古い段階に比定できる。5は須恵質土器である。

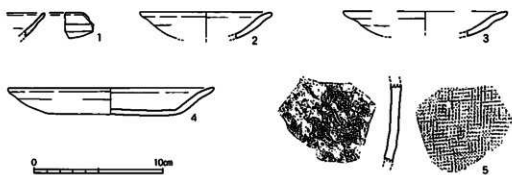
SK168出土遺物 (第467図)

14世紀～
15世紀代

1は、吉備系土師器碗の底部で、高台部がかなり退化している。2は瓦質土器の鉢、3～5は須恵質土器の甕か甗の胴部片である。

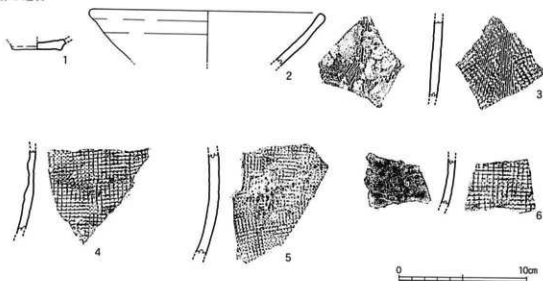


第465図 SK167・SK168・SP169 実測図 (1/30)



第466図 SK167 出土遺物実測図 (1/3)

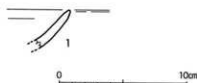
第2節 遺構と遺物



第467図 SK168 出土遺物実測図 (1/3)

SP169出土遺物 (第468図)

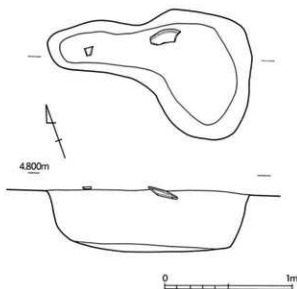
図示した遺物は、京都系土師器皿の口縁部である。
小破片で時期の認定は困難だが、ナデがさほど顕著でなく、16世紀中葉頃に比定できよう。



第468図 SP169 出土遺物実測図 (1/3)

SK170 (第469図)

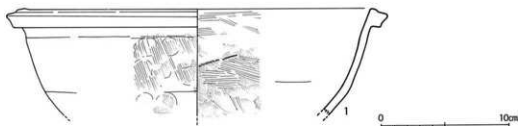
L34区に位置する不定形の土坑で、最も長いところで1.6mほどの幅を持ち、深さは0.48mである。土坑内より出土する土器の出土量はさほど多くなく、時期の認定が困難であるが、出土する瓦質土器等より、14世紀～15世紀代の形成を考慮しておきたい。



第469図 SK170 実測図 (1/30)

SK170出土遺物 (第470・471図)

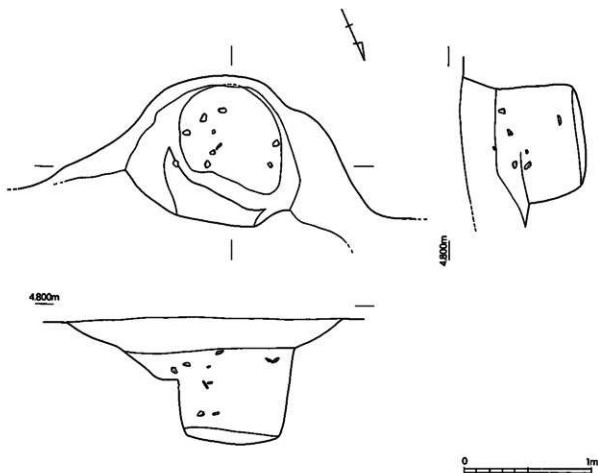
1は、瓦質土器の土鍋で口縁部が短く屈曲する。胴部には刷毛目が残る。2も、瓦質土器の土鍋で同じように口縁部が短く屈曲するが、色調が赤褐色を呈しており、在地の特徴的な様相を呈している。



第470図 SK170 出土遺物実測図① (1/3)



第471図 SK170 出土遺物実測図② (1/3)



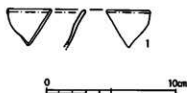
第472図 SK175 実測図 (1/30)

SK175 (第472図)

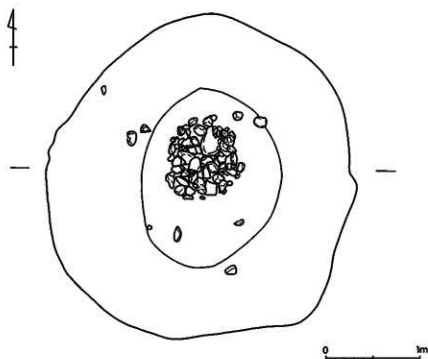
L34区に位置する土坑で、長径3m、短径1.2mの楕円形を呈し、深さは0.96mである。出土遺物も希薄で時期の認定が困難である。

SK175出土遺物 (第473図)

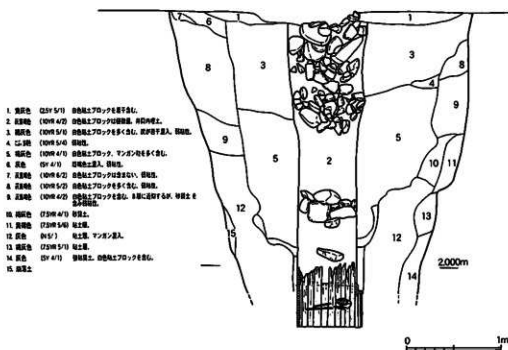
図示した遺物は、白磁の碗の口縁部でいわゆる口壳を呈す。14世紀代の所産と考えられる。



第473図 SK175 出土遺物実測図 (1/3)



第474図 SE084 実測図 (1/40)



第475図 SE084 土層断面図 (1/40)

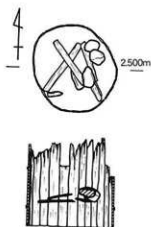
3. 井戸

SE084 (第474図)

直径約3.2mの円形状に掘りこまれている。深さは底面付近で水がかなり湧きだしたため明確にはつかめないが、約3mほどに達するものと思われる。最下部に設置された結桶の基底部の標高は1.85mであり、当時の湧水点もそれぐらいの標高であったと考えられる。



写真1 SE084 井筒検出状況



第476図 SE084 井筒実測図 (1/30)

結桶

検出された結桶は1つのみで、何段階まれているかは不明である。ただ土層断面に確認されるスタンプ等から数段上に積まれていたことは間違いないが、果たして上面までそれが達していたかどうかは確認できない。かなりの量の石が井筒内に入っていることを考えると、上部の方は石積みの構造であったことも想定されるが、土層断面を見る限り、井筒ラインはほぼ同じ幅で上まで達しており、石積みが崩落した痕跡及び、裏詰めラインも確認できないことから、恐らく上部の井戸枠付近まで結桶が積まれていたものと考えられる。確認されている結桶の高さは70cmほどであるので、単純計算上では4段ということになるが、井戸の上部付近は、この井戸を封じるために掘り返したと考えられるラインが土層で確認されており、それを勘案すれば4段以上が積まれていたとすべきであろう。

井筒内の大量の礫

このように結桶が上まで積まれていたという前提に立てば、井筒内に入っている大量の礫は、そもそも井戸に用いられていたものではなく、周囲の廃棄土坑で出土する礫と同様に屋根等に使用されたものであることが考えられる。ただ中には、屋根に使用したものとしては明らかに大きすぎるとも思われる礫もあり、そうしたものは井戸を封じるという主眼にたつて意図的に集めてきたものであろう。

当家中作法日記

検出された結桶は若干ひずんでいるが、直径約66cmで2尺程度である。樽板29枚を使用し、箍は残存していなかったが、土層に残ったスタンプより上下2本巡ることが確認された。樽板は一枚一枚がきれいにかなな等で加工され、どれもほぼ同規格である。大友氏の年中行事を記した「当家中作法日記」の中で、正月参賀に関する記述があるが、そこに「・・・諸職人之事。たくみ御作、桶結みつくり、ぬしみつくり、是ハ鍛冶番匠同前さいの内に参候、・・・」とある。正月参賀に訪れた者は、大友家当主と対面し祝詞を述べて遺物を献上し、それに対して当主は褒応もって迎え盃を与えたとされるが¹⁾、その正月参賀に訪れた職人の中に、結桶を専門とする者が存在したことが伺える。さらに参賀に大友家を訪れていることを考えると、ある程度の地位を確立していたことが想定される。他の井戸で検出される結桶について見てみると、規格的には大きなばらつきはなく、また製法上も差異はほとんどない。したがって井戸を作る際に、こうした結桶の専門職人達の手が借りられたことは想像に難くない。

次に、この井戸の時期について検証していくことにする。まず、湧水点まで地面を掘り、結桶を据えて井戸枠までを構築する段階の遺物(埋土内出土遺物)と、井戸使用時及び井戸廃絶期の遺物(井筒内出土遺物)を分けて取り上げたが(遺物観察表参照)、両者に型式的な側面から把握できる時期差は認められなかった。これはこの井戸が、作られてその機能を停止するまでに、さほど時間差が有しなかったことを示している。したがって図示する遺物も、埋土内出土遺物と井筒内出土遺物を特に分けて掲載した。

井戸内から出土した遺物は、京都系土師器皿、備前系陶器の播鉢、瓦質土器等の国産品に加え、景

註 (1) 大塚俊司「戦国期大友氏の年中行事と家臣団」(『大分県地方史』第186号 2002年)

徳鎮窯系青花や龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器などである。この内京都系土師器皿については型式的に若干時期の異なるものが混在しているものの、主体は3期の段階である。また備前系陶器の播鉢については、斜め描目を有するものが主体をなし、乗岡編年に示す近世1期の段階にあたる。また斜め描目が確認できない資料についても、その口縁部形態をみるといずれも口縁端部のナデが強く先細りとなり、口縁端部からやや下がった口縁部内には稜もしくは段を持つ形態をなしており、同時期の所産と考えられる。このように出土遺物から見る限り、この井戸の形成時及び廃絶期は16世紀の後葉から末葉にかけての期間が想定される。なお、出土遺物の構成や時期を見ると、北側に隣接する廃棄土坑SK098と非常によく似ている。したがってこの井戸（SE084）と廃棄土坑（SK098）は共存していた可能性がある。

また井戸の形態上からみると、草戸千軒遺跡で井戸の形態変遷が確認されているが⁽²⁾、それによれば、結植を重ねて構築される井戸は16世紀代によく見られる形態であり、前述の出土遺物の傾向と相応していることが判る。

- 土層断面 最後に土層断面で観察される最上部の層について少し触れておきたい。第475図で示す土層面の1層はよく見ると、井戸の肩を切って形成されていることが判る。これは井戸の廃絶行為を行う際に、一旦井桁等の上部構造を撤去するとともに、さらに周囲を掘りこんで礫を廃棄して井戸封じを行ったことを示している。このように井戸封じを行う際に、掘って礫を入れる行為は他にも類例が認められ、一つのパターンとして存在することが久世康博氏によって指摘されている⁽³⁾。この井戸SE084の土層に見られる現象は、こうした見解を追認するものと考えられる。
- 井戸封じ

SE084出土遺物（第493～495図）

- 1は景德鎮窯系青花の碗である。口縁部内外面に界線、胴部にも模様が描かれる。2は、龍泉窯系青磁の香炉と考えられる。3は同じく龍泉窯系の青磁であるが、掛花入の可能性はある。4は中国製の白磁の皿で、口縁部が外反する。5は焼締陶器の鉢である。
- 青磁掛花入

- 6～14は備前系陶器である。6は鉢で、胴部中に重ね焼きの痕跡が有る。7は掛花入の口縁部である。前述の青磁の掛花入と共に注目される遺物である。8～12は播鉢である。11・12は内面の描目が斜め描目であり、乗岡編年の近世1期に比定される。8・9については斜め描目が確認されないが、特に8は口縁端部のナデが強く先細りとなり、口縁部内に稜を持つ形態で11・12同様に近世1期に比定される。13は壺か甕の底部、14は甕の底部である。
- 備前系陶器掛花入

15～23は京都系土師器で15～22は皿、23は坏である。器壁が厚く、口縁部下のナデもしっかりとしたものが主体をなし、3期に比定される。22については、器壁が薄く古い要素を持っており混入したものと考えられる。また、15・16・18については、口唇部にススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと考えられる。

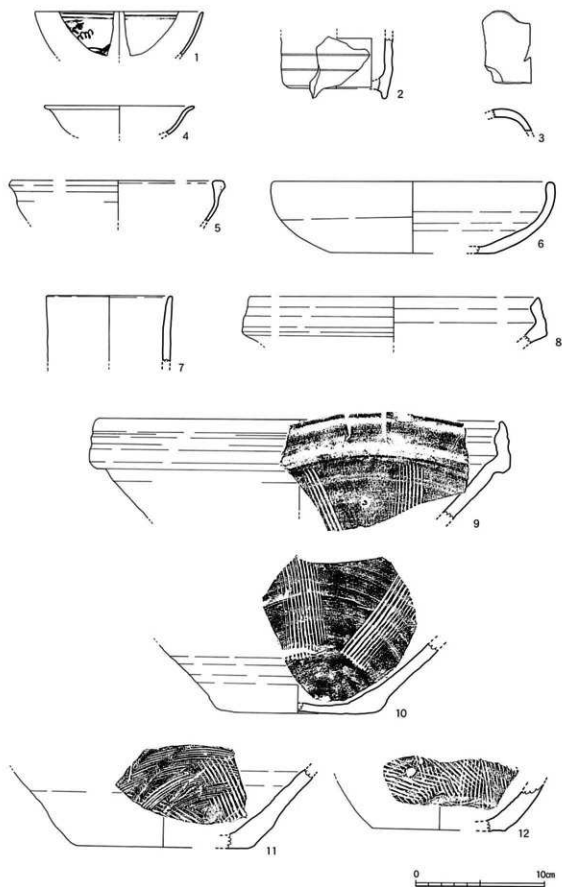
24・25は瓦質土器の鉢で、在地産のものと思われる。

- 皇宋通寶 26は銅銭である。一部欠損しているが書かれる文字は判読可能で、「皇宋通寶」である。北宋時代で、初鑄造年は1038年である。字体は真書である。

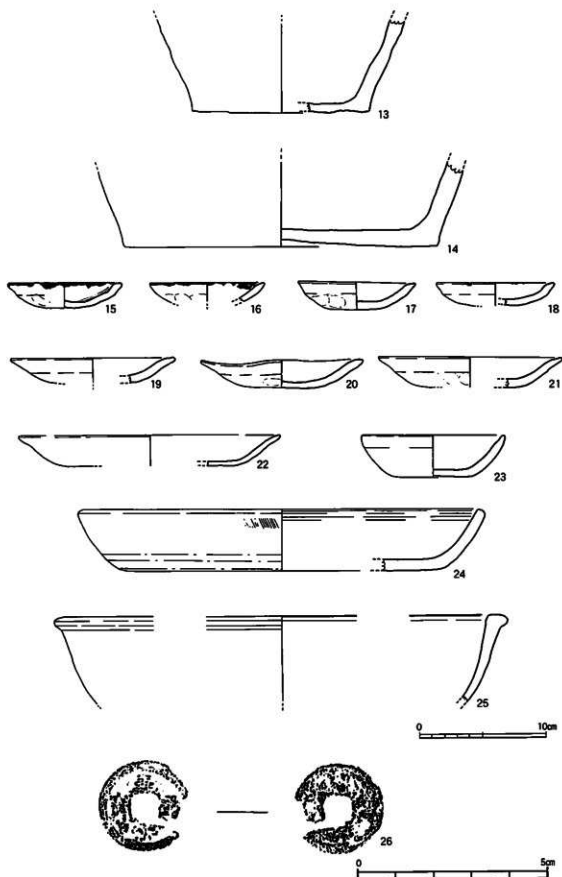
27・28は平瓦、29は丸瓦の破片である。30は埴である。本調査区の遺構の性格は、町屋（「御内町」）の裏手の状況を示していると考えられ、そうした観点から瓦の存在は不自然である。恐らく調査区南側に存在した万寿寺に関連するものであろう。

註 (2) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ－中世瀬戸内の集落遺跡－」（1996年）

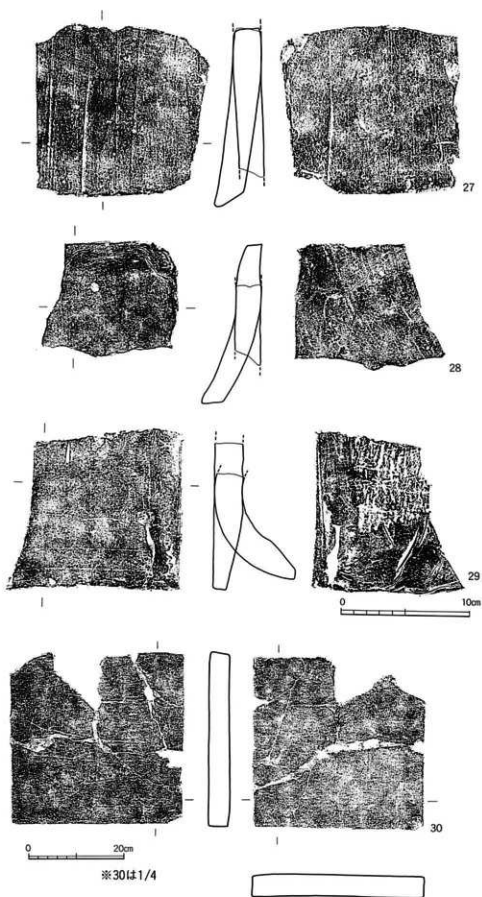
(3) 久世康博「井戸はどうして埋められたのか（石を入れる）」（『考古学論集』第5集 2001年）



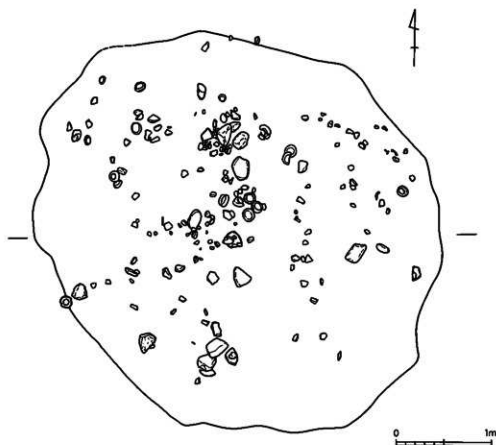
第477図 SE084 出土遺物実測図① (1/3)



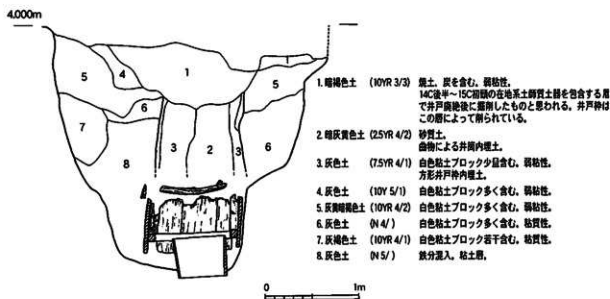
第478図 SE084 出土遺物実測図② (1/3 ※銭貨のみ1/1)



第479図 SE084 出土遺物実測図③ (1/3)



第480図 SE100 実測図 (1/40)



第481図 SE100 土層断面図 (1/40)

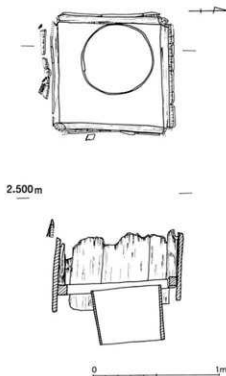
SE100 (第480図)

長径4.4m、短径3.7mの楕円形状の平面プランを持つが、この検出面より0.2mほど下がったところからは、直径約3mほどの円形に近いプランを呈す。第481図の土層断面図では、その0.2m下がった位置からの図示をしているが、それをみると標高3.2mほどのところで井筒のラインが上の土層に切られていることが判る。わずか0.2m程度の深さで平面規模が大きく異なるのは不自然であり、上の平面プランと下のプランとは別の遺構と解するべきであろう。ではその両者の遺構の関係についてはどうであろうか。出土する遺物を見る限り(遺物の詳細については後に詳述する)、両者の時期については大きな差が認められない。井戸が完全に埋没してしまった後に、さほど時間をおかずに廃棄土坑が掘られたという事も考えられるが、あまりに位置的に重複している点や、先に SE087 の項でも触れたが、井戸を封じる際に掘り返しを行う慣習が中世には見られること⁽⁴⁾などを勘案すると、この上の平面プランは、井戸 SE100 の井戸封じに伴う掘り返しによるものである可能性が高い。

次に井筒及び井筒の形態についてみていきたい。標高2.8mほどのところで、右の写真2のように方形の枠の痕跡及び、丸い輪郭の異なった土層が検出された。方形の枠と丸い輪郭の部分にはわずかに木質が残っており、それを残す形で掘り下げたのが写真3である。掘り残された部分の形を見る限り、方形の井戸枠の中に曲物が井筒として据えられている形態であることが分かる。後に詳しく触れるが、この下から「方形縦板組隔柱横棧型」⁽⁵⁾の井戸枠が検出され、さらにその内側に曲物が井筒として使用されていたことが確認された。したがって井筒の曲物は少なくとも2段以上は積み上げられていた可能性が高い。

さて、その最下部から検出された「方形縦板組隔柱横棧型」の井戸枠についてであるが、写真4が検出された際の状況である。これぐらいの標高(方形井戸枠の最下部は標高1.6m、井筒の曲物の最下部は標高約1.4m)に達すると、写真にあるように水が湧いてき始め、当時の湧水点でもあったと思われる。そうしたこともあり、この最下部の井戸枠と井筒に関しては非常に残りがよかった。

方形の井戸枠は、1辺が約1mのほぼ正方形をなす。枠を構成する板は1辺に3枚ずつ、計12枚の縦板が使用され(写真5)、内側には横棧が組まれる。横棧の構造をみると(写真6)細長い角材の



第482図 SE100 井戸枠実測図 (1/30)



写真2 方形枠検出状況



写真3 井戸枠・井筒痕跡

井戸封じに伴う掘り返し

方形縦板組隔柱横棧型

曲物の井筒

註 (4) 前掲註(3)に同じ

(5) 前掲註(2)の分類に基づく名称をそのまま使用した。

横棧の枘組

端部に枘穴を設け、一方の端部に作られた凸部が差し込まれる形で、棧が組まれていることが分かる。こうした形態の横棧の構造は、草戸千軒町遺跡でも確認されており、同道跡の分類によればC「包込み枘組み」とするものに該当する⁽⁶⁾。また、棧を組み合わせる枘穴とは別に、四隅上面に枘穴が設けられており、そこには隅柱が立てられていた。したがって前述のように草戸千軒町遺跡の分類用語を借りれば「方形縦板組隅柱横棧型」となる。

入れ子積み

次に井筒部分に使用された曲物についてみてみる。曲物は方形井戸枠の西側に寄った形で検出された。写真7にあるように一つの曲物が中程で上下に分けられ、上下の肥厚した部分が共に上に来るように入れ子状態で重ねて据えられていた。写真7はその重ねられた状況を、逆さまの状態にして復元している。前述のようにさらに上に曲物が積みあげられていた可能性が強く、この曲物より一回り径の小さいものが、また入れ子の状態で積みまわっていたものと考えられる。

在地系土師質土器

さて、この井戸の具体的な時期について検証したいと思う。まず井戸枠の構造であるが、草戸千軒町遺跡の出土例を見ると方形縦板組隅柱横棧型は13世紀中葉～14世紀初頭にかけて最も多く、14世紀中葉まで検出例が多いことが判っている。この井戸 SE100 から出土する遺物は、ロクロ成形による在地系土師質土器が大半を占めるが、それに竊瓦弁を有する龍泉窯の青磁や、口禿の白磁、常滑系陶器などが相伴しており、前述の草戸千軒町遺跡における方形縦板組隅柱横棧型の出現時期範囲と相応する。特に、在地系土師質土器については、底部から口縁部に向けて内湾気味、あるいは直向気味に立ち上がる形態のものが主体となり、本書1章の第3節編年によれば14世紀前葉に比定される。したがってこの井戸 SE100 の構築時期及び廃絶時期は14世紀前半代と考えたい。

14世紀前葉

竊瓦弁文

SE100出土遺物(第483～487図)

1～3は龍泉窯系青磁の碗で、いずれも逆弁がしっかりとしている。特に1・2については、筋が認められる。4は中国製の白磁皿で、口唇部が露胎しておりいわゆる口禿である。5は、中国製褐釉陶器である。6は常滑系陶器の壺か甕の口縁部である。口縁部帯下の突出部分がさほど長くなく、頸部にも接していないことから、14世紀前葉代と考えられる。

口禿の白磁
常滑系陶器

7～52は在地系土師質土器である。7～22は小皿、23～52は坏である。小皿は口縁部が短く外傾して立ちあがる。底部を極端に肥厚させるものはみあたらない。坏は底部から口縁部に向けて内湾気味、あるいは直向気味に立ち上がる。口径と底径の割合は、口径を底径で除した数値が約1.2～1.5のものが大半を占めており、したがってプロポーショナルには直立気味に立ち上がっている印象を受ける形態である。

砥石

53～58は瓦質土器で、53～57は鉢、58は鍋で、特に58は赤褐色を呈している。

59は瓦質製砥石で、スリ面は4面に及ぶ。60・61は土鍾である。

62～66は銅銭である。62は「元祐通寶」で北宋時代1086年の鑄造である。銘は行書である。63は「開元通寶」で唐時代621年の鑄造である。64は「皇宋通寶」で北宋時代1038年の鑄造で、行書で書かれている。65は「嘉祐元寶」で北宋時代1056年の鑄造である。66は銘の付着が激しく判読できなかった。



写真4 井戸枠・井筒



写真5 井戸枠部品

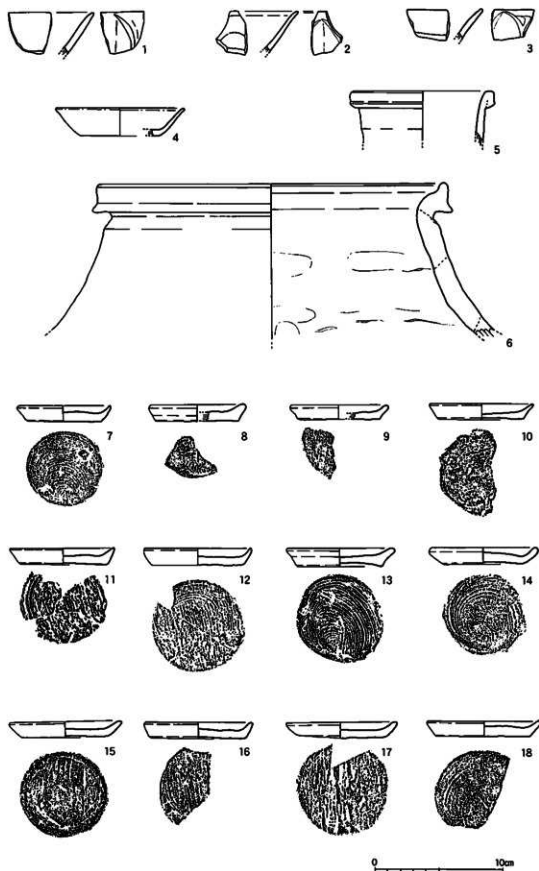


写真6 横棧構造

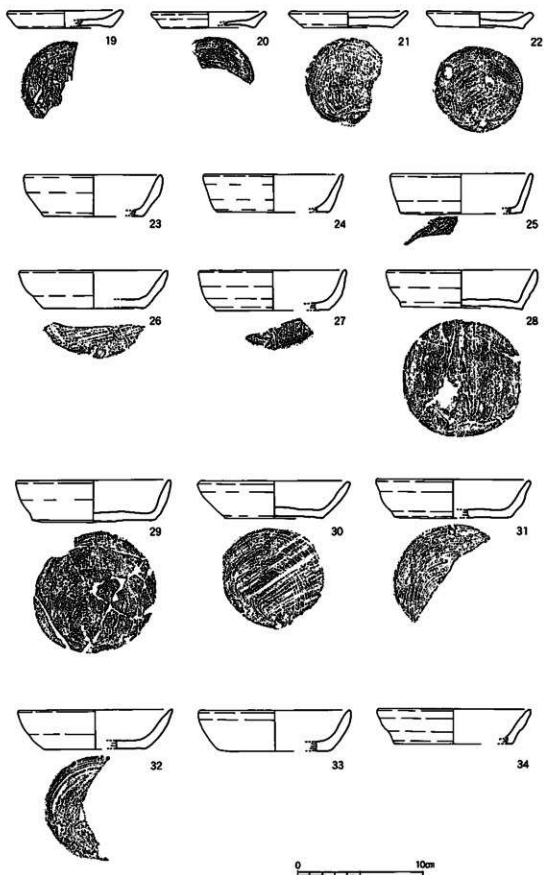


写真7 井筒曲物

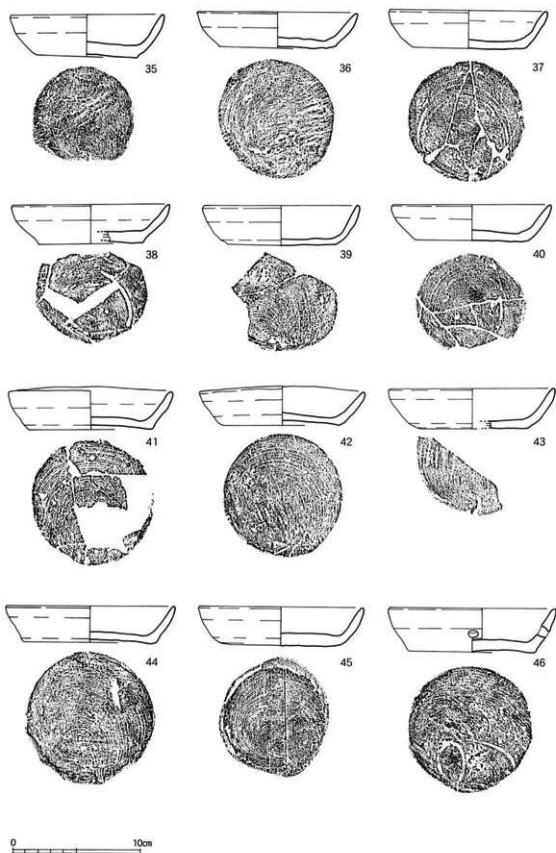
註 (6) 前掲註2)の報告書による分類に基づく。



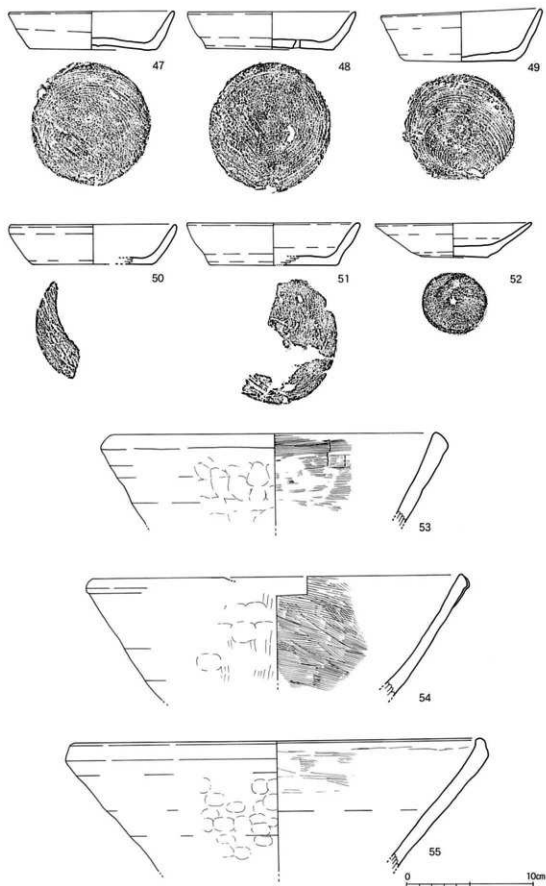
第483図 SE100 出土遺物実測図① (1/3)



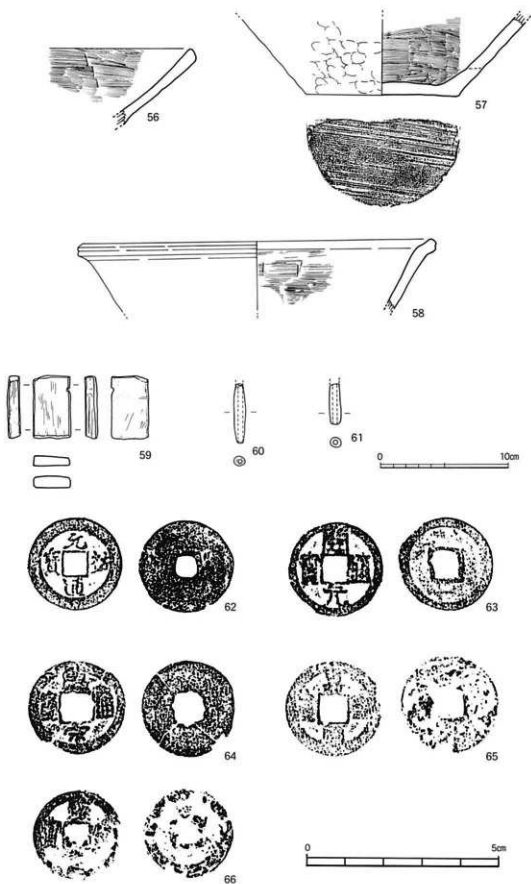
第484図 SE100 出土遺物実測図② (1/3)



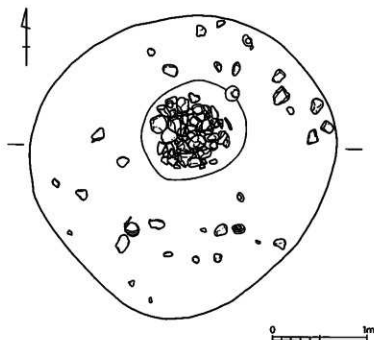
第485図 SE100 出土遺物実測図③ (1/3)



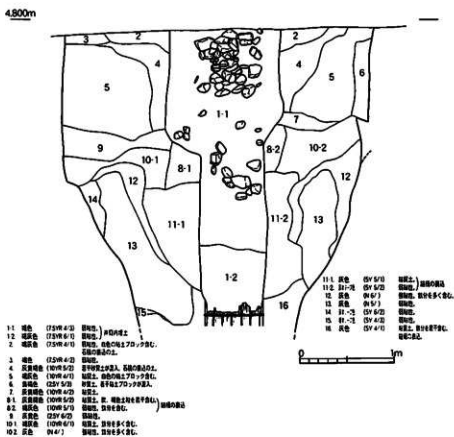
第486図 SE100 出土遺物実測図④ (1/3)



第487図 SE100 出土遺物実測図⑤ (1/3 ※銭貨のみは1/1)



第488図 SE108 実測図 (1/40)



第489図 SE108 土層断面図 (1/40)

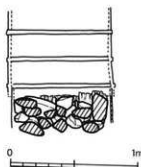
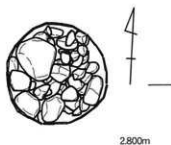
SE108 (第488図)

検出面の井戸掘形は、直径約3.3mのほぼ円形に近い形状をなす。深くなるにつれ、徐々に掘られる面積は狭まり、底面付近では直径約1.6mほどになる。検出面より3.2mほどの深さ(標高1.6m)のところで水が大量に湧き出たため、それ以下の詳細は把握できなかった。しかし、当時の湧水点も同じくらいであったと考えられ、ほぼこの深さのところで底面に達していると考えられる。

検出面では、中央部で円形に石が密集している状況が認められる(第488図)。その集石は第489図をみると下に落ち込んでいっている状況が認められ、井側の部分に落とされた石であることが判る。石は検出面より約2mほど下がったところまで密度が高く、それ以下希薄になる。そして第490図の井筒実測図に示すように、最下部付近でまた大量に認められる。井戸の底面で礫が多く見られる場合、いくつかの意図が認められる。例えば井筒や井側が沈降するのを防ぐために礫を敷き詰めたり、浄水を目的として礫を敷き詰める場合がある⁽⁷⁾。また、水溜がある場合はその上面まで、つまり水が溢出するのを防ぐように石を詰める場合もある⁽⁸⁾。この井戸SE108に関しては、最下部の井筒の下に礫は敷かれておらず、礫はすべて井筒内に収まっていることが確認された。したがって、SE108の井筒内に認められる大量の礫は、井筒の沈降を防ぐものでも、浄水のためでもなく、井戸を廃絶する際に井戸を封じる目的で投げ込まれたものと解される。

井側を形成するのは結桶である。湧水層から何段か結桶が積み上げられていたものと想定される。結桶本体は水分を含んだ最下層の中からは検出されず、最下部の一つがころうじて残存していた。ただ、写真8にあるように井筒内の埋土を除去すると、結桶のスタンプが土層には残っており、結桶が数段上まで積まれていたことが確認される。特に横方向の線が数条くっきりと残っており、箍が巻かれていたことが判る。ただ、結桶が積まれていたと判断されるのは標高3.4mほどまでで、それより上は径が大きくなっているのが判る(第489図)。そしてその部分を掘り下げると写真9のようになり、明らかにそれより下とは異なった掘形があることが判る。この掘形については二つの解釈が成り立つ。

一つは、井戸を廃絶する際に井戸枠を取り除く行為を伴うことがある。前述の草戸千軒町遺跡では井戸枠の取り除き方で3形態があることが指摘されているが⁽⁹⁾、その中で井戸枠の上部を抜き取る形態とされているものに該当する可能性がある。もう一つは、この径の大きくなった部分から上は、結桶積みとは異なった形態の井戸枠が存在した可能性である。具体的には、草戸千軒町遺跡で検出されたSE4120(第491図参照)のような形態で、上部は石積であったことが想定される。そうした場合、井側上部で確認された多量の石は、この石積構造部の石が崩落、あるいは再廃棄された可能性がある。



第490図 SE108
井筒実測図 (1/30)



写真 8



写真 9

井筒内の大量の礫

井戸封じ

結桶

井戸枠の除去

註 (7)前掲註2)による。

(8)前掲註3)による。

(9)前掲註2)による。

第2節 遺構と遺物

上部石積
構造

現段階ではこの二つの形態のいずれかは決しがたいが、上部の掘込ラインが比較的直立していることを勘案すると、後者の石積の形態であった可能性が高いのではないかと考える。

16世紀末葉

廃絶時期については、漳州窯系青花、大窯第4段階の瀬戸美濃系陶器の折縁皿、京都系土師器3期等の出土から16世紀末葉に比定される。

SE108埋土内出土遺物（第492図）

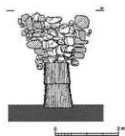
1・2は漳州窯系青花で、1は皿、2は碗である。3は龍泉窯系青磁皿で高台に胎土目のような痕跡がある。4～10は京都系土師器で、4～6は皿、7～10は坏である。いずれも器壁が厚く3期に比定される。11・12は瓦質土器で、11は鉢、12は羽釜である。

SE108井筒内出土遺物（第493図）

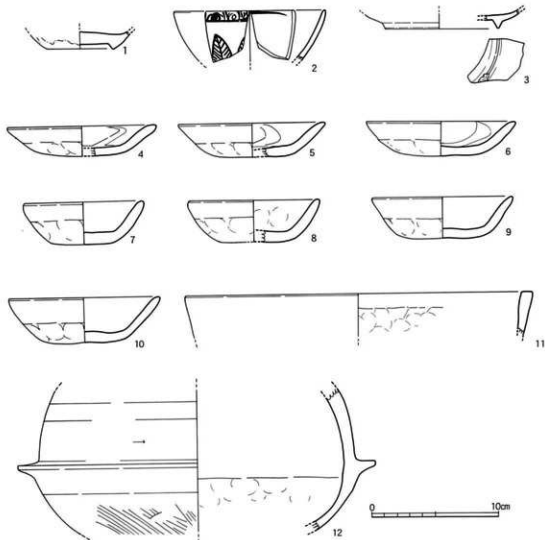
瀬戸美濃系
陶器折縁皿

1は景德鎮窯系青花皿、2は漳州窯系青花碗、3は景德鎮窯系青花碗である。4は龍泉窯系青磁、5～7は中国製の白磁である。8・9は磁器、10は瀬戸美濃系陶器の折縁皿である。11は備前系陶器の甕、12・13は備前系陶器の壺である。14は京都系土師器皿である。

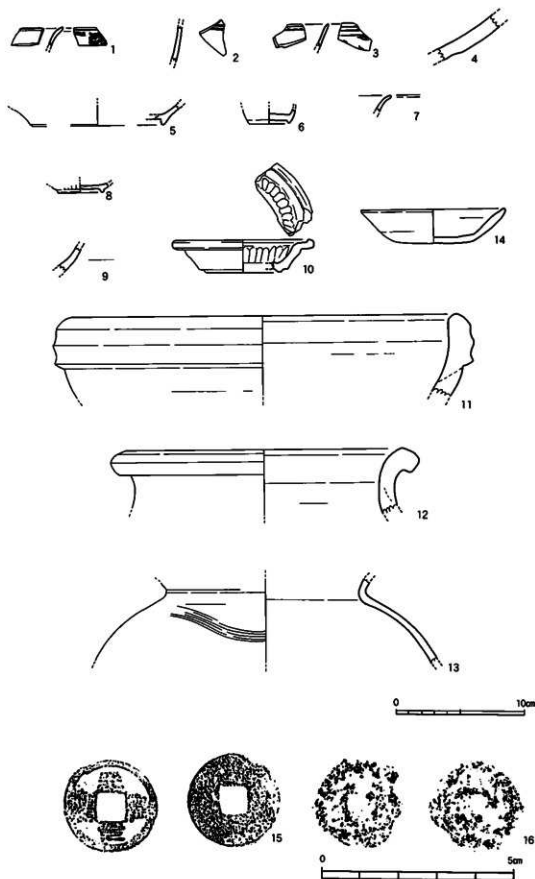
15・16は銅銭で、15は「天聖元寶」、北宋時代1023年初鑄造である。16は錆が付着し不明である。



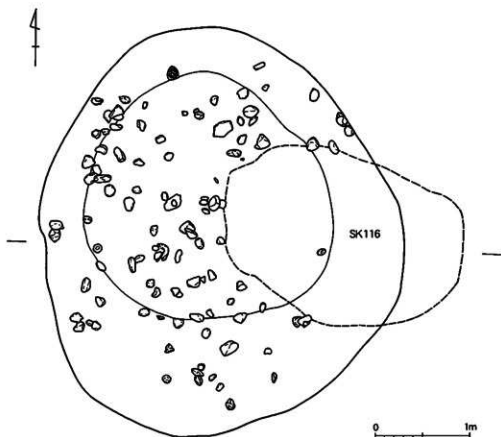
第491図 参考資料
草戸千軒町遺跡 SE4120



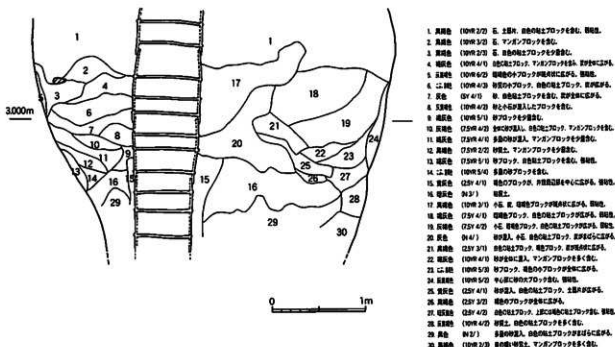
第492図 SE108 埋土内出土遺物実測図（1/3）



第493図 SE108 井筒内出土遺物実測図 (1/3 ※錢貨のみ1/1)



第494図 SE115・SE117 実測図 (1/40)



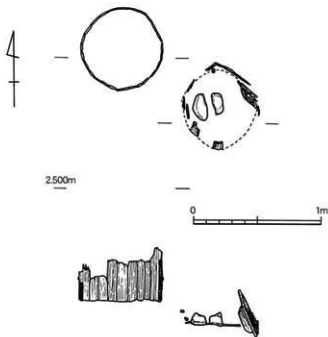
第495図 SE115・SE117 土層断面図 (1/40)

SE115・SE117 (第494図)

検出面においては、長径4.3m、短径3.8mの楕円形井戸掘形を呈す。深くなるにつれ、掘形の面積は狭小となり、底面付近では直径2.5mほどとなる。井戸の底面付近では、水が湧き出し明確に底面はつかめなかったが、湧水層が当時とさほど変わらないとすれば、標高1.3~1.6m付近が底部となるものと考えられる。

写真10からも分かるように、井戸の検出面では、掘形全体に礫が散在しているものの、井側に使用された結桶のラインがはっきりと確認されており、井戸廃絶期に井戸枠の抜き取りが行われなかった可能性が高い。

井戸枠として使用された結桶本体が確認されたのは、最下層から検出されたもの(第496図・写真11)の



第496図 SE115 井筒実測図 (1/30)

みで、それからは写真12にあるように籬も確認された。注目すべきは最下層2基の結桶が並んで検出された点である。掘り下げる過程において、北側の結桶はスタンプ等から最下部から最上部まで連続と積み上げられていたことが判明している。しかし南側のものについては、その上部において結桶が積み上げられていた痕跡が確認されていない。したがって、2つの時期の異なる井戸が存在し、古い方の井戸は大きく掘り返された結果、最下部の結桶の一部のみしか残存しなかったものと考えられる。古い方の井戸に共存すると考えられる遺物の出土は確認できず、SE115及び井筒内に該当するSE117から出土する遺物を見ると、16世紀末葉に掘り返され、廃絶されたものと考えられる。

SE115・SE117出土遺物 (第497図)

SE115は埋土内・SE117は井筒内の出土遺物をさすが、両者の時期の隔たりを確認できる資料はない。1・2は景徳鎮窯系青花で、1は皿で見込みに山水人物像、高台内には「洪武年造」銘が見られ、小野編年のB群と考えられる。2は、蓮子碗と考えられる。3~14は京都系土師器で14のみが坏で、他はすべて皿である。このうち3・4・6・9・12・13については口唇部にススの付着が認められ、灯明皿である。15は在地系土師質土器、16・17は瓦質土器の描鉢である。

18は銅銭であるが、錆の付着が激しく銘等の詳細な部分については不明である。



写真10 井筒検出状況



写真11 結桶検出状況



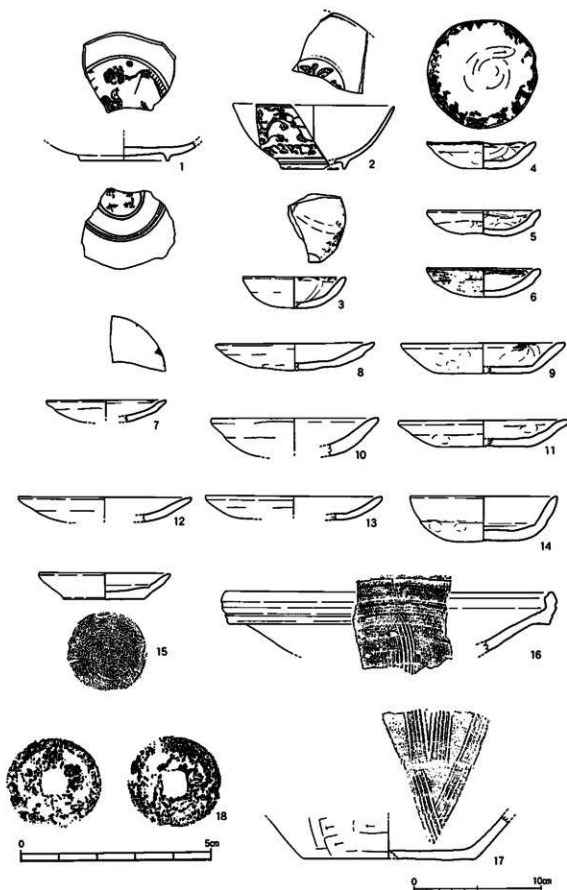
写真12 籬検出状況

結桶積み

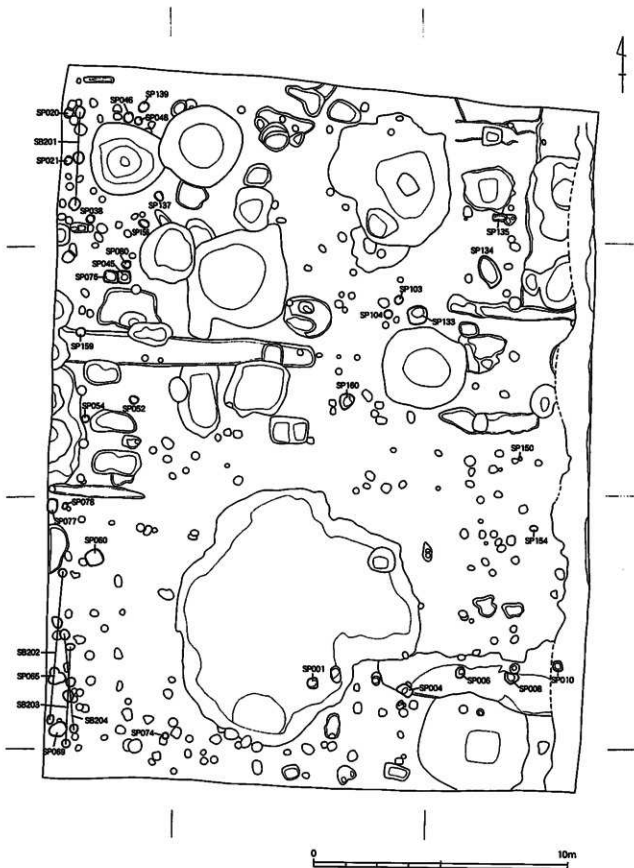
籬

2基の井戸

景徳鎮窯系
B群青花皿



第497図 SE115・SE117 出土遺物実測図 (1/3 ※銭貨のみ1/1)

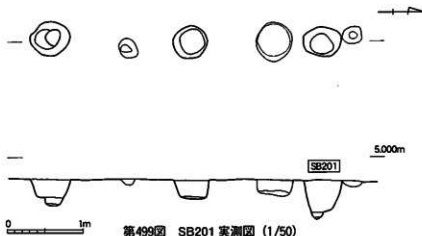


第498図 掘立柱建物跡・ビット分布図 (1/150)

第2節 遺構と遺物

4. 掘立柱建物跡（第498図）

軸性・柱間 調査区の西側部分（K34～K36区）で検出された柱穴群は、第498図に示しているように並びそうなのものが確認されている。これらの柱穴はいずれも、南北方向の1列しか認められないため、これらの柱穴が掘立柱建物と断定はできない。しかし、本調査区の西側には大友館正面を南北に通る街路（第2南北街路）が延びてきており、それに面するように建物が建っていた可能性は十分あり得る。また、本調査区で検出される遺構は、廃棄土坑や井戸などが中心となっており、町屋の裏手の状況を示している。したがって、調査区の西側隅で並ぶ柱穴群は、さらに西側に展開する掘立柱建物の東端が検出されていることが想定される。以下、個別に見ていくが、第498図からも分かるように、柱穴群の並ぶ方向にも、幾方向かの軸性が認められ、柱間についても差異が確認される。したがってそれぞれの建物には、設計プランの相違、あるいは時期差が存在するものと思われる。



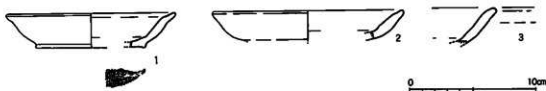
第499図 SB201 実測図 (1/50)

SB201（第499図）

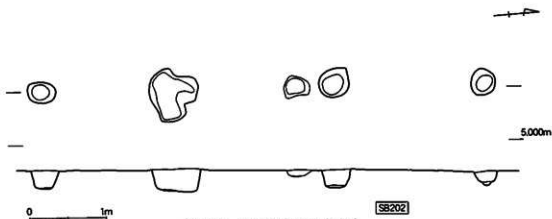
K34区に位置する柱穴群で、3基の柱穴の並びが確認されている。また、それぞれの柱穴からは柱痕も確認されている。3基の柱穴の柱間は、すべてほぼ190cmで6尺3寸に相当する。建物の軸はN-4'-Eで、SB202とはほぼ同方向の軸線上にのるため、併存していた可能性がある。しかし柱間においては、SB202が6尺5寸と異なっており、これが単なる建物の規格上の相違なのか、あるいは時間差の相違なのかもう少しデータの蓄積を待ってからでないとと言及できない。

SB201出土遺物（第500図）

1・2は、京都系土師器に近い胎土を持ち、器形も京都系土師器に近い形態をなすが、ロクロ成形を施す・群である。本調査区では、16世紀後葉にしばしば見られる・群で、京都系土師器と在地系土師質土器の折衷した形態として捉えられる。3は、京都系土師器の口縁部で、埴地幅年の2期に該当すると考えられる。



第500図 SB201 出土遺物実測図 (1/3)



第501図 SB202 実測図 (1/50)

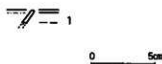
SB202 (第501図)

K36区に位置する柱穴群で、4基の柱穴の並びが確認され、柱痕も確認されている。柱間はいずれも196cm前後で6尺5寸である。軸線はN-4°-Eで、前述のようにSB201とほぼ同方向に並んでいる。出土遺物は13世紀後半～14世紀代の口禿の白磁が出土しているが、建物自体はその時期というよりは、むしろ方位の規格性を考えて16世紀の所産と考えたい。

SB202出土遺物 (第502図)

SP065から1点出土している。1は、中国製白磁の碗の口縁部で、口唇部は露胎となるいわゆる口禿である。13世紀後半～14世紀代のものと思われる。

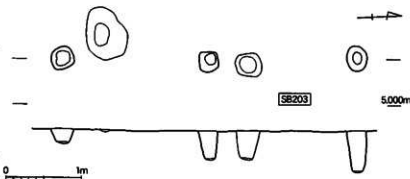
SB202の柱穴からは、この資料の他に時期の認定ができる遺物の出土は見られず、これのみでSB202は13世紀後半～14世紀代の建物とはできない。



第502図 SB202 出土遺物実測図 (1/3)

SB203 (第503図)

K36区に位置する柱穴群で、SB202のすぐ東側に隣接して並ぶ。柱間はSB202と同じ6尺5寸であるが、方位がN-3°-Eと若干異なり、また近接しすぎている点などから、時期が異なるものと考えられる。

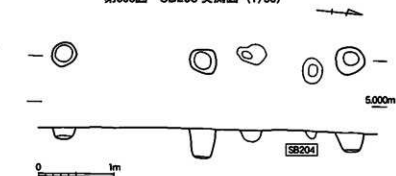


第503図 SB203 実測図 (1/50)

SB204 (第504図)

K36区に位置する柱穴群で、SB203と交差して並ぶ。柱間は180cmで6尺である。

また方位もN-5°-Eと、他の建物とは大きく異なっており、時期が他の建物の群より大きく時期が異なる可能性がある。



第504図 SB204 実測図 (1/50)

5. ビット (第505図～第508図 遺物の個別説明は遺物観察表を参照)

SP001



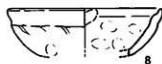
SP004



SP005



SP008



SP010



SP020



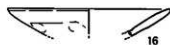
SP021



SP038



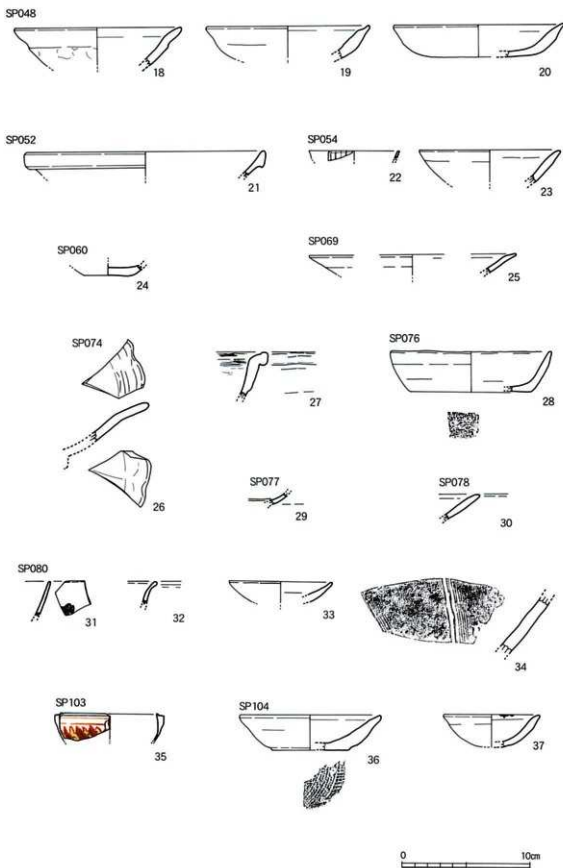
SP045



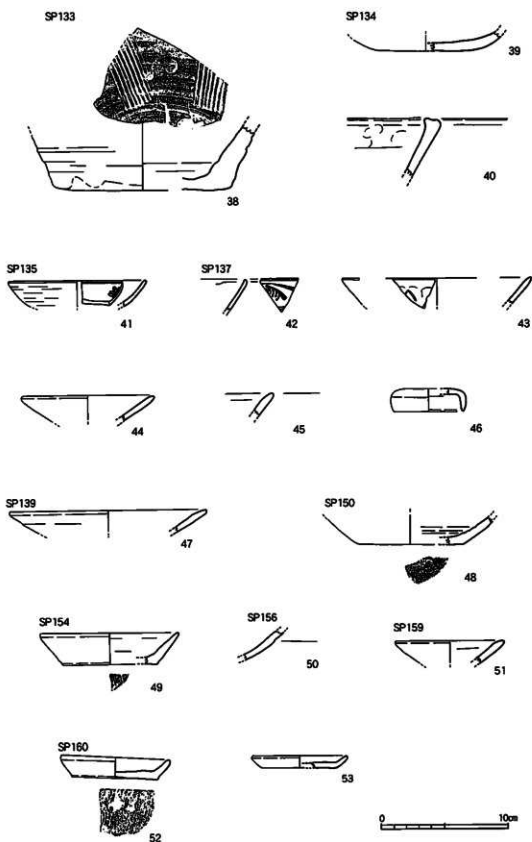
SP046



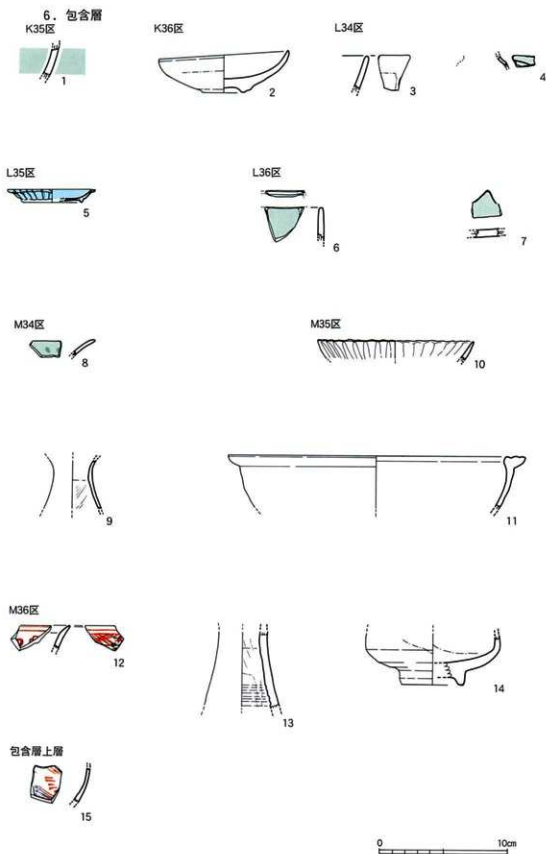
第506図 ビット出土遺物実測図① (1/3)



第506図 ビット出土遺物実測図② (1/3)



第507図 ビット出土遺物実測図③ (1/3)



第508図 包含層出土遺物実測図 (1/3)

第3節 小結

本調査区で確認された遺構は、掘立柱建物、土坑、井戸、溝等であるが、掘立柱建物と考えられる柱穴群は1列のみであるが調査区西側隅に南北に並んでいる。特にSB201とSB202についてはその軸線がN-4°-E方向を向いており、これは調査区西側を走る第2南北街路（大友氏館の正面を南北に通る街路）とはほぼ同じ方位を示している。したがって、SB201とSB202は調査区からさらに西側に展開して建物を構成し、第2南北街路に面していたものと想定される。そして何らかの区画を呈すると思われる溝SD087は、調査区の東隅を南北に延びており、ちょうどその柱穴群と溝の間に挟まれるように、すべての土坑と井戸は確認されている。したがって第21次調査区は、第2南北街路と東側南北溝に挟まれた町屋の裏手の状況を示していることが判る。

町屋の裏手

では、この町屋とはどこに該当するのだろうか。現段階でこの町屋の名称を具体的に証明する資料は全く出土していないが、近世に大友の城下町を描いた「府内古図」がいくつか残っており、それに依拠して、ある程度町屋の確定が可能である。これまでにこの「府内古図」をもとに、主に地籍図との比較検証から各町屋の位置関係が復元されている¹⁾。それにもとづけば、本調査区は万寿寺のすぐ北側に隣接する「御内町」、もしくは「堀之口町」に比定される。さらにまだ未報告ではあるが、第21次調査区のすぐ南側では、万寿寺の北限と解される巨大な堀が確認されており、そうした状況を勘案すれば、本調査区が「御内町」もしくは「堀之口町」のいずれかに比定されることは異論のないところであろう。

府内古図

では、「御内町」と「堀之口町」のいずれに比定できるのであろうか。先に述べたように第21次調査区で確認された町屋構造は、基本的に調査区西側を通る第2南北街路に向かって形成されている。「府内古図」を見る限りでは、「御内町」と「堀之口町」がどのような方向性をもって存在していたかは判断できかねるが、ただ万寿寺の北限の堀が確認されていることを考えると、「堀之口町」はその名称からして万寿寺の堀を意識して成立している町屋である可能性が高い。したがって万寿寺ではなく第2南北街路を意識して成立している本調査区の町屋は、「御内町」に比定するのが妥当であろう。

御内町

ただここで注意しておかなければならないのは、すべての遺構が併存しているわけではない点である。これまで整理してきた所見によれば、本調査区においては、大きく14世紀代を主体とする遺構群と、16世紀代を主体とする遺構群が存在することが判っている。そこでもう一度ここで遺構の併存関係を整理しておきたいと思う。第509図に各時期における遺構の分布状況を示すが、それからみてとれる本調査区の性格を考察していきたいと思う。

14世紀前葉
～15世紀前葉方形縦板組
隅柱横梁型

万寿寺創建

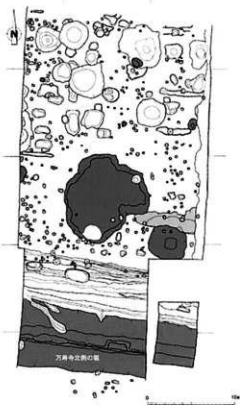
まず、14世紀前葉から15世紀前葉における状況をみると、基本的に調査区南側に遺構が集中していることが判る。本調査区の南側には、前述のように万寿寺が存在しており、それとの位置的関連性が高いことが取られる。特に調査区南端で検出された井戸SE100は、「方形縦板組隅柱横梁型」の形態を有しており、このような木組横梁型や隅柱型は身分階層の高さを示す傾向があるとされている²⁾。そうするとある程度の身分を持った人物が、生活居住空間を万寿寺近隣に構築した様相が窺える。またこの井戸の廃絶時期は、出土する遺物及び井戸枠の構造から14世紀前半であると考えられる。万寿寺創建は記録上、徳治元年（1306年）とされていることから、この井戸は万寿寺創建当初に存在していたことになる。したがって、万寿寺創建当初から少なくとも15世紀前葉ぐらいまでは、第2南北街路を意識した町屋構造ではなく、万寿寺に意識を持った町屋、あるいは屋敷地が展開していた可能性がある。

16世紀前葉

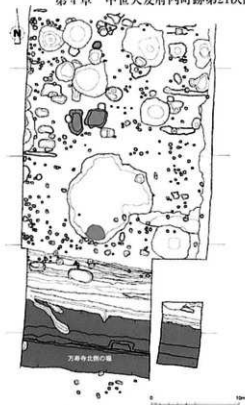
次に16世紀前葉の状況についてみていきたい。第509図の変遷図を見ると、前段階の14世紀前葉から15

註 (1) 大分市史編纂委員会「地籍図に残る戦国時代の府内・戦国時代の府内復元想定図」（『大分市史』中巻1987年）

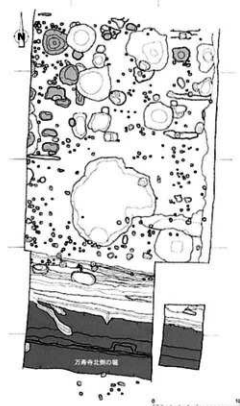
(2) 小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』（2001年）



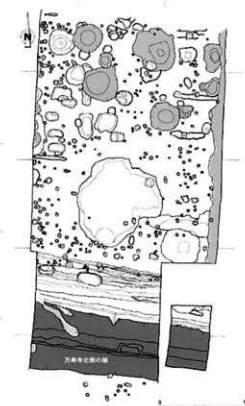
14世紀前半～15世紀前半



16世紀前半



16世紀中葉～後葉



16世紀後半～末葉

第509図 時期ごとの遺構分布変遷図

世紀前葉とは異なって、調査区西側を中心に遺構が分布していることが看取される。しかし遺構の数が希薄であり、町屋の方向性までは言及しかねる。この16世紀前葉は、主に大友義隆治世の段階に該当する。

16世紀中葉
～後葉

16世紀中葉～後葉は主に大友宗麟治世から大友義統治世の段階である。第509図を見ると、前段階に比べ遺構の数も増え、調査区西側に密集して分布している状況が看取される。そして検出される遺構はそのほとんどが廃棄土坑であり、西側に向かって形成された町屋の裏手の状況を示している。とここで本調査区の西側には、府内古岡及び他の調査区の調査所見から、南北に走る大きな道路（第2南北街路）の存在が想定されている。第2南北街路は、本調査区の町屋の方向性と成立状況から見る限り、この16世紀中葉～後葉段階のどこかで成立したものと考えられる。

16世紀末葉

最後に16世紀後葉～末葉段階であるが、具体的には主に大友義統治世の段階である。第509図の変遷図を見ると、前段階に西側に偏っていた遺構の分布は、調査区全面に広がっていることがわかる。その遺構の主体はやはり井戸や廃棄土坑などが主体となる。さらに東隅には南北に延びる溝があり、その位置関係から考えれば、この町屋はこれ以上東側には展開せず、西側にその中心をおくものと想定される。そうするとこの段階の町屋は、前段階と同様に西側に通る第2南北街路に向かって形成され、調査区ではその裏手が検出されていることになる。ただ前段階と大きく異なる点は、町屋の裏境が東側にずれている点である。前段階の16世紀中葉～後葉段階では、町屋の裏手を画していた具体的なものは確認されていないが、調査区東半分ではほとんど遺構が認められないことを考えると、調査区中央ぐらいで町屋の一つの単位は終わっていた可能性が高い。それがこの16世紀末葉では東隅に南北溝が存在することから、明らかにその位置を東側にずらしていったことが看取される。

これについては、町屋そのものが東に移動したとする場合と、東側に拡張したとする場合の二通りの解釈が想定される。まず、東に移動したとした場合、西側の第2南北街路も移動しているということが前提としなければならない。まだ正式報告はなされていないが、すでにこれまで第2南北街路にかかる部分で、発掘調査が数カ所行われており、その所見の中で第2南北街路が東側に移動、もしくは拡張したというものはみられない。大友氏館前の調査所見では第2南北街路は、町屋が張り出してきて逆に西側に縮小されている。そうした所見にもとづけば、町屋そのものが東に移動したというよりは、むしろ町屋の張り出し等の行為に伴って、東隅にも町屋が拡張したと考えるのが無難であろう。検出された遺構を見ても、この16世紀末葉では大きな堀込を伴う井戸が多く、また廃棄土坑自体もその規模が前段階に比べると大きいものが存在する。このような遺構の規模拡大と、町屋の面積の拡大は相応しているといえる。なお、東隅を流れる溝は17世紀初頭まで存続しているが、町屋自身については、17世紀初頭段階の遺構が他に全く見られないことから、その存続を証明しようがない。町屋の存続の有無に大きな影響を及ぼした天正十四年（1586年）の島津侵攻については、本調査区では、それに伴う焼土がほとんど確認されていない。これは町屋の裏手であったがために消失するものがほとんどなかったことに起因すると考えられる。したがって、町屋の焼亡の有無には言及できないが、新府内城下町に移転していない御内町は住民がいなかったとする木村氏の見解もあり⁽³⁾、それを追認する現象であるといえる。

新府内城下
町への移転

以上まとめると、14世紀前葉～15世紀前葉は万寿寺を意識した町屋構造が存在し、16世紀中葉～後葉に至って第2南北街路を意識した町屋構造が確立、16世紀後葉～末葉ではその町屋構造が拡張していくといった変遷過程が想定される。

註 (3) 木村幾多郎「豊後府内城下町移転と旧府内町」（『大分・大友土器研究会論集』2001年）
木村幾多郎「府内と府内古岡」（『南筑都市・豊後府内』2001年）

第5章 自然科学的分析

大分市元町・錦町中世大友府内町跡出土の金属製品、ガラス玉の分析

川本耕三（財団法人 元興寺文化財研究所 研究員）

1. はじめに

大分県教育庁埋蔵文化財センターより依頼のあった大分市元町・錦町中世大友府内町跡出土の金属製品、ガラス玉の分析を行った。

2. 資料とその分析内容

☆ 金属製品5点：元素分析、エックス線透過試験

No.1 メダイ、No.2 メダイ様鉛製品、No.3 メダイ様鉛製品、No.4 メダイ様鉛製品、No.5 鉄砲玉（鉛玉）

☆ ガラス製品5点：元素分析

No.6 ガラス玉、No.7 ガラス玉、No.8 ガラス玉、No.9 ガラス玉、No.10 ガラス玉、

3. 使用機器

☆ エネルギー分散型ケイ光エックス線分析装置（XRF）（セイコーインスツルメンツ（株）製 SEA5230）

試料の微小領域にエックス線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光エックス線を検出することにより元素を同定する。エックス線管球はモリブデン（Mo）である。

☆ エックス線透過試験装置（XRT）（フィリップス社製 MG225）

エックス線が物質を透過し、その透過の程度が物質の密度により異なるという性質を利用して、対象物の内部構造などを非破壊的に調べる。

☆ 実体顕微鏡（ライカ社製 MZ16）

4. 方法

ケイ光エックス線分析装置による元素分析では、あらかじめ実体顕微鏡により資料の色や表面状態を観察して分析箇所を決定しておき、前処理せずにそのまま装置内に入れ資料表面を分析した。したがって、資料表面の汚れなどが分析結果に大きく影響を与えることは避けられない。測定は大気圧下で行い、 $\phi 1.8\text{mm}$ のコリメータを用いて、主成分が重金属である金属製品は45kVの管電圧で、軽元素中心のガラス玉は15kVの管電圧で300秒間測定した。

エックス線透過試験は、資料の内部構造や表面状態が明らかになるように幾通りか条件を変えて、Fuji X-Ray film Ix100と鉛増感紙LF0.03を用い、管電圧140～210kV、管電流0.2mAで行った。

5. 結果

ケイ光エックス線分析およびエックス線透過試験の結果を基に、独立行政法人 奈良文化財研究所 肥後隆保氏よりご教示をいただき、考察した。

No.1 メダイ

2箇所を元素分析し、何れからも主成分である鉛（Pb）の他に微量のスズ（Sn）、銅（Cu）、鉄（Fe）

を検出した。エックス線透過試験により人物と思しき像が観察できた。

No. 2 メダイ様鉛製品

1箇所を元素分析し、主成分である鉛の他に微量のスズ、銅、鉄を検出した。エックス線透過試験からは、ほぼ均一な材質であると考えられる。

No. 3 メダイ様鉛製品

1箇所を元素分析し、主成分である鉛の他に微量のスズ、銅、鉄を検出した。エックス線透過試験からは、ほぼ均一な材質であると考えられる。

No. 4 メダイ様鉛製品

2箇所を元素分析したところ、主成分は鉛である。スズの含有量がNo.1、2、3より多い。他に微量の銅、鉄を検出した。エックス線透過試験では表面の凹凸が確認できるのみであった。

No. 5 鉄砲玉（鉛玉）

元素分析により、表面部分と、表面が剥離した部分の2箇所からほぼ同じ分析結果を得た。主成分である鉛の他に微量の銅、鉄を検出した。エックス線透過試験からは、ほぼ均一な材質であると考えられる。

No. 6 ガラス玉

表面状態の異なる2箇所を元素分析し、双方からケイ素（Si）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、マンガン（Mn）、鉄、銅、鉛を検出した。

乳青白色でカリ石灰分の多いアルカリガラスをベースにし、濃い色と思われるガラスを用いたトンボ玉である。皺状に劣化した濃い色と思われるガラスの色は明確には識別できなかった。

No. 7 ガラス玉

元素分析により、ケイ素、カリウム、カルシウム、鉄、銅、鉛を検出した。

巻きガラスの手法で作られたアルカリガラスである。表面は劣化し白粉化している。青色成分の銅と黄色成分の鉄を含有し、緑系色を呈する。

No. 8 ガラス玉

元素分析により、ケイ素、カリウム、カルシウム、マンガン、鉄、銅、亜鉛（Zn）、鉛を検出した。

巻きガラスの手法で作られたアルカリガラスである。濃い緑色（銅、鉄）である。

No. 9 ガラス玉

元素分析により、ケイ素、カリウム、カルシウム、鉄、銅、亜鉛、鉛を検出した。

巻きガラスの手法で作られたアルカリガラスである。銅含有量が多く青色である。

No. 10 ガラス玉

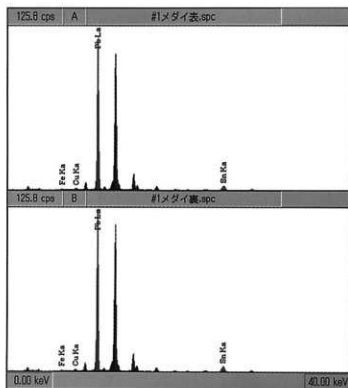
元素分析により、ケイ素、カリウム、カルシウム、鉄、銅、亜鉛、鉛を検出した。

巻きガラスの手法で作られたアルカリガラスである。玉が2個連なった連玉で、やや緑がかった青色である。

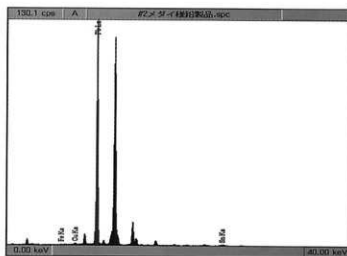
6. データ

6. 1. 元素分析

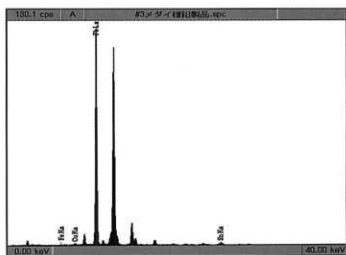
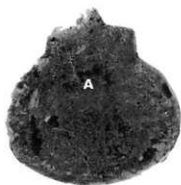
No. 1 メダイ



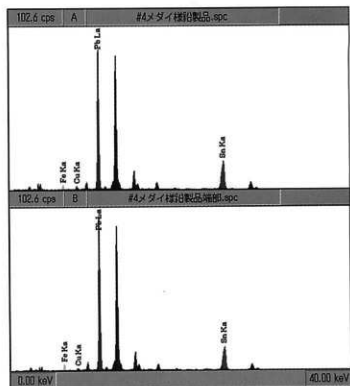
No. 2 メダイ様鉛製品



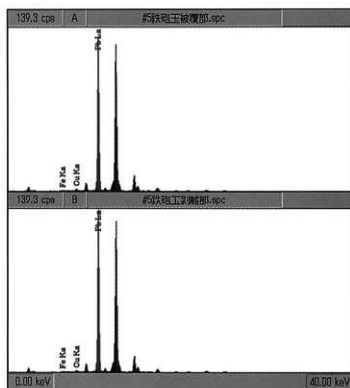
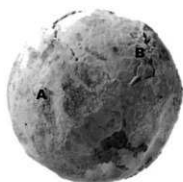
No. 3 メダイ様鉛製品



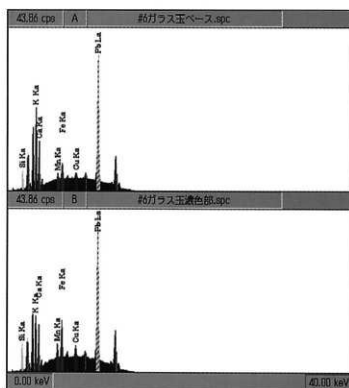
No. 4 メダイ様鉛製品



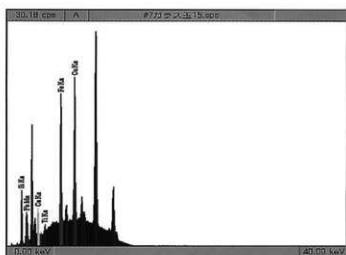
No. 5 鉄砲玉 (鉛玉)



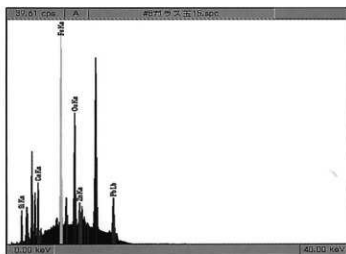
No. 6 ガラス玉



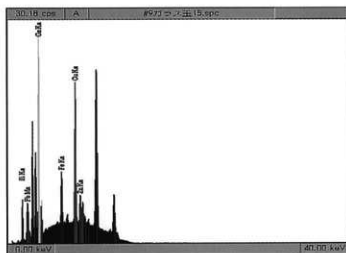
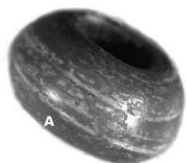
No. 7 ガラス玉



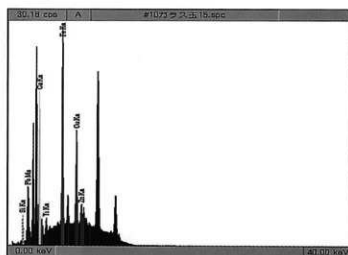
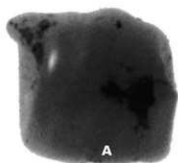
No. 8 ガラス玉



No. 9 ガラス玉

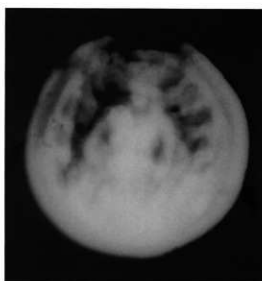
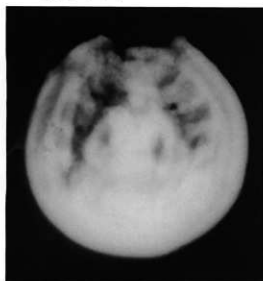


No.10 ガラス玉

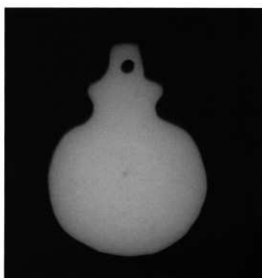


6. 2. エックス線透過試験

No. 1 メダイ



No. 2 メダイ様鉛製品



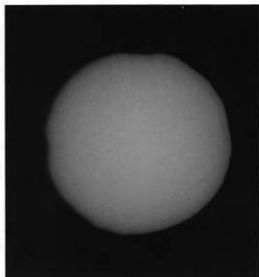
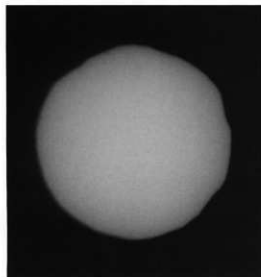
No. 3 メダイ様鉛製品



No. 4 メダイ様鉛製品



No. 5 鉄砲玉 (鉛玉)



第6章 総括

第1節 遺構について

国土交通省から委託された、一般国道10号古河府城幅事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査は、平成12年度から開始され、現在も継続している。その計画は県道大分臼杵線から南に約800mが予定され、現在の国道10号線を拡張し、J R11豊・豊肥線の渡線橋である万寿橋を解消することを目的としている。予定地を「府内古岡」復元案で見ると、北は大友氏館の東北部にある称名寺から、南は万寿寺の南側までにわたり、大友館の東側を通る街路（第2南北街路）に沿っている。

本書で報告した部分は、このうち、平成12～14年度にかけて発掘調査した第2南北街路と東の第1南北街路を結ぶ「御所小路」から南の「堀之口町」の街路までの間で、「府内古岡」に見る「御内町」・「堀之口町」にあたる。調査区名では府内町跡第9次調査区が「御所小路」を含む「御内町」、府内町跡第13次調査区が「御内町」、府内町跡第21次調査区が「御内町」と「堀之口町」にあたる。

発掘調査の結果、府内町跡第9次調査区では1期～4期とした4面にわたる生活面が検出され、2期とした16世紀前半には大塚溝や土取跡と推定される堀込みなど、町屋の生活痕とは異なる大型の遺構が見られる。しかし、それ以後の16世紀後半は、掘立柱建物、井戸や火災処理土坑など、町屋的景観が広がることが指摘されている。特に、「御所小路」は、3期とした16世紀中葉～後葉に、第1南北街路と直交する方向性で整備されたことが判明した。その形状は、北側に側溝を持ち、幅4～5mと推測され、北側側溝に沿って幅約2mの硬化面を持つが、第1・2の南北街路に見られるような版築状の土砂の積上げは一部にのみ観察されたにすぎなかった。こうした、16世紀中葉から後葉にかけての「御内町」の町屋化について、天正3～6年（1575～1578）頃に大友義統が発給したと推定されている文献資料もあり、町屋の変遷など、発掘調査成果と照合でき、注目される。

府内町跡第9次調査区と南側の府内町跡第13・21次調査区の間にはJ R11豊・豊肥線と金池下水道があり、約40mの調査不能部分があり、両者の遺構の連続性を考える上で障害となっている。しかし、府内町跡第13次調査区の東北隅では、東側の府内町跡第7次調査区との境にある堀を埋め立てるように人頭火～掌火の川原礫を積上げ、コーナーを形成した石積みを確認している。内部からは、京都系土師器をはじめとする土師質土器の皿や坏が埋め立て土砂に混入して多量に出土している。この石積みの南側の辺の方向性は「御所小路」とほぼ同じであり、同時期に構築された可能性が高い。

また、「御内町」の本体にあたる部分では、調査区の東端に沿って町割の区画と想定される溝が検出され、その内側から掘立柱を構成すると推測される柱穴、井戸や廃棄土坑が検出されている。その配置は、第2南北街路に近い部分に柱穴群、その東側に井戸や廃棄土坑が配置されていることがわかった。また、柱穴群には第1南北街路と方向性を同じくするグループと、第2南北街路と方向性を同じくするグループがあることが判明し、第2南北街路の裏手にあたる井戸や廃棄土坑を避けるように分布していることも判った。その結果、第2南北街路沿いを間口とし、掘立柱建物が建並び、その裏手に井戸や廃棄土坑（ゴミ穴）を設置する。さらにその裏手には町割の溝があるという構造になっていたことが想定できるようになった。

「府内」の「御内町」にあたる二つの調査区からは、キリスト教布教活動が活発だった16世紀後半を象徴するように、2種類のメダイが出土している。ひとつはペロニカと言われるもので、伝世品はあるものの、発掘資料としては最初のものであった。もうひとつは、形態的に類似するものが、「府内」で10数点出土しており、分析の結果、この地で作製された可能性が高いことが推測されている。

以上のように、「御所小路」と「万寿寺」間の発掘調査では、「御所小路」にあたる街路を確認、町屋の構造、キリシタンの活動など「府内」の実態の一部が明らかになり、大きな成果をあげることができた。

第2節 メダイおよびメダイ様金属製品について

第13次調査区でヴェロニカモチーフのメダイが1点、メダイ様金属製品が2点、第21次調査区でメダイ様金属製品が1点出土した（第510図参照）。ここではこれらの遺物について詳しくみていくことにする。

ボルトガル語

まず、メダイとは、もともとボルトガル語でメダルを意味する言葉が、日本で「メダイ」と発音されるようになったもので、円形もしくは楕円形のメダル状の形状をなす金属製品である。表裏にはイエス・キリストや聖母マリア、聖人、十字架等キリスト教に関係するものが刻まれ、ロザリオにつけるなどして身につけて、信仰の証とする。現段階では、表裏にはっきりとキリスト教関係の絵が刻まれたものは第13次調査区出土のもの（第510図2）のみであるが、金属の組成、形態等からメダイの範疇に入れうる資料が第21次調査区及び第13次調査区で計3点出土している。その論拠の詳細については後述するとして、まずは第13次調査区出土遺物についてみていきたい。

ヴェロニカモチーフのメダイ（第13次調査区出土）

VERONICA

第510図2は、直径約2cmのほぼ円形で、厚さ0.2cm、重さは2.0gである。上部が一部欠損しているが、この欠損部分に紐を通すための紐があったものと思われる。両面に図像が描かれており、一方の面には、キリストの顔が浮き彫りで描かれる。このキリストの描写の背景にヴェールのようなものが確認されることから、「ヴェロニカの御影」を描いたものと考えられる。ヴェロニカ（VERONICA）とは、キリストがゴルゴダの丘へ向かう途中に現れるシリアの架空の聖女で、vera icona（真実の画像）の人格化と考えられている⁽¹⁾。彼女がキリストの顔の血と汗をヴェールでぬぐったところ、そのヴェールにはキリストの顔が写し出されたという。このメダイに描かれているキリストの像は、まさにそのヴェールに写し出された像であり、キリスト教ではこれを「真の像」として位置づけている。また一方の面には、キリストを抱くマリアの像、いわゆる聖母子像が浮き彫りで描かれている。よく見ると、聖母マリアの下の方にはマントが描かれ、聖母子像の背面には光背が描かれているのがわかる。

聖母子像

博多遺跡群出土銅型

現在このようなヴェロニカをモチーフにしたメダイは、知りうるところで他に4点ほどしかない。1点は博多遺跡群で出土した銅型で（第511図）、長さ4.0cm、幅5.5cm、厚さ1.4cmの赤褐色粘土板で、左にメダイ、右に十字架が見える。よく見ると上部には、鎖か紐のあとまでが認められ、そのことからこれはメダイと十字架の製品を粘土に押し当てて作られた踏返し用のものと思われる。メダイの方は、よくみると中央に目鼻、上にイバラの冠、下にはヒゲが見える。さらに、顔の両側には布らしき線が見られ、これがヴェロニカのモチーフのものであることが分かる。紐は横方向穿孔のものがついている⁽²⁾。

天草

もう2点は、現在天草ロザリオ館に所蔵されているもので、当時水方だった系統の子孫が代々継承してきたものである⁽³⁾。写真13は一方の面にキリストの半身像がはっきり見え、もう一方の面にはキリストを抱きかかえているマリアの像が見える。紐を通す紐の部分は割れてなくなっている。写真14は、画像の残りは良くないが、表一方の面にやはりキリストの像が見える。ただ写真14の方は紐を通す部分が初めからなかったようである。両者とも、直径1.9cm前後の円形を呈す。

福岡県家伝資料

最後の1点は、神戸市立博物館所蔵のメダイで島原旧教徒より没収と伝えられている1点である。

⁽⁴⁾ 一方の面にはイバラの冠をかぶったキリスト、もう一方の面には聖母子像が描かれている（写真15）。

註 (1) 柳宗玄・中森義典編『キリスト教美術図典』（1994年）

(2) 福岡県教育委員会『博多85』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第711集 2002年）

(3) 天草ロザリオ館山下大恵氏のご教示による。

(4) 神戸市博物館の岡泰正氏より資料提供及びご教示を頂いた。

島原旧教徒より没収ということから、もともとは九州にあった可能性が高い。したがって現在のところこのヴェロニカモチーフのメダイはその主体の中心が九州にあることが判る。

これらの4点のメダイと第13次調査区出土メダイを比較してみると、まずキリストの像については、4点ともイバラの冠をかぶっているのに対して、第13次調査区のものはいバラの冠をかぶっていない。また後ろに描かれるヴェールについては、鋳型の資料については分りにくい、他の3点はいずれも単線で区画するだけの比較的簡素な描写であるのに対して、第13次調査区のものヴェールのしわまで描写されている。

次に聖母子像の面については、鋳型の資料はこの面がないので除外し、また天草の資料も写真14については摩滅してしまっていて全く見えないことから除外するとして、残る2点については、聖母マリアが向かって右側にたち、キリストを左に抱きかかえる点で共通している。それに対して第13次調査区のメダイは聖母マリアが向かって左側にたち、右側にキリストを抱きかかえている。

以上図像の比較から、まず伝島原旧教徒没収資料（写真15）と天草の資料（写真13・14）に関しては、両面において非常に酷似しており、ほぼ同形態のものであることは間違いない。またキリストの像については、天草の資料（写真13・14）と博多の鋳型もほぼ同じモチーフであり、これら4点はほぼ同形態のものであった可能性が高い。それに対して、第13次調査区の資料はキリストの像においても、また聖母子像においてもモチーフが若干異なり、現在確認されているヴェロニカモチーフのメダイの中では、特殊な形態であるといえる。

つづいて、メダイを下げるための紐の部分についてみていきたい。メダイの紐については、向かって横方向に穿孔が施される場合と、正面方向に穿孔が施される場合の2通りがある。ロザリオの先につけられたりする使用方法を考えると、横方向に穿孔された方がメダイ自身は正面を向くことになり機能的である。しかし、鋳型等を使用して大量生産を行おうとすれば、正面方向の穿孔にしておく方が製作上簡易である。事実1830年にフランスで大流行した（一説には1000万個が製作されたという⁵⁾）通称「不思議のメダイ」とよばれる形態は、現在東京国立博物館でも多数保管されているが、それらは皆正面方向の穿孔である⁶⁾。現在ヴェロニカモチーフのメダイで紐が確認されているのは、伝島原旧教徒没収資料と博多の鋳型のみである。両者とも横方向の穿孔である。特に博多の鋳型が横方向の穿孔であることから、当時オリジナルのヴェロニカモチーフのメダイは横方向の穿孔であったと考えられ、また踏返されたものも同形態であったと想定される。第13次調査区出土メダイは、紐の部分で欠損しておりその形状は不明だが、他の例から類推すれば横方向の穿孔が施されていた可能性がある。ところで、戦国時代ではヴェロニカのモチーフは、メダイの図柄としては稀なほうではなかったと思われる。そのことを示す資料として、当時の日本の状況を書き記したフロイス師の書簡（1576（77）年8月20日付）の中で次のような一節がある。

「…洗礼後は祈祷を覚えるに従って彼らに十字架や鋳製の影像を分け与え、また、キリシタンのためにコンタツを作らせるため都から掬物師を呼び寄せた。…」

この一節の中にある「鋳製の影像」の部分は、原語では「Veronicas de estanho」と綴られている⁷⁾。つまり、当時はヴェロニカをモチーフとしたメダイが積極的に分け与えられたことがうかがわれるのである。なお、この書簡に記す内容は、高山右近の父高山タリオに関するものである。そうすると、近畿地方でもこのヴェロニカモチーフのメダイは、かなり存在した可能性がある。

また、この書簡から得られる情報として注目すべき点は、ヴェロニカが「鋳製の影像」と表現され

註 (5) 竹下節子「聖母マリア」（1998年）

(6) 東京国立博物館編『東京国立博物館図録－キリシタン関係遺品編－』（2001年）

(7) 東京大学史料編纂室五野井隆史氏よりご教示頂いた。

ているところである。蛍光X線分析によると（第5章参照）、第13次調査区出土のヴェロニカモチーフのメダイは、鉛を主成分とするが、錫も含まれており、この記述と非常に符合しているのである。

さてここで問題となるのは、第13次調査区出土のヴェロニカモチーフのメダイは、国産なのか、西洋を含め海外産なのかという点である。前掲のプロイスの書簡では、はっきりと「コンタツを作らせる」と明記しているのに対し、メダイは「分け与え」たとしている。つまり文章上のみで解釈する限り、メダイは海外からもたらされたものを分け与えたのか、国内で生産したものを分け与えたのかは不明である。博多で出土した鋳型はオリジナルのものを踏返しているため、海外産のものと国内産のものが同時に存在していたことは間違いない。ただこのメダイを分け与えたのがダリオという日本人であることを考えると、海外産のものを豊富に持っていて分け与えたというよりは、豊富に作らせて所持していたと考えるのが無難ではなかろうか。

図様のバリ 現在メダイが国産かどうかという解釈については、次に示すような要素が揚げられている。一つは、博多の資料のように踏返しによって作られた場合で、そうした資料はメダイの図様にバリが付くかあるいは、縁辺部の加工が未熟となる。さらに踏返しを行ったために、描かれる図像の線がぼやけて明瞭な線が描き出されないといった傾向がある。もう一つは天草に貝殻で作られたメダイがあるが、そこに彫られている字にスベル間違いが生じている場合である。極めて稀なケースではあるが、図様のミスをしている資料が3点あるという⁽⁸⁾。もし西洋人が作ったとしたら複数点にまたがってミスをすることは考えにくいのである。最後の一つは、現在国内で保管されている資料は真鍮製が大半であるのに対して、国内産とされるものは鉛製が多いという点である。これは鉛の融点が低く、加工がしやすいといった性質に起因するものと考えられる。例えばメダイではないが、原城ではキリシタン達が鉛玉を加工して十字架を作っている⁽⁹⁾。また、真鍮製であるか、鉛製やピューター製であるかは、その色においてもかなり異なる。真鍮は銅を主として、亜鉛を30～40%程度混ぜた合金である。別名黄銅とも呼ばれるように、亜鉛の量に応じて金色ないし黄色を呈す。それに対して鉛製品やピューターは銀色を呈す。発掘調査によって出土する資料は、錆や腐食によって正確な色がつかぬが、真鍮製であるか、鉛製・ピューター製であるかによって、当時の輝きにおいてもかなり異なっていたはずである。

こうした点をふまえて、第13次調査区出土のヴェロニカモチーフのメダイを見てみると、真鍮製ではなく、若干錫が含まれるもののほとんどが鉛の製品であり、当時の輝きは銀色を呈していたと考えられる。次に、描かれる図像は、あまり明瞭なものではないが、踏返しの際に認められるバリは確認されない。図像の不明瞭さやバリが認められない点については、腐食等を伴う出土品がゆえであることも想定に入れておかなければならないであろう。以上から、第13次調査区出土メダイは、鉛製品という点に主眼をおけば国内産である可能性は十分考えられるが、具体的に踏返しを行ったものかどうかについては不明であると言わざるを得ない。明らかに西洋産とみなされるヴェロニカモチーフのメダイが確認されていない状況では、西洋産が真鍮製であったか、あるいは鉛製であったかも不明である。したがって現段階では国内産の可能性は指摘できるものの、それを積極的に肯定できる材料はないとしかいえない。

註 (8) 日本26聖人記念館結城了悟氏よりご教示いただいた。

(9) 長崎県南有馬町教育委員会「原城跡」(南有馬町文化財調査報告書第2集 1996年)

メダイ様金属製品について

まず第21次調査区で出土した資料(第510図1)についてみていきたい。大きさは、長径2.4cm、短径1.8cm、厚さ0.4cmで、上部には何か紐のようなものを通したと思われる穿孔が横方向に施されている。穿孔は両面穿孔である。一方の面には何かを嵌め込んだと思われる窪みがあり、また一方の面には線刻が見られる。金属の成分については、蛍光X線分析にかけたところ(第5章参照)鉛と錫を主成分とする合金であることが判明した。

次に第13次調査区出土資料の2点についてみるが、まず第510図3は、長径1.9cm、短径1.3cm、厚さ0.3cmで、紐を通したと思われる紐が正面方向から穿たれている。穿孔はやはり両面穿孔である。一方の面に十字のような線刻が見られるが、十字の縦の線が紐の部分にまで達しており、これが十字架を描いたのかどうかは不明である。金属の成分については、蛍光X線分析にかけたところ(第5章参照)鉛が主成分で錫を若干含むことが判明した。

もう1点の資料第510図4は、長径1.9cm、短径1.8cm、厚さ0.4cmで、紐を通したと思われる紐は横方向から穿たれている。表裏とも同像は描かれていない。金属の成分については、蛍光X線分析にかけたところ(第5章参照)やはり鉛が主成分で錫を若干含むことが判明した。

以上3点の内第13次調査区出土資料については、他の調査区でも類品が出土しており、特に第12次調査区(2005年度正式報告予定)ではそのすぐ周辺から分銅が多数出土していることから、当初は分銅の範疇としてとらえられてもいた。ところが第21次調査区で出土した資料によって、第13次調査区出土資料がメダイである可能性が出てきた。そこでまず、第21次調査区出土金属製品がメダイかどうかについて検証していくことにする。

まず、第21次調査区出土金属製品は上部に横方向の穿孔があるが、これについては紐等を通して使用したものと思われ、装飾品として用いられた可能性が高い。

次に、片面に見られる窪みであるが、これについては、二つの可能性が考えられる。一つ目は、その窪みに絵をガラスで埋め込んでいた可能性である。そうした例は17世紀のスペインの装飾品⁴⁹⁾や、天草に残るバジ(7号真16)などに見られる。もう一つの可能性は、聖竹箱である。聖竹箱は、聖人もしくは身近な人の遺骨を入れておくものである。しかし箱である以上、蓋がつくのが常例である。長崎県の築町遺跡での出土例があるが、やはり蓋がついている。

この2者のいずれの可能性が高いかということになるが、第21次調査区資料は、聖竹箱としては蓋も確認されておらず、更に遺骨を納めるには窪みが浅すぎる。したがって前者のように絵などの何かを埋め込んだとするのが妥当であろうと考える。

もう一方の面に彫られている線刻については判然としない。レントゲン撮影の結果も(第5章参照)、鉛が主成分のため透過性が悪く、明確には見えない。したがってクリーニングを行って肉眼で判断するしかないのが現状であるが、一つの可能性としてクルス瓦の瓦頭面等に彫られているギリシャ十字やリシャド⁵⁰⁾に類似した画像が考えられる⁴⁸⁾。しかし、あくまで可能性の一つにすぎない。

また、金属成分についてであるが、先にも記したように、鉛を主成分として錫を含む合金である点が重要な意味を持っている。鉛は銅とは違い重さが不変ではなく、柔らかく加工に適している。こうした性質は、計量に使用する分銅などには適さず、これが分銅でないことを示している。さらに、明らかにメダイと認定できるヴェロニカモチーフのメダイの主成分がやはり鉛と錫の合金である点から、ヴェロニカモチーフのメダイと同種の金属製品であることが考えられる。

最後に第21次調査区の資料が出土したのは溝SD087であるが、前項でも触れたように16世紀の後

註 49) 日本26聖人記念館結城了悟氏よりご教示いただいた。

48) 南有馬町「地下に眠る信仰のあかし」(2002年)

第2節 メダイおよびメダイ様金属製品について

16世紀末葉～17世紀初頭の早い段階 半でも末葉段階以降に掘られ、廃絶時期は17世紀初頭でも極めて早い段階である。これまで他県で出土しているメダイはそのほとんどが、16世紀末葉～17世紀初頭のもので、時期的にも符合している。

以上、整理すると、

- ①紐等を通す穴があり、装飾品の可能性が高い。
- ②主成分は鉛と錫で、分銅とは考えられない。
- ③鉛・錫が主成分のため、加工に適している。
- ④彫り込まれた同柄は、クルスの可能性がある。
- ⑤出土した溝は、他の出土遺物からみても、16世紀末葉～17世紀初頭に位置づけられる。
- ⑥このような形は中世において他に類例がない。

等の理由から、さらに、本道跡がキリシタン大名大友宗麟の城下町であることを勘案すると、第21次調査区の資料は、メダイと認定して差し支えないと考える。

さて、第21次調査区出土資料がメダイであるという前提に立ち、第13次調査区出土資料(第510図3・4)を見てみると、両者とも穿孔の方向は違うものの、上部に穿孔をもち装飾品である可能性は高い。次に、形態的には円形部の上に段を作ってその上に穿孔部を施すという点においては、第21次調査区資料と同形態の範疇に入れうる。また第510図4は両面とも無文であるが、第510図3は一方の面に十字のような線刻が認められる。そして、重要な点は両者とも金属組成が鉛を主成分としているところである。以上の要素を総括すると、第13次調査区の2点の資料は、第21次調査区資料と同形態、同種のものであることが判る。前述のように第21次調査区出土資料がメダイであるという前提に立てば、これらの資料もメダイの範疇に入れることが可能であるといえる。

ところでこれらの資料がすべてメダイであるとしたら、どこで製作されたものなのかという点が問題となってくる。現在までにこうした形態のメダイは、国内産のものにも海外産のものにも確認されていない。しかしながら、前項のヴェロニカモチーフのメダイでも触れたが、現段階で国内産とされているものは、鉛を主成分としているものが主体である。その観点から考えれば、これらの資料は国内産であることが考えられる。しかしながら、国内産とされている資料の中にもこのような形態のものはないことから、これらの資料は大友氏の城下町で独自に製作されていたのではないかと

府内産メダイ 仮説がたつてくる。

そこでまず、メダイ様金属製品の、具体的な製作方法から検証していきたい。前項でも触れたが、国内産のメダイのほとんどは、海外産のメダイの踏返しによるものである。そうした場合その鋳型が存在し、複数同じ形態のもの、いわゆる同范のものがみられる。ところが府内産のメダイと考えられる資料については、今のところ10数点以上が確認されているが、同じものが一つもなく、また鋳型も確認されていない。したがって府内産メダイ様金属製品は全く違う製作方法によることを想定しなければならない。

そこで同じものが全くないという点から考えられるのは、原型が蠅で作られていた可能性である。

原型原型 原型を蠅で作り、それを砂型等の鋳型で包み、湯道を通して鉛を流し込むといった工程が想定される。そうした場合、原型の蠅は無論残らないが、周りの鋳型も残らない。現在のところ鋳型が全く出土していない点は、こうしたことに起因している可能性がある¹³。この蠅型で作られる製法は西洋で一般的な製法で、宣教師の渡来に伴いその技術が教授されたことも想定される。ただこれらの製品を製作

註 13 大分大学教育福祉科学部教授佐脇健一氏よりご教示いただいた。

した鍛冶遺構が明確に把握されていない現段階では、あくまで一つの可能性として指摘しておきたい。

コレジオ

ところで注目すべきこととして、府内にコレジオが設立されたという事実がある。三俣俊二氏の指摘によれば、日本カトリック教会の自立はヴァリニャーノの発足させた、コレジオ、セミナリヨによる邦人司祭の育成にもつづくもので、そうした側面は物質面にも及んだとされる¹³⁾。天草ではその結果パイオルガン等が作られた。府内でメダイの製作が行われた背景に、コレジオがその一役を担っていた可能性は十分あり得る。

では、その技術を修得した人たちはどういう人なのか。先にも述べたが、メダイ様金属製品が出土した調査区の中で、そのすぐ周囲から分銅が多数出土している場所がある。さらにその周囲から分銅の本製品も確認された¹⁴⁾。したがって、この一帯では分銅が製作された可能性があることを示唆している。

挽物師

前にも触れたが、フロイス書簡の中に注目すべき記述がある。前掲の高山グリオに関する記述中のヴェロニカモチーフメダイの部分に後続する一節で「…キリシタンのためにコンタツを作らせるためから挽物師を呼び寄せた。…」とある。ここに出てくる「コンタツ」とは、キリスト教徒が祈りの回数を数えるために使用する数珠の珠のことで、別名ロザリオとも呼ぶ。現在出土した遺跡として知られているのは、原城、中世大友府内町跡、高槻城、東京駅八重洲北口遺跡等であり、そのうち原城出土のものは大半がガラス製、中世大友府内町跡出土のものもガラス製である。東京駅八重洲北口遺跡出土のものも大半がガラス製で、本製が2点見られる。以上から、当時におけるコンタツは、ガラス製が主流であることが判る。その中で注目すべき資料は、高槻城出土のコンタツである。高槻城では本館蔵中から、本製のコンタツが中心となって出土している¹⁵⁾。このフロイスの書簡は、高槻城城主高山石近の父、高山グリオに関する記述であり、そこではコンタツを作るために木工業者である「挽物師」を呼び寄せたとしている。高槻城で本製のコンタツが中心となって出土する事実は、この記述と非常に相応しており興味深い。そして、当時の国内産のコンタツは本製であった可能性を示すものである。

本製コン
ツ

ここで注目すべき点は、キリシタンに与えるものを日本の在来の職能集団が作っているという事実である。先にも述べたがメダイ様金属製品が出土する周囲で、分銅製作が行われた可能性があるという事実は、その職能集団がメダイ様金属製品の製作にも関与していたことを示唆するものである。

府内産メ
ダイ

以上整理すると、メダイ様金属製品はその形態、金属組成等からメダイである可能性が高く、その製作に関しては中世大友城下町に在住する金属職人が携わっているものと考えられることから、府内産メダイとして位置づけることが可能である。

島津侵攻

そしてこの府内産メダイの製作時期についてであるが、先の三俣氏の見解に従えば、府内にコレジオが設立された1581年以降という仮説が成り立ってくる。さらに、中世大友城下町が島津侵攻によって大きな破壊を受けた事実を勘案すると、島津侵攻の天正14年（1586年）以前までの製作が考えられる¹⁶⁾。そうすると、府内産メダイの製作年代は、16世紀末葉のごく限られた期間が一つの可能性として想定される。ただ前掲の木村氏の見解にもあるように、府内の町は各場所で復興された形跡が認められており（「御内町」は復興していないと考えられるが）、メダイの製作が再開されたことは、十分考慮に入れておかなければならないであろう。

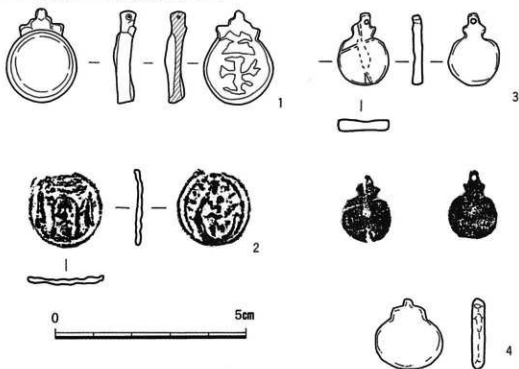
註 13 三俣俊二「草津のサンタマリア」（『聖母女学院短期大学研究紀要』第24集 1995年）

14 大友氏館前の「桜町」推定地の第18次調査区において、太鼓形分銅が3つ連結した状態で出土した。

15 高槻市教育委員会『高槻城キリシタン墓地』（高槻市文化財調査報告書第22冊 2001年）

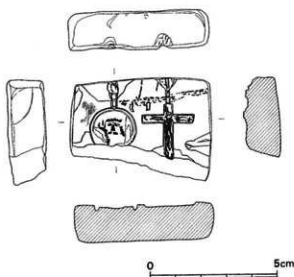
16 第12次調査区で出土した大友産メダイは、島津侵攻時焼土層の直下で検出されている。

第2節 メダイおよびメダイ様金属製品について



1：第21次調査区出土 2～4：第13次調査区出土

第510図 第21次調査区・第13次調査区出土遺物実測図 (1/1)



第511図 博多遺跡群出土ヴェロニカメダイ鋳型 (1/3)



写真16 ガラスを埋め込んだバッジ〔江戸時代〕
(天草ロザリオ館蔵)



写真13 天草伝世メダイ 1 (天草ロザリオ館蔵)



写真14 天草伝世メダイ 2 (天草ロザリオ館蔵)



写真15 伝島原旧教徒より没収のヴェロニカ聖顔
布文メダイ〔キリシタン物第2項雑伝来
品32の内〕(神戸市立博物館蔵)

遺物觀察表

第9次調査区I区遺物観察表①(土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第12区-1	青磁 皿	中国(龍泉窯)	—	8.4	—	I区 SD01		
第12区-2	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	—	—	I区 SD01		
第12区-3	白磁 碗	中国	—	—	—	I区 SD01		
第12区-4	瓦質土器 鍋(鉢)	在地	23.0	—	—	I区 SD01		
第12区-5	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	1.9	I区 SD01		
第12区-6	土師質土器 皿	在地	7.8	6.2	2.1	I区 SD01	口クロ成形、回転系切り後、板状圧痕。	6
第12区-7	土師質土器 皿	在地	—	5.8	—	I区 SD01	口クロ成形、回転系切り後、板状圧痕。	
第12区-8	陶器 甕	備前	34.2	—	—	I区 SD01		
第14区-1	青磁 皿	中国(龍泉窯)	—	—	4.2	I区 SK03		6
第14区-2	土師質土器 坏	在地	—	—	—	I区 SK03		
第14区-3	土師質土器 鉢	在地	—	—	—	I区 SK03		
第16区-1	京都系土師器 皿	在地	8.8	—	2.0	I区 SK04	口縁部に煤が付着。	6
第16区-2	京都系土師器 皿	在地	12.9	—	2.3	I区 SK04		6
第16区-3	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	1.9	I区 SK04		
第16区-4	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.2	I区 SK04		6
第16区-5	土師質土器 皿	在地	9.5	5.3	2.0	I区 SK04		6
第16区-6	京都系土師器 皿	在地	13.2	—	2.4	I区 SK04		6
第16区-7	京都系土師器 皿	在地	13.2	—	2.2	I区 SK04		6
第16区-8	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.1	I区 SK04		6
第16区-9	京都系土師器 皿	在地	14.8	—	2.4	I区 SK04		6
第18区-1	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.4	I区 SK05		7
第18区-2	瓦質土器 擂鉢	在地?	—	—	—	I区 SK05		7
第19区-1	白磁 小鉢	?	—	2.4	—	I区 SK06		
第19区-2	青磁 碗	中国(龍泉窯)	—	7.2	—	I区 SK06		
第19区-3	陶器 鍋?	?	—	4.6	—	I区 SK06		
第19区-4	瓦質土器 甕	在地	34.0	—	—	I区 SK06		7
第19区-5	陶器 擂鉢	備前	—	—	—	I区 SK06		
第19区-6	陶器 擂鉢	備前	33.6	—	—	I区 SK06		
第19区-7	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.0	I区 SK06		
第19区-8	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.3	I区 SK06		7
第21区-1	京都系土師器 小皿	在地	5.3	4.0	1.7	I区 SK07	灰塼壺の蓋。	7
第21区-2	京都系土師器 皿	在地	10.8	—	2.0	I区 SK07		
第21区-3	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.1	I区 SK07		
第21区-4	京都系土師器 皿	在地	14.5	—	2.6	I区 SK07		7
第21区-5	京都系土師器 皿	在地	16.5	—	2.6	I区 SK07		7
第23区-1	青花 皿	中国(漳州窯)	14.0	—	—	I区 SK08		7
第23区-2	白磁 皿	中国	13.6	6.8	2.6	I区 SK08		7
第23区-3	陶器 大甕	備前	—	—	—	I区 SK08		
第23区-4	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	2.1	I区 SK08		
第23区-5	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	2.4	I区 SK08		
第23区-6	京都系土師器 皿	在地	12.1	—	2.5	I区 SK08		
第23区-7	京都系土師器 皿	在地	12.3	—	2.3	I区 SK08		
第23区-8	京都系土師器 皿	在地	13.6	—	2.4	I区 SK08		
第23区-9	京都系土師器 皿	在地	16.2	—	2.7	I区 SK08		7
第25区-1	青花 碗	中国(景德鎮窯)	14.9	—	—	I区 SK09		7
第25区-2	白磁 皿	中国	11.9	6.4	2.6	I区 SK09		
第25区-3	白磁 菊花皿	中国	12.3	—	—	I区 SK09		
第25区-4	京都系土師器 皿	在地	12.0	—	2.8	I区 SK09		7
第25区-5	京都系土師器 皿	在地	12.7	—	—	I区 SK09		
第25区-6	京都系土師器 耳皿	在地	—	—	1.4	I区 SK09		
第25区-7	瓦質土器 火鉢	在地	—	31.0	—	I区 SK09		
第27区-1	燒締陶器 鉢	中国	—	—	—	I区 SK10		
第27区-2	陶器 擂鉢	備前	—	—	—	I区 SK10		
第27区-3	土師質土器 皿	在地	—	4.6	—	I区 SK10		
第27区-4	京都系土師器 皿	在地	8.6	—	2.0	I区 SK10		
第27区-5	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	2.2	I区 SK10		
第27区-6	京都系土師器 皿	在地	11.6	—	2.2	I区 SK10		
第27区-7	京都系土師器 皿	在地	15.0	—	2.5	I区 SK10		
第29区-1	青花 皿	中国(漳州窯)	—	—	3.6	I区 SE12	基筋底。	7
第29区-2	青花 皿	中国(漳州窯)	—	—	3.1	I区 SE12	基筋底。	7
第29区-3	青磁 香炉	中国	10.0	5.6	5.4	I区 SE12		7
第29区-4	青磁 碗	中国	14.0	—	—	I区 SE12		7
第29区-5	青磁 菊花皿	中国	14.0	—	—	I区 SE12		7
第29区-6	白磁 小鉢	中国	7.5	—	—	I区 SE12		
第29区-7	白磁 皿	中国	14.0	—	—	I区 SE12		
第29区-8	陶器 香炉	瀬戸	6.4	—	—	I区 SE12		
第29区-9	陶器 皿	瀬戸	10.5	—	—	I区 SE12		7
第29区-10	陶器 瓶	備前	—	—	—	I区 SE12		7
第29区-11	陶器 甕	備前	—	—	—	I区 SE12		
第29区-12	陶器 擂鉢	備前	27.5	—	—	I区 SE12		
第29区-13	陶器 擂鉢	備前	—	—	13.2	I区 SE12		
第29区-14	陶器 擂鉢	備前	24.0	10.0	11.6	I区 SE12		7
第29区-15	陶器 水屋甕	備前	—	—	—	I区 SE12		7
第30区-1	京都系土師器 坏	在地	11.0	—	3.2	I区 SE12		
第30区-2	京都系土師器 皿	在地	11.6	—	2.4	I区 SE12		

遺物観察表 2 (第9次調査区)

第9次調査区1区遺物観察表②(土器・陶磁器類)

押印No.	器種	生産地	法尺(単位cm)			遺構名	備考	写真撮影 有/無	
			口径	底径	高さ				
第302区-3	京都系土師器	皿	11.3	—	—	区 SE12			
第302区-4	京都系土師器	皿	12.6	—	2.4	区 SE12			
第302区-5	京都系土師器	皿	8.2	—	1.7	区 SE12	灯明皿。		
第302区-6	京都系土師器	皿	8.8	—	2.2	区 SE12			
第302区-7	京都系土師器	皿	10.1	—	2.5	区 SE12			
第302区-8	京都系土師器	皿	11.8	—	2.1	区 SE12			
第302区-9	京都系土師器	皿	11.6	—	1.8	区 SE12			
第302区-10	京都系土師器	皿	12.5	—	—	区 SE12			
第302区-11	京都系土師器	皿	13.4	—	2.4	区 SE12			
第302区-12	京都系土師器	皿	15.6	—	2.6	区 SE12			
第302区-13	京都系土師器	皿	15.8	—	2.2	区 SE12			
第302区-14	土師系土器	鍋	29.0	23.0	3.5	区 SE12			
第302区-15	瓦質土器	鉢	33.0	23.0	5.2	区 SE12			
第302区-16	瓦質土器	鉢	36.0	—	—	区 SE12			
第302区-17	瓦質土器	鉢	40.6	32.0	6.5	区 SE12			
第302区-18	土師系土器	鍋	43.5	32.0	7.0	区 SE12			
第31区	陶器	甕	—	50.0	—	区 SE12			
第37区-1	京都系土師器	皿	12.7	—	2.5	区 SE13			
第38区	京都系土師器	皿	9.4	—	2.1	区 S F14		8	
第39区-1	京都系土師器	皿	13.3	—	—	区 S X15			
第39区-2	京都系土師器	皿	14.0	—	2.4	区 S X15			
第40区	青花	皿	—	6.2	—	区 S P16		8	
第41区	京都系土師器	皿	12.1	—	2.1	区 S P17			
第42区	白磁	皿	15.1	—	—	区 S P18			
第43区	京都系土師器	皿	10.2	—	1.9	区 S P19			
第44区	京都系土師器	皿	14.0	—	2.4	区 S P20			
第45区-1	青花	皿	中国(温州産)	—	3.2	区 包含層	基簡底。	9	
第45区-2	青花・青磁	碗	中国(温州産)	—	5.0	区 包含層		9	
第45区-3	青花・青磁	鉢	中国	14.0	—	区 包含層	内面青花・外面青磁。	9	
第45区-4	青花	鉢	中国	20.8	—	区 包含層		9	
第45区-5	白磁	皿	中国	13.2	6.0	3.5	区 包含層	見込みに蛇ノ目輪刺ぎ。	
第45区-6	白磁	皿	中国	12.4	7.0	2.1	区 包含層		9
第45区-7	白磁	皿	中国	13.6	8.0	2.2	区 包含層		
第45区-8	陶器	不明	中国	—	—	区 包含層	華南三彩の模範部。	9	
第45区-9	陶器	皿	瀬戸系瀬戸	11.6	—	区 包含層		9	
第45区-10	京都系土師器	小皿	在地	5.1	4.2	1.4	区 包含層	焼痕等の著。	
第45区-11	京都系土師器	小皿	在地	4.8	4.6	1.4	区 包含層	焼痕等の著。	
第45区-12	京都系土師器	皿	在地	—	—	3.4	区 包含層		
第45区-13	京都系土師器	皿	在地	11.3	—	5.1	区 包含層		
第45区-14	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	—	区 包含層		
第45区-15	京都系土師器	皿	在地	12.6	—	6.0	区 包含層		
第45区-16	京都系土師器	皿	在地	12.8	—	7.0	区 包含層		
第45区-17	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	7.1	区 包含層		
第45区-18	京都系土師器	耳皿	在地	—	1.8	—	区 包含層		
第45区-19	土師系土器	耳皿	在地	—	1.1	3.8	区 包含層		9
第45区-20	京都系土師器	皿	在地	17.2	—	—	区 包含層		9
第45区-21	京都系土師器	皿	在地	20.6	—	—	区 包含層		
第45区-22	土製品	硯	在地	—	—	—	区 包含層		9
第45区-23	瓦質土器	指鉢	在地	25.6	—	—	区 包含層		9

第9次調査区Ⅰ区遺物観察表 (金属・石製品)

挿図No.	品名	材質	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	写真記録 No.
			部位	厚	径	長さ				
第12図-9	環状製品	鉄製	全体	厚 0.9	径 3.2		9.4	Ⅰ区 SD01		6
第18図-3	釘	鉄製	全体	厚 0.8	長さ 5.4		6.3	Ⅰ区 SK05		
第18図-4	不明	凝灰岩製	破片				—	Ⅰ区 SK05	石塔の部材か?	7
第25図-8	不明	鉄製	全体	厚 4.0	長さ 5.0	幅 5.6	17.0	Ⅰ区 SK09	片断に穿れが見られる。	7
第30図-19	釘	鉄製	全体	厚 0.4	長さ 5.0		4.5	Ⅰ区 SE12		
第30図-20	釘	鉄製	全体	厚 0.4	長さ —		8.3	Ⅰ区 SE12		
第30図-21	釘	鉄製	全体	厚 0.4	長さ 6.3		6.6	Ⅰ区 SE12		
第30図-22	釘	鉄製	全体	厚 0.5	長さ —		13.3	Ⅰ区 SE12		
第34図-1	石臼	安山岩製	破片				—	Ⅰ区 SE12		
第34図-2	不明	凝灰岩製	全体	口径 6.8	高さ 10.0		569.3	Ⅰ区 SE12		8
第34図-3	不明	凝灰岩製	全体	長さ 13.8	幅 9.8	厚 5.3	339.4	Ⅰ区 SE12		8
第34図-4	鉢?	安山岩製	破片	口径 17.0	底径 13.6	高さ 9.9	863.5	Ⅰ区 SE12		
第34図-5	鉢?	安山岩製	破片	口径 25.6	底径 18.0	高さ 14.3	1100.0	Ⅰ区 SE12		
第35図-1	玉縁部	凝灰岩製	全体	口径 34.8	高さ 21.0		14500.0	Ⅰ区 SE12		8
第35図-2	掘削	安山岩製	破片	口径 51.4	高さ 1.1		8900.0	Ⅰ区 SE12		
第37図-2	不明	鉄製	破片	厚 1.2	長さ 13.0	幅 3.1	52.3	Ⅰ区 SE13		8
第45図-24	針	鉄製	破片	厚 1.1			—	Ⅰ区 包含層		9
第45図-25	釘	鉄製	全体	厚 0.6	長さ 6.0		8.7	Ⅰ区 包含層		

第9次調査区Ⅰ区遺物観察表 (瓦)

挿図No.	品名	部位	寸法 (単位cm)				遺構名	備考	写真記録 No.
			長さ	幅	厚さ	厚さ			
第32図-1	丸瓦						Ⅰ区 SE12	凹面は布目のものにコビキ痕。凹面に吊り紐痕。	
第32図-2	丸瓦	玉縁部					Ⅰ区 SE12	凹面は布目のものにコビキ痕。凹面に吊り紐痕。	8
第32図-3	丸瓦	玉縁部					Ⅰ区 SE12	凹面に布目。凸面はケズリのものにナデ。	8
第32図-4	丸瓦						Ⅰ区 SE12	凹面にコビキ痕。凸面にナデ。	8
第32図-5	平瓦		長さ 27.0	幅 23.0	厚さ 2.0		Ⅰ区 SE12	凹凸面ともナデ。	
第32図-6	丸瓦						Ⅰ区 SE12	凹面に布目および吊り紐痕。凸面にナデ。	8
第33図-1	平瓦				厚さ 2.5		Ⅰ区 SE12	凹凸面ともナデ。縁辺部はヘラケズリ。	
第33図-2	平瓦				厚さ 2.4		Ⅰ区 SE12	凹凸面ともナデ。縁辺部はヘラケズリ。	
第33図-3	平瓦		長さ 26.7	幅 22.5	厚さ 1.5		Ⅰ区 SE12	凹凸面ともナデ。	
第33図-4	平瓦				厚さ 3.4		Ⅰ区 SE12	凹凸面ともナデ。	

第9次調査区Ⅰ区遺物観察表 (銭貨)

挿図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	遺構名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	備考	写真記録 No.
第13図	不明	—	—	Ⅰ区 SD01	1.8	26	—		
第36図-1	唐寧元貨	1068	北宋	Ⅰ区 SE12	2.9	22	真書		
第36図-2	祥符元貨	1009	北宋	Ⅰ区 SE12	3.0	25	真書		
第36図-3	紹定通寶(?)	1228	南宋	Ⅰ区 SE12	2.3	25	—		
第46図-1	唐寧元貨	1068	北宋	Ⅰ区 包含層	2.5	24	真書		
第46図-2	治平元貨	1064	北宋	Ⅰ区 包含層	2.2	23	篆書		
第46図-3	祥符通寶	1009	北宋	Ⅰ区 包含層	1.4	24	—		
第46図-4	皇宋通寶	1038	北宋	Ⅰ区 包含層	1.4	24	篆書		
第46図-5	元豐通寶	1078	北宋	Ⅰ区 包含層	2.1	25	篆書		

遺物観察表 4 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表①(土器・陶磁器類)

探検No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺物名	備考	Table No.
			口縁	底径	高さ			
第4790-1	京都系土師器	皿	在池	10.0	1.9	Ⅳ区 SD01		
第4790-2	京都系土師器	皿	在池	10.0	—	Ⅳ区 SD01		9
第4790-3	京都系土師器	皿	在池	9.4	2.2	Ⅳ区 SD01		9
第4790-4	京都系土師器	皿	在池	10.0	2.2	Ⅳ区 SD01		9
第4790-5	京都系土師器	皿	在池	10.2	2.2	Ⅳ区 SD01		9
第4790-6	京都系土師器	皿	在池	10.2	2.1	Ⅳ区 SD01		9
第4790-7	京都系土師器	皿	在池	10.2	2.5	Ⅳ区 SD01		
第4790-8	京都系土師器	皿	在池	10.5	1.7	Ⅳ区 SD01		
第4790-9	京都系土師器	皿	在池	10.2	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4790-10	京都系土師器	皿	在池	10.2	2.2	Ⅳ区 SD01		
第4790-11	京都系土師器	皿	在池	10.8	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4790-12	京都系土師器	皿	在池	11.0	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4790-13	京都系土師器	皿	在池	11.0	2.2	Ⅳ区 SD01		
第4790-14	京都系土師器	皿	在池	11.0	—	Ⅳ区 SD01		
第4790-15	京都系土師器	皿	在池	11.0	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4790-16	京都系土師器	皿	在池	13.0	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4790-17	京都系土師器	皿	在池	12.4	2.3	Ⅳ区 SD01	底面穿孔。	9
第4790-18	京都系土師器	皿	在池	12.8	2.3	Ⅳ区 SD01		9
第4790-19	京都系土師器	皿	在池	13.0	2.0	Ⅳ区 SD01		
第4790-20	京都系土師器	皿	在池	13.4	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4790-21	京都系土師器	皿	在池	16.5	2.6	Ⅳ区 SD01		
第4790-22	京都系土師器	皿	在池	16.5	2.5	Ⅳ区 SD01		9
第4790-23	京都系土師器	皿	在池	14.0	2.3	Ⅳ区 SD01		
第4790-24	京都系土師器	皿	在池	15.0	2.0	Ⅳ区 SD01		
第4790-25	京都系土師器	皿	在池	13.0	2.1	Ⅳ区 SD01		9
第4790-26	京都系土師器	皿	在池	14.0	2.0	Ⅳ区 SD01		
第4790-27	京都系土師器	小皿	在池	4.8	1.4	Ⅳ区 SD01		9
第4790-28	土師質土器	小皿	在池	4.2	3.0	Ⅳ区 SD01		
第4790-29	土師質土器	皿	在池	9.0	5.2	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	9
第4790-30	土師質土器	皿	在池	12.2	6.5	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	9
第4790-31	土師質土器	皿	在池	12.0	6.6	Ⅳ区 SD01		9
第4790-32	土師質土器	皿	在池	10.6	6.0	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第4790-33	土師質土器	皿	在池	—	5.6	Ⅳ区 SD01		
第4790-34	土師質土器	皿	在池	8.6	5.0	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後にナデ。	9
第4790-35	土師質土器	皿	在池	9.0	5.3	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後にナデ。	
第4790-36	土師質土器	皿	在池	13.6	6.8	Ⅳ区 SD01		
第4790-37	土師質土器	皿	在池	12.6	6.6	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後にナデ。	
第4790-38	土師質土器	皿	在池	11.2	6.4	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後にナデ。	9
第4790-39	陶磁	却皿	瀬戸	—	—	Ⅳ区 SD01		
第4790-40	土師質土器	皿	在池	9.0	5.2	Ⅳ区 SD01		9
第4790-41	京都系土師器	皿	在池	12.0	1.7	Ⅳ区 SD01		
第4790-42	京都系土師器	皿	在池	12.6	6.5	Ⅳ区 SD01		
第4790-43	京都系土師器	皿	在池	10.4	2.6	Ⅳ区 SD01		
第4790-44	京都系土師器	皿	在池	12.6	2.0	Ⅳ区 SD01		
第4790-45	京都系土師器	皿	在池	16.0	2.3	Ⅳ区 SD01		
第4790-46	京都系土師器	皿	在池	10.8	2.0	Ⅳ区 SD01		
第4790-47	土師質土器	皿	在池	12.6	7.0	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	9
第4800-1	磁器	皿	中国	—	—	Ⅳ区 SD01	五彩。	
第4800-2	陶器	却皿	瀬戸	—	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-3	陶器	水注	中国	—	—	Ⅳ区 SD01	華南三彩。	
第4800-4	白磁	皿	中国	12.0	6.0	Ⅳ区 SD01		10
第4800-5	白磁	皿	中国	11.6	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-6	青花	皿	中国	10.8	6.0	Ⅳ区 SD01		10
第4800-7	土師質土器	鉢	在池	34.0	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-8	土師質土器	鉢	在池	39.6	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-9	京都系土師器	皿	在池	8.4	1.8	Ⅳ区 SD01		
第4800-10	京都系土師器	皿	在池	8.2	1.5	Ⅳ区 SD01		
第4800-11	京都系土師器	皿	在池	8.6	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-12	京都系土師器	皿	在池	10.4	1.9	Ⅳ区 SD01		
第4800-13	京都系土師器	皿	在池	10.6	2.2	Ⅳ区 SD01		10
第4800-14	京都系土師器	皿	在池	11.2	2.0	Ⅳ区 SD01		10
第4800-15	京都系土師器	皿	在池	10.4	1.8	Ⅳ区 SD01		
第4800-16	京都系土師器	皿	在池	10.3	—	Ⅳ区 SD01		10
第4800-17	京都系土師器	皿	在池	10.6	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-18	京都系土師器	皿	在池	10.6	—	Ⅳ区 SD01		
第4800-19	京都系土師器	皿	在池	11.0	2.0	Ⅳ区 SD01		10
第4800-20	京都系土師器	皿	在池	10.0	2.0	Ⅳ区 SD01		10
第4800-21	京都系土師器	皿	在池	10.4	2.1	Ⅳ区 SD01		
第4800-22	京都系土師器	皿	在池	10.3	3.0	Ⅳ区 SD01		10
第4800-23	京都系土師器	小皿	在池	4.8	1.7	Ⅳ区 SD01		10
第4800-24	京都系土師器	小皿	在池	5.6	1.6	Ⅳ区 SD01		
第4800-25	京都系土師器	小皿	在池	5.3	1.8	Ⅳ区 SD01	底面穿孔。	10
第4800-26	京都系土師器	小皿	在池	5.0	1.9	Ⅳ区 SD01		
第4800-27	京都系土師器	小皿	在池	4.6	1.6	Ⅳ区 SD01		
第4800-28	京都系土師器	耳皿	在池	—	—	Ⅳ区 SD01		10

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表②(土器・陶磁器類)

採回No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第49回-21	京都系土師器 耳皿	在地	—	—	—	Ⅳ区 SD01		10
第49回-22	京都系土師器 耳皿	在地	—	—	—	Ⅳ区 SD01		
第49回-23	京都系土師器 皿	在地	14.4	—	2.1	Ⅳ区 SD01		
第49回-24	京都系土師器 皿	在地	14.3	—	2.3	Ⅳ区 SD01		
第49回-25	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	2.1	Ⅳ区 SD01		
第49回-26	京都系土師器 皿	在地	7.0	—	2.3	Ⅳ区 SD01		
第49回-27	京都系土師器 皿	在地	14.4	—	1.9	Ⅳ区 SD01		
第49回-28	京都系土師器 皿	在地	14.6	—	2.0	Ⅳ区 SD01		10
第49回-29	京都系土師器 皿	在地	13.5	—	2.0	Ⅳ区 SD01		
第49回-30	京都系土師器 皿	在地	13.1	—	2.0	Ⅳ区 SD01		10
第49回-31	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	4.0	Ⅳ区 SD01		
第49回-32	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.4	Ⅳ区 SD01		
第49回-33	土師質土器 小皿	在地	3.0	2.4	1.4	Ⅳ区 SD01		
第49回-34	土師質土器 小皿	在地	5.0	3.2	1.5	Ⅳ区 SD01		
第49回-35	土師質土器 皿	在地	—	5.0	—	Ⅳ区 SD01		
第49回-36	土師質土器 皿	在地	7.0	4.8	1.9	Ⅳ区 SD01		
第49回-37	土師質土器 皿	在地	8.8	5.2	2.2	Ⅳ区 SD01		
第49回-38	土師質土器 皿	在地	8.6	5.0	2.0	Ⅳ区 SD01		
第49回-39	土師質土器 皿	在地	11.4	5.0	2.1	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第49回-40	土師質土器 皿	在地	11.0	6.6	2.3	Ⅳ区 SD01		
第49回-41	土師質土器 皿	在地	—	6.5	—	Ⅳ区 SD01		
第49回-42	土師質土器 皿	在地	—	5.8	—	Ⅳ区 SD01		
第49回-43	土師質土器 皿	在地	10.3	6.6	2.2	Ⅳ区 SD01		10
第49回-44	土師質土器 皿	在地	10.8	6.2	2.8	Ⅳ区 SD01		
第49回-45	土師質土器 皿	在地	11.0	6.0	3.2	Ⅳ区 SD01		
第49回-46	土師質土器 皿	在地	12.2	6.7	2.5	Ⅳ区 SD01		
第49回-47	土師質土器 皿	在地	13.0	6.0	2.5	Ⅳ区 SD01		
第49回-48	土師質土器 皿	在地	10.8	7.0	2.3	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	10
第49回-49	土師質土器 皿	在地	11.6	6.7	2.6	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第49回-50	土師質土器 皿	在地	—	8.6	—	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第49回-51	土師質土器 皿	在地	—	9.8	—	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第50回-1	京都系土師器 皿	在地	10.4	—	1.9	Ⅳ区 SD01		10
第50回-2	京都系土師器 皿	在地	10.4	—	2.2	Ⅳ区 SD01		10
第50回-3	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.3	Ⅳ区 SD01		10
第50回-4	京都系土師器 皿	在地	13.6	—	2.1	Ⅳ区 SD01		
第50回-5	京都系土師器 皿	在地	15.4	—	2.0	Ⅳ区 SD01		
第50回-6	土師質土器 皿	在地	—	6.4	—	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第50回-7	土師質土器 皿	在地	—	7.0	—	Ⅳ区 SD01		
第50回-8	土師質土器 皿	在地	13.4	7.0	2.5	Ⅳ区 SD01		
第50回-9	京都系土師器 小皿	在地	5.0	—	1.6	Ⅳ区 SD01		10
第50回-10	土師質土器 皿	在地	8.0	5.0	1.5	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第50回-11	土師質土器 皿	在地	9.0	5.0	2.4	Ⅳ区 SD01	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第50回-12	焼締陶器 甕	不明	—	—	—	Ⅳ区 SD01		
第52回	土製品 舞台	在地	—	7.2	—	Ⅳ区 SD02-2		
第53回	京都系土師器 坏	在地	10.0	—	3.7	Ⅳ区 SD03		10
第54回	土師質土器 鉢	在地	84.8	66.8	11.0	Ⅳ区 SD03		
第55回	京都系土師器 坏	在地	11.6	—	3.2	Ⅳ区 SD04		
第56回	陶器 漆鉢	偏前	29.6	14.6	13.8	Ⅳ区 SD05		
第57回-1	陶器 碗	不明	—	—	—	Ⅳ区 SD06	京焼風？	
第57回-2	陶器 不明	不明	12.0	—	—	Ⅳ区 SD06		
第57回-3	陶器 漆鉢	偏前	32.0	—	—	Ⅳ区 SD06	口縁外面に縦方向のスリムが1ヶ所みられる。	
第57回-4	瓦質土器 鍋	在地	47.0	—	—	Ⅳ区 SD06	外面はケズリ。	
第58回-2	白磁 小杯	不明	—	2.6	—	Ⅳ区 SD07	見込部に蛇目状の軸刺ぎ。	
第58回-3	黄釉磁器 皿	不明	—	—	—	Ⅳ区 SD07		
第58回-4	京都系土師器 鉢	在地	10.8	—	2.2	Ⅳ区 SD07		
第59回	瓦質土器 鉢	在地	26.0	—	—	Ⅳ区 SD08		
第60回	土師質土器 鍋	在地	34.0	—	—	Ⅳ区 SD11		
第62回-1	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	2.2	Ⅳ区 SK12		10
第62回-2	京都系土師器 皿	在地	10.4	—	2.2	Ⅳ区 SK12		10
第62回-3	京都系土師器 皿	在地	10.5	—	2.0	Ⅳ区 SK12		10
第62回-4	京都系土師器 皿	在地	12.4	—	2.6	Ⅳ区 SK12		
第62回-5	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	3.0	Ⅳ区 SK12		
第62回-6	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.4	Ⅳ区 SK12		10
第62回-7	京都系土師器 皿	在地	12.0	—	2.1	Ⅳ区 SK12		
第62回-8	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.0	Ⅳ区 SK12		
第62回-9	京都系土師器 皿	在地	13.4	—	2.4	Ⅳ区 SK12		
第62回-10	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	2.3	Ⅳ区 SK12		10
第62回-11	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.5	Ⅳ区 SK12		
第62回-12	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	2.2	Ⅳ区 SK12		10
第62回-13	京都系土師器 皿	在地	19.0	—	—	Ⅳ区 SK12		
第62回-14	京都系土師器 皿	在地	20.2	—	2.1	Ⅳ区 SK12		
第64回-1	京都系土師器 小皿	在地	4.8	4.0	1.6	Ⅳ区 SK13		
第64回-2	京都系土師器 小皿	在地	5.2	4.0	1.6	Ⅳ区 SK13		11
第64回-3	京都系土師器 小皿	在地	5.0	4.0	1.6	Ⅳ区 SK13		
第64回-4	京都系土師器 小皿	在地	5.0	4.0	1.6	Ⅳ区 SK13		11

遺物観察表6 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表③(土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第64区-5	京都系土師器	皿	8.7	—	1.8	Ⅳ区 SK13		11
第64区-6	京都系土師器	皿	10.2	—	2.1	Ⅳ区 SK13		11
第64区-7	京都系土師器	皿	10.8	—	2.0	Ⅳ区 SK13		11
第64区-8	京都系土師器	皿	10.4	—	1.9	Ⅳ区 SK13		11
第64区-9	京都系土師器	皿	10.3	—	2.1	Ⅳ区 SK13		
第64区-10	土師質土器	皿	15.0	8.0	2.5	Ⅳ区 SK13	底部は回転糸切り。京都系土師器皿との差異形。	
第64区-11	土師質土器	皿	14.0	8.0	2.6	Ⅳ区 SK13	底部は回転糸切り。京都系土師器皿との差異形。	
第64区-12	京都系土師器	皿	13.0	—	2.1	Ⅳ区 SK13		11
第64区-13	京都系土師器	皿	13.0	—	2.1	Ⅳ区 SK13		11
第64区-14	京都系土師器	皿	13.0	—	2.3	Ⅳ区 SK13		11
第64区-15	京都系土師器	皿	13.0	—	2.3	Ⅳ区 SK13		
第64区-16	京都系土師器	皿	13.0	—	2.2	Ⅳ区 SK13		
第64区-17	京都系土師器	皿	13.2	—	3.2	Ⅳ区 SK13		
第64区-18	京都系土師器	皿	13.4	—	2.0	Ⅳ区 SK13		
第64区-19	京都系土師器	皿	13.0	—	2.2	Ⅳ区 SK13		11
第64区-20	京都系土師器	皿	13.0	—	2.5	Ⅳ区 SK13		11
第64区-21	京都系土師器	皿	16.4	—	2.3	Ⅳ区 SK13		11
第64区-22	京都系土師器	皿	20.6	—	3.0	Ⅳ区 SK13		11
第64区-23	土師質土器	皿	18.0	12.4	2.5	Ⅳ区 SK13	底部は回転糸切り。京都系土師器皿との差異形。	11
第64区-24	白磁	皿	13.6	7.6	3.5	Ⅳ区 SK13		
第64区-25	土師質土器	鉢	36.0	17.7	12.1	Ⅳ区 SK13		11
第66区-2	瓦質土器	不明	10.0	4.5	—	Ⅳ区 SK14		
第66区-3	瓦質土器	不明	11.0	6.0	2.4	Ⅳ区 SK14		
第66区-4	京都系土師器	皿	7.5	—	1.6	Ⅳ区 SK14	取皿として再利用されている。	11
第66区-5	土師質土器	皿	—	5.0	—	Ⅳ区 SK14		
第66区-6	土師質土器	皿	9.2	4.4	2.2	Ⅳ区 SK14	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第66区-7	土師質土器	坏	12.4	7.6	3.4	Ⅳ区 SK14		
第66区-8	土師質土器	皿	11.5	6.2	2.5	Ⅳ区 SK14	底部は回転糸切り後に板状圧痕。	
第68区-1	京都系土師器	皿	11.0	—	2.0	Ⅳ区 SK15		11
第68区-2	京都系土師器	皿	14.2	—	—	Ⅳ区 SK15		
第68区-3	京都系土師器	皿	17.0	—	1.9	Ⅳ区 SK15		11
第70区-1	青花	碗	22.4	—	—	Ⅳ区 SK16	外面に花紋の毛彫り。	11
第70区-2	青花	碗	—	5.0	—	Ⅳ区 SK16	見込部に蛇目状の釉刺ぎ。	11
第72区-1	土製品	燗台	—	7.4	—	Ⅳ区 SK17		11
第72区-2	京都系土師器	皿	10.4	—	1.8	Ⅳ区 SK17		
第72区-3	京都系土師器	皿	10.4	—	2.3	Ⅳ区 SK17		11
第72区-4	土師質土器	坏	12.6	9.0	3.7	Ⅳ区 SK17		
第73区	土師質土器	鍋	37.8	—	—	Ⅳ区 SK17		
第75区	瓦質土器	火鉢	—	33.4	—	Ⅳ区 SK18		
第77区-1	京都系土師器	皿	11.6	—	—	Ⅳ区 SK19		
第77区-2	京都系土師器	皿	15.4	—	2.6	Ⅳ区 SK19		
第77区-3	土製品	土鐘	—	—	—	Ⅳ区 SK19		
第77区-4	青花	皿	23.5	—	—	Ⅳ区 SK19		11
第77区-5	陶器	燗鉢	27.0	—	—	Ⅳ区 SK19		
第77区-6	陶器	燗鉢	31.5	—	—	Ⅳ区 SK19		
第77区-7	瓦質土器	火鉢	—	37.0	—	Ⅳ区 SK19		
第77区-8	土師質土器	鍋	42.0	—	—	Ⅳ区 SK19		
第80区-1	京都系土師器	皿	11.0	—	1.7	Ⅳ区 SK20		
第80区-2	京都系土師器	皿	10.5	—	2.2	Ⅳ区 SK20		
第80区-3	京都系土師器	皿	11.2	—	2.5	Ⅳ区 SK20		
第80区-4	京都系土師器	皿	13.0	—	2.0	Ⅳ区 SK20		
第80区-5	京都系土師器	皿	13.3	—	2.2	Ⅳ区 SK20		
第80区-6	京都系土師器	皿	13.0	—	2.7	Ⅳ区 SK20		
第80区-7	京都系土師器	皿	13.8	—	2.1	Ⅳ区 SK20		
第80区-8	京都系土師器	皿	16.5	—	2.1	Ⅳ区 SK20		
第80区-9	京都系土師器	皿	17.6	—	1.7	Ⅳ区 SK20		
第80区-10	土師質土器	皿	—	—	0.0	Ⅳ区 SK20		
第82区-1	京都系土師器	皿	12.5	—	2.0	Ⅳ区 SK21		
第82区-2	陶器	碗	5.6	—	—	Ⅳ区 SK21	李朝。竹節高台。	11
第82区-3	焼締陶器	小壺	—	6.8	—	Ⅳ区 SK21		11
第82区-4	陶器	燗鉢	—	6.0	—	Ⅳ区 SK21	李朝。竹節高台。	
第84区-1	陶器	碗?	—	5.6	—	Ⅳ区 SK22		
第84区-2	陶器	碗	—	6.4	—	Ⅳ区 SK22		
第84区-3	陶器	皿	11.0	5.5	2.0	Ⅳ区 SK22		12
第84区-4	京都系土師器	皿	11.2	—	—	Ⅳ区 SK22		
第84区-5	京都系土師器	皿	10.6	—	2.0	Ⅳ区 SK22		
第84区-6	京都系土師器	皿	12.0	—	2.7	Ⅳ区 SK22		
第84区-7	燗桶陶器	瓶	—	—	—	Ⅳ区 SK22		
第84区-8	土製品	不明	—	—	—	Ⅳ区 SK22	瓦を研磨して再利用している。	
第84区-9	瓦質土器	鉢	27.0	16.5	11.1	Ⅳ区 SK22	内外面とも刷毛目後にナデ。	
第84区-10	土師質土器	鍋	28.0	—	—	Ⅳ区 SK22	内面は刷毛目。外面底部は格子目タタキ。	
第84区-11	瓦質土器	鉢	34.0	24.0	11.0	Ⅳ区 SK22	内外面ともミカキ。	
第88区-1	瓦質土器	坏	—	5.0	—	Ⅳ区 SK24		
第88区-2	土師質土器	不明	5.5	—	2.2	Ⅳ区 SK24	内外の器面に黄褐色〜赤褐色の付着物	12
第88区-3	陶器	鉢	15.4	—	—	Ⅳ区 SK24		

第9次調査区N区遺物観察表④(土器・陶磁器類)

探出No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	探出No.
			口縁	底径	高さ			
第8924-4	土師貫土器	不明	—	10.4	—	N区 SK24		
第8924-5	土師貫土器	指鉢	—	11.4	—	N区 SK24		
第8924-6	瓦貫土器	火鉢	—	—	—	N区 SK24		
第8924-1	陶器	甕	46.0	—	—	N区 SK24		
第8924-2	陶器	甕	59.2	—	—	N区 SK24		
第8924-3	陶器	甕	—	42.8	—	N区 SK24		
第9191	京都系土師器	甕	13.0	—	2.3	N区 SK25		
第9192-1	京都系土師器	甕	10.6	—	2.1	N区 SK26		
第9192-2	京都系土師器	甕	12.8	—	2.4	N区 SK26		
第9192-3	京都系土師器	甕	10.5	—	2.1	N区 SK26		
第9192-4	京都系土師器	甕	13.2	—	1.8	N区 SK26		
第9192-5	土師貫土器	甕	10.8	6.4	2.6	N区 SK26		
第9192-6	土製品	不明	—	—	—	N区 SK26		
第9192-7	焼締陶器	德利	—	—	—	N区 SK26		
第9192-1	青花	甕	9.5	3.6	2.2	N区 SK27		12
第9192-2	青花	甕	13.0	6.6	3.3	N区 SK27		
第9192-3	青花	甕	13.6	—	—	N区 SK27		12
第9192-4	青花	甕	—	9.0	—	N区 SK27		12
第9192-5	青花	甕	10.8	—	—	N区 SK27		12
第9192-6	青花	甕	—	3.3	—	N区 SK27		
第9192-7	青花	甕	10.6	—	—	N区 SK27		
第9192-8	青花	甕	10.3	—	—	N区 SK27		12
第9192-9	青磁	甕	中国(龍泉窯)	14.3	5.0	5.8	N区 SK27	12
第9192-10	青磁	甕	中国(龍泉窯)	7.9	—	—	N区 SK27	12
第9192-11	青磁	甕	中国(龍泉窯)	—	6.8	—	N区 SK27	
第9192-12	青磁	甕	中国(龍泉窯)	—	6.0	—	N区 SK27	12
第9192-13	新緑輪	小皿	中国	—	—	N区 SK27	内盤状に成形している。	12
第9192-14	陶器	水注	中国	—	—	N区 SK27	臺南三彩。	12
第9192-15	白磁	甕	中国	11.0	5.6	3.0	N区 SK27	12
第9192-16	白磁	甕	中国	12.4	6.8	2.7	N区 SK27	
第9192-17	白磁	甕	中国	14.1	7.4	3.2	N区 SK27	
第9192-18	白磁	甕	中国	13.3	7.4	2.0	N区 SK27	12
第9192-19	白磁	甕	中国	—	7.2	—	N区 SK27	
第9192-20	白磁	甕	中国	—	5.2	—	N区 SK27	12
第9192-21	褐輪陶器	甕	中国	—	8.0	—	N区 SK27	12
第9192-1	京都系土師器	耳皿	—	—	—	N区 SK27		12
第9192-2	京都系土師器	耳皿	—	—	—	N区 SK27		
第9192-3	土師貫土器	甕	10.0	6.5	2.4	N区 SK27	底部は回転糸切り。	12
第9192-4	土師貫土器	甕	8.6	6.0	1.9	N区 SK27	口縁にスガが付着。底部は回転糸切り後ナデ直し。	12
第9192-5	土師貫土器	甕	—	6.0	—	N区 SK27	底部は回転糸切り。	
第9192-6	土師貫土器	甕	12.0	6.0	2.2	N区 SK27	京都系土師器との混在。底部は回転糸切り。	
第9192-7	京都系土師器	小皿	5.4	—	1.7	N区 SK27		
第9192-8	京都系土師器	小皿	4.5	—	1.1	N区 SK27		
第9192-9	京都系土師器	甕	8.3	—	1.7	N区 SK27	底部外面に板状圧痕あり。	12
第9192-10	土製品	燗台	—	6.6	—	N区 SK27		13
第9192-11	土製品	土罐	—	—	—	N区 SK27		
第9192-12	土製品	土罐	—	—	—	N区 SK27		
第9192-13	土製品	土罐	—	—	—	N区 SK27		
第9192-14	土師貫土器	甕	10.6	5.0	4.6	N区 SK27		13
第9192-15	京都系土師器	甕	8.0	—	1.5	N区 SK27		
第9192-16	京都系土師器	甕	8.0	—	2.1	N区 SK27		
第9192-17	京都系土師器	甕	8.5	—	2.1	N区 SK27	内面にスガが付着。	13
第9192-18	京都系土師器	甕	8.2	—	2.0	N区 SK27		13
第9192-19	京都系土師器	甕	8.5	—	2.0	N区 SK27	口縁にスガが付着。	13
第9192-20	京都系土師器	甕	8.5	—	2.0	N区 SK27		13
第9192-21	京都系土師器	甕	8.2	—	2.0	N区 SK27		
第9192-22	京都系土師器	甕	9.0	—	1.9	N区 SK27	内面にスガが付着。	13
第9192-23	京都系土師器	甕	9.0	—	2.1	N区 SK27	口縁にスガが付着。	13
第9192-24	京都系土師器	甕	10.6	—	1.9	N区 SK27		13
第9192-25	京都系土師器	甕	11.2	—	1.8	N区 SK27	口縁にスガが付着。	
第9192-26	京都系土師器	甕	10.5	—	2.0	N区 SK27		
第9192-27	京都系土師器	甕	10.5	—	1.9	N区 SK27	底部に穿孔。	13
第9192-28	京都系土師器	甕	11.4	—	2.0	N区 SK27		
第9192-29	京都系土師器	甕	12.0	—	—	N区 SK27		
第9192-30	京都系土師器	甕	12.0	—	2.6	N区 SK27		
第9192-31	京都系土師器	甕	13.0	—	2.0	N区 SK27		
第9192-32	京都系土師器	甕	13.0	—	2.2	N区 SK27		
第9192-33	京都系土師器	甕	13.2	—	2.2	N区 SK27		13
第9192-34	京都系土師器	甕	13.0	—	2.3	N区 SK27		13
第9192-35	京都系土師器	甕	12.4	—	2.0	N区 SK27	口縁にスガが付着。	13
第9192-36	京都系土師器	甕	12.2	—	2.4	N区 SK27		
第9192-37	京都系土師器	甕	12.2	—	2.2	N区 SK27		
第9192-38	京都系土師器	甕	12.0	—	2.3	N区 SK27		13
第9192-39	京都系土師器	甕	12.4	—	2.2	N区 SK27		
第9192-40	京都系土師器	甕	12.8	—	2.4	N区 SK27		13

遺物観察表 8 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑤ (土器・陶磁器類)

探出No.	器種	生産地	法位(単位cm)			遺物名	備考	年代層No.
			口径	底径	高さ			
第97回-41	京都系土器	皿	在	在	2.9	Ⅳ区 SK27		13
第97回-42	京都系土器	杯	在	在	3.9	Ⅳ区 SK27		
第97回-43	京都系土器	杯	在	在	3.5	Ⅳ区 SK27	口縁にスガ付着。	13
第97回-44	京都系土器	杯	在	在	3.7	Ⅳ区 SK27		13
第97回-45	京都系土器	杯	在	在	3.0	Ⅳ区 SK27		
第97回-46	京都系土器	杯	在	在	4.2	Ⅳ区 SK27		
第97回-47	京都系土器	皿	在	在	2.2	Ⅳ区 SK27		
第97回-48	京都系土器	皿	在	在	2.0	Ⅳ区 SK27		
第97回-49	京都系土器	皿	在	在	2.1	Ⅳ区 SK27		
第97回-50	京都系土器	皿	在	在	2.3	Ⅳ区 SK27		13
第97回-51	京都系土器	皿	在	在	—	Ⅳ区 SK27		
第97回-52	京都系土器	皿	在	在	3.0	Ⅳ区 SK27		
第97回-53	京都系土器	皿	在	在	3.1	Ⅳ区 SK27		
第98回-1	陶器	天目	瀬戸系	—	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-2	陶器	天目	瀬戸系	4.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-3	陶器	天目	瀬戸系	11.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-4	須臾器	碗	不明	10.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-5	焼締陶器	徳利	越前	—	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-6	焼締陶器	小鉢	備前	15.4	—	Ⅳ区 SK27		13
第98回-7	陶器	皿	瀬戸系	8.0	—	Ⅳ区 SK27		13
第98回-8	陶器	壺	備前	11.0	—	Ⅳ区 SK27		13
第98回-9	焼締陶器	鉢	不明	16.4	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-10	陶器	平鉢	備前	23.4	14.0 5.4	Ⅳ区 SK27		
第98回-11	陶器	鉢	備前	10.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-1	陶器	壺	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		13
第98回-2	陶器	壺	備前	14.0	—	Ⅳ区 SK27		13
第98回-3	陶器	壺	備前	15.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-4	焼締陶器	小壺	不明	5.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-5	焼締陶器	不明	不明	—	—	Ⅳ区 SK27	注口部。	13
第98回-6	焼締陶器	徳利	越前	10.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-7	陶器	徳利形瓶	備前	12.2	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-8	焼締陶器	鉢	中国	16.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-9	焼締陶器	鉢	中国	21.0	—	Ⅳ区 SK27		
第98回-10	焼締陶器	鉢	中国	14.0	—	Ⅳ区 SK27		13
第98回-11	焼締陶器	鉢	中国	19.5	—	Ⅳ区 SK27		13
第100回-1	陶器	甕鉢	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-2	陶器	甕鉢	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-3	陶器	甕鉢	備前	12.0	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-4	陶器	甕鉢	備前	38.0	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-5	陶器	甕鉢	備前	38.0	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-6	陶器	甕鉢	備前	12.2	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-7	陶器	甕鉢	備前	13.0	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-8	陶器	甕鉢	備前	30.6	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-9	陶器	甕鉢	備前	26.4	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-10	陶器	甕鉢	備前	11.0	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-11	陶器	甕鉢	備前	28.4	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-12	陶器	甕鉢	備前	12.8	—	Ⅳ区 SK27		
第100回-13	陶器	甕鉢	備前	27.5	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-1	陶器	壺	備前	35.2	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-2	陶器	壺	備前	42.8	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-3	陶器	壺	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		14
第101回-4	陶器	壺	備前	36.0	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-5	陶器	壺	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-6	陶器	壺	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-7	陶器	壺	備前	—	—	Ⅳ区 SK27		
第101回-8	陶器	壺	備前	28.8	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-1	瓦質土器	火鉢	在	36.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-2	瓦質土器	火鉢	在	36.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-3	瓦質土器	火鉢	在	36.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-4	瓦質土器	火鉢	在	33.8	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-5	瓦質土器	火鉢	在	35.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-6	瓦質土器	火鉢	在	38.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-7	瓦質土器	火鉢	在	40.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-8	瓦質土器	火鉢	在	43.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-9	瓦質土器	火鉢	在	42.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-10	瓦質土器	風炉	在	36.0	—	Ⅳ区 SK27		14
第102回-11	土師質土器	鉢	在	38.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-12	土師質土器	鉢	在	37.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-13	土師質土器	鉢	在	40.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-14	土師質土器	鉢	在	45.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-15	瓦質土器	鉢	在	47.0	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-16	土師質土器	鉢	在	51.6	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-17	瓦質土器	火鉢	在	—	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-18	瓦質土器	火鉢	在	—	—	Ⅳ区 SK27		
第102回-19	瓦質土器	火鉢	在	34.0	—	Ⅳ区 SK27		

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑥(土器・陶磁器類)

探検No.	器種	生産地	法量(単位cm)			追跡名	備考	注目 No.
			口径	底径	高さ			
第10298-20	瓦質土器	火鉢	在	在	在	N区 SK27		
第10300-1	瓦質土器	皿	在	在	在	N区 SK27		14
第10300-2	土師質土器	鍋	在	在	在	N区 SK27		
第10300-3	瓦質土器	茶	在	在	在	N区 SK27		
第10300-4	瓦質土器	茶	在	在	在	N区 SK27		
第10300-5	瓦質土器	香炉	在	在	在	N区 SK27		14
第10300-6	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK27		
第10300-7	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK27		
第10300-8	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK27		
第10400	土製品	鉢型	不明	不明	不明	N区 SK27		14
第10500-1	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK27	取皿として再利用されている。	
第10500-2	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK27	取皿として再利用されている。	
第10500-3	土製品	取皿	在	在	在	N区 SK27		14
第11200-1	土製品	燗台	在	在	在	N区 SK28		
第11200-2	土製品	燗台	在	在	在	N区 SK28		
第11200-3	土師質土器	皿	在	在	在	N区 SK28		
第11200-4	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK28		
第11200-5	瓦質土器	指鉢	在	在	在	N区 SK28		
第11200-6	須恵器	鉢	不明	不明	不明	N区 SK28		
第11200-7	陶器	指鉢	備前	備前	備前	N区 SK28	内外面とも口クロナデ。	15
第11200-8	土師質土器	鉢	不明	不明	不明	N区 SK28		
第11200-9	瓦質土器	火鉢	在	在	在	N区 SK28	内面はナデ。外面は刷毛目のあとにナデ。	
第11400-1	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-2	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-3	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-4	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		15
第11400-5	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		15
第11400-6	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		15
第11400-7	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-8	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-9	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-10	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-11	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK29		
第11400-12	土師質土器	耳皿	在	在	在	N区 SK29		15
第11400-13	瓦質土器	壺	不明	不明	不明	N区 SK29		
第11400-14	焼締陶器	長胴壺	不明	不明	不明	N区 SK29		15
第11400-15	陶器	指鉢	備前	備前	備前	N区 SK29		15
第11400-16	瓦質土器	茶釜	在	在	在	N区 SK29		15
第11500-1	瓦質土器	浅鉢	在	在	在	N区 SK29		
第11500-2	瓦質土器	火鉢	在	在	在	N区 SK29		
第11500-3	瓦質土器	火鉢	在	在	在	N区 SK29		
第11700-1	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK30		
第11700-2	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK30		
第11700-3	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK30	底面は樹皮糸切り後に刷毛目。 口縁にスズが付着。	
第11900-1	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK31		15
第11900-2	青花	小杯	中国(漳州窯)	中国(漳州窯)	中国(漳州窯)	N区 SK31		15
第11900-3	焼締陶器	小壺	不明	不明	不明	N区 SK31		15
第11900-4	陶器	天目	瀬戸窯遺	瀬戸窯遺	瀬戸窯遺	N区 SK31		15
第11900-5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	中国(景德鎮窯)	中国(景德鎮窯)	N区 SK31		15
第11900-6	白磁	皿	中国	中国	中国	N区 SK31	底面外面に青花。	15
第11900-7	白磁	皿	中国	中国	中国	N区 SK31	取皿として再利用されている。	15
第11900-8	瓦質土器	茶	在	在	在	N区 SK31	2ヶ所に継ぎ目がみられる。	15
第12000-1	陶器	指鉢	備前	備前	備前	N区 SK31		15
第12000-2	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK31		
第12000-3	瓦質土器	火鉢	在	在	在	N区 SK31		15
第12000-4	瓦質土器	火鉢	在	在	在	N区 SK31		15
第12000-5	陶器	指鉢	備前	備前	備前	N区 SK31		15
第12000-6	陶器	指鉢	備前	備前	備前	N区 SK31		15
第12000-7	土師質土器	鍋	在	在	在	N区 SK31		
第12000-8	土師質土器	鍋	在	在	在	N区 SK31		15
第12200	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK32		
第12400	土師質土器	皿	在	在	在	N区 SK33		
第12700	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK35	取皿として再利用されている。	
第12800-1	土製品	鍋羽口	在	在	在	N区 SK36		
第12800-2	陶器	指鉢	備前	備前	備前	N区 SK36		
第13100	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK37		
第13300-1	京都系土師器	坏	在	在	在	N区 SK38		
第13300-2	京都系土師器	坏	在	在	在	N区 SK38		
第13300-3	青磁	皿	中国	中国	中国	N区 SK38		16
第13300-4	龍泉釉	小皿	中国	中国	中国	N区 SK38		
第13300-5	瓦質土器	鉢	在	在	在	N区 SK38		
第13500-1	青花	碗	中国(漳州窯)	中国(漳州窯)	中国(漳州窯)	N区 SK39		16
第13500-3	瓦質土器	風炉	在	在	在	N区 SK39		
第13700-1	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK40		
第13700-2	京都系土師器	皿	在	在	在	N区 SK40		

道物観察表10 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅳ区道物観察表⑦(土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	落度(単位cm)			追掘名	備考	写真 No.
			口縁	底縁	器高			
第1400-1	瓦質土器 火鉢	在地	34.4	—	—	Ⅳ区 SK42		
第1400-2	焼締陶器 壺	中国	16.8	—	—	Ⅳ区 SK42	Ⅰ区 SK05出土の破片と接合できる。	
第1410	陶器 壺	備前	12.4	—	—	Ⅳ区 SK43		
第1420	陶器 皿	中国	—	9.4	—	Ⅳ区 SK44		
第1430-1	焼締陶器 鉢	中国	17.4	—	—	Ⅳ区 SE45		
第1430-2	陶器 漆鉢	備前	—	12.8	—	Ⅳ区 SE45		
第1430-3	瓦質土器 火鉢	在地	36.5	—	—	Ⅳ区 SE45	口縁外面にスタンプあり。	16
第1430-4	陶器 壺	備前	—	22.4	—	Ⅳ区 SE45		
第1440-1	青花 皿	中国	—	7.0	—	Ⅳ区 SE46	五彩。	16
第1440-2	京都系土師器 皿	在地	13.4	—	2.4	Ⅳ区 SE46	取皿として再利用されている。	
第1440-3	土師質土器 皿	在地	—	8.0	—	Ⅳ区 SE46		
第1440-4	土製品 燗合	在地	—	5.5	—	Ⅳ区 SE46		
第1440-5	瓦質土器 火鉢	在地	—	22.8	—	Ⅳ区 SE46		
第1450-1	土師質土器 坪	在地	12.4	9.0	4.0	Ⅳ区 SX48		
第1450-2	土師質土器 坪	在地	13.4	10.0	3.6	Ⅳ区 SX48		
第1450-3	土師質土器 坪	在地	—	8.4	—	Ⅳ区 SX48		
第1450-4	土師質土器 壺	不明	—	—	—	Ⅳ区 SX48	古代。	16
第1470-1	土師質土器 皿	在地	15.4	9.6	2.5	Ⅳ区 SX49		
第1470-2	土師質土器 皿	在地	—	7.0	—	Ⅳ区 SX49		
第1470-3	土師質土器 皿	在地	10.0	6.0	1.9	Ⅳ区 SX49	底部に板状圧痕あり。	16
第1470-4	京都系土師器 小皿	在地	5.0	—	1.9	Ⅳ区 SX49		
第1470-5	土師質土器 皿	在地	—	6.0	—	Ⅳ区 SX49		
第1480-1	陶器 脚皿	瀬戸	—	—	—	Ⅳ区 SX50		
第1480-2	土師質土器 小皿	在地	4.6	2.7	1.3	Ⅳ区 SX50		
第1480-3	土師質土器 皿	在地	10.0	6.0	2.2	Ⅳ区 SX50		
第1480-4	土師質土器 皿	在地	—	5.8	—	Ⅳ区 SX50		
第1480-5	土師質土器 皿	在地	—	6.0	—	Ⅳ区 SX50		
第1480-6	土師質土器 皿	在地	—	6.0	—	Ⅳ区 SX50		
第1480-7	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.1	Ⅳ区 SX50		
第1500	土師質土器 皿	在地	10.0	5.6	2.1	Ⅳ区 SP52		
第1510-1	土師質土器 皿	在地	—	8.8	—	Ⅳ区 SP53		
第1550	瓦質土器 火鉢	在地	40.0	—	—	Ⅳ区 SP57		
第1560-1	京都系土師器 皿	在地	13.8	—	1.9	Ⅳ区 SP58		
第1560-2	陶器 不明	中国	9.0	—	—	Ⅳ区 SP58	黒瀬三彩。	16
第1560-3	瓦質土器 火鉢	在地	34.0	—	—	Ⅳ区 SP58		16
第1570	青花 鉢	中国	5.4	—	—	Ⅳ区 SP59		16
第1580	京都系土師器 皿	在地	9.0	—	1.8	Ⅳ区 SP60		
第1590-1	青花 皿	中国	—	8.4	—	99区		16
第1590-2	青花 皿	中国	12.4	—	—	99区		
第1590-3	土師質土器 皿	在地	7.6	4.0	1.7	99区	取皿として再利用されている。	
第1590-4	陶器 脚皿	瀬戸	—	8.8	—	99区		
第1590-5	土製品 土埴	在地	—	—	—	99区		
第1590-6	青磁 鉢	中国(龍泉窯)	10.0	—	—	99区		
第1590-7	瓦質土器 火鉢	在地	—	—	—	99区	内底に割印あり。	16
第1590-8	瓦質土器 火鉢	在地	—	—	—	99区	外面に菊花形スタンプ。	16
第1590-9	焼締陶器 鉢	中国南部	39.0	—	—	99区		
第1600-1	京都系土師器 小皿	在地	5.0	—	1.6	99区		
第1600-2	京都系土師器 小皿	在地	5.0	—	1.5	99区		
第1600-3	京都系土師器 小皿	在地	4.2	—	1.3	99区		
第1600-4	京都系土師器 皿	在地	8.0	—	1.9	99区		
第1600-5	京都系土師器 皿	在地	7.6	—	1.8	99区	口縁部に煤付跡。	17
第1600-6	京都系土師器 皿	在地	8.2	—	1.9	99区		
第1600-7	京都系土師器 皿	在地	10.0	—	2.1	99区		
第1600-8	京都系土師器 皿	在地	10.4	—	2.0	99区		
第1600-9	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	2.0	99区		
第1600-10	京都系土師器 皿	在地	10.8	—	1.8	99区		
第1600-11	京都系土師器 皿	在地	10.6	—	1.8	99区		
第1600-12	京都系土師器 皿	在地	13.0	—	1.9	99区		
第1600-13	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	1.9	99区		
第1600-14	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.3	99区		
第1600-15	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.2	99区		
第1600-16	京都系土師器 皿	在地	12.9	—	2.4	99区		
第1600-17	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.0	99区		
第1600-18	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.1	99区		17
第1600-19	京都系土師器 皿	在地	12.6	—	2.5	99区		
第1600-20	京都系土師器 皿	在地	12.8	—	2.5	99区		
第1600-21	京都系土師器 皿	在地	12.0	—	2.3	99区		
第1600-22	京都系土師器 皿	在地	10.0	—	1.9	99区		
第1600-23	京都系土師器 皿	在地	10.5	—	2.2	99区		17
第1600-24	京都系土師器 皿	在地	10.5	—	2.1	99区	口縁部に煤付跡。	
第1600-25	京都系土師器 皿	在地	11.0	—	—	99区		
第1600-26	京都系土師器 坪	在地	10.6	—	3.2	99区		
第1600-27	京都系土師器 坪	在地	10.0	—	3.2	99区		
第1600-28	京都系土師器 坪	在地	11.0	—	—	99区		
第1600-29	京都系土師器 皿	在地	14.0	—	2.0	99区		

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表⑧ (土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	流量(単位cm)			遺構名	備考	写真図版 No.
			口径	底径	器高			
第160回-30	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.6	99層	
第160回-31	京都系土師器	皿	在地	17.0	—	2.0	99層	
第160回-32	土師質土器	皿	在地	8.8	5.4	1.7	99層	
第160回-33	土師質土器	皿	在地	9.0	5.4	2.3	99層	口縁部に煤付着。
第160回-34	土師質土器	皿	在地	—	4.4	—	99層	
第160回-35	土師質土器	皿	在地	—	5.0	—	99層	
第160回-36	土師質土器	皿	在地	—	5.6	—	99層	
第160回-37	土師質土器	皿	在地	—	5.4	—	99層	
第160回-38	土師質土器	皿	在地	—	6.4	—	99層	
第160回-39	土師質土器	皿	在地	11.0	5.8	2.7	99層	
第160回-40	土師質土器	皿	在地	13.6	—	—	99層	
第160回-41	土師質土器	皿	在地	—	7.0	—	99層	
第160回-42	土師質土器	坏	在地	12.0	8.3	3.1	99層	
第160回-43	土師質土器	坏	在地	—	8.0	—	99層	
第160回-44	土師質土器	坏	在地	12.0	7.4	3.1	99層	
第160回-45	土師質土器	坏	在地	12.8	9.0	2.8	99層	底部は回転系切り後に板状圧痕。 近世。
第161回-1	陶器	香炉	唐津	—	—	—	7層	
第161回-2	陶器	碗	不明	11.0	—	—	7層	
第161回-3	陶器	皿	唐津	11.8	—	—	7層	17世紀初頭～前半。
第161回-4	磁器	皿	中国	—	—	—	7層	五彩。
第161回-5	磁器	菊花皿	中国南部	—	3.2	—	7層	看草種。底部外面に型押し「福」字。
第161回-6	陶器	不明	中国南部	—	—	—	7層	華南三彩。
第161回-7	青花	碗	中国	11.0	—	—	7層	
第161回-8	陶器	碗	韓平島	15.0	—	—	7層	
第161回-9	陶器	香炉?	不明	—	—	—	7層	
第161回-10	陶器	壺	中国南部	—	—	—	7層	褐釉。
第161回-11	陶器	壺	中国南部	—	—	—	7層	褐釉。
第161回-12	陶器	蓋	中国南部	8.5	—	4.6	7層	褐釉。
第161回-13	陶器	壺	中国南部	—	—	—	7層	褐釉。
第161回-14	青磁	盤	中国(龍泉窯)	—	—	—	7層	
第161回-15	青磁	菊花皿	中国(龍泉窯)	12.0	—	—	7層	
第161回-16	青磁	碗	中国(龍泉窯)	10.8	—	—	7層	細弁蓮分文。
第161回-17	青磁	碗	中国(龍泉窯)	—	6.4	—	7層	
第161回-18	陶器	天目	瀬戸美濃	—	3.8	—	7層	円盤状に加工。
第161回-19	陶器	蓋	中国	8.8	—	—	7層	褐釉。
第161回-20	白磁	皿	中国	9.0	5.0	0.9	7層	
第161回-21	白磁	皿	中国	10.0	5.6	2.2	7層	
第161回-22	白磁	皿	中国	11.6	—	—	7層	
第161回-23	白磁	皿	中国	11.6	5.6	3.2	7層	
第161回-24	白磁	皿	中国	14.0	8.6	3.4	7層	
第162回-1	京都系土師器	小皿	在地	5.0	—	1.5	7層	
第162回-2	京都系土師器	小皿	在地	5.0	—	1.5	7層	
第162回-3	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	2.0	7層	
第162回-4	京都系土師器	皿	在地	8.8	—	1.8	7層	
第162回-5	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.6	7層	
第162回-6	京都系土師器	皿	在地	9.2	—	1.9	7層	
第162回-7	京都系土師器	皿	在地	9.0	—	1.9	7層	
第162回-8	京都系土師器	皿	在地	10.2	—	2.1	7層	
第162回-9	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.0	7層	
第162回-10	京都系土師器	皿	在地	10.6	—	2.0	7層	
第162回-11	京都系土師器	皿	在地	11.0	—	2.6	7層	
第162回-12	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.0	7層	
第162回-13	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.2	7層	
第162回-14	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.1	7層	
第162回-15	京都系土師器	皿	在地	13.0	—	2.1	7層	
第162回-16	京都系土師器	皿	在地	14.0	—	2.5	7層	
第162回-17	京都系土師器	皿	在地	16.6	—	2.2	7層	
第162回-18	京都系土師器	皿	在地	16.0	—	2.6	7層	
第162回-19	土師質土器	埴	在地	—	—	4.0	7層	
第162回-20	土師質土器	皿	在地	—	3.4	—	7層	
第162回-21	土師質土器	皿	在地	8.8	5.0	1.8	7層	
第162回-22	土師質土器	皿	在地	7.4	5.2	1.3	7層	
第162回-23	土師質土器	皿	在地	10.0	6.0	1.5	7層	
第162回-24	土師質土器	坏	在地	13.0	10.0	3.4	7層	
第162回-25	京都系土師器	皿	在地	20.0	—	2.5	7層	
第162回-26	土製品	土鉢	在地	—	—	—	7層	
第162回-27	土製品	土鉢	在地	—	—	—	7層	
第162回-28	瓦質土器	円盤状土製品	在地	—	—	—	7層	周囲を研磨し、円盤状に加工。
第162回-29	瓦質土器	円盤状土製品	在地	—	—	—	7層	周囲を研磨し、円盤状に加工。
第162回-30	土師質土器	円盤状土製品	在地	—	—	—	7層	周囲を研磨し、円盤状に加工。
第162回-31	土師質土器	焼塩壺	不明	—	—	—	7層	
第163回-1	焼埴陶器	鉢	中国	—	—	—	7層	

遺物観察表12 (第9次調査区)

第9次調査区N区遺物観察表⑨ (土器・陶磁器類)

探出No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺物名	備考	写真 No.
				口径	底径	器高			
第16302	2	焼締陶器	瓶	不明	4.6	—	7割		
第16302	3	焼締陶器	壺	タイ	—	—	7割	ノイ川流域。	
第16302	4	焼締陶器	壺	タイ	—	—	7割		
第16302	5	焼締陶器	壺	タイ	—	—	7割	ハンナラ。	17
第16302	6	焼締陶器	壺	不明	—	24.0	7割		
第16302	7	焼締陶器	壺	タイ	—	—	7割		17
第16302	8	陶器	播鉢	備前	22.6	—	7割		
第16302	9	陶器	鉢	備前	16.0	—	7割		
第16302	10	陶器	播鉢	備前	—	14.0	7割		
第16302	11	陶器	壺	備前	22.0	—	7割		
第16302	12	陶器	播鉢	備前	27.0	—	7割		
第16302	13	陶器	掛花入	備前	11.0	—	7割	外面に「T」字状のヘラ記号。	
第16302	14	陶器	壺	備前	40.0	—	7割		17
第16402	1	土製品	取瓶	在地	—	—	7割	鉄滓付着。	
第16402	2	土製品	取瓶	在地	—	—	7割	鉄滓付着。	
第16402	3	土製品	取瓶	在地	—	—	7割	鉄滓付着。	
第16402	4	土製品	取瓶	在地	—	—	7割	鉄滓付着。	
第16402	5	土製品	取瓶	在地	6.4	—	2.2	7割	鉄滓付着。
第16402	6	土製品	取瓶	在地	7.0	—	1.6	7割	鉄滓付着。
第16402	7	土製品	取瓶	在地	5.6	—	1.8	7割	鉄滓付着。
第16402	8	京都系土器	皿	在地	14.0	—	7割	取瓶として再利用。鉄滓付着。	
第16402	9	土製品	取瓶	在地	8.6	—	7割	鉄滓付着。	
第16702	1	青花	急須	不明	—	—	N区		17
第16702	2	京都系土器	坪	在地	12.0	—	3.9	N区	
第16702	3	土師質土器	壺	在地	—	14.0	—	N区	
第16702	4	京都系土器	皿	在地	12.0	—	2.3	N区	
第16702	5	京都系土器	皿	在地	12.5	—	2.5	N区	
第16702	6	京都系土器	皿	在地	13.2	—	1.9	N区	
第16802	1	瓦質土器	鉢	在地	31.0	19.8	10.4	N区	
第16802	2	土師質土器	鉢	在地	30.0	—	—	N区	
第16802	3	土師質土器	壺	在地	12.0	—	—	N区	
第16802	4	土師質土器	壺	在地	—	—	—	N区	
第16802	5	土師質土器	壺	在地	—	—	—	N区	
第16802	6	瓦質土器	火鉢	在地	36.8	—	—	N区	
第16802	7	瓦質土器	火鉢	在地	44.0	39.8	11.5	N区	
第16802	8	瓦質土器	火鉢	在地	42.0	35.0	6.3	N区	

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表 (金属・石製品)

押印No.	品名	材質	部位	寸法 (単位cm)				重量 (g)	遺構名	備考	写真記録 No.
第48図-8	石鍋	滑石	破片	厚さ	1.4	幅	3.2	長さ	8.4	Ⅳ区 SD01	
第58図-1	砥石	結晶片岩	破片	厚さ	0.6	幅	0.6	長さ	7.9	Ⅳ区 SD07	
第64図-26	釘	鉄製	破片	厚さ	0.5	幅	1.3	長さ	6.0	Ⅳ区 SK13	
第64図-27	不明	鉄製	全体	厚さ	0.8	幅	4.2	長さ	20.0	Ⅳ区 SK13	
第66図-1	鏝	鉄製	全体	厚さ	0.8	幅	4.2	長さ	20.0	Ⅳ区 SK14	11
第78図	石臼	安山岩	破片	厚さ	9.0	径	31.0			Ⅳ区 SK19	
第80図-11	不明	軽石	破片	高さ	2.0	径	6.5			Ⅳ区 SK20	中央を穿れた環状石製品。
第84図-12	刀子	鉄製	破片	厚さ	0.3	幅	1.1	長さ	12.3	Ⅳ区 SK22	
第84図-13	不明	鉄製	破片	厚さ	0.7	幅	0.7	長さ	11.5	Ⅳ区 SK22	
第84図-14	不明	鉄製	破片	厚さ	0.7	幅	0.4			Ⅳ区 SK22	
第84図-15	不明	鉄製	破片	厚さ	—	幅	4.0	長さ	8.6	Ⅳ区 SK22	12
第84図-16	釘	鉄製	全体	厚さ	0.7	幅	0.8	長さ	8.6	Ⅳ区 SK22	
第84図-17	火箸?	鉄製	破片	厚さ	0.9	幅	0.6	長さ	31.0	Ⅳ区 SK22	
第108図-1	茶臼	—	破片	径	—	高さ	—		216.7	Ⅳ区 SK27	
第108図-2	石臼	—	破片	径	—	高さ	—		443.2	Ⅳ区 SK27	
第108図-3	砥石	頁岩	破片						149.5	Ⅳ区 SK27	
第108図-4	茶臼	安山岩	破片	径	17.4	高さ	11.4		1900.0	Ⅳ区 SK27	14
第108図-5	石臼	安山岩	破片	径	—	高さ	12.5		3900.0	Ⅳ区 SK27	
第108図-6	石臼	凝灰岩	破片	径	—	高さ	11.2		1900.0	Ⅳ区 SK27	
第108図-7	石臼	安山岩	破片	径	34.0	高さ	11.6		3900.0	Ⅳ区 SK27	
第108図-8	茶臼	安山岩	破片	径	—	高さ	13.4		2900.0	Ⅳ区 SK27	14
第109図-1	不明	鉄製	全体	厚さ	0.5	幅	0.5		7.2	Ⅳ区 SK27	環状。
第109図-2	鏝	鉄製	破片	厚さ	0.5	幅	0.8		11.5	Ⅳ区 SK27	
第109図-3	釘	鉄製	全体	厚さ	0.5	幅	0.5	長さ	9.4	Ⅳ区 SK27	
第109図-4	釘	鉄製	全体	厚さ	0.7	幅	0.7	長さ	8.2	Ⅳ区 SK27	
第109図-5	不明	鉄製	全体	厚さ	0.6	幅	0.6	長さ	9.8	Ⅳ区 SK27	
第109図-6	不明	青銅製	破片						1.2	Ⅳ区 SK27	
第109図-7	不明	青銅製	破片						4.0	Ⅳ区 SK27	
第114図-17	不明	凝灰岩製山鏡	破片	高さ	8.1	径	13.1		399.3	Ⅳ区 SK29	中央を穿れた環状石製品。
第119図-9	不明	鉄製	破片	厚さ	—	幅	4.2	長さ	5.2	Ⅳ区 SK31	木質が付着。
第119図-10	砥石	砂岩	破片	厚さ	2.4	幅	3.8	長さ	7.7	Ⅳ区 SK31	全面使用。
第137図-3	不明	鉄製	全体	厚さ	0.7	幅	0.7		13.2	Ⅳ区 SK40	環状。
第140図-3	砥石	頁岩	破片	厚さ	0.7	幅	3.0	長さ	7.7	Ⅳ区 SK42	
第145図	小玉	ガラス製	全体	高さ	0.2	径	0.35			Ⅳ区 SK46	
第149図	釘	鉄製	破片	厚さ	0.9	幅	0.8	長さ	6.0	Ⅳ区 SX51	
第151図-2	釘	鉄製	破片	厚さ	0.6	幅	0.5	長さ	6.0	Ⅳ区 SP53	
第153図	小玉	ガラス製	全体	高さ	0.8	径	0.65			Ⅳ区 SP55	トンボ玉。
第165図-1	小刀柄	鉄製	破片	厚さ	0.6	長さ	10.8		17.0	7層	
第165図-2	釘	鉄製	破片	厚さ	0.6	幅	0.8	長さ	7.0	7層	
第165図-3	釘	鉄製	破片	長さ	4.8				12.3	7層	
第165図-4	釘	鉄製	破片	厚さ	0.7	幅	0.5	長さ	4.5	7層	
第165図-5	不明	鉄製	破片	厚さ	—	幅	4.2	長さ	5.2	7層	17
第165図-6	不明	銅製	破片						156.4	7層	
第166図-1	不明	凝灰岩	破片						1000.0	7層	
第166図-2	砥石	結晶片岩	破片	厚さ	0.7	幅	4.7	長さ	11.0	7層	
第166図-3	砥石	砂岩	破片	厚さ	0.3	幅	2.8	長さ	3.6	7層	

遺物観察表14 (第9次調査区)

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表 (瓦)

押印No.	品種	部位	寸法 (単位cm)				遺構名	備考	押印No.
第94図	不明	破片	厚	3.6			Ⅳ区 SK26	裏面は刷毛目。表面にナデ。	
第106図-1	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第106図-2	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第106図-3	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第106図-4	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
	瓦頭部	高さ	5.0	厚	3.0	—	Ⅳ区 SK27	均等唐草文。	14
第106図-5	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第106図-6	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第106図-7	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第106図-8	平瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第107図-1	不明	破片	厚	3.0			Ⅳ区 SK27	裏面は刷毛目。表面にナデ。	
第107図-2	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第107図-3	不明	破片	厚	3.1			Ⅳ区 SK27	表裏面ともナデ。	
第107図-4	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第107図-5	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第107図-6	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK27		
第135図-3	丸瓦	破片	長さ	—	幅	—	Ⅳ区 SK39	瓦頭部に巴文、圓部に連珠。	16
	瓦頭部	径	15.0	厚	2.8				

第9次調査区Ⅳ区遺物観察表 (銭貨)

押印No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	遺構名	重量 (g)	直径 (mm)	容体	備考	押印No.
第51図-1	正徳元貨	1157	金	Ⅳ区 SD01	3.2	2.4	—		
第51図-2	元祐通寶	1086	北宋	Ⅳ区 SD01	2.7	2.4	—	銭書	
第51図-3	祥符通寶	1009	北宋	Ⅳ区 SD01	2.5	2.4	—		
第51図-4	開元通寶	621	唐	Ⅳ区 SD01	2.4	2.2	—		
第51図-5	不明	—	—	Ⅳ区 SD01	3.4	2.4	—		
第51図-6	祥符通寶	1009	北宋	Ⅳ区 SD01	3.4	2.4	—		
第51図-7	太平通寶	976	北宋	Ⅳ区 SD01	2.8	2.4	—		
第51図-8	熙寧元貨	1068	北宋	Ⅳ区 SD01	3.9	2.5	—	銭書	
第51図-9	元豐通寶	1078	北宋	Ⅳ区 SD01	3.3	2.4	—	銭書	
第51図-10	不明	—	—	Ⅳ区 SD01	2.3	2.5	—		
第85図	景德元貨	1004	北宋	Ⅳ区 SK22	2.2	2.4	—		
第110図-1	正徳元貨	1157	金	Ⅳ区 SK27	1.6	2.3	—	真書	
第110図-2	治平元貨	1064	北宋	Ⅳ区 SK27	1.9	2.4	—	真書	
第110図-3	熙寧通寶	1038	北宋	Ⅳ区 SK27	2.4	2.4	—	真書	
第110図-4	不明	—	—	Ⅳ区 SK27	2.7	2.4	—		
第110図-5	不明	—	—	Ⅳ区 SK27	1.3	—	—		
第152図-1	開元通寶	621	唐	Ⅳ区 SP54	1.1	—	—		
第152図-2	不明	—	—	Ⅳ区 SP54	1.0	—	—		
第154図-1	不明	—	—	Ⅳ区 SP56	2.2	2.4	—		
第154図-2	不明	—	—	Ⅳ区 SP56	1.4	—	—		
第169図-1	景祐元貨	1034	北宋	Ⅳ区	1.7	2.4	—		
第169図-2	元豐通寶	1078	北宋	Ⅳ区	2.8	2.4	—	行書	
第169図-3	元祐通寶	1086	北宋	Ⅳ区	3.4	2.4	—	行書	
第169図-4	元祐通寶	1086	北宋	Ⅳ区	2.9	2.4	—	行書	
第169図-5	紹聖元貨	1094	北宋	Ⅳ区	1.4	2.4	—	銭書	

第13次調査区遺物観察表① (土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	実測図 No.
			口径	底径	器高			
第174区-1	磁器	碗		4.6		SD 096	18世紀前半	
第175区-1	陶器	埴		4.8		SD 013		22
第175区-2	青磁	碗	11.3	4.5	7.6	SD 013	1640年~1650年	
第175区-3	陶器	片口				SD 013	17世紀末~18世紀前半	
第176区-1	青花	碗		4.4		SD 097	E群	
第176区-2	磁器	皿		5.4		SD 097		22
第176区-3	陶器	皿	10.5	4.0	2.9	SD 097	唐津	
第176区-4	磁器	小碗		3.2		SD 097		
第176区-5	磁器	小碗	8.6	3.2	3.4	SD 097	五弁花文(コンニャク印版)	22
第176区-6	磁器	皿	13.5			SD 097		
第176区-7	磁器	小鉢	6.6		4.2	SD 097		
第176区-8	陶器	鉢				SD 097		
第176区-9	陶器	鉢				SD 097		
第176区-10	瓦質土器	火鉢				SD 097		
第176区-11	備前焼	小壺				SD 097		
第177区-1	磁器	皿	15.7		1.9	SD 098		
第177区-2	白磁	皿	12.3	2.6	5.3	SD 098		
第177区-3	磁器	皿				SD 098	内面黒塗り	
第177区-4	陶器	皿	16.3	4.4	3.8	SD 098	胎土目	22
第177区-5	陶器	小壺		9.6		SD 098		
第177区-6	陶器	埴	14.8	7.0	5.0	SD 098		
第177区-7	京都系土師器	皿		8.6	1.9	SD 098	口唇部全周にわたリス付着	
第177区-8	京都系土師器	皿		12.4	2.3	SD 098		
第177区-9	京都系土師器	皿		14.6		SD 098		
第177区-10	瓦質土器	羽釜				SD 098	把手	
第180区-1	土師質土器	皿	8.4	6.6	1.3	SD 542		22
第180区-2	土師質土器	埴	11.4	8.4	3.6	SD 542		
第180区-3	土師質土器	埴	12.4	8.8	4.0	SD 542		22
第180区-4	土師質土器	埴	12.6	8.7	2.9	SD 542		22
第180区-5	瓦質土器	土鍋	29.0			SD 542		
第181区-1	京都系土師器	皿	10.9		2.0	SD 584		
第182区-1	陶器	鉢				SD 539		
第182区-2	瓦質土器	鉢				SD 539		
第184区-1	京都系土師器	皿	8.4		1.8	SK 008		
第184区-2	京都系土師器	皿	8.8	4.0	1.2	SK 008		
第184区-3	土師質土器	皿	12.8	7.5	2.7	SK 008		
第187区-1	里陶器	麦蓋	12.7			SK 010		
第187区-2	京都系土師器	皿	11.0	4.8	2.1	SK 010		
第187区-3	京都系土師器	皿	12.4		2.8	SK 010		
第187区-4	土師質土器	埴		6.5		SK 010		
第190区-1	白磁	皿	10.7	6.0		SK 011		
第193区-1	磁器	皿	6.0	3.8	1.0	SK 012	翡翠輪	22
第193区-2	陶器	漆鉢		13.0		SK 012	斜め襷目	
第193区-3	陶器	鉢				SK 012		
第193区-4	京都系土師器	皿	9.0		2.1	SK 012		
第193区-5	京都系土師器	皿	14.6		2.1	SK 012		
第193区-6	京都系土師器	皿	16.1	10.0	2.5	SK 012		
第193区-7	土師質土器	埴	11.9	7.6	2.9	SK 012		
第193区-8	瓦質土器	漆鉢				SK 012		
第195区-1	青花	碗	11.8	6.0	4.8	SK 032	E群	22
第195区-2	磁器	皿	9.6	2.3	3.8	SK 032		22
第195区-3	青磁	皿		9.0		SK 032		22
第195区-4	陶器	壺		14.0		SK 032		
第195区-5	京都系土師器	皿	8.0		2.1	SK 032		
第195区-6	京都系土師器	皿	8.9		2.2	SK 032		
第195区-7	京都系土師器	皿	11.4		2.3	SK 032		
第195区-8	京都系土師器	皿	11.8	4.9	2.9	SK 032		
第196区-1	京都系土師器	皿	12.9	5.3	2.3	SK 044		
第196区-2	京都系土師器	皿	14.7	9.0	2.0	SK 044		
第196区-3	京都系土師器	皿	16.1		2.5	SK 044		
第201区-1	京都系土師器	埴	10.8		3.95	SK 074	口縁部から胴部にかけてス付着	
第201区-2	磁器	皿				SK 074	翡翠輪	
第201区-3	磁器	皿				SK 074	翡翠輪	
第202区-1	京都系土師器	皿	13.1		2.0	SK 089		
第205区-1	青花	碗		4.0		SK 110	C群	22
第205区-2	磁器	碗				SK 110		22
第205区-3	磁器	碗		4.7		SK 110		
第205区-4	青花	皿		1.7	2.0	SK 110	C群	22
第205区-5	磁器	皿	11.2	6.8	2.5	SK 110	E群	
第205区-6	青花	皿	20.0	9.8	3.1	SK 110	F群 両面に彫りが入る	22
第205区-7	青磁	碗		4.8		SK 110	貫入あり	
第205区-8	陶器	天目	12.4			SK 110		
第205区-9	陶器	漆鉢				SK 110	斜め襷目	
第205区-10	陶器	漆鉢		13.2		SK 110	斜め襷目	
第206区-11	陶器	鉢	26.0			SK 110		

遺物観察表16 (第13次調査区)

第13次調査区遺物観察表② (土器・陶磁器類)

採出No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第206図-12	京都系土師器 皿	在地	8.6		2.3	SK 110		
第206図-13	京都系土師器 皿	在地	8.2		1.9	SK 110	口唇部にスス付着	
第206図-14	京都系土師器 皿	在地	9.0		2.2	SK 110	口唇部にスス付着	
第206図-15	京都系土師器 皿	在地	9.2		2.2	SK 110		
第206図-16	京都系土師器 皿	在地	12.3	6.7	2.4	SK 110		
第206図-17	京都系土師器 皿	在地	12.2		2.3	SK 110		
第206図-18	京都系土師器 皿	在地	11.5	6.0	3.4	SK 110		
第206図-19	瓦質土器 茶釜	在地	14.2			SK 110		22
第206図-20	瓦質土器 羽釜	在地				SK 110	底部にスス付着	
第206図-21	瓦質土器 風炉	在地	33.8			SK 110		
第206図-22	瓦質土器 播鉢	在地	31.0			SK 110	斜め播り目	
第207図-23	瓦質土器 火鉢	在地	37.2	33.8	8.3	SK 110		
第207図-24	瓦質土器 火鉢	在地	42.4	40.4	9.6	SK 110		
第207図-25	瓦質土器 火鉢	在地	42.4			SK 110	口縁部破片	
第207図-26	瓦質土器 火鉢	在地	32.2			SK 110		
第207図-27	瓦質土器 火鉢	在地		27.8		SK 110	底部	
第208図-28	瓦質土器 鉢	在地	32.0	22.0	21.8	SK 110		
第208図-29	瓦質土器 鉢	在地		20.2		SK 110		
第208図-30	瓦質土器 鉢	在地				SK 110		
第208図-31	瓦質土器 鉢	在地				SK 110		
第208図-32	瓦質土器 焙烙	在地				SK 110	把手	
第208図-33	瓦質土器 埴	在地		5.4		SK 110		
第210図-1	瓦質土器 鉢	在地		8.0		SK 135		
第211図-1	陶器 天目	瀬戸美濃	10.8			SK 137		
第211図-2	土師質土器 小皿	在地	8.8	2.0	5.8	SK 137		
第211図-3	土師質土器 小皿	在地	9.1	1.9	6.2	SK 137		
第213図-1	京都系土師器 坏	在地	11.6		3.95	SK 145		
第213図-2	京都系土師器 皿	在地	11.6			SK 145		
第216図-1	白磁 皿	中国	9.1	4.0	2.6	SK 169	菊花皿	
第216図-2	京都系土師器 皿	在地	8.5		2.5	SK 169		
第216図-3	京都系土師器 皿	在地	8.6		2.3	SK 169		
第216図-4	京都系土師器 皿	在地	9.0		2.3	SK 169		
第216図-5	京都系土師器 皿	在地	10.8		2.7	SK 169		
第216図-6	京都系土師器 皿	在地	12.8		2.9	SK 169		
第216図-7	京都系土師器 皿	在地	12.7		2.8	SK 169		
第216図-8	京都系土師器 坏	在地	11.5		4.0	SK 169		
第216図-9	瓦質土器 埴	在地	10.2	5.6	4.4	SK 169		23
第216図-10	瓦質土器 鉢	在地	21.6			SK 169		
第216図-11	陶器 播鉢	備前	27.9	11.2		SK 169	斜め播り目	
第218図-1	京都系土師器 皿	在地	8.4	4.0	1.9	SK 181		
第218図-2	瓦質土器 播鉢	在地	28.4			SK 181		
第220図-1	京都系土師器 皿	在地	8.8		2.2	SK 200	口唇部にスス付着	
第220図-2	京都系土師器 皿	在地	12.3		2.7	SK 200	内外に黒斑あり スス付着	
第220図-3	京都系土師器 皿	在地	13.0		2.5	SK 200		
第220図-4	京都系土師器 皿	在地	12.6		2.6	SK 200		
第220図-5	土師質土器 坏	在地	11.6		2.5	SK 200		
第220図-6	瓦質土器 鉢	在地	40.0			SK 200		
第221図-1	京都系土師器 皿	在地	8.1		1.9	SK 201		
第221図-2	京都系土師器 皿	在地	12.5		2.5	SK 201		
第224図-1	京都系土師器 皿	在地	8.5		1.9	SK 208	口唇部にスス付着	
第224図-2	土師質土器 小皿	在地	8.0	4.6	2.0	SK 208		
第225図-1	磁器 合子	中国				SK 236	蕨草軸	
第226図-1	瓦質土器 火鉢	在地		42.0		SK 252		
第228図-1	京都系土師器 皿	在地				SK 212		
第228図-2	土師質土器 小皿	在地		5.0		SK 212		
第228図-3	土師質土器 耳皿	在地	3.9		2.3	SK 212		
第229図-1	京都系土師器 皿	在地	12.7		2.0	SK 235		
第231図-1	青花 皿	中国(景德鎮窯)	15.6			SK 237	E群	
第231図-2	京都系土師器 皿	在地	8.4		2.0	SK 237		
第231図-3	京都系土師器 皿	在地	8.6		2.0	SK 237	口唇部にスス付着	
第231図-4	京都系土師器 皿	在地	8.8		2.0	SK 237		
第231図-5	京都系土師器 皿	在地	8.8		2.5	SK 237		
第231図-6	京都系土師器 皿	在地	9.0		2.1	SK 237	口唇部にスス付着	
第231図-7	京都系土師器 皿	在地	9.1		2.3	SK 237		
第231図-8	京都系土師器 皿	在地	9.2		1.9	SK 237		
第231図-9	京都系土師器 皿	在地	12.2		2.5	SK 237		
第231図-10	京都系土師器 皿	在地	12.7		2.8	SK 237	黒斑あり	
第231図-11	土師質土器 坏	在地	9.2		2.5	SK 237		
第233図-1	陶器 播鉢	備前				SK 238		
第233図-2	京都系土師器 皿	在地	8.7		2.2	SK 238	口唇部内外にスス付着	
第233図-3	京都系土師器 皿	在地	12.6		2.5	SK 238	内外に黒斑あり	
第233図-4	京都系土師器 皿	在地	12.0		2.6	SK 238	内面にスス付着	
第236図-1	陶器 瓶	中国				SK 239	鉄銘	
第236図-2	陶器 壺	備前	15.0			SK 239		
第236図-3	陶器 鉢	備前				SK 239		

第13次調査区遺物観察表③ (土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第236図-4	瓦質土器	火鉢	在地		23.4	SK 239		
第236図-5	瓦質土器	焙烙	在地	27.4	4.0	SK 239	外面に黒斑あり	
第236図-6	瓦質土器	鉢	在地	24.6	8.6	SK 239		
第236図-7	瓦質土器	鉢	在地		15.2	SK 239		
第238図-1	陶磁器	西耳壺	中国	11.0		SK 247	へら記号、重ね焼痕	23
第238図-2	瓦質土器	羽釜	在地	13.3		SK 247		
第238図-3	京都系土師器	皿	在地	8.7	2.1	SK 247		
第238図-4	京都系土師器	皿	在地	12.0	5.7	SK 247		
第239図-1	京都系土師器	皿	在地	12.4	6.6	SK 248		
第243図-1	陶器	甕	備前	28.5	27.0	SK 250		
第243図-2	陶器	甕	備前		41.6	SK 250		
第243図-3	陶器	甕	備前		39.0	SK 251		
第244図-1	京都系土師器	皿	在地	9.0	2.1	SK 255	口唇部内外にスス付着	
第244図-2	京都系土師器	皿	在地	12.2	2.7	SK 255		
第244図-3	在地系土師器	小皿	在地	7.6	5.8	SK 255		
第244図-4	在地系土師器	小皿	在地	8.3	5.4	SK 255		
第246図-1	京都系土師器	皿	在地	8.8	2.3	SK 279		
第246図-2	京都系土師器	皿	在地	12.2	2.6	SK 279		
第246図-3	須恵質土器	甕	国産			SK 279		
第250図-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)			SK 282	二次被熱	
第253図-1	土師質土器	耳皿	在地	5.6	2.0	SK 285		
第253図-2	京都系土師器	皿	在地	11.1	4.8	SK 285		23
第253図-3	京都系土師器	皿	在地	13.2	7.9	SK 285		23
第253図-4	京都系土師器	皿	在地	14.8	9.1	SK 285		
第253図-5	京都系土師器	皿	在地	17.4	11.5	SK 285		
第253図-6	京都系土師器	皿	在地	17.3	9.8	SK 285		23
第254図-1	京都系土師器	皿	在地	8.7	1.9	SK 287		
第257図-1	陶器	描鉢	備前	26.7		SK 290		
第257図-2	京都系土師器	皿	在地	11.1	5.5	SK 290		
第257図-3	京都系土師器	皿	在地	14.2	8.2	SK 290		
第258図-1	京都系土師器	皿	在地	8.5	4.2	SK 295	口唇部内外にスス付着	
第258図-2	京都系土師器	皿	在地	11.1	5.2	SK 295		
第258図-3	京都系土師器	皿	在地	12.8	7.2	SK 295		
第261図-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)			SK 341	F群	23
第261図-2	京都系土師器	坏	在地	11.8	6.7	SK 361		
第263図-1	磁器	皿	中国(汝窯窯)			SK 343		23
第263図-2	陶器	瓶	備前		8.4	SK 343		
第263図-3	陶器	描鉢	備前			SK 343		
第263図-4	京都系土師器	皿	在地	11.9	2.5	SK 343		
第263図-6	京都系土師器	皿	在地	8.5	2.3	SK 345		
第266図-1	京都系土師器	皿	在地	8.7	2.1	SK 354		
第266図-2	陶器	鉢	備前	21.8		SK 354		
第268図-1	京都系土師器	皿	在地	8.6	2.3	SK 355	口唇部内外にスス付着	
第268図-2	瓦質土器	描鉢	在地	28.0	12.0	SK 355	斜め描り目	
第270図-1	白磁	皿	中国	12.2	6.2	SK 356		
第270図-2	青磁	皿	中国(龍泉窯)	11.7	5.5	SK 356	種花皿	
第270図-3	白磁	皿	中国	12.9	7.2	SK 357	貫入あり	
第270図-4	京都系土師器	皿	在地	10.8	2.2	SK 357	内外に黒斑あり	
第270図-5	京都系土師器	皿	在地	11.0	2.3	SK 357	口唇部内外にスス付着	
第270図-6	京都系土師器	皿	在地	14.8	2.5	SK 357	内外に黒斑あり スス付着 穿孔	
第270図-7	京都系土師器	坏	在地	11.2		SK 357		
第270図-8	土師質土器	坏	在地		6.3	SK 357		
第271図-1	京都系土師器	皿	在地	8.9	1.9	SK 359		
第271図-2	京都系土師器	皿	在地	12.2	2.4	SK 359		
第271図-3	瓦質土器	埴	在地	11.0	6.0	SK 359		
第271図-4	陶器	甕	備前		42.0	SK 359		
第274図-1	京都系土師器	皿	在地	8.8	1.8	SK 360		
第274図-2	京都系土師器	皿	在地	9.1	2.3	SK 360		
第274図-3	京都系土師器	皿	在地	12.1	2.5	SK 360		
第274図-4	瓦質土器	火鉢	在地		33.0	SK 360		
第274図-5	瓦質土器	羽釜	在地	13.3		SK 360		
第274図-6	瓦質土器	描鉢	在地		11.6	SK 360		
第276図-1	青磁	小皿	中国(龍泉窯)	7.2	3.7	SK 367		
第276図-2	瓦質土器	埴	在地		5.0	SK 367		
第278図-1	京都系土師器	皿	在地	11.0	2.1	SK 368		
第278図-2	京都系土師器	皿	在地	13.2	2.7	SK 368		
第278図-3	京都系土師器	皿	在地	13.3	2.8	SK 368		
第278図-4	京都系土師器	皿	在地	11.2	2.4	SK 368		
第278図-5	京都系土師器	皿	在地	13.6	2.2	SK 368		
第278図-6	京都系土師器	皿	在地	14.4	2.1	SK 368		
第278図-7	京都系土師器	皿	在地	16.9	2.6	SK 368		
第278図-8	京都系土師器	焼塩釜蓋	在地	4.8	1.8	SK 368		
第278図-9	京都系土師器	焼塩釜蓋	在地	5.0	1.7	SK 368		
第278図-10	京都系土師器	焼塩釜蓋	在地	5.6	1.6	SK 368		
第279図-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	4.2		SK 371		23

遺物観察表18 (第13次調査区)

第13次調査区遺物観察表④ (土器・陶磁器類)

採得No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
				口径	底径	器高			
第279区-2	磁器	皿	中国			3.8	SK 371	箱塚輪	23
第279区-3	陶器	天目	瀬戸美濃	11.4			SK 371		
第279区-4	京都系土師器	皿	在地	8.2		1.9	SK 371	口唇部内外にスス付着	
第279区-5	京都系土師器	皿	在地	9.0		2.2	SK 371	口唇部内外にスス付着	
第279区-6	京都系土師器	皿	在地	9.1	4.3	1.8	SK 371		
第279区-7	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.7	SK 371		
第279区-8	陶器	播鉢	備前				SK 371	斜め播り目	
第280区-9	瓦質土器	鉢	在地	30.0			SK 371		
第280区-10	瓦質土器	火鉢	在地	40.0			SK 371	豊後大分型スタンプ(双跡磨手文)	
第280区-11	瓦質土器	火鉢	在地			34.2	SK 371	豊後大分型スタンプ(双跡磨手文)	
第282区-1	陶器	播鉢	備前	20.6	10.0	9.9	SK 379		
第285区-1	青花	碗	中国(景德鎮窯)			4.4	SK 380	E群	23
第285区-2	陶器	皿	瀬戸美濃	10.8		2.35	SK 380		
第285区-3	京都系土師器	皿	在地	9.1	4.3	2.1	SK 380	口縁にスス付着	
第285区-4	瓦質土器	鉢	在地				SK 380		
第287区-1	白磁	皿	中国			7.8	SK 381		
第287区-2	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.4	SK 381		
第287区-3	京都系土師器	皿	在地	15.6		2.15	SK 381		
第287区-4	土師質土器	焼塼葺蓋	在地	5.4		1.8	SK 381		
第287区-5	土師質土器	焼塼葺蓋	在地	5.5		1.6	SK 381		
第289区-1	瓦質土器	鉢	在地	37.1			SK 383		
第291区-1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	13.8		5.4	SK 385		
第291区-2	京都系土師器	皿	在地	10.0		2.3	SK 385		
第291区-3	京都系土師器	皿	在地	11.1		2.3	SK 385		
第291区-4	京都系土師器	皿	在地	16.8		2.5	SK 385		
第291区-5	陶器	播鉢	備前	26.6			SK 385		
第293区-1	土師質土器	坏	在地	12.3	8.5	3.5	SK 386		
第293区-2	土師質土器	坏	在地	13.0	9.0	3.5	SK 386		
第295区-1	土師質土器	小皿	在地	7.4	6.6	1.3	SK 439		
第295区-2	土師質土器	小皿	在地	7.2	5.6	1.6	SK 439		
第295区-3	土師質土器	小皿	在地	7.6	6.0	1.4	SK 439		
第295区-4	土師質土器	小皿	在地	9.0	7.3	1.7	SK 439		23
第295区-5	土師質土器	小皿	在地	8.2	6.2	2.1	SK 439		
第295区-6	土師質土器	小皿	在地	8.7	6.9	2.1	SK 439		
第295区-7	土師質土器	小皿	在地	9.3	7.4	1.7	SK 439		
第295区-8	土師質土器	小皿	在地	9.1	7.0	1.8	SK 439		23
第295区-9	土師質土器	小皿	在地	7.7	5.4	2.2	SK 439		
第295区-10	土師質土器	小皿	在地	7.5	5.9	2.4	SK 439		
第295区-11	土師質土器	小皿	在地	8.3	6.4	2.1	SK 439		
第295区-12	土師質土器	小皿	在地	8.8	5.9	1.6	SK 439		23
第295区-13	土師質土器	小皿	在地	8.3	5.5	2.0	SK 439		23
第295区-14	土師質土器	小皿	在地	8.7	5.7	2.4	SK 439		
第295区-15	土師質土器	小皿	在地	8.4	6.0	2.3	SK 439		
第295区-16	土師質土器	皿	在地	13.4	9.1	4.8	SK 439		
第295区-17	土師質土器	皿	在地	13.9	8.2	4.4	SK 439		23
第295区-18	土師質土器	皿	在地	13.6	9.5	4.2	SK 439		
第295区-19	土師質土器	皿	在地	13.5	9.8	4.5	SK 439		
第295区-20	土師質土器	皿	在地	12.4	9.0	3.6	SK 439		
第296区-21	土師質土器	皿	在地	13.5	8.0	5.2	SK 439		
第296区-22	土師質土器	皿	在地	13.5	8.3	4.8	SK 439		
第296区-23	土師質土器	皿	在地	12.1	8.2	4.0	SK 439		
第296区-24	土師質土器	皿	在地	13.0	7.5	4.5	SK 439		
第296区-25	土師質土器	皿	在地	12.3	7.9	3.7	SK 439		
第296区-26	土師質土器	皿	在地	14.5	8.7	4.6	SK 439		
第296区-27	土師質土器	皿	在地	11.0	7.9	2.8	SK 439		
第296区-28	土師質土器	皿	在地	11.2	8.3	2.6	SK 439		
第296区-29	土師質土器	皿	在地	14.1	8.5	4.6	SK 439		23
第296区-30	土師質土器	皿	在地	12.7	9.0	3.2	SK 439		
第296区-31	土師質土器	皿	在地	13.0	8.5	3.5	SK 439		
第296区-32	土師質土器	皿	在地	12.1	8.1	2.7	SK 439		
第296区-33	土師質土器	皿	在地	13.5	9.4	2.9	SK 439		
第296区-34	土師質土器	皿	在地	13.9	9.5	3.2	SK 439		
第296区-35	土師質土器	皿	在地	14.5	10.1	3.5	SK 439		
第296区-36	土師質土器	皿	在地	12.7	8.8	3.0	SK 439		23
第296区-37	土師質土器	皿	在地	12.4	8.7	3.0	SK 439		
第296区-38	土師質土器	皿	在地	12.4	8.1	3.4	SK 439		
第297区-39	土師質土器	皿	在地	12.7	8.5	3.3	SK 439		
第297区-40	土師質土器	皿	在地	12.7	8.6	3.6	SK 439		
第297区-41	土師質土器	皿	在地	13.2	8.6	3.0	SK 439		
第297区-42	土師質土器	皿	在地	13.3	7.9	3.3	SK 439		
第297区-43	土師質土器	皿	在地	13.3	9.9	3.0	SK 439		
第297区-44	土師質土器	皿	在地	13.2	9.4	3.6	SK 439		
第297区-45	土師質土器	皿	在地	13.3	8.2	3.2	SK 439		23
第297区-46	土師質土器	皿	在地	12.4	8.0	3.2	SK 439		
第297区-47	土師質土器	皿	在地	12.6	8.3	3.3	SK 439		

第13次調査区遺物観察表⑤ (土器・陶磁器類)

採回No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真図版 No.		
			口径	底径	器高					
第297図-48	土師質土器	皿	在地	12.8	8.5	3.0	SK 439	23		
第297図-49	土師質土器	皿	在地	12.6	8.6	2.8	SK 439			
第297図-50	土師質土器	皿	在地	12.6	7.8	3.2	SK 439			
第297図-51	土師質土器	皿	在地	12.5	8.7	2.7	SK 439			
第297図-52	土師質土器	皿	在地	12.5	8.4	2.9	SK 439			
第297図-53	土師質土器	皿	在地	12.9	8.1	2.1	SK 439			
第298図-54	土師質土器	皿	在地	12.8	8.2	3.5	SK 439			
第298図-55	土師質土器	皿	在地	13.1	9.3	2.7	SK 439			
第298図-56	土師質土器	皿	在地	14.0	9.8	3.4	SK 439			
第298図-57	土師質土器	皿	在地	13.2	8.7	3.0	SK 439			
第298図-58	土師質土器	皿	在地	13.1	9.2	3.0	SK 439	23		
第298図-59	土師質土器	皿	在地	14.1	11.0	2.9	SK 439			
第298図-60	土師質土器	擂鉢	在地	30.7			SK 439			
第298図-61	土師質土器	擂鉢	在地		12.6		SK 439	24		
第299図-1	陶器	中国				SK 457	華南三彩			
第302図-1	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.0	SK 465			
第302図-2	陶器	肥前	在地	12.6	5.1		SK 465		唐津	
第304図-1	瓦質土器	鍋	在地	28.5			SK 484			
第306図-1	陶器	瀬戸美濃		12.0			SK 545			
第307図-1	朝鮮産陶器	坏	朝鮮				SK 580		彫三鳥	
第310図-1	土師質土器	埴	在地	12.5	9.5	3.6	SK 583		24	
第310図-2	土師質土器	皿	在地	12.6	6.2	4.0	SK 583		段々土師器	24
第312図-1	磁器	皿	中国(遼州窯)	13.8			SK 702		24	
第312図-2	黒糖陶器	香蓋	中国	10.6			SK 702			
第312図-3	京都系土師器	皿	在地	26.6			SK 702	内面底部に黒変あり 脚部		
第314図-1	青磁	香炉	中国(陽泉窯)				SX 124			
第314図-2	陶器	天目	瀬戸美濃	11.0			SX 124			
第314図-3	陶器	壺	備前		9.6	16.1	SX 124			
第314図-4	陶器	擂鉢	備前				SX 124	斜めすり目		
第314図-5	瓦質土器	擂鉢	在地	13.4		5	SX 124			
第314図-6	土師質土器	焼塩香蓋	在地	5.2		2.8	SX 124			
第316図-1	瓦質土器	火鉢	在地	47.2			SX 126			
第318図-1	京都系土師器	皿	在地	8.6		1.9	SX 284			
第318図-2	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.2	SX 284			
第318図-3	京都系土師器	皿	在地	13.9		2.4	SX 284			
第318図-4	京都系土師器	皿	在地	11.4		2.8	SX 284			
第318図-5	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.6	SX 284			
第318図-6	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.2	SX 284			
第318図-7	京都系土師器	皿	在地	16.4		2.3	SX 284			
第318図-8	京都系土師器	皿	在地	20.9			SX 284			
第318図-9	瓦質土器	火鉢	在地	45.0	34.0	38.5	SX 284			
第320図-1	京都系土師器	皿	在地	8.0		1.8	SX 458			
第320図-2	京都系土師器	皿	在地	10.2		2.2	SX 458	24		
第320図-3	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.0	SX 458			
第320図-4	京都系土師器	皿	在地	10.6		2.1	SX 458		内面底部に数個くぼみあり	
第320図-5	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.2	SX 458			
第320図-6	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.0	SX 458			
第320図-7	京都系土師器	皿	在地	11.8		2.3	SX 458			
第320図-8	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.5	SX 458			
第320図-9	在地系土師器	耳皿	在地	6.2	4.6	1.8	SX 458			
第320図-10	瓦質土器	擂鉢	在地	28.3		8.7	SX 458			
第321図-1	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.5	SX 585			
第321図-2	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.1	SX 585			
第321図-3	京都系土師器	皿	在地	17.2		2.0	SX 585			
第321図-4	瓦質土器	鉢	在地	31.4			SX 585			
第326図-1	白磁	皿	中国		7.5	1.9	SX 551			
第326図-2	白磁	皿	中国	11.7	5.7	2.6	SX 551	24		
第326図-3	青磁	皿	中国	11.4		2.2	SX 551		菊花皿 桜花皿	
第326図-4	陶器	中国		4.4			SX 551	華南三彩		
第326図-5	陶器	天目	瀬戸美濃	11.8			SX 551			
第326図-6	陶器	肥前	在地	12.0	4.6	3.8	SX 551	胎土目	24	
第326図-7	陶器	壺	備前	11.2	9.8	16.4	SX 551	24		
第326図-8	陶器	壺	備前		15.4		SX 551			
第326図-9	陶器	擂鉢	備前	28.2	12.3	13.3	SX 551			
第327図-10	陶器	擂鉢	備前	33.7	12.2	14.9	SX 551	斜めすり目	24	
第327図-11	陶器	擂鉢	備前	30.4		8.1	SX 551			
第327図-12	陶器	擂鉢	備前	39.0		8.5	SX 551	斜めすり目		
第328図-13	京都系土師器	皿	在地	8.3		2.2	SX 551	全周口唇部にスス付着		
第328図-14	京都系土師器	皿	在地	8.3		2.0	SX 551	口唇部にスス付着		
第328図-15	京都系土師器	皿	在地	8.5		1.9	SX 551	口唇部にスス付着		
第328図-16	京都系土師器	皿	在地	10.4		2.1	SX 551	内外面に少し赤変が見られる		
第328図-17	京都系土師器	皿	在地	10.5		2.1	SX 551			
第328図-18	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.2	SX 551			
第328図-19	京都系土師器	皿	在地	11.2		1.8	SX 551			
第328図-20	京都系土師器	皿	在地	11.1		2.0	SX 551			

道物観察表20 (第13次調査区)

第13次調査区道物観察表⑥ (土器・陶磁器類)

神田No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	存在回数 No.
			口徑	底径	高さ			
第328回	21 京都市土師器	皿	在地	10.8	2.2	SX 551	内外面黒塗 スス付	
第328回	22 京都市土師器	皿	在地	11.0	2.2	SX 551		
第328回	23 京都市土師器	皿	在地	11.0	2.5	SX 551		
第328回	24 京都市土師器	皿	在地	13.3	2.6	SX 551		
第328回	25 京都市土師器	皿	在地	12.8	2.7	SX 551		
第328回	26 京都市土師器	皿	在地	12.8	2.7	SX 551		
第328回	27 京都市土師器	皿	在地	13.3	2.8	SX 551		
第328回	28 京都市土師器	皿	在地	13.2	2.2	SX 551		
第328回	29 土師質土器	燗台	在地	8.0	8.4	SX 551		
第328回	30 土師質土器	燗台	在地	7.9	6.8 5.4	SX 551		
第328回	31 土師質土器	焼土壺	在地	5.2	1.8	SX 551		
第328回	34 瓦質土器	鉢	在地	24.8		SX 551		
第328回	35 瓦質土器	鉢	在地	37.2		SX 551		
第328回	36 瓦質土器	鉢	在地	20.6		SX 551		
第328回	37 瓦質土器	鉢	在地	25.0		SX 551		
第328回	38 瓦質土器	鉢	在地	37.6		SX 551		
第328回	39 瓦質土器	火鉢	在地	43.4	15.3	SX 551		
第328回	40 瓦質土器	火鉢	在地	33.0		SX 551		
第328回	41 瓦質土器	火鉢	在地	37.6		SX 551		
第330回	42 瓦質土器	火鉢	在地	38.0		SX 551	雷文 F群	
第332回	1 磁器	皿	中国(景德鎮窯)	18.7		SX 705		
第332回	2 瓦質土器	鉢	在地	41.2		SX 705		
第332回	3 京都市土師器	皿	在地	10.6	2.5	SX 705		
第332回	4 京都市土師器	皿	在地	10.6	2.2	SX 705		
第332回	5 京都市土師器	皿	在地	12.6	2.1	SX 705		
第332回	6 京都市土師器	皿	在地	17.0	2.9	SX 705		
第332回	7 土師質土器	坏	在地	8.0		SX 705		
第333回	1 白磁	皿	中国	11.9	6.4 2.9	SX 706		24
第333回	2 青磁	皿	中国	13.0	5.8 2.8	SX 706		24
第333回	3 陶器	蓋?		15.6		SX 706		
第333回	4 陶器	博鉢	備前	12.4		SX 706		
第333回	5 陶器	博鉢	備前	29.2	13.0 11.8	SX 706		
第333回	6 京都市土師器	皿	在地	8.7	2.3	SX 706		
第333回	7 京都市土師器	皿	在地	10.5	1.8	SX 706		24
第333回	8 京都市土師器	皿	在地	10.8	2.0	SX 706		24
第333回	9 京都市土師器	皿	在地	11.3	2.3	SX 706		
第333回	10 京都市土師器	皿	在地	12.4	2.3	SX 706		
第333回	11 京都市土師器	皿	在地	12.5	2.7	SX 706		
第333回	12 京都市土師器	皿	在地	12.8	2.1	SX 706		
第333回	13 京都市土師器	皿	在地	12.9	2.3	SX 706	口唇部にスス付	24
第333回	14 京都市土師器	皿	在地	12.9	2.35	SX 706	口唇部にスス付	
第333回	15 京都市土師器	皿	在地	12.9	2.5	SX 706		
第333回	16 京都市土師器	皿	在地	13.0	2.1	SX 706		
第333回	17 京都市土師器	皿	在地	13.0	2.1	SX 706		
第333回	18 京都市土師器	皿	在地	13.0	2.3	SX 706		
第334回	19 京都市土師器	皿	在地	13.3	2.7	SX 706		
第334回	20 京都市土師器	皿	在地	13.2	2.4	SX 706	全周にわたリスス付	
第334回	21 京都市土師器	皿	在地	15.2	2.3	SX 706		24
第334回	22 京都市土師器	皿	在地	16.5	2.55	SX 706		
第334回	23 京都市土師器	皿	在地	16.9	3.1	SX 706		
第334回	24 京都市土師器	皿	在地	17.4	2.8	SX 706		
第334回	25 土師質土器	小皿	在地	8.8	7.0 2.2	SX 706		
第334回	26 土師質土器	小皿	在地	8.9	6.8	SX 706		
第334回	27 土師質土器	小皿	在地	9.6	8.4 2.4	SX 706		24
第334回	28 土師質土器	小皿	在地	10.0	7.8 2.3	SX 706		
第334回	29 土師質土器	皿	在地	12.8	8.0 2.3	SX 706		
第334回	30 土師質土器	皿	在地	13.6		SX 706		24
第334回	31 瓦質土器	鉢	在地	41.4		SX 706		
第334回	32 瓦質土器	火鉢	在地			SX 706		
第334回	33 瓦質土器	鉢	在地			SX 706		
第335回	1 磁器	碗	中国(景德鎮窯)		6.5	SX 707	B I 群	
第335回	2 磁器	碗	中国(景德鎮窯)	14.4		SX 707	C 群	25
第335回	3 陶器	博鉢	備前	29.0	15.0 12.1	SX 707		
第335回	4 京都市土師器	皿	在地	7.2	2.2	SX 707		25
第335回	5 京都市土師器	皿	在地	8.2	1.9	SX 707	口唇部にスス付	
第335回	6 京都市土師器	皿	在地	8.4	3.7 1.9	SX 707	口唇部にスス付	25
第335回	7 京都市土師器	皿	在地	8.9	2.3	SX 707		
第335回	8 京都市土師器	皿	在地	10.3	4.9 2.1	SX 707		
第335回	9 京都市土師器	皿	在地	10.4	4.3 2.2	SX 707		25
第335回	10 京都市土師器	皿	在地	10.5	5.5 2.0	SX 707		
第335回	11 京都市土師器	皿	在地	10.6	2.1	SX 707		
第335回	12 京都市土師器	皿	在地	10.6	2.1	SX 707		
第335回	13 京都市土師器	皿	在地	10.6	2.2	SX 707		
第335回	14 京都市土師器	皿	在地	10.6	2.2	SX 707		
第335回	15 京都市土師器	皿	在地	10.6	5.3 2.2	SX 707		

第13次調査区遺物観察表⑦ (土器・陶磁器類)

採図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第335図-16	京都系土師器	皿	在地	10.6	5.0	2.4	SX 707	
第335図-17	京都系土師器	皿	在地	10.7		2.2	SX 707	
第335図-18	京都系土師器	皿	在地	10.8	4.5	2.0	SX 707	
第335図-19	京都系土師器	皿	在地	10.8	5.5	2.2	SX 707	
第335図-20	京都系土師器	皿	在地	10.8		2.3	SX 707	
第335図-21	京都系土師器	皿	在地	10.9	5.4	2.1	SX 707	
第335図-22	京都系土師器	皿	在地	10.9	5.0	2.3	SX 707	
第335図-23	京都系土師器	皿	在地	10.9	6.2	2.3	SX 707	
第335図-24	京都系土師器	皿	在地	10.9	5.2	2.4	SX 707	
第335図-25	京都系土師器	皿	在地	10.9		2.7	SX 707	
第335図-26	京都系土師器	皿	在地	10.9		2.9	SX 707	
第335図-27	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.1	SX 707	
第335図-28	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.1	SX 707	
第335図-29	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.1	SX 707	
第335図-30	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.2	SX 707	
第336図-31	京都系土師器	皿	在地	11.0	5.0	2.2	SX 707	
第336図-32	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.3	SX 707	
第336図-33	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.3	SX 707	
第336図-34	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.4	SX 707	
第336図-35	京都系土師器	皿	在地	11.0		2.5	SX 707	
第336図-36	京都系土師器	皿	在地	11.1		2.3	SX 707	口唇部全周にスス付着
第336図-37	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.1	SX 707	
第336図-38	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.1	SX 707	
第336図-39	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.2	SX 707	
第336図-40	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.3	SX 707	
第336図-41	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.4	SX 707	
第336図-42	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.5	SX 707	
第336図-43	京都系土師器	皿	在地	11.3	5.5	2.3	SX 707	口唇部にスス付着
第336図-44	京都系土師器	皿	在地	11.3		2.4	SX 707	
第336図-45	京都系土師器	皿	在地	11.3		2.4	SX 707	
第336図-46	京都系土師器	皿	在地	11.5		2.4	SX 707	
第336図-47	京都系土師器	皿	在地	11.5		2.6	SX 707	
第336図-48	京都系土師器	皿	在地	11.6		2.4	SX 707	
第336図-49	京都系土師器	皿	在地	11.2		2.4	SX 707	
第336図-50	京都系土師器	皿	在地	12.4		2.4	SX 707	
第336図-51	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.2	SX 707	
第336図-52	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.3	SX 707	
第336図-53	京都系土師器	皿	在地	12.8		2.8	SX 707	
第336図-54	京都系土師器	皿	在地	12.9	6.9	2.4	SX 707	
第336図-55	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.5	SX 707	
第336図-56	京都系土師器	皿	在地	12.9		2.6	SX 707	
第336図-57	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.5	SX 707	
第336図-58	京都系土師器	皿	在地	13.0		2.6	SX 707	
第336図-59	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.4	SX 707	
第336図-60	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.6	SX 707	内面に黒斑あり
第336図-61	京都系土師器	皿	在地	13.1		2.9	SX 707	
第336図-62	京都系土師器	皿	在地	13.2	6.7	2.2	SX 707	
第336図-63	京都系土師器	皿	在地	13.2	6.9	2.4	SX 707	外面に黒斑あり
第336図-64	京都系土師器	皿	在地	13.2		2.7	SX 707	
第336図-65	京都系土師器	皿	在地	13.4		2.3	SX 707	
第336図-66	京都系土師器	皿	在地	13.4		2.5	SX 707	
第337図-67	京都系土師器	皿	在地	13.6		2.7	SX 707	
第337図-68	京都系土師器	皿	在地	14.2		2.4	SX 707	
第337図-69	京都系土師器	皿	在地	14.4	7.0	2.1	SX 707	
第337図-70	京都系土師器	皿	在地	14.8	8.5	2.2	SX 707	
第337図-71	京都系土師器	皿	在地	16.0		3.0	SX 707	
第337図-72	京都系土師器	皿	在地	17.0		3.0	SX 707	内面に黒斑あり
第337図-73	京都系土師器	皿	在地	22.4		3.0	SX 707	内面に黒斑あり
第337図-74	京都系土師器	皿	在地				SX 707	花皿
第337図-75	土師質土器	焼塩杵蓋	在地	5.4		1.7	SX 707	
第337図-76	土師質土器	焼塩杵蓋	在地	4.9		1.6	SX 707	
第337図-77	土師質土器	焼塩杵蓋	在地	5.5		1.7	SX 707	
第337図-78	京都系土師器	耳皿	在地	6.1	5.0	2.0	SX 707	
第337図-79	京都系土師器	耳皿	在地	6.1		1.8	SX 707	
第337図-80	土師質土器	燗台	在地	7.9	6.9	6.8	SX 707	
第337図-81	土師質土器	小皿	在地	5.8	5.5	1.5	SX 707	
第337図-82	土師質土器	小皿	在地	6.1	5.4	1.7	SX 707	
第337図-83	土師質土器	小皿	在地	6.9	6.0	1.8	SX 707	
第337図-84	土師質土器	小皿	在地	8.6	7.0	1.9	SX 707	
第337図-85	土師質土器	小皿	在地	9.0	7.3	1.7	SX 707	
第337図-86	土師質土器	小皿	在地	9.1	7.4	2.2	SX 707	
第337図-87	土師質土器	小皿	在地	9.2	7.0	1.9	SX 707	
第337図-88	土師質土器	小皿	在地	9.7	7.6	1.8	SX 707	
第337図-89	土師質土器	小皿	在地	9.7	7.7	2.1	SX 707	
第337図-90	土師質土器	小皿	在地	9.5	7.5	1.9	SX 707	

遺物観察表22 (第13次調査区)

第13次調査区遺物観察表⑧ (土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真図版 No.
			口径	底径	器高			
第337②-91	土師質土器	小皿	在地	9.7	7.4	2.5	SX 707	
第337②-92	土師質土器	小皿	在地	9.6	7.3	2.0	SX 707	25
第337②-93	土師質土器	小皿	在地	9.8	7.8	2.1	SX 707	25
第338②-94	土師質土器	小皿	在地	10.0	7.4	2.6	SX 707	25
第338②-95	土師質土器	小皿	在地	10.0	8.0	2.0	SX 707	
第338②-96	土師質土器	小皿	在地	10.3	8.2	2.4	SX 707	
第338②-97	土師質土器	小皿	在地	10.4	8.3	2.6	SX 707	25
第338②-98	土師質土器	小皿	在地	8.1	5.1	1.8	SX 707	25
第338②-99	土師質土器	小皿	在地	9.1	5.5	1.9	SX 707	25
第338②-100	土師質土器	皿	在地	12.9	8.1	2.7	SX 707	
第338②-101	土師質土器	皿	在地	12.6	7.6	3.0	SX 707	
第338②-102	土師質土器	皿	在地	12.5	6.9	2.1	SX 707	25
第338②-103	土師質土器	小皿	在地	10.2	7.3	1.9	SX 707	
第338②-104	土師質土器	皿	在地	12.6	7.1	2.3	SX 707	
第338②-105	土師質土器	小皿	在地	12.1	8.7	1.7	SX 707	25
第338②-106	土師質土器	小皿	在地	12.6	9.1	2.0	SX 707	
第338②-107	土師質土器	擂鉢	在地	29.0	14.4	12.0	SX 707	
第339②-108	瓦質土器	香炉	在地	13.2	10.5		SX 707	25
第339②-109	瓦質土器	火鉢	在地				SX 707	
第342②-1	京都系土師器	皿	在地	8.2	5.1	1.7	SX 253	
第342②-2	京都系土師器	皿	在地	8.6		2.0	SX 253	
第342②-3	京都系土師器	皿	在地	12.1	5.4	2.8	SX 253	
第346②-9	磁器	皿	中国(景德鎮窯)	9.4	5.6	2.3	SE 266	B 1群
第346②-10	磁器	皿	中国(景德鎮窯)				SE 266	B 1群
第346②-11	磁器	皿	中国(景德鎮窯)	12.8	7.4	2.9	SE 266	E群
第346②-12	磁器	小皿	中国				SE 266	翡翠釉
第346②-13	磁器	小皿	中国				SE 266	翡翠釉
第346②-14	陶器	天目	瀬戸英濃	11.4			SE 266	
第346②-15	陶器	小壺	備前		5.6		SE 266	26
第346②-16	焼締陶器	小鉢	備前	14.1			SE 266	
第346②-17	焼締陶器	注口部	備前				SE 266	26
第346②-18	焼締陶器	德利	備前				SE 266	
第346②-19	焼締陶器	擂鉢	備前	22.4			SE 266	
第346②-20	焼締陶器	瓶	備前		9.0		SE 266	
第346②-21	焼締陶器	德利	朝鮮				SE 266	26
第346②-22	焼締陶器	德利	朝鮮		20.9		SE 266	
第347②-23	陶器	壺	中国	13.0			SE 266	褐釉、四耳壺
第347②-24	陶器	壺	中国				SE 266	褐釉
第347②-25	焼締陶器	壺	備前	29.7			SE 266	
第348②-26	焼締陶器	壺	備前	13.9	17.9	34.5	SE 266	
第348②-27	焼締陶器	壺	備前		11.2		SE 266	
第348②-28	焼締陶器	壺	備前		16.7		SE 266	
第348②-29	陶器	壺	備前	26.6			SE 266	
第348②-30	陶器	壺	備前	28.5			SE 266	
第348②-31	陶器	壺	備前	40.6			SE 266	
第348②-32	陶器	壺	備前				SE 266	
第349②-33	陶器	壺	備前	30.6			SE 266	
第349②-34	陶器	壺	備前	60.0			SE 266	
第349②-35	陶器	壺	備前	57.0			SE 266	
第349②-36	陶器	壺	備前	35.0			SE 266	
第350②-37	陶器	壺	備前	38.8	33.4	65.0	SE 266	
第350②-38	陶器	擂鉢	備前	31.8			SE 266	
第350②-39	陶器	擂鉢	備前		14.2		SE 266	
第350②-40	陶器	擂鉢	備前				SE 266	
第351②-41	京都系土師器	皿	在地	8.8		2.1	SE 266	
第351②-42	京都系土師器	皿	在地	8.8		2.0	SE 266	
第351②-43	京都系土師器	皿	在地	8.7		1.8	SE 266	
第351②-44	京都系土師器	皿	在地	12.6		2.4	SE 266	
第351②-45	京都系土師器	皿	在地	12.7		2.5	SE 266	
第351②-46	京都系土師器	皿	在地	13.3		2.9	SE 266	
第351②-47	京都系土師器	皿	在地	10.1		3.2	SE 266	
第351②-48	京都系土師器	皿	在地	10.2		3.5	SE 266	
第351②-49	瓦質土器	鉢	在地				SE 266	
第351②-50	瓦質土器	擂鉢	在地				SE 266	
第351②-51	瓦質土器	羽釜	在地				SE 266	
第351②-52	瓦質土器	火鉢	在地				SE 266	
第351②-53	瓦質土器	火鉢	在地				SE 266	
第352②-54	瓦質土器	火鉢	在地				SE 266	
第352②-55	瓦質土器	鉢	在地				SE 266	
第352②-56	瓦質土器	鉢	在地				SE 266	
第352②-57	瓦質土器	鉢	在地				SE 266	
第354②-1	土師器	壺		15.2			SE 268	
第355②-1	陶器	クンディ	タイ				SE 377	繰り上げ手
第357②-3	陶器	壺	中国				SE 377	巻頭
第357②-4	焼締陶器	德利	朝鮮				SE 377	26

第13次調査区遺物観察表⑨ (土器・陶磁器類)

挿図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真図録 No.
			口径	底径	器高			
第357図-5	焼締陶器	平鉢				SE 377		
第357図-6	京都系土師器	皿				SE 377		
第357図-7	瓦質土器	鉢				SE 377	高台付き	
第357図-8	瓦質土器	鉢				SE 377		
第358図-1	陶器	天目				SE 384		
第358図-2	陶器	大甕				SE 384		
第358図-3	京都系土師器	皿				SE 384		
第358図-4	瓦質土器	火鉢				SE 384		
第361図-1	磁器	碗				SP 429	C群	26
第361図-2	磁器	皿				SP 111	B 1 群	
第361図-3	磁器	皿				SP 513	E 群?	26
第361図-4	白磁	皿				9.2 SP 526		
第361図-5	白磁	皿				5.4 SP 173		
第361図-6	陶器	甕				SP 405		
第361図-7	京都系土師器	皿				2.1 SP 142		
第361図-8	京都系土師器	皿				8.5 SP 142		
第361図-9	京都系土師器	皿				8.7 SP 143		
第361図-10	京都系土師器	皿				8.6 SP 234		
第361図-11	京都系土師器	皿				9.0 SP 231		
第361図-12	京都系土師器	皿				9.0 SP 228	口唇部にスス付着	
第361図-13	京都系土師器	皿				10.4 SP 533	口唇部にスス付着	
第361図-14	京都系土師器	皿				10.4 SP 141	口唇部にスス付着	
第361図-15	京都系土師器	皿				12.5 SP 245		
第361図-16	京都系土師器	皿				12.9 SP 215		
第365図-1	磁器	蓋				M 30		
第365図-2	磁器	碗					五彩	26
第365図-3	磁器	皿					五彩	26
第365図-4	磁器	合子				L 30	翡翠釉	26
第365図-5	磁器	碗					瑠璃釉	
第365図-6	磁器	皿				M 30	黄釉	26
第365図-7	青磁	碗				L 31	見込みに「好」の字	26
第365図-8	陶器	茶葉甕				L 31		26
第365図-9	陶器	天目				2.2 L 32		
第365図-10	陶器	天目				4.7 L 30		
第365図-11	陶器	天目				11.4 N 30		
第365図-12	陶器	天目				11.4 M 30		
第365図-13	陶器	天目				12.6		
第365図-14	焼締陶器	小甕				6.3 L 30		26
第365図-15	焼締陶器	甕				5.4 M 33		
第365図-16	陶器	甕				12.7		

第13次調査区遺物観察表 (金属製品・土製品・石製品)

押印No.	品名	材質	部位	寸法 (単位cm)						重量 (g)	遺物名	備考	押印No.
第1750	4	マンコ	土製	長さ	4.3	幅	4.0	厚さ	1.3		SD013	瓦質	
第1750	5	土製	土製	長さ	2.7	幅	1.4	穴径	0.3	4.6	SD013		
第184	3	土製	土製	長さ	3.7	幅	1.3	穴径	0.3	5.8	SK008		
第184	4	土製	土製	長さ	4.8	幅	1.1	穴径	0.3	4.5	SK008		
第191	3	メダイ	銅・鉛	長さ	2.0	幅	2.0	厚さ	0.2		SK011	ヴェロニカ	巻頭
第198	1	銀?	銅製	長さ	5.0	幅	0.2	厚さ		4.8	SK048	金箔	
第208	34	茶臼	砂岩	直径	41.2	高さ					SK110		
第208	35	焼	頁岩	長さ		幅	5.1	厚さ	1.4		SK110		
第208	36	土製	土製	長さ	5.1	幅	1.6	穴径	0.4	12.5	SK110		
第208	37	土製	土製	長さ	3.9	幅	1.1	穴径	0.4	5.0	SK110		
第216	12	土製	土製	長さ	3.3	幅	1.1	穴径	0.3	3.6	SK169		
第216	13	土製	土製	長さ	5.0	幅	1.0	穴径	0.3	4.8	SK169		
第231	12	磁石	頁岩	長さ	6.0	幅	2.3	厚さ		12.8	SK237	硯から磁石に転用か?	
第233	5	銀?	銅製	長さ	3.5	幅	0.7	厚さ	0.7	6.2	SK238	六角形	
第249	1	土製	土製	長さ	5.2	幅	1.1	穴径	0.3		SK281		
第249	2	土製	土製	長さ	6.3	幅	1.0	穴径	0.3		SK281		
第276	3	銅・鉛		長さ	4.9	幅	2.6	厚さ	2.7		SK367		
第278	11	土製	土製	長さ	3.1	幅	1.3	穴径	0.4	4.2	SK368		23
第282	2	土製	土製	長さ	4.7	幅	1.6	穴径	0.4	11.0	SK379		
第285	6	マンコ	土製	長さ	4.9	幅	3.8	厚さ	1.2		SK380		
第285	7	磁石	頁岩	長さ	5.8	幅	2.5	厚さ		12.8	SK386	硯から磁石に転用か?	
第288	62	石磨	滑石	口径		底径		器高			SK439		
第288	63	石磨	頁岩?	長さ	4.9	幅	3.8	厚さ	6.0	17.7	SK439		
第288	64	土製	土製	長さ	4.0	幅	1.0	穴径	0.2	3.5	SK439		
第318	10	小土	ガラス製	直径	0.3	高さ	0.4				SX284		
第328	32	石磨	滑石	口径		底径		器高			SX551		
第328	33	石磨	滑石	口径		底径		器高			SX551		
第330	43	磁石	砂岩	長さ	6.2	幅	5.0			105.0	SX551		
第330	44	土製	土製	長さ	3.2	幅	2.8	穴径	0.7	16.3	SX551		
第333	110	銅・鉛	口	長さ	9.1	幅		穴径			SX707		
第333	111	磁石	頁岩	長さ	6.2	幅	5.0			105.0	SX707		
第333	112	土製	土製	長さ	5.0	幅	1.7	穴径	0.4	14.5	SX707		
第345	1	平瓦	土製	長さ	25.1	幅	27.2	厚さ	3.0		SE266		
第345	2	石塔	土製	長さ	39	幅	31	厚さ	18		SE266		
第345	3	石塔	土製	長さ	34	幅	37	厚さ	15		SE266		
第345	4	石塔	土製	長さ	39	幅	32	厚さ	18		SE266		
第345	5	石塔	土製	長さ	34	幅	25	厚さ	16		SE266		
第345	6	石臼	土製	直径	32	高さ	13				SE266		
第345	7	石臼	土製	直径	30	高さ	9				SE266		
第345	8	石臼	土製	直径	35	高さ	12				SE266		
第357	2	柄杓	銅製	長さ	5.0	幅	5.0	厚さ	1.9		SE377		
第358	5	土製	土製	長さ	4.7	幅	2.0	穴径	0.5	16.6	SE384		
第358	24	土製	土製	長さ	3.7	幅	1.1	穴径	0.2	3.0	SP105		
第358	17	銀	頁岩	長さ	7.0	幅	5.9			56.9	M32		
第358	18	銅製品	銅製	長さ	2.9	幅	1.3	厚さ		1.7	N31	金箔	
第358	19	銅製品	銅製	長さ	2.2	幅	1.0	厚さ		1.9			
第358	20	銅製品	銅製	長さ		幅		厚さ			M30		
第358	21	銅製品	銅製	長さ	1.9	幅	2.6	厚さ	0.1	2.5	M33	孔2個	
第358	22	銅製品	銅製	長さ	2.6	幅	1.5	厚さ		3.7	N30		
第358	23	銅製品	銅製	長さ	1.8	幅	1.8	厚さ		2.5			
第358	24	鉄製品	鉄製	長さ	2.0	幅	2.0	厚さ		1.8	N30		
第358	25	銀?		長さ	10.5	幅		厚さ		7.4	L30		
第358	26	木・銅	土製	高さ	3.6	幅	2.4	厚さ	5.8		M30		26
第358	27	土製品	土製	高さ	4.0	幅	3.2	厚さ	1.7		M33	布袋様	巻頭
第358	28	銅製品	銅製	長さ	1.8	幅	1.7	厚さ	0.3		K30		
第358	29	銅製品	銅製	長さ	1.9	幅	1.3	厚さ	0.2		K30		
第358	30	分銅	銅製	長さ	2.2	幅	1.5	厚さ	1.0	15.4			
第358	31	小土	ガラス製	直径	0.8	高さ	0.4			1.8			
第358	32	小土	ガラス製	直径	0.5	高さ	0.3			1.1	N30		

第13次調査区遺物観察表 (銭貨)

挿図No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	遺構名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	備考	写真図 No.
第177図-11	元豐通寶	1078年	北宋	SD 098	1.9	24	行書		
第177図-12	不明			SD 098	0.8				
第180図-2	大観通寶	1107年	北宋	SD 584	2.4	25			
第190図-2	元豐通寶	1078年	北宋	SK 011	2.7	24	篆書		
第201図-4	天聖元寶	1023年	北宋	SK 074	1.8	25	篆書		
第201図-5	不明			SK 074	1.9	35		大型	
第208図-38	皇宋通寶	1038年	北宋	SK 110	3.0	24	篆書		
第231図-13	祥符元寶	1009年	北宋	SK 237	2.5	24			
第231図-14	元祐通寶	1086年	北宋	SK 237	2.8	23	行書		
第231図-15	明道元寶	1032年	北宋	SK 237	3.4	24	篆書		
第231図-16	熙寧元寶	1068年	北宋	SK 237	2.5	25	篆書		
第231図-17	天聖元寶	1023年	北宋	SK 237	3.2	24	篆書		
第231図-18	不明			SK 237	3.2	25			
第231図-19	不明			SK 237	2.8	25			
第263図-5	聖宋元寶	1101年	北宋	SK 343	2.3	24	行書		
第298図-65	元祐通寶	1086年	北宋	SK 439	2.9	24	行書		
第306図-2	皇宋通寶	1038年	北宋	SK 545	2.9	24	篆書		
第306図-3	元豐通寶	1078年	北宋	SK 545	2.5	23	行書		
第320図-11	洪武通寶	1368年	明	SX 458	1.5	22			
第330図-45	熙寧元寶	1068年	北宋	SX 551	1.4	24	篆書		
第330図-46	不明			SX 551		24			
第332図-8	政和通寶	1111年	北宋	SX 705	2.7	24	真書		
第334図-34	熙寧元寶	1068年	北宋	SX 706	2.8	23	真書		
第334図-35	祥符元寶	1009年	北宋	SX 706	2.9	25			
第339図-113	皇宋通寶	1038年	北宋	SX 707	2.7	24	篆書		
第339図-114	洪武通寶	1368年	明	SX 707	2.7	23			
第354図-2	大観通寶	1107年	北宋	SX 286	1.6	24			
第362図-26	皇宋通寶	1038年	北宋	SP 566	2.6	24	真書		
第362図-27	不明			SP 566				「符」のみ確認	
第366図-33	開元通寶	845年	唐	M30	2.5	23		列	
第366図-34	景德元寶	1004年	北宋	M30	2.6	23			
第366図-35	天禧通寶	1017年	北宋	M30	2.1	24			
第366図-36	天聖元寶	1023年	北宋	N30	3.0	24	篆書		
第366図-37	景祐元寶	1034年	北宋	M32	2.0	24	真書		
第366図-38	至和元寶	1054年	北宋	M30	2.7	23	篆書		
第366図-39	嘉祐元寶	1056年	北宋	M32	2.5	22	真書		
第366図-40	熙寧元寶	1068年	北宋	M N30	2.7	23	真書		
第366図-41	熙寧元寶	1068年	北宋		2.3	24	真書		
第366図-42	熙寧元寶	1068年	北宋	L33	2.1	24	篆書		
第366図-43	熙寧元寶	1068年	北宋		3.0	2.4	篆書		
第366図-44	元豐通寶	1078年	北宋		2.6	23	篆書		
第366図-45	元豐通寶	1078年	北宋	M30	2.5	23	行書		
第366図-46	元祐通寶	1078年	北宋	M32	2.2	24	行書		
第366図-47	元祐通寶	1086年	北宋	M32	2.1	24	篆書		
第366図-48	元祐通寶	1086年	北宋		2.2	24	行書		
第366図-49	紹聖元寶	1094年	北宋	M30	2.5	23	篆書		
第367図-50	聖宋元寶	1101年	北宋	N31	2.5	23	篆書		
第367図-51	聖宋元寶	1101年	北宋		1.9	23	篆書		
第367図-52	永樂通寶	1408年	明		2.5	24			
第367図-53	元祐通寶	1086年	北宋	M32	21.1			10枚重ね	

第21次調査区遺物観察表① (土器・陶磁器類)

発掘No.	器種	生産地	法度(単位cm)			遺構名	備考	平面図 No.
			口径	底径	高さ			
第37200-1	磁器	中国	-	-	-	SD 087	五彩	33
第37200-2	磁器	中国	-	-	-	SD 087	五彩	33
第37200-3	磁器	中国	-	-	-	SD 087	五彩	33
第37200-4	磁器	中国(景德镇)	-	-	-	SD 087	ウサギの足の描写 特殊品	33
第37200-5	青花	中国(景德镇)	-	2.6	-	SD 087	C群(基節底)	33
第37200-6	青花	中国(景德镇)	-	5.6	-	SD 087	C群(蓋子碗)	33
第37200-7	青花	中国(景德镇)	-	4.2	-	SD 087	E群(脚盤心)	33
第37200-8	青花	中国(景德镇)	-	4.2	-	SD 087	脚盤心 高台内「大明年造」カ	33
第37200-9	青花	中国(景德镇)	-	-	-	SD 087		33
第37200-10	青花	中国(漳州)	14.0	-	-	SD 087		33
第37200-11	青磁	中国(福州)	-	-	-	SD 087		33
第37200-12	青磁	中国(福州)	8.8	-	-	SD 087		33
第37200-13	青磁	中国(福州)	9.0	-	-	SD 087		33
第37200-14	青磁	中国(福州)	-	6.4	-	SD 087		33
第37200-15	青磁	中国(福州)	-	4.8	-	SD 087	見込みに印花文	33
第37200-16	青磁	中国(福州)	-	6.6	-	SD 087		34
第37200-17	青磁	中国(福州)	-	9.8	-	SD 087		34
第37200-18	白磁	中国	9.0	-	-	SD 087		34
第37200-19	白磁	中国?	14.4	8.4	2.5	SD 087		34
第37200-20	白磁	中国	-	4.6	-	SD 087		34
第37200-21	白磁	中国	-	3.8	2.6	SD 087	中国産磁器	34
第37200-22	黒物陶器	中国	-	10.0	-	SD 087	外面黒釉、内面透明釉	34
第37300-23	陶器	韓国	-	11.0	-	SD 087	東南三彩	34
第37300-24	陶器	天目	11.0	-	-	SD 087	大室4期	34
第37300-25	陶器	折鉢皿	12.0	-	-	SD 087	南津 見込みに胎土目	34
第37300-26	陶器	肥前	-	8.0	-	SD 087		34
第37300-27	陶器	肥前	-	5.0	-	SD 087		34
第37300-28	陶器	徳利	-	-	-	SD 087		34
第37300-29	陶器	徳利	-	6.4	-	SD 087		
第37300-30	陶器	備前	22.6	-	-	SD 087	斜め描目	
第37300-31	陶器	備前	25.6	-	-	SD 087		
第37300-32	陶器	備前	25.8	-	-	SD 087		
第37300-33	陶器	備前	27.3	-	-	SD 087		
第37400-34	陶器	備前	29.6	-	-	SD 087	斜め描目	
第37400-35	陶器	備前	-	13.6	-	SD 087	斜め描目	
第37400-36	陶器	備前	-	8.8	-	SD 087		
第37400-37	陶器	備前	28.5	-	-	SD 087		
第37400-38	陶器	常滑	40.4	-	-	SD 087		34
第37400-39	京極系土師器	在池	8.0	-	2.2	SD 087	打明皿 内外面に黒斑	
第37400-40	京極系土師器	在池	8.2	-	2.2	SD 087		
第37400-41	京極系土師器	在池	8.6	-	2.2	SD 087		
第37400-42	京極系土師器	在池	8.8	-	1.9	SD 087		
第37400-43	京極系土師器	在池	9.2	3.4	2.3	SD 087		
第37400-44	京極系土師器	在池	9.8	-	2.2	SD 087		
第37400-45	京極系土師器	在池	10.8	-	2.1	SD 087		
第37400-46	京極系土師器	在池	10.8	-	2.7	SD 087		
第37400-47	京極系土師器	在池	11.4	-	2.2	SD 087	打明皿	
第37400-48	京極系土師器	在池	11.8	-	-	SD 087		
第37400-49	京極系土師器	在池	12.0	-	2.1	SD 087		
第37400-50	京極系土師器	在池	12.0	-	2.5	SD 087		
第37500-51	京極系土師器	在池	12.0	-	2.0	SD 087		
第37500-52	京極系土師器	在池	12.0	-	1.8	SD 087		
第37500-53	京極系土師器	在池	12.0	-	2.1	SD 087		
第37500-54	京極系土師器	在池	12.0	-	2.2	SD 087		
第37500-55	京極系土師器	在池	12.2	-	2.3	SD 087		
第37500-56	京極系土師器	在池	12.2	-	2.5	SD 087	打明皿	
第37500-57	京極系土師器	在池	12.2	-	2.2	SD 087		
第37500-58	京極系土師器	在池	12.4	-	-	SD 087		
第37500-59	京極系土師器	在池	12.4	-	-	SD 087		
第37500-60	京極系土師器	在池	12.6	-	2.2	SD 087	打明皿	
第37500-61	京極系土師器	在池	12.8	-	-	SD 087		
第37500-62	京極系土師器	在池	13.0	-	2.5	SD 087		
第37500-63	京極系土師器	在池	13.4	-	2.5	SD 087		
第37500-64	京極系土師器	在池	14.0	-	2.6	SD 087		
第37500-65	京極系土師器	在池	6.4	3.0	2.2	SD 087		
第37500-66	京極系土師器	在池	8.6	-	-	SD 087		
第37500-67	京極系土師器	在池	12.0	-	-	SD 087		
第37500-68	京極系土師器	在池	12.0	-	3.6	SD 087		
第37500-69	京極系土師器	在池	5.2	-	1.7	SD 087		34
第37500-70	京極系土師器	在池	5.4	5.4	1.8	SD 087		
第37500-71	土師系土師器	在池	4.8	-	-	SD 087		34
第37500-72	土師系土師器	在池	11.0	6.2	2.5	SD 087		
第37500-73	土師系土師器	在池	12.0	7.8	3.2	SD 087		
第37500-74	土師系土師器	在池	13.2	5.5	7.0	SD 087		
第37600-75	土師系土師器	在池	30.4	-	-	SD 087		35

第21次調査区遺物観察表② (土器・陶磁器類)

押印No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第376図-76	瓦質土器	壺	31.6	-	-	SD 087		
第376図-77	瓦質土器(赤)	鉢?	26.2	-	-	SD 087		
第376図-78	瓦質土器	火鉢	31.6	-	-	SD 087	内面黒班	
第376図-79	瓦質土器	鉢	-	22.4	-	SD 087		
第376図-80	磁器	碗	6.5	2.6	2.8	SD 087		35
第376図-81	磁器	皿	-	4.6	-	SD 087	見込みに蛇の目模刻ぎ	35
第376図-82	陶胎染付	碗	10.2	4.5	6.5	SD 087	緑灰色	35
第376図-83	陶胎染付	碗	-	5.2	-	SD 087	緑灰色	
第379図-1	京都系土師器	皿	8.4	-	2.1	SK 011	灯明皿	
第379図-2	京都系土師器	皿	12.8	-	-	SK 011		
第379図-3	土師質土器	焼塩釜の蓋	5.4	-	1.9	SK 011		
第381図-1	瓦質土器	火鉢	-	-	-	SK 012	第399図-7 (SK013) は同一個体	
第381図-2	京都系土師器	皿	10.2	-	2.6	SK 012		
第383図-1	青花	碗	-	-	-	SK 013		
第383図-2	青花	碗	-	-	-	SK 013		35
第383図-3	青磁	碗	-	-	-	SK 013		
第383図-4	白磁	皿	-	-	-	SK 013		
第383図-5	京都系土師器	坪	10.6	-	3.5	SK 013		
第383図-6	京都系土師器	皿	9.1	-	2.3	SK 013	灯明皿	
第383図-7	瓦質土器	火鉢	-	-	-	SK 013	第397図-1 (SK012) は同一個体	35
第385図-1	瓦質土器	鉢	29.0	17.3	9.7	SK 014		
第387図-1	京都系土師器	皿	8.6	-	-	SK 015		
第387図-2	京都系土師器	皿	9.4	-	1.8	SK 015		
第387図-3	土師質土器	皿	8.4	4.4	1.7	SK 015		
第389図-1	青花	碗	-	-	-	SK 016	五彩	35
第389図-2	青花	碗	12.8	-	-	SK 016		35
第389図-3	青花	碗 or 皿	-	-	-	SK 016		35
第389図-4	青磁	盤	22.6	9.0	4.2	SK 016		35
第389図-5	青磁	棧花皿	13.4	-	-	SK 016	棧花皿	35
第389図-6	白磁	小鉢	7.2	-	-	SK 016		35
第389図-7	白磁	皿	11.0	-	-	SK 016		35
第389図-8	白磁	皿	12.4	-	-	SK 016		35
第389図-9	白磁	皿	-	-	-	SK 016	火を受けている	35
第389図-10	京都系土師器	皿	8.7	-	1.8	SK 016		
第389図-11	京都系土師器	皿	10.4	-	-	SK 016	灯明皿	
第389図-12	京都系土師器	皿	10.7	-	2.3	SK 016	全面黒班	
第389図-13	京都系土師器	皿	10.8	-	2.4	SK 016	鉄分付着	
第389図-14	京都系土師器	皿	10.8	-	2.4	SK 016		
第389図-15	京都系土師器	皿	10.8	-	2.4	SK 016		
第389図-16	京都系土師器	皿	11.0	-	2.3	SK 016		
第389図-17	京都系土師器	皿	12.0	-	2.8	SK 016		
第389図-18	京都系土師器	皿	12.2	-	2.2	SK 016		
第389図-19	京都系土師器	皿	12.4	-	2.6	SK 016	全面黒班	
第389図-20	京都系土師器	皿	12.4	-	-	SK 016		
第389図-21	京都系土師器	皿	12.6	-	-	SK 016		
第389図-22	京都系土師器	皿	12.6	-	2.0	SK 016		
第389図-23	京都系土師器	皿	12.8	-	2.2	SK 016	底部黒班	
第389図-24	京都系土師器	皿	12.9	-	2.2	SK 016		
第389図-25	京都系土師器	皿	13.0	-	1.9	SK 016		
第389図-26	京都系土師器	皿	13.0	-	-	SK 016		
第389図-27	京都系土師器	皿	13.0	-	2.2	SK 016		
第390図-28	京都系土師器	皿	13.2	-	-	SK 016		
第390図-29	京都系土師器	皿	13.2	-	2.1	SK 016	外面鉄分付着	
第390図-30	京都系土師器	皿	13.4	-	1.6	SK 016		
第390図-31	京都系土師器	皿	13.6	-	2.0	SK 016	内面鉄分付着	
第390図-32	京都系土師器	皿	13.6	-	3.5	SK 016		
第390図-33	京都系土師器	皿	16.8	-	2.1	SK 016	黒班あり	
第390図-34	京都系土師器	皿	17.2	-	2.3	SK 016		
第390図-35	土師質土器	小皿	8.4	4.5	1.7	SK 016		
第390図-36	土師質土器	皿	9.8	6.6	1.8	SK 016		
第390図-37	土師質土器	皿	10.5	6.2	1.8	SK 016		35
第390図-38	土師質土器	皿	11.4	5.9	2.3	SK 016		35
第390図-39	土師質土器	皿	11.6	5.6	2.8	SK 016		
第390図-40	土師質土器	皿	13.2	6.2	2.6	SK 016		
第390図-41	土師質土器	皿	14.4	7.2	2.7	SK 016		
第390図-42	土師質土器	皿	11.6	-	-	SK 016		
第390図-43	土師質土器	皿	14.2	-	-	SK 016		
第390図-44	土師質土器	皿	-	3.8	-	SK 016		
第390図-45	土師質土器	皿	-	5.6	-	SK 016		
第390図-46	瓦質土器	?	11.4	3.8	4.2	SK 016		
第392図-1	白磁	皿	-	-	-	SK 017		
第392図-2	京都系土師器	皿	13.6	-	2.1	SK 017	灯明皿	
第392図-3	京都系土師器	皿	13.8	-	2.1	SK 017	灯明皿	
第392図-4	京都系土師器	皿	13.1	-	2.3	SK 017	灯明皿	
第392図-5	京都系土師器	皿	12.7	-	2.6	SK 017		

遺物観察表28 (第21次調査区)

第21次調査区遺物観察表③ (土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	寸法(単位cm)			遺物名	備考	写真 No.
			口径	底径	高さ			
第39200-6	京都系土器	皿	在地	11.6	-	SK 017		
第39200-7	京都系土器	皿	在地	8.5	- 2.2	SK 017	灯明皿	
第39500-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	SK 018	F 群か?	36
第39500-2	京都系土器	皿	在地	13.0	- 2.6	SK 018	灯明皿	
第39500-3	土師質土器	坏	在地	13.4	10.8 4.0	SK 018		
第39500-4	土師質土器	甕	在地	-	-	SK 018		36
第39500-5	土師質土器	鉢	在地	-	19.4	SK 018		
第39600-1	京都系土器	皿	在地	12.8	-	SK 019		
第39600-2	京都系土器	皿	在地	13.0	-	SK 019		
第39700-1	土師質土器	坏	在地	10.0	6.8 2.6	SK 033		
第39900-1	陶器	漆鉢	偏前	-	-	SK 029		
第39900-2	京都系土器	皿	在地	13.4	-	SK 029		
第39900-3	京都系土器	皿	在地	13.0	-	SK 029		
第39900-4	土師質土器	皿	在地	13.6	2.6	SK 030		
第39900-5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SK 030		
第39900-6	青花	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 034		
第40200-1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SK 031		36
第40200-2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SK 031		36
第40200-3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SK 031		36
第40200-4	青花	碗	中国(景德鎮窯)	7.8	-	SK 031		36
第40200-5	青磁	香炉?	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		36
第40200-6	青磁	皿	中国(同安窯)	-	4.8	SK 031		36
第40200-7	青磁	甕	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		36
第40200-8	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		36
第40200-9	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031	鍋蓋弁	36
第40200-10	青磁	碗	中国(龍泉窯)	12.8	-	SK 031	蓋弁の細線化	36
第40200-11	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		36
第40200-12	青磁	碗	中国(龍泉窯)	11.8	-	SK 031		
第40200-13	青磁	碗	中国(龍泉窯)	14.4	-	SK 031		
第40200-14	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		
第40200-15	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		
第40200-16	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		
第40200-17	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		
第40200-18	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		
第40200-19	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 031		
第40200-20	青磁	皿?	中国(龍泉窯)	-	6.8	SK 031		
第40200-21	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	6.0	SK 031	高台	
第40200-22	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	7.6	SK 031		
第40200-23	白磁	碗	中国	-	-	SK 031		36
第40200-24	白磁	皿	中国	12.0	-	SK 031	ロハゲ	36
第40200-25	白磁	皿	中国	10.6	-	SK 031	ロハゲ	36
第40200-26	白磁	皿	中国	-	7.8	SK 031	ロハゲと関係	
第40200-27	白磁	皿	中国	-	7.8	SK 031		36
第40200-28	陶器	天目	中国	-	-	SK 031		36
第40200-29	陶器	天目	中国	-	-	SK 031		36
第40200-30	陶器	節皿	瀬戸黄瀬	-	-	SK 031		37
第40200-31	陶器	節皿	瀬戸黄瀬	-	-	SK 031		37
第40200-32	土師質土器	坏	在地	-	8.0	SK 031		
第40300-33	土師質土器	坏	在地	12.4	9.4	SK 031		
第40300-34	土師質土器	坏	在地	-	8.6	SK 031		
第40300-35	土師質土器	坏	在地	12.2	-	SK 031		
第40300-36	土師質土器	坏	在地	15.0	8.0 3.2	SK 031		
第40300-37	土師質土器	坏	在地	12.8	7.0 2.7	SK 031		
第40300-38	土師質土器	坏	在地	11.8	5.4 2.7	SK 031		
第40300-39	土師質土器	坏	在地	12.2	6.4	SK 031		
第40300-40	土師質土器	坏	在地	13.6	7.4 2.6	SK 031		
第40300-41	土師質土器	坏	在地	14.0	-	SK 031		
第40300-42	土師質土器	坏	在地	-	5.0	SK 031		
第40300-43	土師質土器	坏	在地	-	5.6	SK 031		
第40300-44	土師質土器	小皿	在地	8.0	-	SK 031		
第40300-45	青磁系土器	瑠	青磁	6.8	-	SK 031		37
第40300-46	青磁系土器	瑠	青磁	7.2	-	SK 031		37
第40300-47	瓦質土器	漆鉢	在地	-	-	SK 031		
第40300-48	瓦質土器	?	在地	-	5.0	SK 031		
第40300-49	瓦質土器	?	在地	10.6	5.4 4.2	SK 031		
第40300-50	瓦質土器	火鉢	在地	9.0	-	SK 031	火鉢の底盤	
第40300-51	瓦質土器	火鉢?	在地	-	-	SK 031		
第40600-1	土師質土器	皿	在地	8.7	4.6 1.8	SK 032	灯明皿	
第40600-2	京都系土器	皿	在地	11.2	-	SK 032		
第40800-1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 034	鍋蓋弁	37
第40800-2	須恵質土器	?	?	-	-	SK 034		
第41000-1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	SK 083		37
第41000-2	京都系土器	皿	在地	13.0	-	SK 083		
第41000-3	京都系土器	皿	在地	10.4	-	SK 083		
第41000-4	京都系土器	皿	在地	12.4	-	SK 083		

第21次調査区遺物観察表④ (土器・陶磁器類)

博図No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第41020-5	京都系土師器	皿	在地	12.4	-	SK 083		
第41220-1	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK 094		
第41220-2	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK 094		
第41320-1	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	SK 142		
第41320-2	白磁	碗?小杯?	中国	-	-	SK 142		
第41320-3	土師質土器	皿	在地	7.3	3.2	SK 142		
第41320-4	土師質土器	皿	在地	-	7.2	SK 142		
第41320-5	京都系土師器	皿	在地	-	-	SK 142		
第41320-6	瓦器	碗	在地?	-	5.8	SK 142		
第41520-1	磁器	皿	中国	10.6	-	SK 098	五彩	37
第41520-2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	4.0	SK 098	陶師心	37
第41520-3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	11.4	7.6	SK 098		37
第41520-4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	9.8	5.8	SK 098		37
第41520-5	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	7.0	SK 098		37
第41520-6	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	7.4	SK 098	B群 見込み文様:雲	37
第41520-7	青花	碗	中国(漳州窯)	-	-	SK 098		37
第41520-8	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	5.0	SK 098	見込みに印花文	37
第41520-9	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	4.4	SK 098	菊花皿	37
第41520-10	白磁	杯	中国	14.0	8.0	SK 098	蕃蘭底の杯(皿)	38
第41520-11	白磁	皿	中国	-	7.0	SK 098		38
第41520-12	白磁	皿	中国	10.0	-	SK 098	菊花皿	38
第41520-13	白磁	皿	中国	-	5.2	SK 098		38
第41520-14	白磁	皿	中国	-	7.2	SK 098	菊花皿	38
第41620-15	越前陶器	盃	中国	11.0	-	SK 098	四耳もしくは五耳がつく有耳の盃	38
第41620-16	陶器	四耳盃	タイ(メナムノイ)	-	-	SK 098	耳の部分	38
第41620-17	陶器	四耳盃	タイ(メナムノイ)	-	-	SK 098		38
第41620-18	陶器	鉢	備前	16.1	-	SK 098	口縁部に重ね焼きの跡	38
第41620-19	陶器	盃	備前	10.6	-	SK 098	肩部に波状文	38
第41620-20	陶器	小盃	備前	-	5.2	SK 098		38
第41620-21	陶器	天目	瀬戸美濃	12.0	-	SK 098		38
第41620-22	陶器	天目	瀬戸美濃	-	4.2	SK 098		38
第41620-23	陶器	大甕	備前	23.8	-	SK 098		
第41620-24	陶器	大甕	備前	40.9	-	SK 098		39
第41720-25	陶器	大甕	備前	-	-	SK 098		
第41720-26	陶器	大甕	備前	-	-	SK 098		
第41720-27	陶器	甕	備前	23.8	-	SK 098		
第41720-28	陶器	擂鉢	備前	28.0	15.8	SK 098	斜め擂目	39
第41720-29	陶器	擂鉢	備前	25.4	-	SK 098	斜め擂目	
第41720-30	陶器	擂鉢	備前	24.8	-	SK 098	斜め擂目	
第41820-31	陶器	擂鉢	備前	25.0	-	SK 098		
第41820-32	陶器	擂鉢	備前	28.0	-	SK 098	斜め擂目	39
第41820-33	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	
第41820-34	陶器	擂鉢	備前	35.0	-	SK 098		
第41820-35	陶器	擂鉢	備前	-	13.2	SK 098	斜め擂目	
第41920-36	陶器	擂鉢	備前	-	11.2	SK 098		
第41920-37	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	
第41920-38	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	39
第41920-39	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	
第41920-40	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	
第41920-41	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	
第41920-42	陶器	擂鉢	備前	37.0	-	SK 098	斜め擂目	
第41920-43	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098	斜め擂目	
第41920-44	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098		
第41920-45	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098		
第41920-46	陶器	擂鉢	備前	-	-	SK 098		
第42020-47	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	SK 098	灯明皿	
第42020-48	京都系土師器	皿	在地	8.1	-	SK 098	灯明皿	
第42020-49	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	SK 098	全体が黒い	
第42020-50	京都系土師器	皿	在地	8.3	-	SK 098	灯明皿 内外面スス付着	
第42020-51	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	SK 098	灯明皿	
第42020-52	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	SK 098	灯明皿	
第42020-53	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	SK 098	灯明皿	
第42020-54	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098	灯明皿	
第42020-55	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098	灯明皿 内外面スス付着	
第42020-56	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098	灯明皿	
第42020-57	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098	内外面黒斑	
第42020-58	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098		
第42020-59	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098		
第42020-60	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	SK 098		
第42020-61	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	SK 098	灯明皿 内外面スス付着	
第42020-62	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	SK 098		
第42020-63	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	SK 098	口唇部にスス付着 灯明皿か?	
第42020-64	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	SK 098	灯明皿	
第42020-65	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	SK 098		
第42020-66	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	SK 098	灯明皿	

第21次調査区道物観察表⑤ (土器・陶磁器類)

神田No.	器種	生産地	法製(単位cm)			追掘名	備考	写真撮影 No.
			口徑	底径	器高			
第42008-67	京都市土師器	皿	在	在	8.8 - 2.3	SK 098	灯明皿	
第42008-68	京都市土師器	皿	在	在	8.8 - 1.9	SK 098		
第42008-69	京都市土師器	皿	在	在	8.8 - 2.1	SK 098	灯明皿 底面に格子状ハケ目	
第42008-70	京都市土師器	皿	在	在	8.9 - 2.1	SK 098		
第42008-71	京都市土師器	皿	在	在	8.9 - 2.4	SK 098	外側にスス付	
第42008-72	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 2.1	SK 098		
第42008-73	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 2.3	SK 098		
第42008-74	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 2.0	SK 098	灯明皿 口唇部にスス付	
第42008-75	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 1.9	SK 098		
第42008-76	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 2.0	SK 098	灯明皿 口唇部にスス付	
第42008-77	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 1.8	SK 098	灯明皿	
第42008-78	京都市土師器	皿	在	在	9.0 - 2.1	SK 098		
第42008-79	京都市土師器	皿	在	在	9.2 - 1.9	SK 098	灯明皿	
第42008-80	京都市土師器	皿	在	在	9.2 - 2.3	SK 098		
第42008-81	京都市土師器	皿	在	在	9.4 - 2.1	SK 098	灯明皿	
第42008-82	京都市土師器	皿	在	在	10.2 - 1.7	SK 098		
第42008-83	京都市土師器	皿	在	在	10.4 - -	SK 098		
第42008-84	京都市土師器	皿	在	在	10.6 - 2.4	SK 098	灯明皿	
第42008-85	京都市土師器	皿	在	在	10.8 - -	SK 098		
第42008-86	京都市土師器	皿	在	在	11.0 - 2.2	SK 098		
第42008-87	京都市土師器	皿	在	在	11.4 - -	SK 098		
第42008-88	京都市土師器	皿	在	在	11.5 - 2.3	SK 098		
第42008-89	京都市土師器	皿	在	在	11.6 - 2.0	SK 098		
第42008-90	京都市土師器	皿	在	在	11.6 - 2.2	SK 098		
第42008-91	京都市土師器	皿	在	在	11.8 - 2.5	SK 098		
第42008-92	京都市土師器	皿	在	在	11.8 - 2.1	SK 098		
第42008-93	京都市土師器	皿	在	在	11.8 - 2.6	SK 098		
第42008-94	京都市土師器	皿	在	在	11.8 - 2.4	SK 098		
第42008-95	京都市土師器	皿	在	在	11.8 - 2.4	SK 098		
第42108-96	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.5	SK 098		
第42108-97	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.4	SK 098		
第42108-98	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.5	SK 098		
第42108-99	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.1	SK 098	外側黒斑	
第42108-100	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.5	SK 098	内外面にスス付	
第42108-101	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.6	SK 098		
第42108-102	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.1	SK 098		
第42108-103	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.4	SK 098	外面が黒ずむ	
第42108-104	京都市土師器	皿	在	在	12.0 - 2.2	SK 098	外面が黒ずむ	
第42108-105	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.5	SK 098		
第42108-106	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.4	SK 098		
第42108-107	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.5	SK 098	底面に板状痕あり	
第42108-108	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.3	SK 098		
第42108-109	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.1	SK 098		
第42108-110	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.5	SK 098		
第42108-111	京都市土師器	皿	在	在	12.2 - 2.1	SK 098		
第42108-112	京都市土師器	皿	在	在	12.4 - 2.0	SK 098		
第42108-113	京都市土師器	皿	在	在	12.6 - 2.6	SK 098	内面に薄くスス付	
第42108-114	京都市土師器	皿	在	在	12.6 - -	SK 098	内外面に黒斑あり	
第42108-115	京都市土師器	皿	在	在	12.6 - -	SK 098		
第42108-116	京都市土師器	皿	在	在	12.6 - -	SK 098		
第42108-117	京都市土師器	皿	在	在	12.6 - 2.1	SK 098		
第42108-118	京都市土師器	皿	在	在	12.6 - 2.3	SK 098		
第42108-119	京都市土師器	皿	在	在	12.7 - 2.1	SK 098		
第42108-120	京都市土師器	皿	在	在	12.8 - -	SK 098		
第42108-121	京都市土師器	皿	在	在	12.8 - 2.2	SK 098	底面にハケ目痕	
第42108-122	京都市土師器	皿	在	在	13.0 - 3.0	SK 098		
第42108-123	京都市土師器	皿	在	在	13.0 - 2.4	SK 098	内外面に黒斑	
第42108-124	京都市土師器	皿	在	在	13.0 - 2.3	SK 098		
第42108-125	京都市土師器	皿	在	在	13.0 - 2.2	SK 098		
第42108-126	京都市土師器	皿	在	在	13.0 - 2.3	SK 098		
第42108-127	京都市土師器	皿	在	在	13.1 - 2.6	SK 098		
第42108-128	京都市土師器	皿	在	在	13.2 - 2.5	SK 098		
第42108-129	京都市土師器	皿	在	在	13.4 - -	SK 098		
第42108-130	京都市土師器	皿	在	在	13.6 - 2.2	SK 098	裏面に鉄分付	
第42108-131	京都市土師器	皿	在	在	13.6 - -	SK 098	灯明皿	
第42208-132	京都市土師器	坏	在	在	10.0 - -	SK 098	外面に黒斑	
第42208-133	京都市土師器	坏	在	在	10.6 - -	SK 098		
第42208-134	京都市土師器	坏	在	在	10.7 - 3.3	SK 098		
第42208-135	京都市土師器	坏	在	在	11.0 - 3.4	SK 098	内面にスス付	
第42208-136	京都市土師器	坏	在	在	11.2 - 3.5	SK 098		
第42208-137	京都市土師器	坏	在	在	11.2 - 3.6	SK 098		
第42208-138	京都市土師器	坏	在	在	11.5 - 3.3	SK 098		
第42208-139	京都市土師器	坏	在	在	11.6 - 3.7	SK 098		
第42208-140	京都市土師器	坏	在	在	11.6 - 3.5	SK 098	内外面黒斑	
第42208-141	京都市土師器	坏	在	在	12.0 - 3.2	SK 098		

第21次調査区遺物観察表⑥ (土器・陶磁器類)

採回No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第422回-142	京都系土師器	坏	在地	12.2	-	3.5 SK 098		
第422回-143	京都系土師器	坏	在地	12.2	-	3.2 SK 098		
第422回-144	京都系土師器	坏	在地	10.6	-	3.6 SK 098		
第422回-145	京都系土師器	坏	在地	10.9	-	3.4 SK 098		
第422回-146	京都系土師器	坏	在地	11.2	-	2.9 SK 098		
第422回-147	京都系土師器	坏	在地	11.5	-	4.0 SK 098		
第422回-148	京都系土師器	焼場巻の蓋	在地	5.6	-	2.0 SK 098		
第422回-149	土師質土器	燗台	在地	-	7.2	- SK 098		
第422回-150	土師質土器	小皿	在地	7.7	-	2.2 SK 098		39
第422回-151	土師質土器	小皿	在地	7.7	-	2.1 SK 098		
第422回-152	土師質土器	小皿	在地	8.4	6.1	1.5 SK 098	口唇部にスス付着	
第422回-153	土師質土器	皿	在地	11.0	6.2	2.6 SK 098		
第422回-154	土師質土器	皿	在地	11.4	6.8	2.4 SK 098		
第422回-155	土師質土器	皿	在地	11.5	7.0	2.6 SK 098		
第422回-156	土師質土器	皿	在地	11.8	8.8	2.2 SK 098		
第422回-157	土師質土器	皿	在地	11.8	7.4	2.5 SK 098		
第422回-158	土師質土器	皿	在地	12.5	7.6	2.1 SK 098		
第423回-159	瓦質土器	羽釜	在地	-	-	- SK 098	突帯部径26.8cm 外面突帯下スス	39
第423回-160	瓦質土器	羽釜	在地	-	-	- SK 098	突帯部径29.0cm 外面にスス付着	
第423回-161	瓦質土器	羽釜	在地	-	-	- SK 098	突帯部径26.2cm 外面突帯下スス	39
第423回-162	瓦質土器	羽釜	在地	-	-	- SK 098	取っ手部分か?	
第423回-163	瓦質土器	播鉢	在地	32.0	-	- SK 098		39
第423回-164	瓦質土器	播鉢	在地	-	12.6	- SK 098		
第424回-165	瓦質土器	火鉢	在地	23.6	-	- SK 098		
第424回-166	瓦質土器	火鉢	在地	34.6	31.0	9.2 SK 098		
第424回-167	瓦質土器	火鉢	在地	-	43.2	- SK 098		
第424回-168	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	- SK 098		
第424回-169	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	- SK 098		
第424回-170	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	- SK 098		
第424回-171	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	- SK 098	(双顔蓋手文)	
第425回-172	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	35.0	-	- SK 098	(雷文)	39
第425回-173	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	41.0	-	- SK 098	(雷文)	39
第425回-174	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	-	- SK 098	(雷文)	
第425回-175	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	-	- SK 098		
第425回-176	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	29.6	- SK 098		
第425回-177	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	-	- SK 098	(双顔蓋手文)	
第425回-178	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	-	- SK 098	(双顔蓋手文)	39
第425回-179	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	-	- SK 098	(双顔蓋手文) 突帯部径17.6cm	39
第426回-180	瓦質土器	埴輪	在地	33.4	-	- SK 098		
第426回-181	瓦質土器	土鍋	在地	41.8	-	- SK 098		40
第426回-182	瓦質土器	土鍋	在地	40.6	-	- SK 098		
第426回-183	瓦質土器	鉢	在地	34.0	26.2	4.1 SK 098	底部に砂が付着	
第426回-184	瓦質土器	鉢	在地	31.4	20.4	10.5 SK 098		
第426回-185	瓦質土器	鉢	在地	30.8	-	- SK 098		
第427回-186	瓦質土器	鉢	在地	34.8	-	- SK 098		
第427回-187	瓦質土器	鉢	在地	-	-	- SK 098		
第427回-188	瓦質土器(赤)	鉢	在地	-	-	- SK 098		
第427回-189	瓦質土器	鉢	在地	-	-	- SK 098	表面に鉄分付着	
第427回-190	瓦質土器	鉢	在地	-	-	- SK 098		
第427回-191	瓦質土器	鉢	在地	-	-	- SK 098		
第427回-192	瓦質土器	鉢	在地	-	23.6	- SK 098		
第427回-193	瓦質土器	壺	在地	13.6	-	- SK 098		
第427回-194	瓦質土器	鉢	在地	16.6	-	- SK 098	壺か鉢の底部	40
第427回-195	瓦質土器	埴輪	在地	10.2	3.5	4.2 SK 098		
第427回-196	瓦質土器	埴輪	在地	-	5.2	- SK 098		
第427回-197	瓦質土器	埴輪	在地	-	5.4	- SK 098		
第427回-198	瓦質土器(赤)	?	在地	8.6	-	- SK 098		
第431回-1	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	2.1 SK 099		
第431回-2	京都系土師器	皿	在地	9.3	-	1.7 SK 099		
第431回-3	京都系土師器	皿	在地	10.0	-	- SK 099		
第431回-4	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	- SK 099		
第431回-5	京都系土師器	皿	在地	13.2	-	2.3 SK 099		
第433回-1	土師質土器	小皿	在地	8.0	6.7	1.8 SK 107		
第433回-2	土師質土器	小皿	在地	8.6	7.2	1.4 SK 107		
第433回-3	土師質土器	小皿	在地	8.7	6.8	1.7 SK 107		
第433回-4	土師質土器	坏	在地	7.4	5.0	3.0 SK 107		
第433回-5	土師質土器	坏	在地	7.5	4.6	2.2 SK 107		
第433回-6	土師質土器	坏	在地	7.8	5.1	2.4 SK 107		
第433回-7	土師質土器	坏	在地	8.7	6.0	2.5 SK 107		
第433回-8	土師質土器	坏	在地	8.9	5.8	2.6 SK 107		
第433回-9	土師質土器	坏	在地	11.5	8.3	3.1 SK 107		
第433回-10	土師質土器	坏	在地	12.6	9.3	2.8 SK 107		
第433回-11	土師質土器	坏	在地	12.8	8.2	3.8 SK 107		
第433回-12	土師質土器	坏	在地	13.0	8.9	3.1 SK 107		
第433回-13	土師質土器	坏	在地	13.0	9.3	3.3 SK 107		

遺物観察表32 (第21次調査区)

第21次調査区遺物観察表⑦ (土器・陶磁器類)

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第433図-14	土師質土器	坏	在地	13.0	9.3	3.2	SK 107	
第433図-15	土師質土器	坏	在地	14.2	10.6	3.5	SK 107	
第433図-16	土師質土器	坏	在地	15.0	10.7	2.9	SK 107	
第434図-17	土師質土器	坏	在地	12.0	8.0	3.5	SK 107	
第434図-18	土師質土器	坏	在地	12.7	7.6	3.6	SK 107	
第434図-19	土師質土器	坏	在地	12.8	7.2	3.8	SK 107	
第434図-20	土師質土器	坏	在地	13.0	7.9	3.8	SK 107	
第434図-21	土師質土器	坏	在地	13.0	8.3	3.8	SK 107	
第434図-22	白磁	碗	中国	-	5.0	-	SK 107	
第434図-23	青磁	皿	中国(同安窯)	-	5.6	-	SK 107	40
第434図-24	瓦質土器(赤)	火鉢	在地	-	-	-	SK 107	
第434図-25	瓦質土器(赤)	鉢	在地	31.4	-	-	SK 107	
第434図-26	須恵土器	壺	不明	46.0	-	-	SK 107	40
第435図-1	陶器	鉢皿	古瀬戸	-	10.7	-	SK 109	40
第435図-2	土師質土器	坏	在地	13.3	10.1	3.6	SK 109	
第435図-3	土師質土器	坏	在地	7.8	5.9	2.3	SK 109	
第435図-4	土師質土器	坏	在地	13.1	9.1	3.3	SK 109	
第435図-5	土師質土器	坏	在地	12.0	-	-	SK 109	
第437図-1	白磁	碗	中国	13.2	-	-	SK 112	
第437図-2	京都系土師器	坏	在地	11.1	-	3.9	SK 112	
第437図-3	京都系土師器	坏	在地	12.9	-	-	SK 112	
第437図-4	瓦質土器	鍋	在地	21.8	-	-	SK 112	
第439図-1	土師質土器	坏	在地	12.3	8.6	3.1	SK 113	
第441図-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.6	-	-	SK 114	40
第441図-2	京都系土師器	皿	在地	10.0	-	2.0	SK 114	
第441図-3	京都系土師器	皿	在地	12.9	-	2.3	SK 114	
第441図-4	京都系土師器	皿	在地	14.5	-	-	SK 114	
第441図-5	陶器	漆鉢	備前	30.2	-	-	SK 114	
第443図-1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	5.3	-	SK 116	E群(緑線心)
第443図-2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	4.6	-	SK 116	E群(緑線心)
第443図-3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	6.1	-	SK 116	B群
第443図-4	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	7.1	-	SK 116	
第443図-5	青磁	碗	中国	-	3.5	-	SK 116	
第443図-6	白磁	皿	中国	-	6.1	-	SK 116	見込みに蛇の目釉刺ぎ
第443図-7	青花	皿	中国(漳州窯)?	-	6.4	-	SK 116	残存部に呉州の文様が無し
第443図-8	陶器	壺	備前	-	5.7	-	SK 116	
第443図-9	陶器	壺	備前	44.6	-	-	SK 116	
第443図-10	京都系土師器	皿	在地	9.1	-	2.1	SK 116	灯明皿
第443図-11	京都系土師器	皿	在地	12.2	-	-	SK 116	
第443図-12	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	-	SK 116	
第443図-13	土師質土器	小皿	在地	7.1	-	1.9	SK 116	
第443図-14	瓦質土器	蓋	在地	16.2	-	-	SK 116	
第445図-1	青花	皿	中国(漳州窯)	13.1	-	-	SK 118	
第445図-2	磁器	皿	中国	6.8	-	-	SK 118	雅翠釉
第445図-3	白磁	皿	中国	-	3.9	-	SK 118	見込みに蛇の目釉刺ぎ
第445図-4	白磁	皿	中国	-	4.5	-	SK 118	
第445図-5	陶器	碗	?	-	4.9	-	SK 118	見込みと高台端部に目跡無し
第445図-6	陶器	掛花入	備前	-	6.4	-	SK 118	
第445図-7	陶器	漆鉢	備前	26.4	-	-	SK 118	
第445図-8	陶器	漆鉢	備前	27.4	-	-	SK 118	斜め窪目
第445図-9	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	-	SK 118	
第445図-10	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	2.1	SK 118	
第445図-11	京都系土師器	皿	在地	9.1	-	2.1	SK 118	
第445図-12	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	2.4	SK 118	灯明皿
第445図-13	京都系土師器	皿	在地	9.2	-	2.2	SK 118	
第445図-14	京都系土師器	皿	在地	9.5	-	2.4	SK 118	
第445図-15	京都系土師器	皿	在地	9.7	-	2.6	SK 118	灯明皿
第446図-16	京都系土師器	皿	在地	9.9	-	-	SK 118	
第446図-17	京都系土師器	皿	在地	11.0	-	-	SK 118	
第446図-18	京都系土師器	皿	在地	11.7	-	2.7	SK 118	
第446図-19	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.5	SK 118	灯明皿? スス付着
第446図-20	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.1	SK 118	
第446図-21	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	-	SK 118	
第446図-22	京都系土師器	皿	在地	12.1	-	2.4	SK 118	
第446図-23	京都系土師器	皿	在地	12.3	-	2.3	SK 118	
第446図-24	京都系土師器	皿	在地	12.3	-	2.2	SK 118	
第446図-25	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	2.4	SK 118	
第446図-26	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	2.3	SK 118	灯明皿? スス付着
第446図-27	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	-	SK 118	
第446図-28	京都系土師器	皿	在地	14.1	-	2.5	SK 118	
第446図-29	京都系土師器	坏	在地	13.2	-	3.2	SK 118	
第446図-30	土師質土器	皿	在地	11.0	6.4	2.4	SK 118	
第446図-31	瓦質土器	漆鉢	防長系	14.8	-	-	SK 118	
第446図-32	瓦質土器	壺	在地	28.2	-	-	SK 118	
第446図-33	瓦質土器	鉢	在地	-	18.6	-	SK 118	

第21次調査区遺物観察表⑧ (土器・陶磁器類)

埴田No.	器種	生産地	量(単位cm)			遺構名	備考	写真図 No.
			口径	底径	器高			
第448区-1	京都系土師器	皿	在地	7.8	-	SK 119	灯明皿	
第450区-1	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	13.1	7.2	2.4	SK 120	底部裏に赤い塗料3点付着
第450区-2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.9	-	-	SK 120	蓮子碗
第450区-3	青花	瓶	中国(漳州窯)	-	-	-	SK 120	
第450区-4	朝鮮王朝産陶器	碗	朝鮮	14.1	-	-	SK 120	
第450区-5	京都系土師器	皿	在地	12.4	-	2.4	SK 120	
第450区-6	京都系土師器	皿	在地	12.4	-	2.3	SK 120	
第450区-7	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	2.5	SK 120	
第450区-8	京都系土師器	皿	在地	12.7	-	2.1	SK 120	灯明皿
第450区-9	京都系土師器	皿	在地	12.8	-	2.4	SK 120	
第450区-10	瓦質土器	火鉢	在地	43.8	-	-	SK 120	
第450区-11	瓦質土器	火鉢	在地	-	39.0	-	SK 120	
第450区-12	瓦質土器	播鉢	防長系?在地?	-	13.8	-	SK 120	
第454区-1	京都系土師器	皿	在地	13.0	-	-	SK 136	
第456区-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	13.3	-	-	SK 155	B群
第456区-2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SK 155	
第456区-3	青磁	碗	中国(龍泉窯)	13.2	-	-	SK 155	
第456区-4	青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SK 155	
第456区-5	白磁	碗	中国	-	-	-	SK 155	
第456区-6	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	-	SK 155	
第456区-7	京都系土師器	皿	在地	14.0	-	-	SK 155	
第456区-8	京都系土師器	皿	在地	16.6	-	-	SK 155	
第456区-9	京都系土師器	皿	在地	18.0	-	-	SK 155	
第456区-10	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK 155	
第456区-11	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK 155	
第456区-12	土師質土器	小皿	在地	7.5	5.7	1.3	SK 155	
第456区-13	土師質土器	小皿	在地	8.0	5.8	1.3	SK 155	
第456区-14	土師質土器	小皿	在地	9.5	7.5	1.4	SK 155	
第456区-15	土師質土器	小皿	在地	9.7	6.5	1.6	SK 155	
第456区-16	土師質土器	坏	在地	12.6	10.0	2.9	SK 155	
第456区-17	土師質土器	皿	在地	-	-	-	SK 155	
第456区-18	瓦質土器	鉢	在地	-	-	-	SK 155	
第458区-1	京都系土師器	皿	在地	9.9	-	2.4	SK 157	灯明皿
第458区-2	土師質土器	皿	在地	9.1	-	2.0	SK 157	
第460区-1	瓦質土器	鉢	在地	31.2	-	-	SK 161	
第462区-1	京都系土師器	皿	在地	10.9	-	-	SK 165	
第462区-2	京都系土師器	皿	在地	13.5	-	-	SK 165	
第462区-3	京都系土師器	皿	在地	14.3	-	-	SK 165	
第462区-4	京都系土師器	皿	在地	14.9	-	-	SK 165	
第462区-5	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK 165	
第462区-6	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SK 165	
第462区-7	土師質土器	小皿	在地	8.1	7.2	1.4	SK 165	
第464区-1	土師質土器	皿	在地	12.4	6.9	2.4	SK 166	
第464区-2	土師質土器	皿	在地	12.5	6.0	2.8	SK 166	
第466区-1	白磁	皿	中国	-	-	-	SK 167	
第466区-2	京都系土師器	皿	在地	10.3	-	-	SK 167	
第466区-3	京都系土師器	皿	在地	12.7	-	-	SK 167	
第466区-4	京都系土師器	皿	在地	16.0	10.0	2.0	SK 167	
第466区-5	須恵質土器	甕 or 壺	?	-	-	-	SK 167	
第467区-1	吉備系土師器	埴	吉備系	-	3.8	-	SK 168	
第467区-2	瓦質土器	鉢	在地	18.5	-	-	SK 168	
第467区-3	須恵質土器	甕 or 壺	?	-	-	-	SK 168	
第467区-4	須恵質土器	甕 or 壺	?	-	-	-	SK 168	中世須恵器
第467区-5	須恵質土器	甕 or 壺	?	-	-	-	SK 168	中世須恵器
第467区-6	須恵質土器	甕 or 壺	?	-	-	-	SK 168	中世須恵器
第468区-1	京都系土師器	皿	在地	15.4	-	-	SE 169	
第470区-1	瓦質土器	土鍋	在地	31.0	-	-	SK 170	
第471区-2	瓦質土器(赤)	土鍋	在地	28.2	-	-	SK 170	
第473区-1	白磁	碗	中国	-	-	-	SK 175	
第477区-1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.0	-	-	SE 084	
第477区-2	青磁	香炉	中国(龍泉窯)	-	-	-	SE 084	
第477区-3	青磁	掛花入?	中国	-	-	-	SE 084	
第477区-4	白磁	皿	中国	11.6	-	-	SE 084	
第477区-5	焼締陶器	鉢	備前	16.4	-	-	SE 084	
第477区-6	陶器	鉢	備前	22.0	12.6	5.6	SE 084	胴部中位に重ね焼きの痕跡有り
第477区-7	陶器	掛花入	備前	9.8	-	-	SE 084	
第477区-8	陶器	播鉢	備前	22.2	-	-	SE 084	
第477区-9	陶器	播鉢	備前	31.2	-	-	SE 084	
第477区-10	陶器	播鉢	備前	-	12.6	-	SE 084	
第477区-11	陶器	播鉢	備前	-	14.0	-	SE 084	斜め播目
第477区-12	陶器	播鉢	備前	-	10.4	-	SE 084	斜め播目
第478区-13	陶器	甕? 壺?	備前	-	14.0	-	SE 084	
第478区-14	陶器	甕	備前	24.4	-	-	SE 084	
第478区-15	京都系土師器	皿	在地	8.9	-	2.0	SE 084	灯明皿
第478区-16	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	-	SE 084	灯明皿

遺物観察表34 (第21次調査区)

第21次調査区遺物観察表⑨ (土器・陶磁器類)

神田No.	器種	生産地	法尺(単位cm)			追記名	備考	写真 No.
			口径	底径	高さ			
第478回	17 京極系土師器	皿	在場	9.2	-	2.2	SE 084	
第478回	18 京極系土師器	皿	在場	9.2	-	-	SE 084	灯明皿?
第478回	19 京極系土師器	坪	在場	11.2	6.2	3.3	SE 084	
第478回	20 京極系土師器	皿	在場	12.8	-	-	SE 084	
第478回	21 京極系土師器	皿	在場	12.8	-	2.4	SE 084	
第478回	22 京極系土師器	皿	在場	14.3	-	-	SE 084	
第478回	23 京極系土師器	皿	在場	20.4	-	-	SE 084	
第478回	24 瓦質土器	鉢	在場	31.8	24.0	4.8	SE 084	
第478回	25 瓦質土器	鉢	在場	34.0	-	-	SE 084	
第483回	1 青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SE 100	鍋蓋弁
第483回	2 青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SE 100	鍋蓋弁
第483回	3 青磁	碗	中国(龍泉窯)	-	-	-	SE 100	鍋蓋弁
第483回	4 白磁	皿	中国	10.0	6.0	2.1	SE 100	口ハゲ
第483回	5 襷袖陶器	段	中国	11.0	-	-	SE 100	
第483回	6 陶器	費	常滑	26.6	-	-	SE 100	蓋かぶた模刻を要す
第483回	7 土師質土器	小皿	在場	7.4	5.8	1.3	SE 100	
第483回	8 土師質土器	小皿	在場	7.6	6.3	1.3	SE 100	
第483回	9 土師質土器	小皿	在場	7.6	6.4	1.2	SE 100	
第483回	10 土師質土器	小皿	在場	8.0	6.5	1.3	SE 100	
第483回	11 土師質土器	小皿	在場	8.2	6.8	1.3	SE 100	
第483回	12 土師質土器	小皿	在場	8.4	7.1	1.4	SE 100	
第483回	13 土師質土器	小皿	在場	8.4	6.7	1.4	SE 100	
第483回	14 土師質土器	小皿	在場	8.4	6.0	1.3	SE 100	
第483回	15 土師質土器	小皿	在場	8.5	6.7	1.3	SE 100	
第483回	16 土師質土器	小皿	在場	8.5	7.4	1.3	SE 100	
第483回	17 土師質土器	小皿	在場	8.6	6.7	1.8	SE 100	
第483回	18 土師質土器	小皿	在場	8.8	7.3	1.2	SE 100	
第484回	19 土師質土器	小皿	在場	9.0	7.2	1.3	SE 100	
第484回	20 土師質土器	小皿	在場	9.0	7.0	1.3	SE 100	
第484回	21 土師質土器	小皿	在場	9.4	7.0	1.3	SE 100	
第484回	22 土師質土器	小皿	在場	8.2	6.7	0.3	SE 100	
第484回	23 土師質土器	坪	在場	10.8	7.8	3.3	SE 100	
第484回	24 土師質土器	坪	在場	11.0	9.0	3.0	SE 100	
第484回	25 土師質土器	坪	在場	11.2	9.6	3.1	SE 100	
第484回	26 土師質土器	坪	在場	11.6	8.0	3.0	SE 100	
第484回	27 土師質土器	坪	在場	11.6	9.0	3.2	SE 100	
第484回	28 土師質土器	坪	在場	12.0	9.3	3.0	SE 100	
第484回	29 土師質土器	坪	在場	12.0	9.3	3.3	SE 100	
第484回	30 土師質土器	坪	在場	12.0	7.9	2.9	SE 100	
第484回	31 土師質土器	坪	在場	12.0	9.2	3.0	SE 100	
第484回	32 土師質土器	坪	在場	12.0	8.0	3.0	SE 100	
第484回	33 土師質土器	坪	在場	12.0	8.8	3.3	SE 100	
第484回	34 土師質土器	坪	在場	12.0	9.2	2.8	SE 100	
第485回	35 土師質土器	坪	在場	12.1	7.7	3.3	SE 100	
第485回	36 土師質土器	坪	在場	12.2	9.1	2.8	SE 100	
第485回	37 土師質土器	坪	在場	12.2	8.9	3.0	SE 100	
第485回	38 土師質土器	坪	在場	12.2	8.1	3.1	SE 100	
第485回	39 土師質土器	坪	在場	12.2	8.4	3.2	SE 100	
第485回	40 土師質土器	坪	在場	12.3	7.8	2.9	SE 100	
第485回	41 土師質土器	坪	在場	12.5	9.4	3.2	SE 100	
第485回	42 土師質土器	坪	在場	12.8	9.5	3.2	SE 100	
第485回	43 土師質土器	坪	在場	12.8	8.6	3.2	SE 100	
第485回	44 土師質土器	坪	在場	12.9	10.0	2.9	SE 100	
第485回	45 土師質土器	坪	在場	12.9	8.6	3.0	SE 100	
第485回	46 土師質土器	坪	在場	12.9	6.6	3.5	SE 100	
第485回	47 土師質土器	坪	在場	12.9	9.3	3.0	SE 100	
第485回	48 土師質土器	坪	在場	12.9	9.9	3.0	SE 100	
第485回	49 土師質土器	坪	在場	13.0	8.4	3.9	SE 100	
第486回	50 土師質土器	坪	在場	13.0	9.4	3.1	SE 100	
第486回	51 土師質土器	坪	在場	13.6	10.0	3.3	SE 100	
第486回	52 土師質土器	坪	在場	12.1	4.8	2.7	SE 100	
第486回	53 瓦質土器	鉢	在場	27.0	-	-	SE 100	内側横方向ハケ目(11~12本/1cm)
第486回	54 瓦質土器	鉢	在場	30.0	-	-	SE 100	内側横方向ハケ目(11~12本/1cm)
第486回	55 瓦質土器	鉢	在場	33.0	-	-	SE 100	
第487回	56 瓦質土器	鉢	在場	38.0	-	-	SE 100	内側横方向ハケ目(7~8本/1cm)
第487回	57 瓦質土器	鉢	在場	-	11.8	-	SE 100	内側横方向ハケ目(9~10本/1cm)
第487回	58 瓦質土器(未)	鍋	在場	27.6	-	-	SE 100	内側横方向ハケ目(11~12本/1cm)
第492回	1 青花	皿	中国(漳州窯)	-	5.0	-	SE 108	
第492回	2 青花	碗	中国(漳州窯)	12.0	-	-	SE 108	
第492回	3 青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	9.4	-	SE 108	高台に胎土目のような直線あり
第492回	4 京極系土師器	皿	在場	11.8	-	2.3	SE 108	
第492回	5 京極系土師器	皿	在場	11.6	-	2.7	SE 108	
第492回	6 京極系土師器	皿	在場	11.6	-	2.7	SE 108	
第492回	7 京極系土師器	坪	在場	9.4	-	3.3	SE 108	
第492回	8 京極系土師器	坪	在場	10.4	-	3.3	SE 108	

第21次調査区遺物観察表⑩ (土器・陶磁器類)

採回No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	写真記録 No.
			口径	底径	器高			
第492回-9	京都系土師器	坏	在地	11.0	-	3.2	SE 108	
第492回-10	京都系土師器	坏	在地	11.6	-	3.6	SE 108	
第492回-11	瓦質土器	鉢	在地	54.8	-	-	SE 108	
第492回-12	瓦質土器	釜	在地	-	-	-	SE 108	
第493回-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SE 108	44
第493回-2	青花	碗	中国(漳州窯)	-	-	-	SE 108	44
第493回-3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SE 108	44
第493回-4	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SE 108	44
第493回-5	白磁	皿	中国	-	10.4	-	SE 108	44
第493回-6	白磁	碗	中国	-	3.1	-	SE 108	44
第493回-7	白磁	皿 or 碗	中国	-	-	-	SE 108	
第493回-8	磁器	皿	中国	-	3.5	-	SE 108	44
第493回-9	磁器	?	中国	-	-	-	SE 108	
第493回-10	陶器	折縁皿	瀬戸美濃	11.0	6.0	2.5	SE 108	44
第493回-11	陶器	甕	備前	33.0	-	-	SE 108	
第493回-12	陶器	甕	備前	24.3	-	-	SE 108	
第493回-13	陶器	甕	備前	-	-	-	SE 108	44
第493回-14	京都系土師器	皿	在地	11.0	5.8	2.7	SE 108	
第497回-1	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	7.0	-	SE 115-117	44
第497回-2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.7	5.2	4.9	SE 115-117	44
第497回-3	京都系土師器	皿	在地	8.1	-	2.5	SE 115-117	
第497回-4	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	2.0	SE 115-117	
第497回-5	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	1.9	SE 115-117	
第497回-6	京都系土師器	皿	在地	8.9	-	2.2	SE 115-117	
第497回-7	京都系土師器	皿	在地	9.4	-	1.7	SE 115-117	
第497回-8	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	2.1	SE 115-117	
第497回-9	京都系土師器	皿	在地	12.8	-	2.4	SE 115-117	
第497回-10	京都系土師器	皿	在地	13.2	-	-	SE 115-117	
第497回-11	京都系土師器	皿	在地	13.3	-	2.0	SE 115-117	
第497回-12	京都系土師器	皿	在地	13.4	-	-	SE 115-117	
第497回-13	京都系土師器	皿	在地	13.9	-	-	SE 115-117	
第497回-14	京都系土師器	坏	在地	11.4	-	3.5	SE 115-117	
第497回-15	土師質土器	皿	在地	10.2	6.3	2.0	SE 115-117	
第497回-16	瓦質土器	甕鉢	在地	26.3	-	-	SE 115-117	
第497回-17	瓦質土器	甕鉢	在地	-	13.6	-	SE 115-117	
第500回-1	土師質土器	皿	在地	13.2	8.6	2.7	SB 201	45
第500回-2	土師質土器	皿	在地	15.0	-	-	SB 201	45
第500回-3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SB 201	
第502回-1	白磁	碗	中国	-	-	-	SB 202	45
第505回-1	青花	碗	中国(漳州窯)	-	-	-	SP 001	45
第505回-2	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	-	SP 001	
第505回-3	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 001	
第505回-4	京都系土師器	皿	在地	12.4	-	2.4	SP 004	
第505回-5	京都系土師器	坏	在地	12.0	-	3.6	SP 004	
第505回-6	土師質土器	坏	在地	-	-	-	SP 006	
第505回-7	白磁	碗	中国	13.6	-	-	SP 006	45
第505回-8	京都系土師器	坏	在地	12.0	-	-	SP 008	
第505回-9	青磁	皿	中国(龍泉窯)	-	-	-	SP 010	
第505回-10	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 020	
第505回-11	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 020	
第505回-12	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 020	
第505回-13	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 021	
第505回-14	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	6.0	-	SP 038	45
第505回-15	青花	皿	中国(景德鎮窯)	9.5	-	-	SP 045	45
第505回-16	京都系土師器	皿	在地	12.6	-	-	SP 045	
第505回-17	京都系土師器	皿	在地	12.7	-	-	SP 046	
第506回-18	京都系土師器	皿	在地	12.9	-	-	SP 048	
第506回-19	土師質土器	皿	在地	12.7	-	-	SP 048	45
第506回-20	土師質土器	皿	在地	13.0	8.1	-	SP 048	45
第506回-21	白磁	碗	中国	18.7	-	-	SP 052	45
第506回-22	白磁	皿	中国	7.1	-	-	SP 054	45
第506回-23	京都系土師器	皿	在地	10.9	-	-	SP 054	
第506回-24	土師質土器	小皿	在地	-	3.6	-	SP 060	
第506回-25	京都系土師器	皿	在地	16.0	-	-	SP 069	
第506回-26	青磁	鉢	中国(龍泉窯)	-	-	-	SP 074	
第506回-27	瓦質土器	鍋	在地	-	-	-	SP 074	
第506回-28	土師質土器	坏	在地	12.4	9.2	3.1	SP 076	
第506回-29	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SP 077	45
第506回-30	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 078	
第506回-31	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SP 080	45
第506回-32	白磁	碗	中国	-	-	-	SP 080	
第506回-33	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	-	SP 080	
第506回-34	陶器	甕鉢	備前	-	-	-	SP 080	
第506回-35	磁器	合子	中国	8.5	-	-	SP 103	45
第506回-36	土師質土器	皿	在地	11.0	6.1	2.7	SP 104	

遺物観察表36 (第21次調査区)

第21次調査区遺物観察表① (土器・陶磁器類)

押印No.	器種	生産地	法尺(単位cm)			遺物名	備考	写真記録 No.	
			口径	底径	器高				
第508図-37	京都系土師器	皿	在地	7.5	-	SP 104	灯明皿		
第507図-38	陶器	指鉢	備前	-	14.0	SP 133			
第507図-39	京都系土師器	皿	在地	-	-	SP 134			
第507図-40	瓦質土器	鉢	在地	-	-	SP 134			
第507図-41	青花	碗	中国(景德鎮窯)	10.8	-	SP 135		45	
第507図-42	青花	碗	中国(景德鎮窯)	13.6	-	SP 137		45	
第507図-43	青磁	碗	中国(龍泉窯)	14.8	-	SP 137	鍋蓋井	45	
第507図-44	京都系土師器	皿	在地	-	-	SP 137			
第507図-45	京都系土師器	皿	在地	-	-	SP 137			
第507図-46	土師質土器	焼塩釜の蓋	在地	5.4	4.3	1.8	SP 137		
第507図-47	京都系土師器	皿	在地	15.3	-	-	SP 139		
第507図-48	土師質土器	皿	在地	-	8.1	-	SP 150		
第507図-49	土師質土器	皿	在地	10.8	7.4	2.4	SP 154		
第507図-50	京都系土師器	皿	在地	-	-	-	SP 156		
第507図-51	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	-	SP 159		
第507図-52	土師質土器	小皿	在地	8.5	6.7	1.6	SP 160		
第507図-53	土師質土器	小皿	在地	7.6	5.7	1.0	SP 160		
第508図-1	陶器	?	中国	-	-	包含層 K-35上層	緑釉陶器	46	
第508図-2	陶器	皿	肥前	10.2	3.4	3.0	包含層 K-36	唐津	46
第508図-3	陶器	碗	肥前	-	-	-	包含層 L-34	唐津	46
第508図-4	陶器	?	中国	-	-	-	包含層 L-34上層	華南三彩	46
第508図-5	磁器	皿	中国	6.8	4.7	1.0	包含層 L-35	翡翠輪	46
第508図-6	陶器	皿	高取系	-	-	-	包含層 L-36		46
第508図-7	陶器	鉢	中国	-	-	-	包含層 L-36上層	華南三彩	46
第508図-8	陶器	皿	不明	-	-	-	包含層 M-34		46
第508図-9	陶器	舟形鉢	朝鮮	-	-	-	包含層 M-34		46
第508図-10	青磁	皿	中国(龍泉窯)	12.0	-	-	包含層 M-35		46
第508図-11	焼締陶器	鉢	中国(南唐)	23.0	-	-	包含層 M-35	A類	46
第508図-12	磁器	碗	中国	-	-	-	包含層 M-36	五彩	46
第508図-13	陶器	徳利	備前	-	-	-	包含層 M-36		46
第508図-14	陶器	碗	肥前	-	4.8	-	包含層 M-36	唐津	46
第508図-15	陶器	碗	中国	-	-	-	包含層 M-36上層	五彩	46

第21次調査区遺物観察表 (金属製品・土製品・石製品)

探検No.	品類	材質	部位	寸法 (単位cm)					重量(g)	遺構名	備考	記録No.
				長さ	幅	高さ	厚さ	穴径				
第377図-94	バネ	鉛製		長さ	2.4	短径	1.8	厚さ	0.4	5	SD087	巻頭
第377図-84	土鍾	土製		長さ	4.7	幅	3.45	穴径	0.2	57.1	SD087	35
第377図-85	土鍾	土製		長さ	5.4	幅	1.9	穴径	0.3	5.6	SD087	35
第377図-86	土鍾	土製		長さ	4.9	幅	1	穴径	0.3	5.4	SD087	35
第377図-87	土鍾	土製		長さ	5.1	幅	1.3	穴径	0.22	8.2	SD087	35
第377図-88	土鍾	土製		長さ	5	幅	1.3	穴径	0.3	8	SD087	35
第377図-89	土鍾?	土製		長さ	4.1	幅	1.2	穴径		5.2	SD087	35
第410図-6	土鍾	土製		長さ	4.8	幅	1.3	穴径	0.5	5.8	SK083	
第403図-52	土鍾	土製		長さ	5	幅	1.9	穴径	0.37	9.2	SK031	
第403図-53	土鍾	土製		長さ	4.4	幅	1.3	穴径	3.8	6.8	SK031	
第403図-54	土鍾	土製		長さ	4.5	幅	1.05	穴径	3.7	5.4	SK031	
第403図-55	土鍾	土製		長さ	-	幅	1	穴径	3.7	3	SK031	
第403図-56	土鍾	土製		長さ	2.7	幅	1	穴径	0.3	3	SK031	
第429図-201	茶臼	安山岩		皿径	42					202.3	SK098	40
第429図-202	茶臼	凝灰岩								415.3	SK098	40
第429図-203	土鍾	土製		長さ	5.7	幅	0.7	穴径	0.4	7.1	SK098	
第429図-204	土鍾	土製		長さ	5.6	幅	0.7	穴径	0.3	7.6	SK098	
第429図-205	土鍾	土製		長さ	5.4	幅	0.6	穴径	0.5	6.1	SK098	
第429図-206	鍾?	銅製		長さ	15.9	幅	0.9 ~1				SK098	40
第437図-5	土鍾	土製		長さ	5.6	幅	1.2	穴径	0.4	6.9	SK112	
第456図-19	土鈴	土製				幅	2.9				SK155	
第464図-3	土鍾	土製		長さ	4.9	幅	1.4	穴径	0.3	8.3	SK166	
第487図-59	礫石	頁岩		長さ	4.9	幅	2.9	厚さ	1.6 ~1	23.3	SE100	スリ面4面
第487図-60	土鍾	土製		長さ	4.7	幅	0.9	穴径	0.3	3.4	SE100	
第487図-61	土鍾	土製		長さ	3.2	幅	0.8	穴径	0.3	1.9	SE100	

第21次調査区遺物観察表 (瓦類)

探検No.	品類	部位	寸法 (単位cm)					遺構名	備考	記録No.
			長さ	幅	高さ	厚さ	穴径			
第377図-90	丸瓦		長さ	12.8	幅	8.7	厚さ	2.0	SD087	
第383図-8	軒丸瓦	瓦類	長さ		幅		厚さ		SK013	35
第383図-9	平瓦		長さ		幅		厚さ		SK013	
第428図-199	塼		長さ		幅		厚さ		SK098	
第428図-200	丸瓦		長さ		幅		厚さ		SK098	伏間瓦 内面布目痕
第452図-1	平瓦		長さ		幅		厚さ		SK121	
第479図-27	平瓦		長さ	13.5	幅	13.5	厚さ	2.3	SE084	
第479図-28	平瓦		長さ		幅		厚さ	1.9	SE084	
第479図-29	丸瓦		長さ		幅		厚さ	2.2	SE084	
第479図-30	?		長さ	22.2	幅	22.3	厚さ	2.9	SE084	

遺物観察表38 (第21次調査区)

第21次調査区遺物観察表 (銭貨)

採掘No.	銭貨名	初鑄造年	国・王朝名	遺構名	重さ (g)	直径 (mm)	書体	備考	記録 No.
第377図-91	皇宋通寶	1038	北宋	SD087	1.7			割れている	
第377図-92	聖宋元寶	1101	北宋	SD087	2.3	24	篆書	折二銭・1101年	
第377図-93	不明			SD087	0.4			欠片だけ	
第379図-4	正隆元寶	1157	金	SK011	2.3	25.0		錆のため判読不能	
第392図-8	嘉祐通寶	1056	北宋	SK017	1.5		篆書		
第404図-57	開元通寶	621	唐	SK031	2.0	24.0		判読困難	
第404図-58	不明			SK031	1.1	2.2		錆のため判読不能	
第429図-207	熙寧元寶	1068	北宋	SK096	2.8	24.0	真書		
第437図-6	皇宋通寶	1038	北宋	SK112	1.7	24.5	篆書	半分欠損	
第441図-6	不明			SK114	2.3	25.0		錆のため判読不能	
第446図-34	至和通寶	1054		SK118	1.6	25.0			
第478図-26	皇宋通寶	1038	北宋	SE084	1.8	24.5		一部欠損	
第487図-62	元祐通寶	1086	北宋	SE100	2.9	25.0	行書	折二銭・1093年	
第487図-63	開元通寶	621	唐	SE100	2.4	25.0			
第487図-64	皇宋通寶	1038	北宋	SE100	2.2	25.5	行書	半分に割れている	
第487図-65	嘉祐元寶	1056	北宋	SE100	2.5	25.5			
第487図-66	不明			SE100	2.4	23.0		錆のため判読不能	
第493図-15	天聖元寶	1023	北宋	SE108	2.1	24.5	篆書		
第493図-16	不明			SE108	2.5	2.4		錆のため判読不能	
第497図-18	不明			SE115	2.9	25.0		錆のため判読不能	

写 真 图 版



I 区全景 (北から)



I 区全景 (北から)



I 区 SD01・SK08・SE12



I 区 SD01



I 区 SK04



I 区 SK05



I 区 SK06



I 区 SK07



I区 SK08



I区 SK09



I区 SK10



I区 SF14・SK11



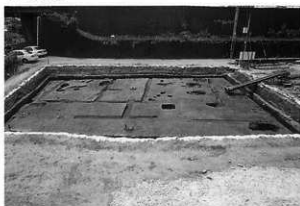
I区 SE12



I区 SE13



IV区全景 (北から)



IV区全景 (東から)



Ⅳ区 SD01



Ⅳ区 SD01



Ⅳ区 SK12・13 ほか



Ⅳ区 SK13



Ⅳ区 SK16



Ⅳ区 SK17



Ⅳ区 SK18



Ⅳ区 SK19



Ⅳ区 SK20



Ⅳ区 SK22



Ⅳ区 SK26



Ⅳ区 SK27



Ⅳ区 SK28



Ⅳ区 SK29



Ⅳ区 SK30



Ⅳ区 SK31



Ⅳ区 SK33



Ⅳ区 SK34



Ⅳ区 SK35



Ⅳ区 SK36



Ⅳ区 SK37



Ⅳ区 SK38



Ⅳ区 SK39



Ⅳ区 SK41



Ⅳ区 SK42



Ⅳ区 SE45・46



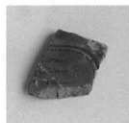
Ⅳ区 SF47



12-6



12-9



14-1

Ⅰ区 SD01 出土遺物(第12図参照)

Ⅰ区 SK03 出土遺物(第14図参照)



16-1



16-2



16-4



16-5



16-6



16-7



16-8



16-9

Ⅰ区 SK04 出土遺物(第16図参照)



18-1



18-2



18-4

I 区 SK05 出土遺物 (第18図参照)



23-1

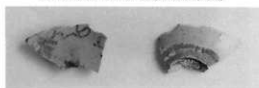


23-2



23-9

I 区 SK08 出土遺物 (第23図参照)



29-1



29-2



29-3



29-4

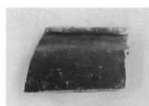


29-5



29-14

I 区 SE12 出土遺物 (第29図参照)



19-4



19-8

I 区 SK06 出土遺物 (第19図参照)



21-1

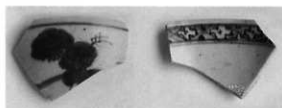


21-4



21-5

I 区 SK07 出土遺物 (第21図参照)



25-1



25-4



25-8

I 区 SK09 出土遺物 (第25図参照)



29-9



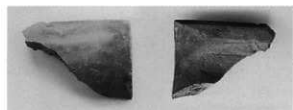
29-10



29-15



32-2



32-4

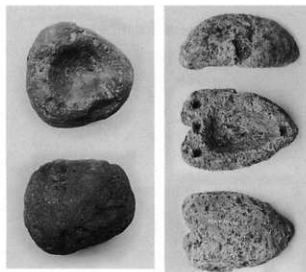


32-3



32-6

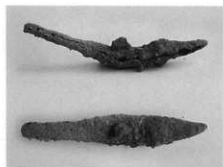
I 区 SE12 出土遺物 (第32図参照)



34-2

34-3

I 区 SE12 出土遺物 (第34図参照)



37-2

I 区 SE13 出土遺物 (第37図参照)



35-1

I 区 SE12 出土遺物 (第35図参照)



38

I 区 SF14 出土遺物 (第38図参照)



40

I 区 SP16 出土遺物 (第40図参照)



45-1



45-2



45-6



45-22



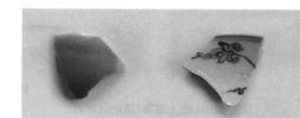
45-8



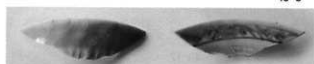
45-20



45-23



45-3



45-4



45-9



45-24



45-19

I 区包含層出土遺物(第45図参照)



47-2



47-3



47-4



47-5



47-6



47-17



47-18



47-22



47-25



47-27



47-30



47-31



47-29



47-34



47-40



47-38



47-47

IV 区 SD1 出土遺物(第47図参照)



48-4



48-6



49-5



49-6

Ⅳ区 SD01 出土遺物(第48図参照)



49-12



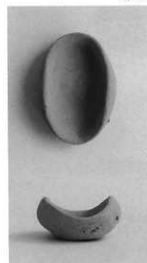
49-15



49-17



49-15



49-20



49-8



49-21



49-43



49-11



49-28



49-30



49-48

Ⅳ区 SD01 出土遺物(第49図参照)



50-1



50-2



50-3



50-9

Ⅳ区 SD01 出土遺物(第50図参照)



53



62-1



62-2



62-3

Ⅳ区 SD03 出土遺物
(第53図参照)



62-6



62-10



62-12

Ⅳ区 SK12 出土遺物(第62図参照)



64-2



64-4



64-5



64-6



64-7



64-8



64-12



64-13



64-14



64-19



64-20



64-21



64-22



64-23



64-25

IV区 SK13 出土遺物(第64図参照)



66-1



66-4

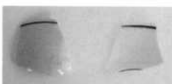


68-1



68-3

IV区 SK15 出土遺物(第68図参照)



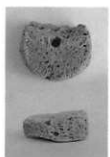
70-1



72-1



72-3



80-11

IV区 SK16 出土遺物
(第70図参照)

IV区 SK17 出土遺物(第72図参照)

IV区 SK20 出土遺物
(第80図参照)



77-4

IV区 SK19 出土遺物
(第77図参照)



82-2



82-3

IV区 SK21 出土遺物(第82図参照)

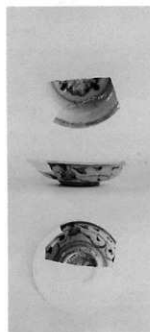


84-3



84-15

Ⅳ区 SK22 出土遺物(第84図参照)



95-1



95-3



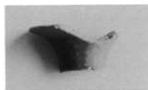
95-4



95-8



95-9



95-10



88-2

Ⅳ区 SK24 出土遺物
(第88図参照)



95-5



95-12



95-14



95-15



95-18



95-20



95-21

Ⅳ区 SK27 出土遺物(第95図参照)



97-1



97-3

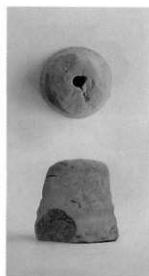


97-4



97-9

Ⅳ区 SK27 出土遺物(第97図参照)



97-10



97-19



97-41



99-1



99-2



97-14



97-20



97-24



97-34



97-38



97-43



98-6



99-5



97-17



97-22



97-27



97-44



98-7



99-10



99-10



97-18



97-23



97-33



97-35



97-40



97-50



98-8



99-11

Ⅳ区 SK27 出土遺物 (第97図参照)

Ⅳ区 SK27 出土遺物 (第98図)

Ⅳ区 SK27 出土遺物 (第99図参照)



101-3

Ⅳ区 SK27 出土遺物
(第101図参照)

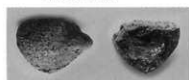


103-1



103-5

Ⅳ区 SK27 出土遺物
(第103図参照)



105-3

Ⅳ区 SK27 出土遺物
(第105図参照)



106-4

Ⅳ区 SK27 出土遺物
(第106図参照)



102-1



102-4



102-9



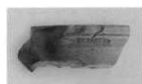
102-2



102-7



102-3



102-8



102-10

Ⅳ区 SK27 出土遺物 (第102図参照)



104

Ⅳ区 SK27 出土遺物 (第104図参照)



108-4



108-8

Ⅳ区 SK27 出土遺物 (第108図参照)



112-7

Ⅳ区 SK28 出土遺物
(第112図参照)



114-4



114-5



114-6



114-12



114-15



117-3

Ⅳ区 SK30 出土遺物
(第117図参照)



114-14



114-16



114-17

Ⅳ区 SK29 出土遺物(第114図参照)



119-1



119-2



119-3



119-4



119-5



119-7



119-8



119-6

Ⅳ区 SK31 出土遺物(第119図参照)



120-1



120-3



120-4



120-5



120-6



120-8

Ⅳ区 SK31 出土遺物(第120図参照)



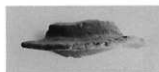
133-3

Ⅳ区 SK38 出土遺物
(第133図参照)



140-2

Ⅳ区 SK42 出土遺物
(第140図参照)



146-4

Ⅳ区 SK48 出土遺物
(第146図参照)



135-1

Ⅳ区 SK39 出土遺物(第135図参照)



135-2



137-1



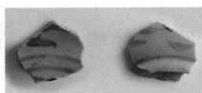
137-3

Ⅳ区 SK40 出土遺物
(第137図参照)



143-3

Ⅳ区 SE45 出土遺物(第143図参照)



144-1

Ⅳ区 SE46 出土遺物
(第144図参照)



156-2



156-3

Ⅳ区 SP58 出土遺物(第156図参照)



147-3

Ⅳ区 SX49 出土遺物
(第147図参照)



157

Ⅳ区 SP59 出土遺物
(第157図参照)



159-1

Ⅳ区 99 層出土遺物(第159図参照)



159-7



159-8



160-5



160-18



160-23



160-33



160-42



160-44

Ⅳ区 99 層出土遺物 (第160図参照)



161-4



161-5



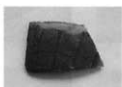
161-7



161-13



161-15



161-16



161-18



161-12

Ⅳ区 7 層出土遺物 (第161図参照)



162-15

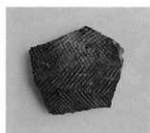


162-28



162-30

Ⅳ区 7 層出土遺物 (第162図参照)



163-5

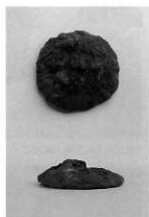


163-7



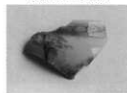
163-14

Ⅳ区 7 層出土遺物 (第163図参照)



165-5

Ⅳ区 7 層出土遺物
(第165図参照)

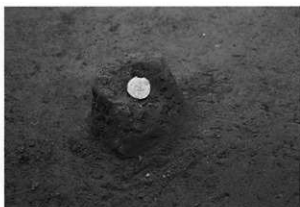


167-1

Ⅳ区出土遺物
(第167図参照)



SK008



SK011 ヴェロニカメダイ出土状況



SK110



SK145



SK208.SK236.SK252



SK248.SK249



SK250



SK251



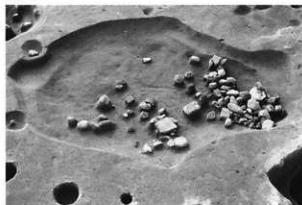
SK281



SK285



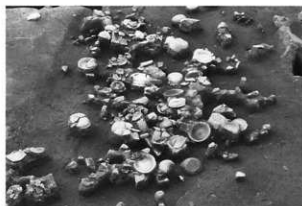
SK295



SK343



SK381



SK439



SX558



SE253



SE266



SE266



SE377



SE377 クンディ出土状況



SE286



SE286



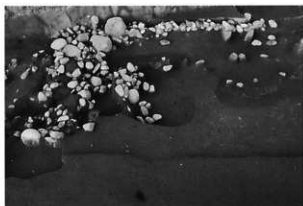
SE384



SE384



SK126



SK284



SX458.SX585.SX551



SX551 (東から)



SX551 のコーナー付近



SX551.SX707



SX707



175-1

SD013 出土遺物
(第175図参照)



176-2

SD097 出土遺物 (第176図参照)



176-5



177-4

SD098 出土遺物
(第177図参照)



180-1



180-3

SD542 出土遺物 (第180図参照)



180-4



193-1

SK012 出土遺物
(第193図参照)



205-1



195-1



195-2

SK032 出土遺物 (第195図参照)



195-3



205-2



205-4



205-6

SK110 出土遺物 (第205・206図参照)



206-19



216-9

SK169 出土遺物 (第216図参照)



253-2



253-3

SK285 出土遺物 (第253図参照)



253-6



238-1

SK247 出土遺物
(第238図参照)



261-1

SK341 出土遺物
(第261図参照)



263-1

SK343 出土遺物 (第263図参照)



SK367 出土遺物
(第276図参照)

276-3



279-1



279-3

SK371 出土遺物
(第279図参照)



285-1

SK380 出土遺物
(第285図参照)



295-4

295-8



295-11



295-12



295-13



295-17



296-29



296-31



296-36



297-45



298-48



298-57

SK439 出土遺物 (第295~298図参照)



299-1

SK457 出土遺物
(第299図参照)



302-2

SK465 出土遺物
(第302図参照)



307-1

SK580 出土遺物
(第307図参照)



310-1

SK583 出土遺物 (第310図参照)



310-2



314-1

SK124 出土遺物 (第314図参照)



320-2

SX458 出土遺物
(第320図参照)



326-2



326-6



326-7



327-10

SX551 出土遺物 (第326~330図参照)



333-1



333-7



333-8



333-13



333-2



334-21

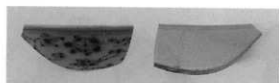


334-27



334-30

SX706 出土遺物 (第333~334図参照)



335-2



335-4



335-6



335-9



337-67



337-71



337-74



337-81



337-82



337-83



337-86



337-92



337-93



338-94



338-97



338-98



338-99



338-102



338-105



339-108

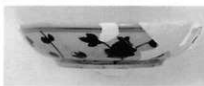
SX707 出土遺物 (第335~338図参照)



346-9



346-10



SE266 出土遺物 (第346図参照)

346-11



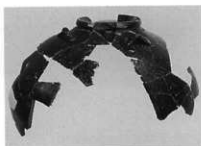
346-15



346-17



346-21

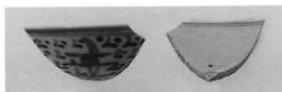


347-23

SE266 出土遺物 (第346・347図参照)



357-3



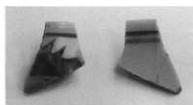
361-1



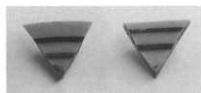
361-3

SE377 出土遺物
(第357図参照)

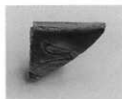
柱穴群出土遺物 (第361図参照)



365-2



365-3



365-4



365-6



365-8



365-14



365-26



365-7

包含層出土遺物 (第365図参照)



SD087 遺物出土状況 (南から)



SD087 メダイ様金属製品出土状況 (南から)



SD087 遺物出土状況 (東から)



SD087 遺物出土状況 (北から)



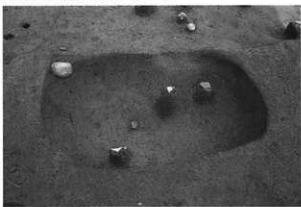
SK011 遺物出土状況 (東から)



SK013 遺物出土状況 (東から)



SK014 遺物出土状況 (東から)



SK015 遺物出土状況 (南から)



SK016 遺物出土状況 (東から)



SK016 土層断面 (南から)



SK017 遺物出土状況 (東から)



SK018・SK019 遺物出土状況 (西から)



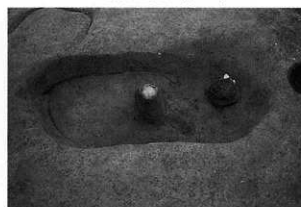
SK019・SK033 発掘状況 (東から)



SK029・SK030 遺物出土状況 (東から)



SK031 遺物出土状況 (西から)



SK032 遺物出土状況 (北から)



SK034 遺物出土状況 (東から)



SK083 遺物出土状況



SK098 遺物出土状況 (第1段階)



SK098 遺物出土状況 (第2段階-1)



SK098 遺物出土状況 (第2段階-2)



SK099 遺物出土状況



SK107 土師器出土状況



SK107 土師器出土状況



SK112 遺物出土状況



SK113 遺物出土状況



SK114 遺物出土状況 (西から)



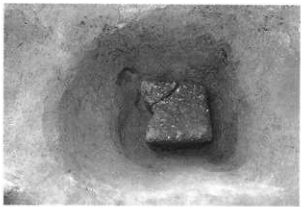
SK118 遺物出土状況



SK120 遺物出土状況



SK120 遺物出土状況 (白磁)



SK121 遺物出土状況



SK155 土鈴出土状況



SE084 井筒箱跡



SE084 井筒断面



SE100 井戸枠・井筒検出状況



SE100 井戸枠・井筒検出状況



SE100 上層遺物出土状況



SE100 完掘状況



SE108 井筒断面



SE108 井筒検出状況



SE108 井筒検出状況



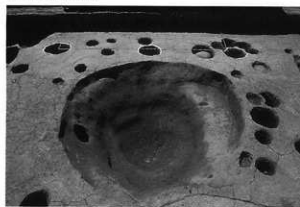
SE108 井筒検出状況



SE115 井筒断面



SE115 井筒検出状況



SB201 (東から)



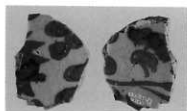
SB202 (東から)



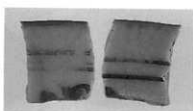
SB203 (東から)



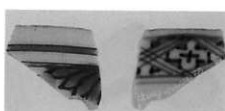
SB204 (東から)



372-1



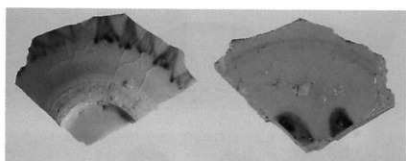
372-2



372-3



372-4



372-5



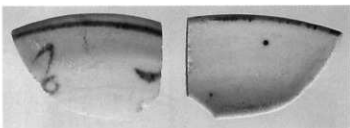
372-6



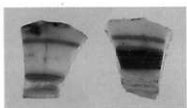
372-7



372-8



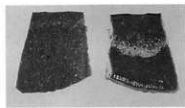
372-10



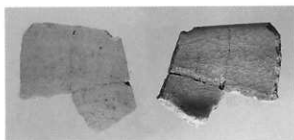
372-9



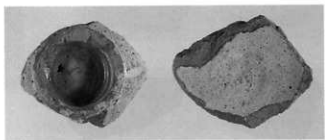
372-11



372-12

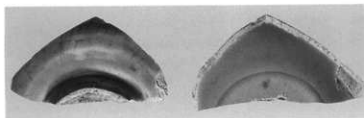


372-13

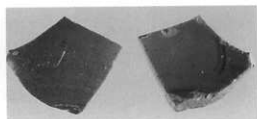


372-15

SD087 出土遺物 (第372図参照)



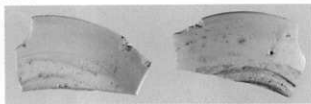
372-16



372-17



372-18



372-19



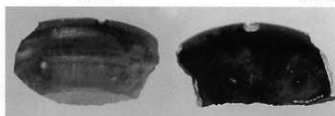
372-21



373-23



373-22



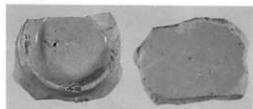
373-24



373-25



373-26



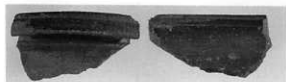
373-27



373-28



375-69-71



374-38

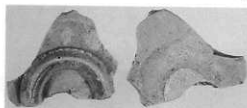
SD087 出土遺物 (第372~375図参照)



376-75



376-80



376-81

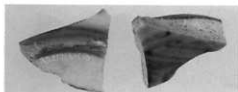


376-82



377-84~89

SD087 出土遺物 (第376~377図参照)



383-2



383-7

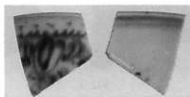


383-8

SK013 出土遺物 (第383図参照)



389-1



389-2



389-3



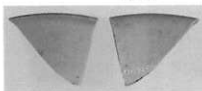
389-4



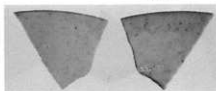
389-5



389-6



389-7



389-8



389-9

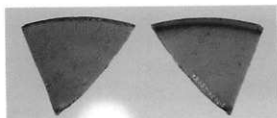


390-37



390-38

SK016 出土遺物 (第389・390図参照)



395-1

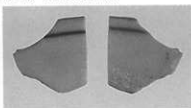


395-4

SK018 出土遺物 (第395図参照)



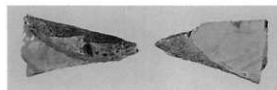
402-1



402-2



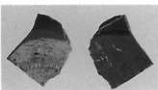
402-3



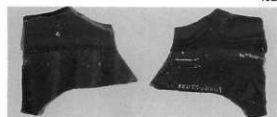
402-4



402-5



402-6



402-7



402-8



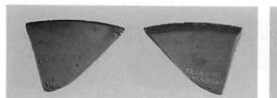
402-9



402-10



402-11



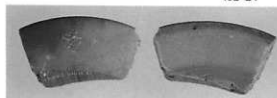
402-24



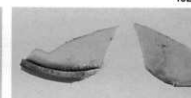
402-26



402-28



402-25

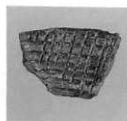


402-27



402-29

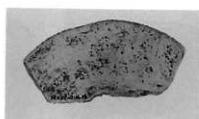
SK031 出土遺物 (第402図参照)



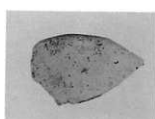
402-30



402-31



403-45

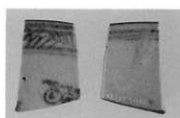


403-46

SK031 出土遺物 (第402・403図)

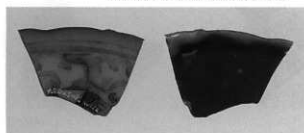


408-1



410-1

SK034 出土遺物 (第408図参照)



415-1

SK083 出土遺物 (第410図参照)



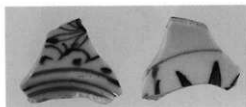
415-2



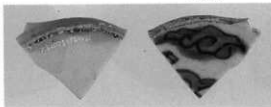
415-3



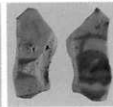
415-4



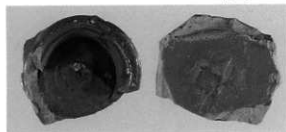
415-5



415-6



415-7

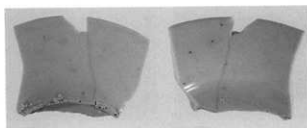


415-8

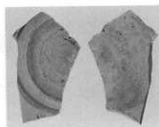


415-9

SK098 出土遺物 (第415図参照)



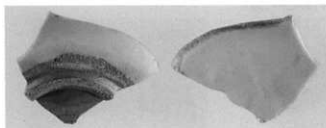
415-10



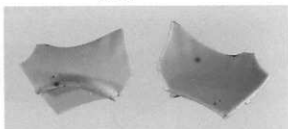
415-11



415-12



415-13



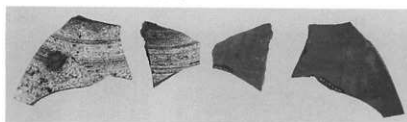
415-14



416-15



416-16



416-17



416-18



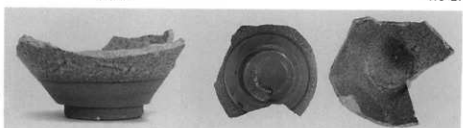
416-20



416-21

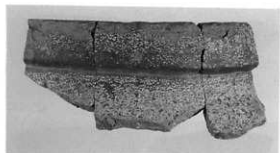


416-19



416-22

SK098 出土遺物 (第415・416図参照)



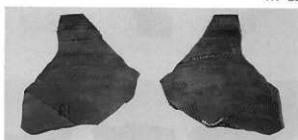
416-24



417-28



418-32



419-38



422-149



423-161



423-159



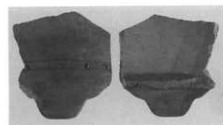
423-163



425-172



425-173



425-178

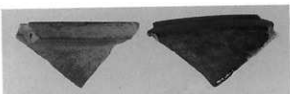


425-179

SK098 出土遺物 (第416~419・422・423・425図参照)



426-180



426-182



427-193



429-201



SK098 京都系土師器

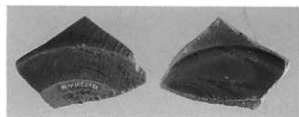


429-202



429-206

SK098 出土遺物 (第426・427・429図参照)



434-23



434-26

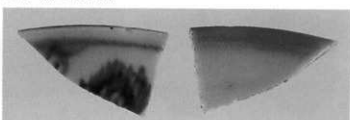


SK107 在地系土師質土器セット

SK107 出土遺物 (第434図参照)



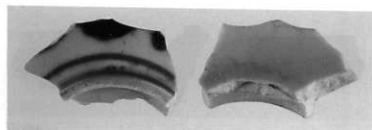
435-1



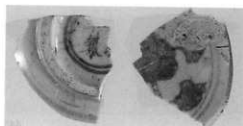
441-1

SK109 出土遺物 (第435図参照)

SD087 出土遺物 (第441図参照)



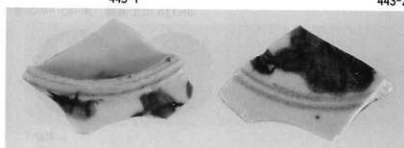
443-1



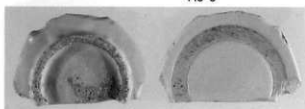
443-2



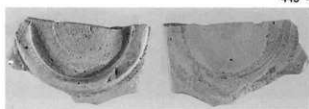
443-3



443-4



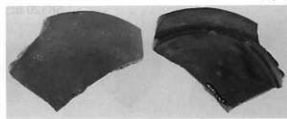
443-6



443-7

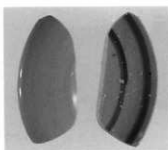


443-8

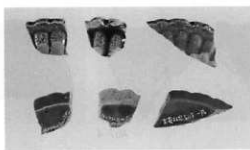


443-14

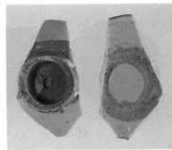
SK116 出土遺物 (第443図参照)



445-1



445-2



445-3



445-5



445-6

SK118 出土遺物 (第445図参照)



445-8

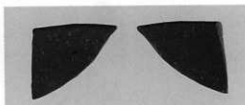


446-32

SK118 出土遺物 (第445・446図参照)



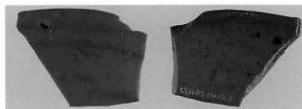
450-1



450-4



450-2

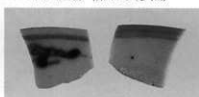


450-3

SK120 出土遺物 (第450図参照)



456-1



456-2

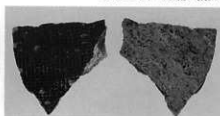


456-17

SK155 出土遺物 (第456図参照)



467-1



467-4

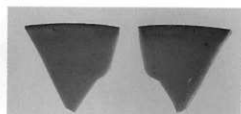


467-5

SK168 出土遺物 (第467図参照)



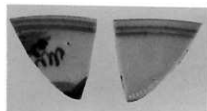
470-1



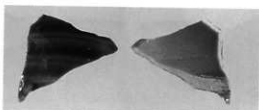
473-1

SK170 出土遺物 (第470図参照)

SK175 出土遺物 (第473図参照)



477-1



477-2



477-3



477-4



477-5



477-6



477-7

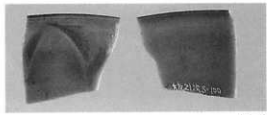
SE084 出土遺物 (第477図参照)



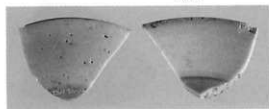
483-1



483-2



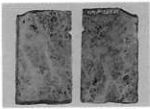
483-3



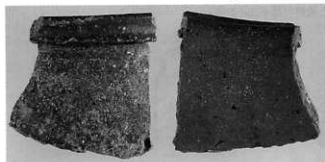
483-4



483-5



487-59

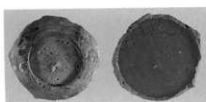


483-6



S100 出土在地系土師質土器

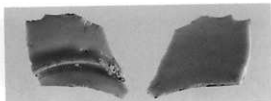
SE100 出土遺物 (第483・487図参照)



492-1

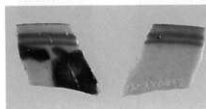


492-2

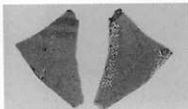


492-3

SK108 埋土内出土遺物 (第492図参照)



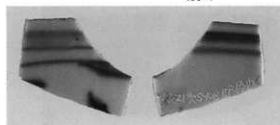
493-1



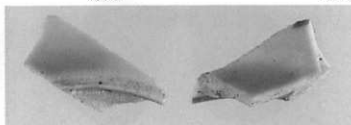
493-2



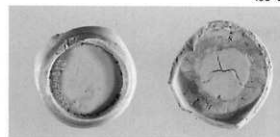
493-9



493-3



493-5



493-6



493-8



493-10



493-13

SK108 井筒内出土遺物 (第493図参照)

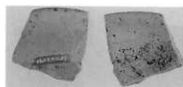


497-1

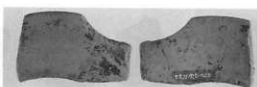


497-2

SE115・SE117 出土遺物 (第497図参照)



500-1

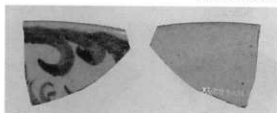


500-2

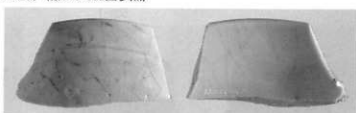


502-1

SB201・202 出土遺物 (第500・502図参照)



505-1



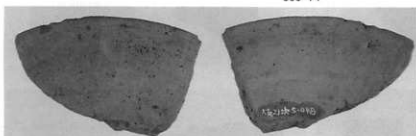
505-7



505-14



505-15



506-19



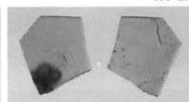
506-20



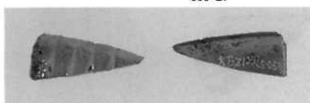
506-21



506-29



506-31



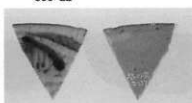
506-22



506-35



507-41



507-42



507-43

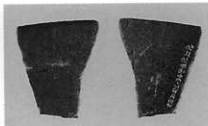
ビット出土遺物 (第505～507図参照)



508-1



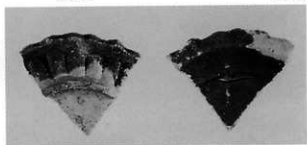
508-2



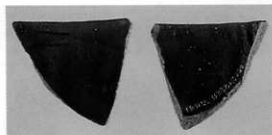
508-3



508-4



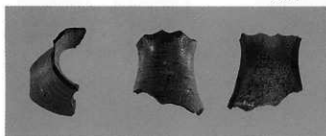
508-5



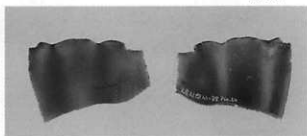
508-6



508-7



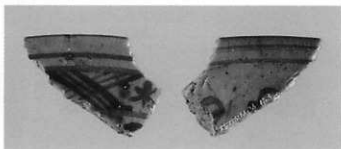
508-9



508-10



508-11



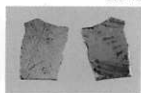
508-12



508-13



508-14



508-15

包含層出土遺物 (第508図参照)

報告書名抄録

ふりがな	ぶんごふない 2-ちゅうせい おおともふない まちあとだい 9じ・だい13じ・だい21じちょうさく							
書名	豊後府内 2-中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区							
副書名	一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(1)							
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	坂本嘉弘・原田昭一・松本康弘・後藤見一							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地							
発行年月日	Thursday, March 31, 2005							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
中世大友府内町跡第9次調査区	大分市錦町	322	051	33°13'34"	131°37'17"	2000年5月～ 2000年12月 2001年6月～ 2001年10月	320	一般国道 10号古国府 拡幅事業
中世大友府内町跡第13次調査区	大分市元町	322	051	33°13'33"	131°37'17"	2001年5月～ 2002年3月	800	◇
中世大友府内町跡第21次調査区	大分市元町	322	051	33°13'31"	131°37'17"	2002年5月～ 2003年3月	700	◇
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中世大友府内町跡第9次調査区	包蔵地 ほか	中世	道路・溝・井戸・ 土坑・柱穴	土師質土器・瓦質土器 陶磁器・石臼・砥石・ 玉類・瓦・銅銭				
中世大友府内町跡第13次調査区	◇	◇	溝・井戸・土坑・ 柱穴・石列	メダイ・クンディ・土師質 土器・瓦質土器・陶磁器・ 石臼・砥石・玉類・銅銭				
中世大友府内町跡第21次調査区	◇	◇	溝・井戸・土坑・ 柱穴・掘立柱建物	メダイ様金属製品・土 師質土器・瓦質土器・陶 磁器・茶臼・砥石・銅銭				
要約	14世紀以降の中世の都市遺跡の発掘調査を行った。特に、16世紀中葉以降に遺構・遺物が集中し、戦国時代の府内の景観をあらわした「府内古園」にみえる大友氏館正面の街路に面した町屋群の様相が明らかにできた。掘立柱建物の柱穴群をはじめ、土坑・道路・御溝・壕・井戸などの町屋遺構が検出でき、これに伴い、土器をはじめとした様々な遺物が出土した。特に、メダイやメダイ様金属製品の出土は豊後におけるキリスト教布教を証明するものであるし、クンディをはじめとして広く東アジア全域からもたれられた数多くの遺物は、大友氏の南蛮貿易の実態を物語る資料となった。							

豊 後 府 内 2

中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区
一般国道10号古国府拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第2集

平成17年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113

大分市大字中判田1977番地

TEL (097) 597-5675

印刷 株式会社 インターブリッツ

〒879-5405

大分県庄内町大字東長宝312

TEL (097) 582-1122
